

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXV

鳥取県鳥取市

大楠遺跡Ⅰ

第1分冊【本文編】

2017

鳥取県教育委員会



1 大柁遺跡(1-1区・2区・3区)全景(南東から)



1 4面完掘状況(真上から)



2 4面北半部掘立柱建物群(北から)



3 4面南半部掘立柱建物群(北東から)



1 6面完掘状況(北から)



2 802流路刀形・剣形出土状況(東から)



3 802流路ウマ頭蓋骨・下顎骨出土状況(南から)



4 802流路出土ウマ下顎骨



1 木製祭祀具 人形(1)



2 木製祭祀具 人形(2)



3 木製祭祀具 人形(3)



1 墨書土器



1 墨書土器(位能上)



2 青磁・白磁・緑釉陶器



3 緑釉陶器



4 漆器(2区)



1 4面南半部完掘状況(北から)



2 5面南半部完掘状況(北から)



1 1面完掘状況(南から)



2 布掘建物1完掘状況(南西から)

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXV

鳥取県鳥取市

大楠遺跡Ⅰ

第1分冊【本文編】

2017

鳥取県教育委員会

序

山陰自動車道は鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする、延長380キロメートルの自動車専用道路であり、国土交通省により整備が進められているところです。

鳥取県内の事業区間である「鳥取西道路」は、鳥取市本高から同市青谷町青谷を結ぶ延長19.3キロメートルの区間であり、その改築事業に伴う事前の発掘調査を平成20年度から当教育委員会が実施しています。平成21年度からは、財団法人鳥取県教育文化財団(平成25年度から公益財団法人に移行)に現地での発掘調査や出土遺物等の整理作業、報告書作成を委託して調査を進めているところです。

大柵遺跡では、平成26年度と平成27年度の2箇年にわたり発掘調査を行いました。平成26年度の発掘調査では、弥生時代から古墳時代にかけての集落、古代の有力者の居宅と墨書土器や木製祭祀具などが出土した流路など、多様な遺構、遺物が見つかりました。本書はその記録と成果をまとめたものです。

本書が郷土の歴史を明らかにするための一助となり、調査研究成果の公開や情報発信をとどめて埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しています。

本書をまとめるにあたり、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所並びに地元関係者の皆様をはじめ、多くの方々に多大なる御助言、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成29年3月

鳥取県教育委員会
教育長 山本 仁志

例 言

- 1 本書は、一般国道9号(鳥取西道路)改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受け、平成26年度に実施した大柁遺跡(1-1区・2区・3区)の発掘調査報告書である。
- 2 大柁遺跡は、鳥取市大柁字西白木105-1(以上、1-1区)、同104-4・104-5(以上、2区)、同字下前田102-1(以上、3区)に所在する。平成26年度の調査面積は2,931㎡(1-1区・2区・3区)である。現地調査は、平成26年4月18日から平成27年1月30日まで行い、調査記録と出土遺物の整理作業、報告書の作成は、平成28年12月まで行った。
- 3 本調査の名称は「大柁遺跡14」である。出土品などの注記には「大カク14」の略号を用いた。
- 4 発掘調査の監理については、公益財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。
- 5 発掘調査に際し、埋蔵文化財発掘調査支援業務委託(大柁遺跡)株式会社アーキジオ・アサヒコンサルタント株式会社共同企業体の支援を受けた。遺跡での掘削作業、記録作成と測量作業は、財団の指示のもと同企業体が行った。
- 6 調査で作成した図面の再編集、出土遺物の整理作業や記録作成は財団に委託し、同財団の副主幹、文化財主事と整理作業員が行った。
- 7 遺物の写真撮影は、木簡と墨書土器(墨書のカラー・赤外線写真)を除き、財団文化財主事の水村直人、河合章行、門脇隆志が行った。
- 8 本書の執筆は、第7章第2節及び第3節を除き財団職員が行い、執筆分担は目次に記した。また編集は、財団職員の協力を得ながら水村が行った。
- 9 出土した木簡と墨書土器の釈読にあたっては、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室の渡邊晃宏、馬場基、山本崇、桑田訓也、山本祥隆の諸氏に御指導、御助言いただいた。木簡と墨書土器の写真撮影は、同研究所企画調整部の中村一郎氏によるものである。記して感謝申し上げます。
- 10 大柁遺跡2区の堆積環境について、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センターの村田泰輔氏に現地指導いただき、軟X線写真撮影観察等による研究成果を第7章第2節に寄稿いただいた。記して感謝申し上げます。
- 11 層相解析及び層相解析用土壌を利用した放射性炭素年代測定、植物珪酸体分析、花粉分析、土坑埋土の寄生虫卵分析、掘立柱建物跡出土柱の放射性炭素年代測定、柱材及び木製品の樹種同定をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また木製品の保存処理は、株式会社吉田生物研究所に委託した。
- 12 本調査に係る図面・写真等の記録及び出土遺物は、全て台帳等に登録して収納しており、今後活用出来るように、随時検索可能な状態で鳥取県埋蔵文化財センターに移管した。
- 13 現地調査、報告書の作成にあたって、下記の方々及び機関から、様々な御指導、御助言、御支援を賜った。記して感謝申し上げます(敬称略、順不同)。

大平 茂、鈴木秀雄、高田健一、田中広明、平石 充、降幡順子、丸山真史、宮本 康、安平勝利、山崎 健、吉村武彦、公益財団法人大阪府文化財センター、兵庫県立考古博物館、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、公益財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センター、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、埼玉県立さきたま史跡の博物館、鳥取県衛生環境研究所、鳥取県東部総合事務所生活環境局、鳥取市教育委員会、鳥取市都市整備部都市企画課、大溝地区自治会、嶋地区自治会

凡 例

- 1 本書に記載された測量成果については、世界測地系に基づいている。図中のX・Y座標は、平面直角座標系(平成14年国土交通省告示第9号)第V系(原点:東経134度20分0秒0000、北緯36度0分0秒0000)によるもので、m単位で表記した。また、平面図の方位は座標北を示している。
- 2 標高は、東京湾平均海面(T.P.)からの高さを表し、m単位で表記した。
- 3 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行(1/25,000、1/200,000地形図)、鳥取市作成の都市計画図(1/5,000)を縮小、加筆して使用したものである。また、第2図は、測量法第43条に基づく複製承認を得て、鳥取市都市計画図を複製したものに加筆した(承認番号 平成28年12月12日付け鳥取市指令受都第171号)。
- 4 本遺跡の土層に示した土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原編2011)に基づき、土の色相、明度及び彩度を判定したものである。地層観察用畦の観察面はシートで被覆するなどして、湿った状態を保つように留意した。また、地層の粒度の記載に関しては、地質学で標準的に用いられるWentworth(1922)の区分を使用した。なお、同一地層内に異なる粒径の粒度が幅をもって認められるときには、基本的に、より細粒の粒径を先にして「シルト～粗砂」のように記載した。ただし、場合によっては主体を占めるものを後にして「極粗砂混じりシルト」のように記載したこともある。
- 5 発掘調査時に付した遺構番号、遺構名は第3章第2節で詳述している。
- 6 遺構平面図や断面図の縮尺は統一していないが、挿図ごとにスケールバーと縮尺を示している。
- 7 遺物実測図の縮尺については、基本的に土器・陶磁器を1/4、土製品を1/2、1/4、1/8、石器を1/1、2/3、1/3、木製品を1/2、1/4、1/8、金属製品を1/1、1/2で示した。
- 8 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、それ以外のものは白抜きで示した。
- 9 遺物観察表等の法量記載における※は推定復元値、△は残存値を示す。
- 10 本書における遺構、遺物の時期決定は以下の文献を主な参考としている。

岡田裕之・八峠興 2014「鳥取県における古代から中世前期の土器編年-須恵器と回転台土器を基に-」『調査研究紀要』5 鳥取県埋蔵文化財センター

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1991『岩吉遺跡Ⅲ』

中森 祥 2010「因幡・伯耆における古代土器の編年とその様相」鳥谷芳雄編『出雲国の形成と国府成立の研究-古代山陰地域の土器様相と領域性-』鳥根県古代文化センター

松井 潔 1997「東の土器、南の土器」『古代吉備』第19集 古代吉備研究会
- 11 木製品の分類群・器種名は基本的に以下の文献に従っている。

伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社

目次

巻頭図版

序、例言・凡例

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	(高尾)	1
第2節 調査の経過	(高尾)	2
第3節 調査体制	(高尾)	7

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境	(小林)	9
第2節 歴史的環境	(小林)	10
第3節 既往の調査	(小林)	14

第3章 調査の方法

第1節 現地調査	(正岡)	17
第2節 発掘調査と記録の対象	(正岡)	18

第4章 1-1区の調査成果

第1節 調査区の概要	(正岡)	23
第2節 基本層序と遺構面の認識	(正岡)	25
第3節 検出した遺構		
第1項 1面の遺構	(正岡)	36
第2項 2面の遺構	(正岡)	38
第3項 3面の遺構	(正岡)	42
第4項 4面の遺構	(小林・正岡・水村)	47
第5項 5面の遺構	(正岡)	130
第6項 6面の遺構	(正岡)	141
第7項 7面の遺構	(正岡)	171
第8項 8面の遺構	(正岡)	171
第4節 出土遺物		
第1項 土器・土製品	(高尾・門脇)	176
第2項 石器	(河合)	216
第3項 木製祭祀具	(水村)	224
第4項 木器	(水村)	251
第5項 編み物	(水村)	276

第6項	金属器	……………	(水村)	278
第7項	ガラス製品	……………	(水村)	280
第8項	文字資料	……………	(高尾・水村)	281
第9項	動物遺存体	……………	(門脇)	289
第5節	遺物観察表	……………		295
第6節	遺構計測表	……………		324

第5章 2区の調査成果

第1節	調査区の概要	……………	(門脇)	335
第2節	基本層序と遺構面の認識	……………	(門脇)	335
第3節	検出した遺構	……………	(門脇)	340
第4節	出土遺物			
第1項	土器	……………	(高尾・門脇)	365
第2項	石器	……………	(河合)	373
第3項	木器	……………	(水村)	376
第4項	金属器	……………	(水村)	377
第5節	遺物観察表	……………		378
第6節	遺構計測表	……………		383

第6章 3区の調査成果

第1節	調査区の概要	……………	(高尾)	385
第2節	検出した遺構	……………	(高尾)	387
第3節	出土遺物	……………	(高尾)	394
第4節	遺物観察表	……………		397
第5節	遺構計測表	……………		398

第7章 自然科学分析の成果

第1節	自然科学分析の目的と概要	……………	(高尾)	399
第2節	2区北壁にみられる堆積構造の検討	……………	(村田)	400
第3節	1-1区の自然科学分析結果	……………		405

第8章 総括

第1節	遺跡の変遷	……………	(高尾・正岡)	433
第2節	1-1区における祭祀の様相とその位置づけ	……………	(水村)	447
第3節	鳥取県域におけるウマの導入について	……………	(門脇)	454

参考・引用文献

報告書抄録・奥付

挿図目次

第1図	鳥取西道路建設予定地と調査地の位置	1	第43図	掘立柱建物16	82
第2図	大構遺跡財団調査地位置図	2	第44図	掘立柱建物17	84
第3図	鳥取県と遺跡の所在地	9	第45図	掘立柱建物18	85
第4図	遺跡周辺の地形環境	10	第46図	掘立柱建物19	87
第5図	周辺の遺跡	11	第47図	掘立柱建物20	88
第6図	既往の調査地	15	第48図	掘立柱建物21	90
第7図	鳥取県と国土座標系	17	第49図	掘立柱建物22	92
第8図	調査地周辺の地区割図	19	第50図	掘立柱建物23	94
第9図	調査区地区割図・断面位置図	23	第51図	掘立柱建物24	96
第10図	調査区西壁断面図	27	第52-1図	掘立柱建物25	98
第11図	調査区東・南壁断面図	29	第52-2図	掘立柱建物25(2)	99
第12図	調査区北壁・中央東西トレンチ断面図	31	第53図	掘立柱建物26	100
第13図	1面(2-2a層下面)	37	第54図	掘立柱建物27	102
第14図	1～3擬似畦畔断面図	38	第55図	掘立柱建物28	103
第15図	2面(3-3a層下面)	39	第56図	横列1～3	105
第16図	2面遺物出土状況	40	第57図	横列1・2	106
第17図	5溝	41	第58図	横列3	107
第18図	6溝	42	第59図	横列4・5	107
第19図	7落ち込み	42	第60図	掘立柱建物の重複関係	108
第20図	3面(4-1a層下面)	43	第61図	4-2面遺構(柱穴・土坑・ピット)(1)	110
第21図	10土坑・12土坑	44	第62図	4-2面遺構(柱穴・土坑・ピット)(2)	111
第22図	8溝断面図	44	第63図	4-2面遺構(柱穴・土坑)	112
第23図	8溝遺物出土状況	45	第64図	4-2面遺構(土坑)	113
第24図	14集石遺物出土状況	47	第65図	15流路	115
第25図	4-1面(4-2a層下面1)	48	第66図	15流路断面図(北壁)	116
第26図	16耕作溝群・17耕作溝群遺物出土状況	49	第67図	15流路遺物出土状況	117
第27図	4-2面(4-2a層下面2)	51	第68図	15流路(18護岸)構造材遺物出土状況	118
第28図	掘立柱建物1	52	第69図	15流路上層遺物出土状況全体図	119
第29図	掘立柱建物2	54	第70図	15流路上層遺物出土状況	120
第30図	掘立柱建物3	56	第71図	15流路下層遺物出土状況全体図	121
第31図	掘立柱建物4	58	第72図	15流路下層遺物出土状況(1)	122
第32図	掘立柱建物5	60	第73図	15流路下層遺物出土状況(2)	123
第33図	掘立柱建物6	62	第74図	15流路下層遺物出土状況(3)	124
第34図	掘立柱建物7	64	第75図	15流路下層遺物出土状況(4)	125
第35図	掘立柱建物8	66	第76図	15流路下層遺物出土状況(5)	126
第36図	掘立柱建物9	68	第77図	15流路下層遺物出土状況(6)	127
第37図	掘立柱建物10	70	第78図	15流路下層遺物出土状況(7)	128
第38図	掘立柱建物11	72	第79図	15流路下層遺物出土状況(8)	129
第39図	掘立柱建物12	74	第80図	5面(6-2a層下面・7-2a層上面)	131
第40図	掘立柱建物13	76	第81図	555・556・576・584柱穴	132
第41図	掘立柱建物14	78	第82図	594・595土坑	132
第42図	掘立柱建物15	80	第83図	580・605・606土器群出土状況(1)	134

第84図	580・605・606土器群出土状況(2)	135	第128図	550流路出土土器(1)	188
第85図	550流路	136	第129図	550流路出土土器(2)	189
第86図	550流路遺物出土状況	137	第130図	580・605・606土器群、595土坑出土土器	190
第87図	599・600流路、607～609畦畔	138	第131図	7-1a層～7-2a層出土土器	191
第88図	599・801・802・832流路断面図	139	第132図	竪穴建物1・815土坑出土土器	193
第89図	600流路断面図	140	第133図	830土坑出土土器	193
第90図	6-1面(7-1a・7-2a層下面)	142	第134図	竪穴建物2出土土器	194
第91図	竪穴建物1(機能面)	143	第135図	794土坑出土土器(1)	195
第92図	竪穴建物1(加工面)	145	第136図	794土坑出土土器(2)	196
第93図	竪穴建物2	148	第137図	610溝上層出土土器(1)	198
第94図	掘立柱建物29	150	第138図	610溝上層出土土器(2)	199
第95図	掘立柱建物30	151	第139図	610溝上層出土土器(3)	200
第96図	掘立柱建物31	153	第140図	610溝下層出土土器(1)	201
第97図	掘立柱建物32	154	第141図	610溝下層出土土器(2)	202
第98図	掘立柱建物33	156	第142図	801流路出土土器	203
第99図	掘立柱建物34	157	第143図	802流路出土土器(1)	205
第100図	6面遺構(柱穴・土坑・ピット)	158	第144図	802流路出土土器(2)	206
第101図	710土坑・794土坑	159	第145図	802流路出土土器(3)	207
第102図	751土坑	160	第146図	802流路出土土器(4)	208
第103図	610溝	161	第147図	802流路出土土器(5)	209
第104図	610溝断面図	162	第148図	802流路出土土器(6)	210
第105図	610溝遺物出土状況(1)	162	第149図	7面・8面遺構出土土器	211
第106図	610溝遺物出土状況(2)	163	第150図	7-4a層以下出土土器	213
第107図	801流路	164	第151図	土製品(1)	214
第108図	801流路遺物出土状況	165	第152図	土製品(2)	215
第109図	6-2面(7-1a・7-2a層下面)	166	第153図	土製品(3)	216
第110図	802流路	167	第154図	出土石器(1)	217
第111図	802流路遺物出土状況(1)	168	第155図	出土石器(2)	218
第112図	802流路遺物出土状況(2)	169	第156図	出土石器(3)	219
第113図	802流路遺物出土状況(3)	170	第157図	出土石器(4)	220
第114図	7面(7-4a層下面)	172	第158図	出土石器(5)	221
第115図	8面(8-1a層下面)	173	第159図	8溝出土人形	225
第116図	8面遺構(柱穴・溝)	174	第160図	15流路上層出土人形	226
第117図	1～3面出土土器	177	第161図	15流路下層出土人形(1)	227
第118図	4面出土土器	178	第162図	15流路下層出土人形(2)	228
第119図	掘立柱建物出土土器	179	第163図	15流路下層出土人形(3)	229
第120図	15流路上層出土土器	181	第164図	15流路下層出土人形(4)	230
第121図	15流路下層出土土器(1)	182	第165図	15流路下層出土人形(5)	231
第122図	15流路下層出土土器(2)	183	第166図	15流路下層出土人形(6)	233
第123図	15流路下層出土土器(3)	184	第167図	550流路出土人形	235
第124図	15流路下層出土土器(4)	185	第168図	802流路他出土人形	236
第125図	15流路下層出土土器(5)	186	第169図	15流路下層出土馬形	237
第126図	15流路下層出土土器(6)	186	第170図	550流路出土馬形	239
第127図	4-3b層以下出土土器	187			

第171図	15流路出土武器形・550流路出土武器形(1)	240	第209図	墨書土器(4)	286
			第210図	墨書土器(5)	287
第172図	550流路出土武器形(2)・599流路出土武器形	241	第211図	文字瓦	288
			第212図	ウシの骨格と部位の名称	289
第173図	802流路出土武器形(1)	242	第213図	802流路出土ウマのクリーニング後状況	291
第174図	802流路出土武器形(2)・801流路出土武器形	243	第214図	ウマの歯の名称と略号	292
			第215図	ウマの歯の萌出と年齢	292
第175図	802流路出土武器形(3)	244	第216図	ウマの歯冠高の計測	292
第176図	竈申型式分類	245	第217図	ウマ頭蓋骨・下顎骨・臼歯の計測箇所	294
第177図	15流路下層出土竈申(1)	246	第218図	地区割及び基本断面取得位置図	336
第178図	15流路下層出土竈申(2)	247	第219図	北壁断面図	337
第179図	550流路出土竈申(1)	248	第220図	東壁断面図	338
第180図	550流路出土竈申(2)・7-3b層出土竈申	249	第221図	中央トレンチ断面図	339
第181図	15流路下層出土舟形	250	第222図	1面(1-2a層下面)	340
第182図	802流路下層出土農具形	251	第223図	2面(2-1a層下面)	342
第183図	15流路上層出土容器(曲物)	252	第224図	28土坑・29土坑	342
第184図	15流路下層出土容器(曲物)	253	第225図	3面(4-2a層下面)(1)	343
第185図	515土坑出土容器(曲物)	254	第226図	3面(4-2a層下面)(2)	344
第186図	15流路下層・801流路出土容器(指物)	255	第227図	25土坑・26土坑	345
第187図	15流路下層・116柱穴出土容器(挽物)	255	第228図	8-10・15・37ピット	346
第188図	802流路出土容器(列物)	257	第229図	12溝	347
第189図	8溝・15流路下層出土農具	258	第230図	7流路・11流路	347
第190図	599流路出土農具(1)	260	第231図	4面(5-1a層下面)	348
第191図	599流路出土農具(2)	261	第232図	31土坑	349
第192図	550流路・599流路(3)・802流路出土農具	262	第233図	39土坑	350
第193図	7-2a層出土農具	263	第234図	40土坑	351
第194図	15流路下層出土紡織具	264	第235図	30・34・35・36・38・42・43・44・45・46・ 48ピット	352
第195図	599・801流路出土紡織具	265	第236図	32竪穴	353
第196図	8溝・18護岸・掘立柱建物・550流路出土建 築部材	267	第237図	33竪穴	354
第197図	801流路出土建築部材	269	第238図	5面(6-1a層下面)	355
第198図	802流路出土建築部材(1)	270	第239-1図	竪穴建物1(1)	356
第199図	802流路出土建築部材(2)	271	第239-2図	竪穴建物1(2)	357
第200図	4-1a層・7-2a層出土建築部材	272	第240図	53・54・56・58土坑	359
第201図	8溝出土服飾具・599流路・7-2a層出土雑 具	273	第241図	66土坑	360
第202図	15流路下層・550流路・802流路・7-2a層出 土加工棒状製品	275	第242図	78土坑	360
第203図	15流路下層出土編み物	277	第243図	59・61・77ピット	361
第204図	出土金属器	278	第244図	50溝断面図	361
第205図	木簡関連資料	281	第245図	6面(7-1a層下面)	362
第206図	墨書土器(1)	282	第246図	85土坑・88土坑	363
第207図	墨書土器(2)	284	第247図	72・81・89・90ピット	364
第208図	墨書土器(3)	285	第248図	1-3面遺構出土土器	365
			第249図	4面遺構出土土器	367
			第250図	32・33竪穴出土土器	368

第251図	5～6面遺構出土土器	369	第277図	試料及び軟X線写真(3)	412
第252図	50溝出土土器(1)	371	第278図	試料及び軟X線写真(4)	413
第253図	50溝出土土器(2)	372	第279図	花弁化石群集の層位分布	414
第254図	遺構外出土土器	373	第280図	植物珪酸体含量密度の層位分布	416
第255図	石器(1)	374	第281図	515土坑の寄生虫卵分析結果	419
第256図	石器(2)	376	第282図	ウイグルマッピング試料	421
第257図	木器	377	第283図	掘立柱建物出土柱材の暦年校正結果の比較	424
第258図	金属器	377			
第259図	3区地区割図・基本断面取得位置図	385	第284図	掘立柱建物出土柱材のウイグルマッピング年代	425
第260図	調査区壁面断面図	386			
第261図	検出した遺構	387	第285図	大柵遺跡1-1区～3区地層対比図	436
第262-1図	布掘建物1(1)	388	第286図	大柵遺跡変遷図(弥生時代後期後葉～終末期後半)	439
第262-2図	布掘建物1(2)	389			
第263図	掘立柱建物1	390	第287図	大柵遺跡変遷図(古墳時代前期後葉～中期前葉)	441
第264図	3土坑・4ピット	391			
第265図	19土坑・30土坑・29ピット	391	第288図	大柵遺跡変遷図(古墳時代中期後葉～末)①	442
第266図	20土坑	392			
第267図	出土土器	395	第289図	大柵遺跡変遷図(古墳時代中期後葉～末)②	442
第268図	出土石器	396			
第269図	2区北壁土壌試料採取位置	400	第290図	大柵遺跡変遷図(平安時代前期)	444
第270図	北壁面から採取された切り取り試料の軟X線画像(1)	401	第291図	平安時代前期建物群変遷案	444
第271図	北壁面から採取された切り取り試料の軟X線画像(2)	402	第292図	大柵遺跡変遷図(平安時代中期)	446
第272図	北壁面から採取された切り取り試料の軟X線画像(3)	403	第293図	大柵遺跡1-1区出土形代の変遷	448
第273図	調査地点の層序及び試料採取位置	405	第294図	各地の祭祀遺跡の様相及び出土木製品の組成と集落の階層性モデル	452
第274図	暦年校正結果の比較	408	第295図	802流路遺物出土状況	455
第275図	試料及び軟X線写真(1)	409	第296図	「河内湖」と周辺の主要ウマ出土遺跡	457
第276図	試料及び軟X線写真(2)	411	第297図	葎屋北遺跡A940・A655	457
			第298図	長瀬高浜遺跡7号墳と馬墓	460

挿表目次

第1表	既往の調査と成果	14	第43表	文字資料一覧表(2)	323
第2表	形代出土地点一覧	224	第44表	竪穴建物計測表	324
第3表	15流路出土大型哺乳類一覧	290	第45表	掘立柱建物計測表(1)	324
第4表	15流路出土ウシの推定体高	290	第46表	掘立柱建物計測表(2)	325
第5表	802流路出土ウマの歯の萌出・咬耗状況	292	第47表	柱穴・土坑・ピット計測表(1)	326
第6表	802流路出土ウマの推定体高	292	第48表	柱穴・土坑・ピット計測表(2)	327
第7表	802流路出土ウマと3~5才馬の歯冠高	292	第49表	柱穴・土坑・ピット計測表(3)	328
第8表	802流路出土ウマ計測値①	294	第50表	柱穴・土坑・ピット計測表(4)	329
第9表	802流路出土ウマ計測値②	294	第51表	柱穴・土坑・ピット計測表(5)	330
第10表	土器観察表(1)	295	第52表	柱穴・土坑・ピット計測表(6)	331
第11表	土器観察表(2)	296	第53表	柱穴・土坑・ピット計測表(7)	332
第12表	土器観察表(3)	297	第54表	柱穴・土坑・ピット計測表(8)	333
第13表	土器観察表(4)	298	第55表	柱穴・土坑・ピット計測表(9)	334
第14表	土器観察表(5)	299	第56表	土器観察表(1)	378
第15表	土器観察表(6)	300	第57表	土器観察表(2)	379
第16表	土器観察表(7)	301	第58表	土器観察表(3)	380
第17表	土器観察表(8)	302	第59表	土器観察表(4)	381
第18表	土器観察表(9)	303	第60表	土器観察表(5)	382
第19表	土器観察表(10)	304	第61表	石器観察表	382
第20表	土器観察表(11)	305	第62表	木器観察表	383
第21表	土器観察表(12)	306	第63表	金属器観察表	383
第22表	土器観察表(13)	307	第64表	竪穴建物・竪穴計測表	383
第23表	土器観察表(14)	308	第65表	柱穴・土坑・ピット計測表(1)	383
第24表	土器観察表(15)	309	第66表	柱穴・土坑・ピット計測表(2)	384
第25表	土器観察表(16)	310	第67表	土器観察表	397
第26表	土器観察表(17)	311	第68表	石器観察表	398
第27表	土器観察表(18)	312	第69表	布掘建物・掘立柱建物計測表	398
第28表	土製品観察表	312	第70表	柱穴・土坑・ピット計測表	398
第29表	石器観察表	313	第71表	放射性炭素年代測定及び暦年較正結果	407
第30表	木製祭祀具(人形)観察表	314	第72表	中央東西トレンチの花粉分析結果	415
第31表	木製祭祀具(馬形)観察表	315	第73表	中央東西トレンチの植物珪酸体分析結果	416
第32表	木製祭祀具(武器形)観察表	315	第74表	515土坑の寄生虫卵分析結果	418
第33表	木製祭祀具(斎串)観察表	316	第75表	掘立柱建物出土柱材の放射性炭素年代測定及び 暦年較正結果	423
第34表	木製祭祀具(舟形・農具形)観察表	316	第76表	掘立柱建物出土柱材のウイグルマッチング結果	424
第35表	木器・編み物観察表(1)	317	第77表	掘立柱建物出土柱材の樹種同定結果	427
第36表	木器・編み物観察表(2)	318	第78表	1-1区出土木器の樹種同定結果	427
第37表	金属器観察表	318	第79表	保存処理木製品の樹種同定結果	431
第38表	ガラス製品観察表	318	第80表	大佛遺跡1-1区~3区地層・遺構面対応表	435
第39表	墨書土器・文字瓦観察表(1)	319			
第40表	墨書土器・文字瓦観察表(2)	320			
第41表	墨書土器・文字瓦観察表(3)	321			
第42表	文字資料一覧表(1)	322	第81表	高庭荘関連年表	443

第82表 古墳時代中期の祭祀遺跡から出土した主な祭祀系遺物	450	第84表 鳥取県における古墳時代のウマ出土事例	454
第83表 古墳時代中期の祭祀遺跡で検出した主な遺構	451	第85表 四條畷市域の関連事例	458

巻頭図版目次

1-1区

巻頭図版 1

- 1 大構遺跡(1-1区・2区・3区)全景(南東から)

巻頭図版 2

- 1 4面完掘状況(真上から)
- 2 4面北半部掘立柱建物群(北から)
- 3 4面南半部掘立柱建物群(北東から)

巻頭図版 3

- 1 6面完掘状況(北から)
- 2 802流路刀形・剣形出土状況(東から)
- 3 802流路ウマ頭蓋骨・下顎骨出土状況(南から)
- 4 802流路出土ウマ下顎骨

巻頭図版 4

- 1 木製祭祀具 人形(1)
- 2 木製祭祀具 人形(2)
- 3 木製祭祀具 人形(3)

巻頭図版 5

- 1 墨書土器

巻頭図版 6

- 1 墨書土器(位能上)
- 2 青磁・白磁・緑釉陶器
- 3 緑釉陶器
- 4 漆器(2区)

2区

巻頭図版 7

- 1 4面南半部完掘状況(北から)
- 2 5面南半部完掘状況(北から)

3区

巻頭図版 8

- 1 1面完掘状況(南から)
- 2 布掘建物1完掘状況(南西から)

文中写真目次

写真1 現地説明会と県立博物館における速報展示	写真2 Po221の胴部穿孔部分拡大	195
6 写真3 土壌試料採取状況		400

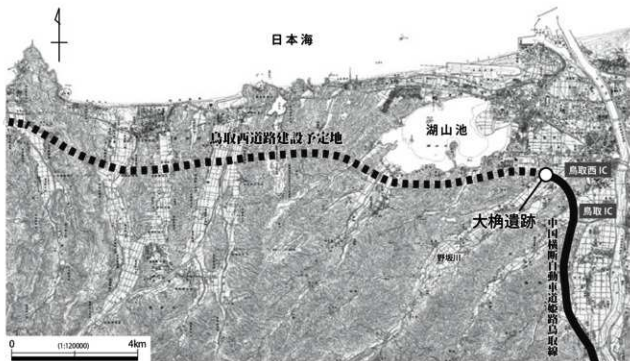
第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

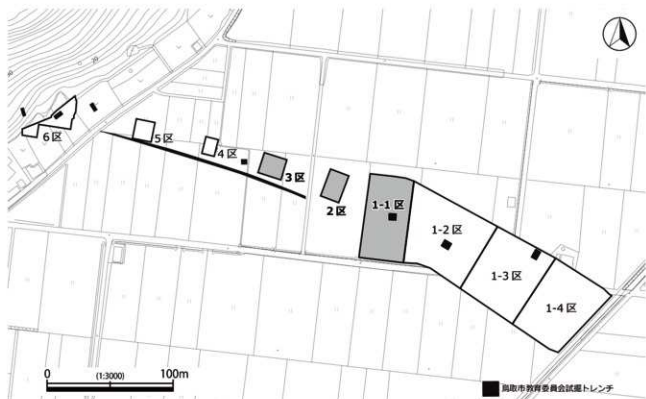
山陰自動車道は、鳥取県鳥取市を起点とし、山口県美祿市を終点とする、延長約380キロメートルの自動車専用道路である。この道路は、鳥取・鳥根・山口3県の主要都市を東西に結び、山陰地方の産業経済の発展や観光振興、交通渋滞の解消と緩和、災害時の緊急輸送路の確保を目的として、国土交通省により整備が進められている。鳥取西道路は、山陰自動車道のうち鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長19.3kmの区間で、鳥取インターチェンジで鳥取自動車道(中国横断自動車道姫路鳥取線)に、青谷インターチェンジで国道9号「青谷・羽合道路」に接続し、高速道路ネットワークの一翼を担う。

湖山池南岸を通る鳥取西道路の計画地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く認められていたため、道路建設工事に先立って国土交通省、鳥取県、鳥取市で協議し、計画地内に存在する埋蔵文化財の状況を把握する必要性が確認された。そこで、平成17年度からは、計画地内の踏査(分布調査)や鳥取市教育委員会による試掘調査及び確認調査が進められ、調査結果に基づき道路事業と埋蔵文化財保護との調整が図られている。

大桒遺跡は、水源を高山と鷲峰山の谷間に発する野坂川によって開折された谷底平野に位置する、縄文時代から中世の複合遺跡である(第1図)。この遺跡は、過去の発掘調査成果から県の重要遺跡として広く認識されており、その範囲は野坂川左岸の平野部一帯、東西約1.6km、南北約0.8kmに及ぶ。よって、道路計画地内にも各時代にわたる多数の遺構、遺物が存在していると想定され、その内容を確認するために、平成25年度に鳥取市教育委員会が文化庁の国庫補助と県費補助を受けて試掘調査を



第1図 鳥取西道路建設予定地と調査地の位置



第2図 大柁遺跡財団調査地位置図

行ったところ、各トレンチで縄文時代から中世にかけての遺構、遺物が確認された。そこで、計画地内の埋蔵文化財の取扱いについて再度国土交通省、鳥取県、鳥取市で慎重に協議を重ねた結果、道路盛土及び橋脚部分となる計13,517㎡を対象として(第2図)、記録保存のための発掘調査が行われることになり、文化財保護法第94条による手続きを踏まえ、平成26・27年度に鳥取県教育委員会(以下、県教委)が国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託を受けて、発掘調査を実施した。

道路計画地の用地買収状況を勘案して発掘事業量を調整し、平成26年度は盛土部の一部(1-1区)と橋脚部2カ所(2区、3区)、平成27年度は残りの盛土部(1-2区～1-4区)と橋脚部2カ所(4区、5区)、橋脚部1カ所(6区)の調査を行うこととなった(第2図)。発掘調査に当たっては、現場発掘作業、出土遺物の整理及び報告書の作成を、公益財団法人鳥取県教育文化財団(以下、財団)に再委託した。さらに発掘作業、調査記録作業等について、平成26年度は株式会社アーキジオ・アサヒコンサルタント株式会社共同企業体(以下、発掘調査支援業者)の支援を受けた。

第2節 調査の経過

事前調査

発掘調査は、財団と発掘調査支援業者による調査支援業務委託契約が整った4月18日に開始し、基準点設置、水準測量などの事前の測量作業を実施した。5月22日にはラジコンヘリコプターによる調査前の航空写真撮影を実施した。重機による表土掘削は調査区周囲の鋼矢板が打設完了した1-1区から3区、2区の順に開始した。1-1区は5月22日から29日まで、3区は5月30日、2区は6月2日から3日まで表土掘削を実施した。

3区の調査

3区は6月5日から人力掘削に着手した。北壁及び西壁に沿って基本断面取得位置を設定し、側溝を掘削したところ、側溝溝で黒褐色シルトの落込みが認められ、布掘建物1の1溝であることが明らかとなった。3区は圃場整備後の水田耕作土直下が1面であり、同面で全ての遺構を検出した。6月23日に全体の遺構検出写真を撮影した後、個別の遺構掘削、記録作業を進めた。6月25日・27日には江山中学校2年生の2名が職場体験として遺構の掘削、記録作業に従事した。20土坑は最終的に廃棄土坑として使われており、炭化物とともに多量の土器が出土した。7月11日から布掘建物1の調査に着手した。柱抜き取り穴が布掘り溝底面まで達しており柱痕跡は認められなかったが、2溝底面に柱当たりが確認出来たことから桁行規模は2間以上になると想定された。7月24日に1面の全景写真を撮影した後補足調査を行い、7月25日に現地調査を終えた。

2区の調査

2区については、3区の調査が終了した後、7月28日から着手した。調査当初は各調査区とも北・西壁で基本層序を記録する計画を立案していたが、2区西壁は圃場整備前の水路が走り大きく攪乱を受けていたため、2区は北壁と東壁で基本層序を記録することとした。

側溝を掘削し、圃場整備前水路の攪乱を除去した後、1面の検出を進めた。1層は近世の耕作土を想定していたが、掘り下げの過程で近代の陶磁器が出土したため近代以降の耕作土であると分かった。1面では近代以降の石列や耕地段差、溝を検出し、8月26日に全景写真を撮影した。

8月27日から2層を掘削し、2面の検出を開始した。2層は近世以降の耕作土であるが、特筆すべきものとして軟玉製巡方が出土した。2面では土坑、溝を検出し、9月1日に全景写真を撮影した。

9月2日から3層を掘削し、3面の遺構検出に着手した。側溝や近世以降の水路壁面の観察所見も勘案すれば、調査区西側は中世以降の流路が南西-北東方向に走っていると推測できた。また北壁土層は、流路及び水路の充填堆積物が大部分を占めており、古代以前の堆積層が流失していたため、調査区基本層序の記録としては不十分と判断した。そこで、調査区中央に東西方向のサブトレンチを任意に設定し、流路範囲と下層遺構の把握に努めた。サブトレンチでは5層以下に炭化物・灰白色粘土の薄い集積層やピットを複数確認し、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土したことから、当該時期の竪穴建物が存在する可能性が高いと考えた。また3面で検出した中世の7流路、11流路は先後関係にあり、漸次東に流心が移動していることをサブトレンチ断面で把握した。下層の砂礫層では弥生時代後期から古墳時代の土器が大量に出土したが、同層は中位段丘の表層地質である大山倉吉軽石層(DKP)ブロックを多分に含んでいるため、これらの土器は、流路が西側の段丘上に形成された当該時期の遺物包含層を削平した結果運搬されたものと理解できた。3面では同流路の他土坑、溝などを検出し、10月10日に全景写真を撮影した。

台風19号接近に伴う中断期間を経て、10月15日から5-1a層の掘削と4面の遺構検出を行った。7流路・11流路による流失を免れた調査区南東部に限られるが、4面及び5面では高い密度で遺構が存在していた。4面では古墳時代前期の竪穴や土坑を検出し、10月31日に全景写真を撮影した。

5面では、弥生時代終末期の竪穴建物1を検出した。竪穴建物1は貼床が構築されていたが埋土とほぼ同質で峻別が困難であったため、竪穴加工面まで掘り下げて柱穴、壁溝の一部を確認した。土器が一括廃棄された66土坑の他複数の土坑、ピットを確認し、11月21日に全景写真を撮影した。

6面は7-2b層まで掘り下げた最終の遺構確認面であり、確認した遺構は5面検出遺構と帰属時

期はほぼ同じである。本来的には堅穴建物1を構成するピットや貯蔵穴とみられる土坑などを検出し、11月28日に全景写真を撮影した後補足調査を行い、12月3日に現地調査を終了した。

1-1区の調査

1-1区は6月2日から人力掘削に着手した。まず調査区外周と中央を東西に横断するように側溝を掘削し、堆積状況の把握に努めた。側溝掘削の過程で、1-1区の堆積は大別9層に分けることが出来、上部層単では中～近世の耕作土が複数層存在すること、また下位層単では古墳時代から古代にかけての遺物が濃密に出土することを確認した。特に、西側溝壁面の4-2a層下面では、古代の掘立柱建物柱穴とみられる落ち込みが多数観察でき、鳥取市教育委員会試掘トレンチ内や中央東西トレンチ下部において、古墳時代前～中期の土師器が完形に近い良好な状態で多量に出土することなどから、調査ボリュームは当初計画を上回る可能性があると見された。

側溝掘削終了後、6月13日から1-1a層～2-2a層を掘削して1面の遺構検出を開始した。中央東西トレンチ南側では圃場整備時と思われる重機の轍痕が調査区を横断して深く残っており、その荷重による沈降・隆起といった変形が7-2a層まで及び、後の調査に支障をきたす要因となった。この面では、近世以降の水田疑似畦畔と耕地段差を検出し、7月2日に高所作業車から全景写真を撮影した。

7月4日から3-1a層～3-3a層の掘削と2面の遺構検出に着手した。同層は中世の耕作土層であり、その下面で溝や落ち込みを検出した。調査区南端で検出した6溝は底面付近が硬化しており、一定の間隔で列を成す小穴が認められた。確証となる所見は得られなかったが、これらの小穴は足跡等の荷重痕跡によって生じた凹みの可能性が高く、道路状遺構の可能性も想定して調査を進めた。なお、3-2a層では下位層単の混入遺物とみられる緑彩陶器碗や文字瓦など特徴的な遺物が出土しており、下位遺構面の建物群の検出を予見させる内容を示していた。2面は7月25日に全景写真を撮影した。

2面まで調査を終えた時点で、今後の調査量の把握と調査工程の再検討に必要な所見を得るために北及び東側溝、中央東西トレンチを拡幅、掘削した。その結果、調査区東半部には南東-北西方向に流れる大規模な古代の流路(15流路)が存在することが分かった。15流路部分では、銅矢板の支持限界深度付近に達しても多量の土器や木製祭祀具が出土し、調査区東半部は掘削土量が大幅に増加すると予想出来た。よって、15流路の範囲と掘削深度を詳細に把握するため、調査区南東隅にも新たにトレンチを設定、掘削したところ、中央東西トレンチより南側の河道域は大部分が調査区外(1-2区)へ逸れていることが確認出来た。また中央東西トレンチ断面の観察所見では、15流路に先行する流路(55流路)が存在し、微高地部となる西側は下位に複数の遺構面が存在することも把握した。

4-1a層の掘削及び3面の遺構検出は、各側溝、中央東西トレンチの掘削と断面の記録作業がほぼ終了した8月20日から開始した。3面では古代末頃の水路と目される大振りの溝2条(8溝、11・543溝)と集石を検出し、8月29日に全景写真を撮影した。

4-2a層の掘削と4面の遺構検出は、3面の写真等記録作業終了後直ちに着手した。4面では古代の掘立柱建物群の柱穴など約360基の柱穴・ピットと約50基の土坑を検出したが、それらよりも新しい16・17耕作溝群が重複していた。中央東西トレンチより北側の16耕作溝群は比較的疎らであったため、柱穴等を同時に検出出来たが、南側の17耕作溝群は極めて密に掘られていたため、耕作溝群の調査を終えて完掘平面図を記録する際に、重複関係にある柱穴等の検出と略測図の作成を行い、建物群の様相を掴むこととした。部分的に側溝や銅矢板沿い壁面の崩落等によって全体像の把握に困難を伴ったものもあったが、結果として調査区の西側半分を中心として掘立柱建物群が濃密に分布すること

を確認し、本面では合計24棟に及ぶ掘立柱建物を検出した。また、4面が本調査における主要な遺構面であり、現地説明会を開催して調査成果を公開すべきと判断し、それを視野に入れて15流路の掘削を優先的に進めた。

調査にあたっては、作業効率を上げるため廃土処理に小型の重機と不整地運搬車を併用するなどして進捗を図った。15流路では下層を中心に多量の土器・木製品をはじめ、銅製帯金具や編組製品、ウシとみられる動物骨が出土した。なかでも埋土下層で出土した長さ1mを超える大型の人形や、埋土下層を中心に出土した多数の墨書土器は特筆されるもので、慎重な作業が求められるため掘削に相当の時間を要した。微高地部の柱穴等は16耕作溝群を完掘した後の9月29日から段下げを行い、遺構平面プランと重複関係、柱痕跡の有無を順次確認しながら掘削を進め、15流路を完掘したうえで11月12日にラジコンヘリコプターによる航空写真と高所作業車からの全景写真を撮影した。なお、県教委と財団は、調査の進捗を見ながら北側溝及び中央東西トレンチの掘削で得られた所見、そして4面調査終了後新たに追加した西側溝の掘削で得られた所見を踏まえ、推定される調査量から今後の調査体制及び工程を継続的に協議し、11月20日に財団が、発掘調査支援業者に対して、発掘作業員を増員するとともに調査期間を平成27年1月31日まで延長するよう指示した。

続く5面は4-3b層から6-3b層までの各層を掘り下げ、古墳時代中期～古代の土壌層及び耕作土層である7層上面で検出した。5面は4面まで大きく異なり、南側が6-3b層を介して北側より低くなる地形を示し、調査区北半部で土坑・落ち込み等、南半部では水田畦畔、流路2条、畦畔付近を中心として多数の足跡を検出した。5面の北半部では4面で検出しきれなかった掘立柱建物を複数棟検出し、それ以外の柱穴にも埋土の識別から4面に帰属する可能性が高いと判断できるものが含まれているため、本報告では4面検出遺構として併せて評価・報告している(掘立柱建物25～28、第4章第3節第4項参照)。また、古墳時代後期～古代の遺物を含む550流路が存在し、15流路よりやや西に振れるが同様に調査区東側を縦断していた。15流路に比して遺物は少ないものの、主に下層で木製祭祀具が出土し、掘削土量が多いため完掘には時間を要した。5面は北半部と南半部で遺構の性格や規模が異なり、作業進捗に差があったため、天候を考慮して北半部の全景写真を12月10日に、南半部の全景写真を12月15日に分割して撮影し、記録作業を行い調査を終えた。南半部の全景写真は、当年初冠雪後の撮影となった。

6面は、北半部が古墳時代中期の土壌層である7-1a層を、また南半部が同時期の耕作土層である7-2a層を掘削してそれぞれ検出した遺構面であり、年を跨いでの調査となった。6面についても、東西中央トレンチと重複して東西方向に走る幅広の610溝を介して、南側が北側よりも低くなる地形を示す。そうした地形を反映し、北半部では竪穴建物や掘立柱建物が検出された一方、南半部では流路や後背湿地の様相を示す堆積が認められた。

12月中は主に遺物包含層の掘削と遺構の検出を行い、年末年始の休業期間を終えた平成27年1月5日から調査を再開し、個別遺構の掘削を進めた。北半部遺構群の大部分は7-5b層が露出した範囲で検出したが、7-1a層の影響を除去しきるまで7-5b層を掘り下げて精査を行ったものの、堆積物のグライ化や地震動による噴砂等によって遺構面の状態が不良であったため、遺構埋土の識別は困難を極めた。竪穴建物2や794土坑は廃絶後に廃棄土坑として利用されており、居住域の縁辺に開削された610溝とともに土器が多量に出土したため、記録及び取上げに時間を要した。同様の状況は南半部の802流路でも認められ、居住域側となる北壁沿いに多量の土器や木製祭祀具(武器形)、木製容

器、建築部材が出土した。また特筆すべき遺物として、ウマの頭骨が1点出土した。802流路は遺物出土量に加え、7-2a層除去後の北側肩部から底面までの高低差が最大で1.5mを測り掘削土量が多く、雪・雨による荒天の中での作業は困難を極めた。北半部遺構群を完掘した1月14日に全景写真を撮影し、802流路のベルトを除去するなど補足作業を行って、6面の調査は終了した。

本調査区の最終遺構面の調査は、1月15日から北半部で先行して着手した。本面の調査は分厚い河川堆積層である7-5b層(後に900流路と遺構番号を付す)を除去した下面となるため、廃土処理に重機を併用して550流路・15流路掘削済み範囲に積み置き、作業の効率化を図った。なお7-5b層の堆積は調査区全域に及び、南半部は8-1a層以下の堆積が鋼矢板の支持限界深度に達しても認められないことから、7-5b層上面を最終遺構確認面とした。一方、8-1a層以下の堆積が遺存する北西半部では、弥生時代終末期の土壌層である8-1a層を掘削した下面で遺構検出を行い、柱穴や微高地縁辺を走る複数の溝を検出した。結果的に、本調査区の最終遺構面については、北半と南半で帰属時期の異なる遺構面を同時に検出することとなったが、現地調査後の整理の過程において南半を7面、北半を8面として分離しており、本書ではその整理・検討結果に基づき報告している。本面の調査については、1月27日に全景写真を撮影後、個別遺構の写真等記録作業の補足と資機材の撤収を行い、1月30日に1-1区、そして平成26年度の現地調査を全て終了した。

整理作業

出土遺物は適宜財団調査室に持ち帰り、水洗、注記、接合、報告遺物の選別と復元、実測図の作成と浄書、写真撮影を行った。金属製品についてはX線透過撮影を行って構造の確認に努め、編組製品などの脆弱な遺物は、応急的な保存処理を施したうえで記録作業を行った。

発掘調査に係る情報発信と普及啓発

発掘調査及び出土遺物整理作業の成果は随時、財団調査室のホームページや月次刊行する広報誌を通じて公表し、啓発に努めた。また、1-1区4面で古代の掘立柱建物群を多数検出した他、15流路から墨書土器や木製祭祀具など大量の遺物が出土したため、10月18日に現地説明会を開催し、地元の方をはじめとして174名の方に来跡、見学いただいた(写真1)。その他、鳥取県立博物館歴史・民俗展示室「歴史の窓」コーナーで鳥取西道路の建設に伴う発掘調査成果の速報展を開催し、墨書土器や形代、写真パネルを展示した。



写真1 現地説明会(左)と県立博物館における速報展示(右)

第3節 調査体制

平成26年度

鳥取県教育委員会

教 育 長 山本 仁志

鳥取県教育委員会事務局文化財課

課 長 木本 美喜

歴史遺産室長 松井 潔

課長補佐 土山 和俊

文化財主事兼係長 野口 良也

文化財主事 岡野 雅則

公益財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 井上 善弘
(平成26年6月30日まで)野村 勇二
(平成26年7月1日から)

事 務 局 長 石本 富正

副 主 幹 岡田 美津子

調査室

室 長 北浦 弘人(※1)

次長兼総務企画課長 中川 眞一
(平成26年4月30日まで)民木 一美
(平成26年5月1日から)

総 務 係 長 川村 悟(※1)

主 事 福島 亘(※1)

事 務 職 員 田中 絵理子
(兼事務局事務職員)

調査企画設計係長 玉木 秀幸(※1)

文化財主事 浅井 達也(※1)

第1工区担当

主 幹 牧本 哲雄(※1)

副 主 幹 高尾 浩司(※1)

文化財主事 正岡 大実(※2)

門脇 隆志(※1)

小林 新平(※1)

平成27年度

鳥取県教育委員会

教 育 長 山本 仁志

鳥取県教育委員会事務局文化財課

課 長 木本 美喜

歴史遺産室長 松井 潔

課長補佐 土山 和俊

文化財主事兼係長 野口 良也

文化財主事 北 浩明

公益財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 野村 勇二

事 務 局 長 石本 富正
(平成27年6月30日まで)畑中 弘子
(平成27年7月1日から)

副 主 幹 岡田 美津子

調査室

室 長 北浦 弘人(※1)

次 長 民木 一美

総 務 係 長 川村 悟(※1)

主 事 西村 あかね(※1)

事 務 職 員 田中 絵理子
(兼事務局事務職員)

調査企画設計係長 玉木 秀幸(※1)

文化財主事 浅井 達也(※1)

主 幹(大柗地区) 牧本 哲雄(※1)

大柗地区2班

副 主 幹 高尾 浩司(※1)

文化財主事 水村 直人(※1)

門脇 隆志(※1)

大谷 祐司(※1)

※1 鳥取県教育委員会から派遣

※2 公益財団法人大阪府文化財センターから派遣

第1章 調査の経緯と経過

平成28年度

鳥取県教育委員会

教 育 長	山本 仁志
鳥取県教育委員会事務局文化財課	
課 長	片山 暢博
歴史遺産室長	山橋 雅美
課長補佐	土山 和俊
文化財主事兼係長	野口 良也
文化財主事	北 浩明

公益財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長	野村 勇二
事 務 局 長	畑中 弘子
副 主 幹	岡田 美津子

調査室

室 長	牧本 哲雄(※1)
次 長	民木 一美
主 事	岡 梓(※1)
	西村 あかね(※1)
事 務 職 員	田中 絵理子 (兼事務局事務職員)
副 主 幹	大野 哲二(※1)
文化財主事	水村 直人(※1)
	河合 章行(※1)
	門脇 隆志(※1)

※1 鳥取県教育委員会から派遣

発掘調査支援業者

株式会社アーキジオ・アサヒコンサルタント株式会社共同企業体

現場代理人	伊東 孝次
副現場代理人	藤田 健二
支援調査員	伊藤 雅和 阿部 将樹 大西 健吾 酢谷 恭子(現地調査従事期間：平成26年7月28日～8月1日、9月16日～9月19日)
調査補助員	寺坂 隆憲 丸山 大貴 三島 ゆかり 中川 博晶 紺井 茂(現地調査従事期間：平成26年12月1日～平成27年1月30日)
測量士	福田 和美 山下 浩昭

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境

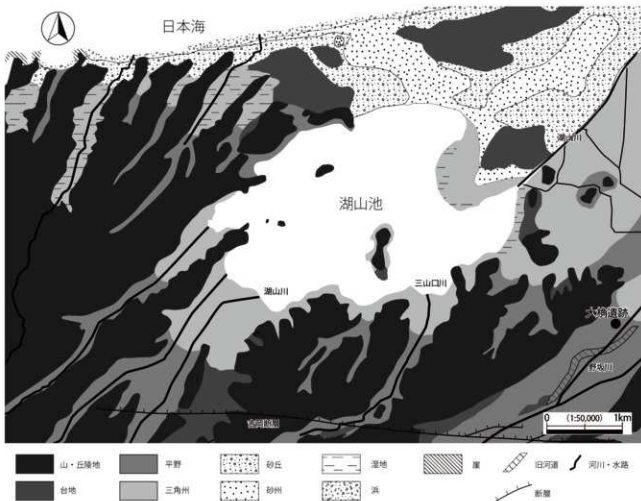
鳥取県は中国地方の北東部にあり、県域は東西に約125km、南北に約62kmと東西に長い。鳥取市は県の東部に位置する県庁所在地であり、市域三方は山地に囲まれ、北には鳥取砂丘と日本海が広がる(第3図)。

大柵遺跡は、鳥取市中央北寄りに位置する湖山池南東岸の中段段丘及び沖積地に立地している(第4図)。湖山池南岸には、中国山地から伸びる山地や丘陵に挟まれた谷底平野が複数あり、平野毎に遺跡が形成されている。大柵遺跡の所在する地域も例外ではなく、丘陵上及び丘陵に挟まれた平野の広範囲に渡り、遺跡が点在する。

大柵遺跡の東側丘陵沿いには野坂川が流れており、緩く蛇行しながら北流した後に鳥取市中央を縦貫する一級河川千代川と合流する。野坂川が現流路に固定された時期は新しく、古くは決壊と氾濫を繰り返して幾度となく流路が変動している。平野は西側が段丘に近いため高く、沖積地となる東側が低い。大柵遺跡周辺は、鳥取市の農業基盤整備事業の一環として昭和50年代に圃場整備が進められ、現在は主に水田や畑地として利用されている。



第3図 鳥取県と遺跡の所在地



第4図 遺跡周辺の地形環境

第2節 歴史的環境

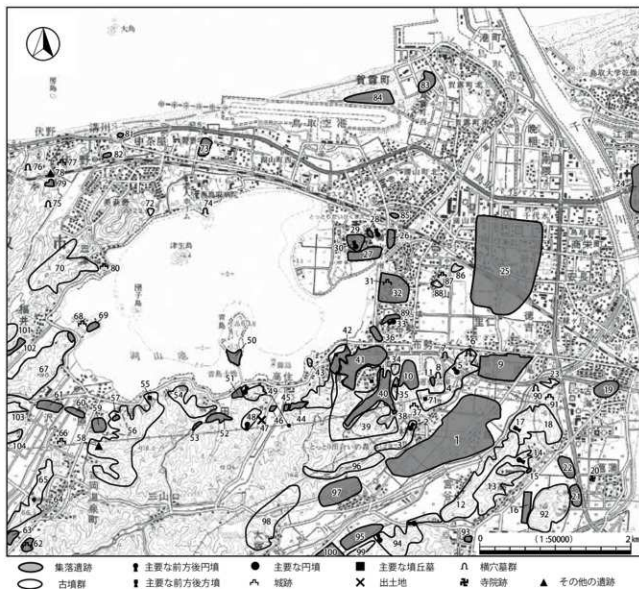
鳥取西道路の計画地の中でも、大柵遺跡の所在する湖山池南東地域とその周辺は、多数の遺跡が密集して分布する地域の一つである。本節では主に、湖山池南岸から千代川西岸にかけての歴史を概観していく(第5図)。

【縄文時代】

湖山池周辺における生活痕跡は、縄文時代前期中葉にまで遡る。湖山池南岸に位置する高住平田遺跡(46)からは、前期に比定することの出来る北白川下層式土器とともに多量の石錘が出土している。しかしながら、当該地における前期の遺跡は他にはあまり見つかっておらず、湖山池南岸に位置する桂見遺跡(41)や東桂見遺跡(40)から、前期末の大歳山式土器が僅かに確認されているに留まる。

中期に入っても高住平田遺跡では継続して土地利用が行われており、少量ではあるが中期初頭の鷹島式土器や船元式土器、里木Ⅱ式土器とともに石錘が出土している。また、同じ平野内に所在する高住井手添遺跡(45)からは船元式土器が多数みついている。このように、従来まで不明瞭であった湖山池周辺における縄文時代前期から中期にかけての様相が、近年徐々に明らかになりつつある。

中期末から後期にかけては、桂見地域を中心とした低湿地において、顕著に遺跡が形成される。布



1. 大橋遺跡 2. 駒間1号墳 3. 駒間古墳群 4. 里仁古墳群 5. 里仁29号墳 6. 里仁第1横穴群 7. 里仁第2横穴群
8. 里仁第3横穴群 9. 里仁遺跡 10. 布勢第1遺跡 11. 布勢第2遺跡 12. 宮谷古墳群 13. 本高古墳群 14. 本高14号墳
15. 本高下ノ谷遺跡 16. 本高弓ノ木遺跡 17. 古海36号墳 18. 古海古墳群 19. 古海遺跡 20. 昌隆庵寺 21. 昌隆遺跡 22. 山々鼻遺跡
23. 徳尾古墳群 24. 秋里遺跡 25. 岩古遺跡 26. 湖山第1遺跡 27. 湖山第2遺跡 28. 大熊段遺跡・大熊段1号墳 29. 三浦遺跡
30. 三浦1号墳 31. 天神山城跡 32. 天神山遺跡 33. 布勢古墳 34. 布勢古墳群 35. 布勢指染墳墓群 36. 帆城遺跡 37. 湖山城跡
38. 桂見湖山遺跡 39. 桂見古墳群・墳墓群 40. 東桂見遺跡 41. 桂見遺跡 42. 西桂見遺跡 43. 倉見古墳群 44. 高住牛輪谷遺跡
45. 高住井手遺跡 46. 高住平田遺跡 47. 高住宮ノ谷遺跡(高住銅鐸出土推定地) 48. 高住宮ノ谷古墳群 49. 高住古墳群 50. 青島第1遺跡
51. 塞ノ谷遺跡 52. 良田平田遺跡 53. 良田中道遺跡 54. 良田古墳群 55. 松原1号墳丘墓 56. 松原古墳群 57. 松原小興遺跡
58. 松原所在古墓 59. 松原谷田遺跡 60. 松原中道遺跡 61. 金沢坂和口遺跡 62. 吉岡遺跡(丸山地区) 63. 吉岡遺跡(大海地区)
64. 吉岡1号墳 65. 吉岡古墳群 66. 丸山城跡 67. 岩本古墳群 68. 防己尾城跡 69. 岩本第2遺跡 70. 三津古墳群 71. 里仁1号墓
72. 中ノ茶屋古墳群 73. 中ノ茶屋遺跡 74. 三津所在横穴墓 75. 伏野所在横穴墓群 76. 伏野神社の南横穴墓群 77. 伏野所在城跡
78. 伏野所在五輪群 79. 伏野所在第1遺跡 80. 三津ヶ崎本陣山城跡 81. 湊川遺跡 82. 未恒遺跡 83. 賀露第1遺跡・賀露台場跡
84. 賀露第2遺跡 85. 湖山第3遺跡 86. 石場山古墳群 87. 北地山城跡 88. 足山古墳群 89. 布勢遺跡 90. 松ヶ谷横穴群 91. 駒山城跡
92. 釣山古墳群 93. 北村恵儀谷遺跡 94. 小森山古墳群 95. 小森山遺跡 96. 野坂古墳群 97. 野坂遺跡 98. 大塚古墳群 99. 下段古墳群
100. 下段遺跡 101. 福井古墳群 102. 福井所在遺跡 103. 大谷古墳群 104. 大畑古墳群

第5図 周辺の遺跡

勢第1遺跡(10)では多数の木製品が良好な状態で地中に保存されており、木組みを有する水路や漆塗り木製品などが出土している。また、桂見遺跡は、全長7mにも及ぶ大型の丸木舟を含む、形態が異なる2艘の丸木舟が出土したことで広く知られている。桂見地域以外にも、湖山池に浮かぶ青島に所在する青島第1遺跡(50)では後期の土器が出土している他、山ヶ鼻遺跡(22)からは後期後葉から晩期にかけての土器が出土している。

晩期から弥生時代前期にかけて、河川によって形成された自然堤防上や平野部の微高地状に遺跡が形成される。千代川の自然堤防上に位置する古海遺跡(19)からは、晩期末の突帯土器が多数出土しており、山陰地方における最末期の縄文土器型式である「古海式」の標式遺跡とされている。また、大橋遺跡(1)や本高弓ノ木遺跡(16)等からは、古海式の突帯土器に伴い遠賀川式土器が出土している。その他、高住井手添遺跡では、編組製品がまとまって出土している。このように、突帯土器と遠賀川式土器が併せて出土する遺跡は湖山池周辺に複数存在しており、鳥取平野における農耕社会成立期の様相を示す資料として評価されている。

【弥生時代】

前期に展開する遺跡は、そのほとんどが縄文時代晩期から継続するものである。しかし、それらは遺構を伴うことはほとんどなく、その実態については不明瞭な点が多い。そのような中で、大橋遺跡からは近年の調査成果により、前期前葉から後葉にかけての畔状遺構や人工的な水路と考えられる溝、水田と考えられる窪地が検出されている。

中期には建物跡等の検出例が増加し、湖山池南岸から南東岸の平野部を中心に集落が形成されるようになる。松原田中遺跡(60)では前期末から中期前葉にかけての溝から多数の木製品が出土した他、中期中葉の玉作関連遺物が多数出土している。他にも特筆すべき遺跡として、中期後葉の自然河川から石庖丁や木製容器等が出土した山ヶ鼻遺跡や、流水文銅鐸が出土した高住銅鐸土堆定地(47)の他、分銅形土製品が出土した塞ノ谷遺跡(51)を挙げることが出来る。

後期に入ると、遺跡数はさらに増加する。岩吉遺跡(25)では水田や畦畔、溝、井戸が検出されており、木庖丁や堅杵、横槌などが出土している。また、桂見遺跡、西桂見遺跡(42)をはじめ、湖山池を見下ろす丘陵上でも集落が形成されており、西桂見遺跡の多くの住居跡で、鍛冶関連遺物がみつまっている。さらに、湖山池南岸の岩本第2遺跡(69)からは、ガラス管玉や分銅形土製品が出土している。

当該期の墓域に関しては調査例が少ないものの、丘陵上に位置する布勢鶴指奥墳墓群(35)や桂見墳墓群(39)等が形成されている。布勢鶴指奥1号墳丘墓は丘陵平坦面に位置し、長軸17.8m、短軸10.6mを測る。因幡地方最大の弥生墳丘墓である西桂見墳丘墓は、隅部のみ調査ではあるが、一辺64mの規模になると推定されている。他にも、松原1号墳丘墓(55)には鉄製品や1000点以上のガラス製玉類が副葬されていたことが判明するなど、湖山池周辺における有力な首長層の存在が明らかとなっている。

【古墳時代】

古墳時代に入ると、湖山池南岸から千代川西岸にかけての丘陵上に古墳が築造される。前期古墳としては湖山池南岸の桂見古墳群(39)や倉見古墳群(43)があり、これらは弥生時代からの系譜を引く

方墳を中心とした古墳群である。なかでも特筆すべきものとして桂見2号墳を挙げることが出来、長辺28m、高さ4.5mの方墳で、副葬品として斜縁獣帯鏡や内行花文鏡が出土している。当該期の古墳群としては、この他にも古海古墳群(18)や徳尾古墳群(23)、本高古墳群(13)等がある。とりわけ、本高古墳群の本高14号墳(14)は全長63mを測り、墳丘形態及び出土遺物等から前期中葉に遡る山陰地域最古級の前方後円墳であることが明らかになった。

中期には、大型の前方後円墳が築造されるようになる。杣間古墳群(3)に属する杣間1号墳(2)は、大柵遺跡を見下ろす西側丘陵上に位置している。未調査ではあるが、全長92mを測り因幡地域最大規模となることが判明している。他にも、大柵遺跡の北側丘陵上に位置する里仁29号墳(5)(全長81m)や、平野を挟んで大柵遺跡の東側丘陵上に位置する前方後方墳の古海36号墳(17)(全長67m)等、中期の大型古墳が湖山池南東岸に集中する。また、里仁古墳群(4)のうち32・33号墳からは、罎付円筒埴輪を棺に転用した埋葬施設が検出されている。

後期に比定される前方後円墳としては、布勢古墳(33)(全長59m)や大熊段1号墳(28)(全長45m)、三浦1号墳(30)(全長36m)等が近接した位置に築造されている。しかしながら、中期の大型古墳に比べると、小規模なものが多い。また、横穴式石室を持つ古墳には高住12号墳(49)や松原28号墳(56)、吉岡1号墳(葦岡長者古墳)(64)等が挙げられるが、千代川東岸域の中高式天井石室とは異なる形態で、数も少ない。終末期古墳としては、7世紀中葉に築造された古海古墳群の山ヶ鼻古墳があり、一辺11～13mの規模と推定されている。本墳は、築造方法が畿内地域と類似する横口式石郭であることから、因幡地域との関連を考える上で重要である。

湖山池周辺における古墳時代集落は、比較的少ない。現在判明している集落遺跡は古墳に近接して営まれることが多く、岩吉遺跡や布勢第2遺跡(11)、桂見遺跡、本高弓ノ木遺跡、大柵遺跡、松原田中遺跡等がある。しかし、古墳時代中期以降に比定出来る遺構・遺物は概して少なく、古墳時代の集落については不明な点が多い。

【古代】

湖山池周辺は、令制下における因幡国高草郡に属する。それ以前の7世紀後半には、奈良県石神遺跡(明日香村)から出土した荷札木簡に「高草評野□(岬カ)五十戸」の文字があることから、令制施行以前には既に、因幡地域内に「高草郡」の前身となる「高草評」が立評されていたようである。また、千代川西岸下流から湖山池東部の一帯では、天平勝宝8(756)年に東大寺額莊園として高庭莊が成立している。「東大寺東南院文書」によれば、南北10条にわたって条里制が施行されたという。しかしながら、莊園の経営はあまり進められず、最終的には藤原氏や国衙役人らの私領となり高庭莊は衰退していく。

高草郡家は、現在の鳥取市菖蒲付近に置かれていたと推定されている。付近には9世紀頃の墨書土器が出土する菖蒲遺跡(21)や、八頭町の土師百井庵寺出土軒丸瓦と同文の瓦が出土する菖蒲庵寺(20)がある。千代川河口寄りの岩吉遺跡からは、8～10世紀にかけての墨書土器や人形、題箋軸をはじめとする木簡などが出土した。また、良田平田遺跡(52)では、7世紀末に遡る可能性のある前白木簡をはじめ、8～9世紀の木簡や多数の墨書土器、銅製帯金具、木製祭祀具などが出土した。他にも、当該期の供膳具や墨書土器、銅印などが出土した高住平田遺跡や、単弁十二葉蓮華文軒丸瓦をはじめとする瓦類が出土した吉岡遺跡(大海地区)(63)など、湖山池南岸は古代山陰道が敷設されていたことも

あり、官衙・寺院関連施設が集中する。

【中世】

南北朝争乱期に因幡を含む五ヶ国を安堵された山名氏時は、貞治3(1346)年に室町幕府から因幡守護を任じられ、以降因幡守護職は山名氏が踏襲している。その守護所として築造されたのが湖山池東岸に位置する天神山城(31)であり、一部調査を行った結果、内堀や土塁等が検出されている。天神山城は但馬山名氏との抗争により、城内が戦場になることがあったという。その後、但馬守護山名祐豊の支配下となった後に、山名豊定が城主となる。そして、子の山名豊数が跡を継ぐことになるが、永禄6(1563)年に鳥取城武將武田高信の離反により天神山城を退去することで守護所としての機能を失うことになる。また、湖山池南西岸に位置する丸山城跡(66)と防己尾城跡(68)は、この地域を拠点としていた吉岡氏の居城であった。

当該期の墓としては、天神山城北側の三浦遺跡(29)や大熊段遺跡(28)、南側の里仁遺跡(9)、布勢鶴指奥墳墓群、桂見墳墓群等から見つかっており、方形に周溝が巡るものや盛土を持つもの等が確認されている。

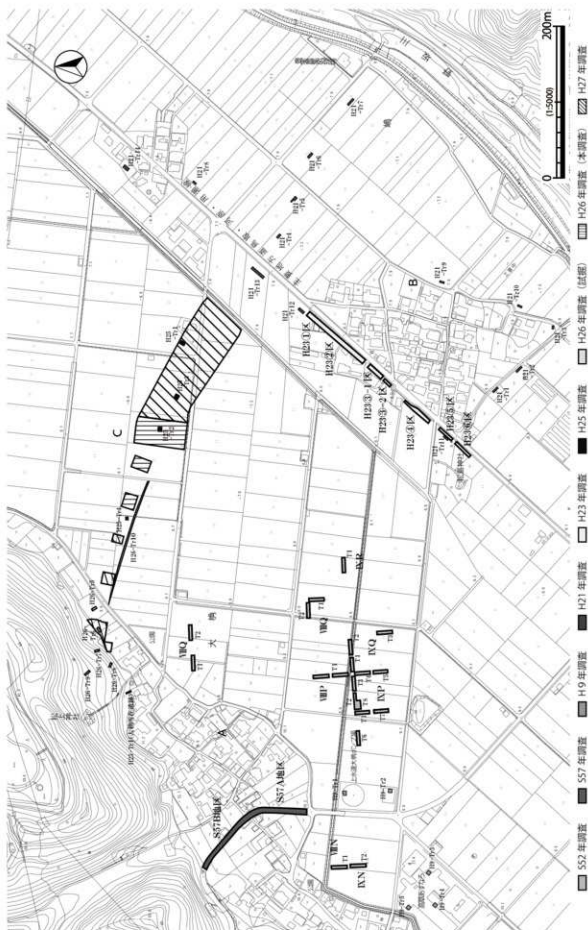
第3節 既往の調査

大柵遺跡は、昭和50年に行われた「団体営高草地区は場整備事業」の工事中に多数の土器片が出土したことからその存在が明らかとなった。その後、圃場整備事業や福祉施設建設等に伴う発掘調査が、鳥取市教育委員会によって昭和52・57年、平成9・21・23・24・25・26年の数次にわたって断続的に行われている。その結果、大柵遺跡は大溝・嶋両集落にまたがる東西約1.6km、南北約0.8kmにわたって広がっていることが確認され、縄文時代晩期から中世までの各時代の遺物が出土する複合遺跡であることも明らかとなった。本節では、既往の調査が行われた範囲を遺跡の西(A)・東(B)・中央(C)の3つのエリアに分け、その成果を概観していく(第1表、第6図)。

西側段丘から平野中央部にかけては昭和52・57年、平成9・26年に調査が行われている(A)。最も古い遺物としては、縄文時代晩期末の突帯文土器が出土しているが、遺構は検出されていない。検出された遺構は弥生時代後期以降のものであり、土器が多数出土した袋状土坑や小形の方形竪穴建物を確認されている。また、古墳時代前期後葉から中期初頭にかけての竪穴建物が4棟検出された他、近接する西側丘陵の裾部からは、当該期の土壌墓が計11基検出された。

第1表 既往の調査と成果

エリア	調査年	主な遺構	特記事項
A	昭和52年	竪穴建物(弥生時代後期・古墳時代前期後半～中期初頭)、土坑(弥生時代終末期後半～古墳時代前期初頭)	-
	昭和57年	竪穴建物(古墳時代前期後半～中期初頭)、土壌墓(古墳時代前期後半)、土坑(弥生時代終末期後半～古墳時代前期初頭)	-
	平成9・26年	-	突帯文土器が多数出土
B	平成21年	溝(古墳時代)	-
	平成23年	土坑(縄文時代晩期～弥生時代前期)水田状遺構(弥生時代前期)、溝(古墳時代中期)	同一の土坑から突帯文土器と弥生土器が共伴して出土
C	平成25年	溝(古代)	古代の須恵器・土師器が多数出土



野坂川から平野中央部にかけては、平成21・23年に調査が行われている(B)。このエリアからは、遺構外ではあるものの、突帯文土器と、弥生時代前期の中でも古相の特徴を持つ遠賀川式土器が共伴して出土している。また、調査範囲が狭小であったため確証はないものの、このエリアでは畔状遺構等が検出されていることから、水田が広がっていた可能性が高い。野坂川や有富川周辺地域ではこうした調査成果が蓄積されつつあり、鳥取平野でも比較的早い時期に水稻耕作を開始した地域と考えられる。

平野中央部では、鳥取西道路建設に伴う試掘調査や今回の本発掘調査によって、近年様相が明らかになりつつあるエリアである(C)。試掘調査では目立った遺構は検出されていないものの、複数のトレンチからは縄文時代から中世までの土器が出土した。特に、古代の須恵器や土師器が多数出土していることから、大柵遺跡では弥生・古墳時代のみならず、古代にも遺構・遺物が集中する時期があると推測でき、本調査によりその具体相が明らかとなった。

このように、既往の調査では小規模なトレンチ調査が多いとはいえ、平野の広範囲にわたって各時代の遺構・遺物が確認されている。これらの調査成果からすれば、大柵遺跡が長期間にわたって継続し、居住域や生産域のみならず、奈良時代以降は官衙関連施設が展開することも明らかになってきた。今回の調査によって新たな成果が加わり、広範囲にわたる大柵遺跡の変遷が、より一層明確になるであろう。

第3章 調査の方法

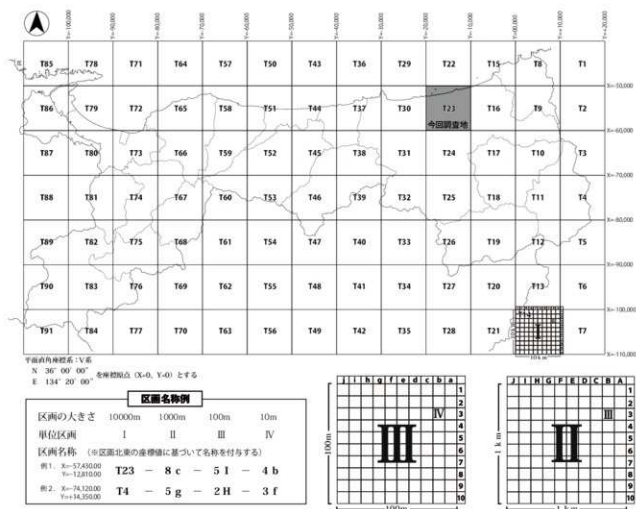
第1節 現地調査

第1項 地区割の方法と名称

県教委が財団に委託した鳥取西道路関連の発掘調査では、調査成果の標準化を目的として、遺跡や遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用する地区割に、平面直角座標系の第V系(世界測地系)を使用している。地区割については、10m×10m(100m)の区画を基本的な最小単位とし、その名称(記号)については、以下のように設定した(第7図)。

第I区画 鳥取県の全域に設定した大区画である。10,000m×10,000mで、1～91の区画を設け、北東隅からT1～T91の記号を付した。

第II区画 第I区画の1区画内を、1,000m×1,000mに100分割した区画である。第II区画については、1区画の南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、1a～10jの記号を付した。



第7図 鳥取県と国土座標系

第Ⅲ区画 第Ⅱ区画の1区画内を、100m×100mに100分割した区画である。第Ⅲ区画については、1区画の南北軸に1～10、東西軸にA～Jを付し、1A～10Jの記号を付した。

第Ⅳ区画 第Ⅲ区画の1区画内を、10m×10mに100分割した区画である。第Ⅳ区画については、1区画の南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、1a～10jの記号を付した。

第2項 大柵遺跡における地区割

大柵遺跡の発掘調査は、第1章第1節で述べたように、大きくは道路橋脚部分(2～5区)及び橋台部分(6区)と、盛土部分(1区)とに二分される。上記のうち、平成26年度の発掘調査は、盛土部分西側の一画となる1-1区、そして道路橋脚部分のうち東側の区画となる2区・3区を対象として行った。

これらの調査区について、前項で述べた10m単位の地区割を設定したものが第8図である。本書で報告する調査範囲は、T23(第Ⅰ区画)-7d(第Ⅱ区画)内に位置しており、遺物の取り上げ等については、第Ⅲ、第Ⅳ区画の記号を用いて、1B-8fのように記した。

第2節 発掘調査と記録の対象

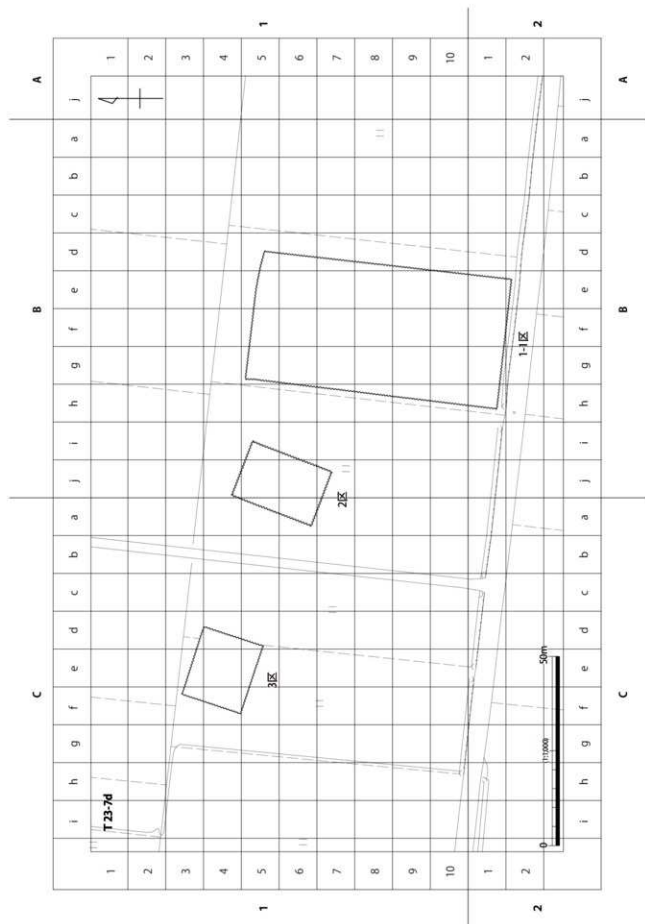
第1項 発掘調査と記録の対象

平成26年度の発掘調査対象とした面積は、合計2,931㎡(1-1区:2,283㎡、2区:340㎡、3区:308㎡)である。掘削については、盛土や現代耕作土等の表土掘削を重機で、また包含層及び遺構の検出・掘削は人力で行い、調査の記録作業は表土除去後から行った。

第2項 地層と遺構面の認識

大柵遺跡は、中位段丘から沖積低地に立地しているため、地区によって地層の堆積環境が大きく異なる。具体的には、3区が中位段丘面に、2区及び1-1区以東の盛土調査区が沖積低地にそれぞれ立地する。特に後者については、各時期の地層が複雑に累重した結果として現在の景観が形成されていることが予想された。そのため調査にあたっては、まず排水溝を兼ねた地層観察用のトレンチを設けるとともに、これに接するアゼによって調査区毎の地層の堆積状況を確認するとともに、遺構・遺物の存在が確認出来る層理面に従い、遺構面を決定しながら調査を実施した。この際に設定したアゼは、調査区の北壁に沿う東西の断面を基準として、残土排出の方向に合わせて東西のいずれかに南北方向の断面を設けることを基本とし、道路建設予定地の形状に準じて平野部を北西-南東方向に横断する断面を取得出来るように設定した。

なお、地層の認識にあたっては、色調と粒度、堆積構造、及び同一層準の側方変化等にも注目して分層を行った。認識した基本層序については、可能な限り隣接調査区との整合を意識して層名を付与したが、調査区によっては20～30m程度離れている上に、それぞれの堆積状況が一様でないため、調査区毎に個別に付与せざるを得なかった部分も多い。そのため、次章以下に述べる各調査区の調査成



第8図 調査地周辺の地区割図

果については、調査時の層名を用いて記述を進めることとし、最終的な層序の対比については、第8章第1節の総括において行うこととする。

なお、それぞれの層名は、調査時に概ねの時期などを反映すると見込んだ大別層準ごとに上位から順に番号を付与している。さらにこの中に層理面が存在して細分出来る場合は、枝番号を付与してこれを識別した。また、認識を容易にするために、末尾には土壌層あるいは耕作などによって構造が乱されているものに「a」、一方自然の営力によってもたらされた水成堆積物に「b」の記号を付加することで、これを表現している。このため、層名の付与の仕方としては、以下の例ようになる。

例) 1-1 a層

1 (大別層位：時期など) - 1 (細別層準：層理面) - a (記号：層準の性格)層

遺構面については、上述のとおり、各大別層準毎の層理面を基本としつつ調査を進めた。遺構面の名称については、上位から順に、調査を行った順番に1面、2面…と番号を付与した。

この遺構面名称については、調査段階では各調査区毎に地層の堆積状況が異なっていることから、調査区間での整合を図ることは出来ていない。調査区ごとの地層の堆積状況が複雑であることを勘案し、恣意的な報告となることを回避するために、第4～6章で述べる調査成果については、調査時の遺構面名称を用いるとともに、最終的な調査区間の比定については、地層の対比同様、第8章第1節の総括にて述べることにしたい。なお、その際には、地層・遺構面名の冒頭に「第」を冠し、調査段階の名称とは区別することとする。

第3項 遺構名称の設定

県教委が財団に委託した鳥取西道路関連の発掘調査では、検出順に遺構番号を付与することを基本方針としている。遺構名称は、遺構番号の後ろに検出された遺構の種別を組み合わせることで「1土坑」、「2溝」のようになるが、種別については、調査が進む中で変更されることもある。一方で、一度付与された遺構番号については不変であり、本書においても調査時に付与した遺構番号を用いて報告を行っている。そのため、調査の過程で遺構ではないと認識されたものについては、欠番とした。

また、遺構番号は、各調査区間での混乱を防ぐため、調査区単位で付与することとした。このため、同一文章中で異なる調査区の遺構を標記する必要がある場合には、やや煩雑ではあるが「大柵遺跡1-1区-1土坑」のように標記することとした。

なお、遺構の種別について、通常「土坑」や「ピット」と呼称されるもののうち、明らかに建物を構成するものや柱根自体が認められるもの、または柱痕が明確に確認された場合は、これを「柱穴」と呼称し、「土坑」や「ピット」とは区別した。また、これに関連して、「土坑」は径30cm以上のもの、「ピット」は径30cm未満のものを対象として便宜的に分類し、呼び分けることとした。

第4項 図面記録及び写真撮影

現地での記録作業は、支援業者の支援調査員と調査補助員が、監理者の指示・確認を受けながら行

った。

図面記録に関しては、平面図はトータルステーションを用いた測量と写真計測を、対象遺構や壁面の状況によって使い分けている。作成した図面は、監視者の確認後に、現地での一次記録である〈素図〉として管理し、最終的には情報をデジタルデータとして整理・統合し、〈編集図〉を作成した。成果品としての編集図は、主にベクトルデータで構成され、adobe Illustrator CS5以上の再編集が可能な形(ai形式)で保存している。

写真の撮影は、撮影対象、範囲、アングル、使用機材等に関する発掘調査監視者の指示のもとに、支援調査員が行った。撮影用機材としては、中型(6×7cm判)一眼レフカメラ、小型(35mm判)一眼レフカメラ、デジタル一眼レフカメラ(センサーサイズAPS-C以上、有効画素数1200万画素以上)を併用し、対象によって機材を適宜選択しながら行った。

中判・小型一眼レフカメラに使用したフィルムは、富士フィルム社プロビア100F(リバーサル)、富士フィルム社ネオパン100ACROS(黑白フィルム)である。デジタル一眼レフカメラによる撮影は、RAW・JPEG形式の同時保存により行った。また、デジタル一眼レフカメラによる撮影は、写真撮影を行う全ての対象に対して行うとともに、撮影対象や日付などの撮影内容を記載した写真ラベルも併せて撮影している。これにより、撮影した画像データを他のフィルムカメラの整理・検索用資料として使用出来るようになり、写真記録管理用の〈写真台帳〉の作成時に有用なだけでなく、効率的な写真の管理・活用が可能となっている。

第5項 出土遺物の取り上げ

遺物の取り上げには、財団調査室が用意した遺物カードを使用した。取上番号は通し番号とし、遺物カードに記載された項目に基づいて遺物取上台帳を作成し、出土した遺物を取り上げ、管理した。遺物カードの記載項目・内容は、以下のとおりである。

遺跡名 「大橋遺跡14」と記載。末尾の「14」は2014年度に調査を実施したことを示す。

地区名 遺物の取り上げは、10m×10mのグリッドを基本とし、第Ⅰ～Ⅳ区画で構成される地区割を記載した(第3章第1節第2項参照)。

層位名 遺物が帰属する包含層や遺構内に堆積した層位の番号ないし名称を記載した。

遺構名 遺物が帰属する遺構の名称を記載した。

取上No. 取り上げ順に通し番号を記載した。

出土年月日 検出日ではなく、取り上げ日を記載した。

図面 遺物の出土状況が記録された図面の有無と図面のスケールを記載した。

備考 特記事項を記載した。

時代・時期 取り上げた遺物の帰属時期を記載するが、この度の調査では記載を省略した。

種別 土器や鉄器など素材によって大別される遺物の種別を記載した。

その他 上記の記載項目とは別に、取上時に座標値が記録されたものについては、遺物カードのメモ欄に座標値を記載した。

また、取り上げた遺物に付す遺物番号は、遺物取り上げ番号の重複を防ぐため、それぞれの調査区

ごとの通し番号を付した。

第6項 出土遺物の整理と記録

出土遺物については、現地での取り上げ後、財団調査室に持ち帰って、以下のような整理作業を行っている。

土器・土製品 調査終了後に洗浄、注記(ネーミング)、接合、復元、実測を行った。器種、形状が判明ないし復元出来る個体を実測の対象とした。ただし、土器・土製品が大量に出土した遺構(1-1区15流路、610溝等)については、遺構の時期決定に関わるものの中から器種、型式ごとに選別したうえで実測、掲載した。

石器・石製品 調査終了後に洗浄、注記(ネーミング)、接合、復元、実測を行った。本調査の出土品は、器種や用途が判明出来るものの他、使用痕が明瞭な個体について、実測の対象とした。

木製品 調査終了後に洗浄、実測を行った。器種や用途、または、特徴的な加工が施されているものを実測の対象とした。

金属製品 調査終了後にアルコール洗浄し、近年のものと判断されるものを除き実測を行った。

写真撮影 以上の出土遺物を対象に、デジタル一眼レフカメラ(センサーサイズフルサイズ)で撮影を行った。

保管 図面、写真の記録類、出土遺物は全て台帳に登録して収納作業を行った。

第4章 1-1区の調査成果

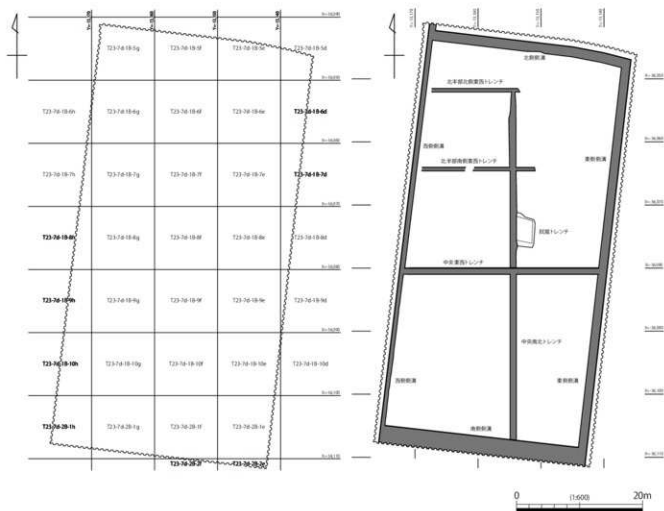
第1節 調査区の概要

第1項 調査の方針

本調査区では断面記録について、道路路線に平行する調査区北壁断面を基本として、これに直交する東ないし西側の断面を最低限の記録対象とすることとした。また、地区割については第3章に述べた基本の10mグリッドに従って設定し、これを用いて遺構・遺物の把握を行った(第9図左)。

第2項 1-1区の概要

本調査区では、現代耕作土及び盛土(0層・1層)を機械掘削の対象とし、以下、大別9層、細別27層に分層した地層の堆積に合わせて合計7面の遺構面について面的な調査を実施した。最終的に、最も深い箇所では、掘削限界深度である標高4.28m付近まで掘削を行った。



第9図 調査区地区割図・断面位置図

なお、調査区の南半部については、地層断面の観察結果より、7-5b層とみられる900流路が掘削限界深度以上に堆積している状況を確認したため、7-4a層の下面で検出した遺構面を7面とし、調査を終了している。一方の北半部は、7-5b層以下に弥生時代終末期の遺物を包含する土壌層(8-1a層)を確認したことから、この下面で検出した遺構面を7面として調査を終了している。

調査成果としては、弥生時代後期から近世に至るまでの遺構と遺物を確認している。各遺構面における調査成果の概要は、以下のとおりである。

近世の遺構としては、耕作土層の下面で耕作溝や土坑群を検出した(1面)。

中世の遺構としては、耕作土層の下面で溝や落ち込みを検出した(2面)。

平安時代後期の遺構としては、耕作土層下面で水路・護岸状施設を検出した(3面)。

平安時代前期～中期の遺構としては、耕作土層下面で掘立柱建物・柵列・土坑・ピット・流路から構成される居住域を検出した。掘立柱建物は合計で28棟以上が複数時期にわたって存続していたことが明らかになるとともに、流路内を中心として墨書土器や人形、腰帯金具(巡方、山形)、編み物等のバラエティに富んだ遺物が出土し、調査地の西側を中心とする屋敷地の存在と祭祀を行った川の存在が窺われた(4面)。

奈良時代～平安時代にかけての遺構としては、掘立柱建物や土坑・落ち込み・流路等を検出した。建物の密集度は4面よりも落ちるものの、東側に流路、西側に居住域という構成は、4面とほぼ同様のものであり、屋敷地の形成時期と存続について重要な知見を得ることが出来た(5・6面)。

古墳時代前期～中期の遺構としては、竪穴建物や掘立柱建物、土坑、落ち込み、水田、流路等を検出した。特に古墳時代中期後半は、地形の変化が著しくなる時期でもあり、北半の微高地と南半の低地部において、それぞれ居住域と生産域、放棄地などの別が明瞭に認められ、古墳時代中期の集落境界付近を調査したものと想定出来る。南半低地部の流路を中心として、古墳時代中期後半の土器に混じって刀形などの祭祀具や部材といった木製品が多数出土した他、ウマの頭骨が良好な状態で出土するなど、古墳時代中期の水辺祭祀の様相を窺ううえで、重要な知見を得ることが出来た(6面)。

弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構としては、溝群と流路を確認している(7・8面)。

第2節 基本層序と遺構面の認識

本調査区は、本書第6章において後述する3区とは異なり、西側に展開する丘陵縁辺に接して広がる沖積低地に立地している。そのため、沖積低地に立地する遺跡の例にもれず、本遺跡においても活発な河川の活動によって水成堆積物が頻繁に供給され、多様な地層が累重された結果として遺跡が形成されている。これらの堆積地層は、それぞれの各時代における微地形を形成するものとなっており、遺跡内における地形環境と人間活動の変遷を捉えていくためには、遺跡の形成過程を示すこれらの地層の広がりや変化を空間的に追究し、層準の帰属時期を把握したうえで、微地形や堆積環境の異なりや変遷を明らかにしつつ、標準的な層序の確立を行うことが必要不可欠である。

以上の観点から、調査にあたっては基本となる地層観察用のトレンチ及びアゼを調査区の北・西壁沿いに設置し、これに加えて北・西壁のみでは把握しきれない地層の堆積状況を記録するため、部分的に調査区ほぼ中央に位置するX=56,080ラインに中央東西トレンチを設けた他、南・東側の壁面にもアゼとトレンチを設け、地層の観察と遺構面の把握に努めた(第9図右)。

層名については第3章に記したとおり、調査時の呼称を用いて記述を進める。本調査区では、機械掘削の対象とした近代以降の表土を0層とし、以下銅矢板の支持に耐え得る掘削限界深度まで1～9層の基本層序に大別してこれを認識した(第10図～第12図)。

また、これらの層準については、古土壌と母材の関係に注目して観察を行うことで遺構面を把握し、調査を進めた。以下では、本調査区における地層の層相・年代観と遺構面の認識を中心に、大別層準ごとに上位の層準から順に記述を進めていくこととする。

0層 現代の耕作土層である。いわゆる表土であり、下に述べる1層と同じく機械掘削の対象とした。層厚は0.3m前後を測る。

1層 現代の耕作土層である。やや暗色味の強い1-1a層と、暗色味の弱くなる1-2a・1-3a層の3層に細分が可能である。いずれも極粗砂～細礫を少量含み、淘汰はやや悪い。1-1a層は調査区のほぼ全域に及ぶが、後2者は部分的な分布に留まる。包含される遺物から、本層は昭和50年代の圃場整備によって形成されたものとみられる。本層までを機械掘削の対象とした。

2層 近世の耕作土層である。暗色味が強く、細礫までの粗粒の堆積物を多く含む淘汰の悪い2-1a層と、やや暗色味が弱く淘汰の良い2-2a層の2層に細分が可能である。本層は、1層の耕作の影響によって遺存状態が異なっており、調査区の北東部付近を中心として良好に残存していた。それぞれの層厚は、2-1a・2-2a層ともに約10cmを測る。調査では、本層の下面を1面として捉えた。

3層 中世の耕作土層である。灰白色で淘汰の良い3-1a層、粗砂～極粗砂を部分的に含む淘汰の悪い3-2a層、暗色味が強く淘汰の良い3-3a層に細分出来る。それぞれの層相はやや不明瞭で漸移的である。3-1a層は調査区のほぼ全域に遺存しており、3-2a層は調査区北西部を中心に、3-3a層は調査区北東部を中心にそれぞれ分布していた。層厚に関しては、3-1a層が10～20cm、3-2a層は約5cm、3-3a層は5～20cmをそれぞれ測る。

なお、西壁面の一部では、3-1a層を上限とした断層が確認出来る箇所があった他、遺構面にも噴砂状の構造や凹み状の落ち込みが認められる箇所が多く認められた。以上のことから、本層の形成時あるいはその直前に地震による地層の変動が起こったことが想定出来る。こうした地震動の影響によ

るとみられる噴砂は、本層の下面である2面より下位の遺構面において終始継続的に認められ、遺構の検出に困難を伴う要因の一つとなった。調査では、本層の下面を2面として捉えた。

4層 平安時代を通じて形成されたとみられる耕作土層(4-1a・4-2a層)及びその母材となる水成層(4-3b層)の3層からなる。これらの細分層準は、それぞれで層相が大きく異なるため、以下に詳細を述べておく。

4-1a層は、後述する15流路付近にのみ残存しており、層厚は平均5cmと薄い。直径1～3cm程度の細粒化した下位層起源の偽礫を多数含んでいるため、攪拌を受けた耕作土として捉えたが、後述する8溝を埋積させる氾濫堆積物であった可能性もある。出土遺物はほとんど認められなかったが、前後の地層の年代から11世紀代に形成されたものとみられる。

4-2a層は、調査区のほぼ全域に分布しており、層厚は5～10cmを測るが、厚い箇所では20cmを測る。本層は暗色味が強く、淘汰は全体的に悪い。包含される遺物はいずれも9世紀代の遺物が多く、平安時代前半期に形成されたものとみられる。

4-3b層は、灰白色でやや淘汰が悪く、葉理構造が極めて不明瞭である。風成起源などの堆積要因も考えたが、分析の結果、氾濫堆積物であることが明らかとなった。また、最上部がややくすんだような色調を示し、僅かに淘汰が悪くなる様子も見受けられたことから、部分的には古土壌が残存していた可能性がある。上位の4-2a層の影響によって遺存具合は地点ごとに異なっており、調査区西半で2～7cm、調査区東半で最大30cmをそれぞれ測る。包含される遺物が少なく詳細な帰属年代は明らかにし難いが、平安時代前期までに形成された層準とみられる。調査では、4-1a層を除去した下面を3面、4-2a層を除去した下面を4面として捉えた。

5層 奈良時代の耕作土層とみられる。灰色で淘汰の良い粘質シルトを基調とし、炭化物を少量含む。本層は15流路部を除く調査区全体に及ぶが、東西で層厚に違いがあり、東半は10cm程度と薄い一方で西半は20～25cmと厚い。西半部分では母材の下位層の違いを反映したためか、中～粗砂程度の粗粒の堆積物を僅かに含んでいる。

6層 古墳時代中期～奈良時代にかけての耕作土層(6-1a・6-2a層)と水成層(6-3b層)の3層からなる。

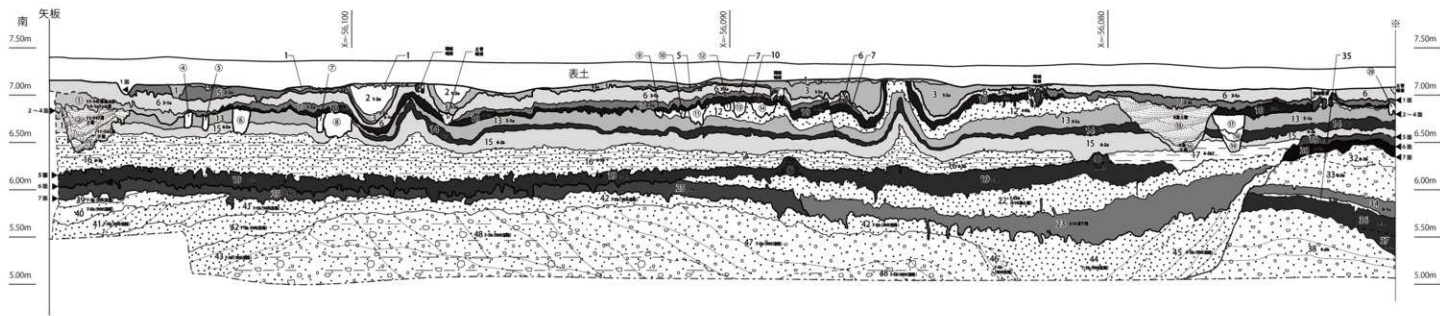
6-1a層は、淘汰のやや悪い暗灰黄色中砂混じり砂質シルトで、南西部では上位の5-1a層によって削平を受けたとみられ、調査区北西部を中心として分布する。層厚3～8cmを測る。

6-2a層は、淘汰の良い暗灰黄色砂質シルトを基調とする耕作土層であり、層厚10～20cmとやや厚い。流路部を除けば、調査区のほぼ全域に及んでいる。

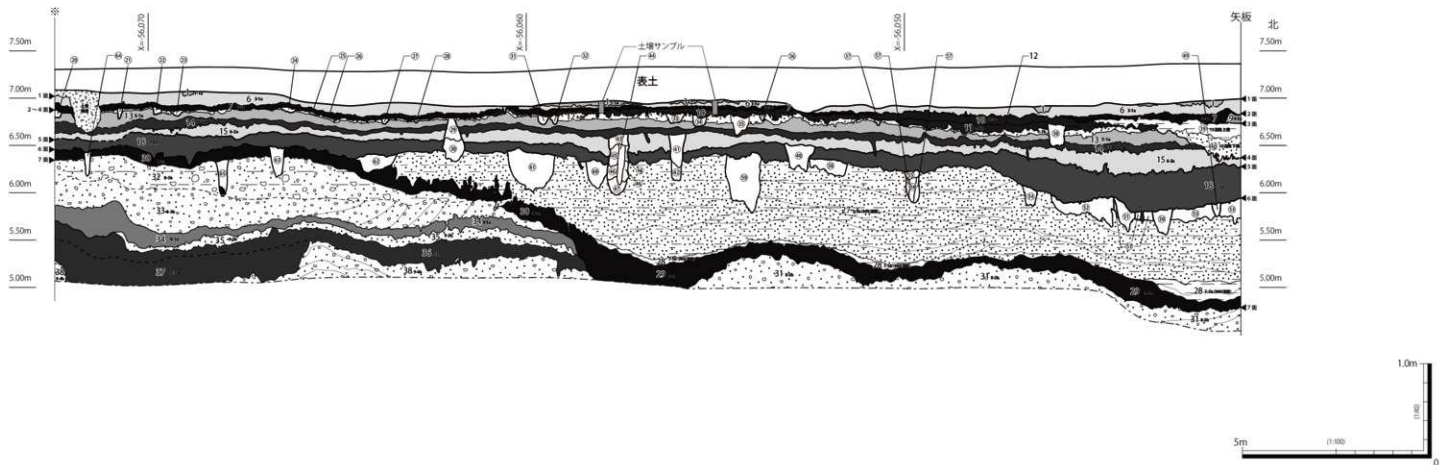
6-3b層は、調査区の南半部のみ分布する氾濫堆積物で最下部がシルト、上部は粗砂まで逆級化する。層中には水平葉理が顕著に認められる。層厚は平均20cm前後を測るが、もっとも厚い箇所では70cmにも及んでいる。本層の分布範囲下では、下位層の旧地表面が良好な状態で遺存していた。

調査では、本層を除去した面を5面として捉えている。結果として南半については、6-3b層が遺存することから7-2a層上面遺構を検出することとなり、一方の北半については、6-2a層下面の遺構を検出することとなった。

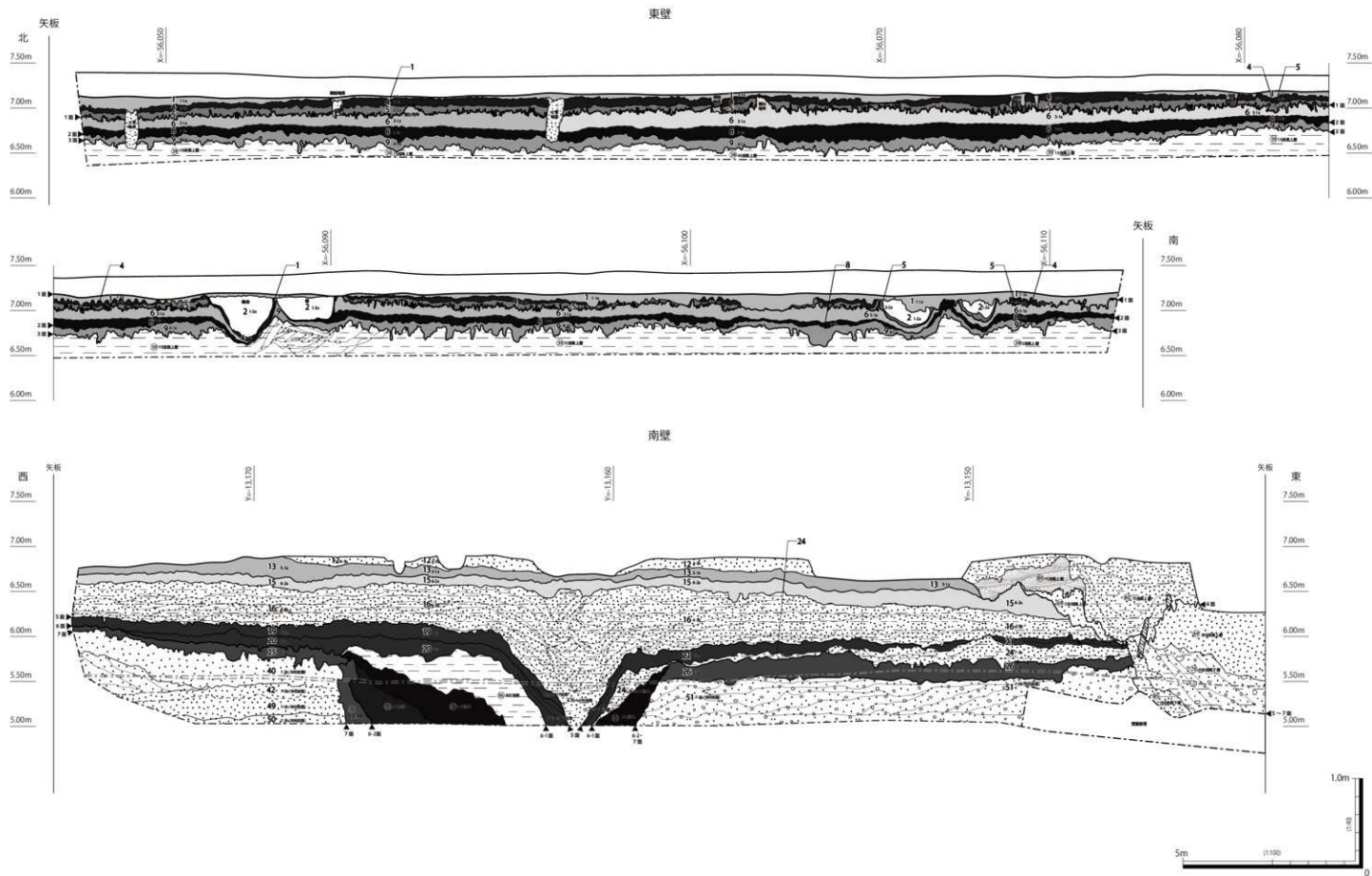
7層 古墳時代中期の土壤層(7-1a・7-4a層)及び耕作土(7-2a層)、その母材となる水成層(7-3b層)、古墳時代前期の水成層(7-5b層)からなる。全てのベースとなる7-5b層は、後述する900流路と同義のものであり、その氾濫堆積物によって、北が高く南に低い微地形が形成されている。こ



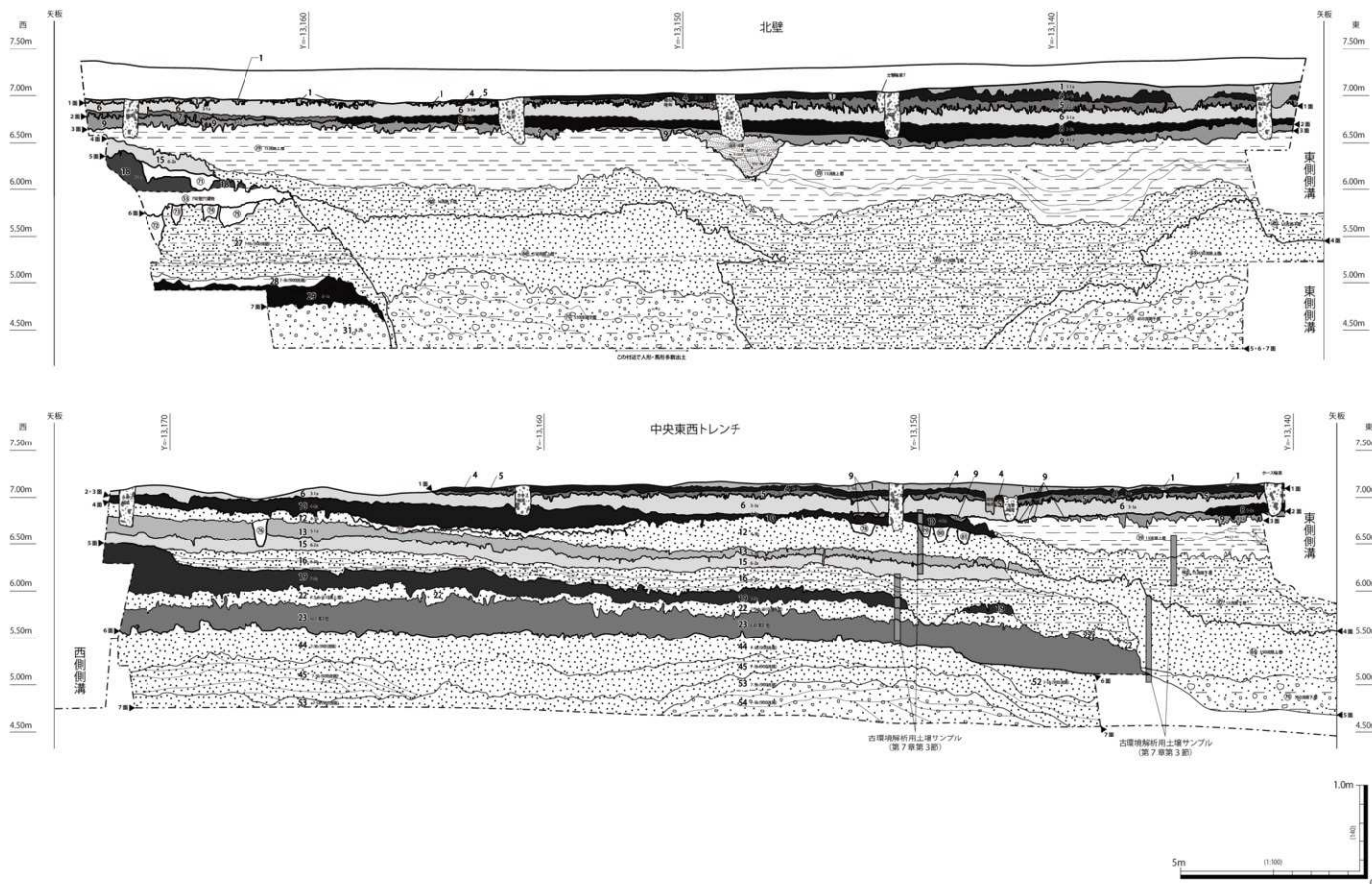
西壁



第10図 調査区西壁断面図



第11図 調査区東・南壁断面図



第12図 調査区北壁・中央東西トレンチ断面図

1-1a層	1	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト～粘細砂（海法やや悪い、粘細砂～細砂を少量含む）（現代耕作土層）
1-2a層	2	2.5Y5/2 暗灰黄色 粘細砂～細砂（粘細砂～細砂を少量含む）（現代耕作土層）
1-3a層	3	7.0Y3/1 灰白色 砂質シルト（海法やや悪い、粘細砂～粘細砂を少量含む）（現代耕作土層）
1-1a層	4	10Y3/2 黄褐色 粘細砂状粘質シルト（海法悪い、細砂～中砂を多く含む、炭化物粒をやや多く含む）（近世耕作土層）
2-2a層	5	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト（海法やや悪い、粘細砂～細砂を少量含む、炭化物粒を多く含む、土層片を少量含む）（近世耕作土層）
3-1a層	6	2.5Y7/1 灰白色 粘細砂～粘細砂（海法悪い、中砂～粗砂を少量含む）（中世耕作土層）
2-2a層	7	2.5Y5/1 黄灰色 中砂状粘り粘質シルト（海法悪い、炭化物粒を多く含む）（中世耕作土層）
3-3a層	8	2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト（海法非常に悪い、2.5Y7/1灰白色の粘質粘質層が下層下中に間断的に混入、マンガンス水痕状を多く含む、灰質層、青白層を含む）（中世耕作土層）
4-1a層	9	2.5Y5/1 黄灰色 粘質粘り粘質シルト（海法悪い、粘り強さを受け、8割付近は中～粗砂を主体とする。それ以外には粘細砂～細砂を主体とする。φ3～5mmの4.2a層ブロックを多く含む。）（平安中期～中世耕作土層）
4-2a層	10	N5/1 灰白色 粘り粘り粘質シルト（海法やや悪い、炭化物粒をやや多く含む、マンガンに少く混入、φ10～10cmの瓦類、土師器を多く含む）（平安前期～中世耕作土層）
	11	2.5Y4/1 黄灰色 粘り粘り粘質シルト（海法やや悪い、4.3a層ブロックを少量含む、炭化物粒を微量含む）（平安前期～中世耕作土層）
4-3b層	12	2.5Y7/1 灰白色～灰黄色 粘り粘り粘質（海法やや悪い、生堆多くなる、中位～粗粒土の層の薄層を部分的に挟む。層下部には粘細砂～中砂を主体とする。）（平安前期水成層）
5-1a層	13	7.5Y6/1 灰白色 粘質シルト（海法良い、部分的に上位層の影響を受け中砂が混入、そのほか海法中～中粗粒状粘質シルトに側方変化）（奈良～平安前期耕作土層）
6-1a層	14	2.5Y4/2 暗灰黄色 中砂状粘り砂質シルト（海法やや悪い、しまりやや悪い、マンガンの沈着が多い、φ1～3mmの礫をやや多く含む、炭化物を微量含む。）（奈良～平安前期耕作土層）
6-2a層	15	2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質シルト（海法やや悪い、しまり良い、マンガンの沈着が多い、炭化物を微量含む）（古墳～奈良前期耕作土層）
	16	7.5Y5/1 灰白色 粘細砂（海法良い、しまりやや悪い、下部は粘質シルト～中砂まで正統化、上下は粘細砂～粘細砂まで炭化、並行ラミナ層）（古墳～奈良水成層）
6-3b層	17	5Y4/1 灰白色 粘質シルト（海法悪い、しまり良い、φ1～3mmの礫を少量含む、炭化物をやや多く含む、やや土壌化が進行）（古墳～奈良水成層）
	18	5Y5/1 灰白色 粘細砂～粘細砂（海法やや悪い、しまりやや悪い、マンガンの沈着が多い、炭化物を微量含む）（古墳～中世耕作土層）
7-2a層	19	5Y4/1 灰白色 粘り粘り粘質シルト（海法やや悪い、しまり良い、炭化物をやや多く含む、φ5～10mmの礫をやや多く含む）（古墳～中世耕作土層）
7-2a層	20	5Y5/1 灰白色 粘り粘り粘質シルト（海法やや悪い、しまりやや悪い、土層片を多く含む、土層片を多く含む）（古墳～中世耕作土層）
	21	2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト（海法良い、部分的に粘細砂～中砂のブロックを含む、植物遺体を多く含む）（古墳～中世耕作土層）
7-3a層	22	5Y4/1 灰白色 粘質シルト（海法悪い、部分的に中砂～粗砂のブロックを含む、植物遺体を多く含む、古墳前～中期の土層）を多く含む（φ10礫）（古墳時代中期）
6-10a層	23	5Y4/1 灰白色 中砂状粘り粘質シルト（海法やや悪い、しまりやや悪い、炭化物を微量含む、古墳時代前～中期の土層を極めて多く含む）（6-10a層）（古墳時代前期～中期）
7-3a層	24	5Y5/1 灰白色 粘細砂～粘細砂（海法良い、ラミナ層）（φ802流石）（古墳～中世水成層）
7-4a層	25	5Y5/1 灰白色 中位～粗粒状粘り粘質シルト（海法良い、しまり悪い）（古墳～中世耕作土層）
	26	10Y3/1 オリーブ～暗褐色 粘細砂（海法悪い、しまり悪い、遊離鉄、下部中心に粘質シルト～中砂層）（古墳～中世耕作土層）
7-5a層	27	10B2/1 明褐色 粘り粘り粘質シルト（海法悪い、しまり良い、下部は砂質シルト～中砂まで正統化、上半は粘細砂～砂質シルトまで炭化、平行ラミナ有り、生堆化多き有り）（古墳前期～中世耕作土層）
	28	10Y5/1 灰白色 粘り粘り粘質シルト（海法やや悪い、しまり悪い、植物遺体ラミナ層）（古墳前期～中世水成層）
8-1a層	29	N5/1 灰白色 中砂状粘り粘質シルト（海法やや悪い、しまり良い、炭化物を少量含む）（奈良～古墳前期耕作土層）
	30	10Y2/1 暗赤～暗褐色 粘り粘り粘質シルト（海法悪い、しまり良い、φ5～5mmの礫を多く含む、並行中～粗粒土、粘細砂状粘り粘り粘質シルトに側方変化）（奈良～古墳前期耕作土層）
8-2a層	31	2.5Y8/1 灰白色 粘細砂～粘細砂（海法良い、しまり良い、平行ラミナ層）（奈良～後期以前水成層）
	32	2.5Y6/2 灰黄色 粘り粘り粘質シルト（海法悪い、しまり良い、φ3～5mmの礫をやや多く含む）（奈良～後期以前水成層）
9-1a層	33	2.5Y7/2 灰黄色 粘り粘り粘質シルト（海法悪い、しまり悪い、下部中心に粘質シルトを含む）（奈良～後期以前水成層）
	34	N6/1 灰白色 中砂状粘り粘質シルト（海法やや悪い、しまり良い、炭化物を少量含む）（奈良～後期以前土層層）
9-2a層	35	2.5Y6/2 灰黄色 中砂（海法良い、しまり良い、炭化物を少量含む）（奈良～後期以前水成層）
9-3a層	36	N5/1 灰白色 中砂状粘り粘質シルト（海法やや悪い、しまり良い、炭化物をやや多く含む、奈良時代前～後期の土層片を含む）（奈良～後期以前土層層）
9-4a層	37	5B4/1 青灰色 中砂状粘り粘質シルト（炭化物を少量含む、土層片を少量含む）（奈良～後期以前土層層）
	38	5Y4/1 灰白色 粘り粘り粘質シルト（海法悪い、しまり悪い、平行ラミナ層）（奈良～後期以前水成層）
9-4a層	39	7.5Y5/1 灰白色 粘り粘り粘質シルト（海法悪い、しまり悪い、φ1～3mmの礫を少量含む）（φ900流石）（古墳前期水成層）
	40	5Y7/1 灰白色 粘細砂（海法悪い、しまり悪い、φ1～2mmの礫をやや多く含む）（φ900流石）（古墳前期水成層）
9-4a層	41	2.5Y6/2 暗灰黄色 粘り粘り粘質シルト（海法やや悪い、ラミナ不明）（φ900流石）（古墳前期水成層）
	42	N6/1 灰白色 粘り粘り粘質シルト（海法やや悪い、細砂を微量含む）（φ900流石）（古墳前期水成層）
9-4a層	43	10Y5/1 灰白色 中砂（海法良い、ラミナ不明）（φ900流石）（古墳前期水成層）
	44	10Y5/1 灰白色 中砂状粘り粘質シルト（海法良い、しまり良い、生堆を多く含む、φ5mmの礫を多く含む、ラミナ不明）（φ900流石）（古墳前期水成層）
9-4a層	45	5Y6/2 灰白色 中砂～粘り粘質（側方）φ1～3mmの礫を多く含む、ラミナ不明）（φ900流石）（古墳前期水成層）
	46	N7/1 灰白色 中砂（海法良い、平行ラミナ層）（φ900流石）（古墳前期水成層）
9-4a層	47	2.5Y5/1 オリーブ～暗褐色 粘り粘り粘質（炭化物を少量含む、平行ラミナ層）（φ900流石）（古墳前期水成層）
	48	5Y7/2 灰白色 粘細砂～中砂（海法悪い、しまり良い、プラチ～平行ラミナ層）（φ900流石）（古墳前期水成層）
9-4a層	49	5Y6/1 灰白色 中砂（海法やや悪い、上半中心に灰白色粘り粘質シルトを少量含む）（φ900流石）（古墳前期水成層）
	50	5C7/1 明オリーブ～灰白色 中砂（海法良い、しまり良い、平行ラミナ層）（φ900流石）（古墳前期水成層）
9-4a層	51	5Y7/1 灰白色 粘細砂～粘細砂（海法悪い、平行ラミナ層、正統化）（φ900流石）（古墳前期水成層）
	52	7.5Y4/1 灰白色 粘り粘り粘質シルト（海法やや悪い、しまり良い、植物遺体を多く含む、両側面には粘質シルトまで粘粒化、植物遺体ラミナ層）（φ900流石）（古墳前期水成層）
9-4a層	53	2.5Y8/1 灰白色 中砂～粘り粘質（植物遺体を少量含む、層上半は正統化、下半は遊離鉄、斜交ラミナ層、部分的に5Y5/1灰白色粘細砂に炭化）（φ900流石）（古墳前期水成層）
	54	5Y7/2 灰白色 粘細砂～中砂（斜交ラミナ層、下部中心に7.5Y4/1灰白色砂質シルトの薄層が挟む）（φ900流石）（古墳前期水成層）

【西壁遺構】

- ① 5Y4/2 灰白色 粘り粘り粘質シルト（海法悪い、細砂を少量含む）（6a層土）
- ② N5/1 灰白色 粘り粘り粘質シルト（海法悪い、細砂を少量含む、下部は2.5Y4/1灰白色粘質シルトまで正統化）（111・543層上層）
- ③ 7.5Y8/1 灰白色 中砂～粘り粘質（海法やや悪い、側方粘粒化）（111・543層下層）
- ④ 5Y4/1 灰白色 砂質シルト（海法良い、下層のバースブロック（φ3cm）を下部に含む）（4a遺構）
- ⑤ 5Y6/1 灰白色 粘細砂～粘り粘り粘質シルト（4a遺構）
- ⑥ 5Y4/1 灰白色 砂質シルト（海法良い、下層層7・3b）起層のバースブロック（φ3～5cm）を側方に多く含む）（4a遺構）
- ⑦ N4/1 灰白色 粘質シルト（下位層7・3b）起層のバースブロックを多く含む、斜交ラミナ層）（4a遺構）
- ⑧ 2.5Y5/1 黄灰色 粘り粘り粘質シルト（5・1a～6.2a層ブロックを多く含む、炭化物を多く含む）（4a遺構）
- ⑨ 5Y6/1 灰白色 砂質シルト（17耕作遺構）
- ⑩ 5Y6/1 灰白色 砂質シルト（17耕作遺構）
- ⑪ 5Y6/1 灰白色 砂質シルト（4.3a層ブロック（φ5cm）を含む）（4a遺構）
- ⑫ 5Y6/1 灰白色 砂質シルト（17耕作遺構）
- ⑬ 5Y6/1 灰白色 砂質シルト（17耕作遺構）
- ⑭ 5Y6/1 灰白色 砂質シルト（4a遺構）
- ⑮ 5Y5/1 灰白色 粘り粘り粘質シルト（海法やや悪い、側方中心に7.5Y8/1灰白色の粘細砂を多く含む）（8a層上層）
- ⑯ 5Y7/1 灰白色 粘り粘り粘質シルト（海法悪い、側方中心に7.5Y4/1灰白色粘質シルトまで正統化）（8a層下層）
- ⑰ 2.5Y4/1 黄灰色 粘り粘り粘質シルト（5・1a～6.2a層ブロックを多く含む、炭化物を多く含む）（独立柱建物20）
- ⑱ 2.5Y5/1 黄灰色 中砂状粘り粘質シルト（5・1a～6.2a層ブロックを多く含む、炭化物を少量含む）（独立柱建物20）
- ⑲ 5Y4/1 灰白色 粘り粘り粘質シルト（5・1a～6.2a層ブロックを多く含む、炭化物を少量含む）（独立柱建物20）
- ⑳ N4/1 灰白色 粘質シルト（下位層7・3b）起層のバースブロックを多く含む、炭化物を多く含む）（16耕作遺構）
- ㉑ N4/1 灰白色 粘質シルト（下位層7・5b）起層のバースブロックを多く含む、炭化物を多く含む）（16耕作遺構）
- ㉒ N4/1 灰白色 粘質シルト（下位層7・5b）起層のバースブロックを多く含む、炭化物を多く含む）（16耕作遺構）
- ㉓ N4/1 灰白色 粘質シルト（下位層7・5b）起層のバースブロックを多く含む、炭化物を多く含む）（16耕作遺構）
- ㉔ 5Y6/1 灰白色 砂質シルト（4.3a層ブロック（φ5cm）を含む）（16耕作遺構）
- ㉕ 5Y6/1 灰白色 砂質シルト（4.3a層ブロック（φ5cm）を含む）（16耕作遺構）
- ㉖ 5Y6/1 灰白色 砂質シルト（4.3a層ブロック（φ5cm）を含む、炭化物を少量含む）（16耕作遺構）

第10図～第12図掲載壁面及び中央東西トレンチの断面土層層記(1)

第4章 1-1区の調査成果

- ㊦ SY6/1 灰色 砂質シルト (4.3m層ブロック(φ5m)を含む) (16耕作遺跡)
- ㊧ SY1/1 灰色 砂質シルト (4.3m層ブロック(φ5m)を含む) (16耕作遺跡)
- ㊨ SY3/1 灰色 極細砂 (海法悪い、細礫を多く含む、7-1a-5b層ブロック(φ3-5m)(SY7/2)灰色細砂を多く含む) (掘立柱建物5)
- ㊩ SY4/1 灰色 粘質シルト (中～粗砂を多く含む、海法悪い、掘方→下中心に7.5b起源のベースブロック(φ3-5m)(10Y7/1)灰色細砂を多く含む) (掘立柱建物5)
- ㊪ SY6/1 灰色 砂質シルト (4.3m層ブロック(φ5m)を含む、灰化物を少量含む) (16耕作遺跡)
- ㊫ SY6/1 灰色 砂質シルト (4.3m層ブロック(φ5m)を含む) (16耕作遺跡)
- ㊬ SY6/1 灰色 砂質シルト (4.3m層ブロック(φ5m)を含む) (4面遺構)
- ㊭ SY6/1 灰色 砂質シルト (4.3m層ブロック(φ5m)を含む) (4面遺構)
- ㊮ SY6/1 灰色 砂質シルト (4.3m層ブロック(φ5m)を含む、灰化物を少量含む) (4面遺構)
- ㊯ SY6/1 灰色 砂質シルト (4.3m層ブロック(φ5m)を含む) (16耕作遺跡)
- ㊰ SY6/1 灰色 砂質シルト (4.3m層ブロック(φ5m)を含む) (16耕作遺跡)
- ㊱ SY6/1 灰色 砂質シルト (4面遺構)
- ㊲ 2.5GY/1 オリーブ灰色-2.5GY/5/1オリーブ灰色 粘質シルト (海法良い、しまりや悪い、植物遺体やミナ爾層、部分的に細砂まで粘化)
 - ㊳ 下部中心にφ20m以上の自然木を多く含む) (15路路 上層)
- ㊳ 7.5Y/1 灰色 細砂質シルト～極細砂 (海法良い、しまりや悪い、底泥化、最上層にSGY7/1明ナリーブ灰色極細砂の薄層を含む、上層は細砂を多く含む、下部はSY3/1オリーブ灰色粘質シルトまで粘化、植物遺体やミナ爾層、溝中～人形を含む、9-10世紀の瓦器を含む、自然木を含む) (15路路下層)
- ㊴ 2.5Y/1 黄灰色 中砂質じり粘質シルト (6.2a-7.5b層ブロックを多く含む、灰化物を多く含む) (5-6面遺構)
- ㊵ 2.5Y/1 黄灰色 極細砂 (7.5b層ブロックを多く含む、灰化物を少量含む) (5-6面遺構)
- ㊶ 2.5Y/1 黄灰色 中砂質じり粘質シルト (6.2a-7.5b層ブロックを多く含む、灰化物を多く含む) (5-6面遺構)
- ㊷ 7.5Y/1 灰色 極細砂質じり粘質シルト (7.5b層ブロックを多く含む、灰化物を多く含む) (5-6面遺構)
- ㊸ 2.5Y/1 黄灰色 極細砂 (7.5b層ブロックを多く含む、灰化物を少量含む) (5-6面遺構)
- ㊹ 2.5Y/1 黄灰色 中砂質じり粘質シルト (7.5b層ブロックを多く含む、灰化物を多く含む) (5-6面遺構)
- ㊺ 2.5Y/1 黄灰色 細砂質じり粘質シルト (灰化物をやや多く含む) (6面遺構)
- ㊻ 2.5Y/1 黄灰色 細砂質じり粘質シルト (灰化物をやや多く含む) (6面遺構)
- ㊼ 7.5Y/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (7.5b層ブロックを少量含む、灰化物を多く含む) (5-6面遺構)
- ㊽ 2.5Y/1 黄灰色 極細砂 (7.5b層ブロックを多く含む、灰化物を少量含む) (6面遺構)
- ㊾ 10Y5/1 灰色 極細砂質じり粘質シルト (7.1a層ブロックを多く含む、灰化物を多く含む) (5面遺構)
- ㊿ SBG5/1 青灰色 細砂質じり粘質シルト (灰化物をやや多く含む) (6面遺構)
- ① SBG5/1 青灰色 細砂質じり粘質シルト (灰化物をやや多く含む) (6面遺構)
- ② NS/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (7.5b層ブロックを多く含む、灰化物を多く含む) (6面遺構)
- ③ SBG5/1 青灰色 細砂質じり粘質シルト (灰化物をやや多く含む) (792貯蔵建物)
- ④ 10Y5/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (海法やや悪い、しまり良い、灰化物を多く含む、7.5b層ブロックを下位に含む) (792貯蔵建物)
- ⑤ SBG5/1 青灰色 細砂質じり粘質シルト (灰化物をやや多く含む) (6面遺構)
- ⑥ 10Y5/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (7.5b層ブロックを少量含む) (6面遺構)
- ⑦ 7.5Y/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (7.5b層ブロックを多く含む) (6面遺構)
- ⑧ NS/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (7.5b層ブロックを多く含む) (6面遺構)
- ⑨ SBG5/1 青灰色 細砂質じり粘質シルト (灰化物をやや多く含む) (6面遺構)
- ⑩ NS/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (7.5b層ブロックを多く含む、灰化物を多く含む) (6面遺構)
- ⑪ SBG5/1 青灰色 細砂質じり粘質シルト (灰化物をやや多く含む) (6面遺構)
- ⑫ NS/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (7.5b層ブロックを多く含む、灰化物を多く含む) (6面遺構)
- ⑬ SBG5/1 青灰色 細砂質じり粘質シルト (灰化物をやや多く含む) (6面遺構)
- ⑭ 7.5Y/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (8.3b層ブロックを多く含む、φ2-3cmの礫をやや多く含む) (6面遺構)
- ⑮ 7.5Y/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (8.3b層ブロックを多く含む、φ2-3cmの礫をやや多く含む) (7面遺構)
- ⑯ 7.5Y/1 灰色 極細砂質じり粘質シルト (7.5b層ブロックを多く含む、φ2-3cmの礫をやや多く含む) (7面遺構)
- ⑰ NS/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (5面時貯)
- ⑱ NS/1 灰色 中砂質じり粘質シルト (5面時貯)

[北壁遺構]

- ㊦ SY3/2 オリーブ灰色 極細砂 (海法悪い、上方粘化、下は細砂と主体の斜行ミナ爾層、最下部中心に植物遺体、土器片、細礫を多く含む) (8耕作土)
- ㊧ SY5/1 灰色 細砂 (海法悪い、しまり悪い、植物遺体を含む、上部中心に部分的に植物遺体やミナ爾層、7-9世紀の須石、土器片を含む) (550路路 上層)
- ㊨ 2.5Y/1 明ナリーブ灰色 中砂～粗砂 (海法良い、しまり良い、植物遺体を多く含む、最下部は砂質シルト～極細砂、下部は細砂で粘化、斜行ミナ爾層、東方方向の中心に粗砂中心の埋蔵物、付近より人形・馬形・溝中が多量に出土) (550路路下層)
- ㊩ NS/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (灰化物を多く含む、海法やや悪い、しまり良い、土器片を多く含む) (792貯蔵建物)
- ㊪ 10Y7/1 灰白色 中砂 (海法悪い、自然木を含む) (アブロックを多く含む) (6面遺構)
- ㊫ 2.5GY/1 明ナリーブ灰色 中砂質じり粘質シルト (海法やや悪い、灰化物を多く含む、NS/灰色砂質シルトのアブロックを側方に多く含む) (6面遺構)
- ㊬ 2.5Y/1 明ナリーブ灰色 中砂質じり粘質シルト (海法やや悪い、灰化物を多く含む、NS/灰色砂質シルトのアブロックを側方に多く含む) (6面遺構)
- ㊭ 2.5GY/1 明ナリーブ灰色 中砂質じり粘質シルト (海法やや悪い、灰化物を多く含む、NS/灰色砂質シルトのアブロックを側方に多く含む) (6面遺構)

[中央東西トレンチ遺構]

- ㊦ SY6/1 灰色 中砂質じり粘質シルト (海法悪い、起源不明の灰白色中砂のアブロックを多く含む) (5面遺構)
- ㊧ NS/1 灰色 中砂質じり粘質シルト (海法悪い、灰化物を少量含む、4.3層ブロック(φ3-5m)を多く含む) (16耕作遺跡)
- ㊨ SY3/1 灰色 中砂質じり粘質シルト (海法やや悪い、下部中心に4.3層ブロック土(φ2-3m)を多く含む、灰化物を少量含む) (16耕作遺跡)
- ㊩ SY3/1 灰色 中砂質じり粘質シルト (海法やや悪い、下部中心に4.3層ブロック土(φ2-3m)を多く含む、灰化物を少量含む) (16耕作遺跡)
- ㊪ SY3/1 灰色 中砂質じり粘質シルト (海法やや悪い、下部中心に4.3層ブロック土(φ2-3m)を多く含む、灰化物を少量含む) (16耕作遺跡)
- ㊫ SY3/1 灰色 中砂質じり粘質シルト (海法やや悪い、下部中心に4.3層ブロック土(φ2-3m)を多く含む、灰化物を少量含む) (16耕作遺跡)
- ㊬ 7.5Y/6/1 灰色 中砂質じり粘質シルト (海法やや悪い) (15路路下層)

[南壁遺構]

- ㊦ 10Y5/1 灰色 細砂質じり粘質シルト (海法悪い、中心は2.5Y/1灰白色細砂～粗砂主体、上位は2.5Y/4黄灰色細砂質じり粘質シルト、中心を中として加工土、粗朶状の柱、木多数、斜行ミナ爾層) (15路路 上層)
- ㊧ 2.5GY/1 オリーブ灰色 中砂質じり粘質シルト (海法悪い、上部は斜行ミナ爾層、下部はしまり良い(埋) (15路路 下層)(18耕作)
- ㊨ 3G5/1 オリーブ灰色 中砂質じり粘質シルト (海法やや悪い、下層は10Y6/1灰白色中砂～粗砂を多く含む) (550路路下層)
- ㊩ 7.5Y/6/1 灰色 粘質シルト (海法悪い、植物遺体を多く含む) (802路路)
- ㊪ 2.5Y/3 黄灰色 細砂質じり粘質シルト (海法やや悪い、しまりやや良い) (802路路)
- ㊫ SY7/1 灰白色 中砂～粗砂 (海法良い、しまり良い、ラミナや不明) (802路路)
- ㊬ SY4/1 灰色 中砂質じり粘質シルト (海法やや悪い、植物遺体を多く含む) (832路路)
- ㊭ SY3/1 オリーブ灰色 粘質シルト (海法悪い、植物遺体やミナ爾層) (802路路φ7.4m層)

第10図～第12図掲載壁面及び中央東西トレンチの断面土層記(2)

の微地形のうち、北西部に展開する微高地では、土壌層である7-1a層が分布する一方、南半部には、耕作土である7-2a層と母材の7-3b層、土壌層である7-4a層が分布している。なお、北半部と南半部の境界には、610溝とした大振りの遺構が存在するため地層が連続しておらず、北半部の7-1a層と南半部の7-2a層以下の層準との連続性は確認出来ていない。しかし、遺物や諸遺構の配

置から、微高地上に展開する7-1a層は、低地部に展開する7-2a～7-4a層が収斂された層準である可能性が高く、これらは、ほぼ同時期に形成されたものと考えた。

7-1a層は、淘汰の悪い灰色極細砂～細砂で炭化物を含む他、古墳時代前期～中期の土器を多数含んでいる。層厚は10～20cmを測る。

7-2a・7-4a層は、基本的に灰色の粗砂混じり粘質シルトを基調とするが、それぞれの上・下面で検出出来る599・802流路を境として層相を大きく違えている。具体的には、南東部では泥質に富む暗色味の強い沼沢性の堆積物が堆積し、南西部の一画では、攪拌を受ける耕作土層ないし離水環境にあったとみられる土壤層が分布している。いずれの層準も基本的に層厚12cm前後であるが、厚い箇所では20cmを測る。

7-3b層は、7-2a・7-4a層の間に部分的に遺存する灰色細砂を基調とする氾濫堆積物である。後節で述べるように、本層の一部は6面で検出した610溝の一部がこれに相当している。本層は、多くの場所では上位の7-2a層によって取り込まれており、全体として遺存状態は不良であった。層厚は、残りの良い箇所20cm前後を測る。

7-5b層は、灰色～明青灰色の細砂～極粗砂を基本とし、プラナー型(平板型)斜交葉理が顕著に認められる。調査区北西部に展開する微高地部の最高位地点を除けば、本層準は調査区のほぼ全域に及んでおり、西半付近では砂質シルト程度まで細粒化している。層中に含まれる遺物から、本層は古墳時代前期前葉～前期中葉の900流路を埋積する流路充填堆積物及び氾濫堆積物と考えられる。なお、北西部では層厚100cmを測るが、北東部及び南半部では層の途中で銅矢板の支持限界深度に達したため、層厚は不明である。

調査では、調査区北半については7-1a層の下面、調査区南半については7-2a層の下面を6面として捉えた。また、南半部のみに拡がる7-4a層の下面については、7面として捉えている。

8層 弥生時代終末期の土壤層(8-1a層)及び、その母材となる弥生後期以前の水成層(8-2b・8-3b層)からなり、7-5b層による浸食を免れた調査区北西部のみに分布する。

8-1a層は、淘汰の悪い黒色細礫混じり粗砂を基調とし、900流路に近づくにつれ灰色中砂混じり砂質シルトまで細粒化する層準で、層厚10～20cmを測る。8-2b・8-3b層は、淘汰の良い灰白～灰黄色細砂～中砂を基調とする逆級化層が基本であり、平行葉理が顕著に認められる他、部分的に植物遺体が認められる。層厚は、厚い箇所70cmを測る。

調査では、8-1a層の下面を8面として捉え、以後の層準では遺物・遺構が希薄であったことから、これを最終遺構面とした。

9層 弥生時代後期以前の土壤層とその母材からなる。土壤層である9-1a・9-3a層と水成層の9-2b・9-4b層の4層に細分が可能である。土壤層とみられる9-1a・9-3a層は、それぞれ炭化物を少量含む層厚15cm程度の淘汰のやや悪い層準であるが、いずれも顕著な遺構・遺物の存在は認められなかった。

第3節 検出した遺構

第1項 1面の遺構

近世の耕作土層とみられる2層を除去して検出される遺構面である(第13図)。結果として、本面では調査区全域に分布していた3-1a層が露出することとなった。なお、2層の遺存範囲は調査区の北東部を中心としていたため、西半及び南半については1層を除去した段階で本面を検出することとなった。遺構面は、南西から北東へと緩やかに傾斜しており、調査区南西部で7.05m前後、調査区北東部で6.85m前後を測る。なお、3-1a層上面からは古墳時代後期の装飾須恵器(子持壺)が出土した(Poll)。詳細は不明ながら、近隣の古墳に含まれていたものが客土等によってもたらされた可能性が高い。近世段階に大規模な造成が行われていた可能性を示唆しているものであろうか。

本面では、多数の耕作溝の他、土坑群や擬似畦畔を検出した。

(1)土坑群

調査区の西半部に集中しており、後述する南北方向の擬似畦畔付近に列を成すように検出された。いずれも1層を起源とする埋土で充填されており、近世～近代の遺構と考えられたため、詳細な記録は作成していない。多くの土坑は、平面隅丸方形のプランを示し、断面形状は直線的な台形を示すものが多い。埋土は、下位層起源のブロックを多数含んでおり、掘削後埋戻されたことが想定出来る。土坑の機能についての詳細は不明であるが、土取りないしは天地返し、あるいは肥溜めのような性格が考えられるかもしれない。

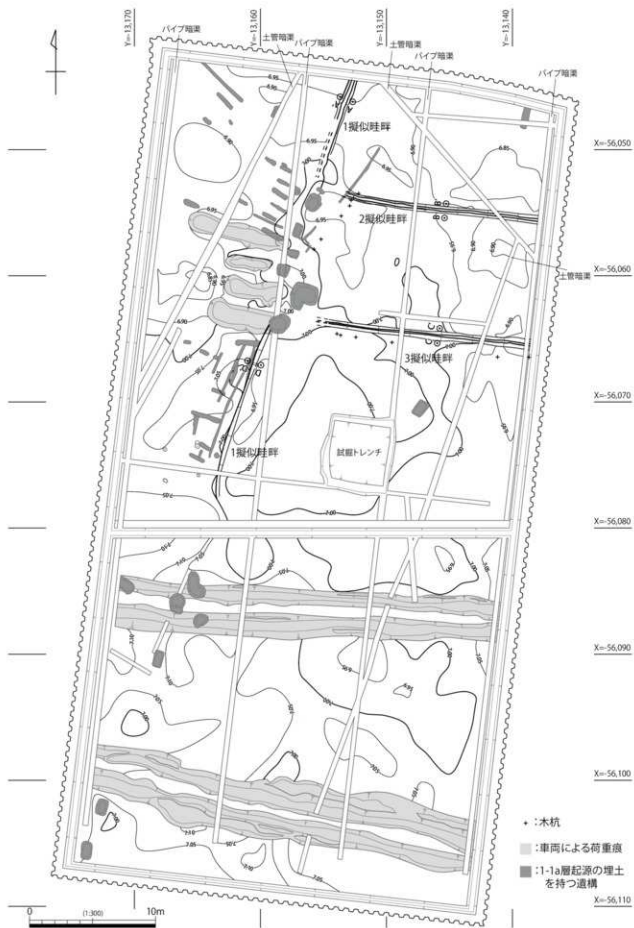
(2)耕作溝群

調査区北西部に集中する。いずれも1層を起源とする埋土で充填されており、近世～近代の耕作溝と考えられたため、断面等の記録は行っていない。

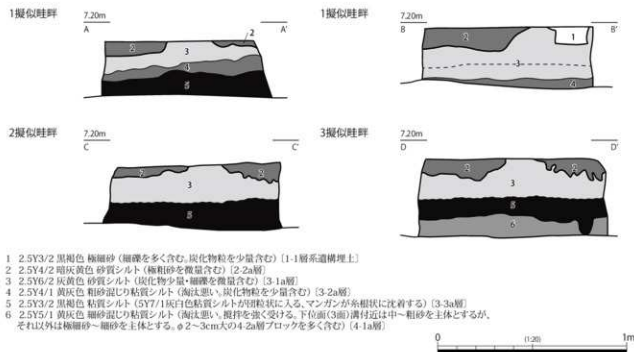
1～3擬似畦畔(第13図・第14図 写真図版5)

調査区の北半部を中心として南北方向のものを1条、東西方向のものを2条確認した。いずれも擬似畦畔Bである。中央東西トレンチから以南及び西半については擬似畦畔を検出出来ていないが、このことは南半部及び西半部の2層の遺存状態が悪かったことに起因するものと考えられる。なお、本擬似畦畔については、断面観察から2-2a層がこの擬似畦畔付近で摺り付くように存在することを確認している。このため、2-2a層段階の残りの悪い畦畔として検出すべきところであったと考えられる。しかし、2層については包含される遺物より近世の層準と考えられたため、これを一括して掘削し、2層下面を1面として調査を行った。したがって、耕作の影響を受けていない畦畔の部分が凸状のものとして現れている。擬似畦畔の高さは10cm、幅は0.4mを測り、擬似畦畔同士の幅は約10m前後を測る。近世段階の一筆分を反映しているものと考えられる。

なお、先に述べたように、南北方向の擬似畦畔より以西は、1層による削削によって2層の遺存状態が悪かった。昭和50年代には、周辺一帯で圃場整備が行われたことが分かっており、圃場整備時に旧来の耕地区画による段差が平坦化したために削削を受けたものと考えられる。



第13図 1面(2-2a層下面)



第14図 1～3擬似畦畔断面図

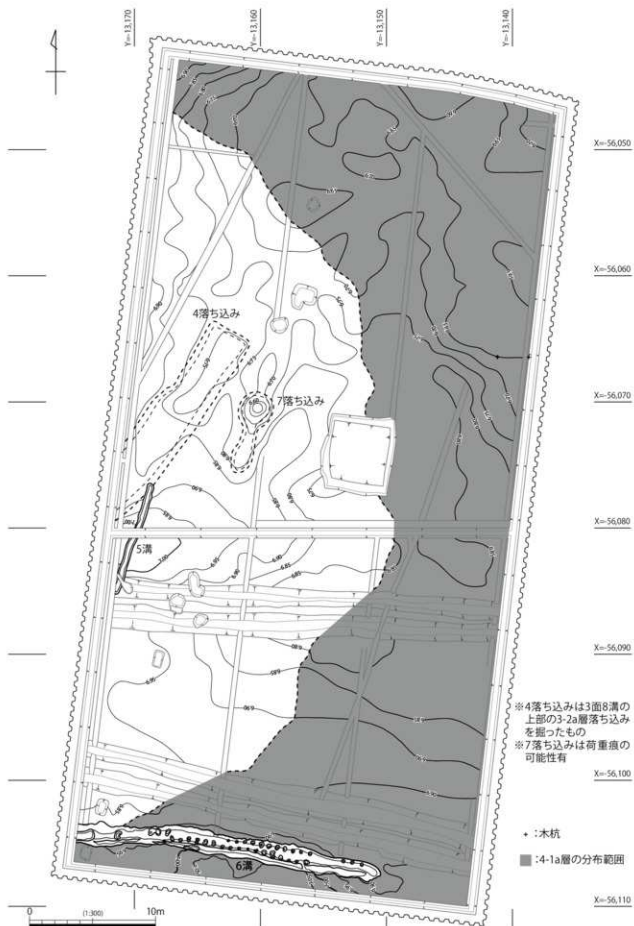
(3) 轍跡(第10図・第11図・第13図)

遺構ではないが述べておくべきものとして、調査区の南端部付近と中央部付近にそれぞれ2条ずつが並行して延びる轍跡がある。轍跡には、掘方というべきものは明確には確認出来ておらず、地層の断面観察からは、轍跡を中心として2層以下の各地層が均等に下方に凸状に変形する様子が認められた。加えて述べると、落ち込みの両端では、各地層がやや盛り上がり変形する他、轍と轍の間には地層が火炎状に変形する様子も確認出来た。こうした変形は部分的なものではなく、溝状に連続して延びていることから、極端な荷重が連続的に加えられたために形成されたものと考えることが出来る。さらに断面の観察時には、轍の変形をカットするように1-1a層が形成されること、轍内には2層との間のみ1-2a・1-3a層とした耕作土層が残存すること、さらに1-3a層と2-1a層との層界に食品のビニール包装が含まれていること等の諸点から、本轍跡については、昭和50年代に本地区一帯において行われたとされる圃場整備事業によるものと考えられる。このことから、このように連続して荷重変形が生じる要因としては、土砂運搬機などの重機による荷重が想定出来る。

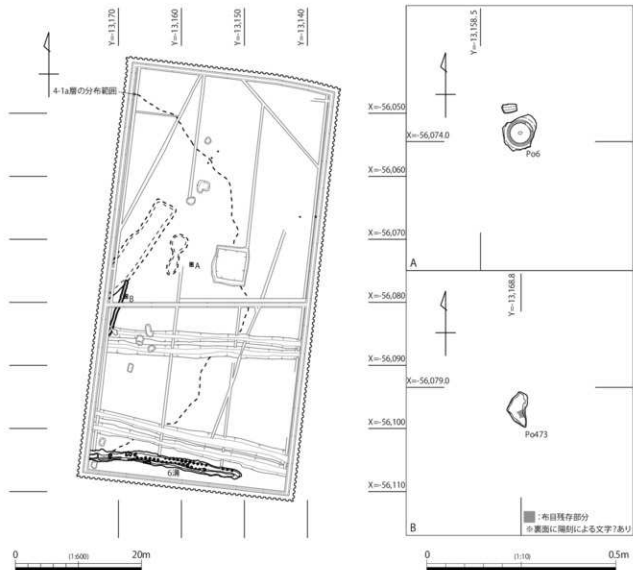
同様の地形の変形については、近年、良田中道遺跡や常松菅田遺跡といった複数の遺跡で検出されている。全てが本例のように重機によるものとは即断し得ないが、こうした大規模な変形構造の解釈の一例として考慮に含める必要があるだろう。なお、本轍跡による地層の変形は、古墳時代中期の土壌層である7-2a層まで達しており、遺構面及び遺構に多くの変形を及ぼしていた。

第2項 2面の遺構

中世の耕作土層とみられる3層を除去し、検出される遺構面である(第15図)。前節でも述べたように、3層は3-1a層～3-3a層までの3層に細分が可能であるが、それぞれの層界がやや不明瞭で漸移的であることや、断面観察からも遺構の存在が想定されなかったことから、一括して掘削を進めた。



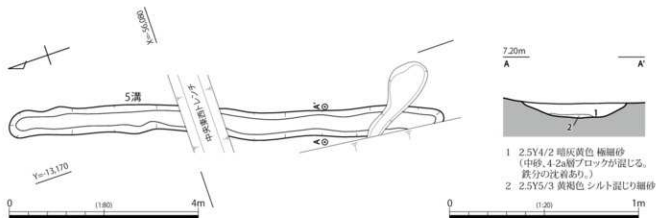
第15図 2面(3-3a層下面)



第16図 2面遺物出土状況

結果的に本面では、粗砂を中心として下位層の粘質シルトブロックが攪拌を受けたように見受けられる4-1a層が露出する箇所と、4-2a層が露出する箇所があり、前者は4面段階で掘削を行った15流路の範囲とほぼ合致している。遺構面は1面と同様に、南西から北東へと緩やかに傾斜しており、最高所となる南西部が6.95m前後、北東部で6.6m前後を測る。

本面では、中世の耕作土層の下面における擬似畦畔など、耕作痕跡の検出を期して調査を行った。しかしながら、結果的にそれらの耕作痕跡は検出には至らず、かろうじていくつかの足跡や溝2条、さらに落ち込み2基を確認したに過ぎない。なお、遺構面上において、9世紀の所産と考えられる緑釉陶器片(Po6)や文字瓦(Po473)が出土した(第16図)。いずれも、下位層に含まれていたものが耕作によって巻き上げられたものと考えられる。



第17図 5溝

(1) 溝

5溝 (第17図)

調査区中央部西端で検出した北東-南西方向の溝である。検出長19.2m、幅約55cm、検出面からの深さ15cmを測る直線的な溝で、下位層のブロックを含む暗灰黄色の極細砂を埋土とする。耕作に伴う溝とみられるが、単独で位置しているため詳細は不明である。

6溝 (第18図 写真図版6)

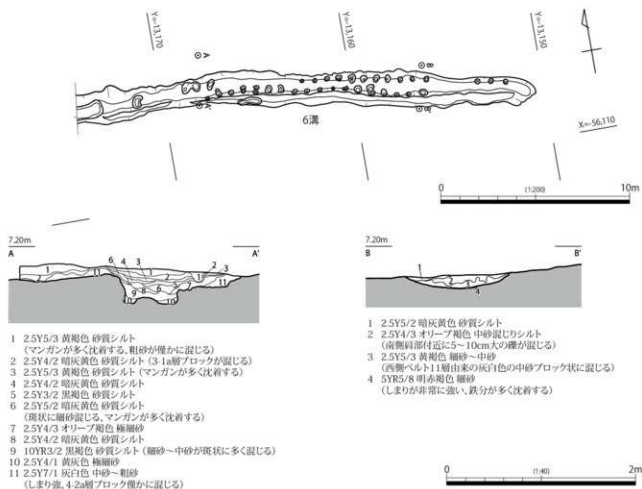
調査区の南端で検出した溝である。南端は4-1 a層の遺存が悪かったため、本溝については結果的に4-2 a層の上面で検出している。そのため、本来的には3面の遺構であった可能性もある。溝の西端が調査区外に延びており、全容は窺えないが、検出長24.5m、幅1.1~1.8mのやや大振りの溝で、検出面から溝底までの深さは約20cmを測る。

溝の底面付近は部分的に硬化していた。さらにこの硬化面上では、一定の間隔で列を成すように直径20~50cm程度の小穴を多数検出している。それぞれの小穴は、溝の上部に堆積していた粗砂~極粗砂程度の粗粒の堆積物がそのまま落ち込むような状況を示しており、杭の痕跡等も認められなかった。可能性の一つとしては、足跡等の荷重痕跡によって生じた凹みが埋積したものと考えられるが、確証はない。後述する3面の11・543溝や14集石遺構との間に有機的な関連があったと想定すると、坪埃の溝とその脇に延びていた道路状遺構という解釈も成り立ち得るが、調査時の誤認識により異なる遺構面で調査を実施したため、性格等は不明である。

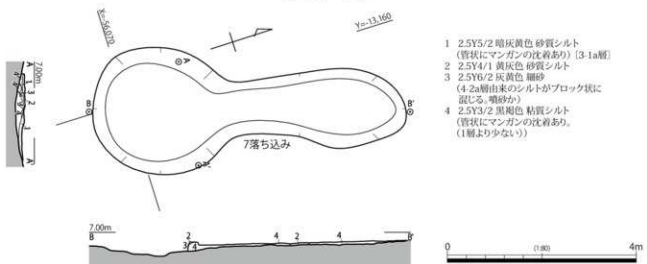
(2) 落ち込み

7落ち込み (第19図 写真図版6)

調査区の中央部西側に存在する落ち込みである。明確な遺構としては考えにくく、後述する3面の8溝の最上部に3層が僅かに落ち込んだものを落ち込みとして捉えたもの、さらに後の遺構面まで及んでいた地震動による凹みに3層が堆積していたものを誤認した可能性が高い。7落ち込みから遺物は出土していない。



第18図 6溝



第19図 7落ち込み

第3項 3面の遺構

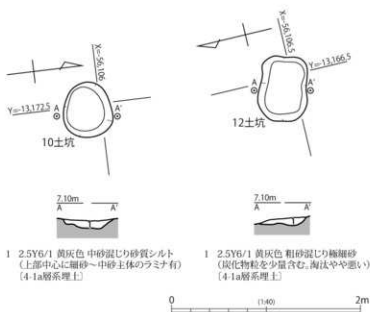
平安時代後期の耕作土層とみられる4-1a層を除去し、検出された遺構面である(第20図)。4面で検出した15流路の埋土を除けば、ほぼ全域に分布している4-2a層の上面に相当する。遺構面は2面までと同じく、大きくは南東から北西に向けて緩やかに傾斜しており、最高所となる南西部で標高約



第20図 3面(4-1a層下面)

6.9m、最も低い北東部で約6.6mを測る。

本面ではやや大振りな溝2条を含む溝6条、土坑2基、集石1基、足跡1カ所を検出した。



第21図 10土坑・12土坑

(1) 土坑

10土坑 (第21図)

調査区南西隅付近で検出した土坑である。平面形は楕円状を呈し、東西59cm、南北47cmを測る。埋土は黄灰色中砂混じり砂質シルトで、層中上部中心に細砂～中砂主体のラミナが見られる。層相からは、4-1a層系の埋土に相当しよう。遺物は出土していない。

- 1 2.5Y6/1 黄灰色 中砂混じり砂質シルト (上部中心に細砂～中砂主体のラミナ有) [4-1a層系埋土]
- 1 2.5Y6/1 黄灰色 粗砂混じり極細砂 (炭化物粒を少量含む、溝法やや悪い) [4-1a層系埋土]

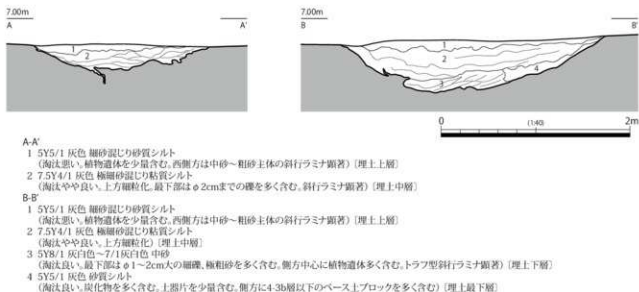
12土坑 (第21図)

調査区南西隅付近で検出した土坑である。平面形は隅丸方形形状を呈し、東西73cm、南北51cmを測る。埋土は黄灰色粗砂混じり極細砂で、炭化物粒を少量含む。層相からは、10土坑同様、4-1a層系の埋土に相当しよう。遺物は出土していない。

(2) 溝

8溝 (第22図・第23図 写真図版7・8)

調査区の西半中央部付近から北端部中央付近にかけて、全体の地形の微起伏を無視して南西-北東方向に直線的に延びる溝である。後述する4面の15流路の埋積が完了した後にこれを掘り込んでいる

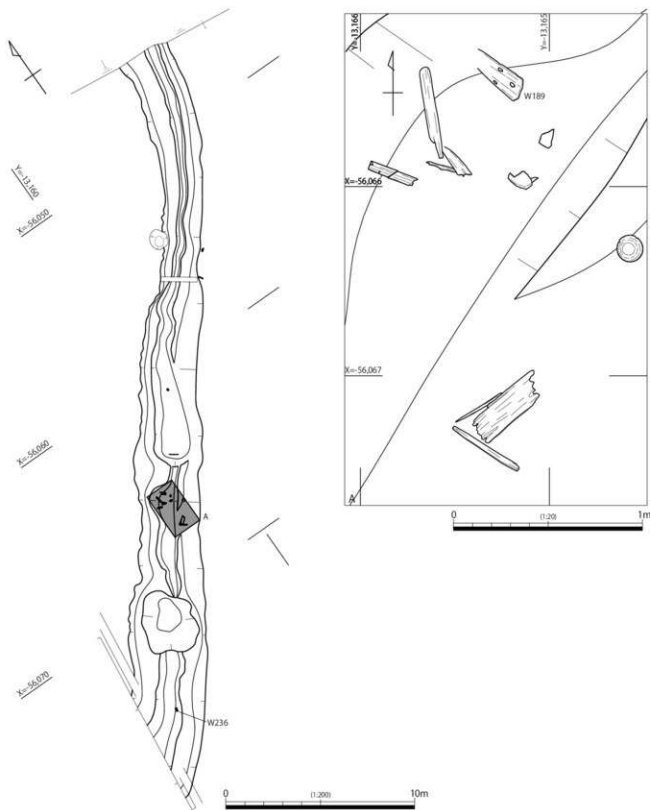


第22図 8溝断面図

- A-A'
- 1 5Y5/1 灰色 細砂混じり砂質シルト (溝法悪い、植物遺体を少量含む、西側方は中砂～粗砂主体の斜行ラミナ顕著) [埋土上層]
- 2 7.5Y4/1 灰色 極細砂混じり粘質シルト (溝法やや良い、上方細粒化、最下部はφ2cmまでの礫を多く含む、斜行ラミナ顕著) [埋土中層]
- B-B'
- 1 5Y5/1 灰色 細砂混じり砂質シルト (溝法悪い、植物遺体を少量含む、西側方は中砂～粗砂主体の斜行ラミナ顕著) [埋土上層]
- 2 7.5Y4/1 灰色 極細砂混じり粘質シルト (溝法やや良い、上方細粒化) [埋土中層]
- 3 5Y8/1 灰白色～7/1 灰白色 中砂 (溝法良い、最下部はφ1～2cm大の細礫、極細砂を多く含む、側方中心に植物遺体多く含む、トランプ型斜行ラミナ顕著) [埋土下層]
- 4 5Y5/1 灰色 砂質シルト (溝法良い、炭化物を多く含む、土器片を少量含む、側方に4-3b層以下のベース上ブロックを多く含む) [埋土最下層]

ことから、15流路よりも新しい遺構である。調査区の西側及び北側で調査区外に延びるため、溝の全容は窺えない。溝の規模は、検出長37.7m、幅1.8~4.0m、検出面から溝底までの深さ25~55cmをそれぞれ測る。

溝の埋土は上下2層に分けることが出来、上層は灰色シルトを基調とする細粒の堆積物で、部分的



第23図 8溝遺物出土状況

に中～粗砂を主体とする斜交葉理が顕著に認められる。一方の下層は、灰～灰白色の細礫～中砂までの堆積物を主体とする粗粒の堆積物で、上方細粒化しつつ埋積が進行したものと推定出来る。なお、検出面から溝底までの深さは部分的に異なっており、検出延長の南側で約1mと最も深く、北側で0.3mと低い。このうち、前者の深く掘り込まれている部分は、下層の粗粒の堆積物が厚く堆積しており、溝の下部が埋積していく過程で部分的な洗掘が生じた結果を反映した可能性がある。古流向についての情報を取得しているわけではないため、あくまで想定に過ぎないが、本溝は南西～北東方向に流れていたものと考えられる。

遺物は、下層を中心に溝の掘方に貼りつくようにして出土したものが多く、出土遺物には、10～11世紀後葉の土師器坏、9世紀後半の灰軸陶器がある他、墨書で顔表現を施した細身の人形(W1・2)も認められた。なお、溝の最上部付近からは、「承和昌寶」(承和2(835)年初鑄)(Br3)が出土した。

以上のように、本溝は11世紀後葉の遺物を含み、9世紀代の遺物を多量に含む15流路の充填堆積物に重複すること、地形の微起伏を無視して直線的に掘り込まれていることから、11世紀後葉に耕作地の形成等に伴って開削された水路のような役割をもっていた可能性が高い。水路であったとするならば、2点出土した人形の性格が課題となるであろうが、溝の埋没時に上流域から流されたものであると考えておきたい。

11溝・543溝(第20図 写真版9)

調査区の南端部で検出した溝である。本遺構群は、調査の進行によって解釈が変化したものであるため、調査時の経緯から記述を行うこととする。

11溝と543溝は、本来東西方向に延びる一連の溝であったとみられるが、調査開始時に掘削した南側側溝によって埋土の大部分を欠いてしまったため、実態の把握が困難となってしまった。かろうじて南側側溝沿いに確認出来た北側の掘方は部分的にしか残存しておらず、調査時には分割して認識し、個別の溝状遺構として調査を行った。南壁面の除去後に西壁に現れた断面から、本来は一連の溝であった可能性が浮上したため、現状確認出来ている北側の掘方のみを一連の溝として報告する。

さて、11溝・543溝については、西壁に現れた断面から窺われる溝の規模は幅1.5m以上、深さ20cm以上を測る。調査区の東側では、4面で掘削した15流路との重複関係が確認出来る状況にはなかったため15流路以東の状況は明らかでないが、検出総延長は27.1mを測る。溝の埋土は上下2層に分けられ、いずれもトラフ型斜交葉理が顕著な水成堆積物によって充填されている。

11溝・543溝及び集石の出土遺物は、上記のような経緯をもっているため、ほとんど認められない。南側側溝の出土遺物のうち、本来的には当該遺構に帰属すると想定出来る遺物として10～11世紀代の土師器があるため、8溝とほぼ同時期の溝と考えることも出来るが、詳細は明らかでない。

なお、調査区の南側には、現在の市道沿いに西～東方向に流下するコンクリート貼りの水路が接している。この溝は、圃場整備以前の米軍写真(昭和23年撮影)にも写っていることから、長期にわたって踏襲される基幹的な水路であったと考えられ、周辺一帯に形成されている条里を区画する坪境溝のような役割をもっていた可能性がある。あくまで推定の域を出ないが、この現行のコンクリート溝にほぼ接するように延びる本溝も、古代末～中世段階に同様の機能を有した溝の可能性もある。

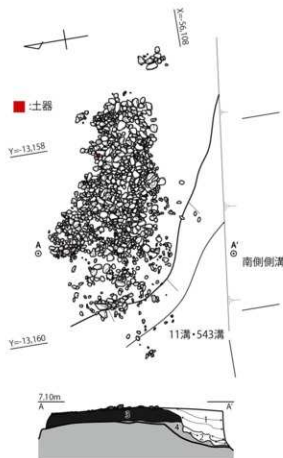
(3)集石

14集石(第24図 写真図版9)

14集石は、3層の掘削によって露出した、4-2a層上面に貼りついた礫の集中部を指す。周辺には4-1a層が遺存していなかったことから、2面段階からその存在は確認出来ていたが、11・543溝の存在から有機的な関係をもつものと想定されるため、ここで併せて報告する。

この集石は、南北0.7m、東西1.2mの範囲で、不整形な円形を示すように礫が配されたものの集合体である。礫の大きさは概ね3~5cm大を中心としており、砂岩質の亜角礫~円礫が大半を占めていた。第20図に示したように、14集石と11溝・543溝は近接しており、両者の間には有機的な関係が窺われる。

以上の状況から、14集石は、溝の護岸状施設の役割を有していた可能性がある。



- 1 5Y8/2 灰白色 極細砂~細砂(斜行リナ層有) [543溝上層]
- 2 N5/ 灰色 砂質シルト(細砂主体の斜行リナ層有、逆酸化) [543溝下層]
- 3 N5/ 灰色 砂質シルト [4-2a層]
- 4 7.5Y7/1 灰白色 粘質シルト [5-1a層]



第24図 14集石遺物出土状況

第4項 4面の遺構

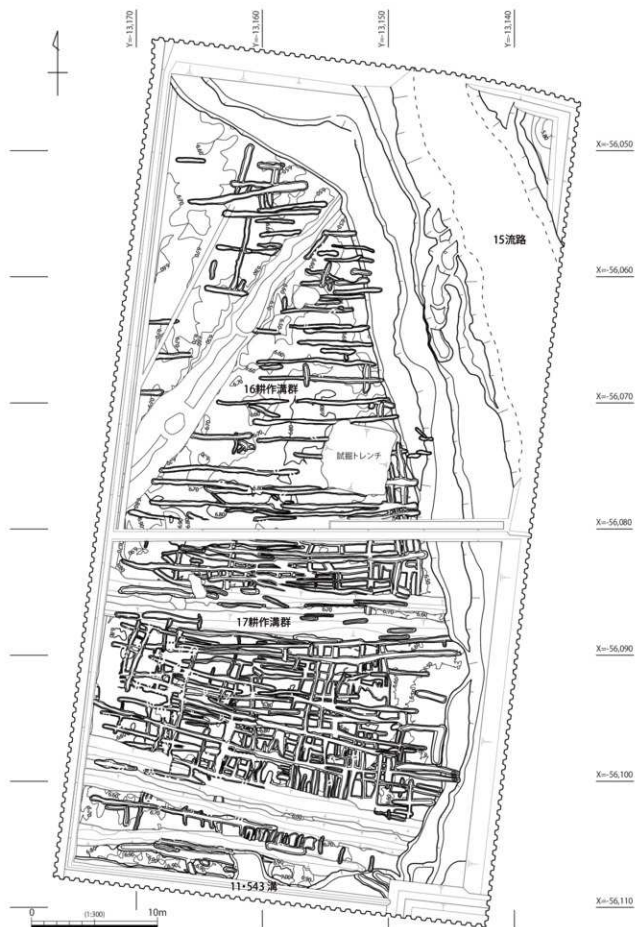
平安時代前期の耕作土層とみられる4-2a層を除去し、検出出来る遺構面である(第25図・第27図)。

遺構面は、南西~北東方向に緩やかに傾斜する地形を示し、最高所となる南西部で標高約6.9m、もっとも低い北西部で約6.5mを測る。

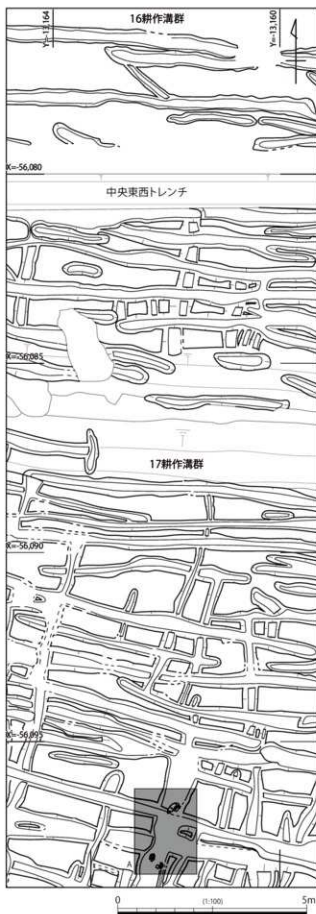
本面では、調査区西側において掘立柱建物28棟、柵列5、多数の柱穴・土坑などからなる居住域を検出するとともに、これら諸遺構に重複する耕作溝を西半部全面で同時に検出した。一方の調査区東側では、多量の祭祀遺物などを含む流路を1条検出している。以上が4面の概略であるが、本面に帰属する遺構の報告に移る前に、図上で行った整理の前提条件について2点述べておきたい。

まず、本面で検出した耕作溝群については、建物群と時期的に分離出来ることが調査時の見解より明らかとなっている。そこで、全体平面図上での煩雑さを回避することを目的として、これらについては便宜上4-1面(耕作溝群/第25図)、4-2面(建物群/第27図)として分離して掲げることとした。なお、ここに示した遺構面の等高線については、調査の進行上、まず耕作溝群を掘削した後に建物群の遺構を再度検出し直した経緯があるため、両者の間には若干の違いが生じている。そのため、ここではそれぞれの調査段階のものをを用いて掲載することとした。したがって、本面についてのより正確な等高線については、4-1面(第25図)段階の等高線となることを付記しておく。

また、調査区北西端部では4-2a層の影響を除去しきれずに遺構検出に臨んだ箇所があり、その範囲では部分的にしか建物を構成する柱穴を検出出来ていない。このため、一部の建物(掘立柱建物25



第25図 4-1面(4-2a層下面1)



～27)については、5面でようやく検出するに至ったが、埋土の識別から4面に帰属する可能性が高いと判断したものについては図上復元を行い、本面で併せて報告することとした。結果として増えた建物は、掘立柱建物25～28の4棟である。

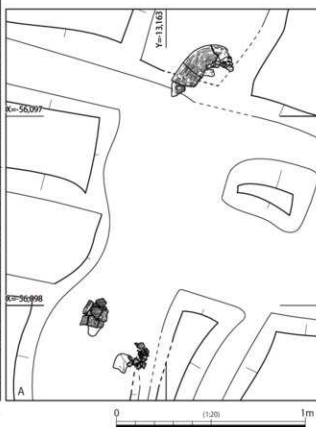
1 4-1面

(1) 耕作溝群

16耕作溝群・17耕作溝群

(第25図・第26図 写真図版10・11)

4-2a層の形成中に掘削されたとみられる耕作溝群である。遺構の粗密の違いから、便宜的に中央東西トレンチを境として北半部の疎らな一群を16耕作溝群、南半部の密な一群を17耕作溝群とし、調査を進めた。両溝群は、主に東西・南北の両方向の溝から構成されており、後述する15流路部分を除く調査区のほぼ全域に展開していた。いずれの溝も、4-2a層とほぼ同じ灰色シルト～極細砂を埋土としており、同一面で検出した諸遺構との



第26図 16耕作溝群・17耕作溝群遺物出土状況

重複関係については、建物群よりも新しく、15流路の最終埋没時よりも古いことが断面観察の結果から明らかである。溝の平均的な規模は、概ね幅30～50cm、検出面からの深さ5～15cmをそれぞれ測る。なお、これらの耕作溝は部分的にはあるが、後述する15流路の埋土を取り除いた地点でも検出出来ることを確認している。このことは、本遺構面の旧地表面が、本来的に15流路付近で緩やかに傾斜をもって落ち込んでいることの証左と言えるだろう。

北側の16耕作溝群は、N-88.0°-Wに軸を描えるほぼ東西方向の溝を主体とし、およそ1.5m前後の間隔で等間隔に配される。一方の南半部に展開する17耕作溝群は、16耕作溝同様の軸をもつ東西方向の溝に加え、N-74.5°-Wの北西-南東方向の異なる軸を有するものが多く認められる。調査当初は、こうした違いは耕作単位を反映したものと考えていたが、南半及び北半部で部分的に確認出来た溝の重複関係から、時期差によるものと判断した。重複関係からは、北西-南東方向の溝の多くが東西方向の溝に重複して掘削されていたことから、東西方向が古く、北西-南東方向の溝が新しい一群であると想定出来る。また、16・17耕作溝群の粗密の違いが生じた理由は明らかでないが、4面の地形が南から北に傾斜すること、4-2a層の遺存度合に関して、南半が悪く北半が良好であったことなどの諸点を考慮すると、北半部の北西-南東方向の溝の多くは、4-2a層中に収斂されたため、最下部を部分的に検出したに過ぎない可能性も考えられよう。

これらの耕作溝については、等間隔に配置されること等から畝の耕作に関係する機能を持っていた可能性が想定出来る。また、居住域を構成する柱穴などの諸遺構に重複することから、居住域の廃絶以後に周辺一帯が耕地化したことが窺われる。

耕作溝群からは、細片化した8～9世紀代の須恵器・土師器が多数出土した。部分的にまとまりが認められるものを第26図Aに掲げたが、耕作に伴う攪乱によって巻き上げられた可能性もある。これらは本来的に掘立柱建物群の造営に伴い混入したものであろう。本耕作溝群よりも新しい時期に掘削された3面の8溝の最終埋没時期が11世紀であることから、16・17耕作溝群の帰属時期は9世紀前半以降11世紀までの範囲で捉えられる。

2 4-2面(第27図)

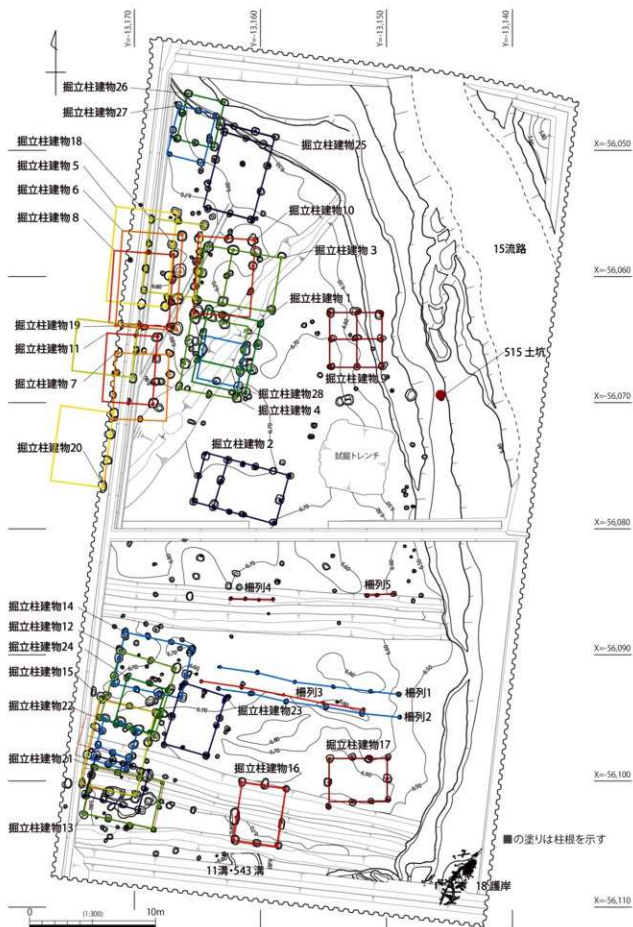
(1)掘立柱建物

掘立柱建物1(第28図 写真図版14)

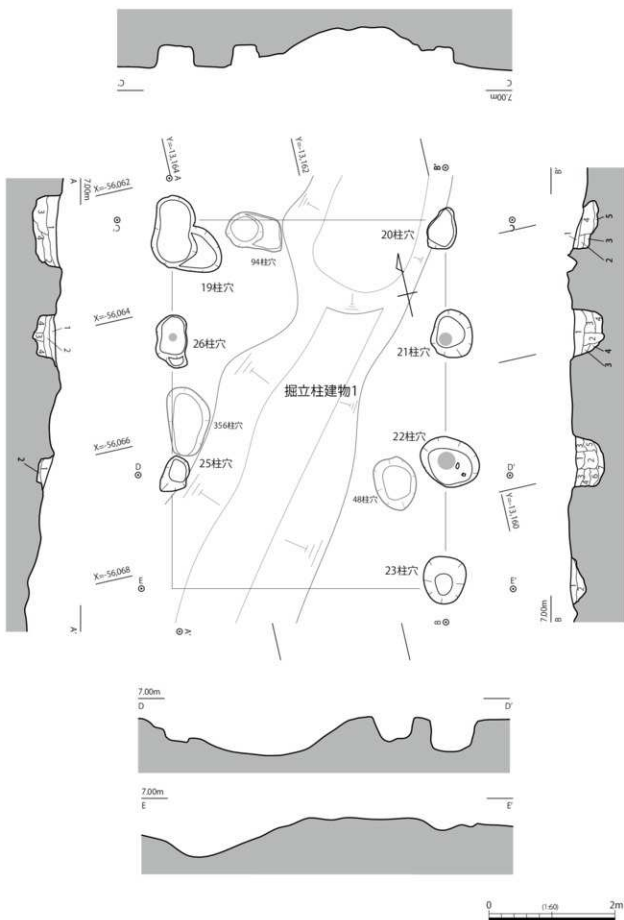
調査区中央部1B-7f・gに位置する南北方向の掘立柱建物である。桁行3間(5.6m)、梁行は後世の溝による攪乱のため削平されているが2間(4.3m)の側柱建物と考えられる。建物主軸はN-12.9°-E、身舎の面積は24.4㎡を測る。柱間寸法は、桁行方向では1.9mを基本とするが、西側25-26柱穴間で2.1mと広い箇所がある。梁行方向は、梁行の中間を攪乱溝が通っているため正確な数値は不明であるが、19-20柱穴間の距離が4.3mであるため、2.0～2.1m程度であったと推定される。

柱掘方は楕円形を呈するものが多く、それぞれ長径60～110cm、短径40～70cmを測る。検出面からの深さは20～40cmを測るが、40cm台のものが基本となる。柱掘方埋土は暗灰黄色～オリーブ黒色の砂質シルトを主体とし、下位層を起源とするブロックと炭化物を少量含むものが多い。また、21・22・26柱穴からは灰色の粘質シルトを埋土とする柱痕跡が確認され、平面規模は直径10～30cmを測る。

本建物は、掘立柱建物28と重複関係にある。柱穴の重複関係をみると、23柱穴は掘立柱建物28の370柱穴を切り込んでいることから、本建物は掘立柱建物28よりも新しいものである。



第27図 4-2面(4-2a層下面2)



第28図 掘立柱建物 1

[19柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/2 灰オリブ色 砂質シルト
(6.3b層ブロックを微量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリブ黒色 粘質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む、6.3b層ブロックを微量含む、炭化物を少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(層下中に6.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を少量含む)

[20柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y3/1 オリブ黒色 極細砂～中砂
(4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y3/1 オリブ黒色 砂質シルト
(6.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3b層ブロックをやや多く含む。)

[21柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリブ黒色 中砂混じり粘質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(7.5b層ブロックをやや多く含む、炭化物を少量含む)

[22柱穴]

- 2.5Y4/1 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリブ黒色 粘質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む、6.3b層ブロックを少量含む、炭化物を少量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂～中砂
(4.3b層ブロックをやや多く含む)
- 5Y3/2 オリブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(7.5b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y3/2 オリブ黒色 砂質シルト
(6.3b層ブロックを微量含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 細砂混じり粘質シルト
(6.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(下方に6.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)

[23柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む)
- 5Y3/2 オリブ黒色 極細砂～細砂
(6.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)

[25柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3b層ブロックを多く含む)

[26柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を少量含む)
- 5Y3/2 オリブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(7.5b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(7.5b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)

掘立柱建物1(第28図)の土層註記

21柱穴から須恵器環(Po35)、22柱穴からは底部ヘラ切りの土師器環(Po34)が出土している。これは8世紀末～9世紀前半代を示すことから、本建物は9世紀前半頃の建物であると考えられる。

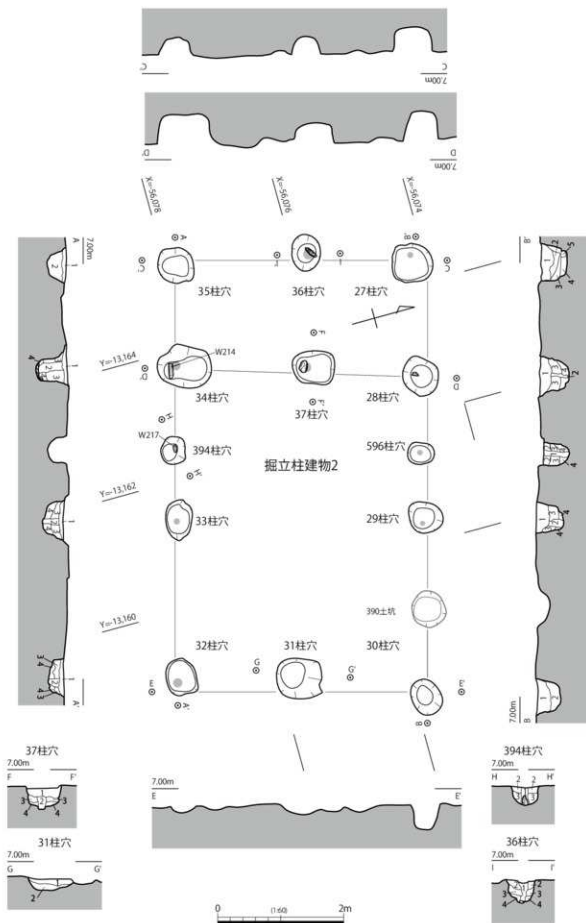
掘立柱建物2(第29図 写真図版15)

調査区中央東西トレンチ近くの1B-8f・gに位置する東西方向の掘立柱建物である。柱穴のうちいくつかは、16耕作溝群の埋土を除去して検出した。梁行2間(4.0m)、桁行3間(6.7m)の側柱建物であり、建物の主軸はN-74.6°-W、身舎の面積は26.6㎡を測る。柱間寸法は、梁行方向で1.7～2.1m、桁行方向で1.7～2.8mとばらつきが大きい。特に、29-30柱穴間と32-33柱穴間は幅が広がるが、これは建物の構造に起因する可能性がある。また37柱穴は、側柱列よりも内側にあることや、比較的浅い掘方であることから、東柱の可能性もある。さらに、394・596柱穴は平面規模がやや小さいため、側柱とは異なる補助的な柱穴であるかもしれない。

柱掘方は楕円形を示すものが多く、側柱は長径60～80cm、短径40～60cmを測る。柱穴の検出面からの深さは20～50cmであり、40cm台のものが主体となる。柱穴の掘方埋土は暗灰黄色～灰色の砂質シルトを主体とし、下位層起源のブロックや炭化物を多く含む。28・29・32・33・34・36・37・596柱穴からは、灰色の粘質シルトを埋土とする柱痕跡が確認され、直径10～15cmの平面規模を有している。

28・394柱穴には柱根が残存しているが、共に直径10cmとやや細身のものとなる。さらに、34・36柱穴には柱痕跡の直下に長辺25cm、短辺7cmの礎板が残存している。この他にも、37柱穴からは直径20cmの人頭大の礫が出土しているが、埋土中層からの出土であるため、根石の可能性もあり得る。

近接する位置に建物はなく、他の建物との先後関係は不明であるが、周辺遺構との関連性から、本遺構は9世紀前半頃の建物であると考えられる。



第29図 掘立柱建物2

[27柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(2.5Y5/2暗灰黄色中砂～細砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を少量含む)
- 2.5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト
(5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト
(炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト
(7-5b層ブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト

[28柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(2.5Y5/2暗灰黄色中砂～細砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を少量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(7.5Y5/1灰色粘質シルトのブロックを多く含む。
炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

[29柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(2.5Y5/2暗灰黄色中砂～細砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を少量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(7.5Y5/1灰色粘質シルトのブロックを多く含む。
炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

[30柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(4-3b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a層ブロックをやや多く含む)

[31柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(4-3b層ブロックをやや多く含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (5-1a層ブロックを微量含む)

[32柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(2.5Y5/2暗灰黄色細砂～中砂のブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(5Y7/1灰白色砂質シルトのブロックを少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(7.5Y5/1灰色粘質シルトのブロックを少量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a層ブロックをやや多く含む)

[33柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(2.5Y5/2暗灰黄色中砂～細砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(5Y7/1灰白色砂質シルトのブロックを少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5Y6/2灰オリーブ色砂質シルトのブロックを多く含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a層ブロックを多く含む)

[34柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(2.5Y5/2暗灰黄色細砂～中砂のブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(2.5Y6/2灰黄色砂質シルトのブロックを少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(7.5Y6/2灰オリーブ色砂質シルトのブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)

[35柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(2.5Y5/2暗灰黄色細砂～中砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 極細砂混じり砂質シルト
(5Y7/1灰白色砂質シルトのブロックをやや多く含む。
炭化物を少量含む)

[36柱穴]

- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(2.5Y6/2灰黄色砂質シルトのブロックを微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
(7.5Y6/2灰オリーブ色砂質シルトのブロックを多く含む。
炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト
(7.5Y6/2灰オリーブ色砂質シルトのブロックを多く含む。
炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a層ブロックを少量含む)

[37柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(2.5Y5/2暗灰黄色細砂～中砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(2.5Y6/2灰黄色砂質シルトのブロックを少量含む。
炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(7.5Y6/2灰オリーブ色砂質シルトのブロックを多く含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

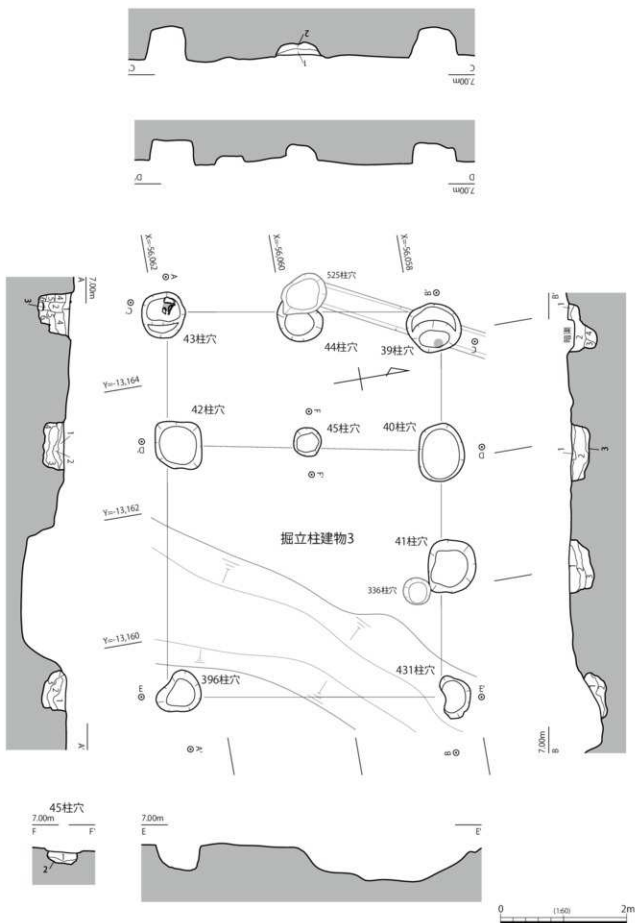
[39柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4-3b・6-3b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 極細砂
(4-3b層ブロックをやや多く含む)
- 5Y6/1 灰色 極細砂混じり粘質シルト
(ほぼ7-5b層ブロックで形成される)

[596柱穴]

- 5Y4/1 灰色 極細砂
(4-3b・7-1a・7-5b層ブロックを少量含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色 砂質シルト
(4-3b層ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(7-1a・7-5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(7-5b層ブロックをやや多く含む)

掘立柱建物2(第29図)の土層註記



第30図 掘立柱建物3

〔39柱穴〕

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト (4.3b層ブロックを少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト (4.3b層ブロックを少量含む、6.3b層ブロックを多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト (7.5b層ブロックを微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 中砂混じり粘質シルト (7.5b層ブロックをやや多く含む)

〔40柱穴〕

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト (4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (4.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を少量含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト (6.3b層ブロックをやや多く含む)

〔41柱穴〕

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト (4.3b層ブロックを多く含む、炭化物を少量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (4.3b層ブロックを微量含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト (6.3b層ブロックをやや多く含む)

〔42柱穴〕

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト (4.3b層ブロックを多く含む、上部層を少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト (4.3b層ブロックを多く含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト (6.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト (6.3b層ブロックを多く含む)

〔43柱穴〕

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト (4.3b層ブロックを少量含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色 極細砂-細砂 (炭化物を多く含む、4.3b層ブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (7.5b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト (4.3b層ブロックを少量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (4.3b層ブロックを少量含む、7.5b層ブロックを少量含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト (7.5b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)

〔44柱穴〕

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト (4.3b層ブロックをやや多く含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (層下半に7.5b層ブロックを多く含む)

〔45柱穴〕

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト (4.3b層ブロックを多く含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト (6.3b層ブロックをやや多く含む)

〔396柱穴〕

- 5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト (4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (4.3b層ブロックを少量含む)
- 5Y6/1 灰色 細砂混じり砂質シルト (ほぼ7.5b層ブロックで形成)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (4.3b層ブロックをやや多く含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト (6.3b層ブロックを多く含む)

掘立柱建物3 (第30図)の土層註記

掘立柱建物3 (第30図) 写真図版13・16・17

調査区北西部1B-6g・f-7g・fに位置する東西方向の掘立柱建物である。柱穴の一部は後世の溝により削平されており、検出することが出来なかった。梁行2間(4.3m)、桁行3間(6.1m)の規模を有し、40-42柱穴間に、側柱よりも平面規模が小さく浅い45柱穴が検出されたことから、床東建物となる可能性がある。建物の主軸はN-9.8°-E、身舎の面積は26.2㎡を測る。柱間寸法は、それぞれ梁行方向2.1m、桁行方向2.0mが基本であり、比較的均整のとれた平面配置を成す。

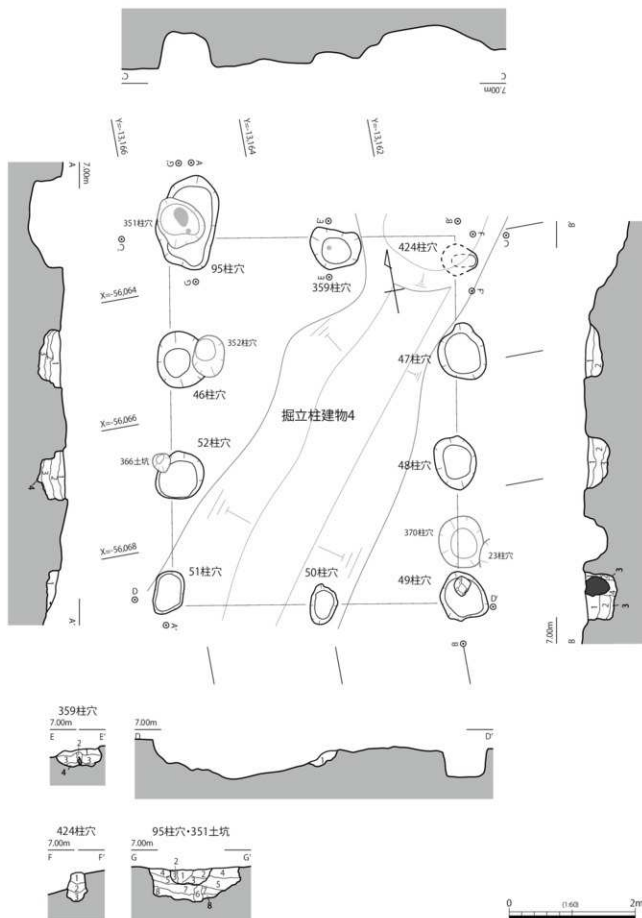
柱穴の掘方は楕円形が多く、それぞれ長径50~80cm、短径40~70cmを測る。検出面からの深さは20~50cmとばらつきがあるが、40cm台のものが多い。掘方埋土は、灰色~黒褐色の砂質シルトを主体とし、下位層起源のブロックや炭化物を多く含む点は、全ての柱穴で共通する。また、43柱穴からは人頭大の礫や大型の土器片が出土しているが、礫は検出面に近いレベルから出土しているため、抜き取り後に投棄されたものと考えられる。

本建物は、掘立柱建物18と重複関係にある。44柱穴が掘立柱建物18の525柱穴により切り込まれていることから、本建物の方が古い。周辺遺構との関連性から、本遺構は9世紀前半頃の建物であると考えられる。

掘立柱建物4 (第31図) 写真図版13・14・18

調査区北西部1B-7gに位置する南北方向の掘立柱建物である。後世の溝により柱穴の一部を欠いているが、規模は梁行2間(4.6m)、桁行3間(5.9m)の側柱建物に復元出来る。建物の主軸はN-9.8°-E、身舎の面積は27.6㎡を測る。柱間寸法は、桁行方向で1.8mを基本とするが、48-49柱穴間や46-95柱穴間等やや広い箇所もある。梁行方向は2.1~2.4mと、桁行方向に比べて広い。

柱穴の掘方は不整な楕円形を呈するものが多く、それぞれ長径70~150cm、短径50~90cmを測る。検出面からの深さは15~40cmと差が大きく、後世の溝により削平を受けた50・51柱穴等は極めて浅いが、これらを除くと概ね40cm台が大半を占める。柱穴の掘方埋土は暗灰黄色~オリーブ黒色の砂質シ



第31図 掘立柱建物4

[46柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト
(6.3b・7.5b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト (7.5b層ブロックをやや多く含む)

[47柱穴]

- 2.5Y3/2 黒褐色 細砂混じり砂質シルト
(4.3b・6.3b層ブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (7.5b層ブロックをやや多く含む)

[48柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (4.3b層ブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(4.3b・6.3b・7.5b層ブロックを微量含む、炭化物を少量含む)
- 3.5Y4/1 灰色 砂質シルト (7.5b層ブロックをやや多く含む)

[49柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (4.3b層ブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (4.3b・6.3b層ブロックを少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト (6.3b・7.5b層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト

[50柱穴]

- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3b・7.5b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)

[51柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(6.3b層ブロックを微量含む、炭化物を微量含む)

[52柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.2b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 細砂～細砂
(4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を少量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(6.3b層ブロックを微量含む、炭化物を少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト (6.3b層ブロックをやや多く含む)

[95-351柱穴]

- 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (炭化物を微量含む、土器片を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を少量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(4.3b層ブロックを多く含む、炭化物をやや多く含む)
- 2.5Y4/4 オリーブ黒色 細砂～中砂
(4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト
(4.3b層ブロックを多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (4.3b層ブロックを多く含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 粘質シルト (6.3b層ブロックをやや多く含む)

[359柱穴]

- 5Y4/2 灰オリーブ色 細砂～中砂
(4.3b・7.5b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(海抜良い、下平中心にφ5mm大のブロックを少量含む)
- 5Y5/2 灰オリーブ色 細砂～中砂 (7.5b層ブロックをやや多く含む)
- 5Y6/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (ほぼ7.5b層ブロックで形成される)

[424柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(5Y4/2灰オリーブ色細砂のブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(2.5Y6/2灰黄色砂質シルトのブロックを微量含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(5Y7/1灰白色細砂～中砂のブロックを少量含む)

掘立柱建物4(第31図)の土層記記

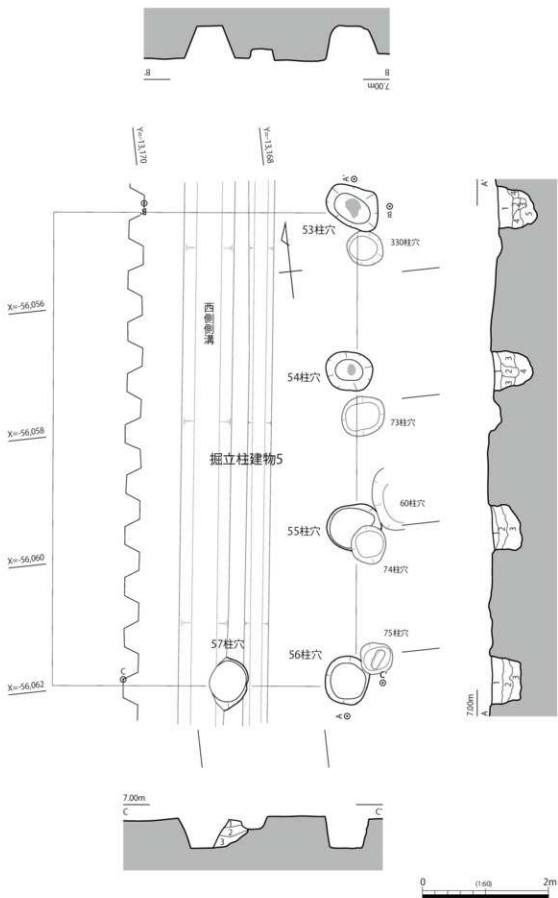
ルトが主体であり、下位層起源のブロックや炭化物をやや多く含む。359柱穴には柱根が残るが、直径7cmと極めて細い。また、49柱穴からは根石の可能性のある長径30cmの礫が出土した。埋土上～中層から出土しているため、根石であっても原位置を留めておらず、柱抜き取り時にそのまま埋戻されたものかもしれない。

本建物は、掘立柱建物1・10・28と重複関係にある。柱穴の重複関係をみると、本建物の95柱穴は掘立柱建物10の351柱穴に切り込まれている。また、本建物の47柱穴は掘立柱建物28の602柱穴によって切り込まれていることから、掘立柱建物10・28よりも本建物の方が古い。さらに、掘立柱建物1と掘立柱建物28の重複関係を整理すると、本建物は掘立柱建物1よりも古いため、上記の建物の中では最古の建物と考えられる。周辺遺構との関連性から、本遺構は9世紀前半頃の建物であると考えられる。

掘立柱建物5(第32図 写真図版13)

調査区北西部1B-6g・h～7g・hに位置する南北方向の掘立柱建物である。桁行は3間(7.5m)だが、建物西側が調査区外に延びる他、西側側溝によって柱穴の一部を欠いているため、梁行の詳細は不明である。しかし、建物東側の柱筋の並びが良いため、梁行2間以上の側柱建物となる可能性があり、建物東側の柱筋からすると、建物主軸はN-6.4°-Eを測る。柱間寸法は、梁行方向は2.0m、桁行方向は2.5mとなり、桁行方向が広い。

柱掘方は楕円形を呈するものが多く、長径70～80cm、短径60～70cmを測る。検出面からの深さは50～60cmであり、柱穴掘り込みの深度は比較的揃う。柱掘方の埋土は暗灰黄色～オリーブ黒色の砂質シルトを主体とし、下位層起源のブロックや炭化物をやや多く含む。53柱穴最下層からは根石の可能性が



第32図 掘立柱建物5

〔53柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(2.5Y8/2灰白色中砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(5Y7/2灰白色砂質シルトのブロックを少量含む。
炭化物を微量含む)
- 5Y4/2 灰色 中砂混じり砂質シルト
(5Y6/2灰オリーブ色細砂～中砂のブロックを少量含む。
炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト
(5Y7/2灰白色砂質シルトのブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(5Y6/1灰白色細砂～中砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)

〔54柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(5Y7/2灰白色細砂～中砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(5Y7/2灰白色砂質シルトのブロックを少量含む。
炭化物を少量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト
(5Y7/2灰白色砂質シルトのブロックをやや多く含む。
炭化物を少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(5Y6/1灰白色細砂～中砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)

〔55柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(2.5Y8/2灰白色中砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト
(5Y7/2灰白色砂質シルトのブロックをやや多く含む。
炭化物を少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(5Y6/1灰白色細砂～中砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)

〔56柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(2.5Y8/2灰白色中砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む。土層片を微量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト
(5Y7/2灰白色砂質シルトのブロックを少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(6.3bブロックをやや多く含む)

〔57柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3bブロックを少量含む。7.5bブロックを微量含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色 中砂混じり粘質シルト
(7.5bブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト
(7.5bブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

掘立柱建物5(第32図)の土層註記

ある拳大の礫が出土しているが、1点のみであるためその性格は不明である。また、53・54柱穴には灰色の粘質シルトを埋土とする柱痕跡が残っており、その直径は20～30cmを測る。

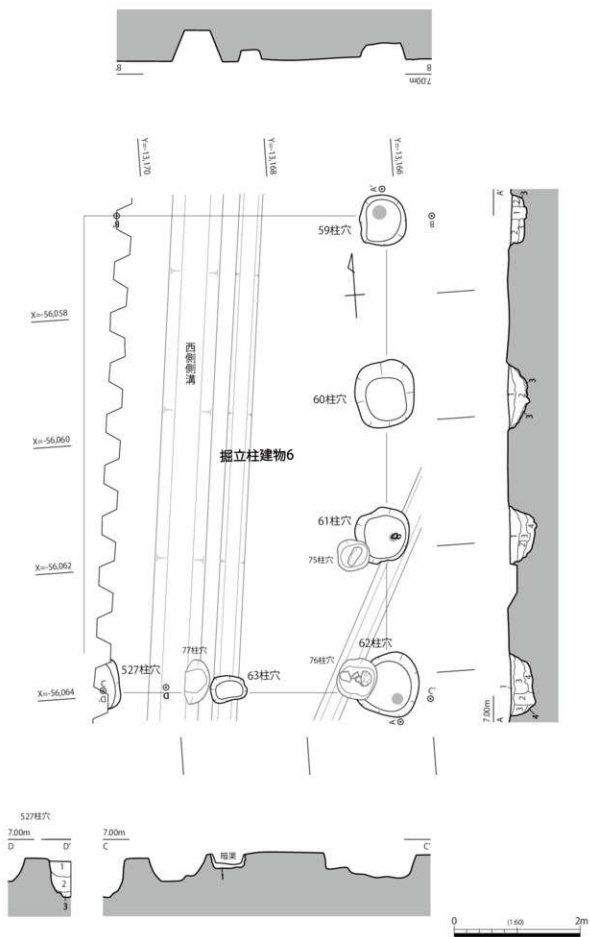
本建物は、掘立柱建物8・18と重複関係にある。なかでも、本建物の55・56柱穴は掘立柱建物8の74・75柱穴に切り込まれていることから、本建物の方が古い。一方、掘立柱建物18の330柱穴を本建物の53柱穴が切っていることから、本建物の方が新しい。さらに、掘立柱建物3と掘立柱建物18の重複関係からすると、本建物は掘立柱建物3よりも新しいと考えられる。これらを整理すると、本建物は掘立柱建物8よりも古く、掘立柱建物3・18よりも新しいと言える。

53柱穴より須恵器蓋(Po36)が出土したことから、本建物の帰属時期は、9世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物6(第33図 写真図版13)

調査区北西部1B-6g～6hに位置する南北方向の掘立柱建物である。建物の西側が調査区外に延びているが、建物東側柱穴列の柱通りが良い点や矢板際から柱穴が検出されたことからすると、梁行2間(4.7m)、桁行3間(7.6m)の側柱建物であったと考えられる。建物の主軸はN-4.2°-E、身舎の面積は35.8㎡を測る。柱間寸法は、梁行方向は2.5m、桁行方向は2.3～2.7mであり、59-60柱穴間が他と比べてやや幅広くなっている。

柱穴の掘方は、楕円形を呈している。柱穴規模は長径60～100cm、短径40～80cmとばらつきが大きく、検出面からの深さも20～50cmとまとまらない。特に、63柱穴は平面・断面ともに他柱穴よりも規模が小さくなるが、これは柱穴の大半が西側側溝に平行して走る暗渠に削平されていることに起因する。柱掘方埋土は暗灰黄色～オリーブ黒色の砂質シルトを主体とし、下位層起源のブロックを多く含む。また、矢板際の527柱穴最下層には、8-3b層起源の直径5mm程度の礫を僅かに含む。さらに、59・62柱穴からは暗灰黄色～灰色の粘質シルトを埋土とする柱痕跡を確認することが出来、平面規模はどちらも直径20cmを測る。



第33図 掘立柱建物6

〔59柱穴〕

- 1 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト
(2.5Y6/1 灰色砂質シルトのブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(2.5Y3/2 黒黒色粘質シルトのブロックを少量含む)
- 3 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
(2.5Y3/1 黒黒色粘質シルトのブロックを少量含む、7.5b層ブロックを微量含む)

〔60柱穴〕

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(2.5Y6/3にぶい、黄色中砂のブロックを少量含む、炭化物を少量含む)
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(2.5Y7/2 灰黄色中砂のブロックを多く含む、炭化物をやや多く含む、5Y6/2 灰オリーブ色砂質シルトを少量含む)
- 3 7.5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり粘質シルト
(6.3b層ブロックをやや多く含む)

〔61柱穴〕

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(2.5Y6/3にぶい、黄色中砂のブロックをやや多く含む、炭化物を多く含む)
- 2 5Y5/2 灰オリーブ色 砂質シルト
(5Y3/2 オリーブ黒色粘質シルトのブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 3 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(5Y6/2 灰オリーブ色砂質シルトのブロックを多く含む、炭化物を微量含む)
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり粘質シルト
(7.5b層ブロックを多く含む)

〔62柱穴〕

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(2.5Y6/3にぶい、黄色中砂のブロックを少量含む、炭化物を少量含む)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト
(2.5Y3/1 黒黒色粘質シルトのブロックをやや多く含む、炭化物をやや多く含む)
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質シルト
(2.5Y4/1 黄灰色砂質シルトのブロックを少量含む、2.5Y7/1 灰黄色中砂のブロックを少量含む、炭化物・土層片を微量含む)
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色 粗砂～中砂
(7.5b層ブロックを少量含む)

〔63柱穴〕

- 1 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり粘質シルト
(5.2柱穴)
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 粗砂混じり粘質シルト
(4.3b・7.5b層ブロックを微量含む、炭化物を微量含む、 ϕ 5mm程度の礫を微量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 粘質シルト (7.5b層ブロックを微量含む、炭化物を微量含む、 ϕ 5mm程度の礫を微量含む)
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色 極粗砂混じり粘質シルト
(ϕ 5mm程度の礫を微量含む)

掘立柱建物6 (第33図)の土層註記

本建物は掘立柱建物8と重複している。建物を構成する柱穴の重複関係をみると、本建物の61・62柱穴は掘立柱建物8を構成する75・76柱穴に切り込まれている。そのため、本建物の方が掘立柱建物8よりも古い。60柱穴から8世紀後半の須恵器高台付坏片が出土しており、周辺遺構との関連性から、本遺構は8世紀後半～9世紀前半頃の建物であると考えられる。

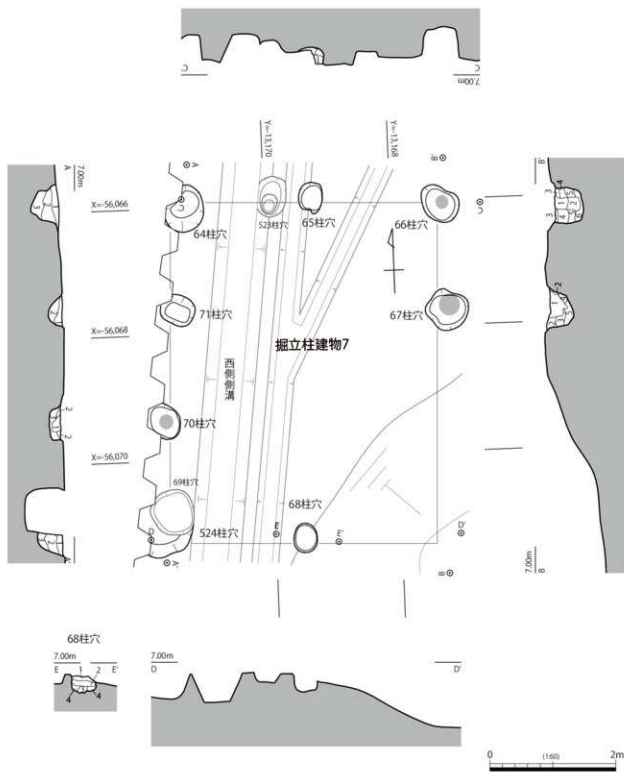
掘立柱建物7 (第34図 写真図版13・18)

調査区西部1B-7h・g～8h・gに位置する南北方向の掘立柱建物である。柱穴の一部は後世の溝と矢板により削平されているが、梁行2間(4.2m)、桁行3間(5.1m)の側柱建物であり、建物の主軸はN-2.2°-E、身舎の面積は21.3㎡を測る。柱間寸法は、梁行方向で2.1m、桁行方向で1.7～1.8mと近似するが、梁行方向がやや広い。

柱穴の掘方は長楕円形を呈するものが多く、それぞれ長径50～80cm、短径40～50cmを測る。検出面からの深さは、20～50cmとばらつきがある。特に、建物西側の柱穴列は隅柱が深さ40～50cmなのに対し、間柱が深さ20cmと浅くなる。柱掘方埋土は、暗灰黄色～オリーブ黒色の砂質シルトを主体としており、下位層起源のブロックや炭化物を含む他、建物西側の柱穴には8・3b層起源の直径5～10mmの礫を含む。さらに、66・67・70柱穴からは灰色の粘質シルトを埋土とする柱痕跡が確認されており、平面規模は直径20～30cmを測る。

本建物は掘立柱建物20と重複している。柱穴の重複関係を整理すると、本建物の524柱穴は掘立柱建物20の69柱穴に切り込まれていることから、本建物の方が古い。

周辺遺構との関連性から、本遺構は9世紀前半頃の建物であると考えられる。



第34図 掘立柱建物7

〔64柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂～細砂
(ϕ 5～10mm程度の礫を少量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 粗砂混じり砂質シルト
(ϕ 5～10mm程度の礫を少量含む、炭化物を微量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 粘質シルト(炭化物を微量含む)

〔65柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂～細砂
(4.3b層ブロックをやや多く含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3b層ブロックをやや多く含む)

〔66柱穴〕

- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物をやや多く含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
- 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む、6.3b層ブロックを少量含む)

- 5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3b層ブロックをやや多く含む)

〔67柱穴〕

- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物をやや多く含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む、6.3b層ブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3b層ブロックをやや多く含む)

〔68柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂～細砂
(4.3b層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(6.3b層ブロックを少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3b層ブロックをやや多く含む)

〔70柱穴〕

- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を少量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 中砂混じり砂質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む)

- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3b層ブロックを少量含む)

〔71柱穴〕

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3b層ブロックを微量含む、 ϕ 5mm程度の礫を微量含む)

〔524柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 中砂混じり砂質シルト
(4.3b・6.3b層ブロックを少量含む、 ϕ 5～10mm程度の礫を少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(4.3b・6.3b層ブロックをやや多く含む、 ϕ 5～10mm程度の礫を少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(4.3b・6.3b層ブロックを少量含む、 ϕ 5～10mm程度の礫を少量含む、炭化物を微量含む)

掘立柱建物7(第34図)の土層註記

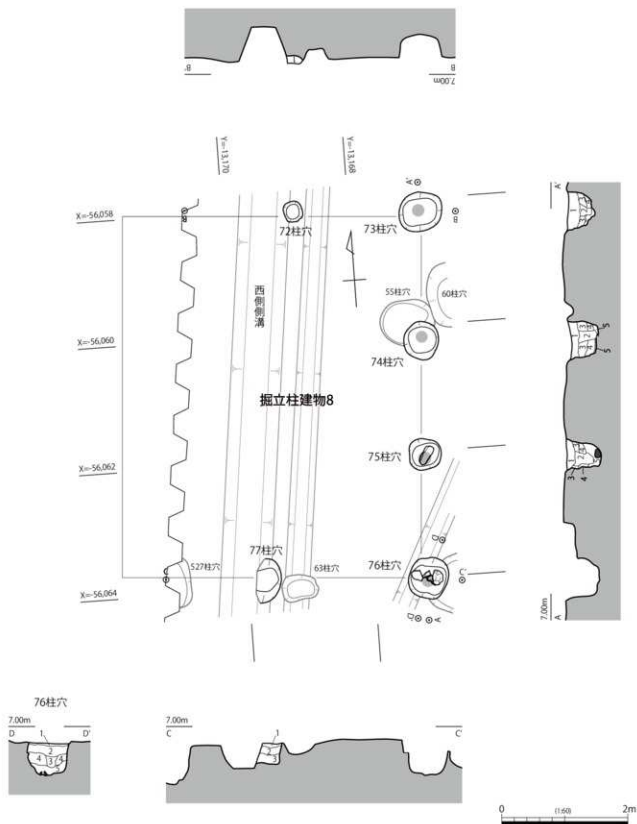
掘立柱建物8(第35図 写真図版13)

調査区西部1B-6g・h～7g・hに位置する南北方向の掘立柱建物である。建物西側が調査範囲外にまで延びているため全容は不明であるが、建物東側柱穴列の柱筋の通りが良いことから、桁行3間(5.8m)、梁行2間以上の棚柱建物であると考え。建物の軸はN-4.1°-Eを指す。柱間寸法は、桁行方向は2.0m、梁行方向は2.0mを基本とするが、76-77柱穴間のみ2.6mと広くなる。

柱穴掘方は楕円形を呈しており、長径30～70cm、短径30～60cmを測る。柱穴の掘方埋土は、暗灰黄色～黒褐色の砂質シルトを主体とする。埋土中には下位層起源のブロックと炭化物を含む。75・76柱穴の最下層には、長径20～30cm、短径10～20cm程度の人頭大の礫が配されている。根石とするにはやや大きすぎるが、柱穴最下層に置かれていることからすると、この礫は礎板石や根石の機能を有していた可能性がある。また、72・77柱穴を含む建物西側の柱穴は残りが悪いものの、建物東側の柱穴は比較的残りが良く、柱痕跡を確認することが出来る。柱痕跡は灰色の粘質シルトを埋土とし、直径20cmの平面規模を有している。

本建物は掘立柱建物5・6・18と重複している。本建物の74柱穴と掘立柱建物5の55柱穴、そして本建物の76柱穴と掘立柱建物6の62柱穴は、それぞれ重複している。それらの新旧関係を整理すると、本建物の柱穴は掘立柱建物5・6の柱穴を切り込むようにして掘られていることから、本建物は他の建物に比べて新しい。また、掘立柱建物18は掘立柱建物5よりも古いことが明らかになっているため、本建物は上記の建物群の中で最新の建物であると言える。

8世紀末～9世紀前半に比定される土師器甕(Po37)や須恵器皿(Po38)が出土したことから、本建物の帰属時期は9世紀前半頃であると言える。



第35図 掘立柱建物8

〔72柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを微量含む、炭化物を少量含む)

〔73柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを微量含む、炭化物を少量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり粘質シルト
(6.3b層ブロックを微量含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト
(6.3b層ブロックをやや多く含む)

〔74柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(6.3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色 極細砂～細砂
(上半に4.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3b層ブロックをやや多く含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト
(6.3b層ブロックを多く含む)

〔75柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂～細砂
(4.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を多く含む、土器片を微量含む)

- 2.5Y4/2 灰オリーブ色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む、炭化物を少量含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3b層ブロックを少量含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト
(6.3b層ブロックを多く含む)

〔76柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物をやや多く含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(下半に6.3b層ブロックを少量含む、炭化物をやや多く含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト
(6.3b層ブロックを少量含む、炭化物をやや多く含む)

〔77柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを多く含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(4.3b層及び7.5b層ブロックを少量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 粘質シルト
(7.5b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)

掘立柱建物8 (第35図)の土層註記

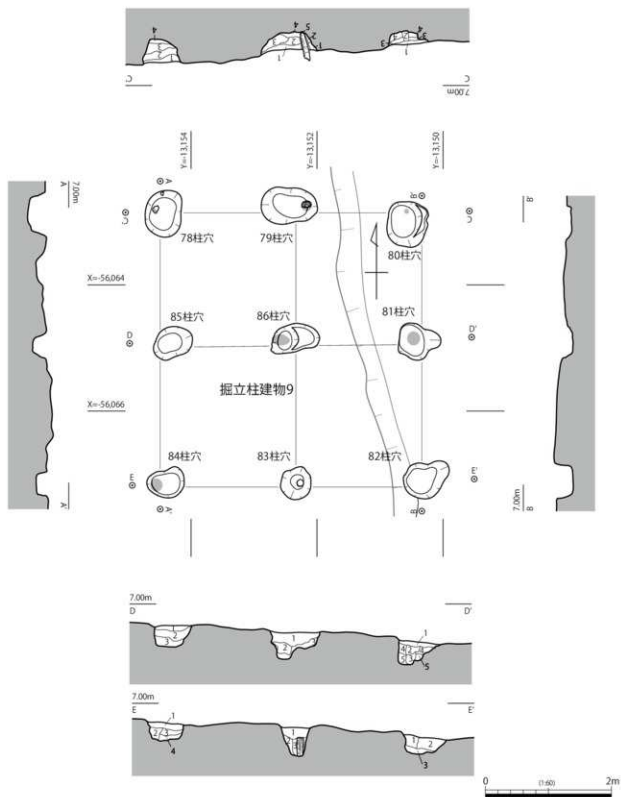
掘立柱建物9 (第36図 写真図版19)

調査区北半中央部1B-7fに位置する南北方向の掘立柱建物であり、15流路西肩に近接して建てられている。梁行2間(4.1m)、桁行2間(4.4m)の規模を持つ総柱建物で、建物の主軸はN-0° -Eと南北軸に沿っており、身舎の面積は17.9㎡を測る。柱間寸法は、梁行方向が1.9~2.2m、桁行方向が2.1~2.3mとなり、桁行方向がやや広がる。

柱穴の掘方はやや不整な長楕円形を呈するものが多く、それぞれ長径50~90cm、短径40~60cmを測る。検出面からの深さは20~50cmとばらつきがあるが、40cm台のものが主体となる。柱穴の掘方埋土は灰色の極細砂を主体としており、柱穴最下層は、ほぼ下位層のブロックで形成されている。なお、建物東側の柱穴列ほど遺構上面と柱穴底部のレベルが低くなる傾向にある。柱穴上部が15流路の影響を受けた結果、流路埋土との識別が困難であったため、遺構検出時に深く掘削したことにより遺構上面のレベルが低くなった可能性は否定出来ない。しかし、埋土の構成は他の柱穴とさほど変わることはなく、柱穴の深さも80柱穴を除けば比較的揃ってくる。そのため、本建物が建てられていた旧地表面は15流路に向けて下がってきており、建物東側柱穴列は西側に比して、本来的に低い位置に掘り込まれていたと考えられる。

79・83柱穴には直径10cmの柱根、80・81・84・86柱穴には直径15~25cmの柱痕跡が残存しているが、断面観察の所見からすれば、これらは建物廃絶時に柱の根本を切っていると言える。一方、残りの78・82・85柱穴では柱根及び柱痕跡を確認することが出来ないため、柱は抜き取られた可能性が高く、異なる方法により建物廃絶時の柱の処理が行われていたと考えられる。

付近には重複する柱穴が存在しないため、他の建物との先後関係は不明であるが、78・81・82柱穴からは8世紀末~9世紀前半の須臾器坏や高台付坏の細片が出土していること、また周辺遺構との関連から、この建物の帰属時期は9世紀前半頃である。



第36図 掘立柱建物9

〔78柱穴〕

- 2.5Y3/2 黒褐色 極細砂～細砂
(4.3b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(4.3b・7.5b層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(7.5b層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(ほぼ7.5b層ブロックで形成される)

〔79柱穴〕

- 2.5Y3/2 黒褐色 極細砂～細砂
(4.3b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト
(4.3b・6.3b・7.5b層ブロックを多く含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 細砂
(4.3b・6.3b・7.5b層ブロックを多く含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト
(ほぼ7.5b層ブロックで形成される)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 極細砂～細砂

〔80柱穴〕

- 2.5Y3/2 黒褐色 極細砂～細砂
(4.3b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト
(4.3b・6.3b・7.5b層ブロックを多く含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(ほぼ7.5b層ブロックで形成される)

〔81柱穴〕

- 2.5Y3/2 黒褐色 極細砂～細砂
(4.3b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 極細砂～細砂
(7.5b層ブロックを多く含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 極細砂～細砂
- 5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト
(4.3b・6.3b・7.5b層ブロックを多く含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(ほぼ7.5b層ブロックで形成される)

〔82柱穴〕

- 5Y3/2 オリーブ黒色 極細砂～中砂
(4.3b・7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 中砂
(4.3b・7.5b層ブロックをやや多く含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 極細砂～細砂
(4.3b・7.5b層ブロックを多く含む)

〔83柱穴〕

- 2.5Y3/1 黒褐色 細砂混じり砂質シルト
(4.3b・7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物をやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(7.5b層ブロックを多く含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 極細砂～細砂

〔84柱穴〕

- 2.5Y3/2 黒褐色 極細砂～細砂
(4.3b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 極細砂～細砂
- 5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト
(4.3b・6.3b・7.5b層ブロックを多く含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(ほぼ7.5b層ブロックで形成される)

〔85柱穴〕

- 2.5Y3/2 黒褐色 極細砂～細砂
(4.3b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(4.3b・7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(4.3b・7.5b層ブロックを多く含む)

〔86柱穴〕

- 2.5Y3/1 黒褐色 細砂
(4.3b・6.3b・7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)
- 5Y4/1 灰色 極細砂～中砂
(4.3b・7.5b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(ほぼ6.3b・7.5b層ブロックで形成される)

掘立柱建物9(第36図)の土層註記

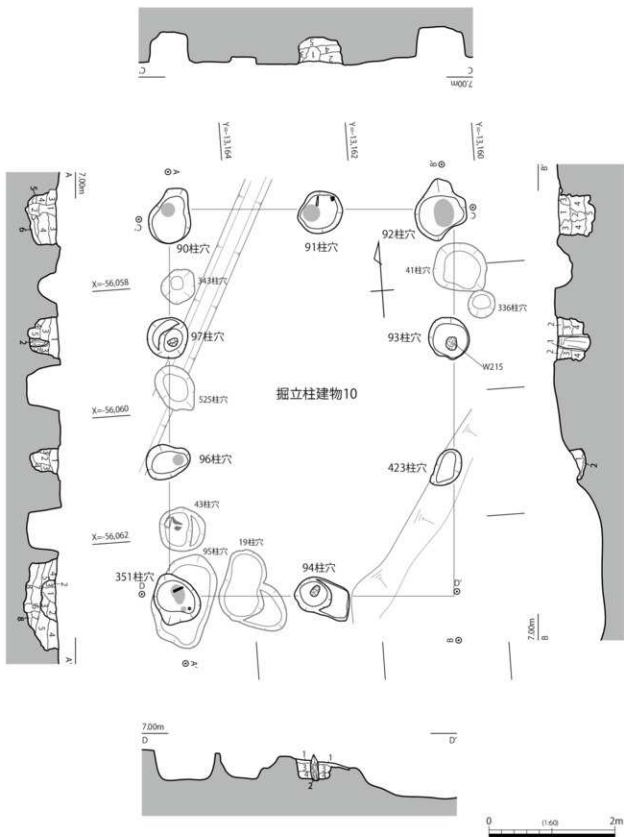
掘立柱建物10(第37図 写真図版13・16・17)

調査区北西部1B-6g・7gに位置する南北方向の掘立柱建物である。後世の溝により柱穴の一部を欠いているものの、梁行2間(4.4m)、桁行3間(6.1m)の側柱建物と考えることが出来る。建物の主軸はN-4.2°-E、身舎の面積は26.6㎡の規模を有する。柱間寸法は、桁行方向で2.0～2.1m、梁行方向で2.2mをそれぞれ測る。

柱穴の掘方は、不整な楕円形を呈すものから比較的整った円形を保つものまであり、長径70～90cm、短径40～70cmとなる。検出面からの深さは20～60cmとばらつきが大きい。柱穴の掘方埋土は暗灰黄色～オリーブ黒色の極細砂を主体としており、下位層起源のブロックや炭化物をやや多く含む傾向にある。93・94・97柱穴には柱根が直立した状態で遺存しており、それぞれ直径15～20cmを測る。また、90・91・92・96・351柱穴からは灰色～オリーブ黒色の粘質シルトを示す柱痕跡が検出されており、それぞれ直径20～30cmを測る。このように、後世の溝により一部が欠損している423柱穴を除く全ての柱穴から柱根、もしくは柱痕跡が確認出来た。

本建物は掘立柱建物4と重複しており、351柱穴が掘立柱建物4の95柱穴埋没後に掘り込まれていることから、本建物は掘立柱建物4よりも新しいと言える。

90・92・93・96柱穴からは9世紀頃とみられる須恵器坏及び皿の細片が出土しており、周辺遺構との関連からみて、本建物の時期は9世紀前半頃であると推定される。



第37図 掘立柱建物10

[90柱穴]

- 1 5Y4/1 灰色 粘質シルト (炭化物を微量含む)
 - 2 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (6-3b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
 - 3 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (4-3b層ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)
 - 4 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト (4-3b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
 - 5 7.5Y3/1 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト (6-3b層ブロックを多く含む)
 - 6 2.5Y3/1 黒褐色 粘質シルト (6-3b層ブロックをやや多く含む)
- [91柱穴]
- 1 5Y4/1 灰色 粘質シルト (4-3b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
 - 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (4-3b層ブロックを少量含む。6-3b層ブロックを微量含む。炭化物を少量含む)
 - 3 2.5Y5/3 黄褐色 細砂～粗砂 (4-3b層をベースとする7.5Y3/2黒褐色粘質シルトのブロックを微量含む)
 - 4 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (6-3b層ブロックを微量含む)
 - 5 7.5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (6-3b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- [92柱穴]
- 1 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト (4-3b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
 - 2 2.5Y3/1 黒褐色 中砂混じり砂質シルト (4-3b層ブロックを多く含む。炭化物を少量含む)
 - 3 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (4-3b層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)
 - 4 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (4-3b層ブロックを多く含む。炭化物を多く含む)
 - 5 2.5Y3/1 黒褐色 粘質シルト (6-3b層ブロックを少量含む)
- [93柱穴]
- 1 7.5Y3/1 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
 - 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (4-3b層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)
 - 3 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (4-3b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
 - 4 2.5Y3/1 黒褐色 粘質シルト (6-3b層ブロックをやや多く含む)
- [94柱穴]
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (4-3b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
 - 2 5Y3/2 オリーブ黒色 極細砂～中砂

- 3 5Y4/1 灰色 砂質シルト (4-3b-6-3b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
 - 4 2.5Y3/1 黒褐色 粘質シルト (6-3b層ブロックを多く含む)
- [95-351柱穴]
- 1 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (炭化物を微量含む。土屑片を微量含む)
 - 2 5Y4/1 灰色 砂質シルト (4-3b層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)
 - 3 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト (4-3b層ブロックを多く含む。炭化物をやや多く含む)
 - 4 2.5Y4/4 オリーブ褐色 細砂～中砂 (4-3b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
 - 5 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (4-3b層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)
 - 6 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (炭化物を微量含む)
 - 7 5Y4/1 灰色 粘質シルト (4-3b層ブロックを多く含む)
 - 8 2.5Y3/1 黒褐色 粘質シルト (6-3b層ブロックをやや多く含む)
- [96柱穴]
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (4-3b層ブロックをやや多く含む)
 - 2 5Y4/1 灰色 粘質シルト (7.5Y4/1灰色中砂のブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
 - 3 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト (6-3b層ブロックをやや多く含む。炭化物をやや多く含む)
 - 4 5Y4/2 オリーブ黒色 砂質シルト (6-3b層ブロックをやや多く含む)
- [97柱穴]
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (4-3b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
 - 2 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト
 - 3 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト (4-3b-6-3b層ブロックを微量含む。炭化物を少量含む)
 - 4 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト (6-3b層ブロックをやや多く含む)
 - 5 2.5Y3/1 黒褐色 細砂混じり粘質シルト (6-3b層ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)
- [423柱穴]
- 1 2.5Y4/1 黄灰色 極細砂～細砂 (6-3b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
 - 2 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～極粗砂のブロックをやや多く含む)

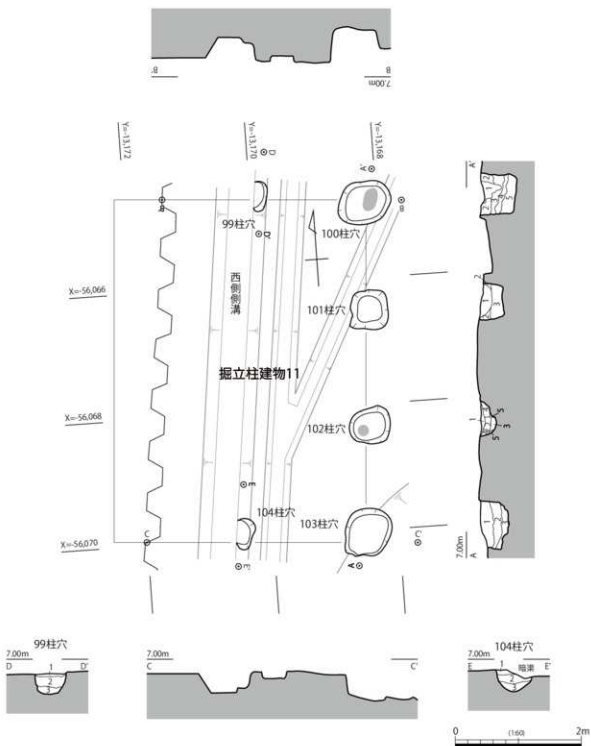
掘立柱建物10(第37図)の土層註記

掘立柱建物11(第38図 写真図版13・18)

調査区東部1B-7g・h～8g・hに位置する掘立柱建物である。建物西側が調査区外にまで延びているが、建物東側柱穴列の柱筋の通りが良いことから、南北方向の側柱建物となる可能性がある。桁行は3間(5.4m)、梁行は不明であるが2間以上になると推定される。建物の主軸はN-4.1°-Eを指し、柱間寸法は梁行方向で1.8～1.9m、桁行方向で1.8mとなり、比較的整った柱穴の配置を示す。

柱穴の掘方は楕円形を呈するものが多く、長径50～90cm、短径50～70cmを測る。検出面からの深さは30～50cmとなり、30cm台のものが主体となる。建物東側柱穴列のうち、隅柱の掘込みは深いのが、間柱は浅い。柱穴の掘方埋土は、暗灰黄色～オリーブ黒色の砂質シルトを主体としており、下位層起源のブロックや炭化物を含む。100・102柱穴からは黒褐色砂質シルトの埋土を持つ柱痕跡が検出されており、平面規模は直径15～25cmを測る。また、99・104柱穴の中心は西側側溝にあったため柱穴西側の半分近くを欠いており、平面は不整な楕円形を呈す。

周辺遺構との関連性から、本遺構は9世紀前半頃の建物であると考えられる。



第38図 掘立柱建物11

〔99柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3層ブロックを少量含む。
φ5mm程度の礫を微量含む)
- 2.5Y4/2 灰オリーブ色 中砂混じり粘質シルト
(4.3層ブロックを少量含む、6.3層ブロックを微量含む。
φ5mm程度の礫を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粗砂混じり粘質シルト
(6.3層ブロックを多く含む、炭化物を微量含む)

〔100柱穴〕

- 2.5Y3/2 黒褐色 細砂混じり砂質シルト
(2.5Y7/2 灰黄色 細砂～中砂のブロックを多く含む。
炭化物を多く含む、土器片を微量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(2.5Y7/2 灰黄色 細砂～中砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 中砂混じり砂質シルト
(2.5Y7/2 灰黄色 細砂～中砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 粘質シルト
(2.5Y6/2 灰黄色 砂質シルトのブロックを少量含む。
炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粗砂混じり粘質シルト
(6.3層ブロックを多く含む)

〔101柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(2.5Y7/2 灰黄色 細砂～中砂のブロックをやや多く含む。
炭化物を多く含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(2.5Y7/2 灰黄色 細砂～中砂のブロックを少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粗砂混じり粘質シルト
(6.3層ブロックを多く含む、炭化物を微量含む)

〔102柱穴〕

- 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり砂質シルト
(炭化物を少量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト
(4.3層ブロックをやや多く含む。
6.3層ブロックを微量含む。
炭化物をやや多く含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト
(6.3層ブロックを少量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
- 7.5Y4/1 灰色 粗砂混じり粘質シルト
(6.3層ブロックを多く含む。
炭化物を微量含む)

〔103柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3層ブロックを少量含む。
炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3層ブロックをやや多く含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6.3層ブロックをやや多く含む)

〔104柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3層ブロックを少量含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色 粗細砂～細砂
(4.3層ブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粗砂混じり粘質シルト
(6.3層ブロックを多く含む、炭化物を微量含む)

掘立柱建物11(第38図)の土層註記

掘立柱建物12(第39図 写真図版22・23)

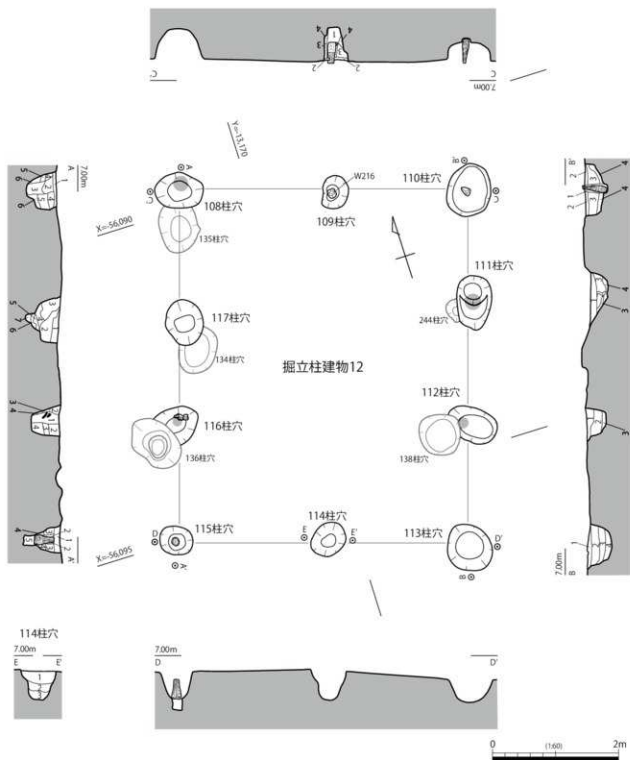
調査区南西部 1B-10h~10gに位置する南北方向の掘立柱建物である。梁行2間(4.7m)、桁行3間(5.6m)の側柱建物で、建物の主軸はN-17.7°-E、身舎の面積は26.3㎡を測る。

柱間寸法は、桁行方向で2.1mを基本とするが、西側では116-117柱穴間で1.5mと、狭い箇所がある。梁行方向は2.3~2.4mと、桁行方向と比較してやや広い。

柱穴の平面形は、やや不整な長楕円形を呈するものが多く、長径60~80cm、短径50~70cmをそれぞれ測る。検出面からの深さは、30~60cmとばらつきがあるが、40cm台のものが主体を占める。柱穴の掘方埋土は、黄灰色~灰色のシルトを主体とし、下位層起源のブロックや炭化物粒をやや多く含むという点で共通している。柱穴の主軸は、柱筋に直交する112・116柱穴の他、柱筋に平行する111・117柱穴等一定しない。なお、109・110・115柱穴には柱根が残存しているが、これらの柱穴は、その平面規模が小さい点に特徴がある。柱根の残存しない柱穴は、その多くが大きいため、先に述べた柱穴の主軸にみられるばらつきも柱の抜き取り等によって形成された可能性があるかもしれない。

本建物は、掘立柱建物14・15・22・24と重複関係にあり、それらを構成するいずれの柱穴に対しても本建物の柱穴が切り込んでいることから、上記建物群の中で最も新しい。

柱穴内からは、僅かながら土器が出土した。Po39は須恵器環で、8世紀末~9世紀前半の特徴を示すことから、本建物は9世紀前半頃の建物とみることが出来る。



第39図 掘立柱建物12

[108柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (6.1-2a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5.1a-6.2a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 粘質シルト (6.1-2a層ブロックを多く含む)
- 2.5Y3/1 黄灰色 砂質シルト (5.1a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (6.1-2a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (6.1a-6.3b層ブロックを多く含む)

[109柱穴]

- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (5.1a-6.2a層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5.1a-6.2a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (6.1-2a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y4/1 灰色 極細砂 (6.1-2a層ブロックを少量含む)

[110柱穴]

- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (海抜良い、下半中心にφ5mm大のブロックを少量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト (5.1a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 中砂混じり砂質シルト (下位付近に5.1a-6.2a層ブロックを多く含む)
- 5Y5/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (6.3b層ブロックを多く含む)

[111柱穴]

- 2.5Y6/1 灰色 細砂混じり砂質シルト (北側方中心に5.1a層ブロックを多く含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (海抜良い、下半中心にφ5mm大のブロックを少量含む)
- 2.5Y3/1 黄灰色 中砂混じり粘質シルト (6.1a-6.3b層ブロックを多く含む)
- 5Y5/1 灰色 細砂-中砂 (6.3b層ブロックを多く含む)[112柱穴]
- 5Y5/1 灰色 極細砂 (6.3b層ブロックを少量含む、炭化物を多く含む)
- 5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (6.1a-6.3b層ブロックを極めて多く含む)
- 5Y6/1 灰色 中砂混じり粘質シルト (6.3b層ブロックを多く含む)

[112柱穴]

- 2.5Y5/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト (5.1a層ブロックを少量含む、炭化物粒を少量含む)
- 5Y6/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (5.1a-6.2a層ブロックを多く含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 細砂混じり粘質シルト (東方中心に6.3b層ブロックを多く含む、炭化物を少量含む)
- 2.5Y5/1 黄灰色 中砂混じり粘質シルト (東面付近に6.3b層ブロックを多く含む)

[114柱穴]

- 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質シルト (5.1a-6.2a層ブロックをやや多く含む、炭化物を少量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5.1a-6.2a層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6.3b層ブロックで形成される)

[115柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (6.1-2a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5.1a-6.2a層ブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (5.1a-6.2a層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色 砂質シルト (6.1-2a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト (6.3b層ブロックをやや多く含む)

[116柱穴]

- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5.1a-6.2a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (5.1a層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5.1a-6.2a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (6.1a-6.3b層ブロックを多く含む)

[117柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (6.1-2a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5.1a-6.2a層ブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 極細砂-細砂 (5.1a-6.2a層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (ほぼ6.1-2a層ブロックで形成される)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (6.1a-6.3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y5/1 灰色 細砂-中砂 (ほぼ6.3b層ブロックで形成される)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (6.3b層ブロックをやや多く含む)

掘立柱建物12(第39図)の土層註記

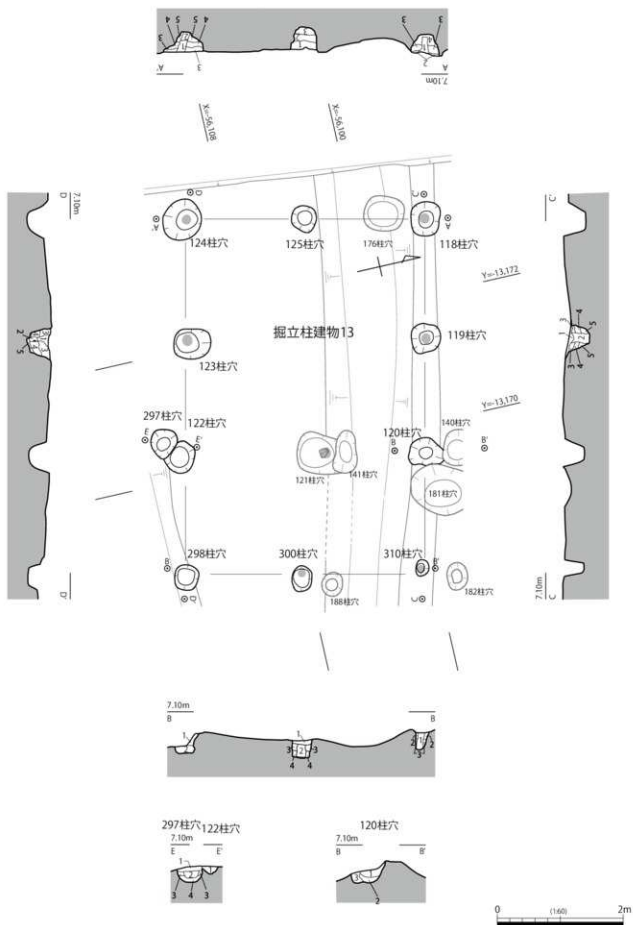
掘立柱建物13(第40図 写真図版23)

調査区南西隅2B-1h・g~2B-10h・gに位置する東西方向の掘立柱建物である。南側軌跡によって建物の北半部は著しく変形を受けていたが、かろうじて検出するに至った。梁行2間(3.8m)、桁行3間(5.7m)の側柱建物で、建物の主軸はN-77.2°-W、身舎の面積は21.7㎡を測る。

柱間寸法は、桁・梁行方向ともに1.9m前後を測り、均整のとれた配置を採る。柱穴掘方の平面形は、基本的にやや不整な円形を呈し、長径40~60cm、短径40~50cmをそれぞれ測るが、東側の298・300・310柱穴のみ、長径30~40cm、短径20~30cmとやや小振りである。検出面からの深さは30~40cmと、概ね深さを揃えている。各柱穴の掘方埋土は、灰色~暗灰黄色のシルトを基調とし、下位層起源のブロックを多数含む他、炭化物粒を多数含んでいる。本建物では柱根が残存する柱穴は認められなかったが、いくつかの柱穴において、灰色のシルトからなる柱痕跡を検出している。

本建物は、120柱穴が掘立柱建物21の181柱穴を切り、掘立柱建物15の140柱穴に切られるという重複関係からみて、掘立柱建物21より新しく掘立柱建物15よりも古い。よって、南西端部周辺で検出した建物の中でもやや古い段階の建物である可能性が高い。

周辺遺構との関連性から、本遺構は9世紀前半頃の建物であると考えられる。



第40図 掘立柱建物13

[118柱穴]

- 2.5Y/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト
(6-3b層ブロックを多く含む)
- 5Y/1 灰色 極細砂(炭化物を少量含む)
- 5Y/4 灰色 中砂混じり砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを多く含む、炭化物を少量含む)
- 5Y/6 灰色 粘質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックを極めて多く含む、炭化物を少量含む)

[119柱穴]

- 2.5Y/2 暗灰黄色 極細砂~細砂
(5-1a層ブロックをやや多く含む、炭化物少量含む)
- 5Y/4 灰色 極細砂~細砂
(5-1a~6-2a層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 2.5Y/4/2 暗灰黄色 細砂(5-1a層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y/3/2 オリーブ黒色 細砂~中砂
(5-1a~6-2a層ブロックを多く含む、炭化物を少量含む)
- 5Y/3/2 オリーブ黒色 砂質シルト(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[120柱穴]

- 5Y/3/1 オリーブ黒色 極細砂
(5-1a~6-2a層ブロックを少量含む、炭化物をやや多く含む)
- 2.5Y/3/1 黒褐色 極細砂~細砂
(6-1・2a層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 2.5Y/3/2 黒褐色 砂質シルト(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[121柱穴]

- 2.5Y/4/2 暗灰黄色 極細砂~細砂
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む)

[122柱穴]

- 5Y/4/1 灰色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む、炭化物を少量含む)
- 7.5Y/4/1 灰色 粘質シルト
(6-1・2a層ブロックを下半に少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y/5/1 灰色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y/4/1 灰色 粘質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y/5/2 灰オリーブ色 極細砂~細砂(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[124柱穴]

- 5Y/5/1 灰色 極細砂
(5-1a層ブロックを多く含む、炭化物を少量含む)
- 7.5Y/4/1 灰色 粘質シルト(炭化物を少量含む)
- 7.5Y/6/1 灰色 砂混じり極細砂(5-1a層ブロックを微量含む)
- N5/ 灰色 中砂混じり粘質シルト(5-1a~6-2a層ブロックを多く含む)
- N4/ 灰色 細砂混じり粘質シルト(6-1a~6-3b層ブロックを極めて多く含む)

[125柱穴]

- 2.5Y/5/1 黄灰色 中砂混じり砂質シルト(4-3b・5-1a層ブロックを多く含む)
- 5Y/5/1 灰色 砂質シルト(6-1a~6-3b層ブロックを多く含む)
- 5Y/4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト(6-3b層ブロックを多く含む)

[297柱穴]

- 2.5Y/3/2 黒褐色 極細砂~細砂
(5-1a~6-2a層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 5Y/3/1 オリーブ黒色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む)
- 2.5Y/3/2 黒褐色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを微量含む)
- 5Y/3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[298柱穴]

- 5Y/3/2 オリーブ黒色 極細砂
(5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- 5Y/3/1 オリーブ黒色 砂質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックを多く含む)

[300柱穴]

- N5/ 灰色 極細砂
(φ5mm大の5-1a~6-3b層ブロックを極めて多く含む、炭化物を多く含む)
- 5Y/4/1 灰色 砂質シルト
(下手と上手に5-1a~6-3b層ブロックを多く含む、炭化物をやや多く含む)
- 5Y/4/1 灰色 細砂混じり砂質シルト
(5-1a~6-3b層ブロックを多く含む)
- N4/ 灰色 細砂混じり砂質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックを極めて多く含む)

[310柱穴]

- 2.5Y/4/1 黄灰色 砂質シルト
(楕円良、下手中心にφ5mm大のブロックを少量含む)
- N4/ 灰色 極細砂
(5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- N4/ 灰色 砂質シルト
(5-1a~6-3b層ブロックを多く含む)

掘立柱建物13(第40図)の土層註記

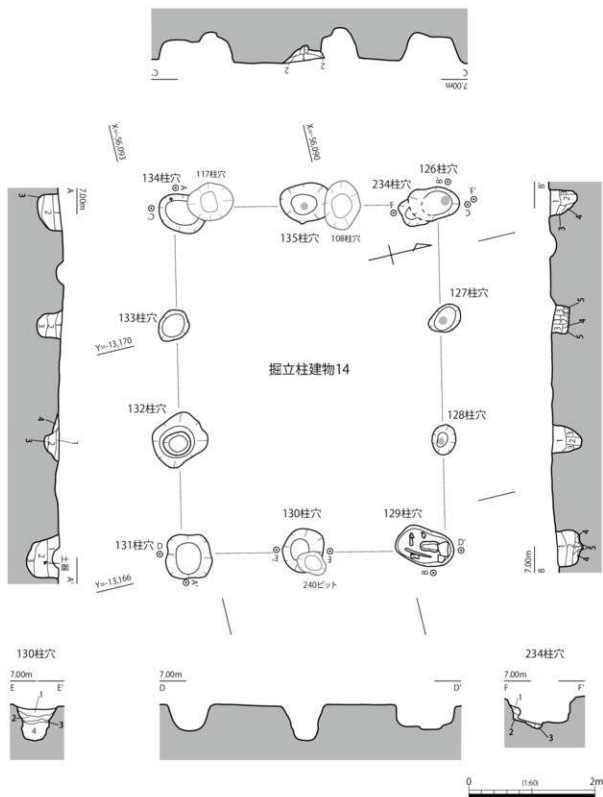
掘立柱建物14(第41図 写真図版22・23)

調査区南西部1B-9g・h~1B-10g・hに位置する東西方向の掘立柱建物である。梁行2間(4.2m)、桁行3間(5.4m)の側柱建物で、建物の主軸はN-77.2°-W、身舎の面積は22.8㎡を測る。

柱間寸法は、桁行方向で概ね1.8m前後を測る。梁行方向では南側が1.9m、北側がやや広く2.2mと、桁行方向と比較して広く、やや均整を欠いている。柱穴の多くは径50~80cmの円形ないし隅円方形を呈すが、北側の側柱の平面形は不整な長楕円形で、長径70~80cm、短径50~60cmをそれぞれ測る。検出面からの深さは、40cmのものを主体として20~60cmを測り、隅柱がやや深い傾向にある。柱穴の埋土は灰色~黄灰色シルトを基調とするが、南側柱穴の一部に関してはオリーブ黒色シルトを主体とする埋土で充填されている。いずれの埋土も下位層起源のブロックを多く含むが、130柱穴には例外的に焼土塊が多く含まれている。柱穴の主軸は、概ね梁行方向に並行する。柱根は残っていないが、灰色シルトを埋土とする柱痕跡が北側の柱筋を中心として認められた。

本建物は、西側梁行の各柱穴で掘立柱建物12と重複関係にあり、いずれもこれに切り込まれる状況を確認したことから、掘立柱建物12よりも古いことが分かる。

本建物を構成する柱穴は、その他の建物と比較して遺物量が豊富である点が特徴である。129柱穴からは、木材片等と共に、やや大振りな須恵器片が出土した。これらの土器は9世紀前半のものと考えられ、本建物の帰属時期を示すと考えられる。この他に特筆すべきものとして、134柱穴埋土中位からは、黒漆塗りの銅製巡方(Br1)が出土している(第204図)。



第41図 掘立柱建物14

[126柱穴]

- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (底下半に5-1a層ブロックを少量含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色 砂質シルト (5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックを少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト (6-1・2a層ブロックをやや多く含む)

[127柱穴]

- 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (5-1a層ブロックを少量含む。炭化物を多く含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 粘質シルト (5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト (6-1・2a層ブロックをやや多く含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックを多く含む)

[128柱穴]

- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (底下半に5-1a層ブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a~6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックをやや多く含む)

[129柱穴]

- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (5-1a層ブロックを多く含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 粘質シルト (5-1a~6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (6-1・2a層ブロックを少量含む。炭化物をやや多く含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成)

[130柱穴]

- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (4.3b~6-2a層ブロックを層状に多く含む)
- N4/ 灰色 粘質シルト (5-1a~6-3b層ブロックを多く含む。焼土塊を含む)
- 2.5C/Y6/1 オリーブ灰色 粗砂混じり粘質シルト (6-3b層ブロックを多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (6-1・2a~6-2a層ブロックをやや多く含む)(131柱穴)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 極細砂 (5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (6-1a~6-3b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成)

[132柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (5-1a層ブロックを少量含む。炭化物を多く含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (5-1a~6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を多く含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト (6-1a~6-3b層ブロックを多く含む)
- 5Y5/2 灰オリーブ色 砂質シルト (5-1a層ブロックを多く含む)

[133柱穴]

- 5Y3/1 オリーブ黒色 極細砂 (5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト (6-1a~6-3b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成)

[134柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂~細砂 (5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト (6-1・2a層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成)

[135柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト (5-1a層ブロックをやや多く含む)

[234柱穴]

- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粗砂混じり粘質シルト (5-1a~6-3b層ブロックを多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)

掘立柱建物14(第41図)の土層註記

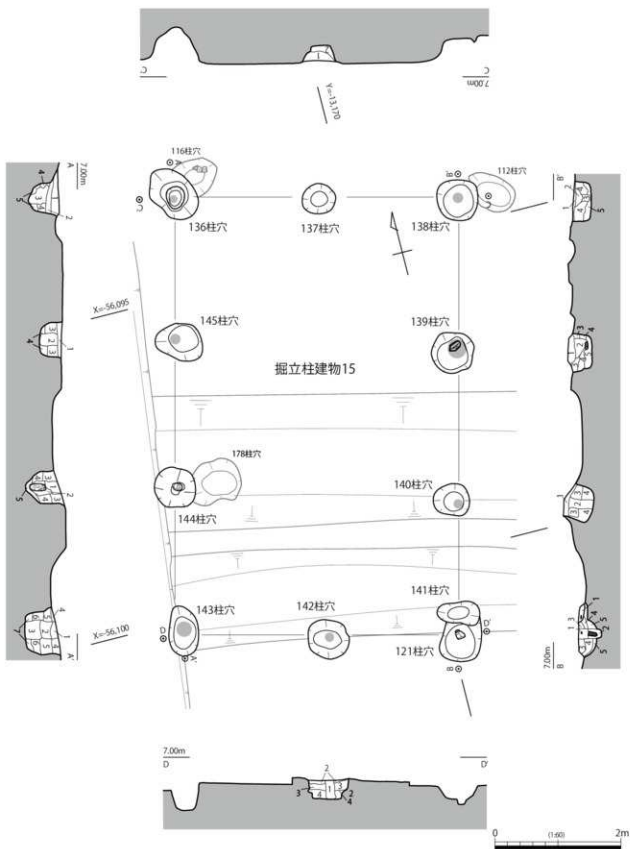
掘立柱建物15(第42図 写真図版22・23)

調査区南西部1B-10g・hに位置する南北方向の掘立柱建物である。部分的に轍の荷重を受けてはいるが、遺存状態は概ね良好であった。梁行2間(4.5m)、桁行3間(6.9m)の側柱建物で、建物の主軸は、N-14.3°-E、身舎の面積は31.1㎡を測る。

柱間寸法は、梁行が2.2m前後、桁行が2.1~2.4mを測り、均整のとれた配置を成す。柱穴掘方の平面形は、やや不整な長楕円の121・136・143柱穴を除けば、概ね整った円形を示し、長径70~90cm、短径40~60cmを測る。検出面からの深さは、50cmを主体として40~60cmを測り、東側の柱筋がやや浅い傾向にある。柱穴埋土は灰色シルトを主とし、下位層起源のシルトブロックを多数含み、炭化物粒を多く含んでいる。本建物では、137柱穴を除く全てに柱の痕跡が認められた。このうち、121・144柱穴からは柱根が出土し、139柱穴では礎板と考えられる板状部材を柱痕跡直下で確認している。

本建物は、136柱穴が掘立柱建物12、144柱穴が掘立柱建物22と重複関係にある。いずれの重複関係からも、本建物が最も新しいものであることを確認した。建物の主軸は、西側に密集する一群の中では比較的方位に近く、建物群全体でみられる主軸方位の変化の方向性にも合致している。

138柱穴からは須恵器蓋(Po40)、121柱穴からは坏(Po41)が出土し、8世紀末~9世紀前半に比定されることから、それが本遺構の帰属時期を示そう。また、144柱穴からは、緑釉陶器(Po42)も出土した。



第42図 掘立柱建物15

[121柱穴]

- 1 5Y4/1 灰色 砂質シルト(5-1a-6-2a層ブロックを微量含む)
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト(6-1・2a層ブロックを微量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 細砂混じり砂質シルト(5-1a-6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)
- 4 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト(6-1・2a層ブロックをやや多く含む)
- 5 5Y4/1 灰色 中砂混じり細砂(6-1・2a層ブロックを多く含む)

[136柱穴]

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト(5-1a-6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト(5-1a-6-2a層ブロックを少量含む。炭化物をやや多く含む)
- 3 5Y4/1 灰色 粘質シルト(5-1a-6-2a層ブロックを少量含む)
- 4 5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト(6-1a-6-3b層ブロックをやや多く含む)

5 Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[137柱穴]

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂-細砂(5-1a-6-2a層ブロックをやや多く含む)
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト(5-1a層ブロックを多く含む)

[138柱穴]

- 1 2.5Y5/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト(4.3b-7.5b層ブロックを多く含む。炭化物を少量含む)
- 2 7.5Y5/1 灰色 中砂混じり砂質シルト(炭化物を少量含む。5-1a層ブロックを少量含む)
- 3 7.5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト(5-1a-6-3b層ブロックを少量含む)
- 4 7.5Y6/1 灰色 中砂混じり砂質シルト(5-1a-6-3b層ブロックを多く含む)
- 5 5Y7/1 灰白色 中砂混じり粘質シルト(5-1a-6-3b層ブロックを極めて多く含む)

[139柱穴]

- 1 7.5Y5/1 灰色 細砂混じり砂質シルト(5-1a層ブロックを微量含む)
- 2 7.5Y5/1 灰色 細砂混じり粘質シルト(5-1a-6-3b層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む。底面に炭板あり)
- 3 N5/ 灰色 極細砂(4.3b-5-1a層ブロックを多く含む)
- 4 N4/ 灰色 中砂混じり粘質シルト(5-1a-6-3b層ブロックを多く含む。炭化物を少量含む)
- 5 5Y4/1 灰色 砂質シルト(6-3b層ブロックをやや多く含む)

[140柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂-細砂(5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物少量含む)
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト(5-1a-6-2a層ブロックを少量含む。炭化物をやや多く含む)
- 3 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト(5-1a-6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)
- 4 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト(6-1・2a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

[141柱穴]

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂-細砂(5-1a-6-2a層ブロックをやや多く含む)

[142柱穴]

- 1 5Y3/1 オリーブ黒色 中砂混じり粘質シルト(5-1a-6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂(5-1a層ブロックを多く含む)
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト(5-1a-6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 4 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト(6-1・2a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

[143柱穴]

- 1 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト(5-1a-6-2a層ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト(5-1a-6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト(6-1a-6-3b層ブロックを多く含む。炭化物をやや多く含む)
- 4 5Y4/1 灰色 極細砂-細砂(5-1a層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)
- 5 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト(5-1a-6-2a層ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)
- 6 5Y4/1 灰色 粘質シルト(6-1・2a層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)
- 7 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[144柱穴]

- 1 5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じり砂質シルト(5-1a-6-2a層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 粘質シルト(6-1・2a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 3 7.5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト-極細砂(5-1a-6-2a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 4 5Y4/1 灰色 粘質シルト(6-1・2a層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[145柱穴]

- 1 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト(5-1a層ブロックを微量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 粘質シルト(5-1a-6-2a層ブロックを少量含む)
- 3 5Y4/1 灰色 粘質シルト(5-1a-6-2a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

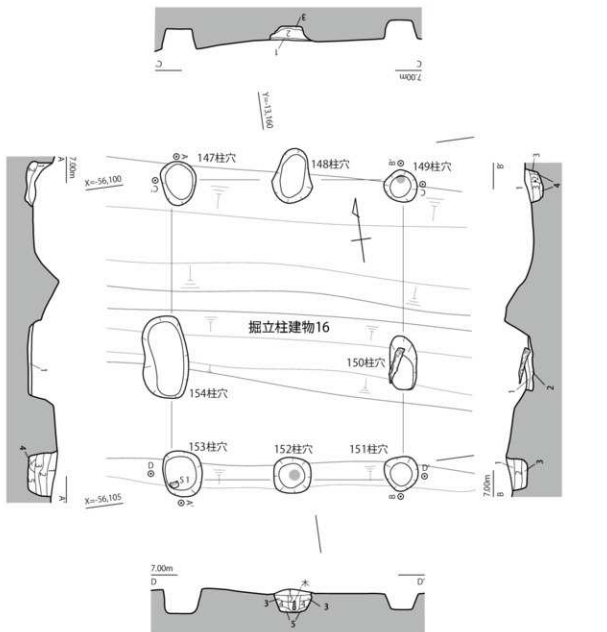
掘立柱建物15(第42図)の土層註記

掘立柱建物16(第43図 写真図版24)

調査区中央南端部の2B-1g・fに位置する南北方向の掘立柱建物である。西側に密集する建物群とは異なり、ほぼ単独で位置しているため検出自体は容易であったが、轍の荷重による影響を多大に受けており、桁行方向の柱穴の遺存状態は極めて不良であった。梁行2間(3.5m)、桁行2間(4.7m)の側柱建物で、建物の主軸はN-7.0°-E、身舎の面積は16.5m²を測る。

柱間寸法は、梁行方向で約1.8mと均整のとれた配置を示すが、桁行方向は南側が1.8m、北側が2.8mと大幅にずれが生じている。調査時には、150・154柱穴の北側にさらに柱穴が存在する可能性を考慮して精査を重ねたが、轍内部に位置することもあり、検出には至らなかった。このため、現状では桁行方向の柱間にみられる不均衡は、轍による荷重によって柱穴の位置が南側に側方移動したためと考えている。

柱穴掘方の平面形は、概ね整った径50~70cm大の円形ないし楕円形であるが、150・154柱穴など轍の影響を受けた箇所については、不整形な長楕円を呈す。検出面からの深さは40cm前後を主とするが、轍の影響下にある柱穴は10cm程度と遺存状態が不良である。柱穴埋土は、灰色~暗灰黄色シルトを基調とし、これに下位層起源のブロック及び炭化物が少量含まれる。本建物からは、150・152柱穴で柱



[147柱穴]

- 1 5Y4/1 灰色 極細砂～細砂
(5-1a～6-2a層ブロックを少量含む,炭化物を少量含む)
- 2 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6-1・2a層ブロックをやや多く含む,炭化物を少量含む)

[148柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂
(5-1a層ブロックをやや多く含む,炭化物少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 極細砂
(5-1a～6-2a層ブロックを微量含む,炭化物を微量含む)
- 3 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[149柱穴]

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂～細砂
(5-1a層ブロックをやや多く含む,炭化物少量含む)
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(5-1a～6-2a層ブロックを少量含む,炭化物を微量含む)
- 3 5Y3/2 オリーブ黒色 極細砂～細砂
(6-1・2a層ブロックを少量含む,炭化物を微量含む)
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[150柱穴]

- 1 5Y3/2 オリーブ黒色 極細砂
(5-1a層ブロックをやや多く含む,炭化物を微量含む)
- 2 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト
(6-1・2a層ブロックをやや多く含む,炭化物を微量含む)

[151柱穴]

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂～細砂
(5-1a層ブロックをやや多く含む,炭化物少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(6-1・2a層ブロックを少量含む,炭化物を微量含む)
- 3 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(6-3b層ブロックを多く含む,炭化物を微量含む)

[152柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂
(5-1a層ブロックをやや多く含む,炭化物少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a～6-2a層ブロックを少量含む)
- 3 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト
(6-1a～6-3b層ブロックを少量含む,炭化物を微量含む)
- 4 5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト (炭化物を微量含む)
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[153柱穴]

- 1 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト (5-1a～6-2a層ブロックを少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 極細砂 (5-1a～6-3b層ブロックを少量含む)
- 3 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト (6-1a～6-3b層ブロックを微量含む)
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (6-3b層ブロックをやや多く含む)
- 5 5Y4/2 灰オリーブ色 粘質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[154柱穴]

- 1 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

第43図 掘立柱建物16

根、149柱穴で柱痕跡をそれぞれ確認した。150柱穴の柱根は、長さ約60cmの遺存状態が良好なものであったが、轍に起因するとみられる荷重によって、南側に斜位に倒れ込んだ状態で出土した。一方の152柱穴の柱根は遺存状態が悪く、ほぼ樹皮部分のみを断面で確認出来たに過ぎない。

本建物からは、153柱穴から出土した砥石(S1)の他、8世紀末～9世紀前半に比定される須恵器高台付坏(Po43)が出土した。このことから、本建物の帰属時期は9世紀前半頃と考えることが出来る。

掘立柱建物17(第44図 写真図版25)

調査区南東部1B-10f～2B-1fに位置する東西方向の掘立柱建物である。単独で位置しているため検出そのものは容易であったが、166柱穴付近を中心として、部分的に轍による荷重の影響を受けており、遺存状態が不良な箇所がみられた。建物の規模は、上記の影響を考慮して復元的に計測すると、梁行2間(3.5m)、桁行3間(4.7m)の側柱建物と考えられ、建物の主軸はN-90°-W、身舎の面積は16.2㎡を測る。

柱間寸法は、梁行方向では東側が1.7m、西側が1.9mを測り、西側がやや広い。西側は、轍の荷重によるズレが生じた可能性が高いと考えているが、158-167-166柱穴間がそれぞれ等間隔であることから、本来もこの形状を示していた可能性もある。この場合は、平面台形の建物プランを呈することになる。一方の桁行方向では、柱間寸法1.4mを基本とするものの、南北ともに西側の1間分が1.8mとやや広がっている。柱穴掘方の平面形は径40～50cmの不整な円形で、検出面からの深さは、35cmを測る163柱穴を例外として、基本的には25cm前後と概して浅い。柱穴埋土は暗灰黄色極細砂～細砂を主体とし、下位層起源のブロック及び炭化物を少量含む点でほぼ共通している。柱根や礎板等の構造物は認められなかったが、158・159・162・163・165の諸柱穴では、灰色シルトを基調とする柱痕跡を検出した。

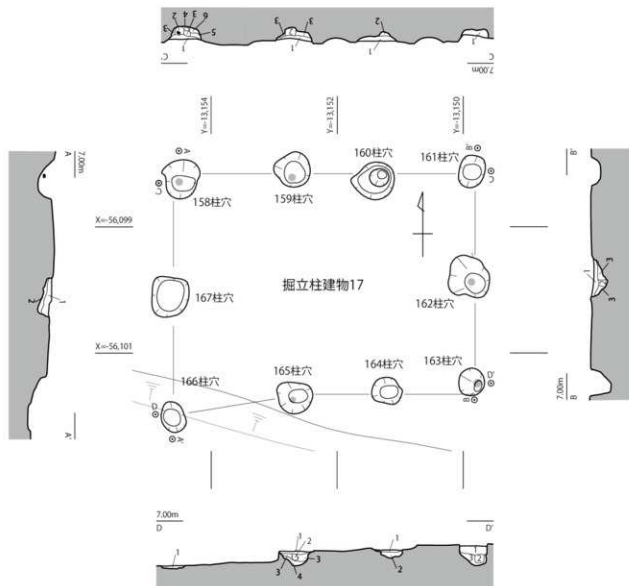
158柱穴内からは、細片を中心とした8世紀末～9世紀前半代の須恵器坏(Po44)が出土しており、本建物の帰属時期を示すと考えられる。本建物は、15流路付近に位置することや建物主軸がほぼ真北を指すなどの点で、北半部で検出した掘立柱建物9との共通点が多い。

掘立柱建物18(第45図 写真図版13)

調査区北東部1B-6g・7gに位置する南北方向の掘立柱建物である。南東隅柱穴を検出することが出来なかったものの、梁行2間(4.3m)、桁行3間(5.7m)の側柱建物であると考えられる。建物主軸はN-7.0°-E、身舎の面積は24.4㎡を測ると推定される。柱間寸法は、梁行方向は2.0～2.1mと比較的整った傾向を示すが、桁行方向は1.7～2.1mとばらつきが大きく、343-525柱穴間と479-480柱穴間の幅が狭い。

柱穴の掘方は、正円に近い形状のものもあるが、多くは長楕円形を呈しており、それらは概ね長径60～70cm、短径50cmを測る。検出面からの深さは30～70cmとばらつきが大きいものの、基本的には40～50cm台のものが多い。柱掘方埋土は、黄灰色～黒褐色の砂質シルトを主体とし、下位層起源のブロックと炭化物を多く含んでいる。柱当たりが残る331・343柱穴には、最下層に柱の荷重によるラミナのたわみが確認出来る。

なお、本建物の東側には掘立柱建物3が位置しており、重複関係にある柱穴も存在する。特に、本



[158柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 7.5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (6-1・2a層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む。土器片を含む)
- 3 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト (6-1・2a層ブロックを多く含む)
- 4 5Y4/1 灰色 砂質シルト (5-1a～6-2a層ブロックをやや多く含む)
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質シルト (6-1・2a層ブロックをやや多く含む)
- 6 5Y4/1 灰色 粘質シルト (ほぼ6-1・2a層ブロックで形成される)

[159柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックを微量含む)
- 3 5Y5/1 灰色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)

[160柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物少量含む)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (6-3b層ブロックを多く含む)

[161柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物少量含む)

[162柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックを微量含む)
- 3 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[163柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックをやや多く含む。6-1・2a層ブロックを少量含む。炭化物をやや多く含む)
- 2 5Y4/1 灰色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックを微量含む)
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色 細砂 (6-3b層ブロックを多く含む)

[164柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色 細砂 (6-1・2a層ブロックを多く含む。炭化物を少量含む)

[165柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックを微量含む)
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色 細砂 (5-1a～6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 4 5Y4/1 灰色 砂質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[166柱穴]

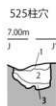
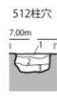
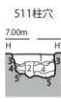
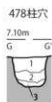
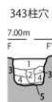
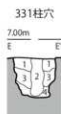
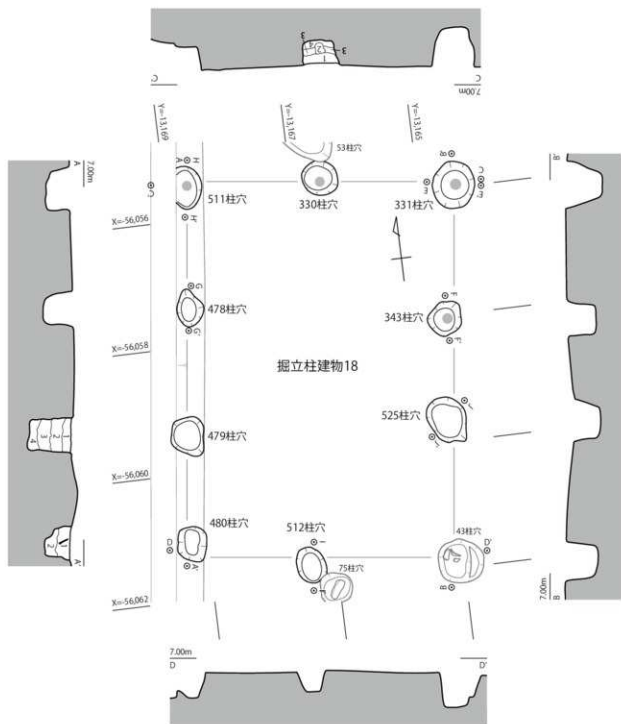
- 1 5Y4/2 灰オリーブ色 細砂 (6-1・2a層ブロックを多く含む)

[167柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックをやや多く含む。6-1・2a層ブロックを微量含む。炭化物を少量含む)
- 2 5Y5/1 灰色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)



第44図 掘立柱建物17



第45図 掘立柱建物18

[330柱穴]

- 1 5Y5/1 灰色 細砂混じり砂質シルト
(炭化物をやや多く含む。7.3b層ブロックを多く含む)
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (下平中心にφ5mm大のブロックを含む)
- 3 5Y5/1 灰色 極細砂 (7.3b層ブロックを多く含む)
- 4 5Y6/1 灰色 細砂混じり砂質シルト (ほぼ7.3b層ブロックで形成される)

[331柱穴]

- 1 10Y5/1 灰色 粘質シルト
(上部は粗砂混じり極細砂まで細粒化。下部に木片を含む)
- 2 2.5Y6/1 黄灰色 極細砂
(炭化物をやや多く含む。中位に4.3b・7.3b層ブロックを多く含む)
- 3 7.5Y6/1 灰色 中砂混じり砂質シルト (6.1a・7.3b層ブロックを多く含む)
- 4 5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(7.3b層ブロックを多く含む。最下部はラミナ有)

[343柱穴]

- 1 2.5Y6/1 黄灰色 極細砂
(炭化物をやや多く含む。中位に4.3b・7.3b層ブロックを多く含む)
- 2 10Y5/1 灰色 粘質シルト (上部極細砂まで細粒化。7.3b層ブロックを含む)
- 3 7.5Y6/1 灰色 中砂混じり砂質シルト (6.1a・7.3b層ブロックを多く含む)
- 4 5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (上部中心に7.3b層ブロックを含む)
- 5 5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(7.3b層ブロックを多く含む。最下部はラミナ有)

[478柱穴]

- 1 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 中砂混じり砂質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 2 2.5Y3/2 黒褐色 粘質シルト
(4.3b・7.5b層ブロックを少量含む)
- 3 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(ほぼ7.5b層ブロックで形成される。炭化物を微量含む)

[479柱穴]

- 1 2.5Y5/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト
(4.3b・7.5b層ブロックを多く含む。炭化物粒を少量含む)
- 2 2.5Y3/2 黒褐色 粘質シルト
(細粒化した4.3b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 3 5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(上部と下部に7.5b層ブロックをやや多く含む)
- 4 5Y5/1 灰色 極細砂-砂質シルト
(側方下平中心に4.3b・7.5b層ブロックをやや多く含む)

[480柱穴]

- 1 2.5Y4/1 黄灰色 中砂混じり砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む。鋸歯器具を含む)
- 2 5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(4.3b・7.5b層ブロックを多く含む。炭化物を少量含む)

[511柱穴]

- 1 2.5Y5/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト
(4.3b・7.5b層ブロックを多く含む。炭化物粒を少量含む。上土片を微量含む)
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(陶は良い。下平中心にφ5mm大のブロックを少量含む)
- 3 5Y3/2 オリーブ黒色 中砂混じり粘質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む)
- 4 2.5Y3/2 黒褐色 細砂混じり粘質シルト (7.5b層ブロックを微量含む)
- 5 5Y6/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (ほぼ7.5b層ブロックで形成される)

[512柱穴]

- 1 2.5Y5/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト
(4.3b・7.3b層ブロックを多く含む。炭化物粒を少量含む)
- 2 5Y5/1 灰色 極細砂-砂質シルト
(側方下平中心に4.3・7.3b層ブロックをやや多く含む)
- 3 5Y5/1 灰色 極細砂-砂質シルト (7.3b層ブロックを極めて多く含む)
- 4 2.5Y6/1 黄灰色 極細砂
(炭化物をやや多く含む。中位に4.3b・7.3b層ブロックを多く含む)
- 5 7.5Y6/1 灰色 中砂混じり砂質シルト (6.1a・7.3b層ブロックを多く含む)
- 3 5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (上部中心に7.3b層ブロックを含む)

掘立柱建物18(第45図)の土層註記

建物の南東隅柱は、43柱穴とほぼ同じ位置にあったことが想定されたため、検出時には重点的な精査を行った。しかし、度重なる精査にも関わらず、結果としては43柱穴しか検出することが出来なかった。そのため、本柱穴は掘立柱建物3・18のいずれにも帰属する可能性があるが、柱通りの良さから、前者を構成柱穴と判断した。

本建物は、掘立柱建物3・5・8と重複関係にある。掘立柱建物3の44柱穴、掘立柱建物5の53柱穴、掘立柱建物8の75柱穴と、本建物の525柱穴・330柱穴・512柱穴がそれぞれ重複している。それらを整理すると、本建物は掘立柱建物5・8よりも古く、掘立柱建物3よりも新しい。

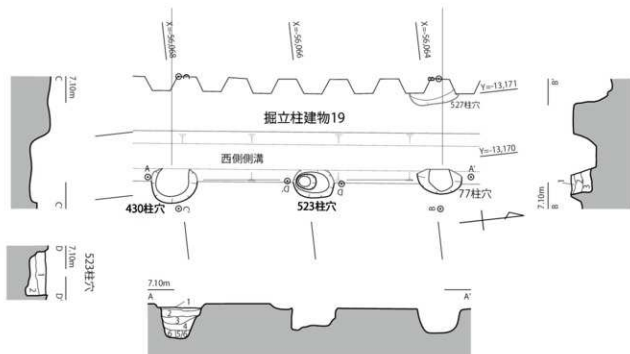
柱穴から出土する土器片の特徴から、本建物の帰属する時期は9世紀前半頃であると考えられる。

掘立柱建物19(第46図 写真図版13)

調査区北東部1B-7g・hに位置する南北方向の掘立柱建物である。建物西側の柱穴は調査区外に延びるため確認出来なかったが、建物東側の柱穴列の通りが良いことから、掘立柱建物であると判断した。桁行2間(4.2m)、梁行方向は不明であるが2間以上であると推定される。建物主軸は、東側柱穴列からするとN-6.4°-Eを指す。柱間寸法は、桁行方向は2.1mで揃い、梁行方向は不明である。

柱穴の掘方は、西側側溝により欠損する部分が多いため判然とせず、長径は70cm、短径は不明である。検出面からの深さは30~50cmを測る。柱穴の掘方埋土は、灰色~黒褐色の砂質シルトを主体とし、下位層起源のブロックと炭化物を比較的多く含む。また、523柱穴には8~3b層起源の直径5mm程度の礫を少量含む。

本建物を構成する柱穴は他の建物と重複関係にないため、周囲の建物との先後関係を把握することは出来ない。しかし、柱穴から出土する土器片の特徴から、本建物の帰属する時期は9世紀前半頃で



〔77柱穴〕

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (4-3b層起源のブロックを多く含む)
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (4-3b・7-5b層ブロックを少量含む)
- 3 2.5Y3/2 黒褐色 粘質シルト (7-5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)

〔430柱穴〕

- 1 5Y6/1 灰色 粗砂混じり砂質シルト (5-1a層ブロックを少量含む)
- 2 5Y5/1 灰色 粗砂混じり砂質シルト (5-1a層ブロックを多く含む。炭化物を少量含む)
- 3 2.5Y4/1 黄灰色 粗砂混じり粘質シルト (5-1a～6-2a層ブロックを多く含む。炭化物を少量含む)

- 4 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト (5-1a層ブロックを多く含む)
- 5 10Y4/1 灰色 粘質シルト (炭化物粒を多く含む)
- 6 7.5Y4/1 灰色 粗砂混じり粘質シルト (6-1a～6-3b層ブロックを極めて多く含む)

〔523柱穴〕

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (4-3b層ブロックを少量含む。φ5mm程度の礫を微量含む)
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (4-3b・7-5b層ブロックをやや多く含む。φ5mm程度の礫を微量含む)



第46図 掘立柱建物19

あと考えられる。

掘立柱建物20(第47図 写真図版18)

調査区東部1B-8hに位置する南北方向の掘立柱建物である。建物の大部分が西側の調査区外に延びているためその全容は不明であるが、建物東側の柱穴は柱筋が整っていることから、掘立柱建物と判断した。桁行3間(6.0m)、梁行方向は矢板の外に延びるためその規模は不明であるが、間数2間以上と推定される。建物主軸はN-7.0°-Eであり、柱間寸法は、梁行方向は矢板外に延びるため不明であるが、桁行方向は1.8～2.1mを測る。

柱穴の掘方は、矢板により切られているものもあるため不明瞭な点もあるが長楕円形を呈しており、長径70～90cm、短径70cmをそれぞれ測る。検出面からの深さは40～60cmで、50cm以上掘り込むものが多い。柱掘方埋土は、暗灰黄色～オリーブ黒色の砂質シルトが主体となり、下位層起源のブロックや8-3b層起源の直径0.5～1.0cmの礫、炭化物を多く含む傾向にある。69・526柱穴からは灰色の粘質シルトを埋土とする柱痕跡を確認することが出来、平面規模は直径20cmを測る。

本建物は、掘立柱建物7と重複関係にある。本建物の69柱穴と掘立柱建物7を構成する524柱穴と

[69柱穴]

- 1 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂混じり砂質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む。φ0.5~1cmの礫をやや多く含む。炭化物をやや多く含む)
- 2 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(7.5b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 3 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む。φ0.5~1cmの礫をやや多く含む)
- 4 7.5Y3/1 オリーブ黒色 粗砂混じり砂質シルト
(2.5Y3/2黒褐色粘質シルトブロックを層上半に含む。炭化物をやや多く含む)
- 5 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト
(5Y5/1灰色粘質シルトブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)
- 6 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(5Y5/1灰色粘質シルトブロックを少量含む。φ0.5~1cm程度の礫を少量含む)

[481柱穴]

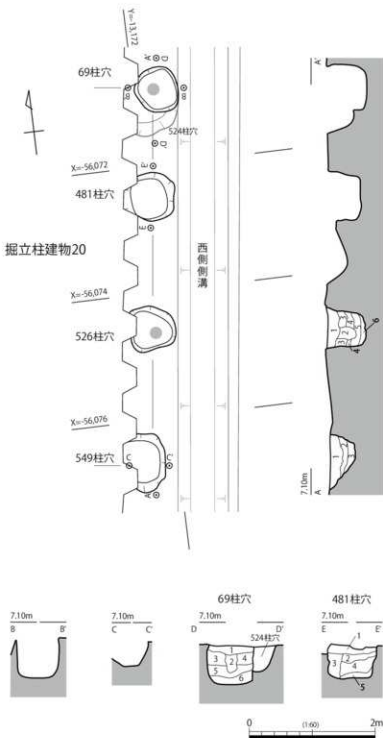
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 粗砂混じり極細砂
(φ5mm程度の礫をやや多く含む。4.3bブロックを少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 粗砂混じり砂質シルト
(φ5mm~10mm程度の礫を少量含む。炭化物を少量含む)
- 3 5Y3/2 オリーブ黒色 粗砂混じり粘質シルト
(φ1cm程度の礫をやや多く含む。炭化物を少量含む)
- 4 2.5Y3/1 黒褐色 粗砂混じり粘質シルト
(φ1cm程度の礫を少量含む。炭化物を微量含む)
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色 粗砂混じり粘質シルト
(φ1cm程度の礫を少量含む)

[526柱穴]

- 1 10YR5/1 褐灰色 中~粗砂混じり砂質シルト
(φ1~2cmの礫を微量含む。5.1a~6.2a層ブロックを少量含む。炭化物を多く含む)
- 2 10Y5/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(炭化物を少量含む)
- 3 7.5Y5/1 灰色 粗砂混じり粘質シルト
(5.1a~6.2a層ベース上ブロックを多く含む。側方中心にφ1cm以内の礫を多く含む)
- 4 N4/ 灰色 極粗砂混じり粘質シルト
(5.1a層ベース上ブロックを少量含む。φ1~4cm大の礫を少量含む。炭化物を多く含む)
- 5 5Y5/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(φ1~2cm大の礫を多く含む。炭化物を少量含む。5.1a~7.5b層ブロックを含む)
- 6 5Y3/1 オリーブ黒色 中砂混じり粘質シルト
(5.1a~7.5b層ベース上ブロックを少量含む)

[549柱穴]

- 1 2.5Y4/1 黄灰色 粗砂混じり粘質シルト
(5.1a~6.2a層ブロックを多く含む。炭化物を多く含む)
- 2 2.5Y5/1 黄灰色 中砂混じり粘質シルト
(5.1a~6.2a層ブロックを多く含む。炭化物を少量含む)
- 3 N5/ 灰色 粗砂混じり粘質シルト
(5.1a~6.2a層ブロックを多く含む。炭化物を少量含む)



第47図 掘立柱建物20

は重複しており、524柱穴を切り込むように69柱穴が掘り込まれていることから、本建物の方が掘立柱建物7よりも新しい。

柱穴から出土する土器片の特徴から、本建物の帰属する時期は9世紀前半頃であると考えられる。

掘立柱建物21(第48図 写真図版23)

調査区南西端部 1B-10g・h～2B-1g・hに位置する東西方向の掘立柱建物である。轍内に位置するため部分的に遺存状況の悪い箇所があったが、検出自体は容易であった。梁行2間(3.3m)、桁行3間(4.4m)の側柱建物で、建物の主軸はN-74.3°-W、身舎の面積は14.3㎡を測る。

柱穴掘方の平面形は、やや不整な長楕円形を呈するものが多く、大半は長径50～70cm、短径30～50cmを測る。北東隅に位置する181柱穴のみ、長径100cm、短径75cmとやや規模が大きいが、これについては轍の荷重による影響を受けた可能性が高い。検出面からの深さは20cmを主体とするが、20～60cmと一定しない。柱穴の掘方埋土は灰色～黄灰色のシルトを主体とし、これに下位層起源のブロック及び炭化物を含んでいる。柱穴内には柱根や礎板等は認められなかったが、一部の柱穴で灰色シルトの柱根を検出した。

本建物は、178柱穴が掘立柱建物15、187柱穴が掘立柱建物13とそれぞれ重複関係にあり、いずれもこれらに切り込まれていることから、これらよりも古い段階の建物であることが分かる。

176柱穴内からは、8世紀末～9世紀前半の須恵器坏(Po45)が出土した。この資料が、本建物の帰属時期を示すとみられる。

掘立柱建物22(第49図 写真図版23)

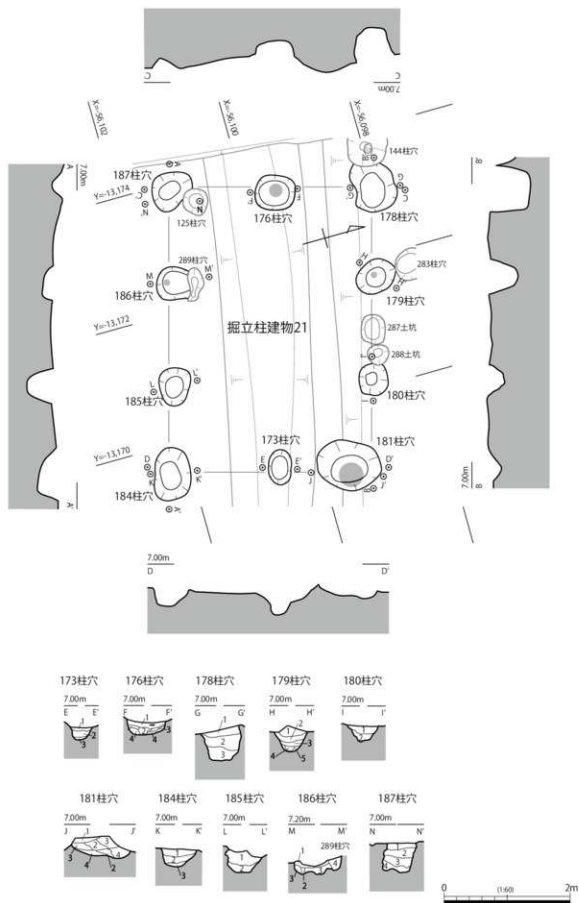
調査区南西隅 1B-10g・hに位置する南北方向の掘立柱建物である。本建物は、轍内に位置していたこと、また西側側溝に隣接していること等から、建物の全容を確認出来ていない可能性がある。建物の規模は、現状確認出来ている範囲では、梁行2間(2.7m)、桁行3間(3.5m)の側柱建物と想定出来、建物の主軸はN-16.0°-E、身舎の面積は9.4㎡を測る。

本建物の柱間寸法は、梁行方向が1.3～1.5m、桁行方向が1.0～1.3mと、その他の建物と比較して著しく小さい点が特徴である。さらに、西側桁行の柱穴は既して北側に詰まって配されており、全体としての柱通りはやや悪いものとなっている。ただし、該当箇所は轍の荷重が強く及んでいた個所にあたるため、側方へのズレが生じた可能性もあり、この不整合が建物本来のものであるか否かについては判断に決め手を欠く。

柱穴掘方の平面形は、やや不整形な楕円形を呈するものが多く、長径60～100cm、短径40～70cmとややばらつきがあるが、検出面からの深さは40～60cmと概ね一定している。柱穴埋土は、灰色～黄灰色シルトに下位層起源のブロックや炭化物粒を含むものであり、一部の柱穴ではオリーブ黒色～灰色シルトの柱痕跡を検出した。

なお、建物内部には283柱穴が存在しているが、周辺には本柱穴によって構成される掘立柱建物も認められなかったことから、この柱穴に関しては本建物を構成するものとして捉えた。床東や廂付建物の身舎を構成する柱穴の可能性はあるが、詳細は不明である。

本建物は、掘立柱建物12・15・24を構成する柱穴とそれぞれ重複関係にあるが、いずれの建物の柱穴も本建物の柱穴を切り込んでいるため、これらの中では最古の建物であることが分かる。柱穴から出土した土器片の特徴から、本建物の帰属する時期は、9世紀前半頃であると考えられる。



第48図 掘立柱建物21

[173柱穴]

- 2.5Y3/1 黒褐色 極細砂～細砂
(5-1a～6-2a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (6-1・2a層ブロックを多く含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[176柱穴]

- 7.5Y5/1 灰色 砂質シルト (炭化物、須恵器を含む)
- 5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (炭化物を多く含む)
- 5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (6-3b層ブロックを多く含む)
- 7.5Y6/1 灰色 極細砂 (6-3b層ブロックを極めて多く含む)

[178柱穴]

- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(1.5m中心に5-1a層ブロックを多く含む。炭化物粒を少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(5-1a～6-2a層ブロックを極度に多く含む。炭化物を多く含む)
- 10Y5/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (φ1～2cm大の7.5Y4/1灰色粘質シルトのブロックを多く含む。6-3b層ブロックを極めて多く含む)

[179柱穴]

- 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)
- 5Y5/1 灰色 砂質シルト (5-1a～6-2a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 極細砂～細砂 (6-1a～6-3b層ブロックを多く含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[180柱穴]

- 5Y4/1 灰色 極細砂
(5-1a～6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
(6-1a～6-3b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)

[181柱穴]

- 2.5Y4/1 黄灰色 粗砂混じり極細砂 (6-1・2a層ブロックを多く含む)
- 5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(東方中心に6-1a～6-3b層ブロックを少量含む)
- 5Y5/1 灰色 中砂混じり砂質シルト (6-1a～6-3b層ブロックを多く含む)
- 5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (6-1a～6-3b層ブロックを多く含む)

[184柱穴]

- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(5-1a～6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6-1a～6-3b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[185柱穴]

- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(5-1a～6-2a層ブロックを微量含む。炭化物を少量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト (6-1a～6-3b層ブロックを多く含む)

[186柱穴]

- 5Y4/2 灰オリーブ色 粘質シルト (5-1a層ブロックを微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a～6-2a層ブロックを少量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6-1・2a層ブロックで形成される)
- 5Y4/2 灰オリーブ色 粘質シルト
(5-1a～6-2a層ブロックをやや多く含む)

[187柱穴]

- 5Y4/1 灰色 砂質シルト (4-3b層ブロックを微量含む)
- 5Y5/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(4-3b～5-1a層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト
(6-3b層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)
- 7.5Y5/1 灰色 シルト混じり中砂 (6-3b層ブロックを極めて多く含む)

掘立柱建物21(第48図)の土層註記

掘立柱建物23(第50図 写真図版23)

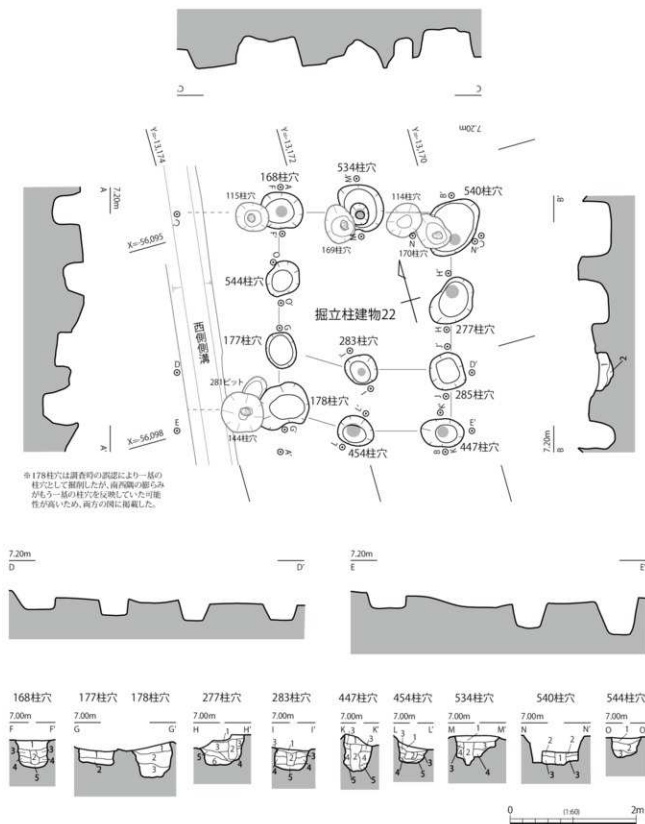
調査区南西部1B-10gにおいて、ほぼ単独で位置する南北方向の掘立柱建物である。本建物が位置するグリッド周辺は17耕作溝群の影響が特に強く及んでいたため、遺構の検出が大変困難であった。そのため、部分的に柱穴の検出漏れが生じた可能性も否定出来ないが、確認できた柱穴からすれば梁行2間(3.6m)、桁行2間(4.9m)の側柱建物に復元が可能である。建物の主軸はN-17.3°-E、身舎の面積は17.6㎡を測る。

柱間寸法は、北側の梁行方向で1.8m、南側は西側がやや狭く1.5mと2.1mを測る。一方の桁行方向については、263柱穴を除いて考えると2.2～2.7mと幅が大きく、均整を欠く柱穴配置となっている。なお、建物北辺の両隅においては、ほぼ同じ位置で重複関係にある柱穴を検出している。いずれの柱穴が建物に該当するかについては、詳細を明らかにし難かったが、周辺には建物を構成する柱穴列も認められなかったため、本建物を構成するものとして捉えている。

柱穴掘方の平面形は、やや整った円形を示すものが多く、径30～60cm、検出面からの深さ10～40cmをそれぞれ測る。柱穴埋土は、灰色を基調とするシルトに、炭化物や下位層起源のブロックを多く含む。柱根が遺存する柱穴は認められなかったが、灰色～黒褐色シルトの柱痕跡を大半の柱穴で確認した。

189・191柱穴からは径20～40cm大の礫が出土しているが、これらの礫は、埋土中～上位に位置していることから、根石などの機能を有していたとは考えにくい。建物廃絶時の埋戻しなどの過程において投棄された可能性が高いと考えられるが、詳細は明らかではない。

柱穴内からは、9世紀代と考えられる須恵器高台付坏(Po46)等が出土した。このため、本建物の帰属時期は9世紀代と考えられる。



第49図 掘立柱建物22

[168柱穴]

- 2.5Y5/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを中位に多く含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(潮法良い、下平中心に ϕ 5mm大のブロックを少量含む)
- 5Y5/1 灰色 細砂混じり砂質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックを多く含む、炭化物を少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックを少量含む、炭化物を少量含む)
- 7.5Y6/1 灰色 粘質シルト混じり細砂
(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[177柱穴]

- 2.5Y4/1 灰色 粘質シルト
(6-1~2a層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 細砂混じり砂質シルト
(5-1a~6-3b層ブロックを多く含む)

[178柱穴]

- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(上平中心に5-1a層ブロックを多く含む、炭化物粒を少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを層状に多く含む、炭化物を多く含む)
- 10Y5/1 灰色 細砂混じり粘質シルト (ϕ 1~2mm大の7.5Y4/1灰色粘質シルトのブロックを多く含む、6-3b層ブロックを極めて多く含む)

[277柱穴]

- 2.5Y5/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト
(5-1a層ブロックを多く含む、炭化物粒を少量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(潮法良い、下平中心に ϕ 5mm大の5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- 5Y5/1 灰色 極細砂~砂質シルト
(側方下平中心に5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト
(ϕ 1mm大の6-1a~6-3b層ブロックを極めて多く含む)
- 5Y6/2 灰オリーブ色 細砂~極細砂
(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)
- 7.5Y4/1 灰色 細砂 (6-3b層ブロックを多く含む)

[283柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂~細砂
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(6-1~2a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックをやや多く含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[285柱穴]

- 2.5Y5/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを多く含む、炭化物を少量含む)
- 2.5Y5/1 オリーブ灰色 中砂混じり極細砂
(6-3b層ブロックを多く含む)

[447柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂~細砂
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 砂質シルト
(5-1a~6-3b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 極細砂~細砂
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 極細砂 (6-1a~6-3b層ブロックをやや多く含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト (ほぼ6-1~2a層ブロックで形成)

[454柱穴]

- 2.5Y4/1 黄灰色 極細砂
(4-3b~6-1~2a層ブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを微量含む)
- 5Y5/1 灰色 細砂混じり砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- 5Y6/1 灰色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを極めて多く含む)
- 5Y5/1 灰色 砂質シルト (5-1a~6-3b層ブロックを多く含む)

[534柱穴]

- 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂~細砂
(5-1a層ブロックをやや多く含む、炭化物少量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y5/1 黄灰色 砂質シルト (5-1a~6-2a層ブロックを多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (6-1~2a~6-1~2a層ブロックを多く含む)

[540柱穴]

- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y5/1 黄灰色 砂質シルト
(6-1~2a層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックを多く含む)

[544柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(5-1a~6-1a層ブロックを微量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 粘質シルト
(5-1a~6-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色 砂質シルト
(6-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)

掘立柱建物22(第49図)の土層註記

掘立柱建物24(第51図 写真図版22・23)

調査区南西部1B-10g・hに位置する南北方向の掘立柱建物である。検出状況から梁間2間(3.2m)、桁行2間(3.6m)、建物の主軸をN-16.0°-Eにもつ側柱建物を想定しているが、西側の側柱の一部を欠いていることから、さらに西側に建物が延長する可能性もある。また、周辺一帯は4-2a層の影響が特に強く及ぶ箇所に相当し、遺構検出が困難であったグリッドにあたるため、検出漏れの柱穴が存在した可能性もある。ただ、434柱穴などを候補に梁間2間、桁行3間の東西棟の側柱建物を復元したとしても、これに対応する隅柱を検出出来ていないため、調査所見をもとに2間×2間の側柱建物と捉えて報告を行う。

柱穴の掘方は平面不整な円形を呈し、長径40~60cm、短径30~45cm、検出面からの深さ30~60cmと、概して深く小振りなものが大半を占める。柱穴埋土は、灰色~黄灰色シルトを基調とし、これに下位層起源のブロックや炭化物が混じるものである。南側の柱筋にある169・170柱穴では、径12cm以下の細身の柱根を検出している他、一部の柱穴からは黒褐色シルトを基本とする柱痕跡を確認した。

本建物は、掘立柱建物12・22を構成する柱穴と重複関係にある。それぞれの重複関係から、本建物は掘立柱建物12よりも古く、掘立柱建物22よりも新しいと考える。

203柱穴内からは、8世紀後半~9世紀前半の須恵器高台付環(Po47・Po48)が出土した。これらか

[189 柱穴]

- 5Y4/1 灰色 極細砂
(5-1a層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを少量含む,炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む,炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

[190 柱穴]

- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(炭化物を多く含む,6-1a~6-3b層ブロックを少量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(6-3b層ブロックを多く含む)
- N4/ 灰色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを極めて多く含む)
- N4/ 灰色 粘質シルト
(5-1a~6-3b層ブロックを極めて多く含む)

[191 柱穴]

- 2.5Y3/2 黒褐色 極細砂
(5-1a層ブロックを少量含む,炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを多く含む)

[192 柱穴]

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂~細砂
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む,炭化物を微量含む)

[200 柱穴]

- 7.5Y4/1 灰色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを多く含む)
- N4/ 灰色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを極めて多く含む)

[201 柱穴]

- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(炭化物を多く含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを多く含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを極めて多く含む)
- N4/ 灰色 中砂混じり粘質シルト
(炭化物を少量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト
(5-1a~6-3b層ブロックを多く含む)

[241 柱穴]

- 2.5Y4/1 黄灰色 中砂混じり粘質シルト
(5-1a層ブロックを少量含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 粗砂混じり粘質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックをやや多く含む)

[261 柱穴]

- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(上半中心に5-1a~6-2a層ブロックを多く含む)
- 7.5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- N4/ 灰色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a~6-3b層ブロックを多く含む)
- 7.5Y6/1 灰色 粗砂混じり粘質シルト
(5-1a~6-3b層ブロックを多く含む)

[263 柱穴]

- 5Y3/1 オリーブ黒色 中砂混じり粘質シルト
(炭化物を多く含む,6-3b層ブロックを少量含む)
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混じり粘質シルト
(炭化物を多く含む,6-3b層ブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 細砂混じり粘質シルト
(5-1a~6-3b層ブロックを極めて多く含む)242

[242 柱穴]

- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックをやや多く含む,炭化物を微量含む)

[275 柱穴]

- 5Y3/2 オリーブ黒色 極細砂~細砂
(5-1a層ブロックをやや多く含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト
(5-1a~6-3b層ブロックをやや多く含む,炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックを多く含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
(ほぼ6-3b層ブロックで形成される)

掘立柱建物23(第50図)の土層註記

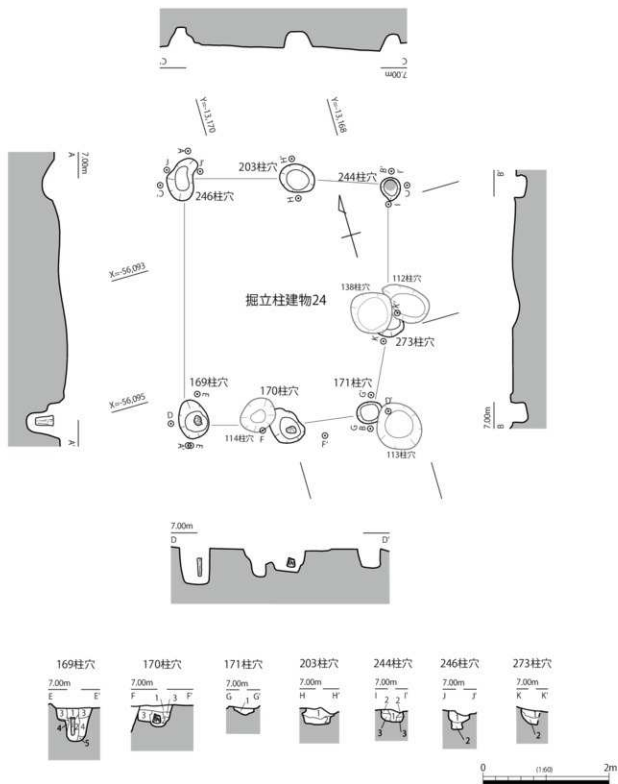
ら、本建物の帰属時期は9世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物25(第52図 写真図版20)

調査区北部1B-6f・g~7f・gに位置する南北方向の掘立柱建物である。建物西側の柱通りが良くないものの、568・571・581・582柱穴を隅柱とする梁行2間(4.1m)、桁行3間(6.9m)の側柱建物であると考えられる。建物主軸はN-15.0°-E、身舎の面積は28.2㎡を測る。柱間寸法は、梁行方向は1.7~1.8mと均整のとれた数値を示すが、桁行方向は2.0~2.5mとなりばらつきが大きくなる。

柱掘方はやや不整な楕円形を呈するものが多く、長径40~60cm、短径40~50cmをそれぞれ測る。検出面からの深さは、563・564柱穴のように10cm程度と極めて浅くなるものもあるが、30~40cmが基本となる。柱掘方埋土は暗灰黄色~灰色の砂質シルトを主体としており、下位層起源のブロックや炭化物を含む傾向にある。567・571・585柱穴には柱根が残存しており、直径10~15cmを測る。なお、建物北側及び567-573柱穴間に位置する563・564・578・586柱穴は配置に均整がとれておらず、また、掘方も側柱に比べて浅いものが多い。そのため、上記の柱穴は東柱、もしくは床束として利用されていたと推測する。

他にも、本項冒頭で述べたように、本建物は柱穴埋土の様相からすると4-2面で検出すべき遺構であったと考えられる。しかし、建物北側の流路際にかかる4-2a層が厚く堆積しており、それらの除去が不十分であったことから、4-2面の段階で柱穴の一部を検出することが出来なかった。その



第51図 掘立柱建物24

[169柱穴]

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 3 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む)
- 4 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを少量含む)
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
(6-3b層ブロックをやや多く含む)

[170柱穴]

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂~細砂
(5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)
- 2 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む)
- 3 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)

[171柱穴]

- 1 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト
(5-1a層ブロックを多く含む)

[203柱穴]

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂~細砂
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

[244柱穴]

- 1 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(5-1a層ブロックを少量含む)
- 3 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックをやや多く含む)

[246柱穴]

- 1 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックをやや多く含む)

[273柱穴]

- 1 5Y5/1 灰色 砂質シルト
(5-1a~6-2a層ブロックを多く含む)
- 2 5Y6/1 灰色 粗砂混じり粘質シルト
(6-1a~6-3b層ブロックを含む)

掘立柱建物24(第51図)の土層注記

ため、本建物は5面において建物として確認されたものであることを付記しておく。

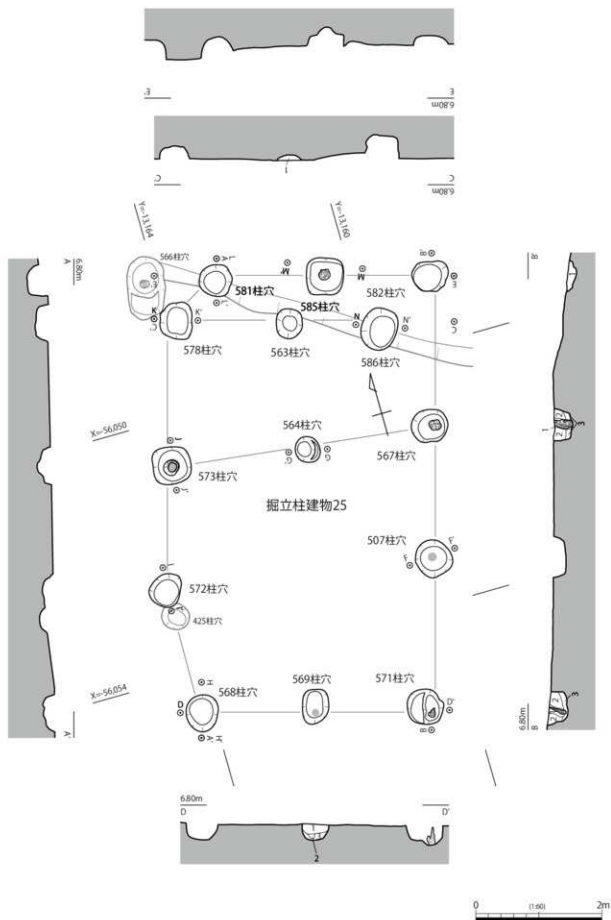
付近には重複する柱穴が存在しないため、他の建物との先後関係は不明であるが、568柱穴からは8世紀後半~9世紀前半とみられる須恵器高台付坏片が出土していることから、この建物の帰属時期は、4~2面検出建物からすれば9世紀代と考えられる。

掘立柱建物26(第53図 写真図版20・21)

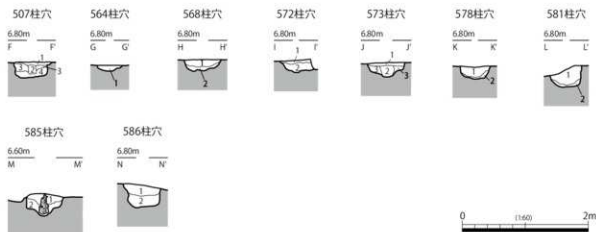
調査区北西1B-5gに位置する南北方向の掘立柱建物である。本建物についても5面において検出しているが、掘立柱建物25と同様、本来4~2面に属する遺構である。梁行2間(3.0m)、桁行2間(3.8m)の側柱建物で、建物主軸はN-13.4°-E、身舎の面積は11.4㎡を測る。柱間寸法は、桁行方向は1.7~2.0m、梁行方向は1.5~1.6mを基本としており、梁行方向に比べて桁行方向がやや広い。

柱穴の掘方は不整な楕円形を呈するものが多く、それぞれ長径60~100cm、短径50~60cmを測る。検出面からの深さは20~40cmとややばらつきがある。柱掘方埋土は暗灰黄色~灰色の砂質シルトを主体とし、下位層起源のブロックや炭化物を微量含む。561・562・570柱穴は黄灰色~黒褐色の粘質シルトを埋土とする柱痕跡が認められ、平面規模は直径15~20cmを測る。また、560・566柱穴には柱根が残存していた。560柱穴で出土した芯持の丸太材には枝が残っており、整形があまりに不十分であるため、柱としては違和感を覚える。しかし、出土状況及び柱掘方埋土の所見から柱根と判断した。

本建物を構成する柱穴には重複関係にあるものが確認出来ないため、周辺の建物との先後関係を明らかにし得ない。しかし、566柱穴からは8世紀末~9世紀前半の須恵器蓋片が出土していることから、この建物の帰属時期は9世紀前半頃と推定される。



第52-1図 掘立柱建物25(1)



第52-2図 掘立柱建物25(2)

〔507柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを微量含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト
(炭化物を微量含む)
- 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト
(7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)

〔563柱穴〕

- 5Y5/1 灰色 砂質シルト
(6.1a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)

〔564柱穴〕

- 2.5Y4/1 灰色 極細砂～細砂
(4.3b層ブロックをやや多く含む)

〔567柱穴〕

- 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト
(7.1a層ブロックを微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックをやや多く含む)

〔568柱穴〕

- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(4.3b・7.1a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 7.5Y4/1 灰色 粘質シルト
(ほぼ7.5b層ブロックで形成)

〔569柱穴〕

- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックを少量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 極細砂
(7.5b層ブロックを多く含む)
- 2.5Y4/1 灰色 極細砂～細砂
(ほぼ7.5b層ブロックで形成)

〔571柱穴〕

- 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト
(7.1a層ブロックを微量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックをやや多く含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックをやや多く含む)

〔572柱穴〕

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
(4.3b層ブロックを微量含む。炭化物を微量含む)
- 2.5Y4/1 灰色 粘質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックを少量含む)

〔573柱穴〕

- 2.5Y3/2 黒褐色 極細砂
(4.3b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)

〔578柱穴〕

- 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(ほぼ7.5b層ブロックで形成)

〔581柱穴〕

- 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 中砂混じり粘質シルト
(層下半に7.5b層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)

〔582柱穴〕

- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

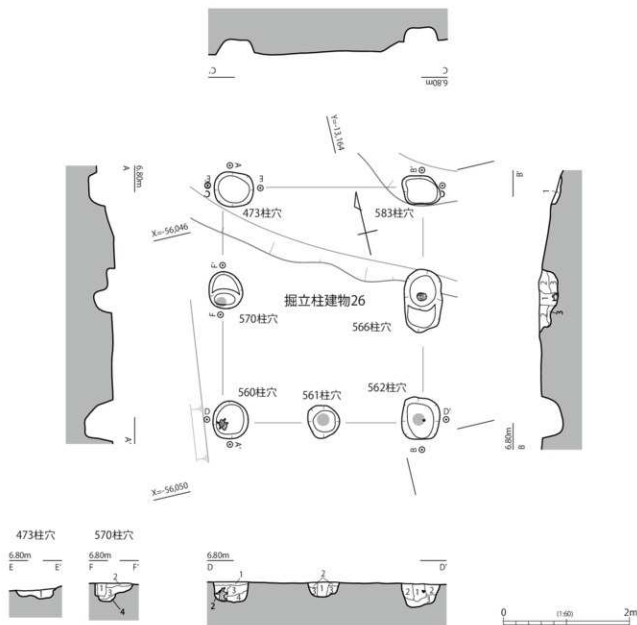
〔585柱穴〕

- 5Y4/1 黄灰色 粘質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックをやや多く含む)

〔586柱穴〕

- 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(4.3b・7.1a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 5Y5/1 灰色 粘質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

掘立柱建物25(第52図)の土層註記



[473柱穴]
1 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂
(4-3b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)

[560柱穴]
1 2.5Y3/2 黒褐色 中砂混じり砂質シルト
(6-1a・6-2a層ブロックをやや多く含む)
2 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(6-2a・7-1a層ブロックを少量含む)
3 2.5Y3/1 黒褐色 粘質シルト
(6-2a・7-1a層ブロックを微量含む、炭化物を微量含む)
4 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(7-1a・7-5b層ブロックを微量含む、炭化物を微量含む)

[561柱穴]
1 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト
(7-1a・7-5b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
2 5Y4/1 灰色 砂質シルト
(7-1a・7-5b層ブロックをやや多く含む)
3 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(7-5b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)

[562柱穴]
1 2.5Y3/1 黒褐色 粘質シルト
(6-2a・7-1a・7-5b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
2 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(7-1a層ブロックを微量含む、炭化物を微量含む)
3 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(7-1a・7-5b層ブロックを多く含む)

[566柱穴]
1 5Y4/1 灰色 極細砂
(6-2a・7-1a・7-5b層ブロックを少量含む、炭化物を微量含む)
2 2.5Y4/1 黄灰色 中砂混じり砂質シルト
(6-2a・7-1a・7-5b層ブロックをやや多く含む、炭化物を微量含む)
3 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(7-5b層ブロックを多く含む)

[570柱穴]
1 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質シルト
(7-1a・7-5b層ブロックを微量含む、炭化物を微量含む)
2 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(6-2a・7-1a層ブロックをやや多く含む)
3 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(7-1a・7-5b層ブロックを多く含む、炭化物を少量含む)
4 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(ほぼ7-5b層ブロックで形成される)

[583柱穴]
1 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト
(7-5b層起面のブロックを少量含む、炭化物を微量含む)

第53図 掘立柱建物26

掘立柱建物27(第54図 写真図版20・21)

調査区北西1B-5g・6gに位置する南北方向の掘立柱建物である。本建物についても、本来ならば4-2面で検出すべきであったが、実際には5面の遺構検出時に確認された。梁行2間(3.0m)、桁行2間(4.0m)の側柱建物で、建物主軸はN-14.2°-E、身舎の面積は12.1㎡を測る。柱間寸法は、梁行方向は1.5m、桁行方向は2.0-2.1mを測り、梁行方向に比べて桁行方向が若干広くとられている。

柱穴の掘方は、西側側溝により一部を欠いているものもあるが、概ね整った円形を呈するものが多い。長径50-80cm、短径40-50cmを測る。検出面からの深さは20-50cmとばらつきがある。柱掘方埋土は黄灰色～灰色の砂質シルトを主体としており、下位層起源のブロックや炭化物を含む。558柱穴からは灰色粘質シルトの埋土を持つ柱痕跡を確認することが出来、直径20cmを測る。

本建物を構成する柱穴の中には、他の建物と重複関係にある柱穴が存在しないため、周辺の建物との先後関係は不明である。柱穴から出土した土器は古墳時代の土師器であるが全て細片であり、本来的には7-1a層以下に含まれるものである。この建物の帰属時期は、4-2面検出建物の状況からみて、9世紀代と推定される。

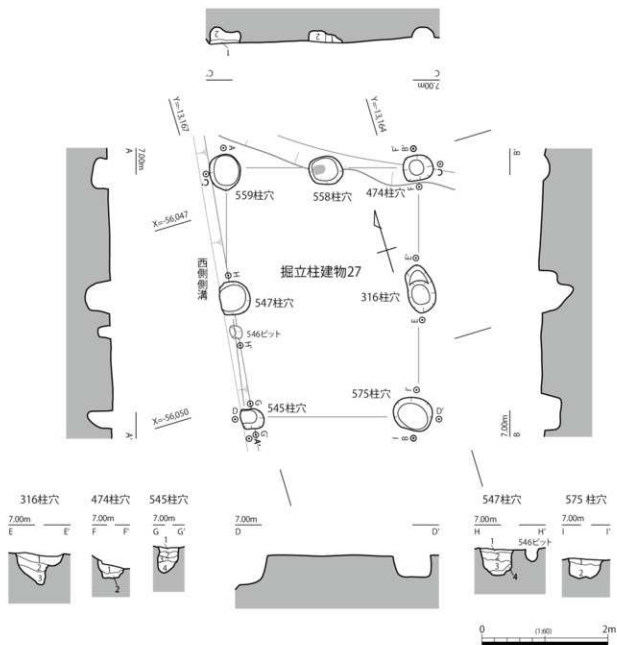
掘立柱建物28(第55図 写真図版13・14)

調査区東1B-7gに位置する南北方向の掘立柱建物であり、建物の半分近くが後世の溝により削平を受けている。また本建物も、検出した柱穴の一部は5面の遺構検出時に見つかったものであり、精査の過程でベースとなる7-1a層を少し掘り下げているため、柱穴上部の大部分を欠いている。建物の桁行は2間(3.5m)、梁行は明確ではないが2間(3.3m)の規模を持つ側柱建物であると推定される。建物主軸はN-12.4°-Eであり、身舎の面積は11.5㎡である。柱間寸法は、梁行方向は1.8m、桁行方向は1.5-2.1mをそれぞれ測る。

柱穴の掘方は不整な楕円形を呈するものが多く、それぞれ長径60-110cm、短径40-70cmを測る。検出面からの深さは5-40cmとばらつきが大きいのが、これは先述の通り柱穴の大部分が削平を受けていることに起因する。柱掘方埋土は黄灰色～灰色の砂質シルトを主体とし、下位層起源のブロックや炭化物を含む。370柱穴からは黄灰色の砂質シルトを埋土とする柱痕跡を見出すことが出来、平面規模は直径20cmを測る。

本建物は掘立柱建物1・4と重複関係にある。本建物を構成する370柱穴は掘立柱建物1の23柱穴に切り込まれている。また、本建物602柱穴は掘立柱建物4の47柱穴を切るようにして掘り込まれている。これらを整理すると、本建物は掘立柱建物1よりも古く、掘立柱建物4よりも新しいと言える。

370柱穴からは、9世紀代とみられる須恵器坏細片が出土していることから、この建物の帰属時期は9世紀代と推定される。



[316柱穴]

- 1 2.5Y5/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト
(7.5b層ブロックを少量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト
(7.5b層ブロックを少量含む)
- 3 7.5Y7/1 灰白色 中砂混じり粘質シルト
(有機物を少量含む)

[474柱穴]

- 1 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(4.3b層ブロックを少量含む)
- 2 7.5Y5/1 灰色 極細砂
(4.3b層ブロックを多く含む)

[545柱穴]

- 1 2.5Y4/2 暗灰褐色 砂質シルト
(5.1a・6.1a層ブロックを微量含む)
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色 細砂
(5.1a・6.1a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 3 7.5Y4/1 灰色 極細砂
(6.2a・7.1a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 4 5Y5/1 灰色 極細砂～細砂
(7.1a層ブロックを多く含む)

[547柱穴]

- 1 2.5Y4/1 黄灰色 極細砂
(6.1a・6.2a層ブロックをやや多く含む。土器片を微量含む)
- 2 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト
(6.1a・6.2a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 3 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(7.1a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色 粘質シルト
(7.5b層ブロックを層下半に多く含む)

[558柱穴]

- 1 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト
(7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックをやや少量含む。炭化物を微量含む)

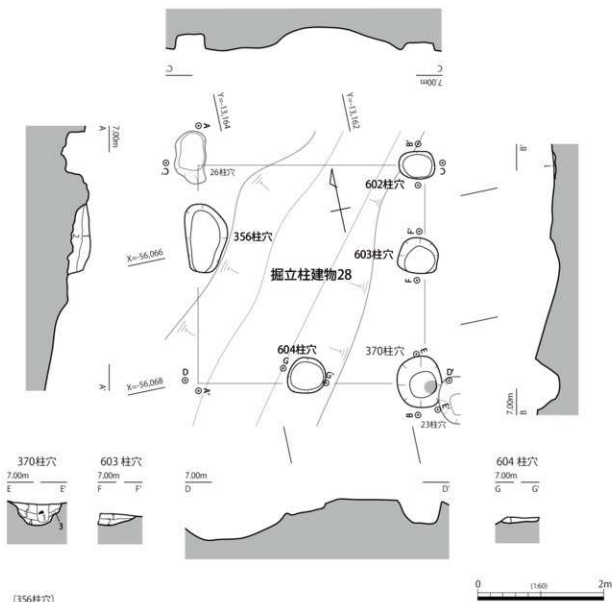
[559柱穴]

- 1 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(6.2a・7.1a・7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 中砂混じり粘質シルト
(7.1a・7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)

[575柱穴]

- 1 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト
(4.3b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 2 5Y4/1 灰色 粘質シルト
(7.1a層ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)

第54図 掘立柱建物27



[356柱穴]

- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細砂～中砂 (4.3b層ブロックをやや多く含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (4.3b・7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

[370柱穴]

- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (海況良い。下半中心に ϕ 5mm 大のブロックを少量含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色 極細砂～細砂 (4.3b層ブロックをやや多く含む。炭化物粒を微量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト (4.3b・7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト (7.5b層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)

[602柱穴]

- 2.5Y5/1 黄灰色 極細砂 (7.5b層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)

[603柱穴]

- 5Y5/1 灰色 砂質シルト (7.1a・7.5b層のブロックを少量含む)
- 5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト (7.5b層ブロックを多く含む)

[604柱穴]

- 5Y4/1 灰色 中砂混じり粘質シルト (7.5b層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)

第55図 掘立柱建物28

(2) 柵列**柵列1～3(第56図～第58図 写真図版26)**

調査区南半部中央1B-10e～fで検出した東西方向の柱穴列である。径20～40cm、深さ25～35cmの柱穴が一定の間隔をもって列を成しており、そのうちの多くには柱痕跡が認められたことから、これらの間に有機的な関連を認め、柵列として捉えた。柵列は全部で3列を確認しており、北側から柵列1、柵列3、柵列2と呼称した。

柵列1・2は、概ね1.7m間隔で並行して配置されており、445・449柱穴でやや曲折する点に至るまではほぼ一対一の関係で対応していることから、2列1組で機能していた可能性が高い。柵列の主軸は、両端を繋ぐと概ねN-81.2°-Wを測る。一方の柵列3は、柵列1・2とやや軸を違え、配置もやや西寄りとなること、さらには、柵列2を構成する312柱穴に重複されていること等の諸点から、同一機能を持つ柵列の古い段階のものとして想定することが出来よう。ただし、柵列3に対応する同一軸の柵列の検出には至っていない。

当該柵列一帯は、17耕作溝群が極めて密に重複し合っている地点にあるため、これらの柱穴列の検出は困難を極めた。したがって、柵列3に対応する柱列については検出漏れが生じた可能性もあるが、詳細は不明である。柵列3の主軸は、N-79.8°-Wを測る。

柵列1・2の柱間寸法は、3.0mを基本として2.6～3.2mを測る。柵列3の柱間寸法はやや広く、3.2～3.3mを測る。柱穴の埋土は、いずれの柱穴も灰色～黄灰色シルトを基調とし、これに下位層起源のブロックと炭化物を少量含む点でほぼ共通している。柱穴から柱根や礎板などは確認出来なかったが、多くの柱穴において、やや暗色味の強い灰色シルトの柱痕跡を確認した。

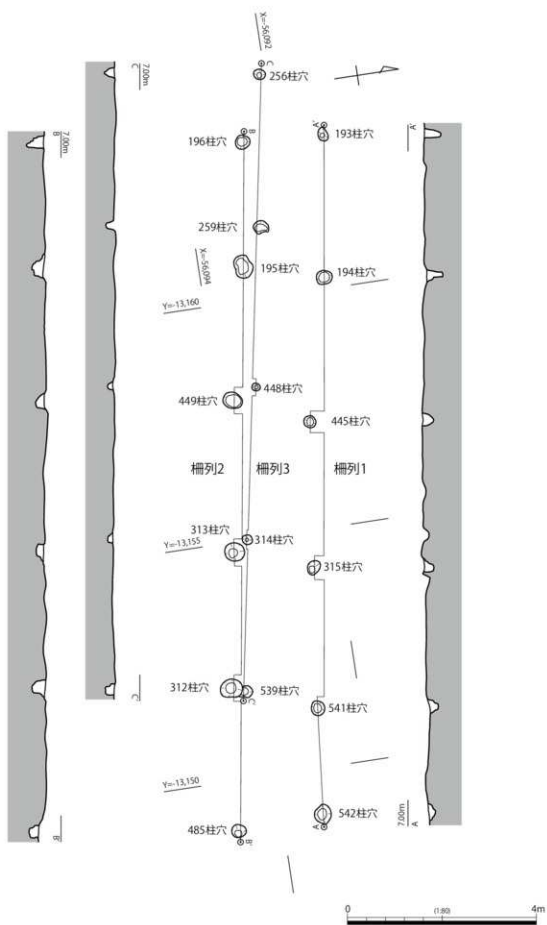
付近一帯では、本柵列を除けば遺構はほとんど認められず、空地の様相を呈している。このことから、柵列1～3は、西側に展開する建物群へと至る道や、これを区画する塀のような機能を有していたと想定される。

柵列4・5(第59図)

調査区中央部やや南寄りの1B-9e～gに位置する東西方向の柱穴列である。轍跡の荷重変形の影響を強く受けており、柵列を構成する柱穴全てを検出出来ていない可能性もあるが、平面の径約30cm、検出面からの深さ約10cmと、ほぼ同規模の柱穴が直列する箇所を柵列として認識した。柵列の主軸は、柵列4がN-87.5°-W、柵列5がN-86.7°-Eを測る。


なお、本柵列に関連する可能性のある遺構として、柵列5の東隣1B-8～9eにかけて検出したピット集中部を挙げておきたい。このピット集中部は、15流路の地形の落ちに沿うように分布している。柵列1～5のように明確な列を成すものではなかったが、柵列4・5の延長から北側に曲折するようにも見受けられ、居住域と流路との境界に設けられた柵列などの機能を有していた可能性もある。

遺物はほとんど出土しておらず、土器細片が少量認められるのみであった。このため、具体的な帰属時期については不明である。





第56図 柵列1～3

柵列1

- 193柱穴
- 
- 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物少量含む)
 - 5Y4/1 灰色 粘質シルト (炭化物を微量含む)
 - 2.5Y3/1 黒褐色 細砂混じり粘質シルト (5-1a～6.2a層ブロックをやや多く含む)
 - 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6.3b層ブロックで形成される)


- 194柱穴
- 
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a～6.2a層ブロックを少量含む)
 - 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (5-1a層ブロックをやや多く含む)

- 315柱穴
- 
- 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物少量含む)
 - 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a～6.2a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
 - 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (6.1-2a層ブロックをやや多く含む)


- 541柱穴
- 
- 542柱穴
- 
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (5-1a～6.2a層ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む)

- 445柱穴
- 
- 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (5-1a層ブロックをやや多く含む。炭化物少量含む)
 - 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a～6.2a層ブロックを少量含む)
 - 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6.3b層ブロックで形成される)
 - 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (6.1-2a層ブロックをやや多く含む)

柵列2

- 195柱穴
- 
- 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (上平中心に4.3b層ブロックを多く含む)
 - 2.5Y5/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト (下位に4.3b層ブロックを多く含む)
 - 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (難方に4.3b～5.1a層ブロックを少量含む)
 - 2.5Y6/1 黄灰色 細砂混じり極細砂 (6.3b層ブロックを極めて多く含む)

- 196柱穴
- 
- 2.5Y5/1 黄灰色 細砂混じり砂質シルト (6.3b層ブロックを多く含む。炭化物粒を少量含む)
 - 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (耐久良い。6.3b層ブロックを中・下位に少量含む)
 - 5Y5/1 灰色 極細砂～砂質シルト (炭化物を含む)
 - 5Y5/1 灰色 極細砂～砂質シルト (6.3b層ブロックを多く含む)
 - 5Y7/1 灰白色 細砂 (ほぼ6.3b層ブロックで形成される)

- 312柱穴
- 
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a～6.2a層ブロックを少量含む)
 - 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト (5-1a～6.2a層ブロックをやや多く含む)
 - 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6.3b層ブロックで形成される)

- 313柱穴
- 
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a～6.2a層ブロックを少量含む)
 - 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a～6.2a層ブロックをやや多く含む)
 - 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (ほぼ6.3b層ブロックで形成される)

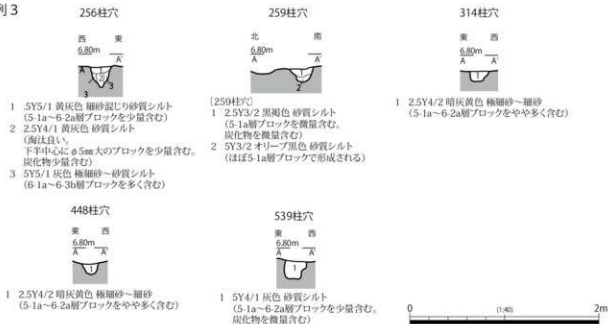
- 449柱穴
- 
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a～6.2a層ブロックを少量含む)
 - 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト (5-1a～6.2a層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
 - 2.5Y3/2 黒褐色 粘質シルト (6.1-2a層ブロックをやや多く含む)

- 485柱穴
- 
- 5Y4/1 灰色 粘質シルト (5-1a～6.2a層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)

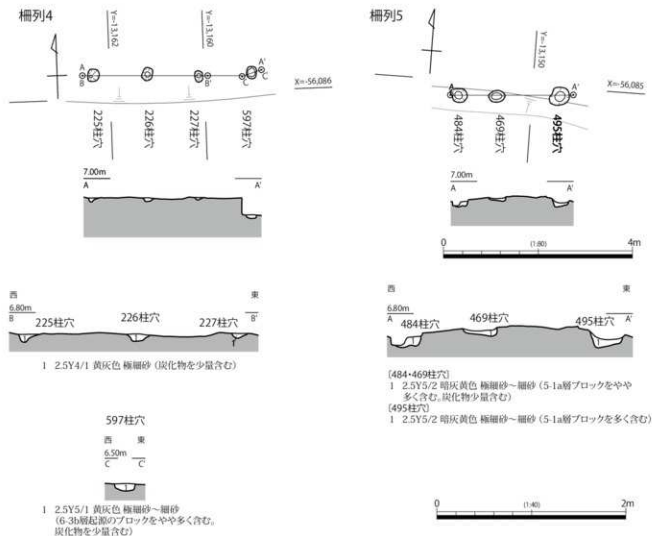


第57図 柵列1・2

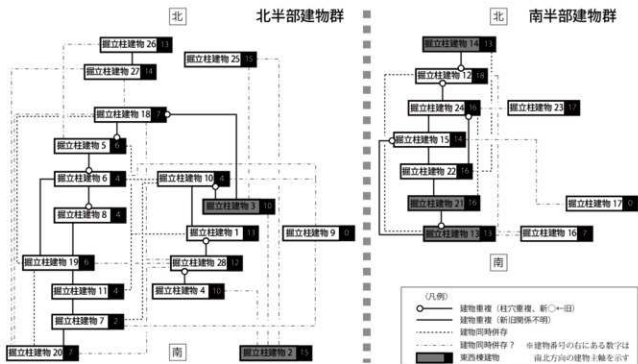
柵列3



第58図 柵列3



第59図 柵列4・5



第60図 掘立柱建物の重複関係

(3) 4面検出掘立柱建物群の重複関係と主軸(第60図)

先に述べてきた28棟に及ぶ掘立柱建物群は、調査区西西部を中心とした一帯で重複関係が多く認められ、遺物の示す年代観より、9世紀を通じて複数時期にわたって営まれたと推定出来る。これらの建物群の変遷を正しく把握するためには、まず、同時に併存する建物の抽出が不可欠である。

本建物群を構成する柱掘方埋土は、下位層起源のブロックを主体とするなど色調・質ともに近似した内容を示すものが多いことに加え、轍や地震痕跡といった各種の変形構造によって遺構面の状態が不良であったこともあり、遺構間の重複関係を把握しきれなかったものも一定量存在する。一方で、遺構面の遺存状態が良好な箇所では、建物間の重複関係を明瞭に認識できた箇所もあり、それらの多くは建物の主軸を僅かずつながら違えて建て替えられている。そこで、重複関係から想定できる建物群の時期差とそれぞれの示す建物軸の向きを簡潔にまとめ、その変遷を把握するための基礎的な整理を行う。

4面で検出した建物群の重複関係を整理した結果は、第60図のとおりである。柱穴の切り合いが認められるものを基準にみると、北半部建物群のうち最も古い掘立柱建物3は東西建物で、それと妻側柱列あるいは平側柱列を描える建物を抽出すると掘立柱建物4・25が同時併存の可能性を指摘し得る。南半部建物群は北半部建物群と先後関係を直接的に把握できないが、同様の想定をすれば東西建物が存在する可能性が高い。重複関係から同時併存が可能(あるいは不可能)ものを検討、抽出すれば、掘立柱建物14及び22が同時併存建物の候補となる。この想定をもとに建物群の変遷を考えた場合、特に北半部建物群は東西建物から南北建物へ、そして南北建物の主軸はより正方位に近い主軸へ移行していく傾向が看取される。そして調査範囲に限れば、建物数は集約されながら次第に大型化している可能性が高い。以上の傾向は、北半部及び南半部の主要建物の重複関係(掘立柱建物18→同5→同6、掘立柱建物4→同28→同1、掘立柱建物22→同24→同12→同15)からも明らかである。なお、独立し

た位置関係にある掘立柱建物2・9・16・17は、主軸方向から同時併存建物を推測した。掘立柱建物9・17など後出のものは15流路に近接して構築されており、その要因については、流路の変遷や祭祀遺物の出土傾向等も勘案して評価する必要がある。

(4) 柱穴

柱穴(第61図～第63図)

掘立柱建物を構成出来なかった土坑やピットのうち、柱根や柱痕跡、礎盤石や根石など明らかに柱を据えた可能性が高いと考えられたものを柱穴とした。柱穴は合計で50基弱あり、15流路を除くほぼすべての地区で検出している(第61図・第62図)。

第63図に掲げたものは、いずれも柱根や礎盤石が認められる主要な柱穴である。多くの柱穴は径40～60cm、検出面からの深さ20～30cmを測るが、266・321・477柱穴など柱根が残るもの多くは、40cm程度の深さを有している。柱根は、径8cm程度の細身のものが大半を占める。また、519柱穴は掘方埋土がほとんど認められず、柱根とほぼ同規模の掘方を有するなど、他の柱穴と比較して構造に明らかな違いがある。これは、柱穴の性格の違いを反映している可能性もあるが、詳細は不明である。

(5) 土坑

515土坑(第63図 写真図版38)

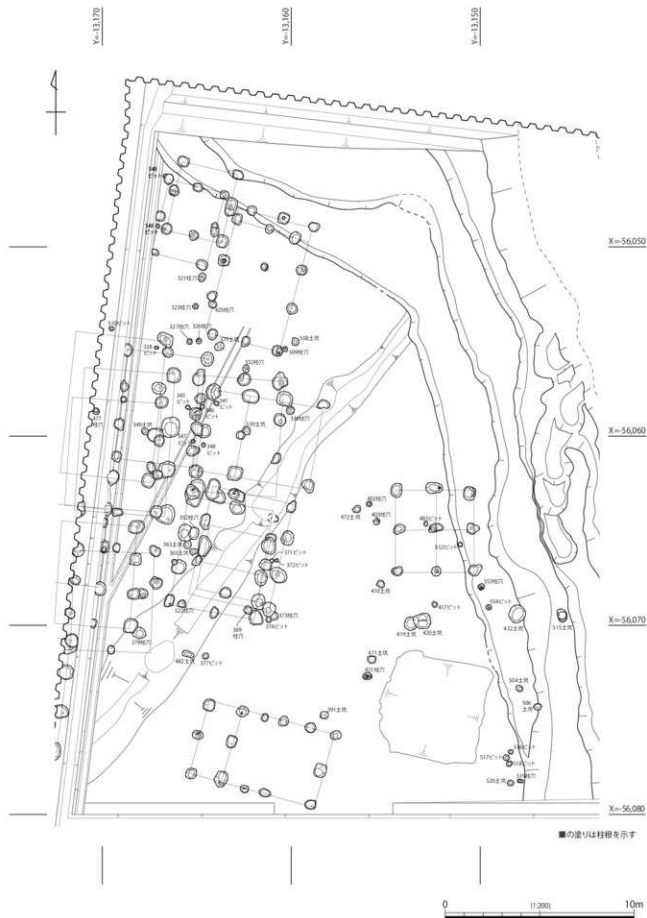
調査区中央部やや北東寄り、1B-7eに位置する土坑である。15流路の段差にかかっている状況から、掘立柱建物等の諸遺構と比較すると、80cm近い比高差がある。15流路の埋土を除去している過程で検出に至ったため、埋土の上半部を同時に掘削してしまったが、楕円形の輪郭を確認したことから、土坑として捉えて調査を行った。

土坑の掘方は、平面やや不整形な長楕円形を示し、長径70cm、短径50cm、検出面からの深さは19cmを測る。掘方の断面形状は、東側を除けば、やや緩やかに内湾する皿状ないしは2段階落ちを示し、東側は鋭角な落ちを形成する。

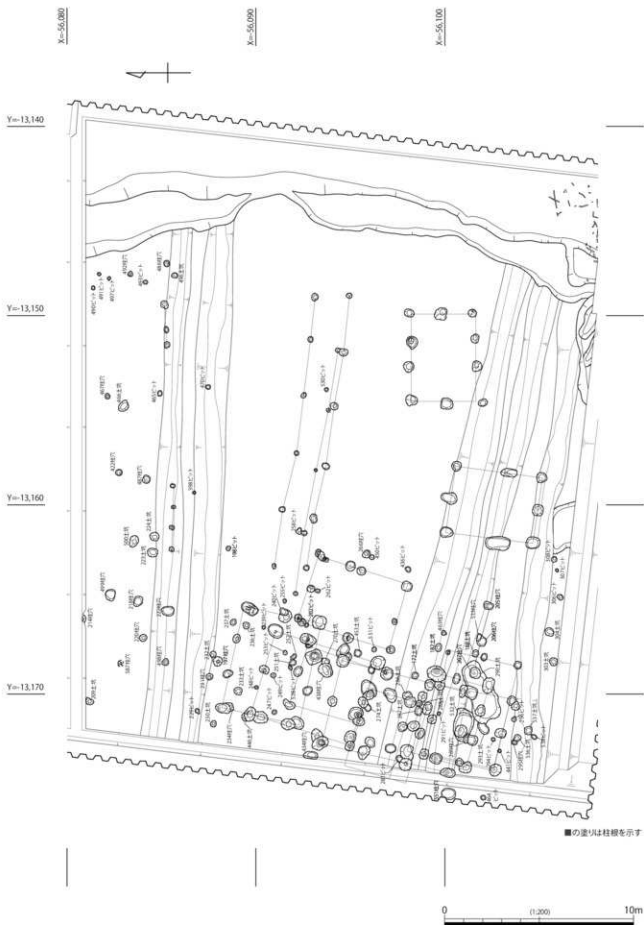
本土坑の特筆すべき点として、曲物(W179)が据えられていることが挙げられる。曲物は南西の半分を欠くが、土坑の掘方にほぼはまり込む形で残存しており、意図的に据えられたことが見て取れる。調査時には、底板の存在を考慮して慎重に精査したが、そうした痕跡は見受けられなかった。曲物内には、オリブ黒色の極めて淘汰の良い粘質シルトが埋土として充填されていた。

本土坑の性格については、曲物を据える他、淘汰の良い粘質シルトを埋土とすること等から、井戸や水溜、あるいは野壺や便所といった機能が想定出来る。このうち、井戸や水溜としては流路肩の中位に位置することや規模に疑問があるため、調査時には後者の可能性が高いと判断して、埋土をサンプルとして採取し、寄生虫卵分析を行った。結果として寄生虫卵は全く検出されず、トイレ遺構である可能性も否定された(第7章第3節第2項参照)。

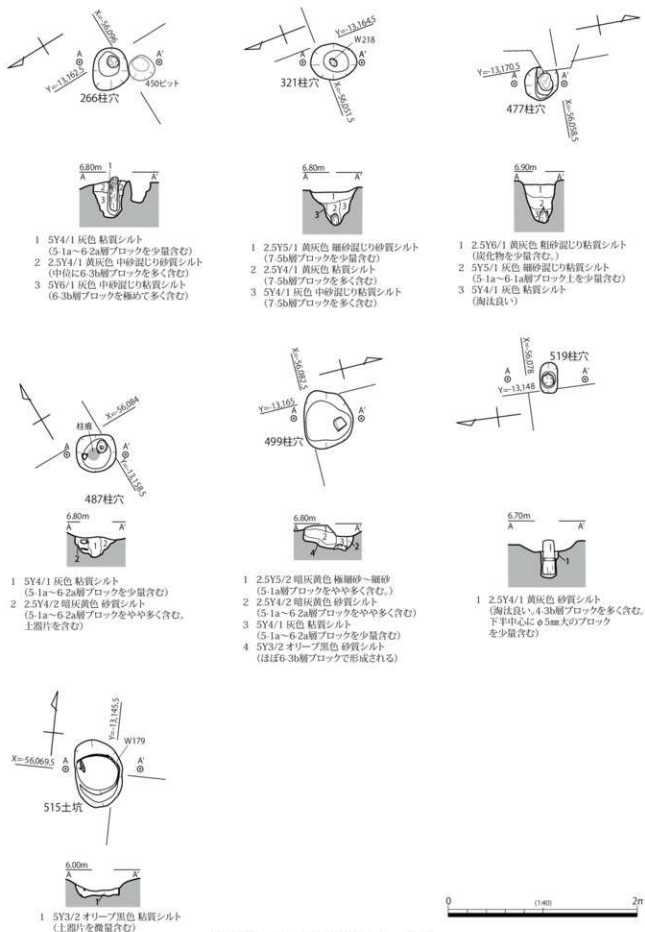
埋土中からは時期比定の可能な土器片等は認められず、本土坑の詳細な帰属時期は不明とせざるを得ない。4-1面の耕作溝群に関連する遺構の可能性もあるため、9世紀代とも捉えられ得るが、詳細は不明である。



第61図 4-2面遺構(柱穴・土坑・ピット)(1)



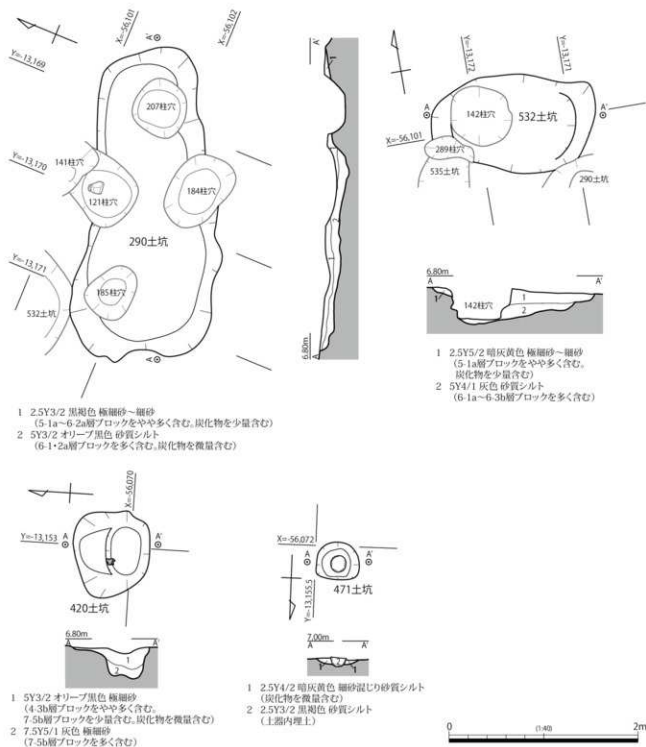
第62図 4-2面遺構(柱穴・土坑・ピット)(2)



第63図 4-2面遺構(柱穴・土坑)

(6) その他の土坑・ピット(第64図)

柱穴同様、15流路部を除くほぼ全ての地区において、土坑・ピットを検出した。土坑とピットは、第3章で述べたように、平面規模で便宜的に分類・区分したに過ぎないものであることから、この中には本来柱穴とすべきものも含まれていた可能性が高い。こうした土坑には、例えば290土坑や532土坑等、建物群が形成される前に掘り込まれたやや大振りなものの他、471土坑のように、遺物を掘えた可能性があるもの等もある。その他の遺構については、本章第6節の遺構計測表(第44表～第55表)に示した。



第64図 4-2面遺構(土坑)

(7) 流路

15流路(第65図～第79図)

調査区の東半部に位置する南東-北西方向の大振りな流路である。調査の進行の都合上、4面において検出・掘削を進めたが、断面観察の所見からは、本来的には4-2a層の堆積後に最終的に埋没した流路であることが明らかとなっている。なお、流路の底については、鋼矢板の支持限界深度である現地表面-3.0m以上に及ぶため、完掘には至っていない。

流路の断面形状は、中位の標高6.0m付近までは極めて緩慢な傾斜を示すものの、標高5.7m付近で急激に落ち込んでいる。したがって、15流路の本来の河道域は、第65図に示した網フセ部分にはほぼ固定されていたとみられる。遺物の取り上げなど調査時にはこれを一括しているが、以後の報文中では、必要に応じて便宜的に「流路部」と「地形の落ち部」との二者に呼び分けることとする。

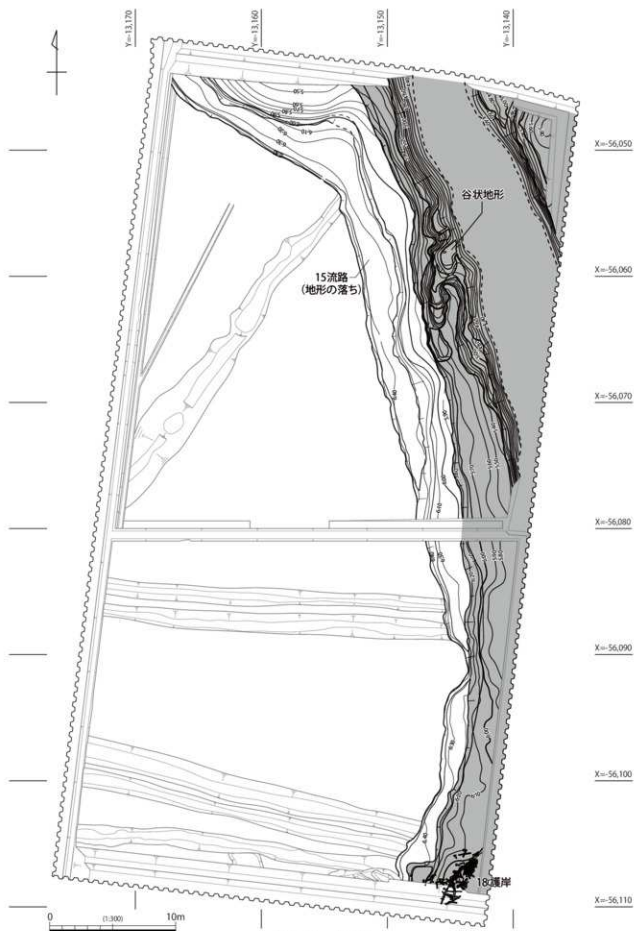
流路部に該当する部分は、南東-北西方向に直線的に延びていることから、本来の流路は直線的なものであったことが想定される。この急激に落ちる流路肩付近には、立木の根株が残存していた。遺存状態が悪く、サンプリングが出来なかったため、詳細な樹種等は不明であるが、当時の景観の一部を示すものとして重要である。流路は、調査区内では西側を検出したのみに留まっており、兩岸を検出し得ていない。調査区北東隅で検出した岸を基準とすると、流路部で幅10.8m以上、地形の落ち部も含めると幅18.6m以上の大規模なものとなり、地形の落ち部も含めた検出面からの深さは、2.2m以上を測る。

流路の埋土は、大別すると上下2層に分けることが出来る(第66図)。上層と下層の境界には、多くの地点で灰白色のシルト～極細砂を主体とする薄層が挟在するため、その掘り分けは比較的容易な箇所が多かった。流路埋土のうち、上層は極めて淘汰の良いオリープ灰色シルトを中心とする細粒の堆積物を基調とし、下層は、植物遺体葉理の顕著な灰色シルトを主体としている。これらの埋土は、いずれも基本的には泥質の強い沼沢性の堆積で埋没しており、部分的に植物遺体葉理が顕著に認められることから、本流路の埋積は、流速が遅い状態で徐々に進行したことが窺われる。

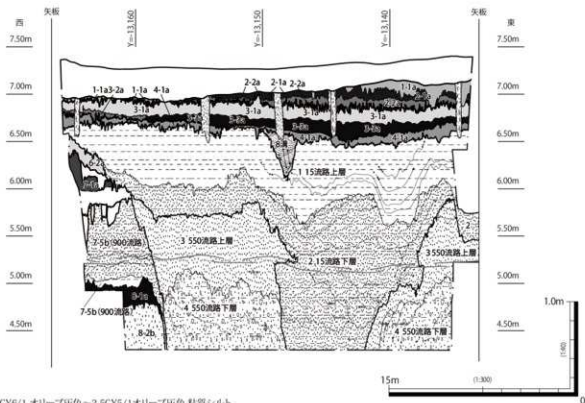
本流路は冒頭に述べたように、断面観察の所見から、4-2a層の形成後に完全に埋積したことが明らかとなっている。ただし、流路の下層には、上に述べてきた居住域を構成する建物群とほぼ同様の時期の遺物が多量に含まれているため、下層の一部は居住域が営まれていた期間に埋没していたことが想定出来る。一方の上層は、建物群の廃絶後やや浅い落ち込み状を示していた流路部の埋積が徐々に進行し、4-2a層の形成後に完全に埋積が完了したものと考えられる。上層については、1-2区で堆積状況の観察所見をもとに段階的に掘り下げた結果、埋没までの詳細な変遷が把握されている。

なお、本流路の流路部西肩中央付近には、南-北方向に階段状の落ち込みが連続する谷状地形がある(第65図)。この谷状地形付近では多くの遺物が出土し、立木の根株等も認められなかったため、この谷状地形周辺については、人為の加工が加わえられていた可能性も想定出来る。谷状地形を下りきった地点に流路部の遺物の集中地点が認められる(第67図)ことも、その証左であろう。

また、本流路に関連する可能性が高い遺構として、調査区南東隅で検出した18護岸が存在する(第65図右下)。18護岸は、15流路の地形の落ち部に相当する箇所認められた、大振りな杭材や石材のまとまりを遺構として認識したものである。その詳細な状況は、第68図に示したとおりである。地形の落ちの肩部において、埋土の一部が著しく硬化した面が確認され、その埋土中に粗朶状の小枝の集積



第65図 15流路



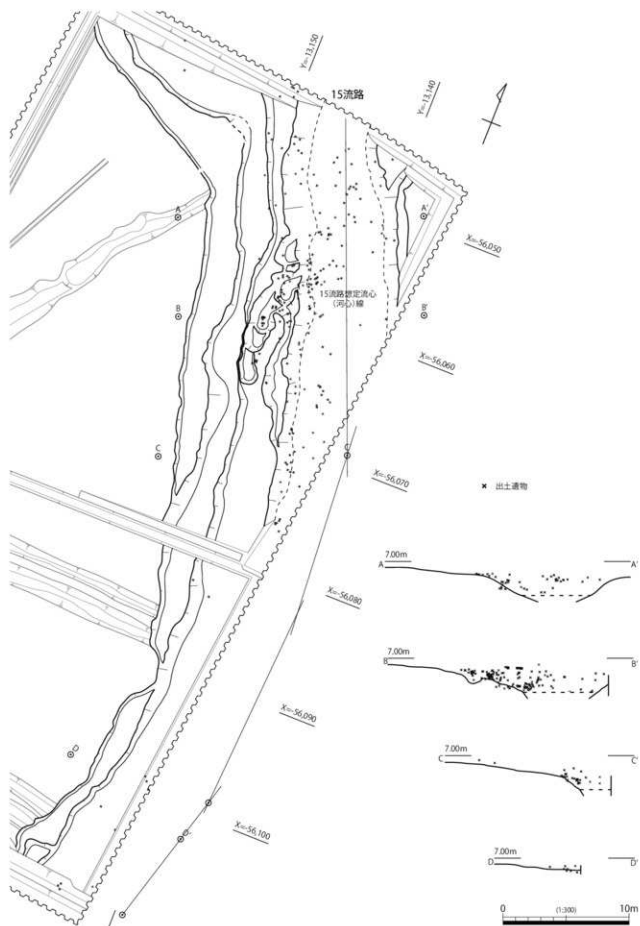
- 1 2.5GY6/1 オリーブ灰色～2.5GY5/1オリーブ灰色 粘質シルト
(海法良い、しまりやや悪い、植物遺体フラミナ顕著、部分的に粗砂まで粗粒化。下部中心にφ20cm以下の自然木を多く含む) [15流路上層]
- 2 2.5GY5/1 灰色 砂質シルト～細砂
(海法良い、しまりやや良い、逆酸化。最上部に5GY7/1明オリーブ灰色極細砂の薄層を挟む。上半部は細砂を主体とする。下部部は5Y3/1オリーブ黒色粘質シルトまで粗粒化。植物遺体フラミナ顕著。番甲・人形を含む。9～10世紀代の須恵器を含む、自然木を含む) [15流路下層]
- 3 5Y5/1 灰色 細砂
(海法良い、しまり良い、植物遺体を含む。上半部中心に部分的に植物遺体フラミナあり、7～9世紀代の須恵器、土師器を含む) [550流路上層]
- 4 2.5GY7/1 明オリーブ灰色 中砂～粗砂
(海法良い、しまり良い、植物遺体を多く含む。最下部は砂質シルト～極細砂。上部は粗砂で逆酸化。斜行フラミナ顕著。東西方向の中心に粗砂中心の堆積あり、付近より人形・馬形・番甲が多量に出土) [550流路下層]

第66図 15流路断面図(北壁)

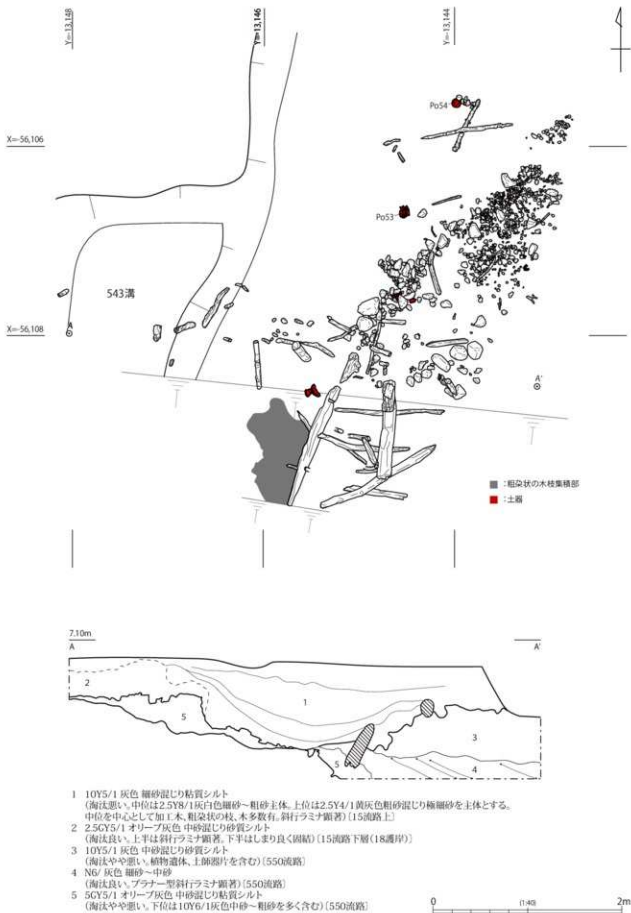
が認められたことから、人為による盛土と整地の両者が行われていた可能性が高い。なお、杭材の一部は北側にやや傾斜して突き刺さった状況で出土したため、調査当初は堰などの施設を想定して調査を進めたが、横位の架構材など堰と推定出来る構造は認められなかった。以上のことから、この18護岸については護岸状の施設と考えられ、上層の埋積が停滞した時期に、流路肩の補強のために構築されたものであろう。

さて、本流路に含まれる遺物は下層を中心に、多くの土器・木製品を始めとして、金属製品や編み物、また動物遺存体等、質・量ともに極めて豊富な内容を示している(第67図～第69図～第79図)。このうち、上層では10世紀前半から11世紀代帰属の、一方下層は9世紀前半を中心として9世紀代の須恵器・土師器を主体としていることから、流路自体が断続的かつ長期に渡って存在していたことを窺わせる。特筆すべきものとして、1-1区だけで合計85点出土した墨書土器が挙げられる。墨書土器は、流路部を中心に各地点で出土しているが、特に谷状地形の末端付近に集中しており、廃棄時の一定の原位置性を保っている可能性が高い。これらの集中箇所からは、ヤマトシジミとみられる貝類の集積も認められ(写真図版28-3参照)、居住域及び谷状地形と、流路との関係を示す資料として重要である。

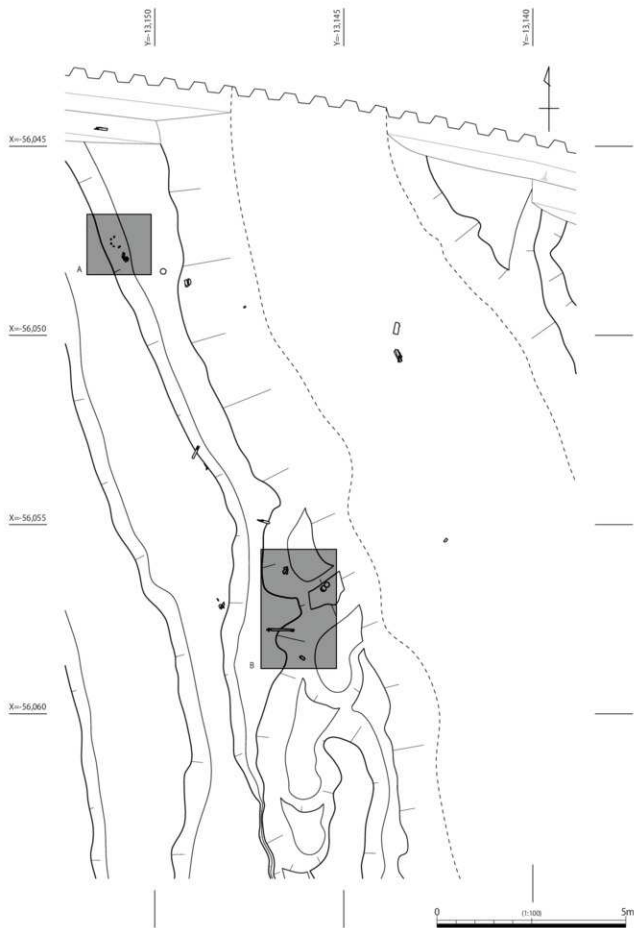
この他、斎巾や人形・馬形・武器形等の木製祭祀具が、上・下層合わせて200点超と大量に出土し



第67図 15流路遺物出土状況



第68図 15流路(18護岸)構造材遺物出土状況



第69図 15流路上層遺物出土状況全体図

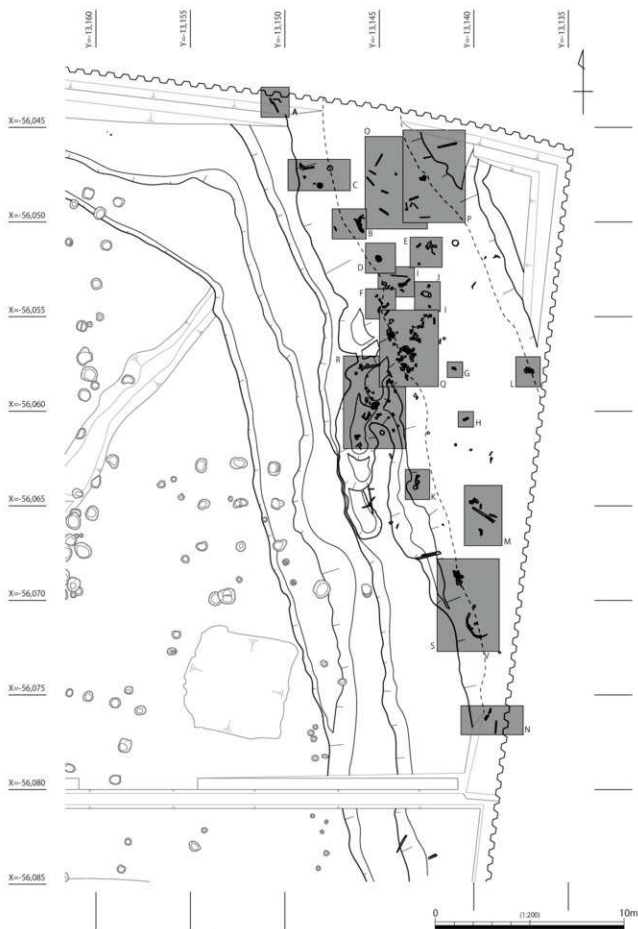


第70図 15流路上層遺物出土状況

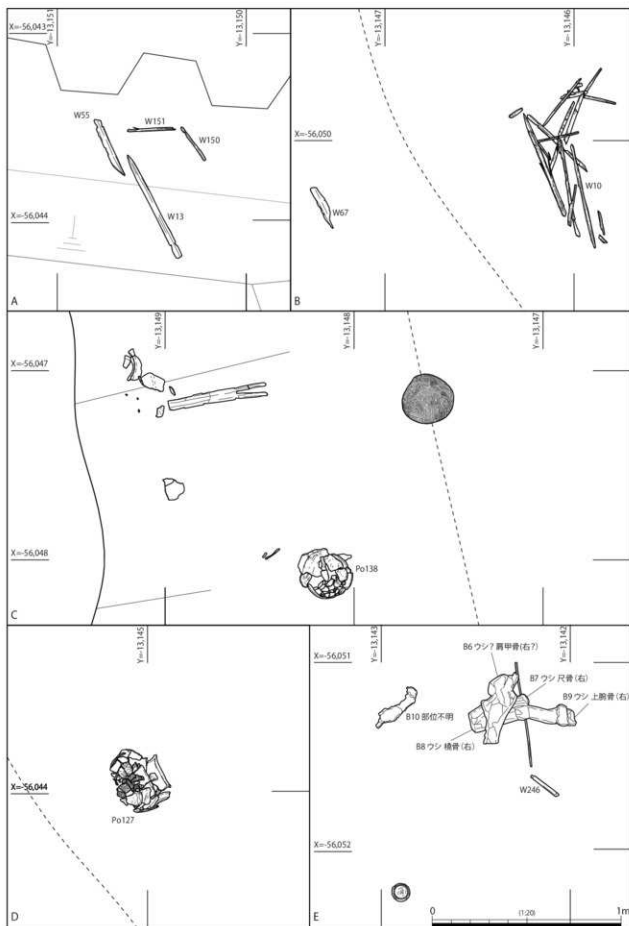
た点も、本流路の性格の一つを特徴づけている。人形については、頭部や肩部等の形態からみて複数の型式が看取でき、型式的な特徴からすれば、奈良時代から平安時代中期にかけてのものが主体的に含まれている。また、上層及び下層で、それぞれ時期差を反映した特徴的な型式が見られ、それら木製祭祀具の推定時期は、共伴する土器群とも整合する。このため、本流路における祭祀は、流路の機能していた時期の一定期間のみ執り行われていたのではなく、むしろ流路の存続期間内において、断続的に行われていた可能性を示唆している。

木製祭祀具以外にも、木簡関連資料(W245・W246)や銅製山形(Br2)、かご(W243・W244)等、遺跡の性格を示唆する貴重な遺物が多数出土していることは先述したとおりである。つまり本流路の出土遺物は、古代大柵地域の居住域の性格や様相を窺う上で、極めて重要な一群と位置づけることが出来る。これら遺物群については、本章第4節において、種別ごとに詳報する。

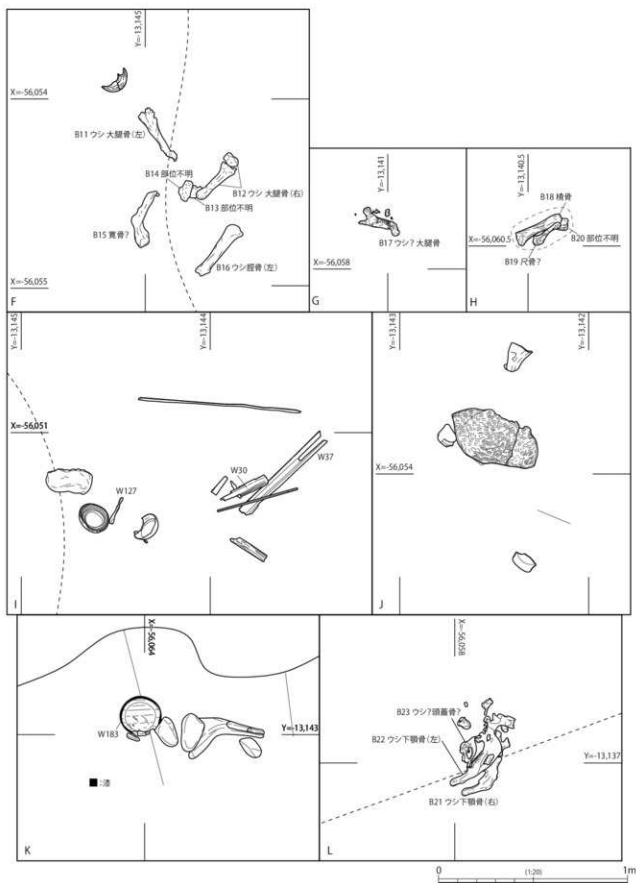
第67図の断面図に示すように、底面付近に集中する多様な遺物群を除けば、下層上部～上層にかけては、齋車や人形といった木製祭祀具が層状に出土している。これらの遺物は、調査時に視認し得なかった層理面に沿って埋没したことが窺われる。このことから、本流路の一定の埋積が進行した後も、近隣エリアでの祭祀行為が継続して行われたことが想定できよう。



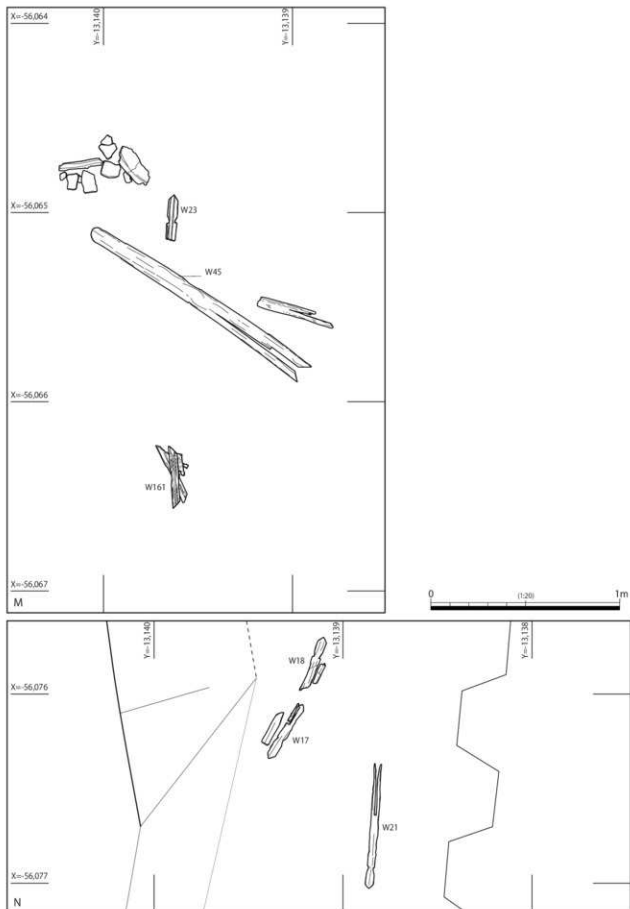
第71図 15流路下層遺物出土状況全体図



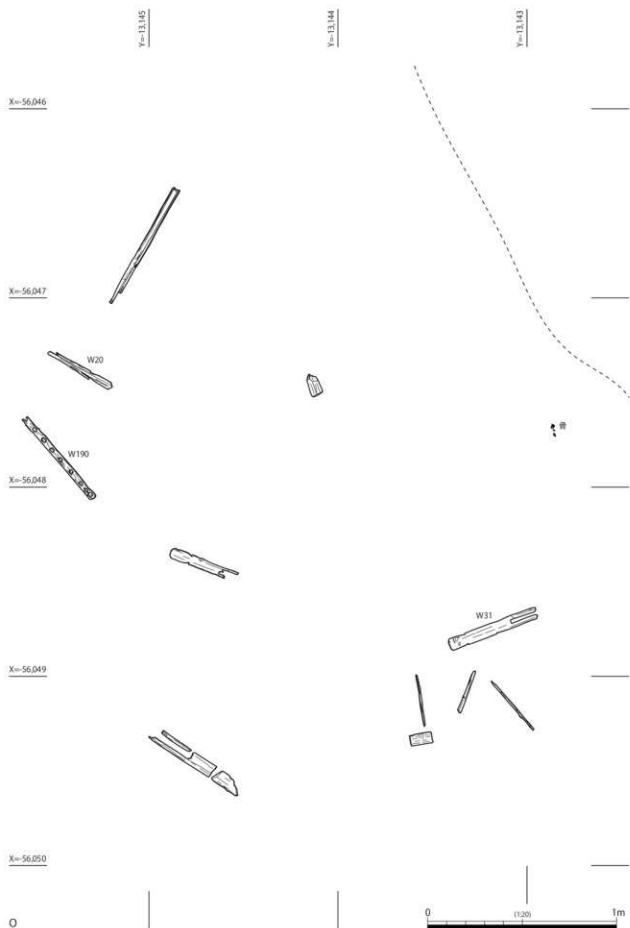
第72図 15流路下層遺物出土状況(1)



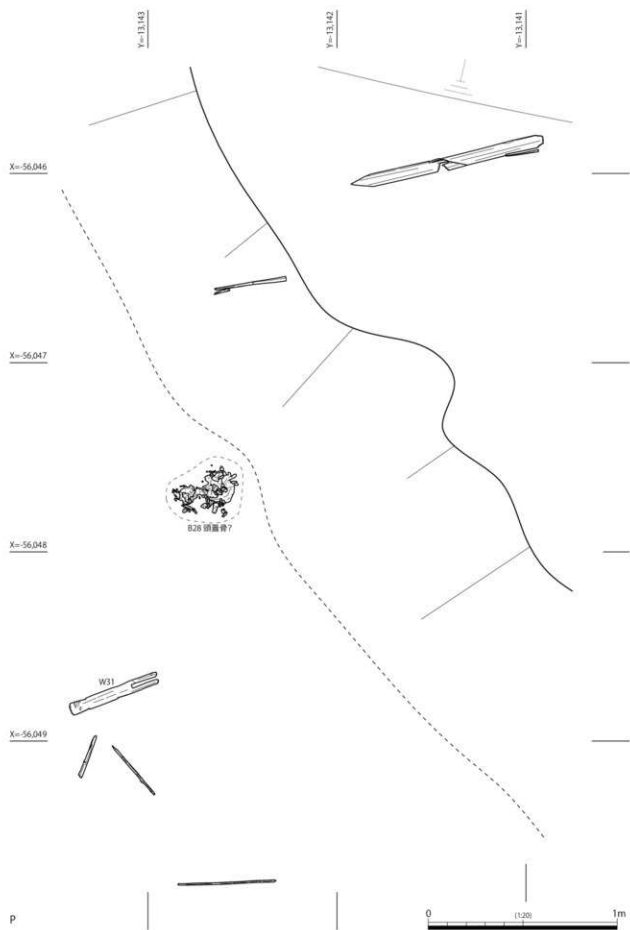
第73図 15流路下層遺物出土状況(2)



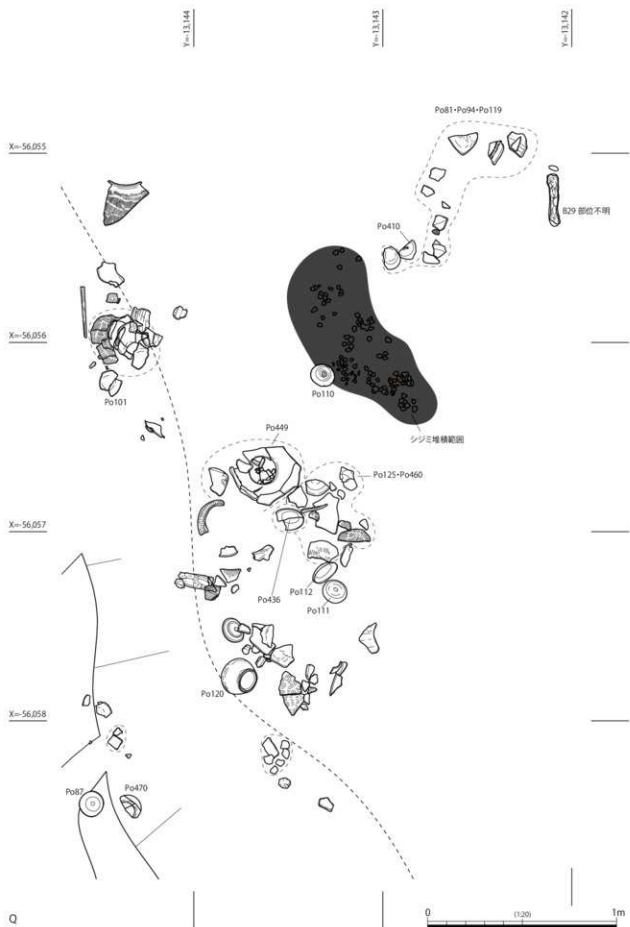
第74図 15流路下層遺物出土状況(3)



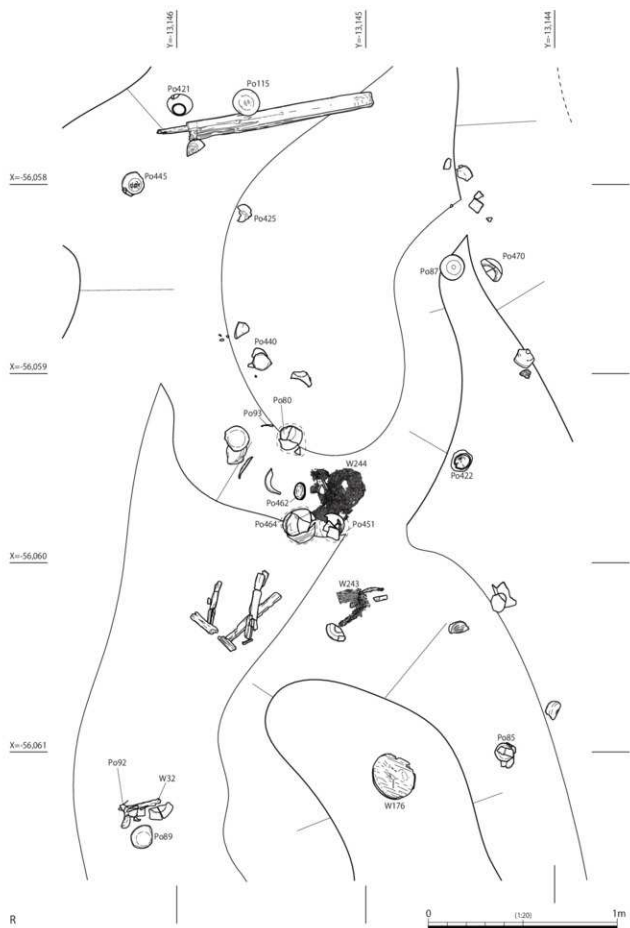
第75図 15流路下層遺物出土状況(4)



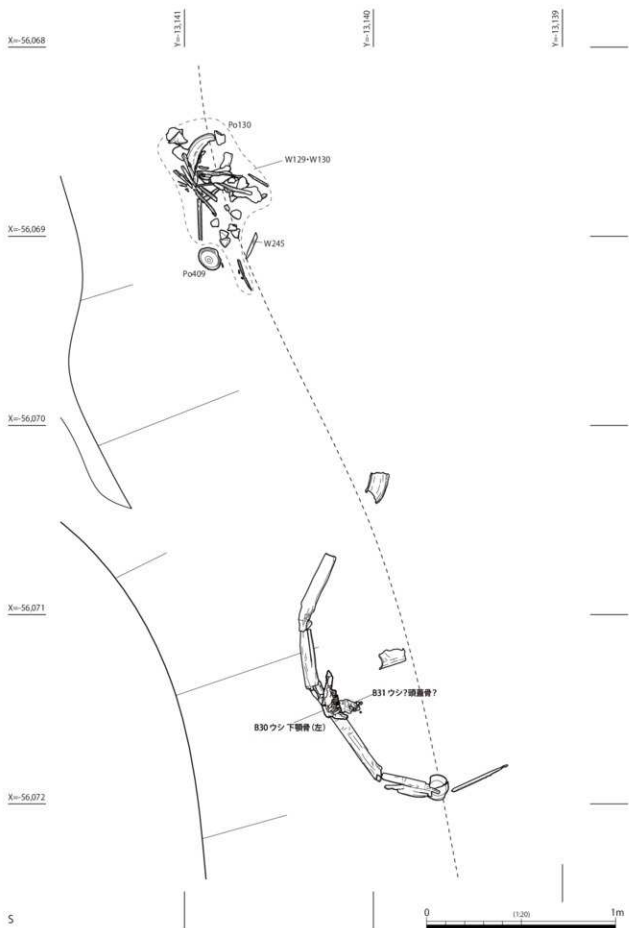
第76図 15流路下層遺物出土状況(5)



第77図 15流路下層遺物出土状況(6)



第78図 15流路下層遺物出土状況(7)



第79図 15流路下層遺物出土状況(8)

第5項 5面の遺構

古代の耕作土層と推定される6-2a層下面、古墳時代中期の土壌層及び耕作土層である7層の上面で検出出来る遺構面である(第80図)。X=-56,080ライン付近を境に、調査区の北半と南半とで堆積環境が大きく異なっており、北半は6-2a層を除去した6-2a層下面遺構を、一方の南半は6-3b層を除去した7-2a層上面遺構をそれぞれ検出している。なお、調査区の北半部と南半部で検出した土壌層は、本来的には連続した一連の地表面を形成していたと考えられるが、6-3b層を介さない北半部分については層相を違えることから、北半部の土壌は7-1a層、南半部の耕作土層及び土壌層は7-2a層として認識した。

遺構面は、4面まで大きく異なり、北から南にやや急激な段差を介してきつく傾斜をもつ地形を示している。遺構面の標高は、最高所である北西端部付近で標高約6.5m、南東端部で5.9mを測る。

5面では、調査区北半で土坑、落ち込み等を少数検出した他、南半部で水田畦畔を1条、流路2条、畦畔付近を中心として多数の足跡を検出した。なお、北半部で露出した7-1a層は、グライ化の作用を強く受けている他、地震動の影響によるとみられる7-5b層起源の噴砂や不定型な「たわみ」が随所にみられるなど、遺構面としての状態は良好ではなかった。このため、本来は本面に帰属する遺構の類も、次項で述べる6面で検出せざるを得なかったものがあつた点を付記しておく。

(1) 柱穴

555・556・576・584柱穴(第81図)

調査区北半部1B-5g~7g・7fを中心として検出した柱穴である。掘立柱建物構成しないものだが、576・584柱穴を除き、いずれも4-2a層の影響を完全に除去しきれない状態で4面の検出を行った地点に重なっているため、4面の帰属遺構であつた可能性が高い。

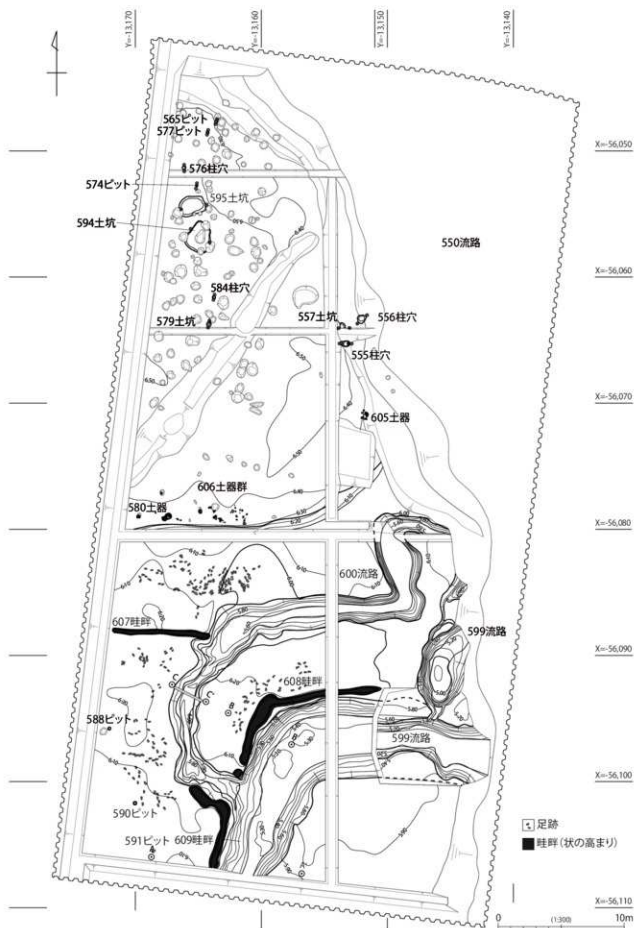
(2) 土坑

594・595土坑(第82図 写真図版41)

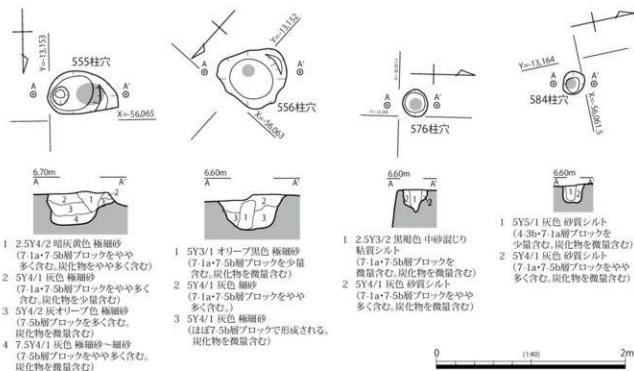
調査区北半部1B-6gで検出した、やや大振りの土坑である。その他の柱穴や土坑と異なり、明らかに本面に帰属すると認識出来る遺構の一つである。

594土坑は長径2.36m、短径1.8m、検出面からの深さ5cmを測る浅い土坑で、不定形な台形に近い形状を示している。595土坑は不定形な隅丸長方形の土坑で、長径2.1m、短径1.54mをそれぞれ測る。検出面からの深さは13cmを測る。いずれの土坑も、炭化物を少量含む灰色を基調とした細粒の堆積物を埋土とする。

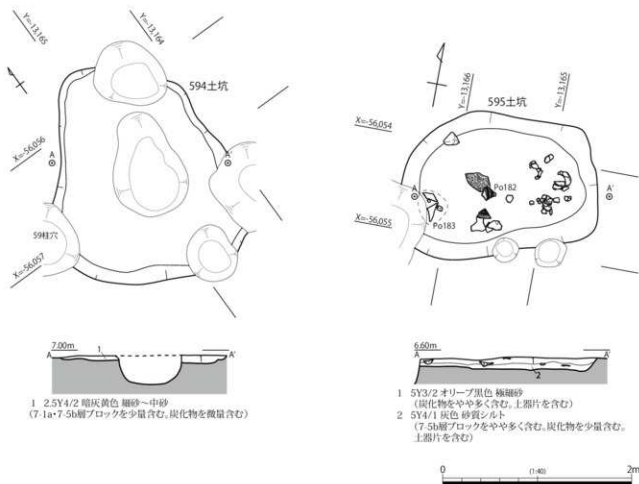
595土坑からは、5世紀後葉の須恵器片を中心としたやや大振りな破片が出土した。よって本遺構の帰属時期は、古墳時代中期後葉と考えられる。



第80図 5面(6-2a層下面・7-2a層上面)



第81図 555・556・576・584柱穴



第82図 594・595土坑

(3) 土器群

580・605・606土器群(第83図・第84図 写真図版40)

調査区中央部の1B-8g・1B-8fの二地点において、遺構面上に土器が密集して貼りつく状況を確認した。これらの土器集中部は、その他の地点とは明らかに出土状況に違いが認められたため、各まとまりを出土単位(遺構)として認定し、580・605・606土器群とした。

これらは、7-1a層の分布範囲南限にほぼ相当する位置に密集しており、結果的に地形の落ち付近に集中する状況を呈している。特筆すべき点として、580土器群のPo177のように、大振りな甕が3.0～3.8m程度の間隔で分布していることが挙げられよう。なお、調査時にはこれらの土器が意図的に据え置かれた可能性も考慮して、慎重に土器周辺の土壌の精査を行ったが、掘方は認められなかった。後述する6面の610溝最上部の土器に含めて考えるべき資料であった可能性もあるが、詳細は明らかでない。

出土した土器のうち主要なものの内訳は、先に述べた大振りの甕3点の他、古墳時代中期後葉頃の高坏、小型丸底壺、移動式甕等がある。

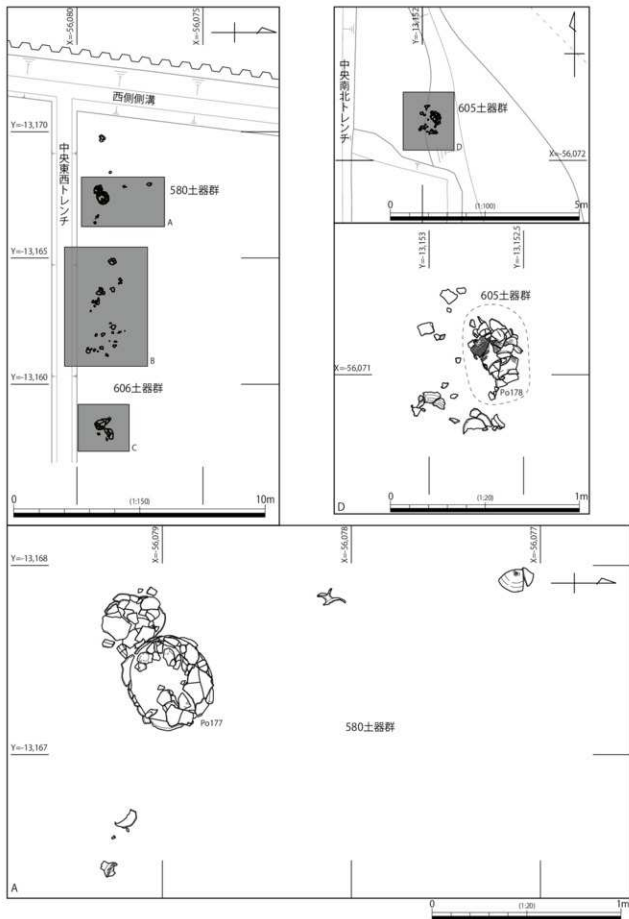
(4) 水田(第80図・第87図 写真図版39・45)

調査区南西部において、607畦畔によって区画される水田の一面を検出した。この畦畔の直上は6-3b層とした極細砂～中砂程度の細粒の堆積物で被覆されていたため、畦畔そのものの検出は容易であったが、部分的な検出に留まったため、水田区画の全容は明らかでない。

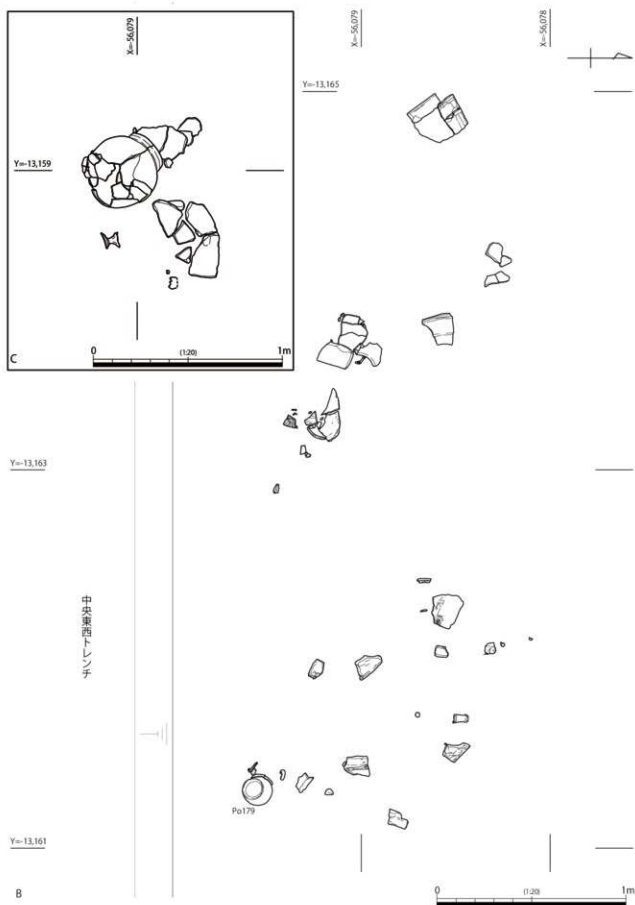
607畦畔は、西側側溝を境に東側では遺存状態が悪く、幅0.45m、高さ5cm前後を測るに過ぎない低平なものである。本畦畔の西端は西側側溝にぶつかると直前で途切れているが(第80図)、調査区西壁面において、高さ15cmの遺存状態の良い畦畔が続いていることを確認していることから、該当箇所には水口が設けられていた可能性が高い。この畦畔は、調査区中央部南端で検出した599・600流路に伴う608・609畦畔とともに水田区画を構成していた可能性もあるが、詳細は不明である。

このように水田の直接的な傍証となる畦畔については、検出範囲が限定されているために確証を欠いている。ただし、607畦畔の位置する600流路以西一帯の7-2a層は、攪拌を受けた水田作土の可能性が高いことを断面観察で確認していることから、これら畦畔を検出した本調査区の南西側一帯の低平な地形には、水田が営まれていた可能性が高いと言えるだろう。

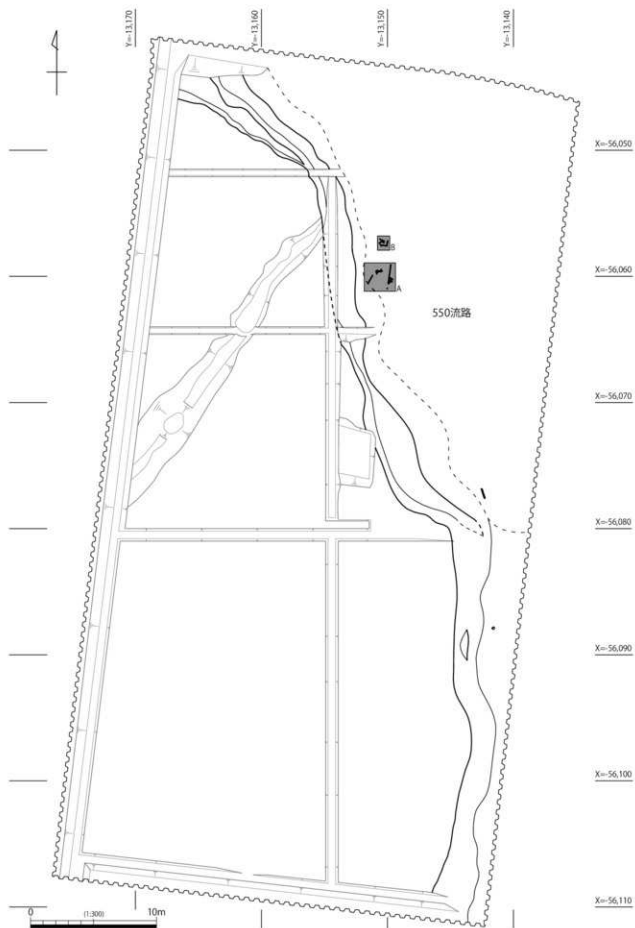
なお、607畦畔付近を中心として、遺構面上に多数の足跡が認められた。第80図及び第87図には、これらの足跡のうち良好なものを中心に掲載したが、多数の足跡が錯綜しており、一定の規則性を看取することは出来なかった。なお、これらの足跡はいずれも6-3b層によって充填されている。遺構面上に貼りつくようにして出土した僅かな土器片から、この水田域は古墳時代中期後半～末葉の所産と考えられるが、細片が多く詳細は不明である。



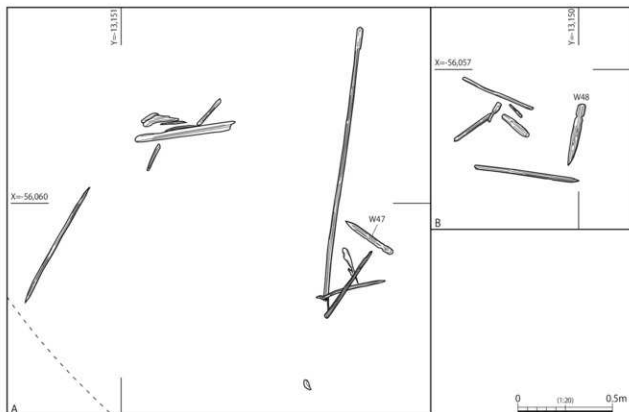
第83図 580・605・606土器群出土状況(1)



第84図 580・605・606土器群出土状況(2)



第85図 550流路



第86図 550流路遺物出土状況

(5) 流路

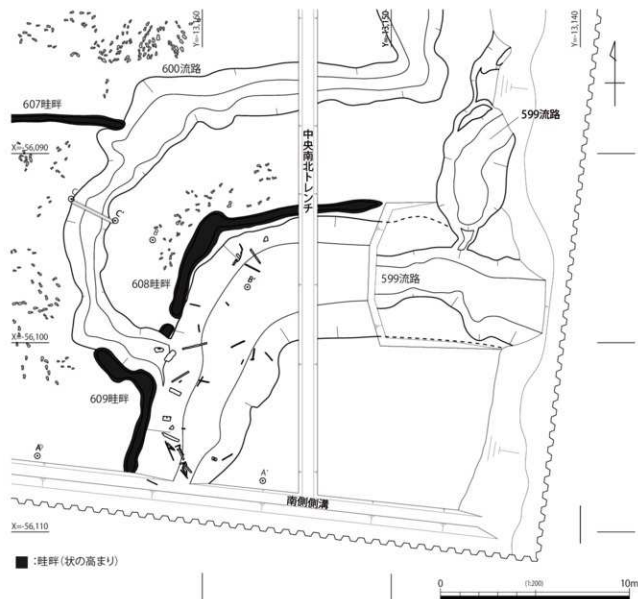
550流路(第85図・第86図 写真図版42)

15流路とはほぼ同様の位置において、南東-北西方向に延びる幅22m以上の流路である。断面観察の所見から、本来的には5-1a層下面で検出出来る流路であったとみられる(第12図中央東西トレンチ断面参照)。しかしながら、調査の都合上、4-3b・5-1a・6-1a・6-2a・6-3b層の各層を層ごとに掘り分けて遺物を回収しつつ5面の調査に至ったため、本来の流路の掘方に比して、平均して30cm程度掘り下げた段階で検出を行うこととなった。したがって、本流路に関しては調査区北半部では6-2a層下面、調査区南半部では7-2a層上面で検出している。

本流路は調査区外に延びているため、15流路同様その規模は明らかではない。また、流路の底については、鋼矢板の支持限界深度である現地表面-3.0m以上に及ぶため、完掘できていない。

本流路の埋土は、基本的に灰色を示す葉理構造の不明瞭な中～粗砂を主体とする上層と、粗砂～極粗砂以上を主体とする葉理構造の明瞭な下層の上下2層に分けられる。しかしながら、下層に相当する箇所が限界掘削深度に近いため、これを観察出来る場所が限定的であり、詳細は明らかではない。また、上下層の掘り分けも困難であったため、遺物の多くを上層として取り上げることとなった。

遺物は、下層の一部を中心として人形・馬形・斎串といった木製祭祀具の他、梯子など大型の部材、完形に近い6～8世紀代を中心とする須臾器等が出土している。木製祭祀具は、切欠きの状況等から15流路出土の一群と比較して明らかに古相を示すものが多く、概ね8世紀後半頃の様相を示している。このことは、15流路と本流路の時期差を反映しているとみられる。



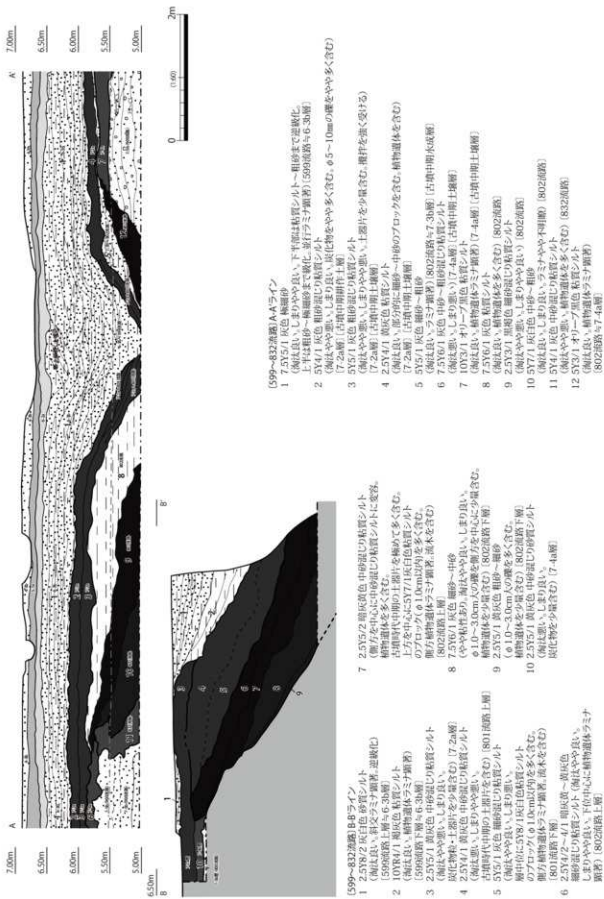
第87図 599・600流路、607～609畦畔

599流路(第87図・第88図 写真図版43～45)

調査区南半部に位置する幅の広い流路である。調査区中央部南端から北側に延びた後、鋭角に屈曲して東側に続き、部分的に北側へ溢流した様子を示しながら、調査区外へと至っている。南側壁面の断面観察からは、7-4a層の下面段階から継続的に踏襲された流路の一つであることが判明しており(第88図)、これらを新しい方から599・801・802・832流路として、各面毎に調査を行った。

599流路の幅は4.1～6.3mを測り、検出面からの深さは60～80cmを測る。底面の比高差から、本流路は南から東へと流向をもつと考えられる。そのことに起因してか、流路の東側では本来の流路の可動域を外れて北東側に洗掘が行われたような状況の落ち込みを確認している。これについては、破堤堆積物の一種と認め、本流路の一部と認識して調査を進めた。

流路の埋土はほぼ単一の層準で構成されており、灰白色シルト～極細砂を基調とする6-3b層がこれに相当する。ただし部分的にはあるが、流路の肩付近に植物遺体葉理を含む褐灰色の粘質シルトが堆積している箇所があることから、流路機能時の堆積速度は遅かったことが窺われる。なお、流



第88図 599・801・802・832流路断面図

路の西肩では、608・609畦畔とした幅0.4~1.35mの盛土が取り付く状況を確認した。これらの畦畔は上面が平坦に近く、高さは10cmを測る。流路の東側にはこうした盛土は認められず、流路東側に広がる7-2a層自体も西側に広がっている耕作土層とは異なっており、植物遺体を多分に含むなど沼沢性の堆積に近い様子を示している。このことから、本流路を境として、生産域と放棄地のような使い分けが成されていたことが想定出来る。

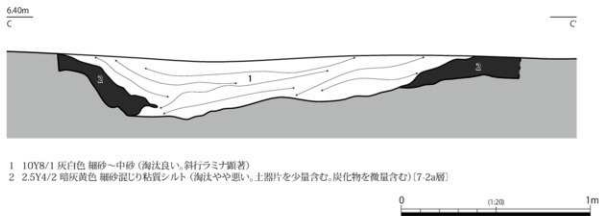
遺物は、南半部の肩部西側を中心として多数出土した。後述する6面の801流路・802流路の遺物が部分的に混入した可能性も否定出来ないが、横鋤や田下駄等の農具(W192~W198)や紡織具(W207~W210)等古墳時代の木製品が大半を占める他、古墳時代中期後半の甕等土師器片が出土した。

600流路(第87図・第89図 写真図版45)

調査区南半部に位置する幅の狭い流路である。調査区南端付近で599流路から分岐し、蛇行しながら北側へ延びている。流路の幅は1.9~3.8mを測り、検出面からの深さは0.35mをそれぞれ測る。流路埋土は灰白色を基調とし、最下部から中位にかけてはシルト、中位には粗砂、上部は極細砂~中砂程度の細粒の堆積物が認められる。なお、流路の肩付近では7-2a層が垂れ下がる状況を平・断面で確認しており、この流路については一定期間安定してオープンな状態にあったことが窺われる。また、599流路との分岐部分については、西側の肩上端に幅0.5~1.0m、高さ5cm程度の低平な盛土が施されていた他、50~70cmの大振りな部材が集中して出土するなどの状況から、なにかしらの施設が設けられていた可能性もある。

本流路は、599流路と比較するとやや幅が細く浅いこと、畦畔付近をかすめていること等から、流路というよりは、排水等の機能をもった溝の性格を有していた可能性もある。盛土の存在や流路内に垂れ下がる7-2a層等の存在も、そのことを裏付けるものと推察される。

流路内からは、古墳時代中期の土器の細片が出土した。細片のため図化には至らなかったが、これらは本流路の帰属時期を示すものと考えられる。



第89図 600流路断面図

第6項 6面の遺構

古墳時代中期の土壤層とみられる7-1a層と、耕作土層及び土壤層である7-2a層を除去して検出した遺構面である(第90図)。前項で述べた5面同様、北半部と南半部でそれぞれ堆積環境が大きく異なっており、結果として北半部は8-1a層が露出し、南半部は7-4a層・7-5b層が露出することとなった。さらに5面と同様、調査区内の北側が高く南側が低い地形を示し、X=-56,080～59,090ライン付近の610溝を境界として、明瞭な段差をもっている。遺構面の標高は、調査区北西端部の最高地点で6.4m、最も低い南東端部で5.3mをそれぞれ測る。

本面では、北半部において竪穴建物2棟、掘立柱建物5棟以上、廃棄土坑1基、柱穴・土坑等を検出した。一方の南半部では、祭祀遺物を多数含む流路を1条検出した。南半部の流路は明らかに古墳時代中期に属するとみられるが、北半部の遺構群は周辺一帯のグライ化が著しい上に地震動に起因する噴砂や地形の凹凸が著しく認められ、土壤層(7-1a層)の上面(5面)での遺構検出に困難を伴ったため、複数時期の遺構が含まれている可能性がある。

出土遺物から、遺構の多くは古墳時代中期に帰属すると考えられるが、一部には5面で検出しきれなかった古代の遺構が含まれている可能性がある点は注意を要する。なお、南半部の801・802流路の掘り分けによって、6面を6-1面(第90図)と6-2面(第109図)に分離して提示・報告する。

(1) 竪穴建物

竪穴建物1(第91図・第92図 写真図版47～53)

調査区北西部1B-5f・g-1B-6f・gに位置する竪穴建物である。北端部の一部が550流路と794土坑と重複しているため全容を窺い知ることは出来ないが、平面形は東西にやや長い整った長方形を示している。建物の規模は、東西長が6.3m、南北長が5.8mを測り、建物の軸は遺存状態の良い西壁で代表させるとN-0.7°-Wを指す。

建物内に認められる埋土は、上・中・下層の3層に分けることが出来、上層が炭化物を多く含む灰色極細砂、中層が下位層の7-5b層起源のブロックをやや多く含む灰色シルト、下層が下位層の7-5b層起源のブロックを極めて多く含む灰色極細砂である。上層と中層の層界には、起源不明の白色粘質シルトのブロックが、圧密を受けた様相を呈して層状に含まれる箇所がある。

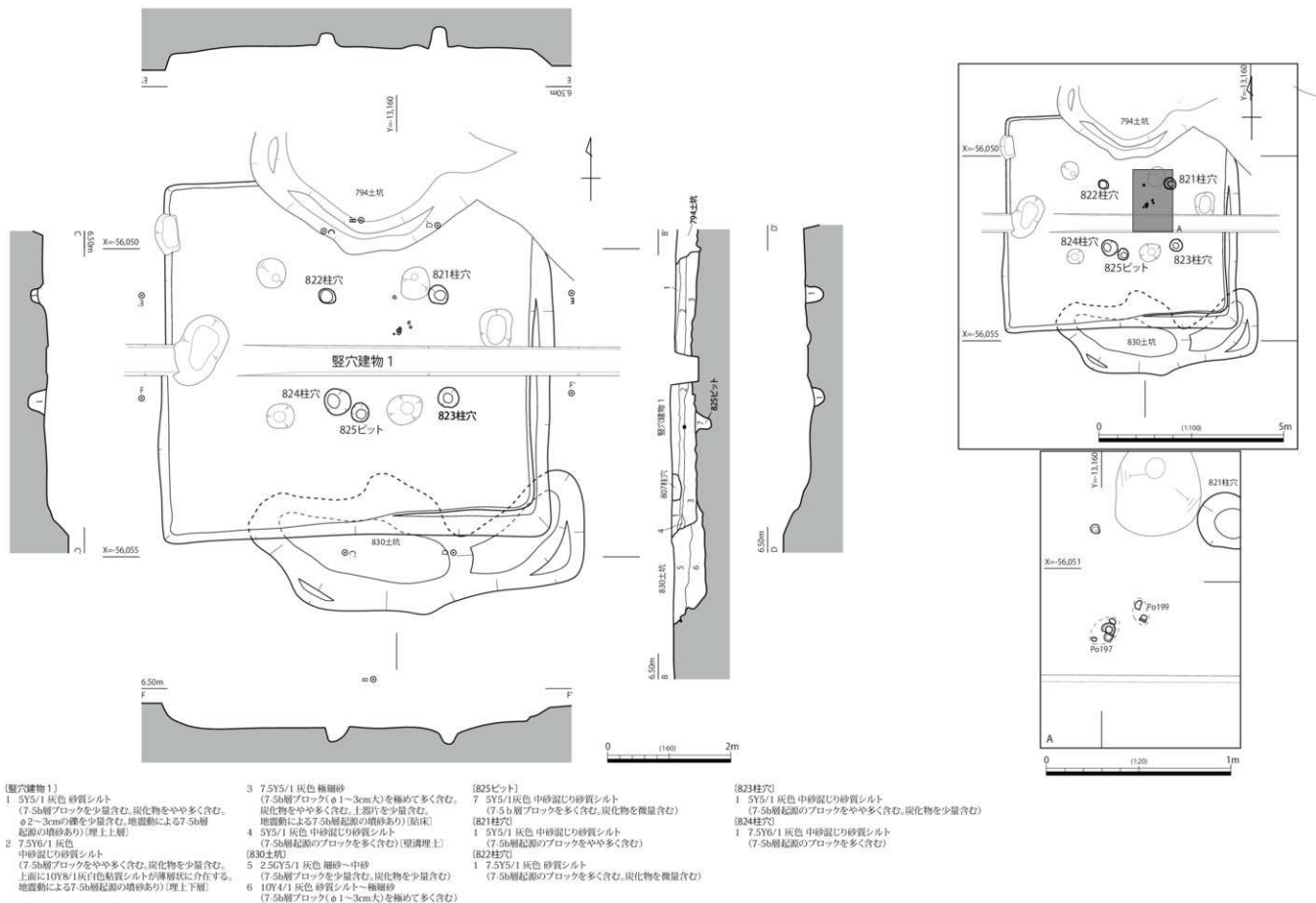
当初は、この特徴を根拠とし、中層以下の層を建物の貼床と認識して平面上の精査を行ったが、諸施設の確認は成し得なかった。そこで、さらなる断面観察によって中層と下層を細分するに至り、その層界において諸施設を検出することが出来たため、下層を貼床と認識した。結果として、上・中層に認められた差異は、廃棄後の埋没過程の要因が異なったものと捉えている。

埋土上層では、古墳時代前期中葉～中期後葉の土師器甕等が出土しており(Po197～Po203)、中には802流路出土土器と接合するもの(Po203)も含まれるが、同様の状況は794土坑上層でも確認された。さらに、815土坑は唯一中層の上面で認識することが出来た遺構だが、断面観察でも建物上層の下面から掘り込まれていることが確実で、古墳時代中期後半の甕ほほ1個体分(Po204)が出土している。以上のことは、竪穴建物及び土坑周辺が、埋没後に当該期の攪乱を受けていることを示唆するものであろう。

なお、本建物を含む周辺一帯は、地震動の影響によって7-5b層起源の噴砂に由来する砂脈が多



第90図 6-1面(7-1a・7-2a層下面)



第92図 竪穴建物1(加工面)

数走っており、遺構面の状態は必ずしも良好なものとは言い難かった。そのため、平面的な遺構の識別は困難を極め、部分的には貼床土を任意でさらに下げ込んで検出する必要があった箇所も存在する。

さて、本建物の最終機能面に付随する施設としては、先に述べた貼床上面において810～813柱穴の主柱穴4基と壁溝、また壁溝沿いに位置する814土坑をそれぞれ検出した。5面の調査直前に設定した東西方向のトレンチによって建物の一部を欠いてしまったため、中央部に建物を構成する施設があった可能性は残るものの、各施設の平面的な配置とトレンチの大きさから、その可能性はほぼないと考えられよう。

柱穴は4基を確認した。いずれも径40～60cm程度の円形を示すもので、検出面からの深さは40～50cmと一様に深い。平面的には南半の811-812柱穴間がやや狭いが、概ね整った配置を示すと言える。その一方、竪穴建物全体としてみれば、やや北西側に偏った位置にあることが分かる。814土坑の配置がこの偏りに関連していた可能性もあるが、想定域を出るものではない。

壁溝は建物を全周しており、床面からの深さ5cm程度と極めて浅く、貼床内で収まるものである(第91図)。

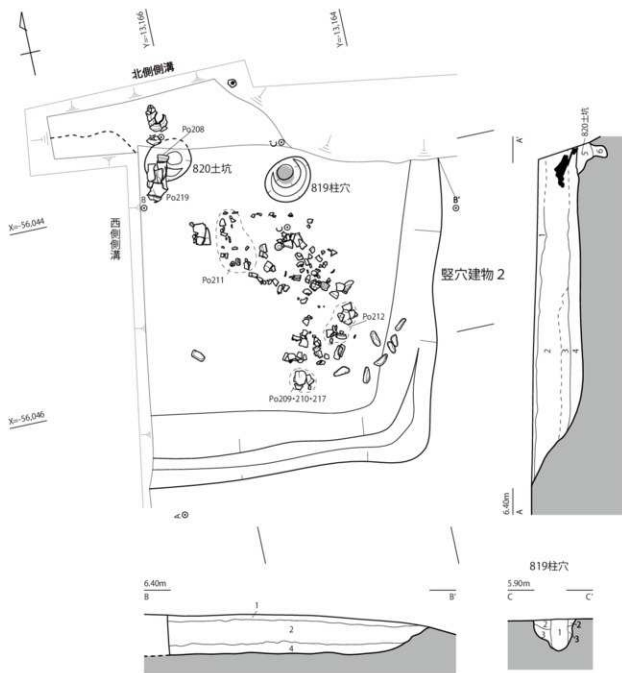
建物の床面直上には、小型丸底壺などの土器を中心とした遺物が散乱していた。土器は古墳時代前期中葉～後葉の所産と考えられ、本建物の最終機能時の帰属時期を示す可能性が高い。

本建物の貼床は10～20cmと比較的厚いものであり、現地では、貼床上面の機能面の調査を終えた後、これを除去して加工面の調査を行った。この貼床下面の状況は凹凸に富んでおり、全体的に中央部は高く、壁面付近は低い傾向を示している(第92図)。結果として、貼床下面においては821～825の4基の柱穴と1基のピットを検出した。このうち、825ピットについては、加工時の凹凸の一部を拾った可能性が高いと考えているが、821～824柱穴は整然と並ぶこと、加工面からの深さが20～30cmと深いことから、建て替えもしくは前身となる建物があったことを窺い知ることが出来る。なお、柱穴の検出によって建物の建て替えを認識した時点で、壁面周辺の重複関係についても精査を行った他、加工面付近での壁溝の存在についても注視して検討を加えたが、これに該当する掘方を確認することはできなかった。詳細は明らかではないが、ほぼ同じ位置・軸で建物を拡張し、拡張後の建物による擾乱によって、結果的にその痕跡を留めなかった可能性が高いと考えられる。

なお、貼床土を除去する過程で礫石や土器が出土した他、本建物の南東部で不定形な落ち込みを検出しており、これを830土坑として調査した。加工面で検出した建物の外形に相当する可能性も考慮して調査を行ったが、掘方が延長しないことや掘方の断面形も不定形なものであることから、その可能性は低く、竪穴建物1の加工時になんらかの掘削が行われた可能性を反映したものと考えられる。830土坑の埋土は、竪穴建物1の埋土よりもやや淡い灰色の極細砂～中砂を主体とし、竪穴建物がこれを切り込んで重複している。また、830土坑では古墳時代前期中葉の土師器甕や高坏(Po205～Po207)等が出土しており、その点からも上記推定は首肯されよう。

竪穴建物2(第93図 写真図版47・54・55)

調査区北西端部1B-5gで検出した竪穴建物である。調査区北側と西側の側溝及び、15流路や550流路によって大半を欠いているため、建物としては南東側の一部を確認したに過ぎない。検出部分からは平面方形の建物が想定でき、残存箇所規模は南北長4.2m、東西長4.0mをそれぞれ測る。建物の主軸は東側の壁面を基準とするとN-3.1°-Eを指し、竪穴建物1とはやや異なる軸を示す。



[792竪穴]

- 1 7.5Y/1 灰色 砂質シルト (7.5b層ブロックを少量含む,炭化物をやや多く含む。
起源不明の10Y8/1灰白色粘質シルトブロックを少量含む) [埋土上層]
- 2 5Y4/1 灰色 砂質シルト～極細砂 (7.5b層ブロック(φ2～3cm大)をやや多く含む,炭化物をやや多く含む。
土器片を多く含む) [埋土下層]
- 3 7.5Y6/1 灰色 細砂 (7.5b層ブロックをやや多く含む,炭化物を少量含む) [埋土下層]
- 4 7.5Y5/1 灰色 砂質シルト (φ5～10cm程度の7.5b層ブロックを極めて多く含む,炭化物を微量含む) [點床?]

[819柱穴]

- 1 5Y6/1 灰色 粘質シルト (7.5b層ブロックをやや多く含む,炭化物を多く含む)
 - 2 5Y4/1 灰色 砂質シルト (7.5b層ブロックを多く含む,炭化物を微量含む,土器片を含む)
 - 3 7.5Y5/1 灰色 粘質シルト (7.5b層ブロックを多く含む,炭化物を微量含む)
- [820土坑]
- 5 7.5Y5/1 灰色 砂質シルト (7.5b層ブロックをやや多く含む,炭化物を少量含む)
 - 6 5Y5/1 灰色 中砂混じり砂質シルト (7.5b層ブロックを多く含む,炭化物を微量含む)



第93図 竪穴建物2

建物内の埋土は、いずれも炭化物を含む灰色のシルトを基調とするが、下位層の7-5b層起源のブロックの混入具合によって、3層に大別出来る。調査時には、断面観察の所見からこのうちの下層を貼床として認定したが、結果的には貼床相当層と認識した下層を除去することでようやく柱穴を検出するに至っている。このことについては、本建物一帯に地震動による噴砂等の影響が強く及んでおり、堅穴建物1と比較しても、貼床上面の遺存状態がさらに不良であったことを一因として考慮する必要もあるが、本建物は、本来貼床の無い建物であったと想定する。

建物に付随する施設としては、最下面において柱穴を1基、土坑を1基検出している。819柱穴は、柱痕跡のある深さ約30cmの柱穴であり、やや外側に位置しているもの本建物を構成する主柱穴とみてよい。一方の820土坑については、深さは819柱穴と同じく30cmを測るが、柱痕跡が認められず、819柱穴とも近接した位置にあることから、建物を構成する柱穴としては不適であると判断した。ただし、堅穴建物1同様、建て替えによる柱穴位置の拡張も考慮に入れると、建物を構成する柱穴であった可能性もあるが、全容を窺うことが出来ないため、詳細は明らかではない。

本建物からは、細片化した土器片を中心として多数の遺物が出土した。これらの土器の多くは、主に中層と下層の層界に分布しており、建物の貼床の存在を窺わせる出土状況を示していた。ただし、先に述べたとおり、本建物については貼床の無い建物であることを想定しているため、建物廃絶後のある段階に投棄されたものと考えておきたい。堅穴建物1と比較して建物の壁面が緩やかであることも、建物廃絶後の埋没過程に、一定の時間差があったことを示す証左であるのかもしれない。

出土土器の多くは古墳時代前期後葉のものであり、中には後述する794土坑にみられるような山陰型甔形土器(Po219)も認められた。

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物29(第94図 写真図版56~58)

調査区中央部1B-7f・g~1B-8f・gに位置する南北方向の掘立柱建物である。梁行3間(4.5m)、桁行3間(5.2m)の側柱建物で、建物の主軸は、N-13.7°-E、身舎の面積は23.6㎡を測る。

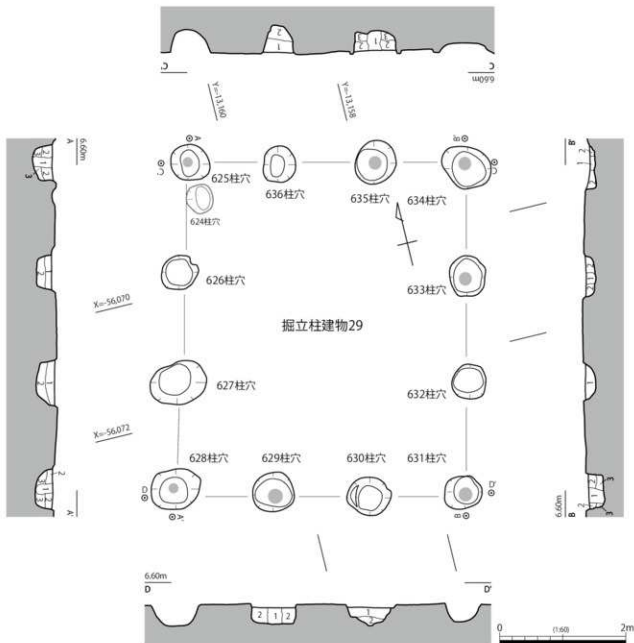
柱間寸法は、梁行が1.5m、桁行が1.7~1.8mを測り、極めて均整のとれた配置を成す。柱穴掘方の平面形は、やや不整な長楕円の627・628柱穴を除けば、概ね整った円形を示し、長径50~90cm、短径50~60cmを測る。検出面からの深さは30cmを主体として15~30cmを測り、東側の柱筋がやや浅い傾向にある。柱穴埋土はいずれも灰色極細砂~細砂を主とし、下位層起源のブロックを多数含む他、炭化物粒を微量に含んでいる。本建物では、多くの柱穴において、灰色~灰白色極細砂を基調とする柱痕跡が認められた。

建物を構成する柱穴からは、古墳時代中期後半の土師器が出土しており、本建物の帰属時期を示すものと考えられる。なお、本建物は掘立柱建物30と平面配置上で交錯しており、両者の間に時期差があることは明らかである。

掘立柱建物30(第95図 写真図版56・57・59)

調査区中央部1B-7f・g~1B-8f・gに位置する南北方向の掘立柱建物である。梁行2間(3.8m)、桁行2間(3.8m)の側柱建物で、建物の主軸は、N-9.8°-E、身舎の面積は14.4㎡を測る。

柱間寸法は、梁行・桁行ともに1.8mと2.0mの2者があるが、それぞれ北と西が広く、南と東が狭



[625柱穴]

- 1 10Y7/1 灰白色 極細砂～細砂
(炭化物を少量含む)
- 2 7.5Y6/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5層ブロックを少量含む)
- 3 10Y6/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(7.5層ブロックを少量含む)

[626柱穴]

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂
(7.5層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)
- 2 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(7.5層ブロックを多く含む)

[627柱穴]

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂
(7.5層ブロックを多く含む。炭化物を微量含む)
- 2 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(7.5層ブロックを多く含む)

[628柱穴]

- 1 10Y6/1 灰色 極細砂
(7.5層ブロックを少量含む。
炭化物を微量含む)
- 2 7.5Y5/1 灰色 細砂～中砂
(7.5層ブロックをやや多く含む)

3 7.5Y4/1 灰色 極細砂

(7.5層ブロックをやや多く含む)

[629柱穴]

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂
(7.5層ブロックを微量含む)
- 2 7.5Y4/1 灰色 細砂
(7.5層ブロックをやや多く含む)

[630柱穴]

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂
(7.5層ブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 2 10Y5/1 灰色 細砂
(7.5層ブロックをやや多く含む)

[631柱穴]

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂
(7.5層ブロックを微量含む)
- 2 7.5Y4/1 灰色 細砂
(7.5層ブロックをやや多く含む)
- 3 10Y5/1 灰色 極細砂～細砂
(ほぼ7.5層ブロックで形成)

[632柱穴]

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5層ブロックを少量含む。
炭化物を微量含む)

[633柱穴]

- 1 10Y5/1 灰色 極細砂
(7.5層ブロックを少量含む。
炭化物を微量含む)
- 2 5Y6/1 灰色 細砂
(7.5層ブロックを多く含む)

[634柱穴]

- 1 7.5Y4/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5層ブロックをやや多く含む)
- 2 10Y5/1 灰色 極細砂
(ほぼ7.5層ブロックで形成)

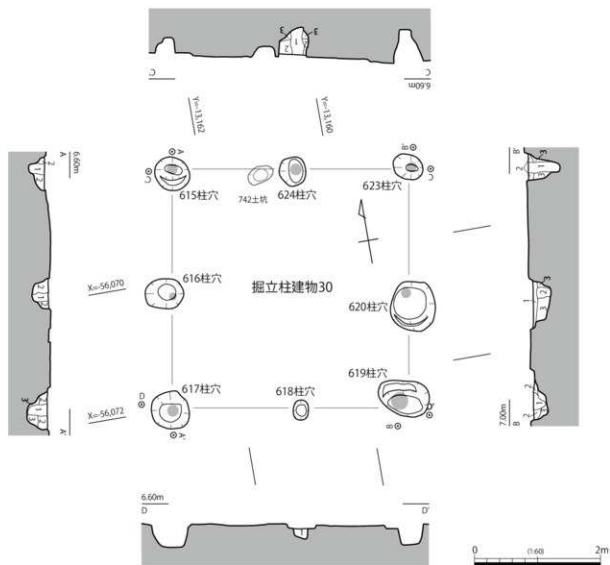
[635柱穴]

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂
(7.5層ブロックを微量含む)
- 2 7.5Y4/1 灰色 細砂
(7.5層ブロックをやや多く含む)
- 3 10Y5/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5層ブロックをやや多く含む)

[636柱穴]

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5層ブロックをやや多く含む。
炭化物を微量含む)
- 2 10Y4/1 灰色 極細砂
(7.5層ブロックを少量含む)

第94図 掘立柱建物29



〔615柱穴〕

- 1 10Y5/1 灰色 極細砂
(7.5b層起源のブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 2 7.5Y4/1 灰色 中砂混じり砂質シルト
(7.5b層起源のブロックを多く含む。炭化物を微量含む)

〔616柱穴〕

- 1 10Y5/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 7.5Y6/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

〔617柱穴〕

- 1 10Y5/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 7.5Y6/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 3 10Y6/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックを多く含む)

〔618柱穴〕

- 1 10Y5/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

〔619柱穴〕

- 1 10Y5/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 7.5Y6/1 灰色 細砂～中砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 3 10Y6/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5b層ブロックを多く含む)

〔620柱穴〕

- 1 10Y5/1 灰色 粘質シルト
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 10Y5/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)

〔623柱穴〕

- 1 10Y5/1 灰色 粘質シルト
(7.5b層ブロックをやや多く含む)

〔624柱穴〕

- 1 10Y5/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 7.5Y6/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む)
- 3 10Y6/1 灰色 細砂
(ほぼ7.5b層ブロックで形成)

〔624柱穴〕

- 1 10Y5/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 10Y5/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む)
- 3 5Y4/1 灰色 細砂～中砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む)

第95図 掘立柱建物30

い均整のとれた配置を成す。柱穴掘方の平面形は、南東側の619・620柱穴がやや不整な長楕円形となることを除けば、概ね整った楕円形を示し、長径30～80cm、短径25～70cmを測る。検出面からの深さは30cmを主体として20～55cmを測り、西側の柱筋がやや浅い傾向にある。柱穴埋土は灰色シルトを基調とし、下位層起源のシルトブロックと炭化物粒を含む点で共通する。なお、本建物では、618柱穴を除く全ての柱穴に暗色味の強い灰色極細砂の柱痕跡が認められた。

本建物の620柱穴からは、古墳時代中期の土師器細片が出土している。よって本建物の帰属時期も、古墳時代中期に求められよう。

掘立柱建物31(第96図 写真図版56・57・60)

調査区中央部やや北寄り1B-7fに位置する南北方向の掘立柱建物である。3面で検出した8溝によって北西部の一部を欠くため、全容は不明であるものの、梁行2間(3.7m)、桁行3間(4.6m)の側柱建物に復元出来る。建物の主軸はN-8.1°-E、身舎の面積は16.9㎡を測る。

柱間寸法は、梁行が1.8m前後、桁行が1.5～1.6mを測り、均整のとれた配置を成す。柱穴掘方の平面形はやや小振りな円形を示し、径30～60cmを測る。検出面からの深さは、桁行の柱穴は20cmを主体として10～20cmを測るなど全体として浅いものの、梁行の638・752柱穴は、例外的に40cmと深い。柱穴埋土は灰色極細砂～細砂を主としており、7-5b層起源のブロックを多く含む他、炭化物粒を微量に含んでいる。本建物では640柱穴等において、やや暗色味があった灰色極細砂を主体とする柱痕跡を確認した。

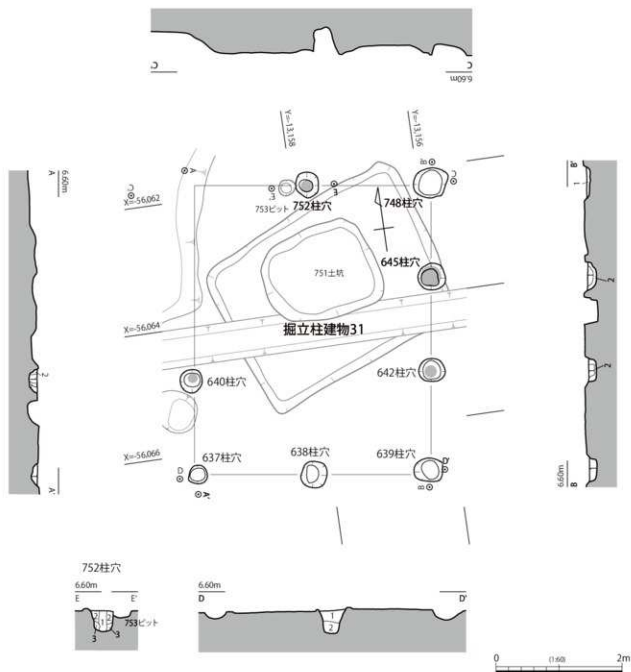
本建物の柱穴からは、古墳時代中期の土師器細片が出土している。この他、本建物は751土坑と重複関係にあり、これを切り込んで掘られている。このことから、本建物の帰属時期は古墳時代中期と考えられる。

掘立柱建物32(第97図 写真図版56・57・61)

調査区北西部1B-6gに位置する南北方向の掘立柱建物である。平面調査時に西側側溝と鋼矢板の間に設けた地層観察用の壁が崩落したため、西側側溝沿いにおいて、かろうじて東側の柱筋を確認したに留まっている。このため建物の全容は不明だが、柱穴規模及び柱痕跡の存在から、掘立柱建物を構成するものと判断した。西側壁面(第10図)で確認した遺構のうち、土色番号④①・④②・④③～④⑦といった柱穴が、この建物に組み合う柱穴候補として挙げられるが、平面的な検討を行っていないため、詳細は明らかではない。梁行1間以上、桁行3間(5.0m)の側柱建物と推測され、建物の主軸はN-8.1°-Eを指す。

柱間寸法は、桁行1.4～1.9mを測り、南側の613・614柱穴間は1.4mと狭い。柱穴の掘方は、やや不整な長楕円形の611・613柱穴と小振りな円形の612・614柱穴の二者がある。前者は長径90～110cm、短径50～60cm、後者は径約50cmをそれぞれ測る。検出面からの深さは、約30cmを測る。柱穴埋土は灰色極細砂～細砂を主とし、7-5b層起源のブロックを多く含んでいる。本建物では、611柱穴を除く全ての柱穴にやや暗色味の強い灰色シルト～極細砂の柱痕跡が認められた。

本建物の柱穴からは、古墳時代中期の土師器細片が出土している。このことから、本建物の帰属時期を古墳時代中期に求めることが出来る。

**[637柱穴]**

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む)

[638柱穴]

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)
- 2 10Y6/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)

[639柱穴]

- 1 7.5Y4/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

[640柱穴]

- 1 7.5Y4/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 5Y5/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む)

[642柱穴]

- 1 7.5Y4/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 5Y6/3 オリーブ黄色
(ほぼ7.5b層ブロックで形成)

[645柱穴]

- 1 7.5Y4/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 5Y6/3 オリーブ黄色
(ほぼ7.5b層ブロックで形成)

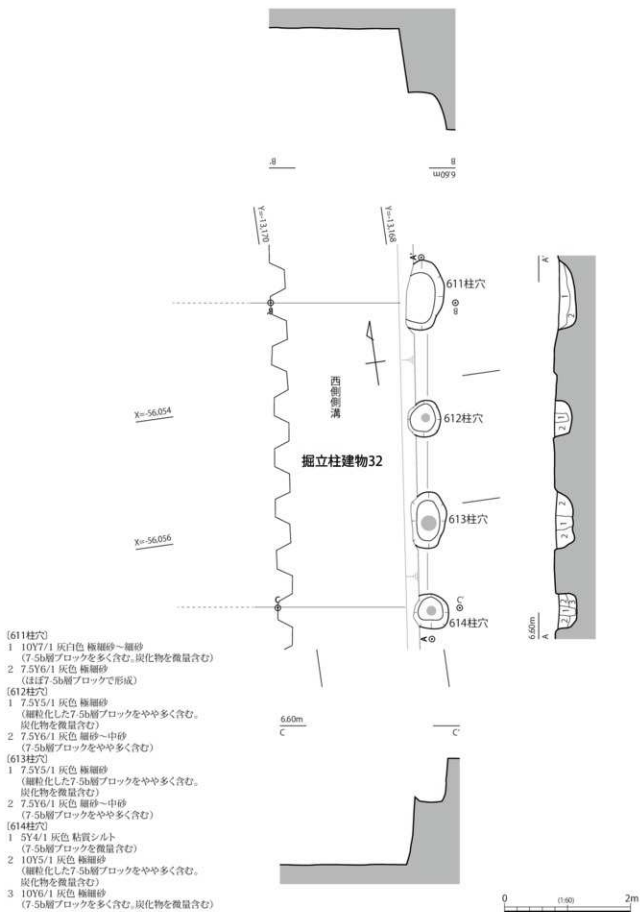
[748柱穴]

- 1 7.5Y4/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む)

[752柱穴]

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む。炭化物を微量含む。木柱痕)
- 2 7.5Y4/1 灰色 極細砂～細砂
(細粒化した7.5b層ブロックを少量含む)
- 3 10Y4/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5b層ブロックを少量含む)

第96図 掘立柱建物31



第97図 掘立柱建物32

掘立柱建物33(第98図 写真図版56・57・62)

調査区北西部南寄りの1B-7gに位置する南北方向の掘立柱建物である。梁行2間(3.1m)、桁行2間(3.9m)の床束を持つ総柱建物で、建物の主軸はN-13.8°-E、身舎の面積は12.1㎡を測る。

柱間寸法は、梁行が1.4~1.7m、桁行が1.9~2.0mを測り、やや北側が狭くなるものの、概ね整った平面配置を示している。柱穴の掘方は、やや不整な長楕円形の711柱穴と728柱穴を除けば小振りな円形のもので大半を占め、規模は径20~50cmを測る。また、検出面からの深さは30cmを主体として30~40cmを測る。柱穴埋土は灰色極細砂~細砂を主とし、下位層起源の極細砂~細砂ブロックを多数含むほか、炭化物粒を多く含んでいる。本建物では、全ての柱穴においてやや暗色味があった灰色極細砂の柱痕跡を確認した。この他、711・798柱穴においては柱根の残欠を確認したが、腐食の進行が著しく、取り上げには至らなかった。

本建物においては、南東隅の隅柱に相当する798柱穴が、740土坑と重複関係にある。740土坑を掘削することで初めて798柱穴の存在を確認したことから、本建物廃絶後に掘削された740土坑よりも古いことは明らかである。本建物の711柱穴から古墳時代中期の土師器高坏が出土していることや周辺遺構との関連性から、本建物の帰属時期は、古墳時代中期に求めることが出来よう。

掘立柱建物34(第99図 写真図版56・57)

調査区北西部1B-6・7gに位置する南北方向の掘立柱建物である。周辺一帯はベースの7-5b層のグライ化が著しく、検出には困難を伴ったため、柱穴の検出漏れが生じた可能性も否定出来ない。検出できた10基の柱穴群は、いずれも深さ20~50cmと深く、柱痕跡が明瞭であるなど建物を構成する可能性が極めて高い。また柱穴配置も、不完全ながら全体として長方形を呈すことから、それらを総合して掘立柱建物と評価し、報告する。

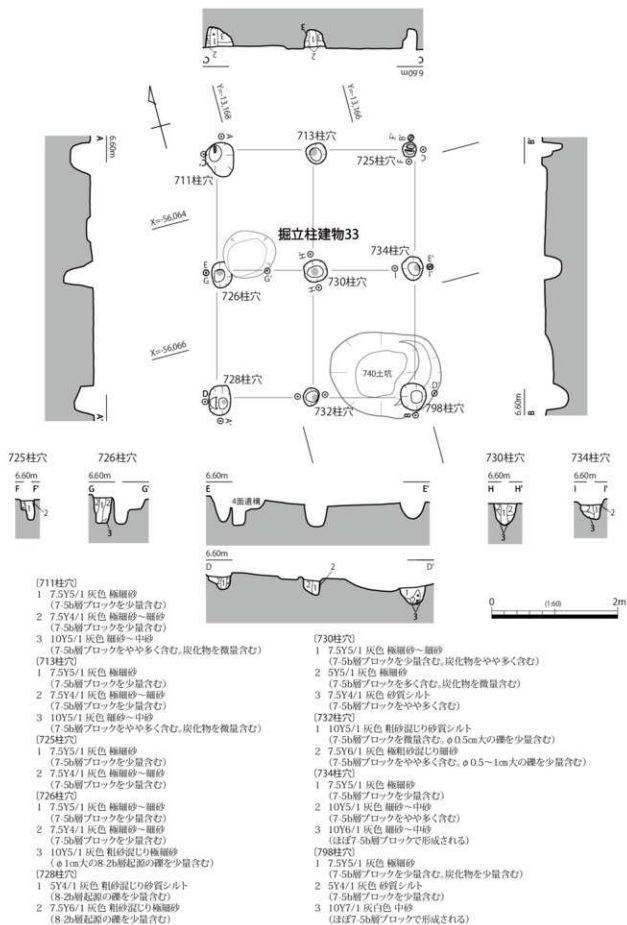
図上に示した範囲で柱穴が巡ると仮定すると、梁行2間(3.6m)、桁行3間(5.9m)以上の規模を有し、N-15.0°-E方向に主軸を持つ側柱建物が想定可能であるが、南側の梁行を除けばいずれの柱筋においても確証を欠いているため、建物の全容は明らかではない。

柱穴の埋土は、他の建物と同様に灰色極細砂~細砂に下位層起源のブロックを多数含み、炭化物粒を多く含むものである。いくつかの柱穴で確認出来た柱痕跡は、暗色味の強い灰色極細砂を埋土に持つ。柱穴内からは、古墳時代の土師器細片が出土している。

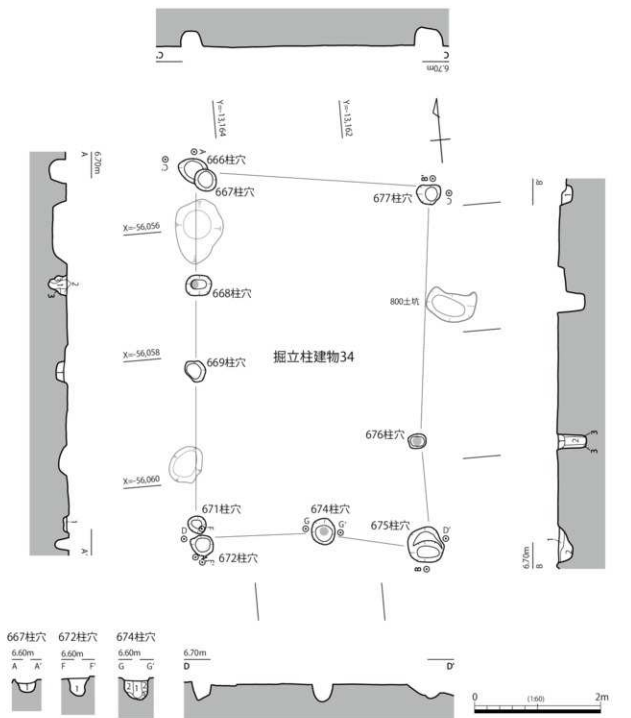
(3)柱穴(第100図)

土坑やピットのうち、掘立柱建物を構成出来ないものの、柱痕跡や柱根が存在するものを柱穴として認識した。また、土坑とピットは径30cmを基準として、それ以上の規模を示すものを土坑、未満の小規模なものをピットとした。これらの遺構の詳細な規模については、326頁以降の遺構計測表を参照いただくこととして、ここではその概要について記述を進めることとする。

柱穴は、主には1B-6g・f~1B-7gを中心とする北半部一帯に分布しており、当該地区は本面で検出した掘立柱建物の空閑地にも相当するため、調査時に認識し得なかった掘立柱建物を構成するものの可能性が高い。この他、本面では柱穴以外の土坑・ピットを調査区北半部のほぼ全域で検出した。それらの多くは柱穴同様、30~40cm程度の深さを示すものが多い。



第98図 掘立柱建物33



〔667柱穴〕

- 1 10Y6/1 灰色 細砂～中砂
(7.5b層ブロックを多く含む。炭化物を少量含む)

〔668柱穴〕

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 7.5Y6/1 灰色 極細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む)
- 3 10Y5/1 灰色 細砂～中砂 (7.5b層ブロックを多く含む)

〔669柱穴〕

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂～細砂 (7.5b層ブロックをやや多く含む)

〔671柱穴〕

- 1 7.5Y5/1 灰色 極細砂～細砂 (7.5b層ブロックをやや多く含む)

〔672柱穴〕

- 1 10Y6/1 灰色 細砂～中砂
(7.5b層ブロックを多く含む。炭化物を少量含む)

〔674柱穴〕

- 1 7.5Y5/1 灰色 中砂
(7.5b層ブロックを少量含む。炭化物を微量含む)
- 2 7.5Y4/1 灰色 細砂～中砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む)
- 3 10Y7/1 灰白色 細砂
(ほぼ7.5b層ブロックで形成)

〔675柱穴〕

- 1 7.5Y4/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む)
- 2 10Y5/1 灰色 細砂
(7.5b層ブロックを多く含む)

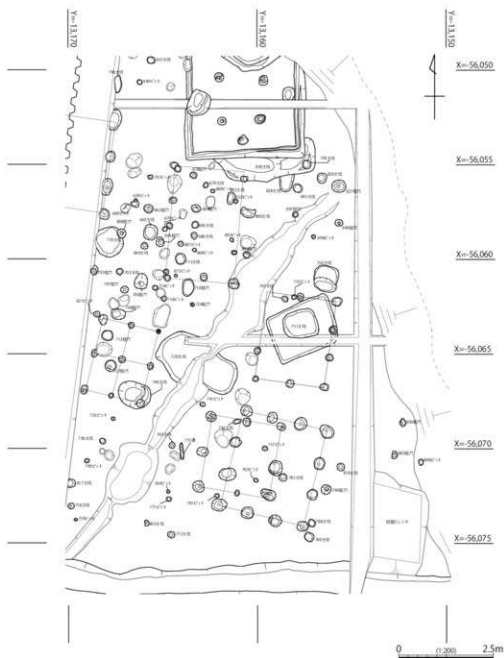
〔676柱穴〕

- 1 7.5Y6/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む)
- 2 7.5Y4/1 灰色 極細砂
(炭化物を微量含む)
- 3 7.5Y5/1 灰色 細砂～中砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む)

〔677柱穴〕

- 1 7.5Y6/1 灰色 極細砂～細砂
(7.5b層ブロックをやや多く含む)

第99図 掘立柱建物34



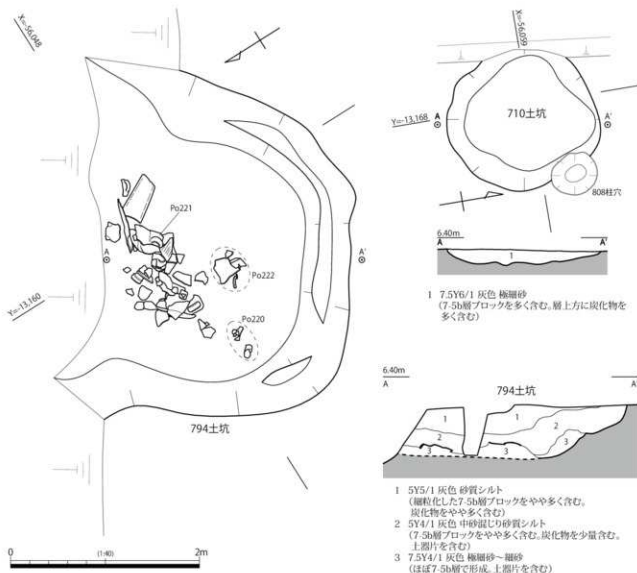
第100図 6面遺構(柱穴・土坑・ピット)

(4)土坑

794土坑(第101図 写真図版63)

竪穴建物1の北側に位置する土坑である。大振りな平面不整形の土坑とみられるが、15流路及び550流路によって北半部を欠いているため、全容は窺うことが出来ない。南半部分については竪穴建物1と重複関係にあるが、断面観察の所見からこれを切り込んで掘られていることが明らかのため、竪穴建物1よりも新しい遺構であることが分かる。残存範囲の幅は3.5m、検出面からの深さは57cmを測る。

本土坑の掘方の形状は、深い碗形を呈している。壁面部分は部分的に鋭角に掘り込まれ、ほぼ直立しながら段を形成する箇所がある一方、坑底は平坦である。土坑の埋土は、灰色シルトの上層と、や

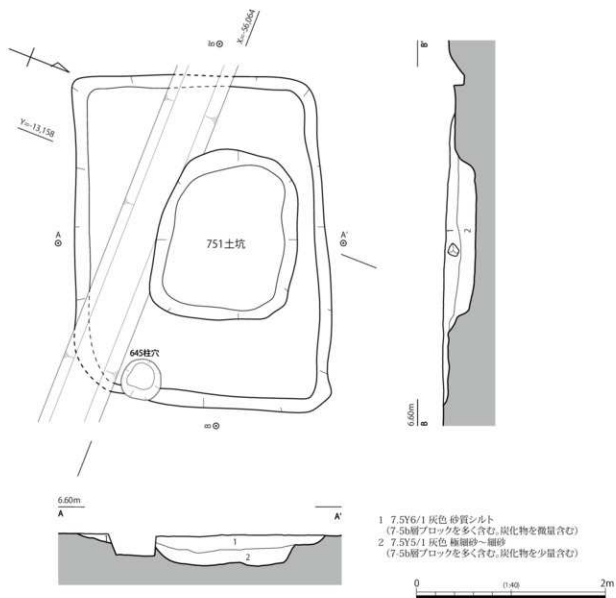


第101図 710土坑・794土坑

や暗色味があった灰色中砂混じりシルトの中層、そして灰色極細砂～細砂の下層といった3つの層に分けることが出来、いずれもベースの7-5b層起源のブロックを多量に含んでいる。このうち、下層はほぼ7-5b層起源のブロックで構成されていることから、加工時形成層に相当するものとみられる。

本土坑について特筆すべきこととして、多数の土器が出土したことが挙げられる。これらの土器は、埋土の中層と下層の層界付近にほぼ貼り付くようにして出土していることから、ほぼ同時期に一括して土坑内に投棄されたものと想定出来よう。

出土した土器は、山陰型甌形土器を中心として、古墳時代前期後葉～中期前葉の土師器等に限定されることから、古墳時代中期前葉に掘削され、埋め戻された土坑とみることも出来る。しかし、竪穴建物1の埋土上層の土器は概ね古墳時代中期の所産で、上層には古墳時代中期後半のものを含んでおり、これを切り込んで掘られている本土坑に含まれる土器の帰属時期との間に、逆転現象が生じている。その原因としては、他所で使用されていた甌を後に一括して投棄した可能性が想定され、竪穴建物1との重複関係からすれば、本土坑は古墳時代中期後葉以降に形成されたものとなると考える。



第102図 751土坑

なお、550流路の掘削時には、本土坑の坑底よりもさらに下位のレベルから本土坑出土のものとはほぼ同一個体と考えられる甌を確認した。後世の550流路の機能時に本土坑の一部が崩落したためと考えられ、接合の結果、これらの甌は3個体が存在することを確認した。

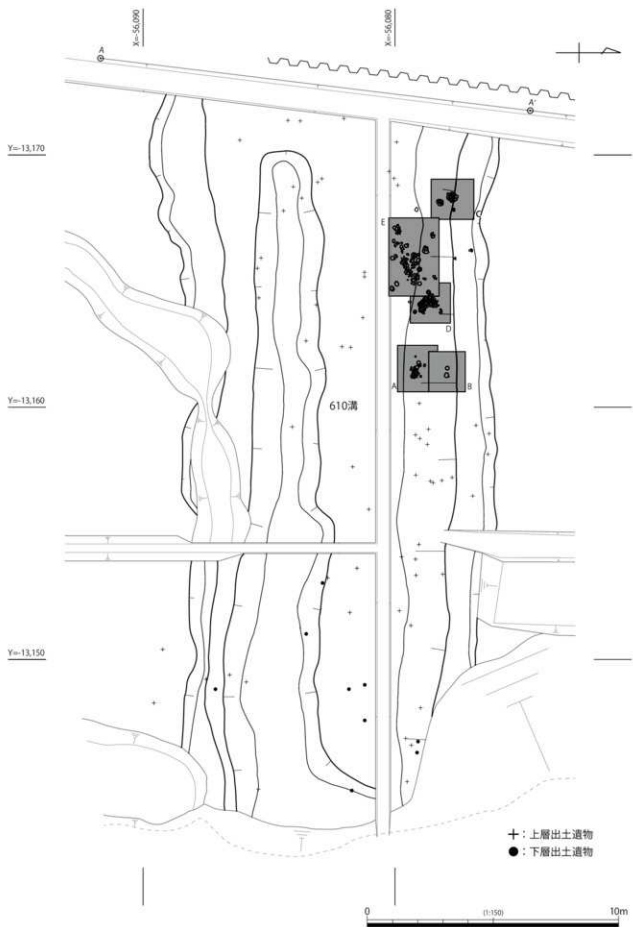
その他の土坑

この遺構面においては、径1.6m程度の710土坑(第101図)や、長辺3.5m、短辺2.7mで二段掘りの形状を示す751土坑(第102図)等、やや大振りな土坑が散在している。これらは深さ20cm以内に収まるなど、やや浅い傾向にある。

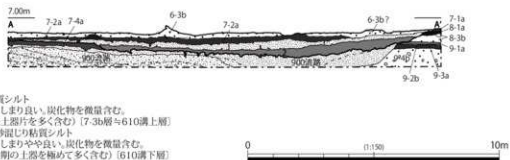
(5)溝

610溝(第103図～第106図 写真図版64・65)

調査区のはほぼ中央を東西方向に延びる溝である。便宜的に溝という名称を付与しているが、幅11～

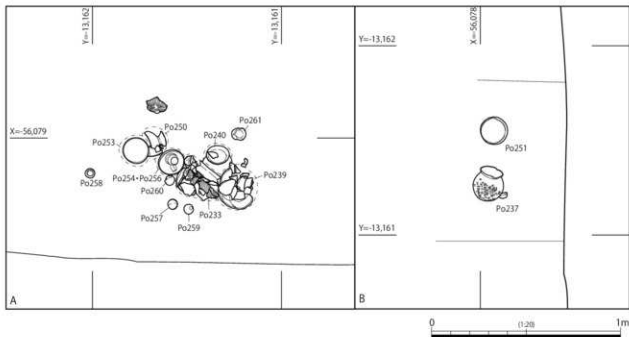


第103図 610溝



- 1 5Y5/1 灰色粘質シルト
(海法やや悪いしまり良い、炭化物を微量含む。
古墳前～中期の上層土器片を多く含む) [7-3b層～610溝上層]
- 2 5Y4/1 灰色中砂混じり粘質シルト
(海法やや悪いしまりやや良い、炭化物を微量含む。
古墳時代前～中期の上層を極めて多く含む) [610溝下層]

第104図 610溝断面図



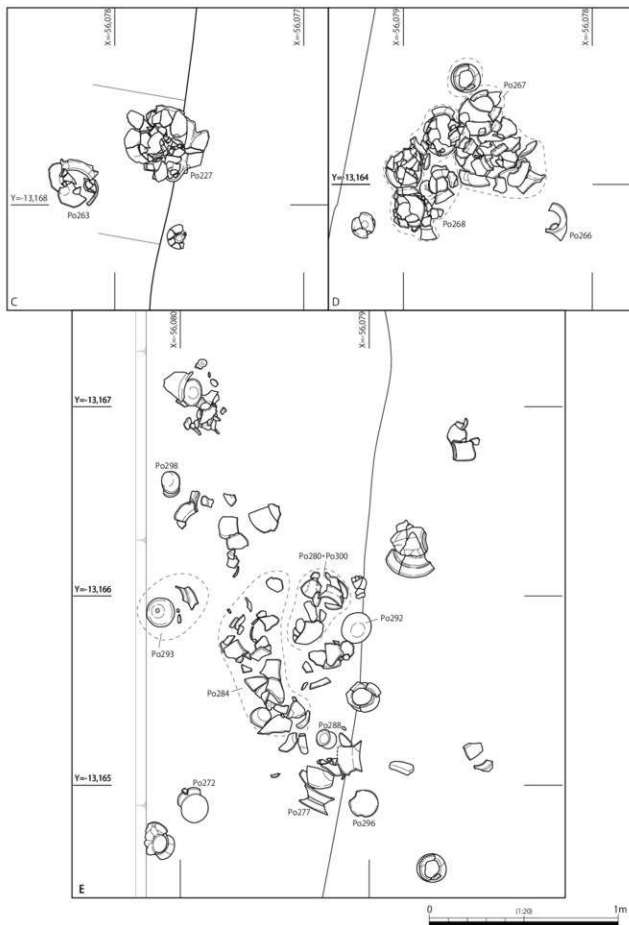
第105図 610溝遺物出土状況(1)

15m、検出面からの深さ最大1mを測り、掘方も極めて緩慢な播鉢状の傾斜を示すことから、溝というよりは大きな地形の落ち込みのような性格であったと捉えることが出来る。

溝の埋土は大きく上下2層に細分可能であり、上層が灰色シルト、下層が灰色中砂混じりシルトである(第104図)。上層は本溝周辺のみに限って認められる水成堆積物であるが、7-2a層と7-4a層の間に広範囲に分布することから、基本層序の中に組み込み、「7-3b層」という名称を付与して把握している。

本溝からは、古墳時代中期の須恵器・土師器が多数出土した。これらの土器は、完形に近いものが多く、空間的に一定のまとまりを有して出土している点が特筆される。この傾向は、特に溝の北西部層の下層出土遺物において強く認められ(第103図・第105図・第106図)、北側に展開する居住域との有機的な関連が窺われる。なお、出土土器には一定の時間差が認められ、上層には古墳時代中期後半～末葉の土器が多く含まれる一方で、下層には古墳時代前期後葉～古墳時代中期前葉の遺物が主に含まれている。このため、本溝では、長期に渡って埋没が進行したと考えることが出来る。

以上のことから、本溝は居住域(北半部7-1a層下面)と生産域(南半部7-2a層上面)ないしは放棄



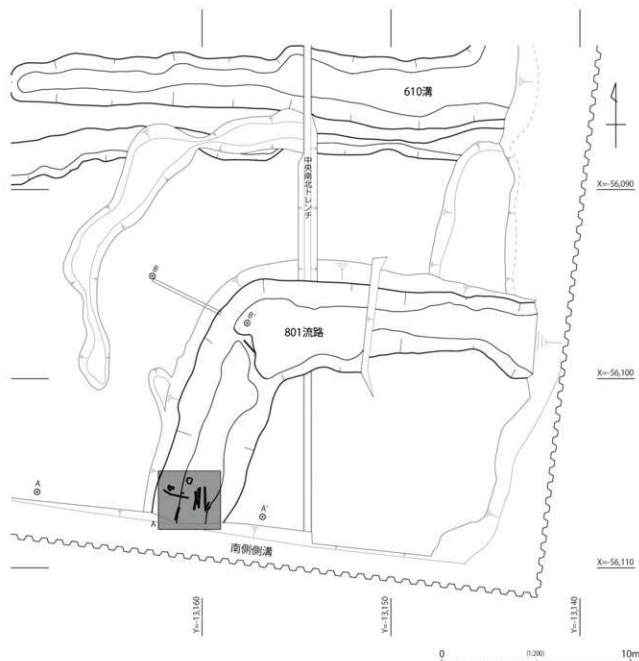
第106図 610溝遺物出土状況(2)

地(南半部7-2a層下面)を区分する地形の落ち込みのような性格を有していた可能性が想定でき、出土遺物は一定のまとまりをもって投棄されたものと考えることが出来る。

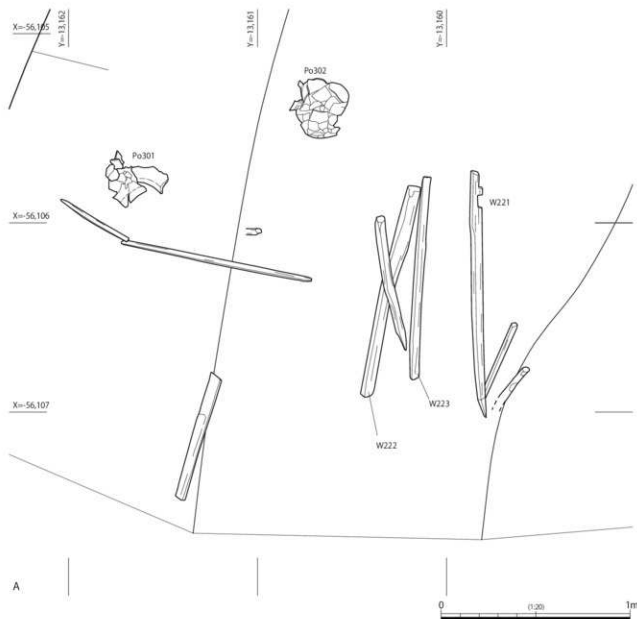
(6) 流路

801流路・802流路(第107図～第113図 写真図版66～70)

801流路・802流路は、5面で検出した599流路の踏襲前の流路である。7-2a層を除去した面で、7-2a層が流路肩部に垂れ下がる状況を確認したことから、その平面プランを手掛かりに本面で検出・掘削を進めた。断面の観察所見から、7-2a層に連続する層準とそれ以下の層準との間に明瞭な層界が認められ、その埋没には一定の時間差があると考えた。このことから、これを境に上部を801流路、下部を802流路として掘り分けて調査を行った。



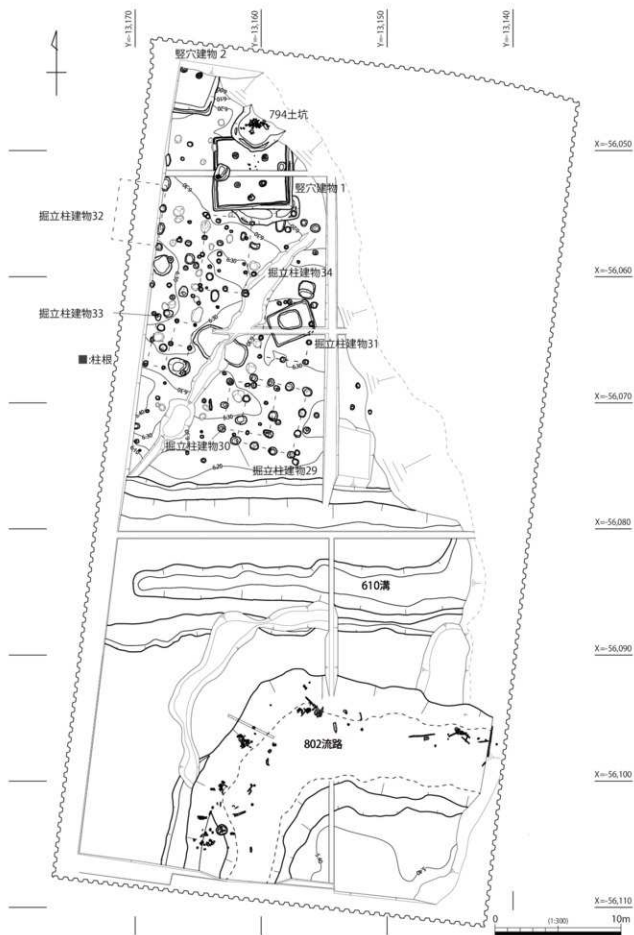
第107図 801流路



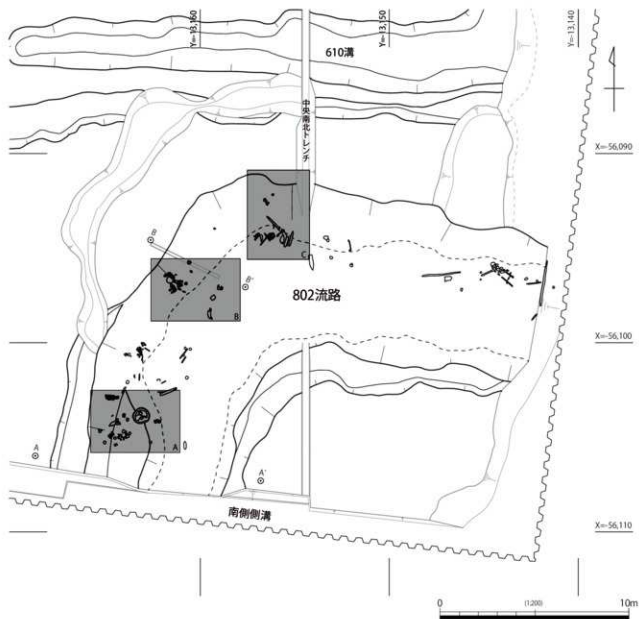
第108図 801流路遺物出土状況

流路は5面の599流路とほぼ同じ向きで伸びており、中央部南端で北に延び、途中で鋭角に東に屈曲して調査区外へと延びている。流路の規模は、801流路が幅3.0～5.0m、検出面からの深さ約1.1mを測り、一方802流路は、幅9.0～11.5m、検出面からの深さ1.5m以上をそれぞれ測る。なお、802流路については、埋土の途中で鋼矢板の支持限界深度に到達してしまったため、完掘には至っていない。流路の埋土は、801流路が植物遺体を多く含む均質な灰色の粘質シルトである(第88図)。802流路は大きく上下2層に分かれ、上層が葉理の明瞭な粘質シルト～中砂を主体とし、下層が植物遺体を多量に含む黒～灰色の粘質シルトである。

801流路からは、木製品を主とした遺物が少量出土した(第107図・第108図)。一方の802流路からは、下層を中心として古墳時代中期の須恵器・土師器、木製品等が多量に出土した(第109図～第113図)。土器には大型複合口縁壺(Po305)をはじめ完形品に近いものも多く、この他にも刀形(W99～W113)や農具形(エブリ形; W164)といった形代等、特筆すべき遺物が多い。さらには、ウマの頭骨が一頭



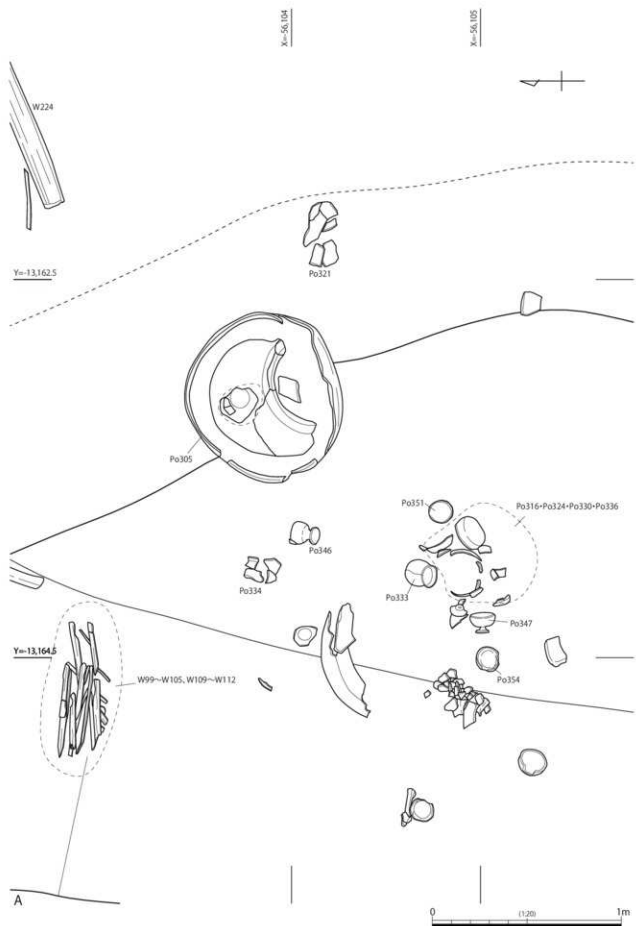
第109図 6-2面(7-1a・7-2a層下面)



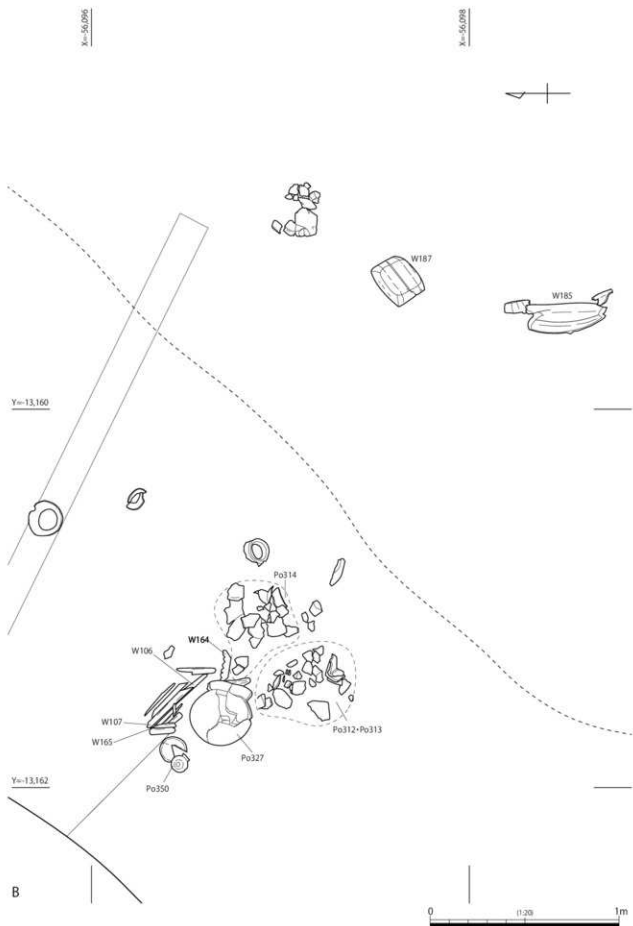
第110図 802流路

分出土している(第113図・写真図版68-1)。歯の状態から、このウマは5才前後の雌と推定される。また、頭部のみが個別に出土したことから、何らかの意図をもって投棄された状況が想定出来る。

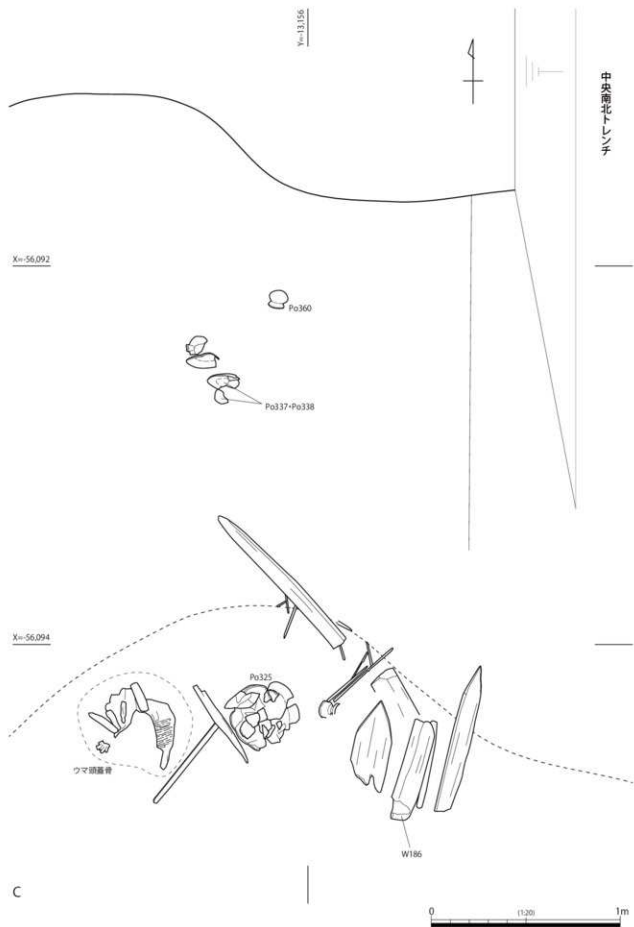
こうした出土遺物の大半は流路の西側肩部に集中し、特に形代については、出土地点がより一層まとまる状況を確認している(例えば第111図左下)。このように出土地点が偏向する要因としては、流路の東側に広がる遺構面上の土壌が、植物遺体を多く含む沼沢性の堆積であり、やや低平な放棄地のような景観が展開していたエリアと想定出来るためとみられる。また、特定遺物の集中が認められることから、これらの遺物が、一定の意図をもって投棄されていたことが窺われる。流路自体はさらに東側に延びていることから、隣接区の調査成果と併せ、より総合的な解釈を行う必要があるが、本流路では当該時期に何らかの祭祀が行われていた可能性が高く、大柵遺跡周辺の古墳時代中期集落の様相を窺う上で、示唆的な成果を挙げる事が出来たと言えるだろう(第8章第2・3節参照)。



第111図 802流路遺物出土状況(1)



第112図 802流路遺物出土状況(2)



第113図 802流路遺物出土状況(3)

第7項 7面の遺構

断面観察の所見から、南半部については7-5b層が掘削限界深度まで及ぶ一方で、遺構・遺物の存在も希薄であったことから、7-4a層を除去した面を最終面とした(第114図)。

一方の北半部では、7-5b層の直下に弥生時代終末期後半の遺物を含む土壌層(8-1a層)を確認し、それ以下の層準はいずれも掘削限界深度まで水成堆積物が堆積していたことから、8-1a層を除去して検出出来る遺構面を最終遺構面として調査した。したがって、南半部については古墳時代前期～中期の7-5b層が露出し、一方の北半部については弥生時代終末期の8-2b層ないしは8-3b層が露出するといったように、2時期の遺構面が混在する結果となっている。そのためここでは、より新しい段階の南半部を7面、北半を8面と分離し、報告する。

7面の遺構面については、南半部については6面までと同様、北西-南東方向に緩やかに傾斜する。最高地点は北西端部で5.9m、最も低い地点は南東端で5.4mをそれぞれ測る。

本面では、6面で掘削した802流路の踏襲前の流路である832流路を検出した。

(1) 流路

832流路(第114図 写真図版70・71)

調査区南半部に位置する599・801・802流路とした一連の流路のうち、最古段階の流路である。部分的にはあるが、7-4a層が垂れ下がっている状況を確認したことから、7-4a層の除去に伴って、その平面プランを検出した後に、これを832流路として調査を行った。

本流路は、802流路と比較すると部分的な堆積に留まるため、流路の肩もほぼ変化がなく、遺物もほとんど認められなかった。出土遺物に乏しいため、詳細な時期決定の根拠を欠くものの、7-5b層中に含まれる遺物が古墳時代前期前半であることより、古墳時代前期後半～中期頃の流路と想定できる。

第8項 8面の遺構

上述したように、北半部では、7-5b層の直下に弥生時代終末期後半の遺物を含む土壌層(8-1a層)を確認し、それ以下の層準はいずれも掘削限界深度まで水成堆積物が堆積していたことから、8-1a層を除去して検出出来る遺構面を最終遺構面として調査した(第115図)。

北半部の遺構面の地形は起伏に富んでおり、南西-北東方向にややきつく傾斜する。最高地点は南西端で6.0mを測り、もっとも低い地点である北東部で4.5mを測る。本面では、北半部で柱穴を2基、溝状の遺構を6条検出した。

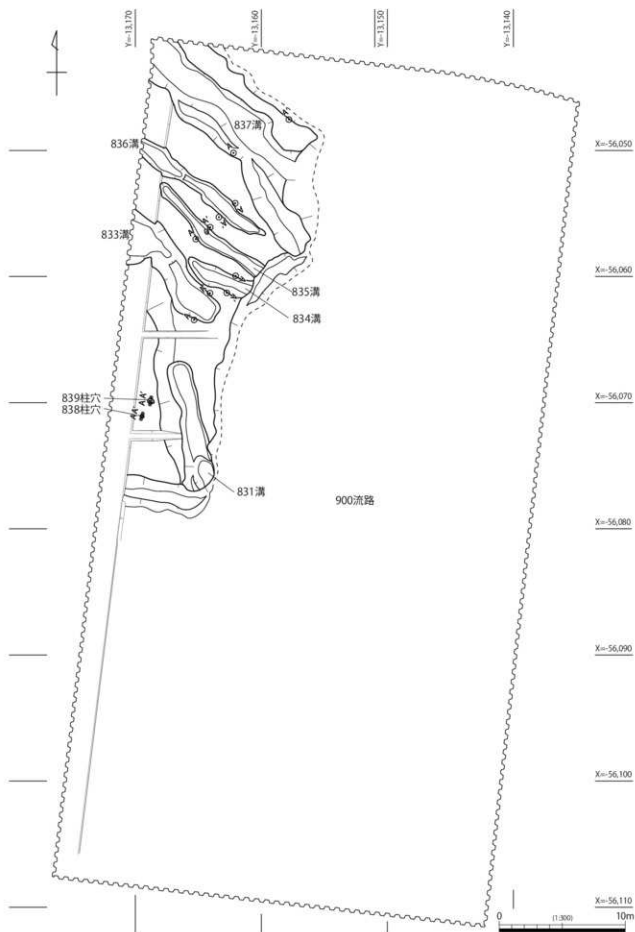
(1) 柱穴

838柱穴・839柱穴(第116図 写真図版75)

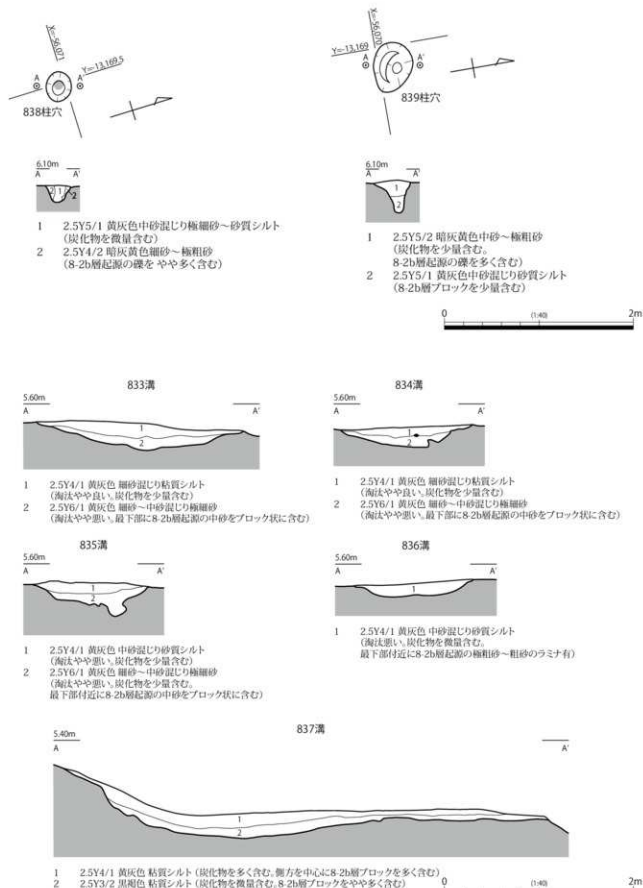
調査区中央部南半に位置する柱穴である。柱穴の位置する一帯は、6面段階から周辺に堆積していた細～中礫程度の粗粒の堆積物によって、遺構の検出が困難であった地点に相当する。このため、この2基の柱穴に関しても、6面に帰属する遺構の掘り残しの可能性も捨てきれないが、6面の掘立柱建物等を構成するものとしても組み合わせるのが認められないため、本面に帰属する遺構として報告し



第114図 7面(7-4a層下面)



第115図 8面(8-1a層下面)



第116図 8面遺構(柱穴・溝)

ておく。

柱穴の埋土は、炭化物を少量含む暗灰黄色細砂～極粗砂であり、下位層の8-2b層起源の砂を多く含んでいる。ともにやや整った楕円形を呈する。柱穴の規模は、838柱穴が長径30cm、短径25cmの楕円形を示し、検出面からの深さ18cmを測る。839柱穴は、長径50cm、短径40cmのやや不整形な長楕円形を示し、検出面からの深さは35cmを測る。838柱穴には、黄灰色シルトを基調とする柱痕跡が認められた他、839柱穴は掘方が鋭角な摺鉢状を呈していることから、柱穴の可能性が高いと考えた。両柱穴からは共に遺物は出土しておらず、詳細な帰属時期は不明である。

(2) 溝

831溝・833～837溝(第115図・第116図 写真図版73・74)

調査区北西部の微高地部分に位置する溝群である。微高地部分の地形の変化点を中心として、合計6条を検出した。

溝の規模は、北端部の837溝が幅3.0～5.0mとやや大振りなものを除けば、概ね幅1.0～3.0m、深さ20cm前後の浅いものである。また溝の埋土は、いずれも上位の8-1a層を起源とする黄灰色～黒褐色中砂混じりシルトの土壌が入り込んだものを基本とするが、深い箇所では、より細粒の均質なシルトに変容する。

これらの溝は、中央部西端の微高地部分を取り囲むように南東-北西方向に延びるが、それぞれの掘方はやや浅く緩やかな部分が多く、溝というよりは、地形の凹凸に合わせた溝状の落ち込みとすべきかもしれない。ただし、831溝や833・836溝などのいくつかの部分では、検出面からの深さが60cmを超える深い箇所も認められることから、その全てが単なる地形の凹凸であるという解釈もまた成り立たない可能性が高い。残念ながら現状では部分的な検出に留まったため、詳細は不明であるが、2区の調査成果を勘案すると、舌状に張り出した微高地部分の周辺にこうした溝状の落ち込みが伸びているようでもあり、微高地周辺の排水などを兼ねた溝を部分的に掘削するなどの人為の溝を含んでいる可能性もある。

遺物は831・833・837溝を中心として、主に弥生時代終末期の土器片(Po375～Po378)が少量出土した。833溝出土のPo377は、北近畿系に比定される壺である。これらの土器は、本溝群の帰属時期を示すものと考えられる。

(3) 流路

900流路(第12図・第115図 写真図版75)

断面観察の所見から、本来的には8-1a層の上面で検出出来る流路である(第12図)。調査の進行の都合上、8-1a層を除去した後には平面プランを確定し、掘削限界深度まで掘削を行った。流路は、大きくは南西-北東方向に流向を持っていたとみられ、調査区中央部西端付近で鋭く屈曲して北側の調査区外へと延びている。掘削限界深度以上に及んでいる上、調査区東側では流路の肩も検出出来ないため、規模の詳細は明らかにし得なかった。

流路を充填する堆積物は、南半部ではプレーン型(平板型)斜交葉理の顕著な中砂～極粗砂程度の粗粒の堆積物を主体とするが、北半部では葉理の不明瞭なシルト～極細砂等、細粒化した堆積物を主体とする。なお、流路の肩付近にはラグ堆積物とみられる8-1a層起源の偽礫が多数含まれており、保

存状態が良好な個所では、肩部に8-1a層が肩に沿って垂れ下がる状況を確認出来たことから、8-1a層の残存する北西部は、流路ないしは地形の変化点に相当することが分かる。

本流路を充填した堆積物及び氾濫堆積物は、7-5b層と基本層序で認識した層準に相当し、本流路の充填によって、1-1区周辺の以後の地形環境の基礎が形成されるに至っている。本流路の埋没過程は大柵遺跡の平野部の地形環境を大きく決定づける堆積物の一つであるため、より巨視的な観点から、形成時期や堆積の層相を解析する必要があるだろう。これについては、周辺の調査成果によるデータの蓄積を待ちたい。

ごく少数ではあるが、本流路の埋土からは弥生時代中期の土器片の他、古墳時代前期前葉～中葉の土器片が出土している。

第4節 出土遺物

第1項 土器・土製品

1 土器

(1) 1～3面出土土器(第117図 写真図版76 Po1～Po17)

Po1・Po2は青磁で、Po1は碗、Po2は壺の高台か。Po1は見込み軸剥ぎ、Po2の外面には片切の文様が認められる。Po3・Po4は白磁碗である。Po3は玉縁口縁を有し、白磁碗Ⅳ類(横田・森田1978)、11世紀後半～12世紀前半のものである。Po4は内外面とも露胎である。

Po5・Po6は緑釉陶器である。Po5は輪高台をもつ椀で、口縁部は外反する。内外面とも丁寧に施釉されてオリープ灰色を呈し、猿投窯産で9世紀後半のものと考えられる。Po6は輪高台をもつ畿内産の皿で、9世紀後半に比定される。

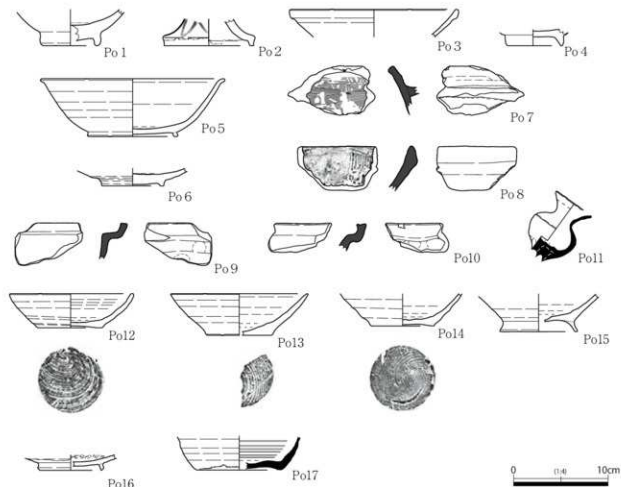
Po7～Po10は瓦質土器である。Po7は羽釜で、13世紀後半～14世紀のものである。Po8は在地系の播鉢で、15～16世紀頃のものか(註1)。Po9・Po10は鍋で、Po9は13世紀後半～14世紀、Po10は12世紀後半～13世紀中葉のものである。Po8は1-1a～2-2a層、Po7は1-1a～3-2a層、Po9は3-1a層、Po10は3-3a層で出土。

Po11は3-1a層上面で出土した裝飾須恵器子持台付壺、または子持壺の小壺で、底部は底抜けとまらない。6世紀後半～7世紀のものか。

Po12～Po14は8溝で出土した土師器坏、Po15は高台付坏、Po16は灰釉陶器の皿である。Po12・Po14は焼成良好で、器高がやや低く内湾する体部をもつ。Po13の体部はやや直線的に立ち上がる。いずれも11世紀後葉のものともみられる。Po15はハ字状の高い高台をもち、丸底で体部が開く。10世紀代のものである。Po16は底部内面及び高台部は露胎である。Po17は4-1a～6-1a層で出土した須恵器坏で、10世紀代のものである。

註

1 公益財団法人大阪府文化財センター 三好孝一氏の御教示による。



第117図 1～3面出土土器

(2) 4面出土土器

ア 4-2a層・381土坑出土土器(第118図 写真図版77・78 Po18~Po29)

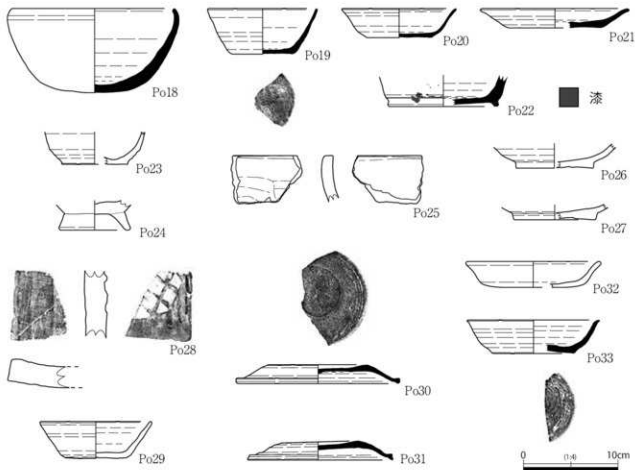
Po18~Po29は4-2a層出土土器である。Po18~Po20は須恵器杯、Po21は皿、Po22は壺である。Po18は深底で体部上半が内湾して立ち上がり、銅碗状を呈す。Po20は外傾して直線的に立ち上がる体部をもち、口縁部付近で僅かに外反する。これらは8世紀末~9世紀前半のものと考えられる。Po19は深底で弱く外傾して立ち上がる体部をもち、9世紀後半~10世紀初のものである。Po22は底部外面に二次的に付着したと考えられる漆が認められる。

Po23は底部回転糸切りの土師器杯で、9世紀末~10世紀前半のものである。Po24は高台付杯である。Po25は短く直立する口縁を持ち、壺か。

Po26・Po27は、軸葉がほぼ剥がれているが蛇ノ目高台を有す緑釉陶器の皿で、9世紀後半段階のものである。Po28は平瓦で、外面は格子タタキ、内面は布目が残る。Po29は、381土坑から出土した底部回転糸切りの土師器杯で、9世紀末から10世紀前半のものである。

イ 16耕作溝群・17耕作溝群(第118図 写真図版78 Po30~Po33)

Po30・Po31は須恵器蓋で、つまみをもたない。Po33は杯で、口縁部が僅かに外反する。Po32は土師器杯で、底部調整はヘラ切りである。Po30~Po32は16耕作溝、Po33は17耕作溝から出土しており、



第118図 4面出土土器

これらは8世紀末～9世紀に比定される。

ウ 掘立柱建物出土土器(第119図 写真図版78・79 Po34～Po50)

Po34は掘立柱建物1の22柱穴で出土した底部ヘラ切りの土師器杯、Po35は同21柱穴で出土した須恵器杯で、どちらも8世紀末～9世紀前半のものである。写真図版78-2に写真のみ掲載しているが、掘立柱建物3の43柱穴出土Po51、掘立柱建物4の95柱穴出土Po52は須恵器甕の胴部片で、内面に粗い格子目の当て具痕が残る。

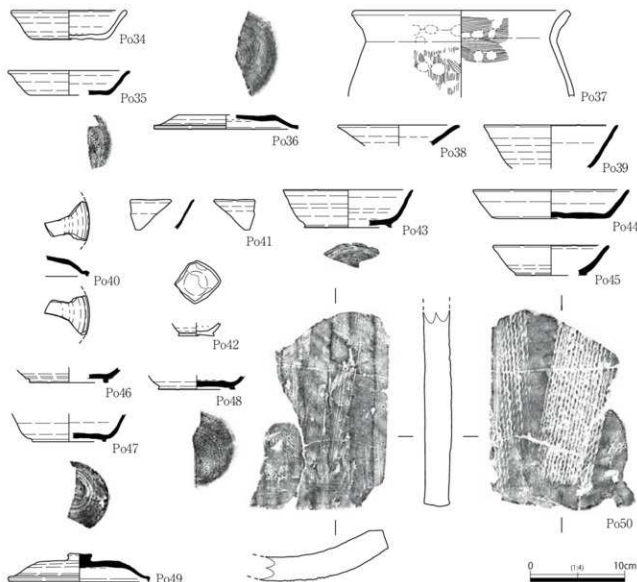
Po36は掘立柱建物5の53柱穴出土須恵器蓋で、口縁端部をつまみながら押さえて収める。8世紀末～9世紀前半のものである。

Po37・Po38は掘立柱建物8出土土器である。Po38は体部が外傾し口縁でやや外反する須恵器皿で、8世紀末～9世紀前半に比定される。

Po39は掘立柱建物12で出土した須恵器杯で、内面の色調は灰白色を呈すが、外面は炭素吸着により黒化処理されている。口縁端部のみ僅かに外反し、8世紀末～9世紀前半のものである。

Po40～Po42は掘立柱建物15出土土器である。Po40は138柱穴出土須恵器蓋、Po41は121柱穴出土土杯で、8世紀末～9世紀前半に比定される。Po42は144柱穴出土緑釉陶器である。底部径3.7cmで、底面まで施釉されており小型の瓶類か。

Po43は掘立柱建物16出土須恵器高台付杯で、口縁部が僅かに外反する。8世紀末～9世紀前半の



第119図 掘立柱建物出土土器

ものである。

Po44は掘立柱建物17、Po45は掘立柱建物21出土須恵器坏で、直線的に外傾する浅い体部をもち8世紀末～9世紀前半に比定される。

Po46～Po48は掘立柱建物23・24出土須恵器高台付坏で、低平な高台をもち直線的に外傾する浅い体部をもつPo48が8世紀後半に比定されるが、Po46・Po47は9世紀代のものである。

なお、Po49は掘立柱建物を構成しない487柱穴から出土した須恵器蓋で、ボタン状のつまみをもち、口縁端部は内外面ナデにより下方へ短く収める。8世紀末～9世紀前半のものである。

Po50は平瓦で、116柱穴出土資料と4-2a層出土資料が接合した。桶巻き作りで凹面に幅2cm程度の模骨痕が、凸面に縄目が認められる。

エ 15流路出土土器(第120図～第126図)

(ア) 18護岸・15流路上層出土土器(第120図 写真図版80・81 Po53～Po75)

Po53・Po54は15流路の地形の落ちに構築された18護岸に伴って出土した土師器坏である。回転台成形され、内湾して立ち上がる体部をもち10世紀後葉～11世紀中葉の所産と考えられる。Po55は同じく18護岸に伴って出土した平瓦であり、Po50と調整、厚さが類似する。

Po56～Po75は上層出土土器である。

Po56はボタン状のつまみをもつ須恵器蓋で、口縁部を折り返して面をもち、8世紀後半のものである。Po57～Po59は高台付坏である。Po59は体部に回転ナデの成形痕が明瞭に残り、特に口縁部はつまむようにナデられている。Po59は8世紀末～9世紀前半、Po57・Po58は高い高台をもち9世紀末～10世紀前半のものである。Po60は外傾して直線的に立ち上がる体部をもつ皿で、9世紀末～10世紀前半に比定される。Po61・Po62は壺、Po63は甕である。Po61は底部外縁に低平な高台が付く長頸壺で、体部調整は上半まで回転ヘラズリ後ナデ、下半ケズリとなる。Po62は肩部が丸く低平な体部をもつ葉壺形の壺で、頸部から上は打ち欠かれたとみられる。Po63は外反して短く立ち上がる口縁部をもち、肩部に自然軸が認められる。

Po64・Po65は黒色土器の塊で、体部外面のみ炭素吸着による黒化処理が施されている。

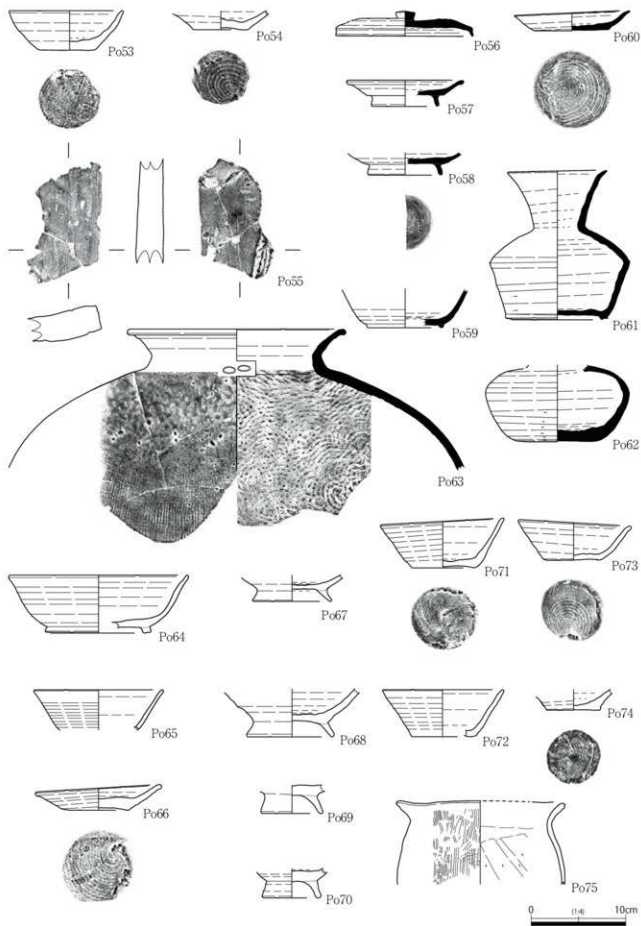
Po66は底径に対し口径が大きく開く体部をもつ土師器皿で、口縁端部を丸く収める。9世紀末～10世紀前半に比定される。Po67～Po70は高台付坏、Po71～Po74は坏である。高台付坏は「ハ」字状に開くやや高い高台をもつ。Po67に対し、Po68～Po70の高台はあまり開かず直立気味で端部を収める。高台内面の糸切りはナデにより不明瞭となる。これらは10世紀後葉～11世紀中葉に比定される。Po71・Po72は口径12cm以上を測る大型品で、9世紀末～10世紀前半のものであろう。Po75は甕で、胴部から外反しながら立ち上がる口縁部に最大径をもつ。内外面とも口縁部から頸部にかけて煤が少量に付着している。

(イ) 15流路下層出土土器(第121図～第126図 写真図版82～90 Po76～Po143)

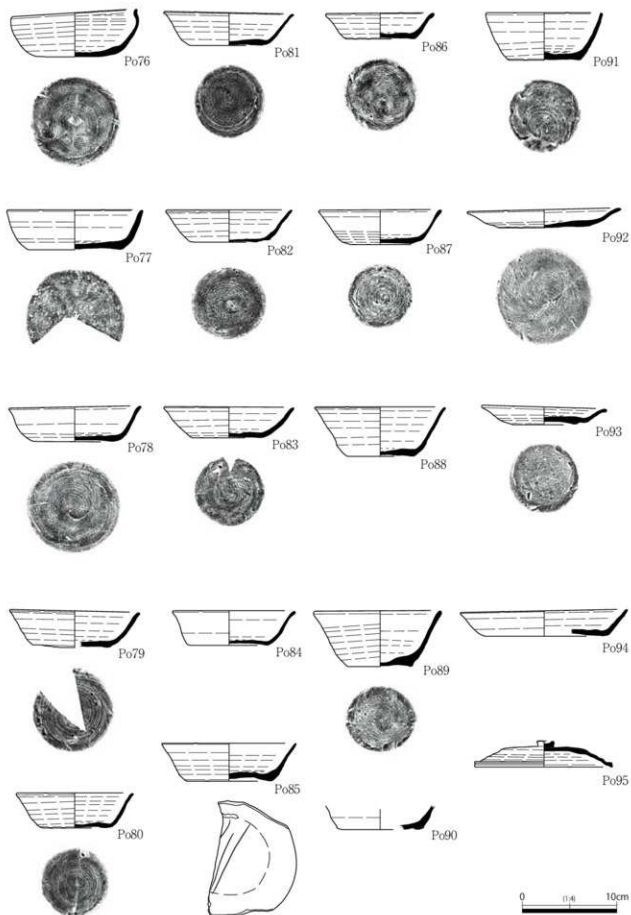
Po76～Po143は下層出土土器である。

Po76～Po91は須恵器坏である。Po76は内湾して立ち上がる体部をもち、口縁部がつまむように強くナデられて僅かに外反する。7世紀末～8世紀前半のものである。Po77～Po84は外傾して立ち上がる体部をもち、口縁部が僅かに外反する、あるいは肥厚するものである。口径は12.2～14.2cm、器高3.3～4.2cmを測り、後述するPo88やPo91に比して底がやや浅い形態となる。8世紀末～9世紀前半に比定される。重ね焼きの痕跡を残すものが多く、Po79～Po81・Po83などは、概ね口縁部が暗灰～灰色、体部が灰白色を呈す。Po84は内面の底部から口縁部にかけて灯明痕が認められる。一方、Po85～Po89は外傾して直線的に立ち上がる体部をもち、口縁端部は丸く収めるものである。Po90・Po91は外面を炭素吸着させ黒化処理したものか。Po85は底部内面にヘラ描きで少なくとも3条の線刻が認められる。

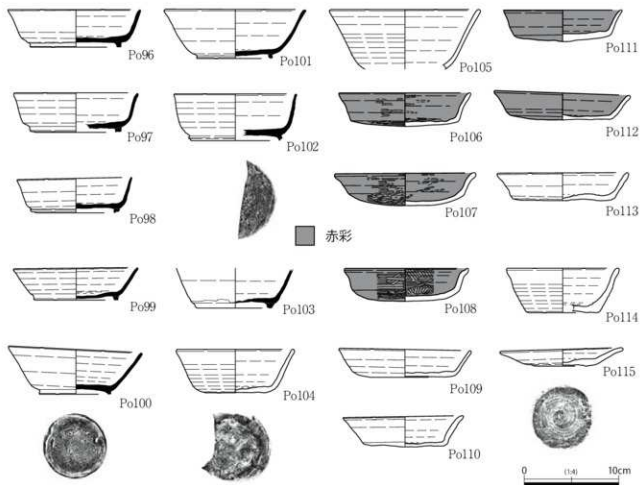
Po92～Po94は須恵器皿である。Po92・Po93は口径に対し底径が小さいタイプで、Po94に比して肉厚である。Po92は体部が僅かに外反しながら大きく開く。Po93は口縁部で外反し端部を丸く収める。Po94は体部が外傾して直線的に立ち上がり、口縁端部は外へつまみ出すように収める。Po92・Po93は9世紀後半、Po94は8世紀末～9世紀前半に比定されよう。



第120図 15流路上層出土土器



第121図 15流路下層出土土器(1)



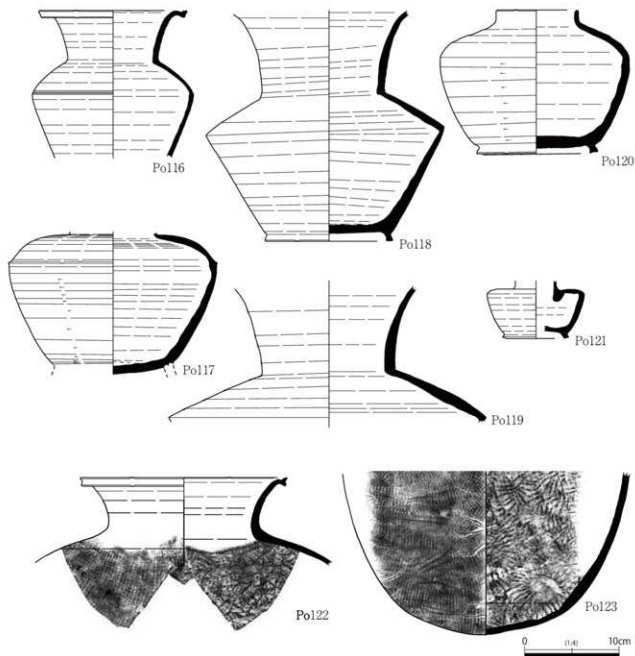
第122図 15流路下層出土土器(2)

Po95はボタン状のつまみをもつ蓋で、口縁部は下方へ短く屈曲して取める。口縁部外面には成形時についた沈線状の凹みが残る。8世紀末～9世紀前半に比定される。

Po96～Po103は須恵器高台付坏である。Po96～Po98は底部外縁からやや内側に低平な高台が付き、外傾して直線的に立ち上がる体部をもつ。口縁端部は先細り気味に取める。8世紀後半に比定される。Po99は底部外縁に低平な高台をもち、口縁部が僅かに外反するタイプである。一方、Po100・Po101は底部外縁付近に低平な高台が付き、直線的に立ち上がる体部をもつ深底タイプの高台付坏である。一方、Po102は底部外縁に横断面台形を呈す細い高台が付くもので、Po100・Po101より体部は浅い。これらは8世紀末～9世紀前半に比定される。Po103は底部外縁に横断面逆台形の高台が付く。焼成はややあまい。9世紀後半のものか。

Po104・Po105は黒色土器の碗で、どちらも外面に炭素吸着させた外黒の碗である。

Po106～Po114は土師器坏である。Po106～Po108、Po111・Po112は内外面とも赤彩され、体部から口縁部にかけて外反し、底部調整はケズリ後ナデである。Po107はケズリ後のナデが丁寧で、彩色も濃く厚みがあり赤褐色を呈す。これらは8世紀代のものである。Po108は体部下半～底部外縁までケズリだが、底部調整はヘラ切りである。Po111も底部調整はヘラ切りである。Po112・Po113の底部調整はヘラ切り後ナデか。一部指頭圧痕も認められる。この一群は9世紀代に比定されよう。Po115は底部回転糸切りの肉厚な皿であり10世紀前半代のものか。

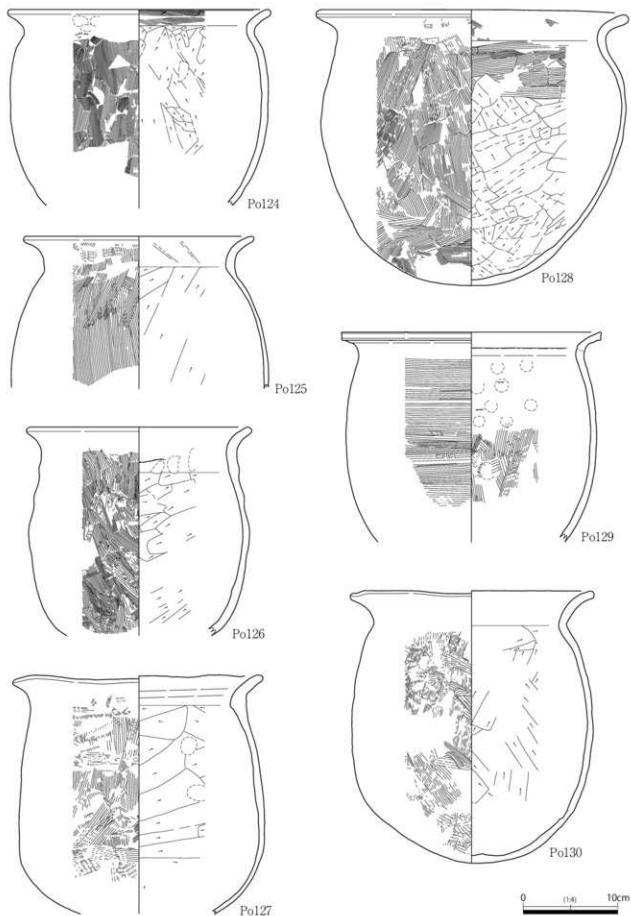


第123図 15流路下層出土土器(3)

Pol16～Pol21は須恵器壺である。Pol16は広口壺で、丸みを帯びた肩部に沈線が2条認められる。Pol17もPol16と肩部の形状は似ており、体部との境界は突帯状に削り出されている。Pol18も広口壺だが、体部から肩部にかけては稜をもって鋭角に立ち上がっており、底部外縁に高台が付く。Pol20・Pol21は高台の付く短頸壺である。Pol20は葉壺形、Pol21は小型品で、口縁部は焼成時の歪みが顕著である。Pol22・Pol23は甕である。Pol23内面には車輪文の当て具痕が認められる。

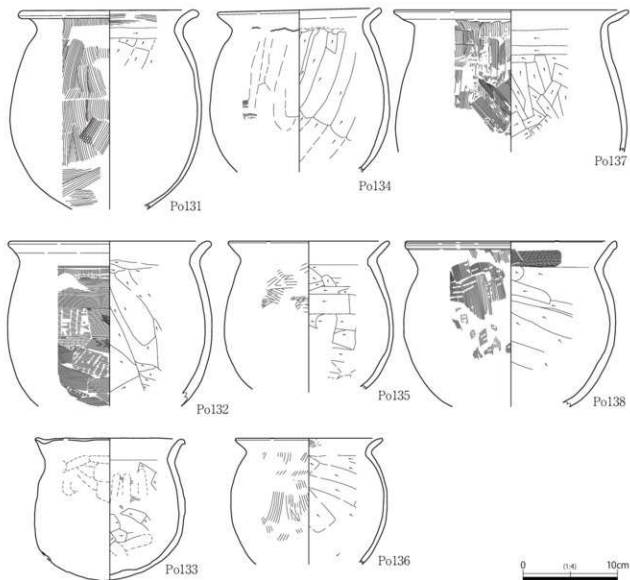
Pol24～Pol138は土師器甕であり、Pol26・Pol133・Pol138などは玉木分類(玉木2016)の甕Ⅱ2類、Pol28が同・甕ⅠB1c類、Pol29・Pol134が甕Ⅲ4類にあたりとみられ、概ね9世紀後半に比定されるものが多い。

Pol139～Pol143は製塩土器である。製塩土器は15流路から多量に出土しており、いくつかの型式が認められる。そのうち、代表的なもののみ図化、掲載した。Pol139・Pol140は内湾して立ち上がる体

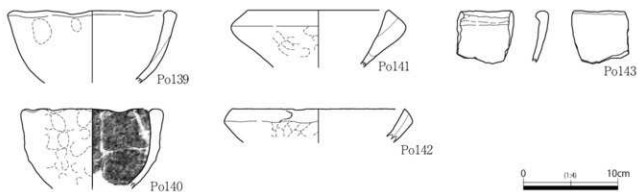


第124図 15流路下層出土土器(4)

部をもつもので、内面には布目が残されている。Po141・Po142は直線的に立ち上がる体部をもち、口縁部が肥厚し端部に面を形成する。Po143は口縁部内側のみが肥厚するものである。



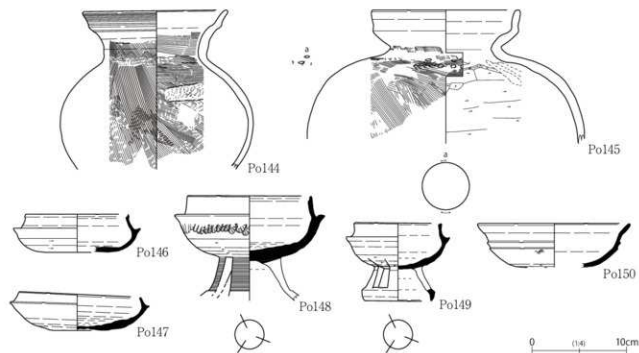
第125図 15流路下層出土土器(5)



第126図 15流路下層出土土器(6)

エ 4-3b層以下出土土器(第127図 写真図版91 Po144~Po150)

Po144~Po150は中央東西トレンチ等で出土した土器で、4-3b層~7-3b層に帰属する可能性をもつ。Po144は弥生土器の壺で、口縁部に3条1単位の櫛状工具による擬凹線を巡らせる。胴部上半の調整は内外面ともハケで、内面には粘土紐の輪積み痕跡が観察できる。Po145は土師器甕で、残存範囲で少なくとも肩部2箇所に竹管文、ヘラ描きによる綾杉文が認められる。Po146・Po147は須恵器坏身で、Po146はTK47併行、Po147はTK43併行のものである。Po148・Po149はTK47併行の須恵器有蓋高坏、Po150は無蓋高坏である。



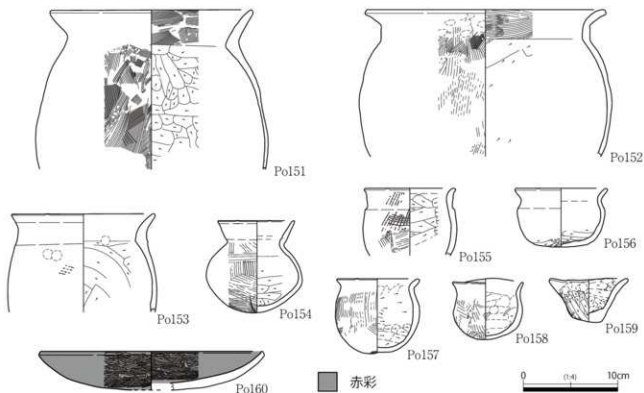
第127図 4-3b層以下出土土器

(3) 5面出土土器

ア 550流路出土土器(第128図・第129図 写真図版92・93 Po151~Po176)

Po151~Po153は土師器甕である。Po151・Po153は、口縁が胴部から緩やかに湾曲して上方へ立ち上がり、頸部内面に稜をもつ。Po152は頸部外面に成形時の指頭圧痕が顕著に残る。これらは玉木分類I B2類、II 2、II 3類にあたり、概ね7~8世紀のものともみられる。Po154は直口壺であり、底面に焼成前のヘラ記号が認められる。古墳時代中期後半のものである。Po155~Po159はミニチュアの鉢または甕で、Po155・Po157は形態的特徴から8世紀代のものか。Po158は口縁部が湾曲しながら立ち上がり、口縁部と胴部の境は緩やかなタイプの甕を模倣しているとみられる。Po160は大型の皿であり、口縁端部を上方へつまむようにナデしているため内面に沈線状の凹みが生じている。内外面ともミガキ調整で丁寧に仕上げられている。8世紀前半に比定されよう。

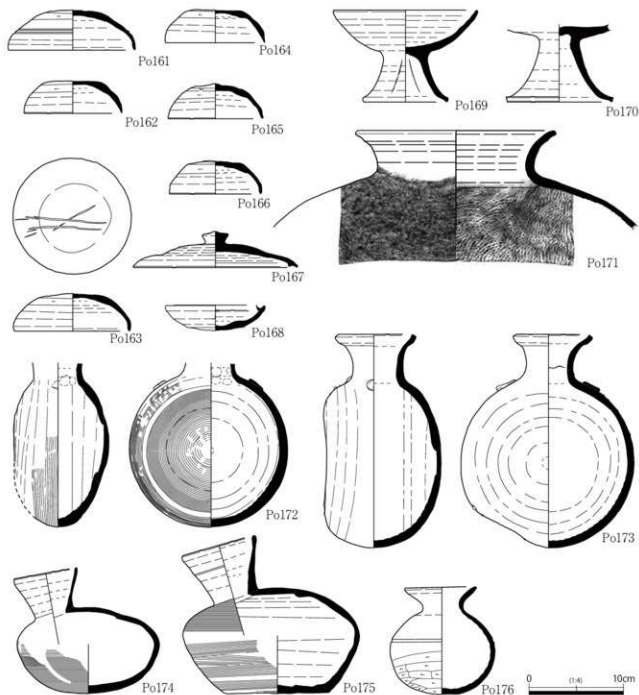
Po161~Po166は須恵器坏蓋である。Po161は天井部の周辺のみ回転ヘラケズリしており、天井部と体部の境界は二条の沈線が施されているだけである。口縁部に厚みの変化はなく端部は丸く仕上げられる。TK209併行、6世紀末~7世紀初頭に比定される。Po162・Po163の天井部はヘラ切り後に粗くナデ調整され、Po163は線刻によるヘラ記号が認められる。7世紀前半のものである。Po164~



第128図 550流路出土土器(1)

Pol166は口径9.6~10.4cmと小型で、天井部はヘラ切り後未調整である。7世紀後半のものである。Pol167は算盤玉状のつまみを有す蓋で、端部にかえりをもつ。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈す。Pol168は口径が11.0cmの小型の坏身で、内傾する口縁の立ち上がりは低い。Pol169・Pol170は無蓋高坏である。Pol169は短脚で切り込みにより透かし孔を表現している。Pol170は短脚で透かし孔をもたない。Pol167~Pol170は、7世紀後半に比定される。Pol171は須恵器甕である。

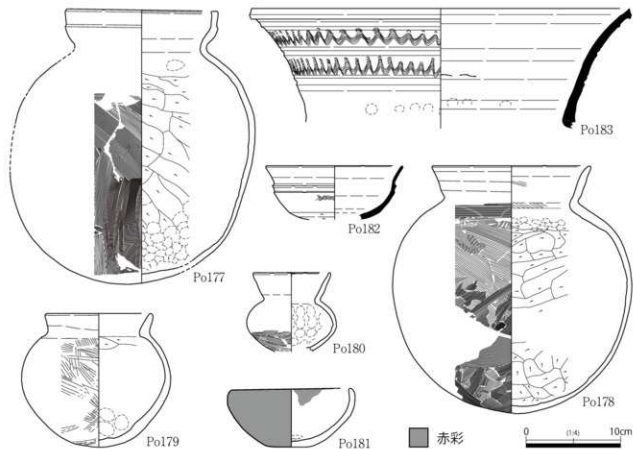
Pol172・Pol173は提瓶で、どちらも把手は痕跡化しボタン状の粘土を貼り付けただけとなる。Pol173の口縁端部は内湾しやや厚手となる。6世紀末~7世紀前半に比定される。Pol174・Pol175は平瓶で、胴部の形態及び調整は共伴した提瓶とほぼ同じだが把手の痕跡は認められない。7世紀前半頃のものか。Pol176は小型の壺で、胴部最大径に沈線が1条巡る。



第129図 550流路出土土器(2)

イ 580・605・606土器群、595土坑出土土器(第130図 写真図版94 Po177~Po183)

Po177・Po178は土師器甕である。Po177は退化した複合口縁端部を内面に肥厚させる。肩部内面に指頭圧痕が残る。Po178は直線的に立ち上がるくの字口縁で、口縁端部をつまみあげるように取める。外面調整はナナメ方向のハケメで、ハケメは細く深い。Po179・Po180は小型丸底壺で、Po179は球形を呈す胴部から短く外反して立ち上がる口縁部をもち、Po180はやや扁球形を呈す胴部径が口径に対し大きい。Po181は埴で、平底から立ち上がるやや深い胴部をもち、口縁端部付近で内湾する。Po180がやや古い様相を示し古墳時代中期前葉に比定される以外は、いずれも古墳時代中期後葉のものである。595土坑出土のPo182は須恵器無蓋高坏でTK23~47併行、Po183は甕の口縁部で2段の波



第130図 580・605・606土器群、595土坑出土土器

状文を施す。

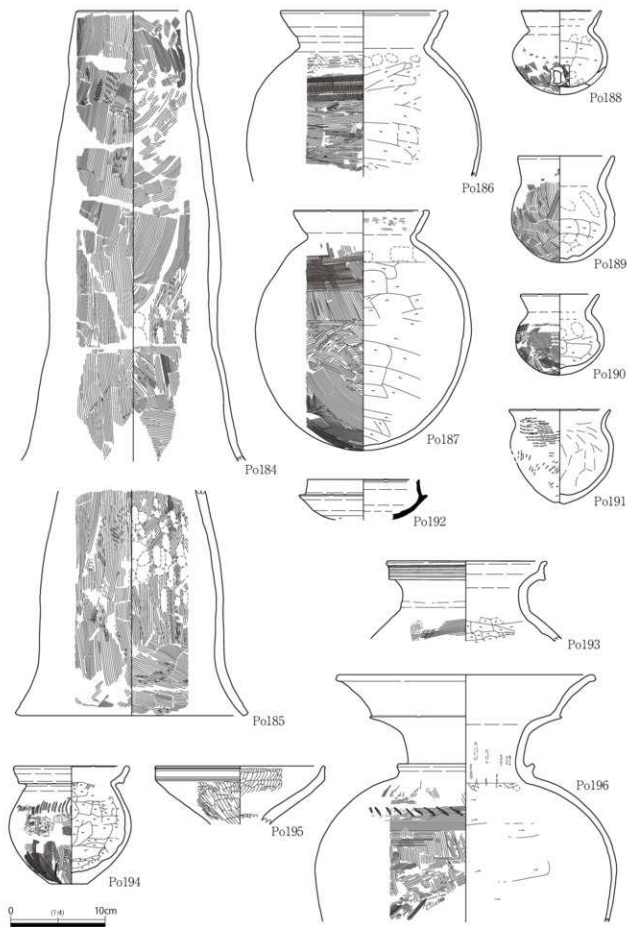
ウ 7-1a~7-2a層出土土器(第131図 写真図版95・96・118 Po184~Po196)

Po184~Po188は7-1a層出土土器である。Po184は一見、山陰型甌形土器に似るが、それより細身で薄い形態となり復元径は11.6cmを測る。よって、山陰系甌形土器とは異なり、鳥取市大井聖坂遺跡Ⅳ区SK-17で出土したような円筒形土器(谷口編2005)であろう。同種の土器については煙突形土製品として鍛冶炉の通風・昇温装置の可能性も指摘されている(田中・伊藤2016)。Po185はラッパ状に開く形態で、これも同種の円筒形土器と考えられる。調整は縦~斜め方向のハケが主体となるが、端部付近のみナデである。

Po186・Po187は端部を内側に折り返して肥厚させるく字状口縁の土器器甕で、球形を呈す胴部の肩には回転によるヨコハケが残る。古墳時代前期後葉のものである。Po188は小型丸底甕で、口径に比して胴部径が大きい。焼成後の胴部穿孔が1か所認められ、穿孔時の打撃は内側から行われている。古墳時代中期前葉のものである。

Po189~Po192は7-2a層出土土器である。Po189・Po190は土器器小型丸底甕で、Po190はPo188と同形態のものだが、Po189は外傾して立ち上がる口縁部径と胴部径がほぼ同じで、調整は粗雑な不定方向のハケである。Po191はタタキ痕跡が明瞭な小型の甕で、庄内形甕と考えられる。Po192は須恵器坏身で、TK47併行のものである。

Po193~Po196はトレンチ掘削中に出土したもので帰属層位を明確にできないが、7-1a~7-2の



第131図 7-1a層~7-2a層出土土器

層帰属の可能性がある一群である。弥生時代後期後葉の壺(Po193)、甕(Po194)、器台(Po195)、古墳時代前期中葉の壺(Po196)がある。このうち器台Po195は北近畿系・大山式併行のものとみられ、口縁部に擬凹線文が施されている。

(4) 6-1 面出土土器

ア 竪穴建物1出土土器(第132図 写真図版97 Po197~Po203)

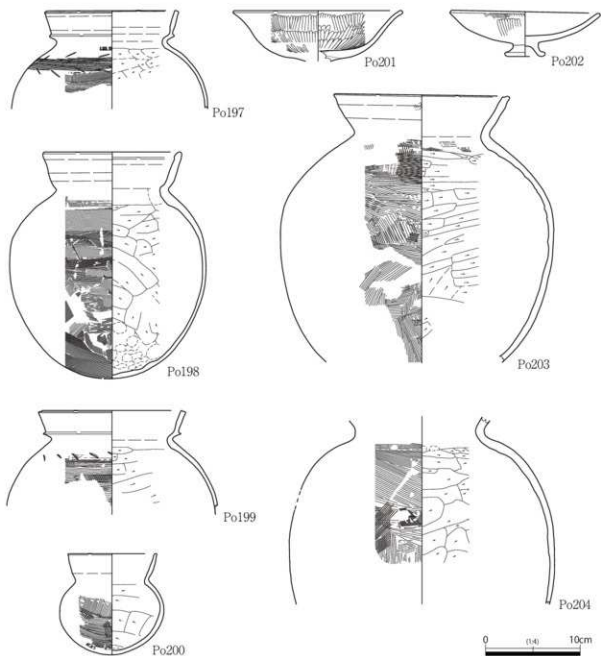
Po197~Po199は土師器甕、Po200は小型丸底壺、Po201は高坏、Po202は低脚坏である。Po197は端部を外方へ肥厚させる複合口縁をもち、肩部に雑な無軸羽状文を施す。Po198はくの字状の口縁をもつ布留系の甕で、球形を呈す胴部の肩には回転を利用したヨコハケが認められる。Po199は貼床中から出土した。端部を面取りする複合口縁をもち、胴部上半は連続する粗いヨコハケ、肩部にヘラ先による刺突文を施す。Po200は口縁端部外側にアクセントをもち、胴部はやや扁球形を呈す。Po201は皿状の坏部で、口縁部で僅かに外反する。Po202は坏部口径15.6cmを測る大型品である。これらは古墳時代前期中葉~後葉に比定される。Po203は802流路出土破片と接合した。くの字状の口縁端部はつまみながらナデており、面をもつ。

イ 815土坑出土土器(第132図 写真図版96 Po204)

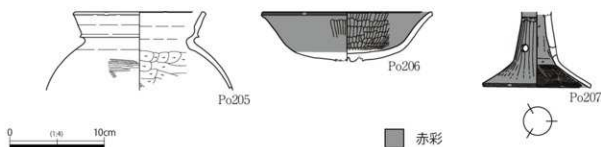
Po204は土師器甕で、肩が張る球形の胴部をもつ。外面調整は主に斜め方向のハケメ、内面調整は横方向の細かいケズリで、全体的にやや粗雑である。口縁部及び胴部下半を欠くが、古墳時代中期のものか。

ウ 830土坑出土土器(第133図 写真図版96 Po205~Po207)

Po205は土師器甕、Po206は高坏、Po207は小型器台である。Po205は複合口縁の端部を外方へ肥厚させてアクセントをもつ。Po206は口縁部にかけて僅かに外反する皿状の坏部で、上半の内外面を赤彩する。いずれも古墳時代前期中葉のものである。



第132図 豎穴建物1・815土坑出土土器

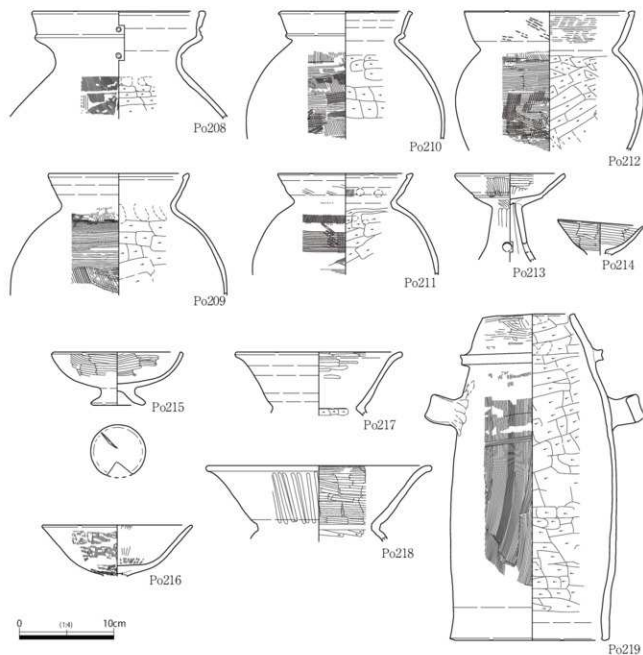


第133図 830土坑出土土器

Ⅰ 竪穴建物2出土土器(第134図 写真図版98・99 Po208~Po219)

Po208は土師器壺で、複合口縁の端部を内側につまみ出し、アクセントをもつ。Po209~Po212は甕である。Po210は胴部が大きく張る複合口縁甕、Po209・Po211はくの字を呈す口縁端部を内面に折り返して肥厚させる布留系甕、Po212も口縁の立ち上がりが大きいが同様の甕である。これらの肩部には回転を利用したヨコハケが認められ、古墳時代前期後葉に比定される。

Po213・Po214は小型器台、Po215は低脚杯、Po216は高杯、Po217・Po218は器台である。Po217・Po218は正面観がX字を呈す短縮化した器台で、Po217は小型、Po218は大型品である。Po219は山陰型飯形土器で、円筒形の胴部の先端付近に一对の把手をもつ。これらは古墳時代前期後葉に比定される。

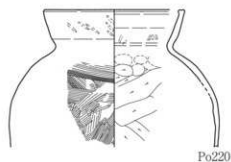


第134図 竪穴建物2出土土器

オ 794土坑出土土器(第135図・第136図 写真図版100 Po220~Po222)

Po220はくの字を呈す口縁端部を内面につまみ出すようにナデてアクセントをつける土師器甕で、球形の胴部の外面調整は肩部までナデ、肩部以下は不定方向のハケである。古墳時代中期前葉に比定される。

Po221・Po222は山陰型甕形土器で、Po221は小型品、Po222は大型品である。Po221は口縁部を欠く以外ほぼ全体が遺存している。寸胴形の胴部をもち、上部に横位の肉厚な把手がつく。裾部付近はヨコナデである。古墳時代前期後葉に比定される。胴部上位に内面からの打撃による穿孔が1か所認められる。第136図の大型の山陰型甕形土器Po222は、やや中影らみな円筒形の胴部をもち、上部で内湾気味に窄まる。上下端及び突帯付近はナデ調整で、それ以外は縦方向を主体とする粗いハケで仕上げる。上部は横位、下部は縦位に肉厚な把手がつく。



Po220

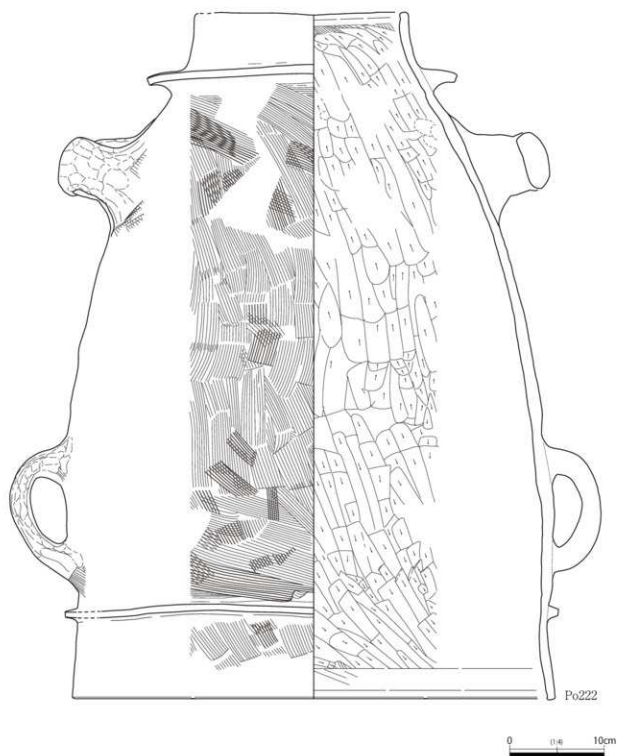


写真2 Po221の胴部穿孔部分拡大



Po221

0 10cm



第136図 794土坑出土土器(2)

カ 610溝出土土器

(ア) 610溝上層出土土器(第137図～第139図 写真図版101～103 Po223～Po262)

Po223～Po262は610溝上層で出土した土器で、Po223～Po225は土師器壺、Po226は直口壺、Po227～Po240は甕、Po241～Po244は高坏、Po245～Po249は小型丸底壺、Po250は脚付碗、Po251～Po254は碗、Po255は鉢？、Po256～Po261はミニチュア土器、Po262は須恵器有蓋高坏である。

Po224は複合口縁壺で、口縁部はほとんど屈曲せず、直線的に立ち上がり内外両側に肥厚させ、肩部には回転利用のヨコハケが施される。Po225は小型の複合口縁壺である。

Po226は赤彩されているが、胴部下半外面に煤の付着が顕著で被熱発泡した箇所もある。

Po228の口縁は退化した複合口縁状を呈すが、これはくの字に立ち上がる口縁の上半部をつまむように強くナデたことによるものであり、口縁端部は内面に折り返して肥厚させる。外面調整は肩部に回転利用のヨコハケ、以下は不定方向ながら細かい単位のハケとなる。Po231～Po240はくの字状口縁をもつ甕である。Po231の胴部はいびつな球形を呈し、口縁端部は内外からつまむように成形されて端部に面をもつとともに内側にアクセントをもつ。Po232は肩部付近に最大径をもち、そこまで回転利用のヨコハケを施す。Po233は胴部中位よりやや下に最大径をもつため胴部が下膨れの球形を呈す。口縁の上半は強くナデる。Po234は口縁の上半部をつまむようにナデ、端部に面をもつ。胴部は球形を呈し、頸部に回転利用のヨコハケが残る。Po236は口縁の端部を内側に肥厚させ、球形を呈す胴部の内面には指頭圧痕が認められる。Po237・Po238の外面調整は概ねタテ、ヨコ、タテの順に入れたハケメだが、全体的に粗雑である。Po239は口縁端部付近のみつまむように強くナデる。Po240の口縁の立ち上がりは短く低い。

Po241は皿状の坏部に肉厚な短脚がつく。Po242は口縁部が僅かに外反する碗状坏部をもつ。Po243は有段の深い坏部をもつ。

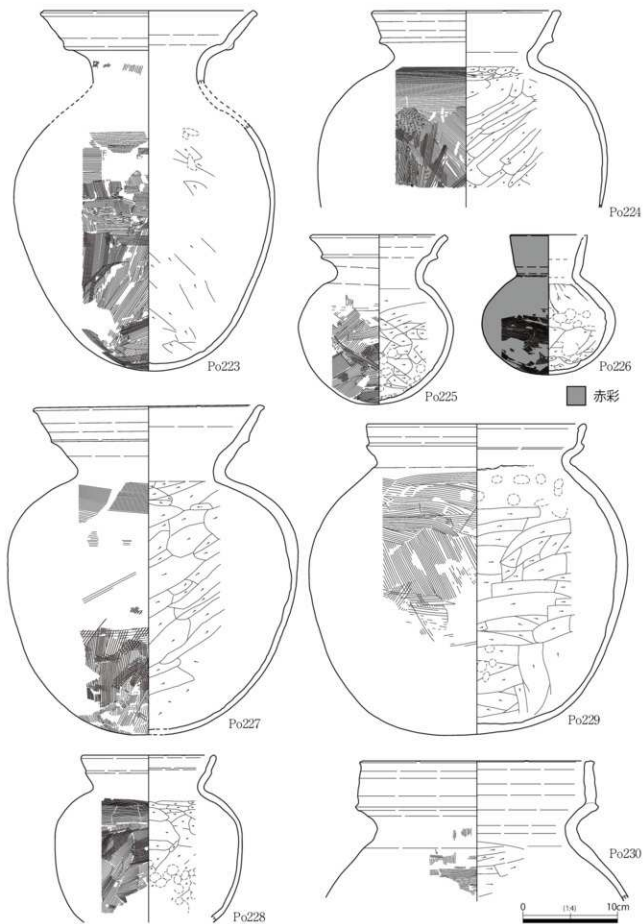
小型丸底壺は口縁部の立ち上がりに高低の差はあるが、口径7～8cm、器高10cm未満のもので、いずれも口径より胴部径の方が僅かに大きい形態となる。

Po250は体部中位から口縁部にかけて僅かに内湾する丸底の碗に短く開く厚手の脚が付く。

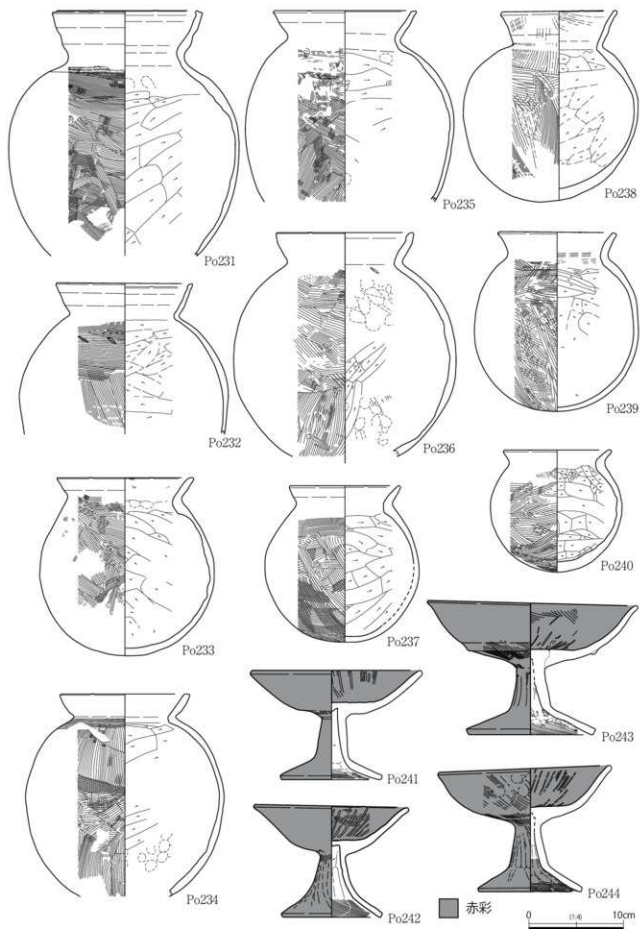
碗のうち、Po252は成形も不十分で粗雑なつくりである。Po251はやや深い丸底、Po253・Po254は平底気味である。Po254の口縁部は成形時に強くナデられ、端部付近が僅かに凹む。

ミニチュア土器のうち、Po256～Po259は算盤玉形の胴部から僅かに外反しながら立ち上がる口縁部をもち、同じ器種を模造している可能性が高い。上層で出土したこれらの土師器は、概ね古墳時代中期中葉～末に比定される。

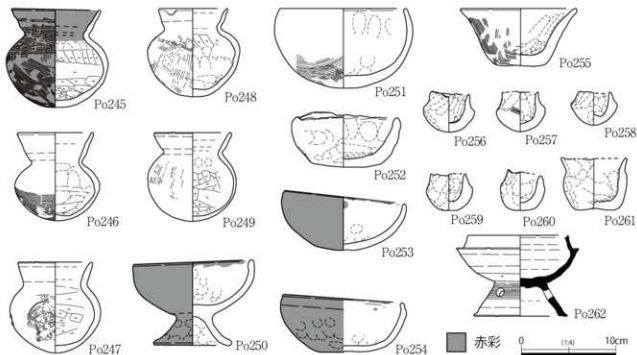
Po262はハの字に開く脚部に円孔を3方向穿ち、脚端部を水平に面取りしている。TK(23～)47併行のものである。



第137図 610溝上層出土土器(1)



第138図 610溝上層出土土器(2)



第139図 610溝上層出土土器(3)

(イ)610溝下層出土土器(第140図・第141図 写真図版104~106 Po263~Po300)

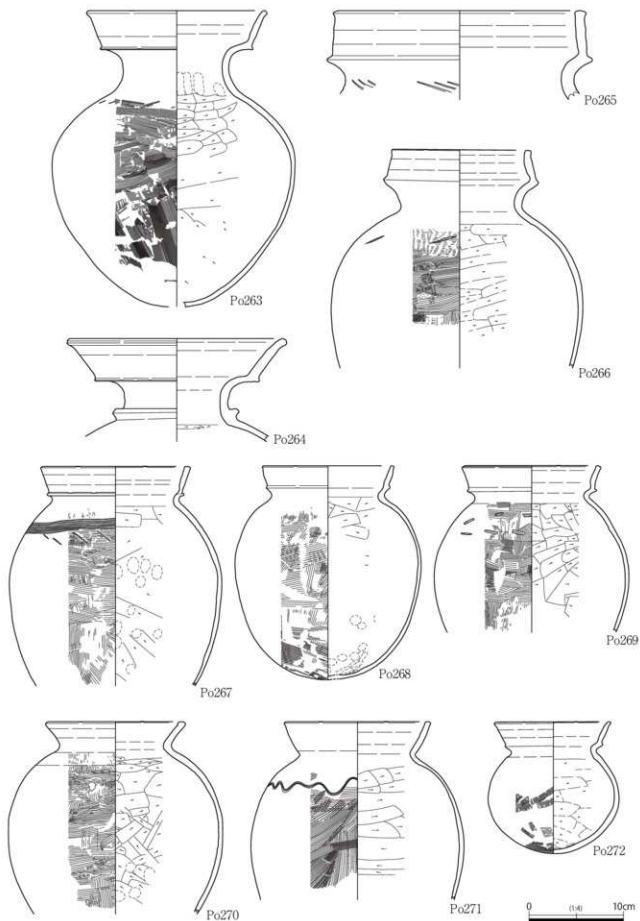
Po263~Po300は610溝下層で出土した土器で、Po263~Po266は土師器壺、Po267~Po274は甕、Po275~Po278は器台、Po279~Po282は小型器台、Po283・Po284は小型丸底土器、Po285~Po288は小型丸底壺、Po289~Po295は高坏、Po296・Po297は低脚坏、Po298は埴、Po299は鉢？である。

Po263は複合口縁壺で、胴部は倒卵形を呈す。Po265・Po266は僅かに内傾して立ち上がる複合口縁をもつ壺で、大型のPo265は短い頸部に無軸羽状文を施し内面に煤が付着している。Po266は肩部に板小口による刺突文を施す。ハケは横方向を主体とし、やや粗雑である。

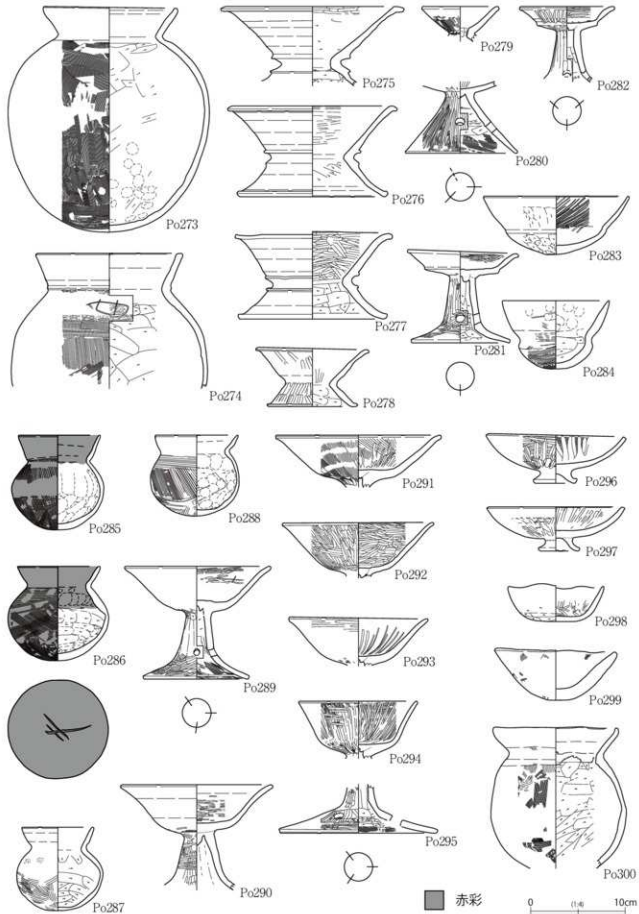
Po267~Po269・Po272は複合口縁をもつ甕で、Po267の肩部には回転利用のヨコハケと連続刺突文が施される。Po269は胴部中位に最大径をもち、粗雑な刺突文を肩部に施す。ハケは不定方向である。Po272は小型品である。Po270・Po271は口縁端部を内側に肥厚させるくの字口縁甕である。Po270の胴部調整は上1/3がタテハケ、下2/3がヨコハケを主体とし、全体的に粗雑である。Po271は肩部に細い波状文を施す。Po274もくの字口縁を持つ甕だが、端部は丸く収める。肩部に回転利用のヨコハケを施し、その上にヘラ記号が認められる。

Po278はX字形を呈す器台の小型品である。Po284は扁球形の胴部から大きく開く口縁をもつ。Po283も同様だが、他とは異なり橙色の緻密な胎土である。Po285~Po288は口縁部高に個体差があるが、口縁部径と胴部径はほぼ等しいタイプである。Po291は口縁部が僅かに外反する皿状の坏部をもつタイプ、Po289・Po290・Po292・Po293は椀状坏部をもつタイプである。Po294・Po295は庄内系の椀形高坏に系譜をもつもので、Po295は大きく開く脚部に円孔を3ヶ所穿つ。

Po299は厚手の鉢とみられ、埴と同系譜か不明である。これらはいずれも、古墳時代前期中葉から後葉に比定されるものである。



第140図 610溝下層出土土器(1)

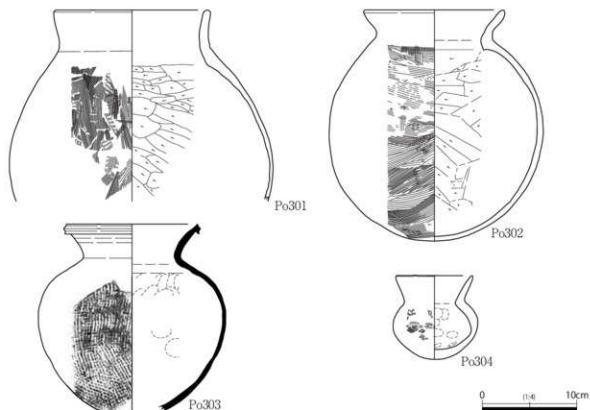


第141図 610m下層出土土器(2)

Po300は発達したく字状口縁をもつ土師器甕で、金雲母を含む橙色系胎土をもち全面タタキ後に皮革によるナデで仕上げられている。

キ 801流路出土土器(第142図 写真図版107 Po301~Po304)

Po301は卵形に近い胴部から直立する口縁をもち、直口壺か。外面には口縁部を中心として煤が付着しており、被熱が原因とみられる剥落が目立つ。球形の胴部から短く外反して立ち上がる口縁部をもつPo302も外面の煤の付着が顕著である。Po303は須恵器甕で、内面はナデにより仕上げる。TK23~47併行のものと考えられる。小型丸底壺Po304は、やや扁球形を呈す。



第142図 801流路出土土器

(5) 6-2面

ア 802流路出土土器(第143図～第148図 写真図版107～115 Po305～373)

Po305は土師器の壺、Po306～Po308は直口壺、Po309～Po336は甕、Po337～Po345は高坏、Po346～Po352は脚付碗、Po353～Po358は碗、Po359・Po360は小型丸底壺、Po361は低脚坏、Po362・Po363は甕の把手、Po364・Po365はミニチュア土器である。出土した土師器はやや古層を示す資料も一部含まれるが、大部分が古墳時代中期後葉～末に比定される。

Po305は大型の壺である。胴部上位2/3に最大径をもち、直線的に立ち上がる頸部から続く複合口縁の上部を粘土紐積み上げの接合部から欠く。接合箇所には接合を補助するために刻み目が連続して施されている。内外面ともハケ調整で仕上げられており、内面に黒色を呈す付着物が認められる。Po306～Po308は外面に煤が付着し、口縁部あるいは底部付近が被熱によって発泡、剥落している。Po306は算盤玉形に近い胴部と同程度の大きさの口縁部をもつ。Po307の胴部はそれよりも最大径が下がり、下膨れとなる。

Po309は肩部に焼成前のヘラ記号(絵画)が展開するように3ヶ所認められる。Po311は丸みのある複合口縁をもち、肩部に回転利用のヨコハケが認められ、他より古相を示す。

Po312・Po313・Po314の口縁部は退化した複合口縁状を呈す。Po314の口縁部の成形方法はくの字口縁と変わらず、頸部及び口縁部上半を強くナデて突出部を作出することで複合口縁を表現している。口縁部は肉厚で、端部は成形によるやわらかな面をもつ。胴部にはタタキ成形の痕跡が残る。Po317・Po321はやや内湾気味に立ち上がるくの字口縁と最大径が中位より下がった下膨れの球形胴部をもつ。Po319は短く屈曲して立ち上がる口縁部をもち、形態的には小型丸底壺に近いが、外面に煤が付着し被熱している。

Po325・Po330の胴部は扁球形に近い。Po326は須恵器甕に近い形態の特徴を有す。Po332は肩部近くに最大径をもつ球形胴部から外反して立ち上がるくの字状口縁を有す。頸部はやや幅広く強くナデられているため、口縁部にかけての立ち上がり角度は鈍い。口縁から胴部中位まで煤が多量に付着している。Po324も同様の形態だが、最大径は中位よりやや下にあって下膨れの球形胴部となる。Po333・Po335は立ち上がりの低いくの字状口縁をもつ小型品である。Po336は直口壺状だが頸部がほとんどくびれない。

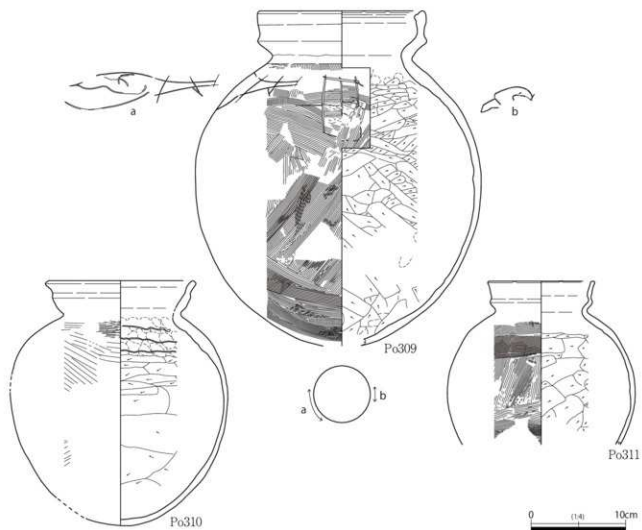
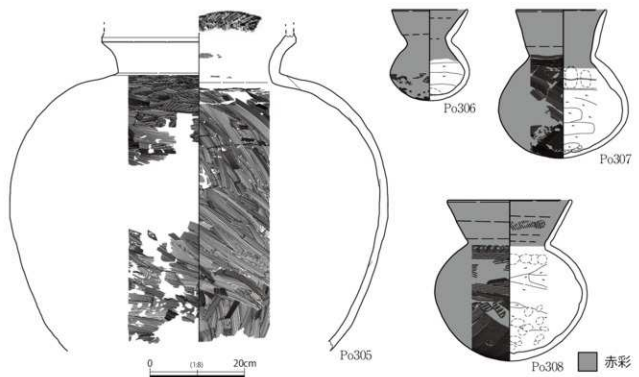
高坏のうち、Po337・Po338は浅い碗状坏部をもち脚部高も7cm前後を測るなど古相を示す。Po339～Po345は深い碗状坏部に高5cm前後の短い脚部がつくものである。

脚付碗は肉厚で深い丸底の碗状坏部をもつPo346、碗状坏部に厚手で短い脚部が付くPo347・Po348、全体的に薄手でハの字に大きく開く脚部をもつPo349、口縁部が内湾するPo350、体部中位から口縁部にかけて内湾するPo351、平底気味で口縁部が内湾する浅い碗状坏部にハの字に開く長い脚部をもつPo352などが見られる。

碗は、小型で浅いPo358の他は丸底気味の体部上半から口縁部にかけて内湾するタイプが主体となる。Po357のみ狭い平底気味の底部をもつ深い碗で口縁部のみ外反する。

Po364・Po365は丁寧なつくりで細身の胴部をもつ。

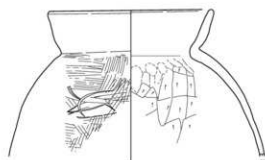
Po366・Po367は須恵器坏蓋、Po368・Po369は坏身、Po370・Po371は有蓋高坏とその蓋、Po372は甕、Po373は甕である。これらは形態的特徴からTK23～47型式併行、古墳時代中期後葉～末に比定される。



第143図 802流路出土土器(1)



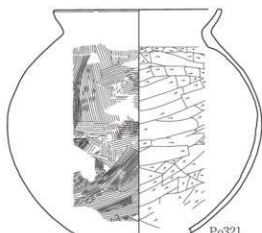
第144図 802流路出土土器(2)



Po320



Po324



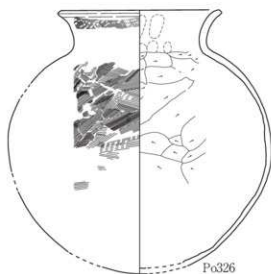
Po321



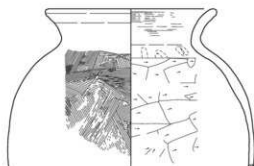
Po325



Po322



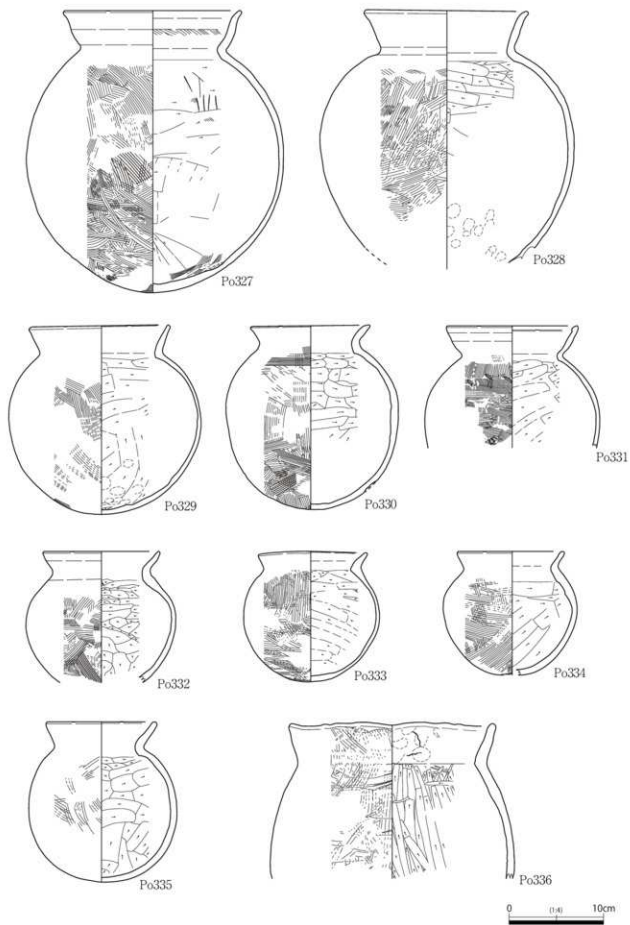
Po326



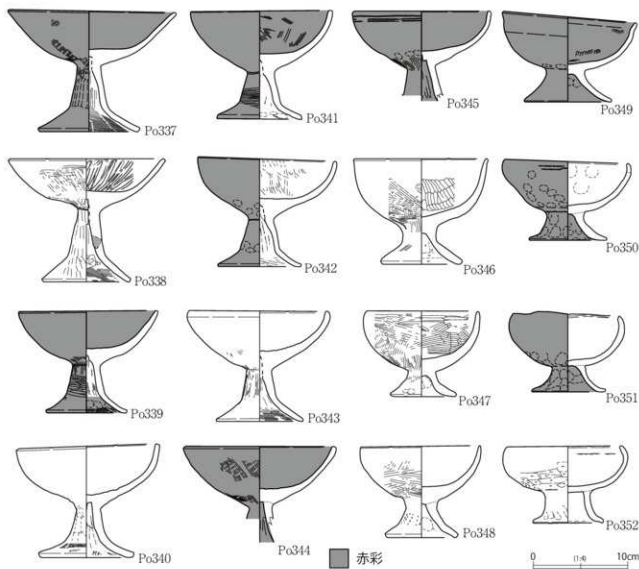
Po323



第145図 802流路出土土器(3)



第146図 802流路出土土器(4)



第147図 802流路出土土器(5)

(6) 7面出土土器

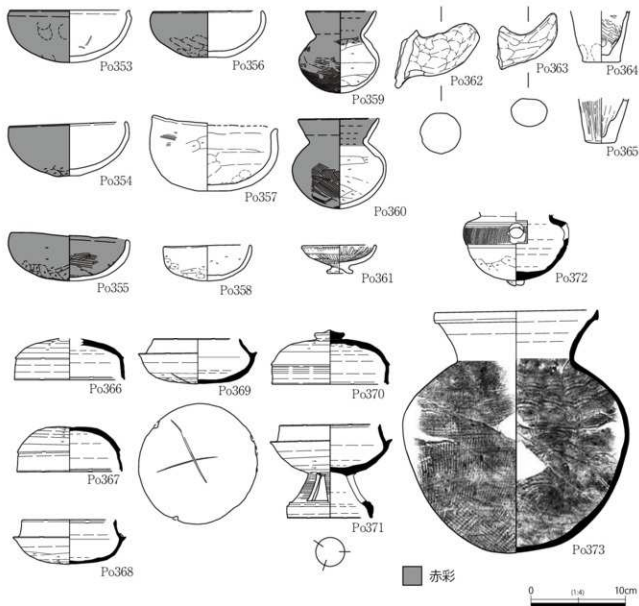
ア 832流路出土土器(第149図 写真図版118 Po374)

Po374は小型丸底壺で、扁球形の胴部からくの字に立ち上がる口縁部上半を強くナデる。古墳時代中期前半の所産と考えられる。

(7) 8面出土土器

ア 831溝・833溝・837溝(第149図 写真図版117・118 Po375~Po378)

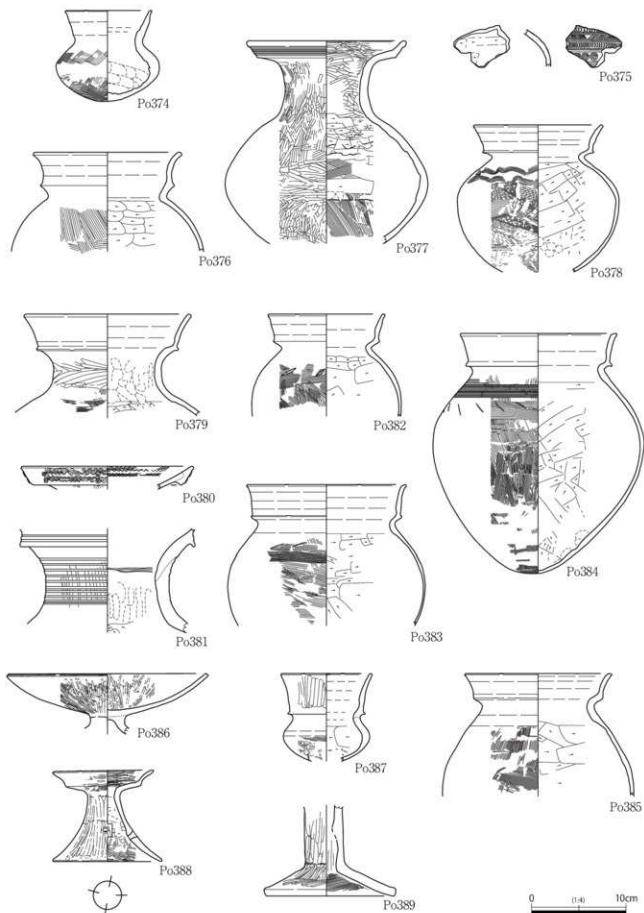
Po375は831溝で出土した弥生土器の裝飾壺胴部片で、沈線で画された文様帯に爪形の連続刺突文や3重圏の同心円文スタンプを施す。Po376とPo377は833溝で出土した。Po376はやや肉厚で外反する複合口縁をもち、胎土に輝石が目立つ。Po377は算盤玉状の胴部から長く伸びる頸部に立ち上がり短い複合口縁をもつ壺で、北近畿系白米山式併行に比定されよう。Po376・Po377は弥生時代終末期前半に比定される。837溝で出土したPo378は肩部に最大径をもつやや扁平な球形胴部をもち、肩部に波状文を施す。弥生時代終末期後半に比定される。



第148図 802流路出土土器(6)

イ 900流路(第149図 写真図版116・117 Po379~Po389)

Po379は土師器壺で、頸部に無軸羽状文状にナデを施す。Po380は弥生土器の畿内系加飾複合口縁壺(西村・池峯2003)で、口縁部内外面に2段の波状文を巡らせる。外面には小型の円形浮文を貼り付ける。終末期後半の所産である。Po381も弥生土器の壺で、口縁部に3条以上、頸部に10条の凹線を巡らせる。胎土は褐灰色で輝石が目立つ。Po382~Po384は土師器甕で、いずれも口縁端部を外面につまみだすようにアクセントをもつ。Po384は肩部に回転台利用のヨコハケを巡らせ、体部は倒卵形を呈し、丸みを帯びた尖底となる。Po385はやや肉厚で、僅かに外反する口縁部下端の稜も鈍い。Po384・Po385が僅かに古相を示しており、古墳時代前期前葉に比定される。Po386は大型の低脚杯、Po387は小型丸底壺、Po388は小型器台で、古墳時代前期前葉に比定される。Po389は裾部に屈曲して開く弥生土器高坏脚部で、形態的特徴から北近畿系の土器と考えられる。



第149圖 7面・8面遺構出土土器

ウ 7-4a層以下出土土器(第150図 写真図版118~120 Po390~Po408)

Po390は7-4a層で出土した小型の土師器甕で、くの字に立ち上がる口縁部は端部内面にアクセントをもつ。古墳時代中期後葉のものである。

Po391・Po392は7-5b層で出土した。Po391は土師器甕で、肉厚の複合口縁端部にやわらかな面をもつ。胴部は倒卵形を呈し、肩部に回転を利用した平行線文が認められる。古墳時代前期前葉のものである。Po392は突帯文土器の深鉢で、口縁端部に接して突帯を貼り付け、その下端に細く小さな刻みを施す。古海式に比定される。Po393・Po394の出土層位は7-5b層~8-1a層である。Po393は直口壺で、ハケ状工具により肩部に波状文、胴部最大径やや上に平行線文を施す。弥生時代終末期後半の所産と考えられる。Po394は低脚坏で、口径は13.6cmと小型で古墳時代前期中葉のものか。

Po395~Po398は8-1a層上面で出土した。Po395・Po396は甕で、外反して立ち上がる口縁の端部には面をもち、肩部に波状文や平行線文を施す。Po397は鼓形器台で、筒部は短縮化するがくの字にはならず、内面はケズリ調整により面をもつ。Po398は短く立ち上がる複合口縁が内傾する壺で、肩部に平行線文と板状工具による列点文を施す。なお、Po399は同型式の壺の小型品である。

Po400は短く外傾しながら立ち上がる複合口縁縁に擬凹線を巡らせており、頸部内面には指頭圧痕、肩部内面にはハケメが残る。胎土は在地のものとは比べ違和感はないが、形態的特徴からすれば北近畿系、西谷式併行のものと考えられる。Po401も同様な形態で、胎土に微細な雲母を顕著に含む。北近畿系、浅後谷式併行に比定されよう。Po402は器台の脚台部で、外面に3重圏の同心円文スタンプを施す。Po403は大型の甕で、肩部に平行線文及び波状文を施す。Po404は深い碗状の坏部をもつ低脚坏である。これらはいずれも8-1a層で出土しており、弥生時代終末期後半の所産である。

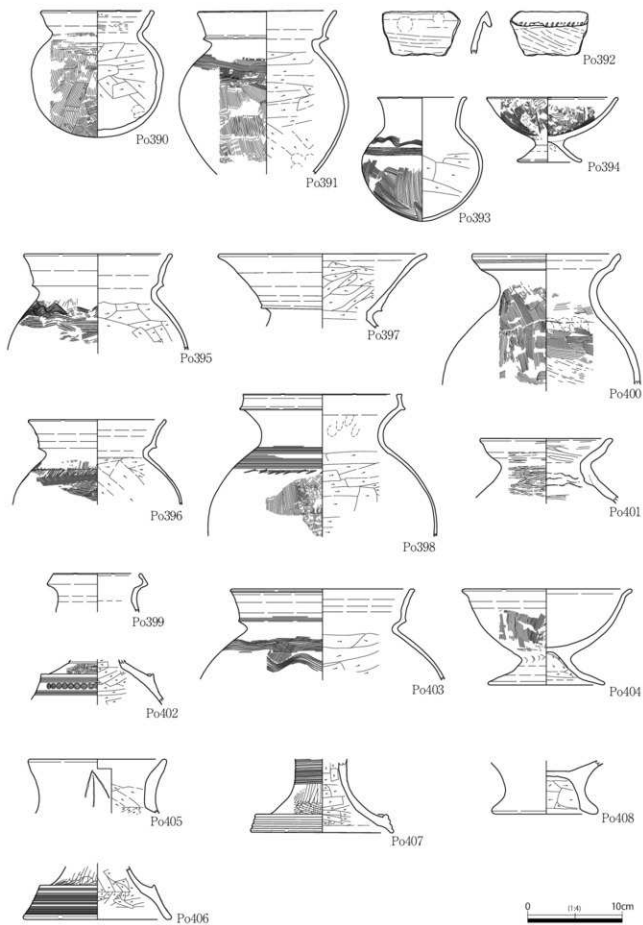
Po405は8-2b層で出土した小型九底壺で、外面にへら描きの文様が施されている。Po406・Po407は器台の脚部で、Po406は弥生時代後期後葉、Po407は同後期中葉に比定される。Po408は台付壺の脚台部で、灰白色の胎土に雲母が目立つ。Po408は8-1a~8-3a層出土である。

2 土製品(第151図~第153図 写真図版121~123 CP1~CP13)

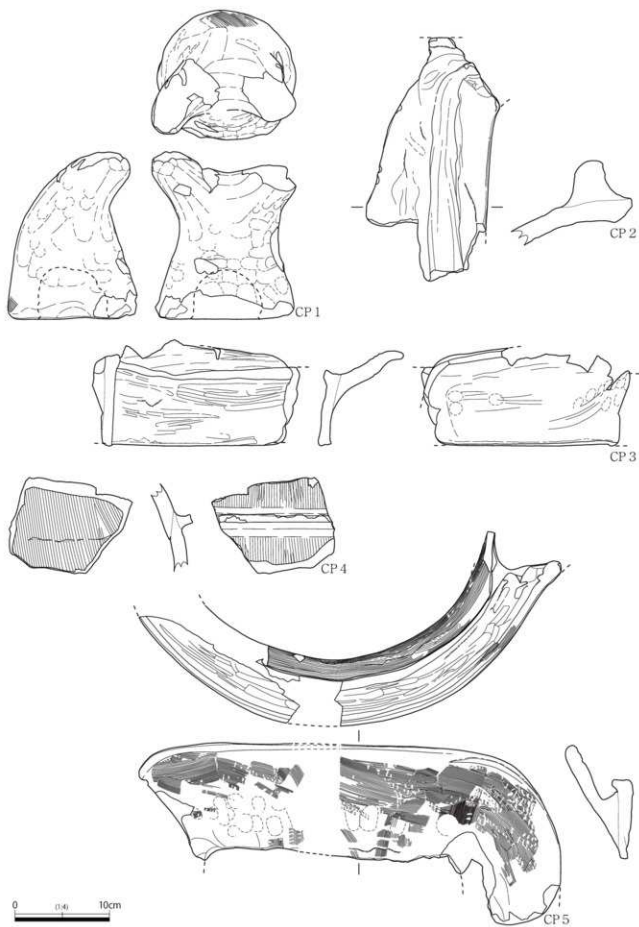
CP1は支脚で、15流路下層で出土した。突起が二股状に伸びるタイプで、胴部が裾に向かって太くなる。胴部背面に孔はないが、底部は胴部中位付近までの上げ底となることが大きな特徴である。

CP2~CP6は移動式竈である。CP2は焚口から底部側方の破片である。庇は肉厚で端部を丸く収める。体部内面調整はケズリだが、庇周辺は取り付け時にナデあるいは工具ナデで仕上げている。掛口は僅かな残存部からすればやや外反して立ち上がり如意状を呈す。CP3は庇が焚口に被さるような角度で取り付く。掛口端部は面取りされる。CP5は掛口、庇の破片で、掛口はやや外反して立ち上がり端部が面取りされる。庇の立ち上がりは鋭角で、外方へ大きく開く形状をとる。CP6は基部周辺が欠損しているがほぼ完形で出土している。丸みを帯びた体部に幅狭で立ち上がりの短い庇が付く。掛口は内傾して立ち上がる。体部中位に凸帯が巡るが、大部分が剥落している。庇も本来焚口周囲まで伸びていたようだが同様に剥落しており、幅3cmの貼り付け痕跡が確認出来る。体部の厚さは11~17mmで、調整は内外面ともナデ、ハケを主体とする。CP2は550流路、CP3は掘立柱建物3の43柱穴、CP4は802流路、CP5は4-2a層、CP6は610溝上層から出土した。

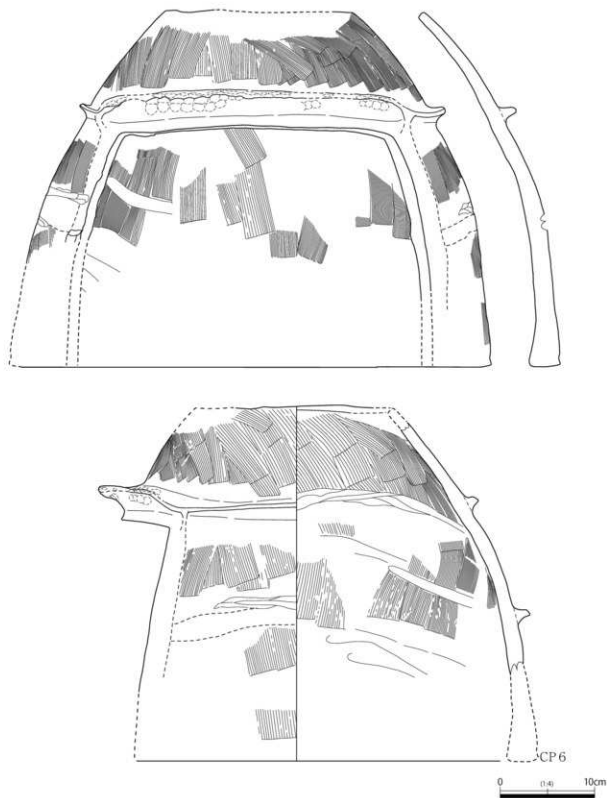
CP7~CP13は管状土鍾で、いずれも長4~5cm、幅1~2cm程度を測る。CP7~CP12は17耕作溝埋土、CP13は15流路下層から出土した。管状土鍾は、報告外のものも含めると1-1区で10点以上



第150圖 7-4 a層以下出土土器

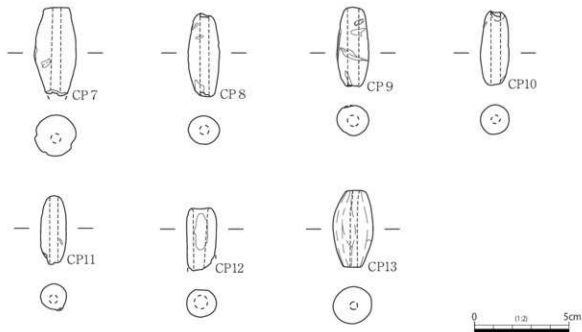


第151図 土製品(1)



第152図 土製品(2)

出土しているが、そのうち7点が17耕作溝及び作土層の4-2a層から出土しており、特筆される。



第153図 土製品(3)

第2項 石器

(1) 4-2面

ア 掘立柱建物16(第154図 写真図版124 S1)

S1は輝緑凝灰岩製の砥石である。153柱穴内から出土した。正面が著しく摩滅しており、凹面を呈する。左右両側面と上下面に一部摩滅が認められるが、使用は顕著ではない。右側面に敲打痕、左側面に刃縁による条痕が認められる。砥面の粒度は粗く、荒砥石の範疇に含まれる。

イ 15流路(第154図 写真図版124 S2~S4)

S2は鉄石英製の石核である。周縁から剥片剥離を行っているが、ヒンジ、ステップを頻発して作業の継続が困難になり廃棄されたものと考えられる。裏面上部に施溝痕が認められることから、施溝分割を試みた可能性がある。

S3は安山岩製の砥石である。正面が著しく摩滅している。使用による擦痕は斜め方向に顕著に認められ、それに伴って部分的に凹んでいる。砥面の粒度は極めて細かく、仕上げ砥石の範疇に含まれる。

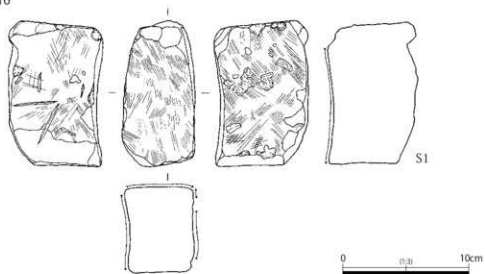
S4は花崗岩製の石製品である。正面、裏面、上面に回転による施溝痕が認められる。列り貫きを図ったものと想定されるが、何らかの理由により途中で廃棄されたものと考えられる。

(2) 5面

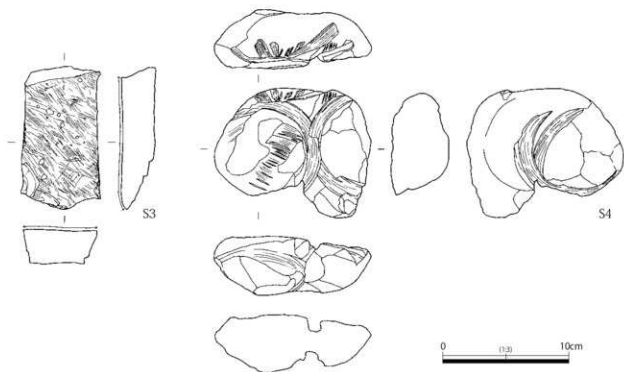
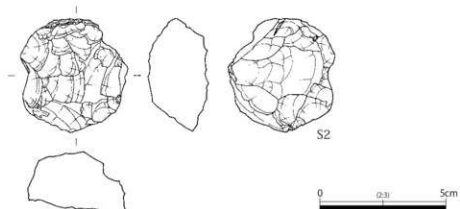
ア 550流路(第155図 写真図版124 S5~S7)

S5、S6は管玉製作資料である。S5は碧玉製の分割片で、石鋸によって上面を施溝し、分割している。正面右側の分割面には凹凸が生じており、左側には小さな面が2つ認められる。最初の分割を失敗した後で修正を試みたと考えられる。上面に研削痕が認められるが、次の作業には進んでいな

掘立柱建物 16

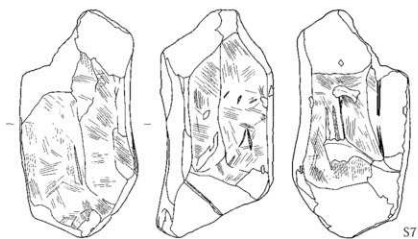
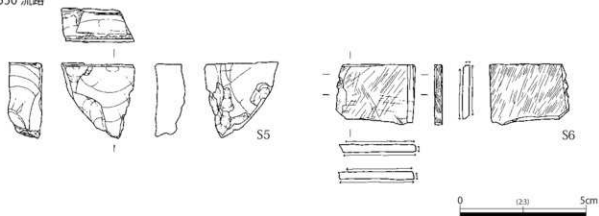


15 流路

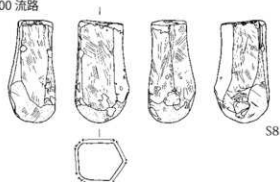


第154図 出土石器(1)

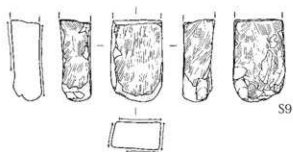
550 流路



600 流路

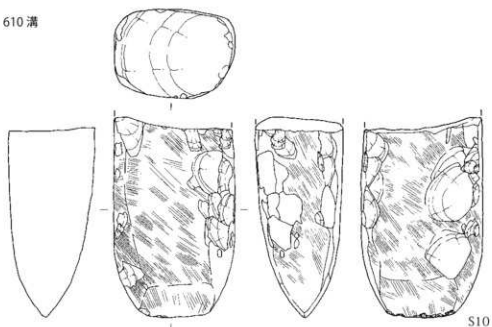


竪穴建物 1

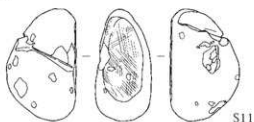


第155図 出土石器(2)

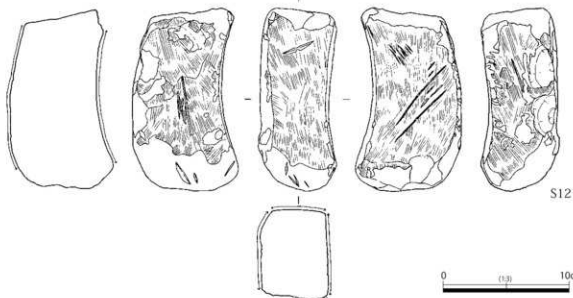
610 溝



801 流路

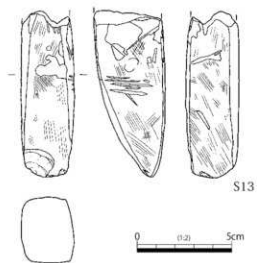


802 流路

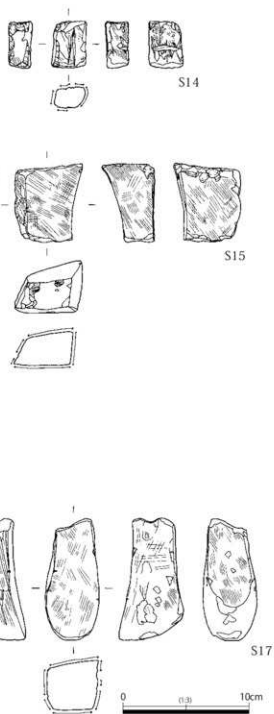


第156図 出土石器(3)

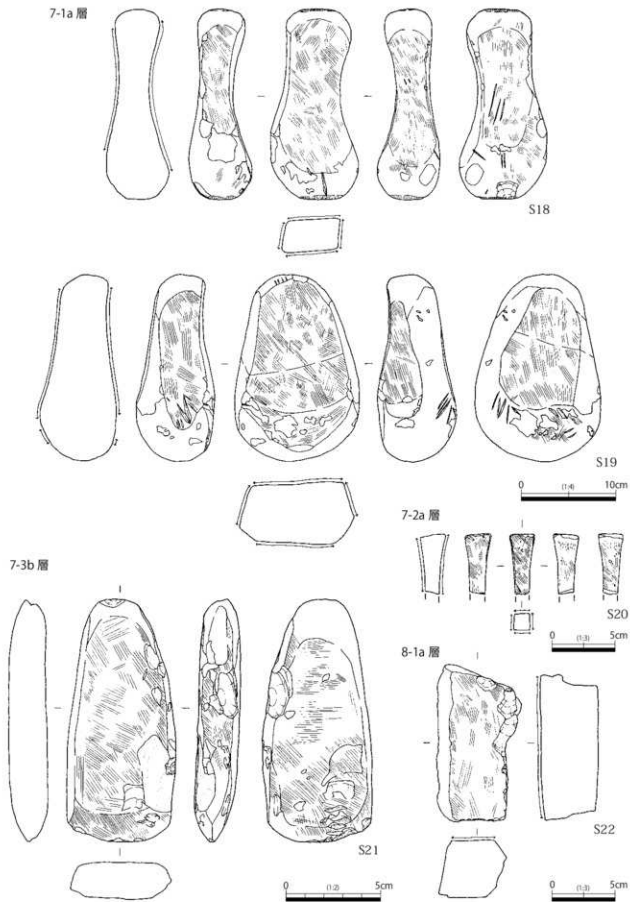
3-1a層～3-2a層



4-2a層



第157図 出土石器(4)



第158図 出土石器(5)

い。S6は緑色凝灰岩製の板状材で、正面、裏面、上面、右側面を研削によって平滑に整えている。正面上端部と右側面正面側には、施溝の痕跡が認められる。

S7は凝灰岩製の砥石である。正面、右側面、裏面は著しく摩滅している。これらの面の中央付近には縦方向の甘い稜が形成されており、断面形は多角形を呈する。裏面等に刃縁による条痕が認められる。砥面の粒度はやや粗く、荒砥石の範疇に含まれる。

イ 600流路(第155図 写真図版124 S8)

S8は凝灰岩製の砥石である。上下面を除いて著しく摩滅している。砥面は7面に及び、断面形は七角形を呈する。正面、右側面の2面、裏面は特に顕著に使用されており、凹面を呈する。砥面の粒度は細かく、中砥石の範疇に含まれる。

(3) 6-1面

ア 竪穴建物1(第155図 写真図版124 S9)

S9は凝灰岩製の砥石である。正面、裏面、左右両側面が摩滅している。このうち、正面と裏面はやや使用が進んでおり、中央付近が凹んでいる。砥面の粒度は細かく、中砥石の範疇に含まれる。

イ 610溝(第156図 写真図版124 S10)

S10はデイスait製磨製両刃石斧である。周縁から剥離調整を施した後、研削によって成形している。刃部は直刃で、使用による微細な剥離が認められる。剥離調整段階の剥離面が多く残っていること、左右両側縁の形状が対称でないことから未成品の可能性も考慮したが、刃部に使用痕が認められることから、完成品として利用されたと想定される。基部を欠損する。

ウ 801流路(第156図 写真図版124 S11)

S11は軽石加工品である。正面が摩滅しており、右側面上部と左側面中程に刃物による鋭利な溝が認められる。用途など、詳細は不明である。

(4) 6-2面

ア 802流路(第156図 写真図版124 S12)

S12は輝緑凝灰岩製の砥石である。正面、右側面が著しく摩滅して凹面を呈し、裏面、左側面も一部摩滅している。裏面、左右両側面には、刃縁による条痕が認められる。砥面の粒度は細かく、中砥石の範疇に含まれる。

(5) 遺物包含層

ア 3-1a層～3-2a層(第157図 写真図版125 S13)

S13は輝緑凝灰岩製の柱状片刃石斧である。調整剥離を行った後、研削によって成形している。刃部は直刃で、使用により左側が欠損している。基部側を欠損しており、柄に装着するための刺りは認められない。

イ 4-2 a 層(第157図 写真図版125 S14~S17)

S14~S17は砥石である。

S14は凝灰岩製で、正面、裏面、左右両側面が摩滅している。正面と裏面には、刃物による鋭利な溝が認められる。砥面の粒度は極めて細かく、仕上げ砥石の範疇に含まれる。

S15は砂岩製で、正面、裏面、左右両側面が摩滅している。特に、正面、右側面の摩滅は顕著であり、凹面を呈する。左側面、下面に刃縁による条痕が認められる。砥面の粒度はやや粗く、荒砥石の範疇に含まれる。

S16はデイサイト製で、正面と裏面の一部がやや摩滅する。正面に刃物による鋭利な溝が認められるとともに、正面、裏面、左側面に刃縁による条痕が認められる。砥面の粒度はやや粗く、荒砥石の範疇に含まれる。

S17は凝灰岩製で、正面、裏面、左右両側面が摩滅している。特に、正面、裏面の摩滅は顕著であり、凹面を呈する。左右両側面には、刃物による鋭利な溝と刃縁による条痕が認められる。砥面の粒度は細かく、中砥石の範疇に含まれる。被熱している。

ウ 7-1 a 層(第158図 写真図版125 S18・S19)

S18・S19は砥石である。

S18はアブライト製で、正面、裏面、左右両側面が顕著に摩滅して凹面を呈する。正面の下部及び裏面には刃物による鋭利な溝が認められる他、刃縁による条痕が認められる箇所もある。また、上下端部には、敲打痕も認められる。砥面の粒度は極めて細かく、仕上げ砥石の範疇に含まれる。

S19は砂岩製で、正面、裏面、左右両側面が摩滅している。特に、正面、裏面、左側面の摩滅は顕著であり、凹面を呈する。左側面や裏面の砥面から外れた箇所、刃物による鋭利な溝が認められる。砥面の粒度はやや粗く、荒砥石の範疇に含まれる。

エ 7-2 a 層(第158図 写真図版125 S20)

S20は凝灰岩製の砥石である。正面、裏面、左右両側面が顕著に摩滅しており、凹面を呈する。砥面の粒度は細かく、中砥石の範疇に含まれる。

オ 7-3 b 層(第158図 写真図版125 S21)

S21は安山岩製の磨製両刃石斧である。剥離調整を施した後、研削によって成形している。刃部は円刃で、使用によって一部破損している。左右両側縁の形状は対象でなく、上端部には僅かに敲打痕が認められる。

カ 8-1 a 層(第158図 写真図版125 S22)

S22はアブライト製の砥石である。正面が摩滅している。砥面の粒度は細かく、中砥石の範疇に含まれる。

第3項 木製祭祀具

1-1区では、合計584点(木簡関連資料2点含む)の木器が出土した。この数字は、器種を認定することが出来た木製資料には限定されることから、いわゆる副次的産物の木片の類も含めると、出土した木製資料は少なくともこの倍程度に及ぶことが推定されるが、現実的に正確な出土点数を導き出すことは難しい。

584点を器種別に見れば、祭祀具、容器類、農具類、紡織具、建築関連部材、雑具、その他不明品等と列挙出来る。このうち祭祀具(形代)が全体の71%を占める。出土した木器の中では、形代が特筆して多いことが理解出来る。このため本項では木製祭祀具を、また次項で木製祭祀具を除く木器とに分けて報告することとする。

本項では、古墳時代～古代に帰属する木製祭祀具各器種の中で、遺存状態が良好でかつそれぞれの器種を代表する資料のうち、165点について掲載した。具体的には、人形、馬形、武器形、斎串、農具形、舟形が確認出来る(第2表)。このうち、出土点数が最も多いのは斎串(192点)であり、以下人形(99点)、武器形(刀形・剣形・鏝形)(55点)、馬形(39点)と続く。一定量出土したのはこれら4器種で、この他の形代はかなり客体的である。出土地点別にみると、15流路下層からの出土が最も多く、加えて15流路の上層、550流路、801・802流路からの出土も見受けられるが、100点以上の集中的な出土を見たのは15流路下層のみである。この他にも、僅かながら8溝等からの出土がある。

武器形については、他の道具や動物遺存体と共存するかたちで802流路から特徴的に出土しており、律令祭祀以前の形代祭祀の一様相として注視される。

以下、器種毎に報告する。

第2表 形代出土地点一覧

	人形	馬形	刀形・剣形	鏝形	斎串	舟形	エブリ形	鏝形?	器種不明
15流路(上層)	5		1						
15流路(下層)	68	20	4		99	2			14
15流路(上下層境界)	3								
15流路	5				1				
550流路(上層)	1	3	8		19				
550流路(下層)	3	2	3		29				1
550流路	10	14	7		37				
599流路			1						
801流路			1						
802流路			28	2	1		1	1	11
8溝	3					3			
4-1a~6-1a層						1			
7-3b層						2			
中央東西トレンチ	1								

※15流路および550流路については、上層もしくは下層を判別して取り上げたものはその別を、そうでないものについてはそれぞれ「15流路」、「550流路」として点数計上している。

1 人形

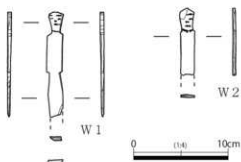
人形については、現在までに人形型式分類案として最も普遍的に用いられている大平氏(1993・1995・2008等)の人形分類(以下「大平分類」)を基に報告する。ただし、1-1区から出土した人形は、基本的には大平分類における「Ia類」もしくは「Ic類」に分類される資料群のため、資料の特徴を説明するために用いる類型としては、やや大局的なきらいがある。このため、大平分類で着目した「肩」や「手」に次ぐ変異が視認でき、分類属性として有効と判断した頭部の形態「頭部正面形状」に着目し、人形資料群をさらに分類した。ここでは、頭部の形状を①三角、②緩やかな三角、③上端部平坦で両端斜め切り取り、④上端部平坦で両端挟り切り取り、⑤上端部平坦で真下に切り取り、⑥緩やかな楕円、⑦半円、の7パターンに分けた。以下、これらの類型を基に報告する。

(1) 3面

ア 8溝(第159図 写真図版126 W1・W2)

8溝からは非常に小型の人形2点(W1・W2)が出土したが、いずれも素材に特徴があり、この2点以外には使用されていない樹種であるカヤが用いられている。大平分類Ⅲc類と考える。

両者ともに脚部を欠損している。頭部平面形状は、①もしくは②である。W1・2ともに墨書による顔面表現が認められ、そのタッチは非常に類似する。また、首と肩の境界部分に、墨書により横線が描かれるという特徴を有する。



第159図 8溝出土人形

(2) 4-2面

ア 15流路

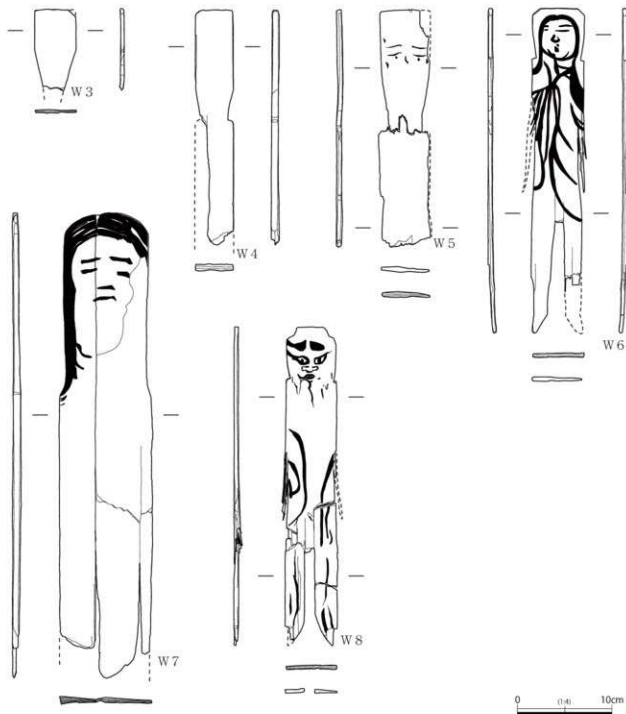
(ア)15流路上層(第160図 写真図版126 W3~W8)

6点を図示した。この6点には、15流路上・下層の境界付近出土資料も含んでいる。いずれにしても、大量に木製品が出土した15流路下層に比して、圧倒的に出土例は少ない。また、一部の資料については、15流路下層において出土した類型と非常に類似したものもあることから、下層からの巻き上げによる出土の可能性がある資料も含む。

W3~W5は頭部正面形状⑤類型で、このタイプは15流路下層からは出土していない。W5には墨書による顔面表現があるが、他資料の墨書による顔面表現よりも筆跡がかなり細く、表現自体も弱々しい。加えて、眉・目・鼻の表現は認められるものの、口が描かれていない。なお、これらを囲むように、墨書による点が顔に打たれているように見えるが、何を表現しているのかは不明である。

W6とW8は、いずれも墨書によって顔面と衣類が詳細に表現され、W6は頭部正面形状③、W8は頭部正面形状④である。W8は足先付近にまで墨書で描かれ、一方W6はつま先まで加工で表現されている。左右両脚は同一地点で出土し、破片同士が接合した。破断面の状態から、脚はこの場で折り取られ、最終的に廃棄されたことを示唆する。形代の使用方法と使用後の様相を類推させるものとして、注目すべき資料である。

大型のW7は、頭部上方から両側縁が真っ直ぐ下り、そのまま肩に接続する希有なタイプである。切り込みによる腕の表現がないため、ⅢcもしくはⅣcの亜種とも捉えられようが、欠失部位が多く、

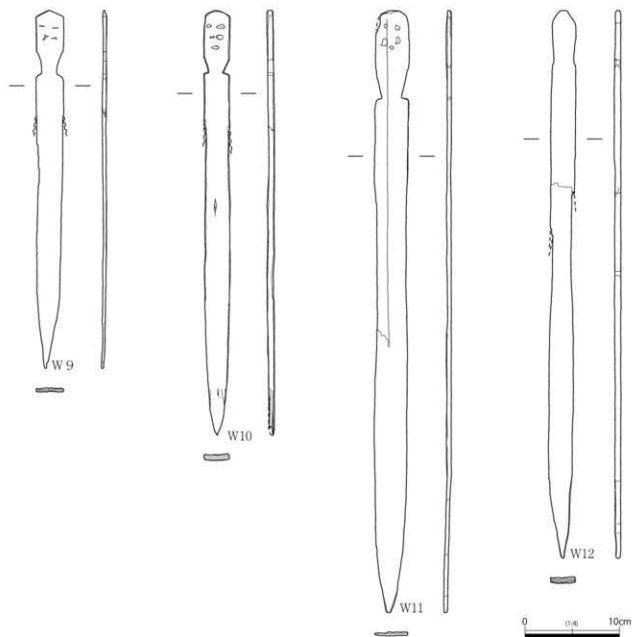


第160図 15流路上層出土土人形

判然としない。顔は、頭部の緩やかなカーブをそのまま顔面の輪郭として利用している。右目下から頬にかけて表面を欠失している。垂髪と柔和な表現から察するに、女性だろうか。鳥取市岩吉遺跡SD-X出土の人形(例えばW9)に類する(山田他編1997)。なお、樹種同定の結果、W5はアスナロ属、W6～W8はスギであった。

(イ) 15流路下層(第161図～第166図 写真図版127～129 W9～W46)

15流路下層からは73点出土し、そのうち38点を図化した。基本的には、大平分類に定義された「I



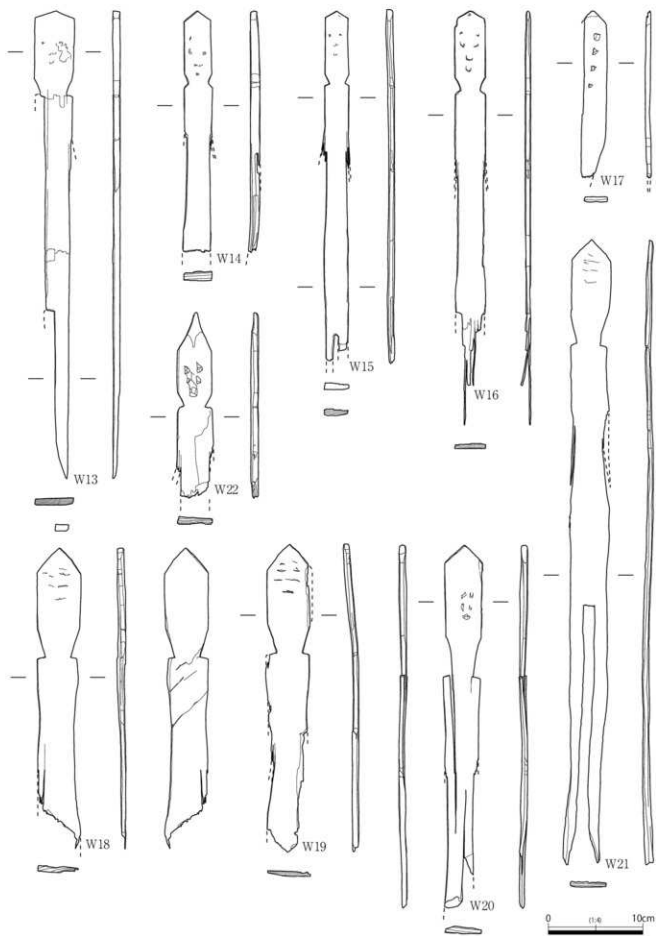
第161図 15流路下層出土土人形(1)

c類(なで肩で切り込みの腕を作出)」で占められるが、前述のように1-1区では、その一型式の中において多様な様相を呈していることが分かる。このため、まずは脚の本数で大別した後、頭部平面形状で分類し、報告する。

まずは、一本脚の人形を第161図に示した。4点のみ(W9~W12)出土している。この類型は、1-1区出土人形99点の中で10点にも満たないことから、人形としては二本脚が主流であることが分かる。ただし、出土人形には脚を欠失している個体も多いため、あくまで現況からの判断である。

一本脚の人形は、その正面形状が縦長のものが多く、長幅比は平均で17.8を示す。二本脚の人形のスタイルとの違いは明白であり、一本脚の人形がよりスマートな正面観となっていることを裏付ける。4点中3点(W9~W11)には、切り込みにより顔面表現が施されている。

頭部平面形状は先述のとおり様々で、またいずれも腕は切り込みにより表現されている。W11につ



第162図 15流路下層出土人形(2)

いても、両腕の表現される部分がやや内湾していることから、本来は下半身側から切り込みが入っていたものの、欠損した状態と察する。

次に二本脚の人形である。第162図～第166図にあるように、15流路下層からは様々な人形が出土していることから、以下、頭部平面形状ごとに整理して報告する。

a ①類

(第162図・第163図 写真版127・128 W13～W24)

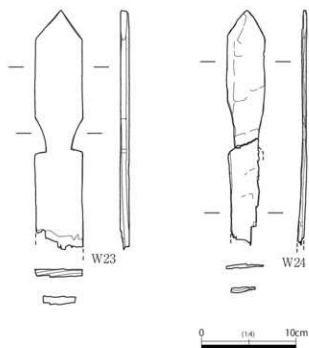
頭部平面形状が三角を呈する資料は最も多く、12点を報告する。基本的に、頭部上端の両端から上方に向かって左右対称に頂部を作出している。頭頂部からの両辺が頰幅に至るまでの頭部の直線距離は、1cm以内の寸詰まりなタイプであるW13～W16(i)と、2cm程度のしっかりとした三角を作り出すタイプのW17～W24(ii)との2種がある。

iiの方が全体的に大きい資料が多いため、頭頂部への出方の違いは、当初資料サイズが反映された属性と判断していたが、「頭部上端の幅/頭部上端から頭頂部への距離」の数値を算出すると、iは平均で3.14、iiは1.68となり、両測定箇所は単純な比例関係を成さず、iとiiでは倍ほどの差があった。このため頭頂部の作出は、意図的に、大きい資料は長く、一方小さい資料は寸詰まりになるよう仕上げられていた可能性が高い。なお、この数値が1.1を示すW22のように、4cm以上の頂部を削り出している例は稀である。さらにこの資料は、頂部へ続く両辺がやや内湾するように削られているが、そのような例も他に見受けられず、やや特殊な資料と言える。

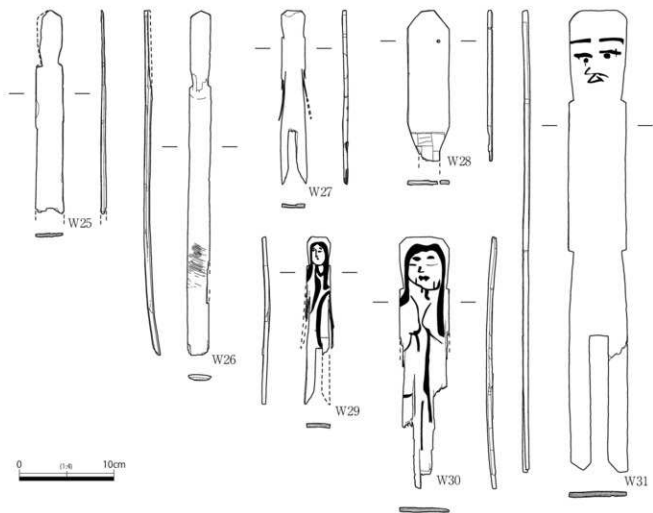
iについては、4点いずれも切り込みによる顔面表現がある。iiは、8点中6点に同様の加工が成されている。いずれも墨書による顔面表現は見当たらない。腕を一本欠失しているものの、頭部からつま先まで残存する資料は、12点中1点のみ(W21)である。この他の資料は、いずれも下半身を欠いており、腰(胴)もしくは股の部分から下を欠失している。

このうち、W18については、正面図左上から斜め下方に向かって、鋭利な刃物で切断された様子が窺える。木取りからしても、このような欠損方向は自然為に生じたとは考えにくく、破断面の状態からも、人為的に刃物を入れ、最終的には折り取るような手段が取られたと推察出来る。また、この資料の裏面側(背中側)には、この破断面と平行関係を成す刃物痕跡も見受けられる。この現象は、背中側から刃物を入れ、最終的に形代を分割するという行為の前段であった可能性があり、また上記行為の推測を裏付けるものであろう。

この他の破損資料についても、W18ほど明確な破断面は認められないものの、同様な手法を用いて胴部を折り取ったような状態の資料(例えばW14やW23)が見られる。このことから、人形を壊すというのは、一定程度通した行為であった可能性もある。なぜこのような行為が執られたのかについては、ここで議論する余地は持たない。ただし、おそらくはこのような資料の状態をもって、形代とし



第163図 15流路下層出土人形(3)



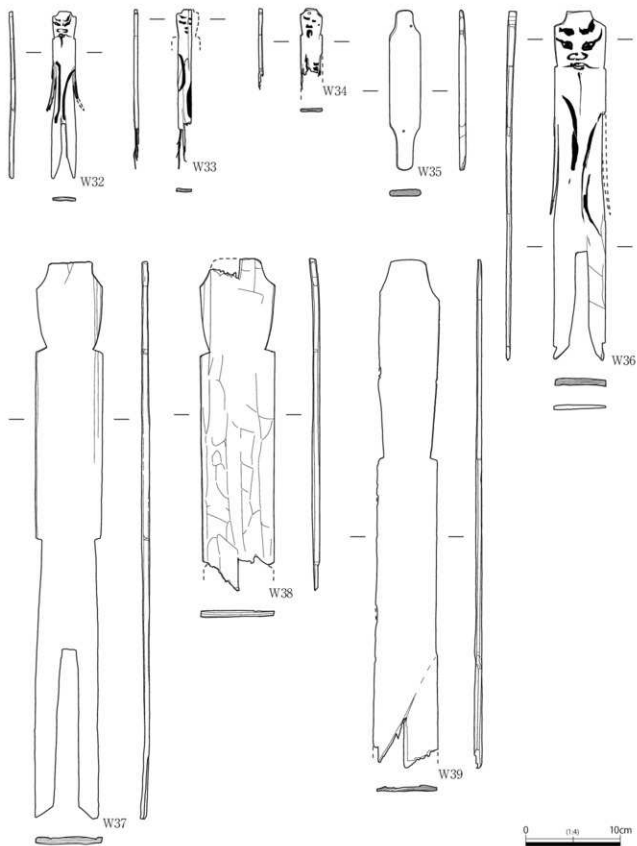
第164図 15流路下層出土人形(4)

での機能を終えた後、それらが単にその場に廃棄されるというだけではなく、祭祀行為後の光景の一つとして、このように破壊する必要性や意味があったという事実を示しているのであろう。なお、W16・W23はスギを素材としている。

b ②類(第164図 写真図版128・129 W25・W26) やや丸みを帯びた頭頂部と頭部両端を持つ人形で、2点図示した。いずれも脚を欠失しているが、細長いシルエットは共通した特徴である。両者ともに切り込みによって表現される腕も失っているうえ、顔面の表現が元々ない点も類似する。W26については、長軸にほぼ平行する方向の擦痕が下腹部に見受けられる。いずれの段階に生じた痕跡なのかについては、切り合い関係が不明瞭であることから判断し難い。

c ③類(第164図 写真図版128・129 W27～31) 5点出土しているが、そのうち過半数(3点)に墨書による顔面や衣類の表現が施されているタイプである。このうち唯一全体像を把握出来るW31は、腕(腰)を切り欠きにより表現する大平分類Ⅲc類に該当する。眉毛、目、鼻、口を比較的明瞭に描いており、特に黒眼を強調したような表現に見える。

W29とW30は、いずれも顔面から腰まで墨書で表現されている。W31とは異なり、素材である板材自体の外形を顔の輪郭とはせず、顔に該当する材の部分に、墨で顔の輪郭から描き入れている。実際には顔の輪郭ではなく、肩部分に下ろした垂髪が顔の最外面を表現している。両資料とも、左目に比して右目をやや小さく表現していることから、真正面を見据えるというよりは、体自体をやや左斜め



第165図 15流路下層出土人形(5)

前に構えたような構図を成している。なお、W30に類する資料は、15流路上層においても出土している(W6)。W29-W31は、スギを素材としている。

d ④類(第165図 写真図版128・129 W32~W39) 平坦な頭部上端から内側へ湾曲するように左右に削り出しを行い、頭部を形成する資料群である。この特徴的な形状は、おそらく烏帽子等の被り物を表現していると考えられる。本報告では8点を図示しているが、このうちW35については、人形であるのかやや疑わしい資料である。残る7資料は、18cm大にまとまる規格性の高い墨書資料群(W32~W34)と、顔面表現がなく大型の大平分類Ⅲc類(W37・W38)の2グループにまとまる。W36は、前者の一群をちょうど2倍のサイズにした資料に該当する。顔が面長のW39についても、おそらく完形であればW37・W38の一群に分類されよう。

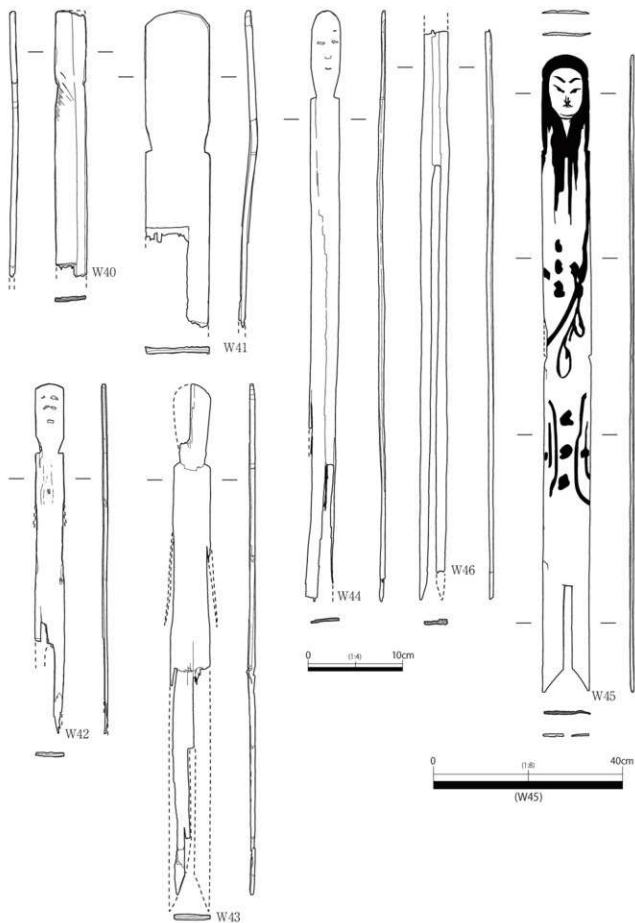
ただし、墨書による顔及び衣類の表現が施されている4点(W32~W34・W36)について詳細に見ると、顔の表現には差異が見受けられる。例えば、吊り上がった眉と目、及び大きな鼻を持つ威圧的なもの(W32・W36)もあれば、シンプルな顔の表現を呈するもの(W33・W34)もある。大平分類Ⅲc類に該当する大型品は、顔面の表現が皆無である。W36には爪先の表現が見られる。W38の表面には、面を整えるための刃物の痕跡が目視出来る。刃物によって生じた稜線が見受けられる資料は、400点を超す出土形代の中でもごく限られることからすれば、形代に用いる板材の表面は、例えば木賊(紙草)やカワハギの皮等で研磨される段階もあることを示唆しようか。なお、W32~W34・W36は樹種同定の結果、スギであることが判明した。

e ⑤類(第166図 写真図版128 W40) このタイプは非常に少なく、W40を図示するのみである。胴部より下を欠いており、脚の状態は不明である。胴部の欠損部分を詳細に見ると、長軸方向に直交する方向に刃を入れ、折り取った際に生じる破断面の状態に酷似している。肩より下についても両側縁は真っ直ぐ下方に伸び、切り込みによる腕の表現は見受けられない。大平分類ⅢbもしくはⅣb類に該当しよう。左肩部分には、右下方に向けて擦痕が連続する。

f ⑥類(第166図 写真図版128・129 W41・W42) このタイプに該当する資料は2点を図示した。いずれもいかり肩で、W42については大平分類Ⅰc類である。頭部平面形状を含め、シルエットは非常に類似性が高いものの、3長については、残存する頭部付近の数値からみても倍以上の開きがある。W42には切り込みによる顔面表現が認められるが、W41には見受けられない。なお、W42の表面には、素材である木材の節が少なくとも2箇所残存している珍しい資料である。W41については、胴部辺りの破断面の様相が、人為的に折断された可能性を暗示させる。

g ⑦類(第166図 写真図版127 W43~W45) 頭部平面形状が、ヒト頭蓋骨のそれに最も近い一群である。ここでは3点を図示した。W43及びW44ともにほぼ全体像が残っているが、腕や脚など部分的欠失が見られる。W44には、切り込みによる顔面表現が残る。眉を片方欠くが、目・鼻・口が作出されている。

W45は最大長135cmを超える大型品であり、また顔から脚近くまで衣類の表現が明瞭に残る資料である。眉の外側を弱く切り込み、また顔の周りを黒く塗ることで、明瞭な被り物の表現が成立している。やや吊り上がった目と眉、鼻、口については、他の墨書資料に比して写実性が高いもので、真っ直ぐ正面を見据えた表現となっている。衣類の表現も丁寧で、重ね合わせ部分や結び目と思わしきものの、また規則的な点状表現もある。腕は切り込みによる表現ではなく、切り欠きによるものであり、大平分類Ⅲc類にあたる。素材は樹種同定の結果、スギであることが判明した。



第166図 15流路下層出土人形(6)

h その他(第166図 写真図版126 W46) W46は、胴部より下の下半身のみの資料である。非常に細長い脚を有しており、その類似性から、完形であればW44のような人形に該当すると察する。腕の表現等は全く残されていないが、腰辺りがややくびれるため、下方から刃物をいれ、切り込みによる腕表現(大平分類c類)が本来施されていた可能性が高い。資料上端の胴部に相当する部分は、長軸に対してはほぼ直交する角度で折り取られたように見受けられるため、人為的な破壊行為が推測される資料である。

(3)5面

ア 550流路(第167図 写真図版126・128・129 W47~W55)

550流路からは15点の人形が出土し、そのうち9点を図化した。図化したもののうち、2点が一本脚(W47・W48)、6点が二本脚(W49~W54)、不明が1点(W55)である。

一本脚の資料は、W47が大平分類Ib類、W48が同Ia類に該当する。両者ともにスギの板目材を素材とする。W47の頭部平面形状は②であるが、頭部の右上部には左下に向けて細かな擦痕が認められる。切り込み・墨書いずれの顔面表現も見受けられない。W48には、切り込みによる目と鼻もしくは口の簡易な表現が認められる。

特筆すべきこととして、W48については、頭部平面形状③を生じさせる痕跡が残っている。具体的には、その頭部上端に、長軸に直交する連続した刃物痕跡が明瞭に残っており、板材から切り離された状況が分かる。頭部付近各面の切り合い関係から察するに、板材から切り離した後に、頭部の平坦面から斜めに切り出しを行っているようである。頭頂部を観察すると、刃物を入れた後、最終的には折り取っているようにも見える。このような痕跡は、農具(鋏先)を製作する際に、縦長の板材から同一規格品を作出する手法と通ずることを想起させる。形代の出土状況には、極めて規格性の高い複数資料が同一地点で重複していることが確認されており(例えば第111図)、単一素材から大量の同一規格の形代生産は、十分にあり得る仮説である。

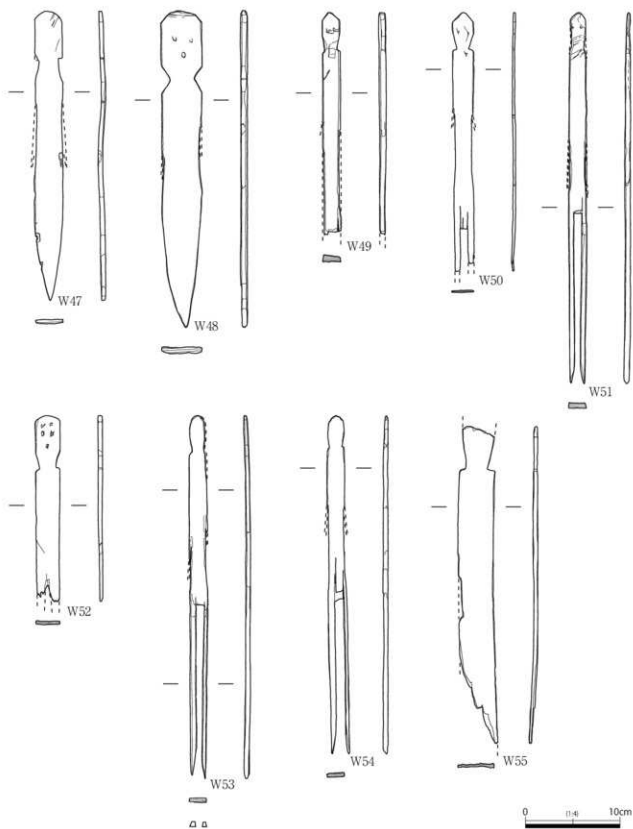
15流路下層出土の一本脚人形は長幅比が大きく、スラッとした正面観が特徴であったが、550流路の一本脚人形のそれは、むしろ寸詰まりを呈する。実際に長幅比も平均8.9と、15流路下層出土一本脚人形の半分の数値に留まる。

図化した二本脚の人形はいずれも大平分類Ic類であるが、頭部平面形状は三角や楕円等様々であり、一つの形状が突出することはない。切り込みによる顔面表現を施された人形は一定量見られる一方、墨書によるものは皆無である。W51の顔には、右上から左下に向けて擦痕が残る。W50~W52は、スギを素材としている人形である。

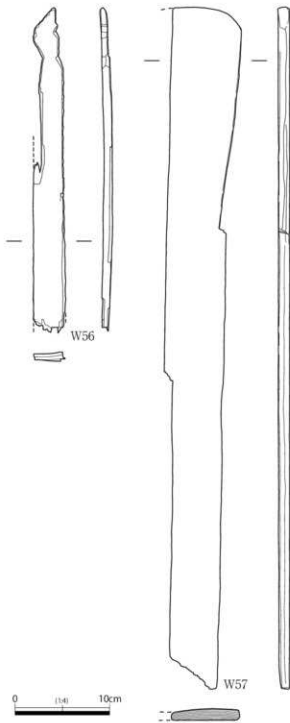
(4)6-2面

ア 802流路(第168図 写真図版130 W56)

W56は、横顔を表現した人形の可能性がある。その場合、正面図上右側縁が顔を横から見た構図になると考える。ただし、人物の側面観を呈する人形は、県内では早くとも平安時代以降の出土となること、類例よりもやや抽象的な表現に留まること、また部分的に欠損している箇所が数箇所見受けられること等から、ここでは積極的な評価が難しい。横顔を表現した人形であるとすれば、本来はより上位の遺構に帰属すべき遺物であろう。



第167圖 550流路出土人形



第168図 802流路他出土人形

(5) その他(第168図 写真図版129 W57)

W57はトレンチ内出土のため、帰属時期が不明である。胴部下半より下の全て、及び顔面の左半分を欠損する。大平分類のⅢcもしくはⅣc類のいずれかに該当しよう。このように頭部から胴部途中までしか残存していない資料ではあるものの、それでも遺存長70cmを超えている。顔面表現は見受けられない。

2 馬形(第169図・第170図 写真図版130 W58～W84)

1-1区からは39点出土し、このうち27点を図示した。形代の中では、比較的遺存状態が良好な器種である。これは、素材である板材に対し、人形等他の形代器種よりも厚みを有するものを用い、また切り込みよりも浅い切り欠きの加工が採用されているためであろう。なお、馬形の出土した遺構は、15流路の下層と550流路に限定される。

本項では、まず両遺構ごとに鞍の有無によって「裸馬」と「飾馬」に分け、その後頭部や尾部、また腹孔(棒)の有無等を基に適宜分類し、報告する。なお、未図化資料も含め、判断可能な資料で「裸馬」と「飾馬」を判別すると、15流路では裸馬20%、飾馬80%であるのに対し、550流路では裸馬56%、飾馬44%とその割合が逆転する。

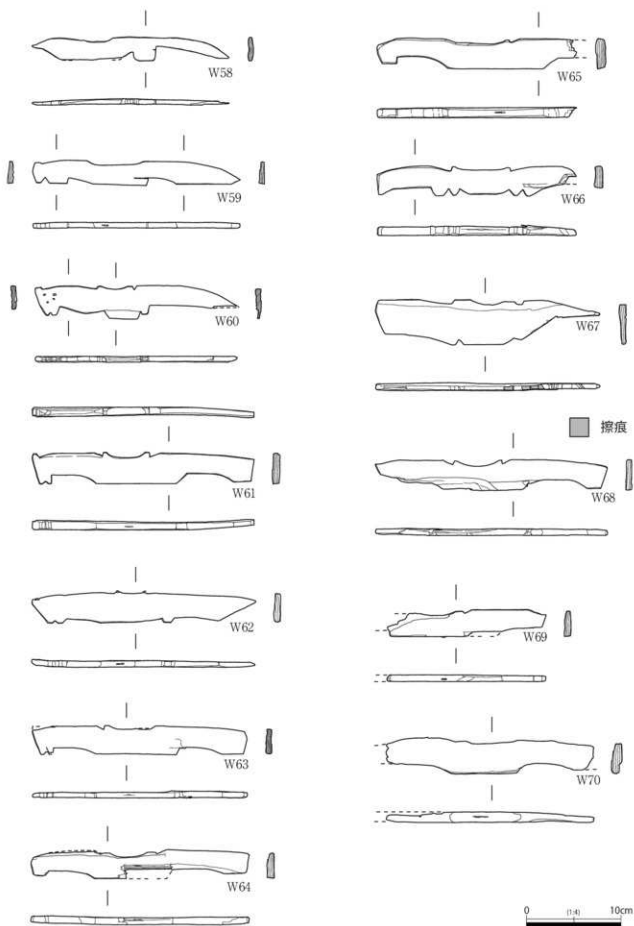
また、下腹部が残存するほぼ全ての資料において、腹孔棒が挿入されていた孔を確認出来た。ただし、実際に腹孔棒が残存しているのは15流路下層から出土した2点(W66・W69)に留まる。このうち前者を用いて樹種同定を実施したが、その樹種の特定には至らなかった。

(1) 4-2面

ア 15流路(第169図 写真図版130 W58～W70)

(ア) 15流路下層

20点出土し、そのうち13点を図示した。前述のとおり飾馬が圧倒する。頭部については、たてがみや口の部分を表現する一群と、それらを省いた抽象的な一群とに大別出来る。前者の中には、目などを削り出しにより表現しているW60といった例もあるが、極めて客体的である。



第169図 15流路下層出土馬形

尾部については、正面図右下へ素材を切り落として作出するものが主体であるが、尾部端部を四角く収めるもの(W64・W68等)、右斜め上方へ切り欠くもの(W62)、また尾部を尖頭化させる加工を施したもの(W67)等も見受けられる。腹孔については、基本的に下腹部において確認出来るが、いずれも木目が裂け、その後収縮したような状態にある。腹孔の無いものについては、W67のように該当部分に擦痕が見受けられるものもある。なお、但馬地域で多く認められる正面・裏面に切り込みを入れて棒を挿入する四本脚タイプは、本遺跡では見受けられなかった。W63を樹種同定したところ、スギであることが判明した。

(2) 5面

ア 550流路(第170図 写真図版130 W71~W84)

19点出土し、そのうち14点を図示した。この段階においては、裸馬の割合が半数を超える。15流路出土馬形に比べると、グループ内の規格性が高くなり、特に裸馬については、頭部や尾部の作りだしに関して、製作技法等の共通性が強く窺われる。W74とW76については、形代にしては特異な厚さ(1cm)を有している。

飾馬についても、比較的正面形状が類似する資料が多い。15流路出土の飾馬に比して、幅が狭くなり、長幅比が大きくなる傾向がある。また、より躍動的な姿を模した資料(W83)も見受けられる。W75・W76はスギ、W81はヒノキを素材として利用している。

3 武器形(第171図~第175図 写真図版130~131 W85~W116)

武器形に分類できた形代は55点出土し、そのうち32点を図示した。武器形の具体的器種としては、正面図上方の刃の付き方で刀形と剣形を認識し、片刃で表現された形代を「刀形(可能性のあるもの含む)」、一方両刃を表現された形代を「剣形」とした。これ以外に、鏢形の先端部と評価し得る資料が2点ある。

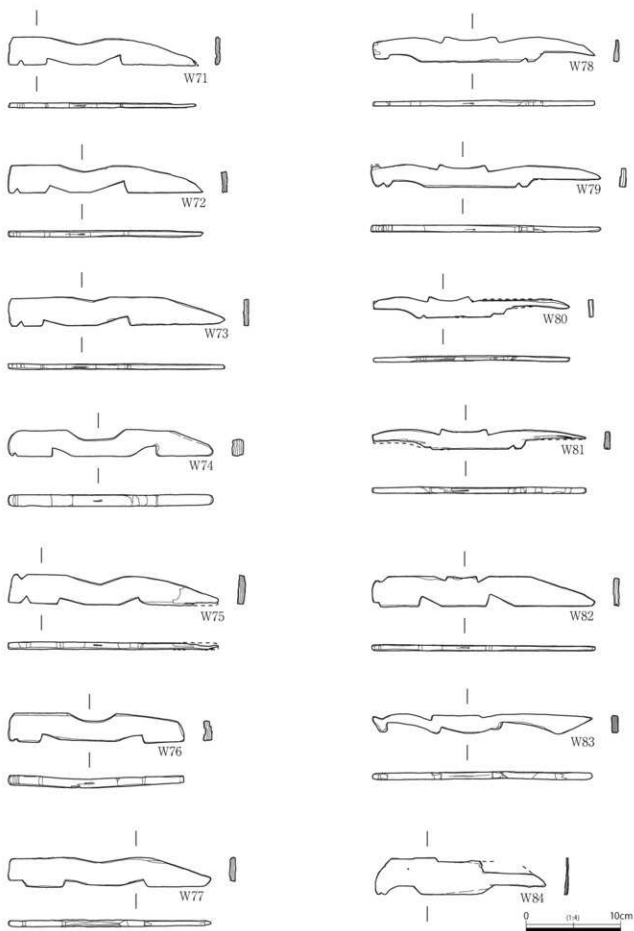
前述の刀形か剣形のいずれかに該当する柄の部分も、16点確認している。ただし、柄の部分は刀形と剣形で共通する作りであるため、柄部のみから器種を特定するのは難しい。そのため本書では、このような性質の資料群を「武器形」と標記している。同様な器種認定の問題として、一端が尖頭状の板材の中には、剣形か斎串いずれの端部の可能性もあることから、それらは「器種不明」の形代と分類せざるを得なかった。これらには、本来武器形であったものも含まれている。

武器形の出土遺構は、15流路下層、550流路、599流路、801流路、802流路と多岐にわたるが、その内550流路と802流路で45点を数え、全体の8割以上を占める。特に802流路からは、大型で規格性の高い刀形が一括出土しており、古墳時代の形代利用の一形態を示すものとして特筆される。

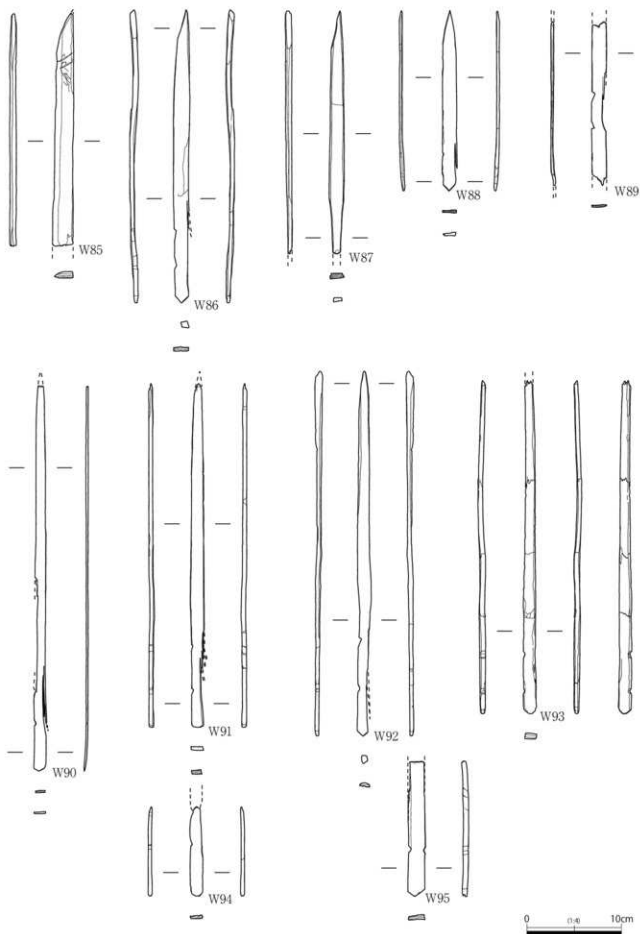
(1) 4-2面

ア 15流路(第171図 写真図版131 W85~W89)

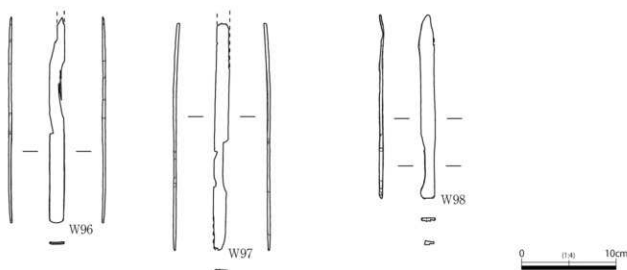
武器形は6点出土し、そのうち5点を図示した。内訳は刀形3点、剣形1点、刀形もしくは剣形いずれかの武器形柄1点である。このうち、切先から茎尻に至るまで全体形状を把握出来る資料は2点である。W86は刀形、W88は剣形である。柄の部分に対しては、正面右側縁に切り込み、同左側縁へは切り欠きと、共通した加工を施す。刀形で換言すれば、棟側に切り込み、刃先側に切り欠きとなる。



第170図 550流路出土馬形



第171図 15流路出土武器形・550流路出土武器形(1)



第172図 550流路出土武器形(2)・599流路出土武器形

W85については、鏝にも見受けられる長軸方向の転換点が横断面で観察出来るが、裏面側は平坦を成している。

(2) 5面

ア 550流路(第171図・第172図 写真図版131 W90~W97)

武器形は18点出土し、そのうち8点を図化した。ここでは剣形として3点(W90~W92)を認識した一方、確実な刀形は出土していないという特徴がある。剣形3点は、正面右側縁切り込み、同左側縁切り欠きという共通した加工を施しているうえ、サイズも似通っている。それ以外の一群は、柄の形状から刀形もしくは剣形とは認知し得るが先端部を欠失しており、武器形と指摘するに留める。

これら武器形5点は、その柄に対する加工について多様性をみせる。具体的には、両側縁に切り欠きを施すもの(W95・W97)、また一側縁に切り欠きもう一側縁に切り込みを施すもの(W96)があり、さらに前者の切り欠きについては、相似形を成すもの(W95)とそうでないもの(W97)とに分けられる。W91・W93について樹種同定を実施したところ、両者ともにスギを用いていることが判明した。

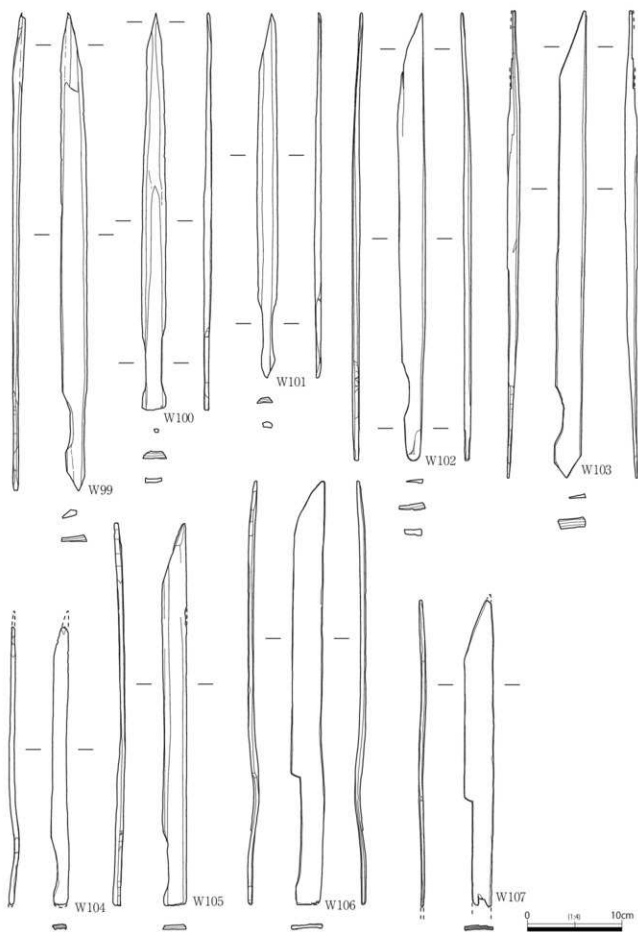
イ 599流路(第172図 写真図版131 W98)

刀形が1点(W98)出土している。切先は摩耗して、やや丸みを帯びている。先端部が裏面側に折れ曲がっている状況からすれば、埋没途上の摩滅となろうか。柄の部分は、刃先側が切り欠きによる加工、一方棟側はほぼ一直線状に収まる。刀形としては小ぶりである。

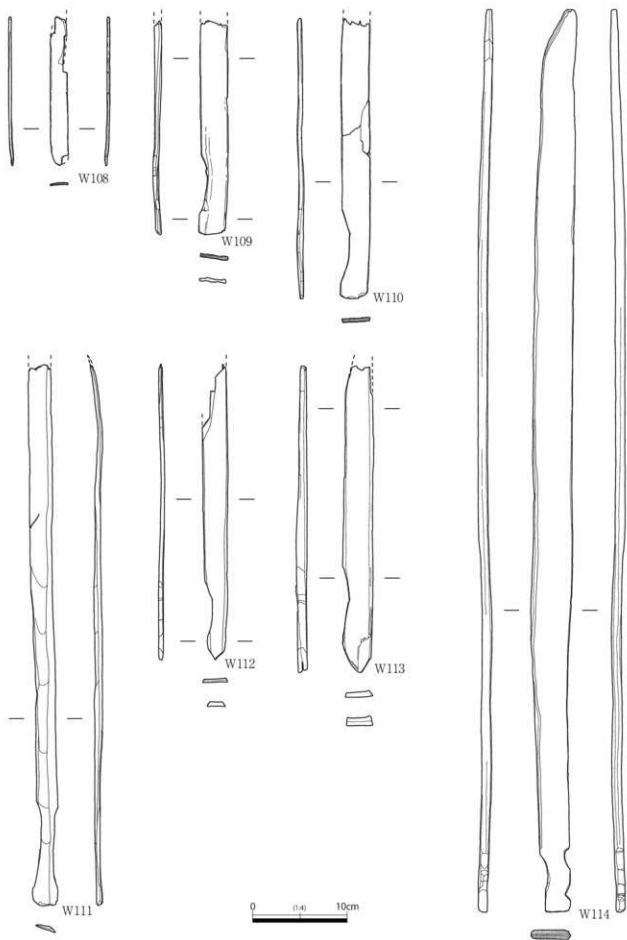
(3) 6面

ア 801流路・802流路(第173図~第175図 写真図版130~132 W99~W116)

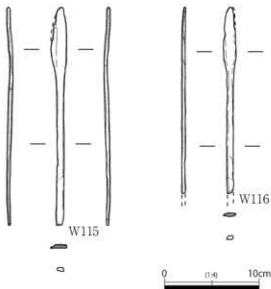
両流路を通じて29点の武器形が出土したが、第174図の1点(W114)を除いて全て802流路からの出土である。801流路出土のW114は完形の刀形で、最大長が1mに迫る大型品である。柄に施された加工は後述の802流路出土刀形のそれとは異なり、両側縁に対する切り欠きにより表現されている。



第173図 802流路出土武器形(1)



第174図 802流路出土武器形(2)・801流路出土武器形



第175図 802流路出土武器形(3)

についても、これらのいずれかに該当する。W107については、柄部を欠失しているが、柄と刃部の間に段差を切り出す加工がW106に酷似することから、完形であればほぼこれと同サイズの刀形と推測してよからう。なお、W109・W110・W112は、スギが素材として用いられていることが判明している。

802流路からは、この他にも武器形として、スギの板目材を用いた鏃形が2点(W115・W116)出土している。両者は非常に類似した作りを示している。

4 斎串(第176図～第180図 写真図版132・133 W117～W160)

1-1区の調査においては、192点を斎串として認識しているが、この他にも「棒状製品」とした器種不明の木製品の中には、斎串の胴部と考えられる資料が多数存在している。ここで斎串として挙げた44点は、特に上下端部の加工・形状により、斎串と認知し得た資料に限られる。現代においても継承されている「斎串」の使用法や他遺跡で検出された蔵所での出土状況に基づけば、一度に使用する斎串は数十本に及ぶことも想定される。このことから、実際には未図化の資料に加え、同器種と認知し得なかったより多くの斎串が存在したことは間違いない。

出土地点としては、15流路が最も多く99点を数え、以下550流路85点、8溝3点、包含層中3点である。15流路及び550流路といった、当時の蔵所に相当すると考える場所からの出土が95%を超えている。本項では、「上下端部の切出し加工の状態」、「胴部やや上方～頭部への切り込み」、「上端部の形状」、また「横断面形状」の4点を斎串の主要属性と判断し、それらを基に11類型を設定した(第176図)。最も重視した属性は、「胴部やや上方～頭部への切り込み」であり、これを

「切り込みなし(I類)」

「両側縁へ切り込み(II類)」

「一側縁へ切り込み(III類)」

「頭部への切り込み(IV類)」に細分した。

これに次ぐ斎串の属性としては、「上下端への切り欠き」の状況である。これらは、

「一端から斜めに切り欠き(A類)」

802流路からは剣形3点、刀形25点が出土し、そのうち15点を図示した。剣形(W99・W100)は剣先の一部を欠損しているが、概ね全体形状を窺い知ることが出来る。剣身の横断面は梯形状を呈する。柄の部分は両者ともに切り欠きによる表現であるが、剣先同様に柄部も左右対称形を成すW100と、非対称のW99とに分かれる。樹種同定により素材がスギであることが判明したW111についても、柄部の形状から剣形の可能性が高い。

刀形は、刃先を直線的に作り出すW103のタイプと、やや丸みを帯びさせるW106のタイプが混在する。柄についても、茎尻を丸める(W102)、逆三角形(W101・W103)、長軸に直交(W105・W106)の3タイプがあり、切先を欠損している柄部(W108～W110、W112・W113)

「両頂部から相似形に切り欠き(B類)」

「上端部は左右非対称の切り欠き、下端部は相似形に切り欠き(C類)」

「上端部は左右非対称の切り欠き、下端部は一端から斜めに切り欠き(D類)」

「上端部は平坦、下端部は相似形に切り欠き(E類)」

「上下端部はE類と同加工で横断面正方形(F類)」

と6つに分けた。これら2属性の組み合わせで類型化を行い、例えば切込ではなく、一端から斜め方向に切り欠く齋串を「I A類」といった分類表記を行った。以下、出土遺構毎にこの類型を基にして報告する。

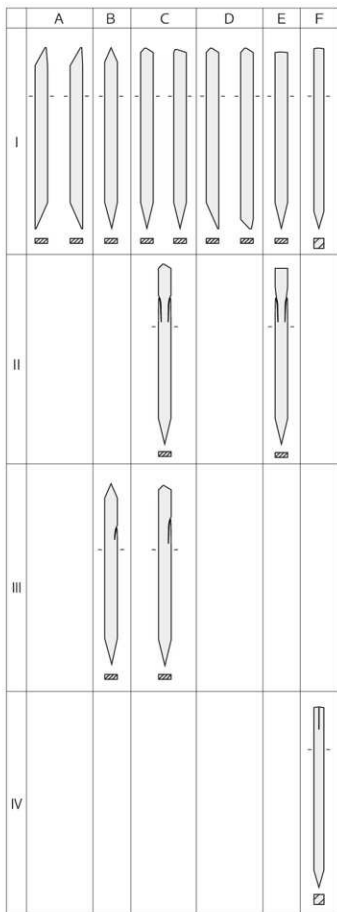
(1) 4-2面

ア 15流路

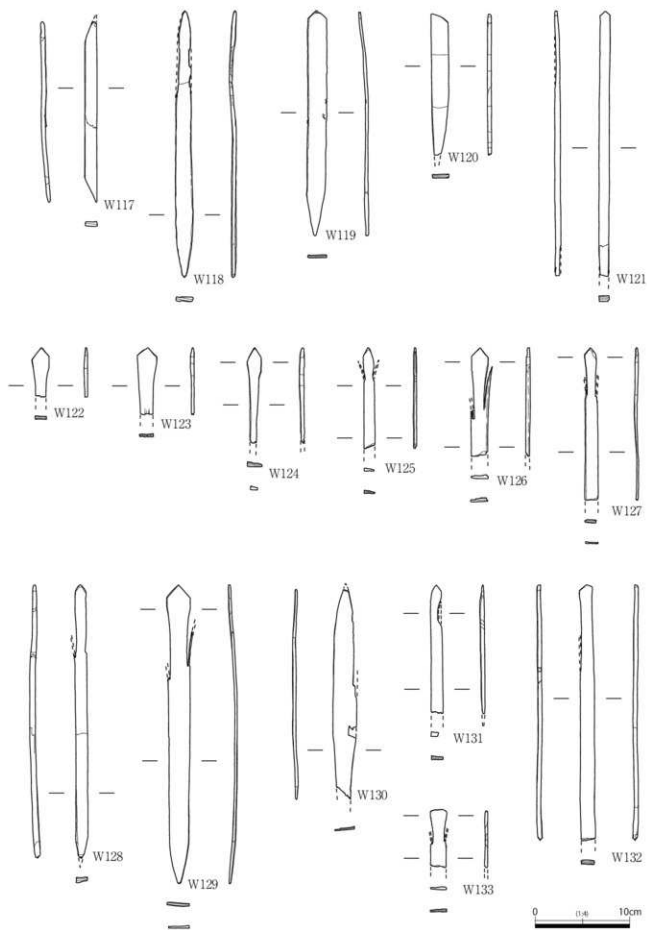
(第177図・第178図 写真図版132・133 W117~W137)

(ア)15流路下層

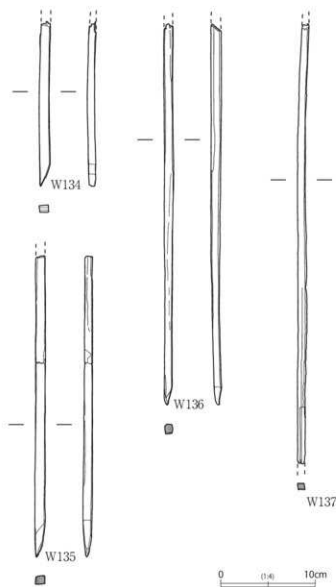
98点のうち、21点を図示した。完形資料はほとんど無い状況である。最も多いのはC II類であるが、多くは先端部のみ出土で、この類型に特徴的な切り込みの真下、もしくはその切り込み途上で胴部下半以下を折損している。全体形状を窺い知ることが可能な資料はW128やW129等に限定されるため、末端形状によってはD II類も想定される。ただし、実際に齋串完形品でD II類は存在しないため、胴部やや上方~頭部への切り込みが両側縁に存在する場合は、上下端への切り欠きはC類と考えて良からう。これにC I・C III類も加えると、7割近くとなる。数は少ないが、頭部が平坦を成すE II類や横断面正方形のF I類も存在する。後者に対しては、両側縁からの切り込みは施されない。W135はスギを素材としている。



第176図 齋串型式分類



第177図 15流路下層出土斎串(1)



第178図 15流路下層出土齋串(2)

(2) 5面

ア 550流路

(第179図・第180図 写真図版132・133
W138~W159)

84点のうち、22点を図示した。取り上げ時の見解等により、本流路上層もしくは下層に分けられる資料群においては、上層はCⅡ類、下層はBⅢ類が主体を成す。これに上層か下層かが不明な「550流路出土齋串」と一括した一群も加えると、CⅡ類と同様に、EⅡ類もこの流路では主要な類型となる。後者の類型は、15流路にはほとんど存在しない。W156~W158等、EⅡ類は形状の均一性や出土の一括性も高いことから、同時に使用された一群とも示唆出来る。

またB類についても、この流路に特徴的なタイプの齋串と言える。B類は、胴部やや上方~頭部への切り込みが両側縁に施されるとい資料が無く、一側縁に施されるBⅢ類(W142・W143)が一定量存在する。さらに、頭部の尖頭化もC類に比して縦長かつシャープという特徴がある。このように、類型化した資料群からすると、15流路との間にはCⅡ類という共通する類型がありつつも、より古いこの段階では、BⅢ類やEⅡ類も使用されていたと言える。CⅡ類のW153、EⅡ類の

W157・W158共に、スギを素材として用いていることが判明した。

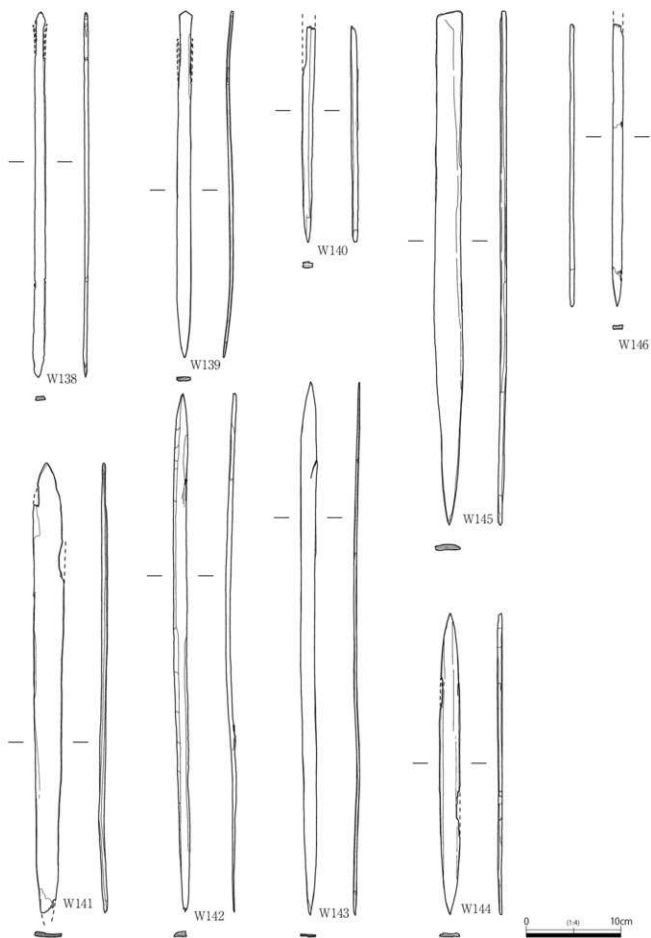
(3) 包含層(第180図 写真図版133 W160)

AⅠ類である資料(W160)が1点、7-3b層から出土している。15流路下層からも同類型の資料(W117)が出土しているものの、7-3b層出土の齋串はやや幅広く最大長も短い。

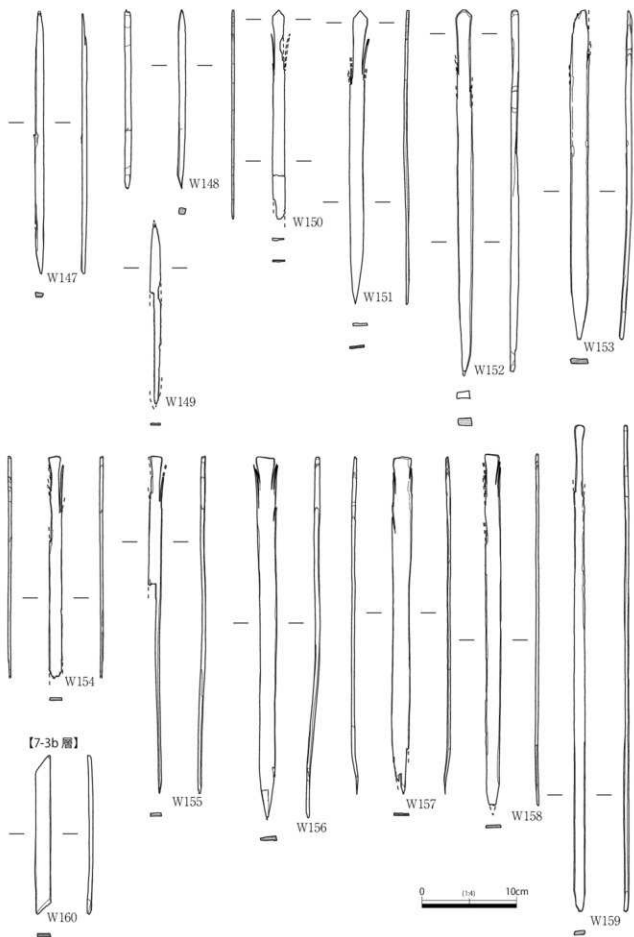
(4) その他

ア 8溝

遺存状態が不良のため図化していないが、8溝から出土した齋串3点中2点には、CⅠ及びCⅡ類に相当すると考えられる破片が認められた。そのうち1点を樹種同定したところ、スギであることが判明した。



第179図 550流路出土土着串(1)



第180図 550流路出土斎串(2)・7-3b層出土斎串

5 舟形(第181図 写真図版134 W161~W163)

(1) 4-2面

ア 15流路

(ア) 15流路下層

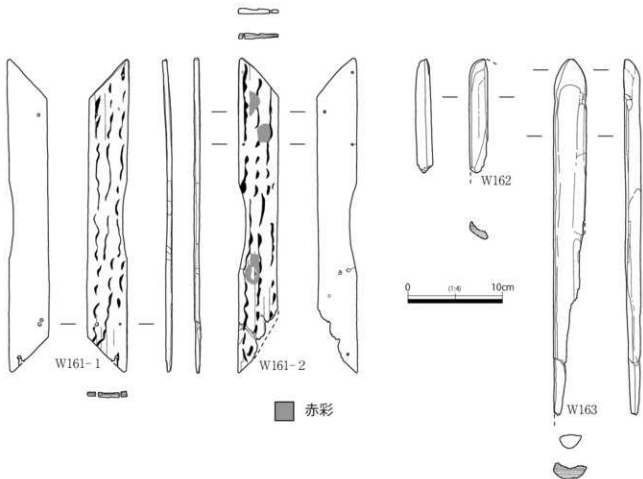
舟形と判断したのは3資料4点である。いずれも15流路下層からの出土である。

W161-1・W161-2から構成される舟形については、両者を逆台形状に据えれば、それらを接合する棒材との組み合わせによって立体的な舟の形状を復元出来るもので、準構造船を模したものと捉えられる。その場合この2点は、それぞれ舷側板の役割を果たすこととなる。なお、両者を組み合わせるために必要な棒材、及び板材の基盤として接合する刳船部分は未確認である。

棒材の存在を裏付ける状況として、両板縁辺付近には、目釘が詰まった状態の孔が穿たれているのが観察できる。表裏面に貫通している孔と、既に収縮して閉じている孔があるが、2枚の板でそれぞれ孔の位置が対応しない箇所もあり、それらについては別の用途で開けたものか。

W161-1・W161-2の表面側(外側)には、各々3列の平行する波状の文様が墨書により描かれている。おそらく、これらは舷側板に打ち寄せる波を記号化したものと察する。

W162とW163は刳船の舟形である。前者は船首もしくは船尾の半分程度の残存であるが、W163については一方の先端部形状が窺える。おそらくW162についても、先端部の丸みの様相がW163にやや類似することから、本来は同様な形状と大きさを成していたものと推測できる。



第181図 15流路下層出土舟形

6 農具形

(第182図 写真図版134 W164・

W165)

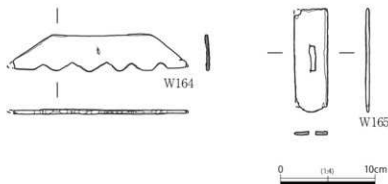
(1) 6-2面

ア 802流路

農具形に関連する資料としては2点出土しており、両者を図示した。

W164はエブリ形である。正面図下端に鋸歯状の刃縁を作出している。正面図中央に孔が穿たれているが、現在は収縮し、貫通していない。柄に該当する棒状材が組み合わされていた可能性がある。

W165は鋤形と考えられるスギ素材の資料である。正面図下端の両側縁付近がやや丸みを帯びることから、この下辺を刃部と見做すことも出来る。正面図中央には、長軸方向に2.6×0.6cm程度のややいびつな方形の孔があり、柄孔を表現したものか。なお、本来の組み合わせ平鋤には着柄軸と柄孔に浅い桶状の加工が施される場合が多いが、本資料においてはそのような加工は省略されている。



第182図 802流路下層出土農具形

第4項 木器

1 容器

容器類については、曲物・指物・笏物・挽物の各種が出土している。いずれも完形を示すものは少なく、破片と化している資料が大半である。このうち、最も多い器種・部位は曲物の底板であり、遺存状態の良好な資料や榫皮紐が残っているものを中心に保存処理を施し、図化・掲載した。以下、各遺構ごとにまとめたうえで報告する。

1-1 曲物

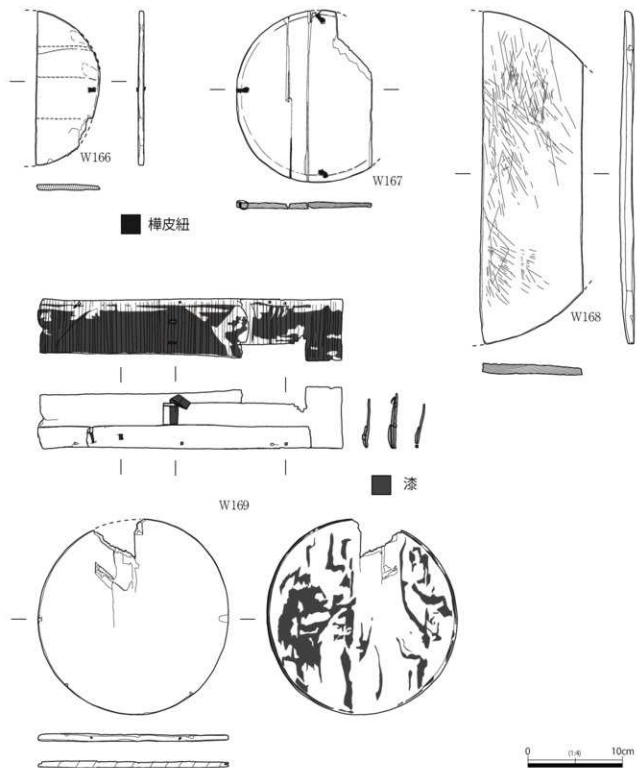
(1) 4-2面

ア 15流路

(ア)15流路上層(第183図 写真図版134・135 W166~W169)

底板4点、側板1点を図化した。榫皮結合曲物Bと針結合曲物(町田・上原編1985)がある。榫皮紐が残る底板(W166・W167)、線条痕が著しく残るW168、また塗布された漆が良く残っているW169等がある。

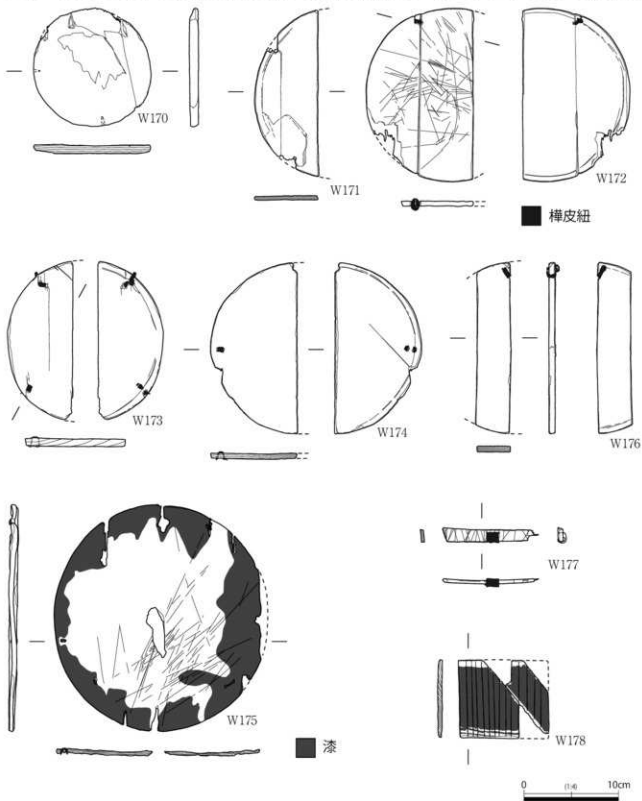
W167は正面右側を欠損するものの全体形状を窺える資料であり、おそらく4箇所側板と結合していたのであろう。また、この資料には側板の位置を決める針書き刻線が巡っている。W169は側板と底板のセット関係にある。側板の表面には罫引線が均等間隔に引かれており、漆も塗布されている。少なくとも3枚の側板を重ね合わせ、それぞれが離れないように榫皮紐や目釘で固定している。曲物の大きさについては、径16~20cmに収まりやや規格性のある一群と、W168のような径35cmを測る大型品の一群とに分けられる。



第183図 15流路上層出土容器(曲物)

(イ) 15流路下層(第184図 写真図版135・136 W170~W178)

蓋板1点、底板6点、側板2点を図化した。底板は15流路上層で確認されたような大型品はなく、主流となるのは径16~20cm程度のもので、いずれも樺皮結合曲物Bに該当する。W170は他の円形板よりも作りが粗雑であることから、蓋板と判断した。径12cmを測り、底板よりも一回り小型である。W172~W174・W176には、側板の位置を決める針書き刻線が巡っており、それに対応する樺皮紐も

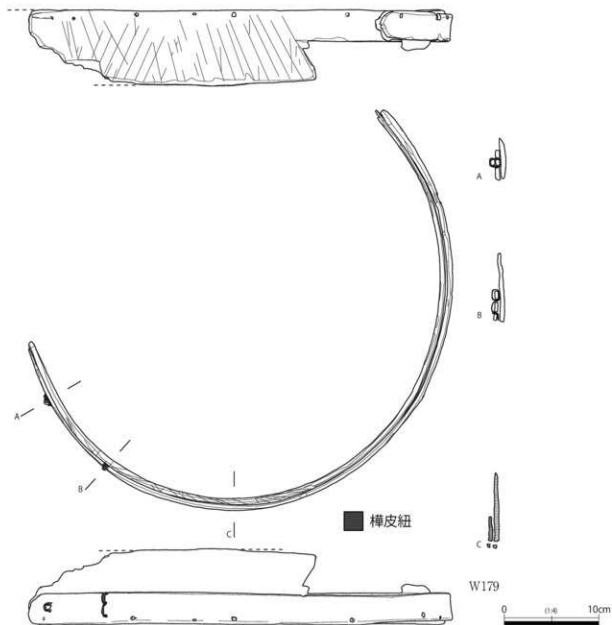


第184図 15流路下層出土容器(曲物)

確認出来る。W171も元来は同類であろう。W172には、無数の刃物痕が様々な方向性をもって見られる。W175にも同様の刃物痕跡が認められるが正面右下に集中し、これに先行した漆の塗布もある。正面図中央付近には孔が開いているが、外周付近の破損状況等も加味すれば、これは意図的な穿孔とは言い難い。W177とW178は側板の破片である。いずれも断片的な資料ではあるが、罫引線が認められ、W177には樺皮紐、W178には漆の塗布が確認できる。

ウ 515土坑(第185図 写真図版135 W179)

側板W179が1点出土している。全周の半分強が残存している。素材に用いられたのは、ヒノキ科アスナロ属という樹種同定結果が出ている。第63図及び写真図版38にもあるように、その出土状況は、土坑内に廃棄されていた遺物としてではなく、意図的に土坑壁面に沿うように据え置かれていたことを示している。なお、この側板に伴う底板は確認出来ていない。



第185図 515土坑出土容器(曲物)

2枚の側板は重ね合わされた後、約10cm程度の間隔を置き、樺皮紐を用いて結合されている。ただし、大半の紐は遊離しており残存していない。各側板は外側が3cm程度、内側がその倍以上の約8cmの高さがあるもので、後者には斜交する罫引線が数多く引かれているのが確認出来る。

1-2 指物

(第186図 写真図版137

W180・W181)

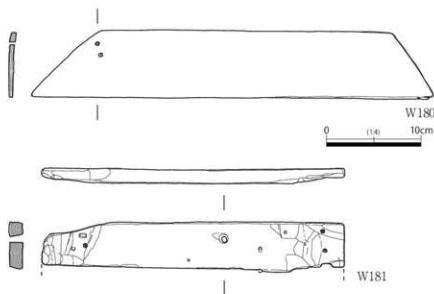
指物の可能性のある破片2点を図化した。

(1) 4-2面

ア 15流路

(ア) 15流路下層

W180は正面形状梯形を呈し、左上方に目釘孔らしき痕跡を2箇所確認出来る。



第186図 15流路下層・801流路出土容器(指物)

(2) 6-1面

ア 801流路

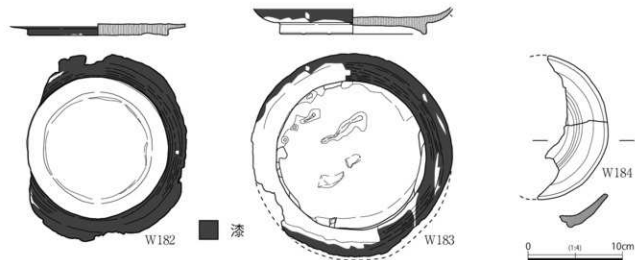
W181は、正面図左右両側縁付近にかけて厚みを減じる加工が施されている板材である。両端付近を中心に、目釘孔が多く穿たれているがやや規則性を欠く。この部分を重ね合わせ、同様な部材と連結させる技法が用いられていたと考えられる。中央やや右側には、径8mm程度の孔も確認出来る。

1-3 挽物

(1) 4-2面

ア 116柱穴(第187図 写真図版137 W182)

W182は高台付皿である。口縁部を著しく欠損しているが、漆は比較的良く残っている。



第187図 15流路下層・116柱穴出土容器(挽物)

イ 15流路

(ア)15流路下層(第187図 写真図版136・137 W183・W184)

W183は黒漆の剥落がやや著しい高台付皿、W184は椀である。前者の素材は樹種同定の結果、ケヤキであることが判明した。またこの資料については、金属製容器を模倣した可能性もある。

1-4 刳物

(1)6-2面

ア 802流路(第188図 写真図版138 W185~W188)

W185及びW187は、推測される完形資料全体形の1/3以下の残存に留まる。W186とW188については、ほぼ全体形状を呈しているが、W186の底面部分は大部分を欠損している。いずれの資料も含水率が高い状態の槽であり、遺存状態は芳しくない。

W185は短脚を作り出しており、完形であれば4脚となろう。六A遺跡(三重県)出土槽におけるG類に類する(穂積編2000)。W186・W188は、いずれも粗い加工によって形作られている。W186は全長約56cmを測り、隅丸方形の平面形を呈す。一方、W188の正面形状は正方形に近いが、正面図両側縁中央がやや外に膨らむ。W187は、前2者に比してやや丁寧な作りである。正面図から見た形状は、W188をやや細長くしたものである。いずれの資料も、針葉樹を素材としていると考える。

またW185とW188については、第112図や写真図版70に示したように、木製祭祀具との共伴を指摘出来る状況を呈している点も重要である。

2 農具

出土点数自体は多くないが、田下駄や馬銚関連の部材を中心に、一定量出土しているのが農具類である。ただし上記2器種に代表されるように、この種の道具は組み合わせで使用したり、比較的大型の製品であったりするのが一般的であることから、埋没途上において破損や部材同士の分離が起こりやすく、出土時に完形の状態を保持しているものはほぼ皆無である。本遺跡においても、当該資料群の多くが、構成部材の一部としての単独、もしくは部分出土である。

出土地点としては、水田域に隣接する古墳時代中期後半頃の599流路からが最も目立つ。出土状況によれば、流路内への廃棄等が考えられることから、比較的これら農具の原位置性は高いと考える。

(1)3面

ア 8溝(第189図 写真図版139 W189)

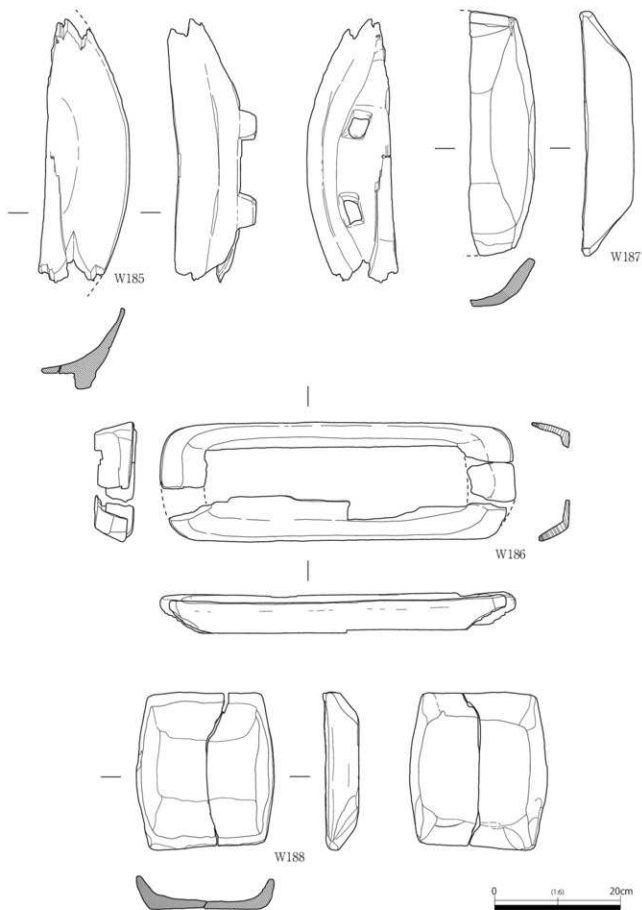
8溝からは、田下駄(W189)が1点出土した。板型田下駄の3孔式であるが、正面下端を欠損している。孔は縦長方向に大きく開けられている。折断面が比較的鋭く、斜め方向に折れていること、また同様な切込のような痕跡が複数見受けられることから、意図的な折断の可能性がある。

(2)4面

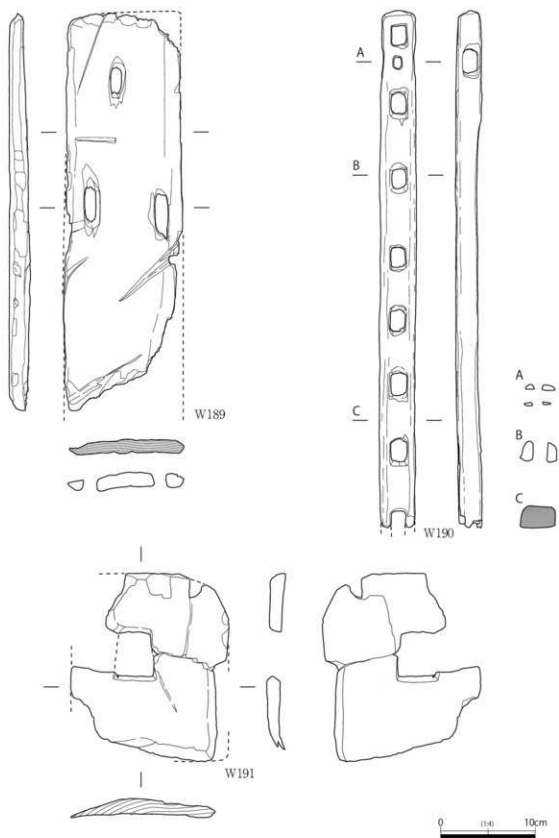
ア 15流路

(ア)15流路下層(第189図 写真図版138・139 W190・W191)

馬銚の台木の一部(W190)と、平鋤の身(W191)が各1点出土した。馬銚の台木には、連続する8孔と、その一端付近においてそれらに直交する1孔を確認出来る。前者の孔群に差し込まれていた歯は



第188図 802流路出土容器(制物)



第189図 8溝・15流路下層出土農具

全く残存していない。

アカガシ亜属を用いた平鋤の身は、2点が接合した状態で全体の2/3程度の遺存度であり、方形の柄孔も一部欠損している。柄を差し込む前面側の下辺には角度をつけた加工を施しているが、明確な刃部は作出されていないことから、製作段階での破損の可能性もある。

(3) 5面

ア 599流路・550流路(第190図～第192図 写真図版138・139 W192～W199)

599流路からは、一部の歯が付いた状態の馬鋤(W192)及び平刃横鋤(W193)といった遺存状態の良好な資料に加え、農具の柄(W194)、田下駄部材(W195～W198)が出土している。

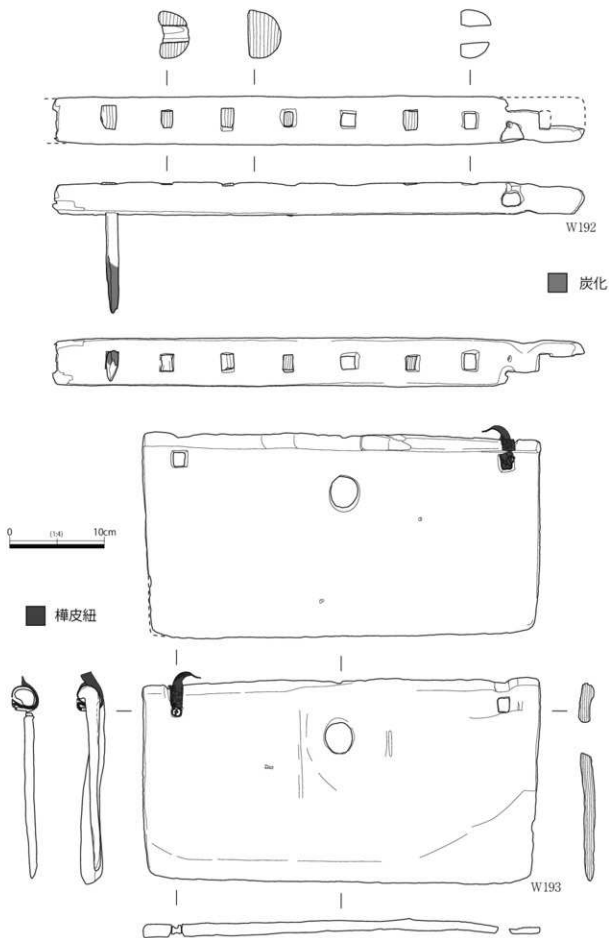
W192は、横幅約56cmが残存する台木と、それに装着された歯5本残っているが、歯は1本を除き基部のみが認められる状態で、残る1本の歯は先端付近が炭化している。W193は横鋤の身のほぼ完形資料であるが、2箇所ある柄との接合を施す樺皮紐が片方失われている。残存している樺皮紐を見ると、少なくとも三重になっており、強固に巻き付けていることが観察できる。刃部もさほど摩滅しておらず、使用頻度は低い状態といえる。

農具の柄として考えられる資料のうち、端部に把手を有するW194を鋤の柄として扱う(君嶋編2012)。「木器集成図録(近畿古代篇)」(町田・上原編1985)の分類に従うとすれば、W194は、逆三角形で中央に孔を持たないVc型に該当しよう。

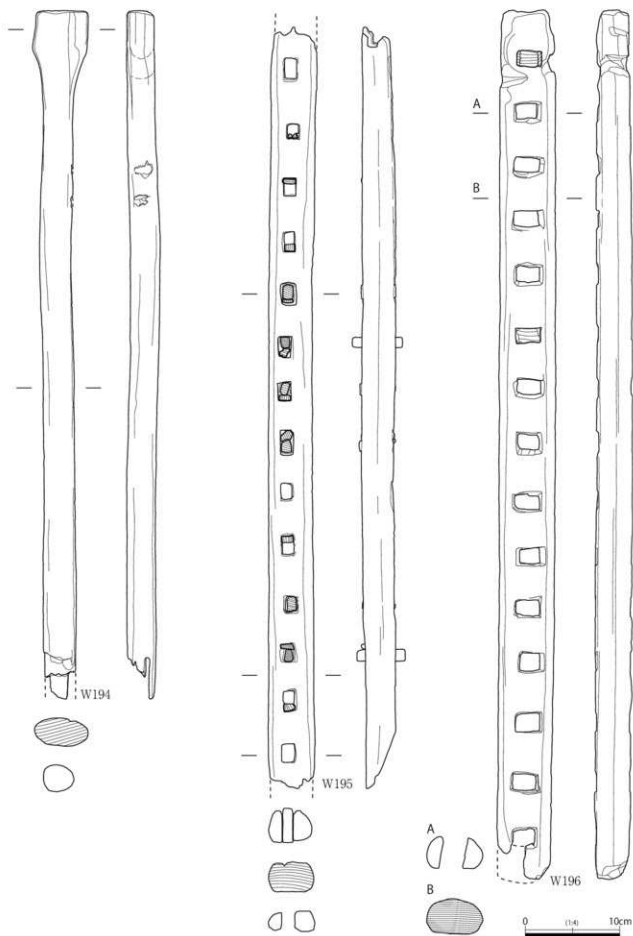
田下駄の部材としては、方形枠型田下駄の枠材(W195・W196)、高足型田下駄の部材(W198)、板型田下駄の板材(W197)がある。W196については、孔の多さと位置関係から、輪襪型田下駄の板材の可能性もあろうか。素材にはスギが用いられている。W195・W196については、格子状に組む枠材が、枠材の孔内に基部のみ残存した状態にある。孔の大きさや方形区画の向きから、両者は同一田下駄の枠材ではないと考える。W195の右側面上方の状態を、連続する孔に対し直交する孔と捉えるならば、馬鋤の台木の可能性も出てくる。

高足型田下駄の部材(W198)は、正面図右下に作り出された突起部分を欠失しているが、全体形状はほぼ窺い知ることが出来る。机の脚部の可能性もあろうが、上端面が完全には平坦ではなく、机として機能し難いことから認定は出来ない。

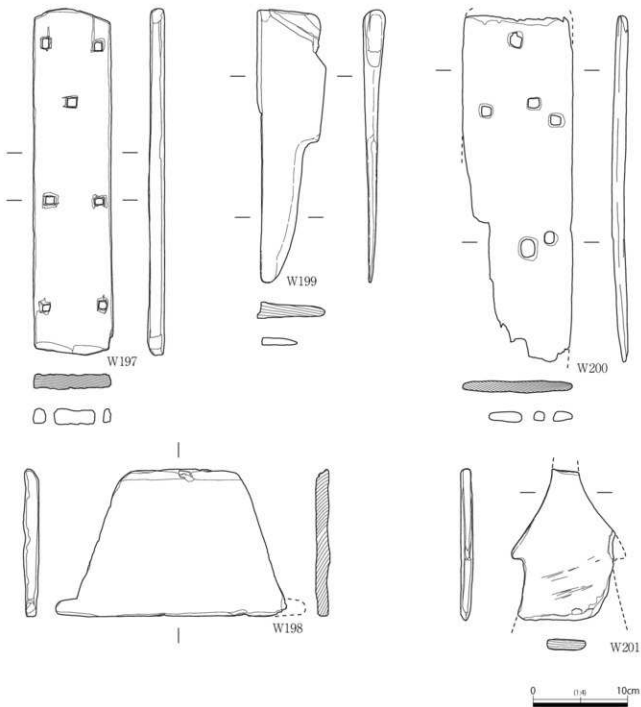
W199は550流路から出土した馬鋤の歯である。素材として、アカガシ亜属が用いられている。正面左側縁に刃部が作り出されているが、摩滅が顕著である。



第190図 599流路出土農具(1)



第191図 599流路出土農具(2)



第192図 550流路・599流路(3)・802流路出土農具

(4) 6-2面

ア 802流路

(第192図 写真図版139 W200・W201)

田下駄板材(W200)、曲柄又鋏(W201)が出土した。W200は板型田下駄の板材と捉えているが、599流路から出土したW197同様、孔の多さと位置関係から、輪標型田下駄の板材の可能性もあり得る。W201はいわゆるナスビ形の又鋏の基部に近い部分のみであり、歯の部分までは残存していない。

(5) 包含層

ア 7-2a層

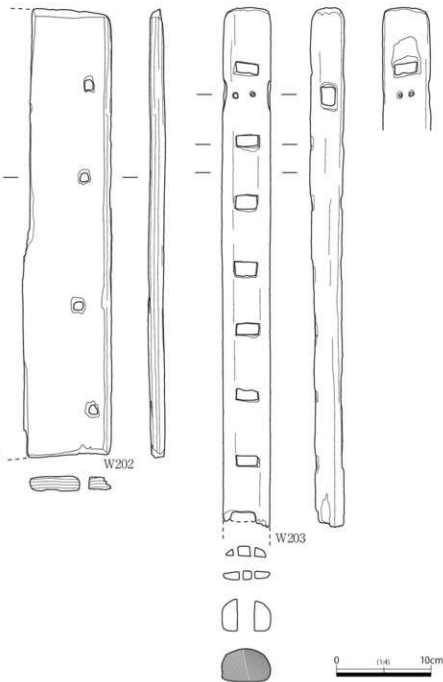
(第193図 写真図版139

W202・W203)

田下駄板材(W202)と馬銚の台木(W203)が出土した。いずれも完形ではなく、本来の半分程度が残っている状態であると察する。

W202は、正面図右側縁付近に四つの孔が確認出来る。いずれもほぼ同じ大きさの孔で方形状を呈するが、孔内はやや丸みを帯びている。正面図左側の縦方向に割れた折断面部分には、これらに対応する孔の痕跡は見受けられない。

W203には、破損しているものも含め、8つの孔が連続的に認められるが、いずれの孔内にも歯は残っていない。正面図上方には、上端とその次の孔の間に、これらと直交する孔が一箇所ある。また、この孔の中には、5mm程度の小さな孔も2つ平行に穿たれている。



第193図 7-2a層出土農具

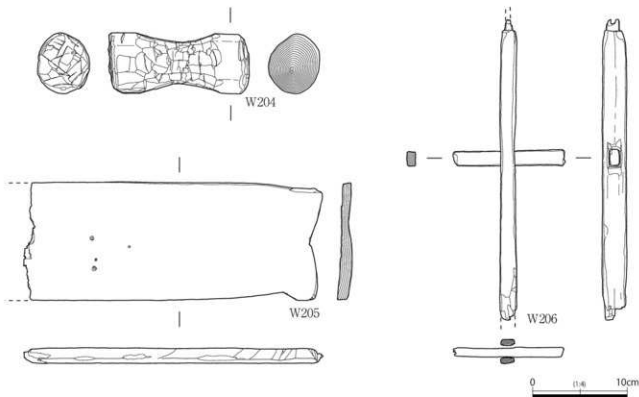
3 紡織具

機織りに関連すると考えた木製品は8点を示したが、中には他の道具の部材とも捉えられ得る資料も含まれているおそれがある。ここでは、紡織具の可能性が高いと判断した資料も含め、木錘、棹(支木・腕木)、布送具、経送具、綜統棒もしくは紡莖、タタリを報告する。

(1) 4-2面

ア 15流路(第194図 写真図版139 W204~W206)

W204はイヌガヤの芯持材を利用した木錘である。素材の樹皮を除去した後、正面図右側縁付近にはほとんど調整加工を施していない一方で、左側縁付近には丁寧な加工を施している。切り合い関係



第194図 15流路下層出土紡織具

からみて、素材中央から正面図両端に向かって連続的に刃を入れて形状を仕上げるのは、最後に行われていることが想定出来る。両側面への加工と正面中央の加工との切り合い関係は不明であるが、円柱状に仕上げた後に左右両端を仕上げていることは確実である。本資料は中央部分に紐を掛けて使用することが想定出来るが、紐ずれ等の明瞭な使用痕跡は確認出来ない。

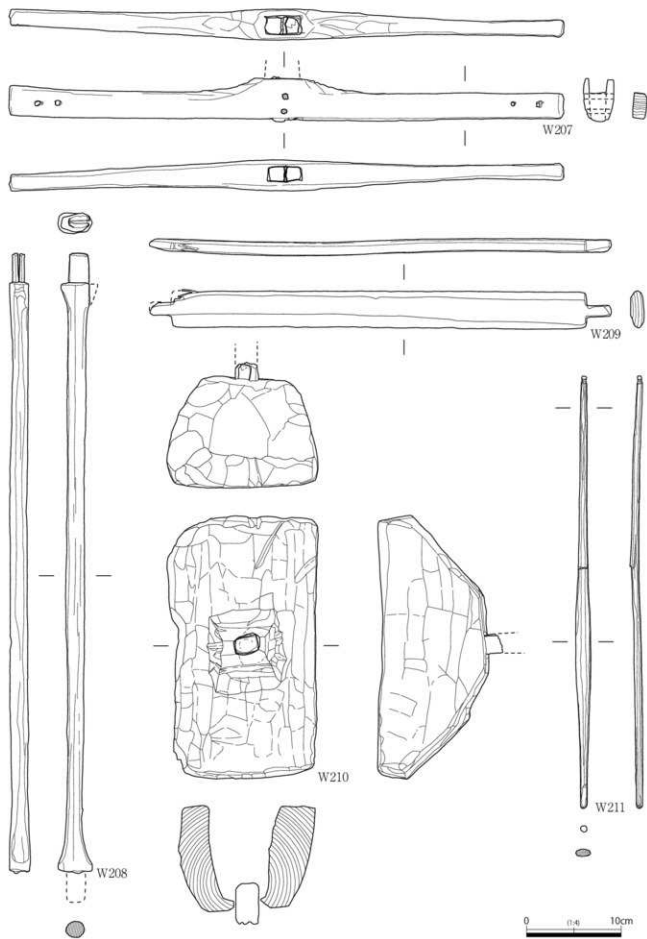
W205は、厚みのある板材の正面右側面に加工を施した部材で、正面図右側下端の削り込みと1.5cmの厚さという特徴から、経送具の一部と考えた。ただし、一般的に経送具とされている資料よりも想定される完形品の長さがやや小さいこと、また右側面中央に施された挟りが通常の経送具には見られないこと等の差異も見受けられる。W204・W205は上層から出土した。

W206は、棹の腕木と支木の結合状態の可能性がある資料である。正面図上方の端部は細く削り出されており、その部分で折損している。逆側の端部は厚さを保持しているものの同様に折損している。通常の棹においては、支木の端部は腕木の外側へは出ず、孔内に収まることから、本資料についても、建築・農具等の組み合わせ部材に該当する可能性もある。W206は下層から出土した。

(2) 5面

ア 599流路(第195図 写真図版139 W207~W210)

W207は、棹の腕木である。資料中央の柄孔内に、折れた支木の基部(出柄)が残存している。正面中央の支木との接続部は、幅が広がるよう削り出されており、一見すると東村氏による腕木の加工分類(2011)でいうY型に似るが、正面両端付近及び支木の入る柄の部分に目釘がそれぞれ2本ずつ打たれる小孔がある等、細かな違いも見受けられる。類例資料が、宮城県仙台市中在家南遺跡(工藤藤1996)の古墳時代中期の河川から出土しており、本資料との帰属时期的な整合性が取れる。



第195図 599・801流路出土紡織具

W208は棒の支木である。ほぼ完成で全体形状を窺える資料ではあるが、下端の基部(出柄)と上端の逆三角形に加工した基部付近の一部を失っている。出柄の幅は2.2cmを測り、W207の柄内に残存している支木の出柄よりも1cmほど小さい。掘り部には特段の加工は施されておらず、無帯である。本資料の推定複元長さは約68cmである。

W209は、布送具の可能性のある木製品である。器体は身部と把手に分かれ、正面左端に位置する把手と身部の上端角の一部を欠損する。把手は身部の端から削り出して作られている。横断面は緩やかな楕円を呈している。布送具としても小型の部類に入る大きさであり、また把手部分の長さも他遺跡出土資料より短い。

W210は、タタリの土居である。支柱は基部付近で折れ、土居の孔に刺さったままの状態である。土居は側面観梯形を成すように、粗い加工によって成形されている。底面は27.6cm×15.9cm程度の方形を成し、一度底面に直交する面を四方に作ってから斜め上方へと削り出す形状で、安定感のある台に仕上げている。土居の内部は刳り抜かれ、上部中央に柄孔を作出し、支柱と組み合わせている。樹種同定を実施したところ、土居にはスダジイ、また支柱にはサカキを選択していることが判明した。

(3) 6-1面

ア 801流路(第195図 写真図版139 W211)

W211は、綜統棒もしくは紡莖と推定した棒状製品である。表面には、長軸方向に沿って丁寧に面取り加工を施している。中央やや下方に幅広となる膨らみをもち、該当部分の横断面は扁平な楕円形を成すが、その上下に向かっては、再び細まるようになる加工をしている。上端には、小さく突起を作り出している。綜統棒や紡莖といった器種が想定出来るものの、観察し得る限り、使用痕等は認められない。

4 建築部材

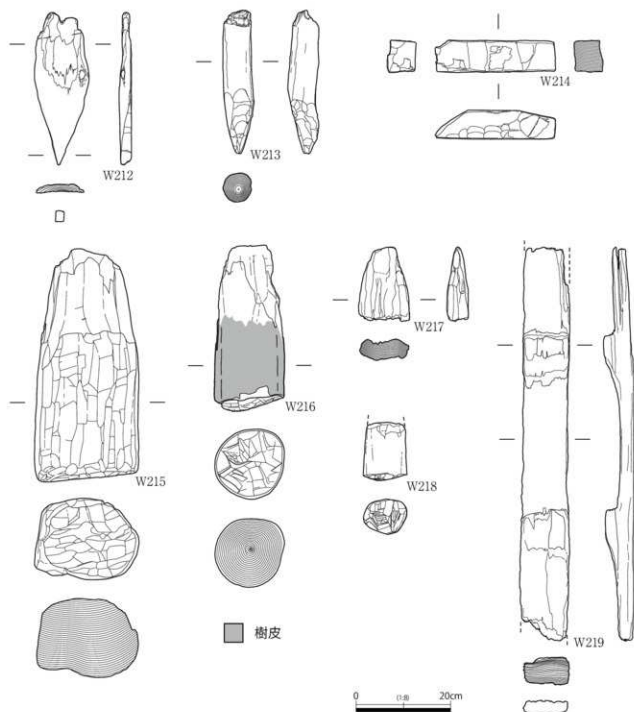
建築部材と認定もしくはその可能性の高いと判断した部材は、801流路及び802流路内を中心に多数出土した。また、4-2面及び6-1面で検出された掘立柱建物の柱穴内からも、遺存状態の良い柱根や礎板が原位置性を保って複数検出された。建築部材の多くは、これら掘立柱建物の構成部材である可能性が高いと考える。

柱根や梯子等の一部の器種を除けば、ここで取り上げる資料は、組み合わせて使用する部材の一部のみの状態での出土が過半を占める。よって、単独では具体的な器種名を明確に表現することが難しい資料が大半を占めている。ここでは、25点を取り上げ報告する。

(1) 3面

ア 8溝(第196図 写真図版140 W212)

W212は矢板である。厚みのある板目材の一端を両側縁から求心状に削り出し、尖頭化している。上端は風化のためか痛みが激しい。最大長32cm超程度であることから、矢板としては小型の部類になる。



第196図 8溝・18護岸・掘立柱建物・550流路出土建築部材

(2) 4-2面

ア 18護岸(15流路)(第196図 写真図版140 W213)

W213は、15流路上層の埋積が停滞した時期に、溝肩部補強の目的で打たれたと目される杭である。素材は芯持の丸太材で、表皮を剥いだ後、一端に加工を施し尖頭化させている。上方は何らかの理由で消失しており、本来の長さは不明である。目視による樹種の判別では、広葉樹と考える。

イ 掘立柱建物(第196図 写真図版140 W214~W218)

W214は礎板、W215~W218は柱根である。

W214は掘立柱建物2の34柱穴内底面に掘えられていたもので、角柱状の材を用いている。正面図中央には、柱の当たりらしき痕跡が見受けられる。W215は掘立柱建物10の93柱穴、W216は掘立柱建物12の109柱穴、W217は掘立柱建物2の394柱穴内にそれぞれ直立した状態で遺存していた。樹種同定の結果、W215にはクリ、またW216にはサカキを用いていることが明らかとなっている。W218は、掘立柱建物を構成しない321柱穴内に直立していた柱根である。W215・W216・W218には芯持丸太材を用い、下端に対し平坦に近い加工を施している一方、W217は芯去の板に近い材を用いている。W217は遺存状態も不良であるため、埋没過程において本来の状態から変質している可能性もある。

(3)5面

ア 550流路(第196図 写真図版140 W219)

W219は梯子である。上下端部ともに消失しており、現段階では82.6cm長が残っている。いわゆる刻み梯子であり、削り出しの足掛部は、現況で2段残存しているのみである。

(4)6-1面

ア 801流路(第197図 写真図版140 W220~W223)

W220は柱材、W221~W223はいずれも水平構造材と考えられる部材の一部である。

W220は下端部付近のみが遺存している状態で、底部より10cm程度上方に抉り加工が施されている。その部分を除けば、周縁を粗い六角形状になるよう、面を形成している。底面は平坦であり、擦れた痕などは特に見受けられない。

W221~W223は、垂木もしくは根太の可能性のある一群である。施された加工の仕方は様々であるが、いずれも上端部から10cm程度下方付近に欠込を持っており、他の部材との結合(接合)による組み合わせ材としての性格が推定できる。W222とW223の切込の加工は非常に類似するが、材の幅が異なるため、同一資料ではない。W221については、下端が尖頭状に加工されているため、最終的には杭に転用されたと考える資料である。

(5)6-2面

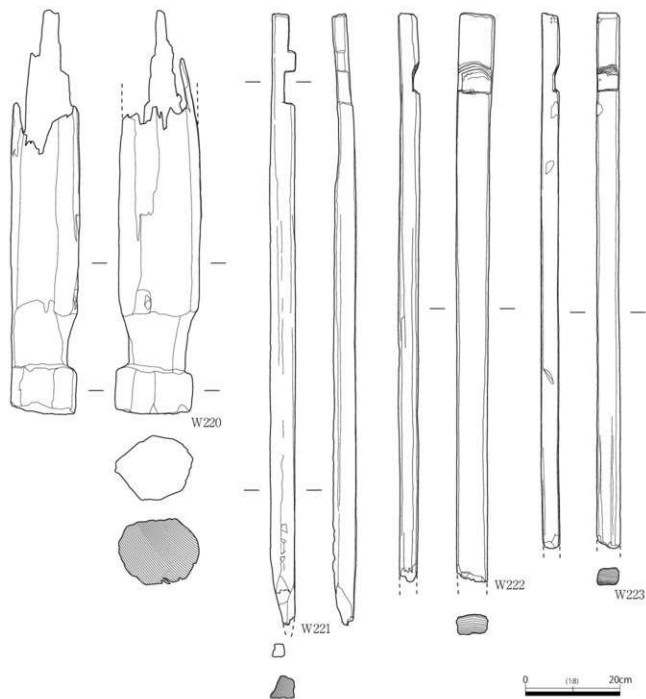
ア 802流路(第198図・第199図 写真図版140・141 W224~W233)

W224~W226は水平構造材と考えられる部材である。W224は扉口材(蹴放か)、W226は平梁と考える。W224には、扉軸を受ける孔が一箇所のみ確認でき、またその周辺には抉入の加工も複数見受けられる。長軸方向逆側(正面図下方)は破損しているため詳細は不明である。

W226は、2mを超える長大な材で、正面図上方が鉤状に加工されている。その先端付近には、他の部材との接合に用いられた際の痕跡が残る。

W227は芯持材を用いた柱材で、現存長2.4m超を測る。上端には階段状の削り出し加工が施され、胴部にも切削された節の基部が多く残る。W228は礎板である。柱の当たりが明瞭に残っている。

W229~W231は杭、W232は矢板である。杭はいずれも横断面方形を呈し、1m前後の長さで4cm前後の厚みを有する重厚な板材を用いている。W229についてはやや不明瞭であるが、W230とW231

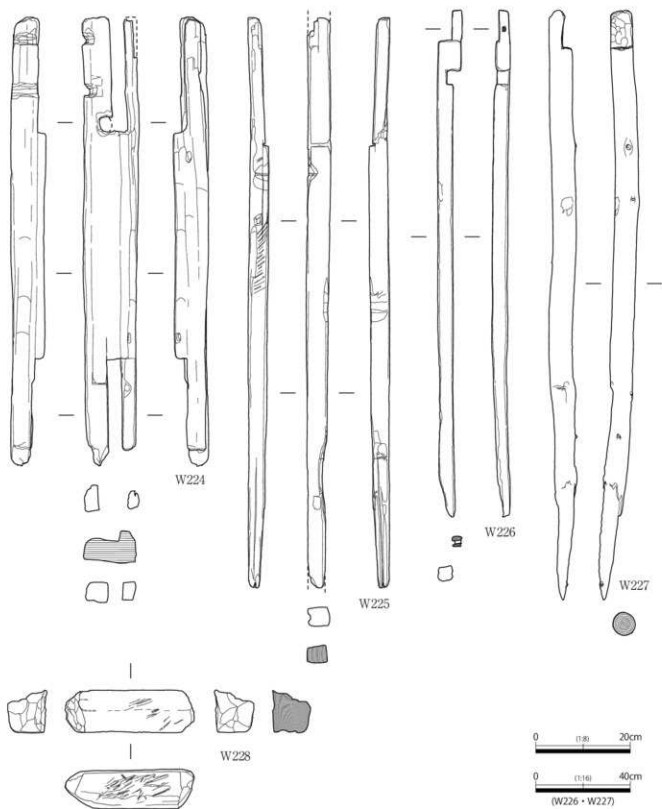


第197図 801流路出土建築部材

については、上端の形状から二次的に転用して作られたことが推測出来る。

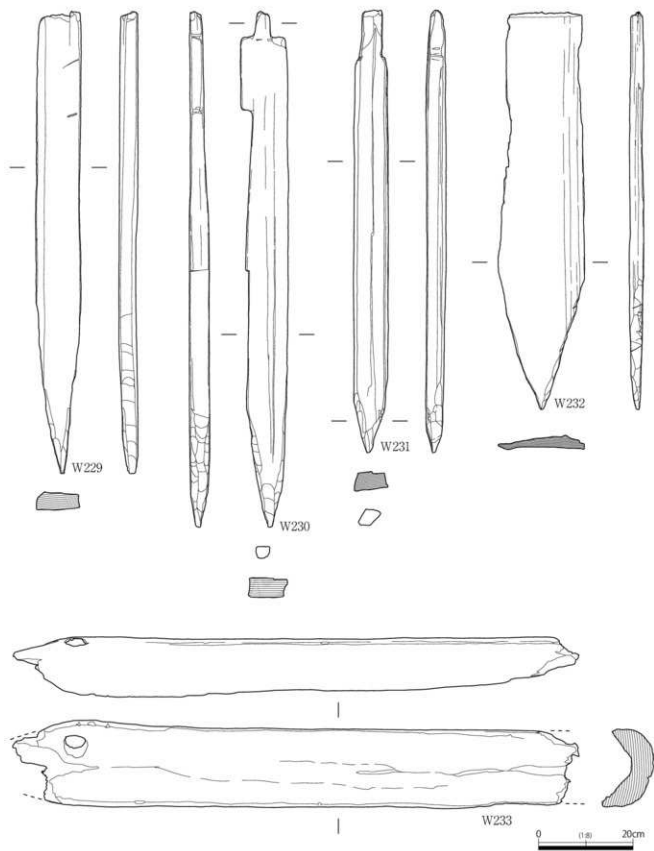
W233は木樋である。芯去材の中央付近を削り抜いてU字状の凹みを作り出している。手斧の痕跡はほとんど観察出来ない。正面左上方には孔が確認出来るが、樋として機能する上で必要な加工なのかは不明である。本資料は、形状や大きさから舟材もしくは田舟の可能性も示唆されようが、それらに特徴的な木取りとはやや異なること等から、その可能性は低いと考えている。

W233が出土した802流路の機能していた時期(古墳時代中期後葉頃)には、本邦における水刃付近での祭祀において、その導水施設の部材として木樋が利用されている事例も多い(青柳2005他)。本資料についても、出土地点の性格との関連性を重視すれば、その機能を果たしていたものの一部と評価す

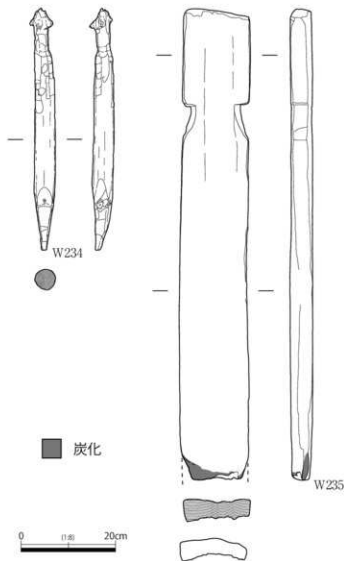


第198図 802流路出土建築部材(1)

ることも出来よう。ただし、802流路の流下する地点は、同一ルートの後続の流路によりその痕跡を大部分破壊されている状態であり、遺構としての導水施設は確認出来ていない。



第199図 802流路出土建築部材(2)



第200図 4-1a層・7-2a層出土建築部材

(6) 包含層

ア 4-1a層(第200図 写真図版141 W234)

W234は4-1a層出土の杭である。芯持材を用い、正面図下端を円錐状に加工しているが、その先の頂部は方形を呈しており、完全には尖頭化されていない。逆側である上端は、節を切除しかけているものの完全な除去には至っておらず、正面三角形の形状を見せるように、便宜的な加工によって完成へと導かれている。

イ 7-2a層(第200図 写真図版141 W235)

W235は、7-2a層出土の部材である。正面図下端部分は焼け焦げており、その延長部分を消失している。このため、元来は全長1m以上となることが確実な大型の部材で、厚みも一寸を超えることから、水平構造材等の建築部材の一種と考えられる。正面図上方には、人形における「下がり肩」に似た切り欠きの加工がある。厚みがあることを重視すれば、床材であろうか。

5 服飾具

(1) 3面

ア 8溝(第201図 写真図版141 W236)

W236は連歯下駄である。素材にはクリが用いられている。正面図両端ともに、隅丸に加工されている。前穴・後穴共に径2cm程度と、通常の孔径よりもかなり大きい。正面右側の前・後歯は、すり減ったように欠失しているが、使い込んだ末の様相のようにも思えない。台上面にも、足跡等の長期使用の痕跡は見受けられない。前歯は側面から見て、僅かに外開きに掘り出している。『木器集成図録(近畿古代篇)』(町田・上原編1985)によれば、C IVb型式に該当しようか。

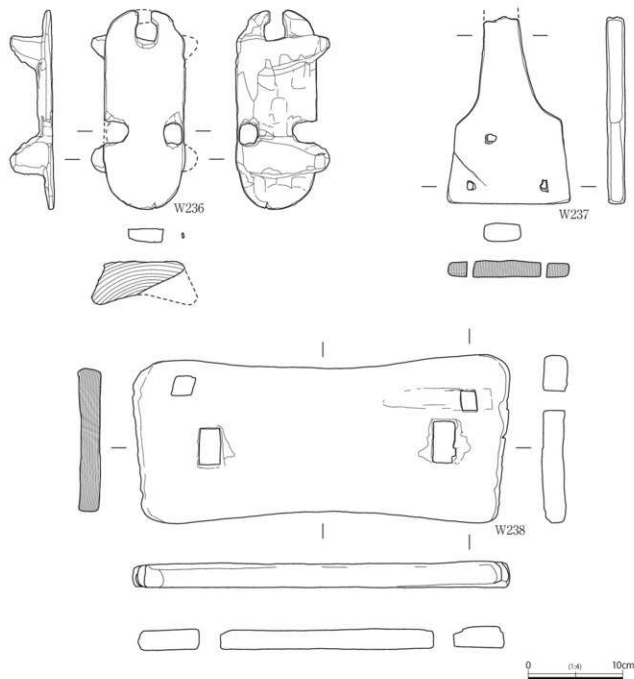
6 雑具

W237・W238は、指物腰掛の部材である。W237が脚板、W238が座板に該当する。

(1) 5面

ア 599流路(第201図 写真図版141 W237)

正面図上方で、座板と接合する上端出柄は欠失している。本来の正面形状は、両側縁がくびれ、そ



第201図 8溝出土服飾具、599流路・7-2a層出土雑具

の下が台形状を呈していた脚板と推測出来る。側面は丁寧面に取られている。正面図下方には、ややいびつな方形の孔が三箇所開いている。下二箇所は底辺に近く平行、上方の一箇所は中央からやや左端による。これらは、横棧で脚同士を補強していたことを示唆しようか。ただし、孔内には、その推論を補強する材等は残存していない。W237はスギを素材としている。

(2) 遺物包含層

ア 7-2a層(第201図 写真図版141 W238)

正面図両側面は粗い加工ながらほぼ平行関係にあるが、上下端面の中央付近が内湾する平面形を成す。柄孔は四箇所あり、上下両端から等しい距離で、両側縁から5~6cm内側に長方形の二つの孔が、

またそれらの上方に、ややいびつな平行四辺形状の孔が二つ見受けられる。このような板材は、机の天板との区別が困難であることが多々見受けられるが、本資料は孔が四箇所等しく穿たれていないことから、通常二箇所の孔に脚が付く構造である指物腰掛の座板と認識しておく。ただし、座面はほとんど凹んでおらず、腰掛としても、その利用頻度はかなり低いと考える。素材はスギである。

7 加工棒状製品

第202図には、加工もしくは使用の痕跡が見受けられる棒状材を4点示した。いずれも一端に特徴的な加工が施されているものの、特定の器種名を与えるには至っていない資料群である。今後具体的な器種が判明することを期して、ここに器種不明の加工棒状製品として掲げることとする。

(1) 4-2面

ア 15流路

(ア)15流路下層(第202図 写真図版141 W239)

W239は、上下端部を欠いている横断面四角形状の資料である。正面図上方から刃を入れて段差を作り出している。この段差が、腰や肩(頭)といった身体部分の区別を表現しているようにも見受けられる。下方は、横断面梯形に近い形になるよう表面を丁寧に面取りしている。ただし、その表面には衣服等の表現は一切施されていない。このため、立体人形の可能性を指摘するに留める。

(2) 5面

ア 550流路

(ア)550流路下層(第202図 写真図版141 W240)

W240は横断面がややいびつな方形の棒状材で、下端が鋭く尖っているうえ、その付近が炭化している。先端の形状から火きり杵とは考えにくく、串の一種、もしくは燃えさしであろうか。炭化の段階は先端の加工後であることは確かであるが、意図的な火の使用に伴う痕跡かどうかは判断し難い。

(3) 6-2面

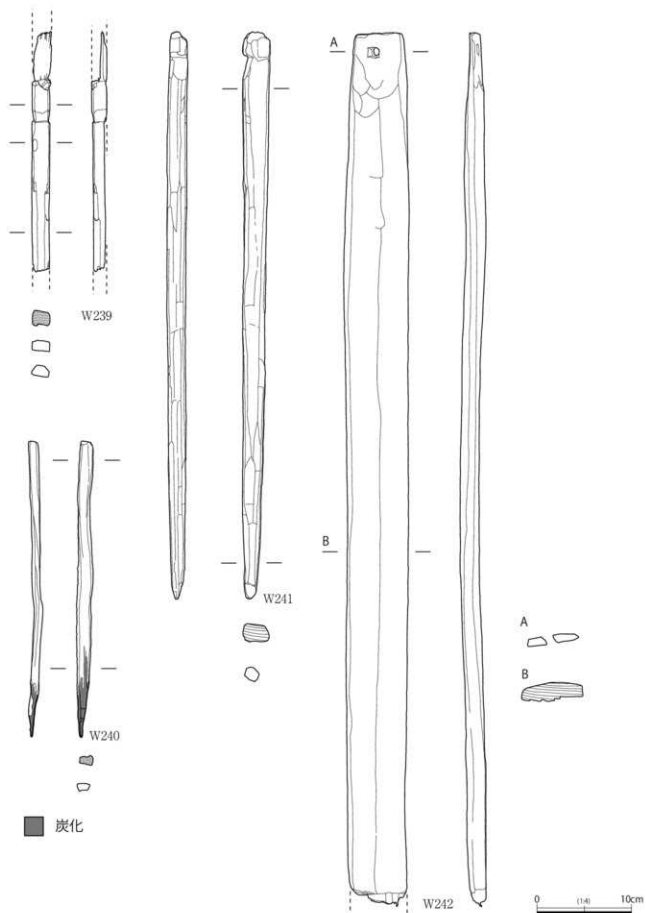
ア 802流路(第202図 写真図版141 W241)

W241は、有頭状の加工を有する棒状の材である。最大長59cmを測る。正面図下端側についても、粗いマイナスドライバー状に加工されていることから、現況で完形品と言える。上端の様相のみからは、垂木とも捉えられようが、垂木としては短過ぎると察する。ただし、元々垂木として使用した部材の一端を再度加工したため、現況のように短小化したと推し量ることも出来る。それでも最終的な転用先の具体的な器種は不明瞭であり、杭の可能性を指摘出来る程度である。

(4) 遺物包含層

ア 7-2a層(第202図 写真図版141 W242)

W242は、正面上方に特徴的な加工が観察出来る材である。表裏面上端付近は、W181に似た先端に向かって厚みを減じる加工が施されており、刃物痕も明瞭に残っている。結果的に該当箇所の厚みを半減させた後、方形の孔を設けている。その加工は大引きの仕口に通ずるものもあるが、本資料が大引として機能するには、本体また先端の加工部分ともに細過ぎるのではないかと考える。



第202図 15流路下層・550流路・802流路・7-2a層出土加工棒状製品

第5項 編み物

編み物に関連する資料は、破片も含めて5点確認している。全て15流路下層からの出土である。このうち、状態不良のため未図化の小破片2点は、それぞれ第203図に示したW243及びW244と同一資料と考えられるので、最小個体数としては3点となる。さらに、W243とW244の出土状況は、30cm程度という非常に近接した位置関係を示しているうえ(第78図参照)、それぞれ底部～底縁帯部、また体部片に該当すると推定されることから、両者は本来同一個体であった可能性もある。このエリア以外からは編み物関連資料が確認されていないことも、この推定を補佐しよう。ただし、両者は直接の接合関係を示しているわけではない。いずれの資料も遺存状態がやや不良であったため、現地にて付近の土ごと取り上げ、保存処理を施している。

(1) 4-2面

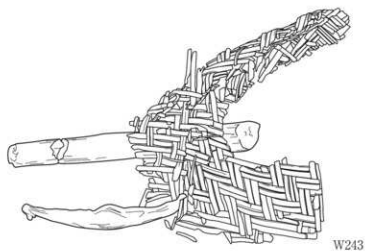
ア 15流路

(ア)15流路下層(第203図 写真図版142 W243・W244)

W243は、かごの底部～底縁帯部までの資料と考える。正面下半の底部部分には、経材2本1単位として、それに緯材2本超え2本潜り1本送りの網代編みが施されている。ヒゴは2～3mm程度であり、後段の帯部に用いられているヒゴよりも幅広である。底部の一辺は10cm程度か。底部付近には、2本の棒状の材が確認出来る。正面図上方のものは、ほぼ真っ直ぐに伸びる芯持材で、下方のものはやや遺存状態が悪い湾曲した材である。後者は底部の下に入っていないことから、かごの横に偶然位置した自然木であろう。芯持材の前者は、青谷上寺地遺跡や白江梯川遺跡で出土しているような、かご底部に接合する木製品の可能性がある。ただし、それらの特徴としては、細長い角柱状を呈し、かつ長軸の両端に挟りの加工がある(野田2005)ので、W243のような未加工の棒材もそのような性質の木製品に該当するのかどうかは不明瞭である。

正面図上部には、底部から続く帯部と考えられる部分が見られる。3本1単位として斜めに巻き付けて左捻りのもじり編みの格好をとっている。ここで用いられているヒゴは、底部に用いられたものに比べて光沢があり、また繊維が細かいことから、底部のヒゴとは異なるかもしれない。これより上方の体部の部分は残っていない。

W244は、かごの体部と考える編み物である。基本的には2本超え2本潜り1本送り左上がり、整然と編まれている。同一の編み方が広く縦横両方向に続いていくため、W244はかごの体部のみが、土圧等によって潰れた状態を表しているものと察する。帯部的な編み方との変換点も見当たらない。ただし、正面図右上方には、少なくとも2本の平行する枝が編組の下に入っており、何かしら関連性があると察する。これらは親骨の可能性もあろうが、帯部や縁仕舞自体は見つかっていないため、補強目的としての機能を積極的には言及し難い。



W243



W244



第203図 15流路下層出土編み物

第6項 金属器

金属器としては、袋状鉄斧、銅製腰帶金具、古銭、煙管等の製品があり、また鉄滓といった副産物や器種不明の銅製品等も出土している。これらの資料は、出土品の中では数量的にかなり限定的な存在であり、またその出土情報も、本来の帰属位置から遊離していると推察されるものが多い。本項では、そのような出土状況の消極的背景を除いて、特徴的な器種として取り上げるべきと判断した金属器3種(袋状鉄斧、銅製腰帶金具、古銭)を図化・報告する。

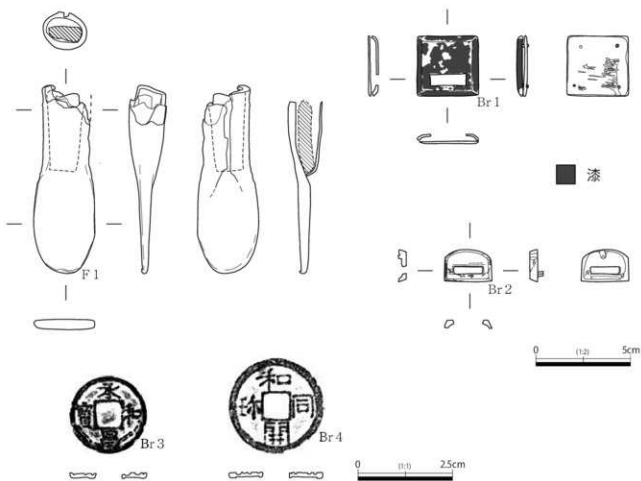
1 袋状鉄斧

(1)5面

ア 550流路(第204図 写真図版143 F1)

F1は袋状鉄斧である。袋部の右上端付近を欠いているが、全体の形状を復元することが可能な状態である。平面形状は、袋部から身部にかけて一旦僅かに窄まり、また刃部に向かって緩やかに広がるタイプで、袋部横断面は略楕円形を呈す。袋部は完全に閉じていないものの、比較的丁寧に閉じ合わせの加工を施されている。

袋部内には柄の基部が残存しており、現況では横断面方形に近い木材が観察出来るが、埋没過程において若干腐食が進行した状況を考慮する必要があるだろう。刃部の両側縁付近は、丸みを帯びる正面観を呈する。また、刃部先端は緩やかな平坦を成し、一方に向かって僅かに丸め込まれた結果、凸部が



第204図 出土金属器

形成されている。以上の状況は、使用過多による状態を示唆出来るとともに、刃の状態からは袋状鉄斧様製品の可能性もあろう。つまり、既に柄を装着していることも考慮すると、この後の段階で刃をつけることは考えにくく、よって本資料は実用品ではなく、模造品もしくは儀器としての機能を指摘し得る。出土場所が550流路であり、形代との共伴性も考慮すれば、この可能性はあると言える。

2 銅製腰帯金具

(1) 4-2面

ア 134柱穴(第204図 写真図版143 Br1)

Br1は巡方である。掘立柱建物14を構成する134柱穴内から出土した。縦3.1cm、横3.2cmと、正面形状はほぼ正方形を成す。四辺から中央に向かって約42°の角度で内側へ折り曲げ、また底辺と水平になるように加工するため、横断面・縦断面ともに断面梯形状を成す。ただし、折り曲げた角は丸みを帯びている。正面下方に横長の透かしが入る。表面(外面)には黒漆が比較的良好に残っている。表裏金具が残り、径1.1mmを測る脚鉾は4箇所認められる。上方二箇所間の距離に比して、下方のそれは僅かに長い。田中(2003)の分類に従えば、小孔、脚鉾式に該当しよう。

イ 15流路

(ア)15流路下層(第204図 写真図版143 Br2)

Br2は山形である。上方が緩やかな山なりを呈し、下部がほぼ直角に形作られる正面形状をなす。上辺の弧の描き方は、丸軛にも通ずる。ここでは、全体的な形状について、全周縁が丸みを帯びる丸軛ではなく、また全周が直線で構成される方形の巡方でもないことから、田中(前掲)の定義により山形に分類する。

前述の正面上方の形態の特徴を除けば、縦1.7cm、横2.5cmと横長の正面観である。四方より、約64°と急角度で内側(中心側)に折り返し、さらに折り曲げて上辺を作る。Br1に比してこの一連の折り曲げ加工は精微で、角も丸みを帯びていない。正面下方には、横長の透かしが入る。表面(外面)には側面を中心に黒漆が確認出来るが、その遺存状態は不良で部分的である。その一方で、塗布された漆が剥がれたことで、その前段階の成形加工の証左である細かな擦痕が、表金具の表面全体において良好に観察出来る状態にある。この擦痕は、漆の定着を促すための研磨によるものである(註1)。

表金具のみの出土で、内側には三箇所の脚鉾が確認出来る。上方一箇所に対し、透かし孔の下辺両頂点の外側に二箇所固定されている。いずれの鉾も、径1.15mmを測る。下辺近くの二箇所の鉾の先端は鍛打により平坦面を成している。田中(前掲)の分類に従えば、小孔、脚鉾式に該当しよう。

3 古銭

(1) 3面

ア 8溝(第204図 写真図版143 Br3)

Br3は、皇朝十二銭の一つである承和昌寶である。法量からすれば小様であろう。全体的に歪みが激しく、正面左側には小欠け部が二箇所見られる。正面側の周郭に比して、無紋の裏面側の周郭は摩滅が顕著である。一方で、孔郭は表裏面ともにエッジが残る。

(2) 4-1面

ア 17耕作溝群(第204図 写真図版143 Br4)

Br4は和同開珎である。全体的に遺存状態は良好である。表裏面ともに周郭、孔郭をもっており、銭文も明瞭に鋳出されている。「開」の門構えの上端が開く「新和銅」である(奈良国立文化財研究所編1975)。

4 その他

(1) 4-1面

ア 17耕作溝群(写真図版143 Br5)

17耕作溝群からは、表面に9条、その裏面に1条の陰刻圏線を施した銅製品Br5が出土している。製品の破片であろうが、部分的な出土につき、器種は特定出来ない。

第7項 ガラス製品

1 棒状製品(写真図版143 G1)

(1) 1-1a~2-2a層

G1は、棒状を呈するガラス製品の一部である。具体的な器種名は不明である。顕微鏡観察の結果、気泡が直線状を呈していることから、長軸方向に伸ばされて(作られて)いるのが理解出来る。特に資料の表層付近には、茶色い混入物が確認出来る。

蛍光X線分析を実施したところ、ガラスはカリウム鉛ガラスで、混入物は鉄と判明した。鉄分の由来としては、①溶融する際の道具から溶け落ちて付着、②ガラス製品への着色料の一部、の二通りが考えられる(註2)。

註

(1)公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 田中広明氏の御教示による。

(2)独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 降幡順子氏の御教示による。

第8項 文字資料

1 木簡関連資料

(1) 4-2面

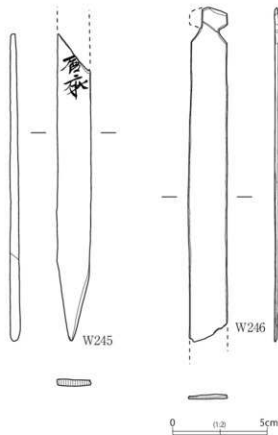
ア 15流路

(ア) 15流路下層(第205図 写真図版143 W245・W246)

1-1区においては、木簡関連資料としては、ここに掲げる2点の出土を見たのみである。

W245は墨書による2文字が確認出来る資料で、上方の文字は「香」の可能性もあるが、判然としない。上方を欠失していることから、本来はさらに文字があり、その文末相当部分のみ現存していると考えられる。なお、資料下端部分は尖頭状に加工されている。

W246については、正面上端やや下方付近の左右を切り欠くことで、その先端形状が荷札状木簡に該当すると考えるが、いずれの面からも墨痕を確認することは出来なかった。下端は欠損している。この資料については、木簡状木製品と称すべきか。



第205図 木簡関連資料

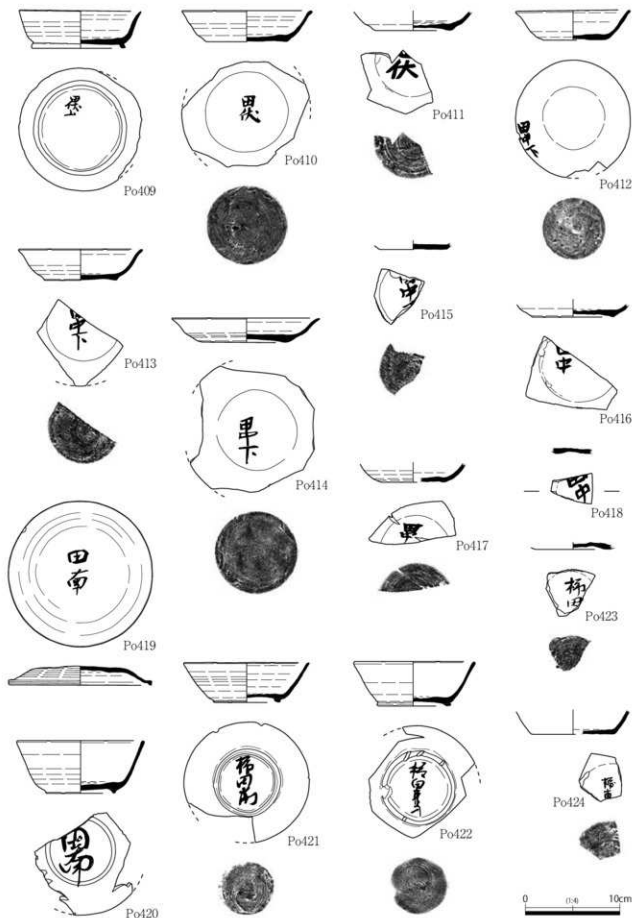
2 墨書土器(第206～第210図 写真図版144～154 Po409～Po472)

1-1区では総数135点の墨書土器が出土した。この数字は、本来同一個体であった資料も接合関係になれば1点として計上したものであり、文字として判別、釈読出来ない墨痕も含んでいる。

出土遺構別に見ると、15流路が82点と最も多く、16・17耕作溝群が5点、掘立柱建物柱穴が15点(掘立柱建物1:2点、掘立柱建物4:5点、掘立柱建物5:1点、掘立柱建物9:3点、掘立柱建物10:2点、掘立柱建物14:1点、掘立柱建物15:1点)、8溝が6点、550流路が2点、555土坑が1点となる。15流路での出土層位が確実なもので下層が53点、上層が13点である。また包含層出土資料(24点)のうち、層位が明らかなものとしては4-2a層が15点で最多となる。遺構・層位別の出土傾向は墨書土器の使用、廃棄の実相をある程度反映しているものと見ることが出来る。

15流路では多量の木製祭祀具やウシ等の動物骨が出土しており、墨書土器は単純に生活残滓とともに廃棄されたというよりも、使用から廃棄にかけて祭祀的な性格が付与されていた可能性がある。4-2a層で出土した墨書土器は小片が多く、当該層準が古代の土壌または作土層であることが影響している。一方で、掘立柱建物柱穴の柱掘方から出土したのものもあるため、本来的には柱穴掘方に伴っていたが、遺構検出で4-3b層まで掘削した結果、4-2a層として取り上げられた資料も含まれている可能性がある。

土師器に墨書したものは8点と少なく、大多数が須恵器である。器種別では須恵器坏が最多で69点、須恵器高台付坏33点、須恵器蓋22点、須恵器皿2点、須恵器高坏1点、須恵器甕3点、土師器高台付坏2点、土師器坏3点、土師器甕2点、器種不明の須恵器1点となっている。



第206図 墨書土器(1)

積読できた文字別では「田」が25点と最も多く(可能性があるものを含む、以下同様)、全て田+○の組み合わせとなる(「田中下」、「田伏上」、「田南」等)。その他の文字では「南」(「南」、「南冊」、「南美」等)、「東」(「小東」、「大東」等)、「栃」(「栃田」、「栃田□(東_o)」、「栃東」等)、「高」(「高」、「高□」等)が次ぐ。繰り返し触れているように、調査地は東大寺領高庭荘の比定地にあたり、「田」に方位を組み合わせた墨書が多数を占めることから、そうした歴史的背景が文字の内容や構成に反映されている可能性が高い。

個々の釈文や出土遺構・層位等は第39表～第43表に列記しており、本項では字形ごとに概観していく。

田+○ 第206図Po409～第207図Po433は、「田」に別の文字を組み合わせたものである。複数認められる文字の組み合わせとしては田伏、田中、田南、栃田がある。田を含む複数文字の組み合わせが推定できる一群は、前述のうちいずれかの可能性がある。

Po409は底部外面の上部に「田伏上」と書かれている。「上」の字に乱れはあるが、筆跡は細く、文字は1.2～1.5cm角と小さい。8世紀中～後半のものである。同じ「田伏」でもPo410は坏底部の中央に丁寧な筆跡で書かれている。8世紀末～9世紀前半のものである。Po412～Po418は田中またはその可能性がある一群で、下が付き「田中下」となるものもある。Po412は坏部に横位に墨書されている。Po414は転用硯か。Po413は一文字目の上半を欠くが、「田中下」の可能性が高い。Po419・Po420は「田南」で、Po419は蓋天井部に細い筆跡で、Po420は高台付坏底部に太く大きな筆跡で記されている。どちらも9世紀代に比定される。

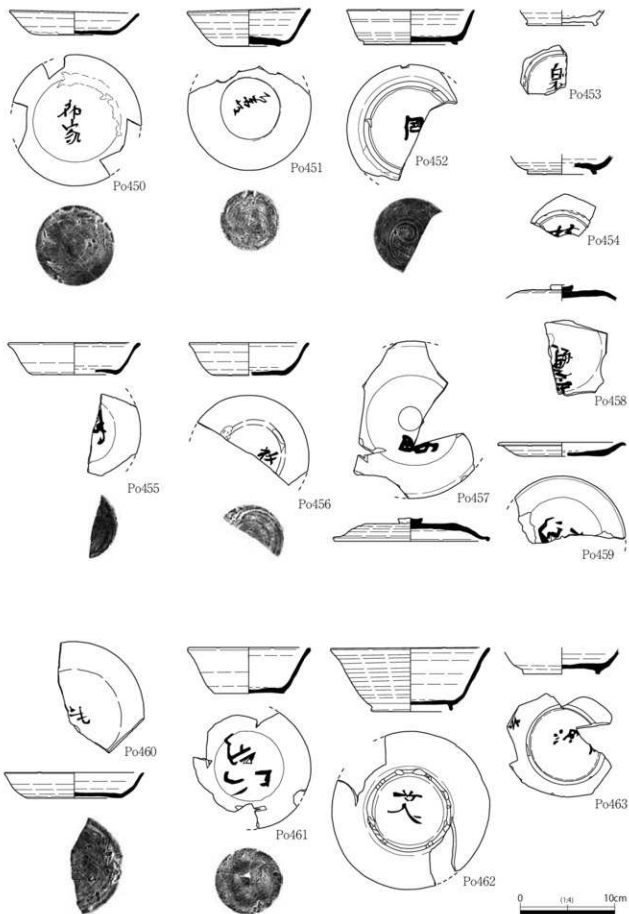
第206図Po421～Po424は栃に別の文字を組み合わせるのもので、「栃田」を主体とする。Po421・Po422は高台付坏底部外面に栃田+方位の組み合わせで墨書されており、Po421は南、Po422は東□(司_o)と続く。Po424は2文字目の下半を欠くが東と推定できる。Po421・Po424は8世紀末～9世紀前半、Po422・Po423は9世紀後半に比定される。

南 第207図Po434～Po436は田と組み合わせる以外に南を記すもので、非掲載のものを含めて5点ある。Po434は蓋天井部に細く丁寧に「南冊」と書かれている。文字の大きさは1.5cm角と小さい。8世紀中葉～後半に比定される。Po436は蓋天井部右側に太くしっかりとした文字で「南」と一字だけ書かれている。これに対し、Po435は坏底部外面に細く流麗な筆跡で大きく「南美」と記す。どちらも8世紀末～9世紀前半のものである。

東 第207図Po437～Po439は東を基軸とした墨書で、「小東」あるいは「大東」のどちらかで完結している。Po437は蓋外面右側に「大東」と書かれており、筆跡は細く大、東ともはいはい左側が小さく、右側を大きくとる。Po439は坏底部外面中央に「小東」と書かれており、東は下半を大きくはねている。どちらも8世紀末～9世紀前半の所産である。Po438は高坏坏底部内面に書かれており、墨に滲みが生じている。東の下半部をはらいではなく点で表現する特徴がある。坏部及び脚裾部は人為的に打ち欠かいて整えたようにも見え、文字自体は習書の可能性がある。9世紀代のものか。



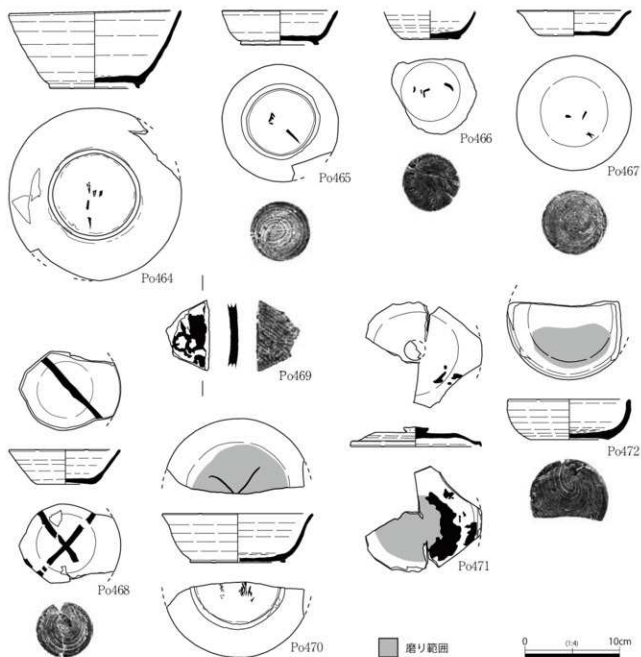
第208図 墨書土器(3)



第209図 墨書土器(4)

高 第208図Po440は坏底部外面に「高□」とあり、高の下半部以下の簡略化が顕著である。それに対し、Po441は高台付坏底部外面に「高」と一字大きく書かれており、筆跡は細く丁寧である。どちらも9世紀後半のものである。

その他 第208図Po442は皿底部中央に「路中□」とあり、3文字目は家か。Po443の底部外面にも「家」とある。これらは8世紀末～9世紀前半のものである。Po444は蓋天井部右側に「谷門」と書かれており、門構え右側部分を簡略化している。Po445は15流路下層で出土したもので、高台付坏底部外面及び内面（見込み）にどちらも「位能上」と記す。能の字は下半部左側を外に大きくはらい、右側をしっかりとねる特徴が認められる。9世紀後半の所産である。Po446は坏底部外面に「竹川



第210図 墨書土器(5)

此□〔人カ〕とあり、人名の可能性もある。Po448は坏体部下半に「□美」とある。9世紀後半のものである。Po449は須恵器甕の肩部付近に横位に少なくとも4文字認められ、□〔海カ〕□□□と見える。9世紀代のものか。

その他は墨痕、あるいは筆そろえとみられるものが多く、流路内出土資料については墨書が流失した可能性もあり釈読が困難であった。また第210図Po470～Po472等のように、墨痕に加え擦り面が確認され転用硯と考えられるものもあった。

3 文字瓦(第211図 写真図版150 Po473)

Po473は、3-3a層で出土した破片を中心に接合した文字瓦である。判読は出来なかったが、凸面には文字を陰刻したスタンプが5カ所以上施されている。



第211図 文字瓦

第9項 動物遺存体

1 15流路出土動物遺存体

平安時代の自然流路である15流路からは、大型哺乳類とヤマトシジミが出土している。なお、大型哺乳類のうち、種別が同定出来たものは全てウシであった。

(1)ウシ(写真図版155)・大型哺乳類

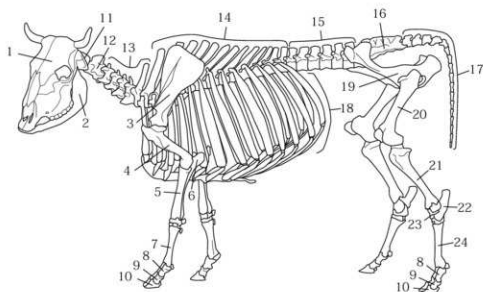
大型哺乳類の骨は、ビビアナイトを析出するなど脆弱化が進行しており、そのほとんどは土から取り上げることが出来ず、検出した状態での観察・計測を行った。これら大型哺乳類の資料総数は36点であり、部位が同定出来たものは18点、そのうち種別が同定出来たものはウシ13点であった(第3表、ウシの骨格と部位の名称は第212図参照)。また、同定出来なかった資料には、出土状況からウシの可能性が高いものも含まれている。同定にあたっては松井編(2006)や加藤(1995)等を参考とした。

資料の計測値から、出土したウシには体高が130~135cmと推定される大型の個体と、110~120cmと推定される小型の個体があることが明らかとなった(第4表)。ウシは雌雄による体格差が顕著なため、大型のものは雄、小型のものは雌と考えられる。

ウシの同定破片数は上層で4点、下層で9点であり、最少個体数は上層で同一個体の頭部から1、下層で左下顎骨から2と算定される。以下、出土状況について詳述する。

上層では、調査区北端付近の15流路西肩で、大型個体の頭部を形成していたと考えられる上・下顎遊離歯と左右下顎骨(B1~B3・B33)が出土した。この他は、種・部位不明の破片が散見されるのみであった。

下層では、小型個体の下顎骨が調査区東端北寄り(B21・B22)、東端中央付近(B30)の2箇所出土した。いずれも頭蓋骨の可能性のある骨片(B23・B31)を伴うため、本来はこの2箇所に頭部が埋



1. 頭蓋骨 2. 下顎骨 3. 肩甲骨 4. 上腕骨 5. 桡骨 6. 尺骨 7. 中手骨 8. 基節骨 9. 中節骨 10. 末節骨 11. 環椎
12. 軸椎 13. 頸椎 14. 胸椎 15. 腰椎 16. 仙骨 17. 尾椎 18. 肋骨 19. 寛骨 20. 大腿骨 21. 脛骨 22. 踵骨
23. 距骨 24. 中足骨

加藤他(1995)より作成

第212図 ウシの骨格と部位の名称

第3表 15流路出土大型哺乳類一覧

挿図番号	遺物番号	地区 T23-7d	層位	種別	部位	部分	左/右	備考・計測値(mm)
70	B1	1B-5f	上層	ウシ	遊離歯	M ² P ³ ・M ¹	左 右	エナメル質細片含む、B1~B3・B33同一個体頭部
70	B2	1B-5f	上層	ウシ	下顎骨	下顎体の一部	左	P ₃ ~M ₃ 歯列を保ち残存、M ₂ M ₁ =98
70	B3	1B-5f	上層	ウシ	下顎骨	下顎体の一部	右	M ₁ ~M ₃ 歯列を保ち残存、M ₂ M ₁ =99
-	B4	1B-6e	上層	不明	不明	骨幹	不明	長骨
-	B5	1B-6e	下層	不明	不明	骨片	不明	
72	B6	1B-6e	下層	ウシ?	肩甲骨	一部欠損	右?	
72	B7	1B-6e	下層	ウシ	尺骨	近位~骨幹	右	大型、B7~B9同一個体前肢、解剖学的位置保持
72	B8	1B-6e	下層	ウシ	腕骨	近位~骨幹	右	大型
72	B9	1B-6e	下層	ウシ	上腕骨	ほぼ完形	右	GL=322
72	B10	1B-6e	下層	不明	不明	骨幹	不明	四肢骨(上腕骨か)
73	B11	1B-6e	下層	ウシ	大腿骨	一部欠損	左	GL=341(推定値)
73	B12	1B-6e	下層	ウシ	大腿骨	遠位~骨幹	右	骨端未癒合か、小型
73	B13	1B-6e	下層	不明	不明	骨片	不明	短骨か
73	B14	1B-6e	下層	不明	不明	骨片	不明	短骨か
73	B15	1B-6e	下層	不明	寛骨?	不明	不明	
73	B16	1B-6e	下層	ウシ	脛骨	ほぼ完形	左	GL=328
73	B17	1B-6e	下層	ウシ?	大腿骨	近位~骨幹	不明	
73	B18	1B-7e	下層	不明	腕骨	ほぼ完形	不明	B18~B20同一個体前腕か
73	B19	1B-7e	下層	不明	尺骨?	ほぼ完形	不明	
73	B20	1B-7e	下層	不明	不明	骨片	不明	
73	B21	1B-6d	下層	ウシ	下顎骨	ほぼ完形	右	B21~B23同一個体頭部か
73	B22	1B-6d	下層	ウシ	下顎骨	ほぼ完形	左	前臼歯・後臼歯歯列を保ち残存、Goc-Id=349
73	B23	1B-6d	下層	ウシ?	頭蓋骨?	骨片	不明	
-	B24	1B-7d	下層	不明	不明	骨幹	不明	B24~B27同一個体後肢か
-	B25	1B-7d	下層	不明	踵骨	完形	不明	
-	B26	1B-7d	下層	不明	距骨?	不明	不明	
-	B27	1B-7d	下層	不明	中足骨?	近位?~骨幹	不明	
76	B28	1B-5e	下層	不明	頭蓋骨?	骨片	不明	
77	B29	1B-6e	下層	不明	不明	骨幹	不明	長骨
79	B30	1B-8e	下層	ウシ	下顎骨	ほぼ完形	左	小型、B30・B31同一個体頭部か
79	B31	1B-8e	下層	ウシ?	頭蓋骨?	骨片	不明	
-	B32	1B-9e	上層	不明	不明	不明	不明	
-	B33	1B-5f	上層	ウシ	遊離歯	P ₃ ・P ₄	右	大型
-	B34	1B-5f	下層	不明	不明	不明	不明	
-	B35	1B-7e	上層	ウシ?	上腕骨	骨幹	左?	
-	B36	1B-7e	上層	不明	不明	骨幹	不明	上腕骨か

第4表 15流路出土ウシの推定体高

番号	部位	左右	計測点(計測項目)	計測値(mm)	推定式	推定体高(cm)	層位
B2	下顎骨	左	M ₃ -M ₁ (後臼歯列長)	98	II	130~135	上層
B9	上腕骨	右	GL(最大長)	322	II	130~135	下層
B11	大腿骨	左	GL(最大長)	※341	I	110~115	下層
B16	脛骨	左	GL(最大長)	328	I	115~120	下層
B22	下顎骨	左	Goc-Id(全長)	349	I	110~115	下層

※は推定復元値、計測はDreisch(1976)、推定式は西中川編(1991)による

没していた可能性がある。これに加え下層では、解剖学的位置を保持した大型個体の右前肢骨(B7～B9)、部位のまとまりをもった小型個体の後肢骨(B11・B12・B16)が出土した。また、ウシと特定出来なかった四肢骨にも、部位のまとまりをもつもの(B18～B20、B24～B27)が確認された。

資料が脆弱であるため解体痕の観察は出来なかったものの、以上の出土状況から、これらは解体されたのち流路内に投棄されたものと思われる。

(2) ヤマトシジミ

15流路下層の遺物集中箇所が集積範囲が検出された。出土状況から、本来は土師器坏Po110に収められていたものと考えられる。集積範囲に他の貝類は認められなかった。周辺の汽水域で採捕され、流通していたものと思われる。

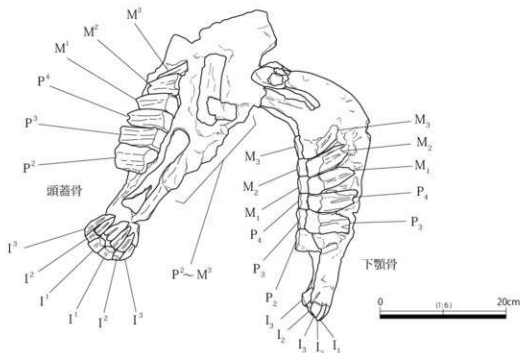
2 802流路出土動物遺存体

古墳時代中期後葉から末の自然流路である802流路から出土した動物遺存体には、同一個体のウマの頭蓋骨と下顎骨、須恵器坏蓋Po367内に残されたイガイ科あるいはイシガイ科の貝殻1点がある。

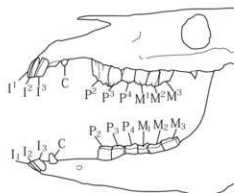
(1) ウマ頭蓋骨・下顎骨(写真図版155)

資料はビビアナイトを析出するなど脆弱化が進行しており、特に骨質部は脆弱であった。そのため、土ごと取り上げたのちクリーニングし(第213図)、観察・計測を行った。ウマの歯の名称については第214図を参照されたい。

頭蓋骨は前頭部の大部分が欠損しており、臼歯が歯列を保った状態で露出している。残存している後頭部背面には破損や解体痕が認められないため、脳髓の抽出はされなかったものと思われる。また、後頭顆付近の消失のため、頭部の切断に伴う解体痕の有無は確認出来なかった。歯はいずれも永久歯



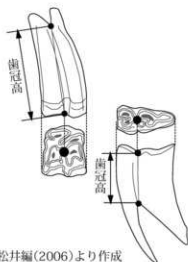
第213図 802流路出土ウマのクリーニング後状況



I¹~I³ …上顎第1~第3切歯
 C …犬歯
 P²~P⁴ …上顎第2~第4前臼歯
 M¹~M³ …上顎第1~第3後臼歯
 I₁~I₃ …下顎第1~第3切歯
 P₂~P₄ …下顎第2~第4前臼歯
 M₁~M₃ …下顎第1~第3後臼歯

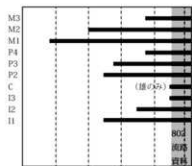
松井編(2006)より作成

第214図 ウマの歯の名称と略号



松井編(2006)より作成

第216図 ウマの歯冠高の計測



久保・松井(1999)より作成(原典Comesall1956)

第215図 ウマの歯の萌出と年齢

第5表 802流路出土ウマの歯の萌出・咬耗状況

		I1	I2	I3	C	P2	P3	P4	M1	M2	M3
上顎	左	○	○	○		○	○	○	○	○	○
	右	c	c	c		c	c	c	c	c	c
下顎	左	○	○	○		x	○	○	○	○	○
	右	c	c	c		c	c	c	c	c	c

○：萌出済、×：破損、-：未萌出
 c：エナメル質の咬耗開始

第6表 802流路出土ウマの推定体高

○計測点 □計測項目	計測値 (mm)	推定体高(cm)			
		I式	II式	III式	平均
○A-P □頭蓋最大長	455	119	122	110	117
○B-P □頭蓋底長	※422	120	123	113	119
○Cn-ld □下顎最大長	※376	120	119	113	117

※は推定復元値、推定式は林田・山内(1957)による

第7表 802流路出土ウマと3~5才馬の歯冠高

		P ²	P ³	P ⁴	M ¹	M ²	M ³	P ₂	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃
802流路 出土資料	左	49.3	61.3	68.7	64.5	69.1	65.6	-	-	69.0	66.2	73.1	62.5
	右	49.3	62.1	70.0	64.6	69.8	68.9	-	-	-	-	-	-
久保・松井 (1999)	3才	56.5	71.7	-	69.6	85.2	75.5	53.4	75.8	-	75.8	84.4	74.3
	4才	50.1	64.3	70.3	61.3	71.1	65.3	48.6	64.6	-	66.8	72.0	69.7
	5才	45.4	58.5	61.3	55.3	63.2	58.7	44.4	57.6	62.1	60.5	64.8	65.1

単位はmm、-は計測不能、3~5才馬の計測値は久保・松井(1999)による

であり、犬歯を除く全ての上顎歯が残存している。いずれの歯にも咬耗の開始が認められるため、これらが全て萌出していたことが分かる。下顎骨は土圧によって内側につぶれているものの、欠損箇所は少ない。比較的狀態がよい右側面は、表面の狀態が観察できたが解体痕は認められない。上顎と同様、歯はいずれも永久歯であり、犬歯は無く、破損している左第2前臼歯を除いた全ての下顎歯が釘植した状態で残されている。これらは全て萌出が完了しており、咬耗の開始も認められる。

以上の観察所見から、資料の歯の萌出・咬耗状況は第5表のようになる。ウマの歯の萌出と年齢の相関(第215図)から、第3切歯(I³・I₃)が萌出している当資料は4.5才以上の個体であることが分かる。また雄ではこの段階で萌出しているはずの犬歯(C)が認められないことから、この個体は雌と推定される。

資料の計測は、臼歯冠高(第216図、第7表)と、頭蓋骨・下顎骨・臼歯の各項目(第217図、第8表・第9表)について行った。なお、資料が脆弱であるため計測値に若干の誤差が生じている可能性があり、復元値は最も相関の高い方法(西中川編1991)で算出したものであることを付記しておく。頭蓋最大長(A-P)、頭蓋底長(B-P)、下顎最大長(Cn-Id)から推定される体高(第6表)は、いずれも小型馬の範疇に入るものであり、その平均から体高115~120cm程度の個体と考えられる。

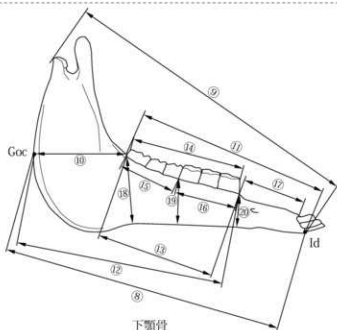
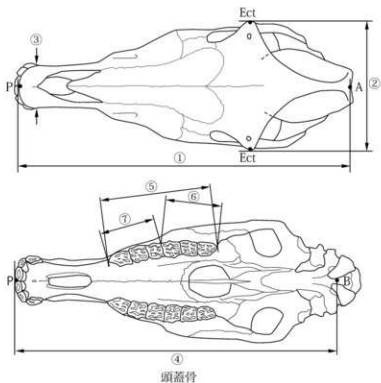
歯冠高の計測では、概ね4才馬に近い計測値が得られ、加齢による歯の咬耗が進行していない若い個体であることが確認された。以上の観察・計測結果から、当資料は5才前後の雌の小型馬であると推定される。

(2) イガイ科あるいはイシガイ科

出土状況から、調理・供膳されていたものと思われる。脆弱化が進行し右殻・左殻の区別は出来なかったが、黒褐色の殻皮と、僅かに残存する真珠光沢のある貝殻から、イガイ科あるいはイシガイ科の一種と同定された。イガイ科にはイガイ、イシガイ科にはイシガイ・ドブガイなどがある。イガイは外海に面した岩礁域、イシガイ・ドブガイは淡水の砂泥底に生息する。

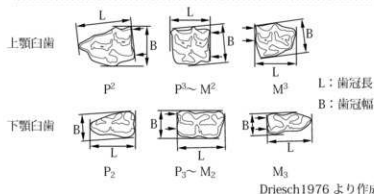
第8表 802流路出土ウマ計測値①

	○計測点 □計測項目	左/右	計測値 (mm)
①	○A-P □頭蓋最大長	-	455
②	○Ect-Ect □眼窩幅	-	※190
③	○I ¹ -I ¹ ○B-P	-	※74
④	□頭蓋底長 ①からの復元値	-	※422
⑤	○P ² -M ² □全臼歯列長	左	177
⑥	○M ¹ -M ² □後臼歯列長	左	75
⑦	○P ² -P ¹ □前臼歯列長	左	102
⑧	○Goc-ld □下顎全長	右	360
⑨	○Cn-ld □下顎最大長 ⑧からの復元値	右	※376
⑩	○Goc-M ₃	右	105
⑪	○M ₃ -ld	右	258
⑫	○Goc-P ₂	右	296
⑬	○P ₂ -M ₃ □全臼歯列長(下)	右	193
⑭	○P ₂ -M ₃ □全臼歯列長(上)	右	177
⑮	○M ₁ -M ₃ □後臼歯列長	右	84
⑯	○P ₂ -P ₄ □前臼歯列長	右	99
⑰	○I ₃ -P ₂ □歯槽間隙長	右	59
⑱	□下顎体高(M ₃ 後)	右	108
⑲	□下顎体高(M ₁ 前)	右	78
⑳	□下顎体高(P ₂ 前)	右	45



第9表 802流路出土ウマ計測値②

左	L (mm)	B (mm)	右	L (mm)	B (mm)
P ²	38.1	33.0	P ²	37.4	34.7
P ³	32.4	38.7	P ³	30.7	37.9
P ⁴	34.0	35.8	P ⁴	33.9	35.7
M ¹	26.6	36.0	M ¹	-	36.1
M ²	28.7	34.2	M ²	28.5	34.3
M ³	26.9	27.0	M ³	27.0	-
P ₂	-	-	P ₂	32.8	21.7
P ₃	29.2	-	P ₃	-	19.4
P ₄	29.8	-	P ₄	29.0	21.1
M ₁	28.6	21.7	M ₁	29.2	21.2
M ₂	23.5	-	M ₂	24.9	20.9
M ₃	31.3	16.1	M ₃	31.1	18.3



Driesch1976より作成

第217図 ウマ頭蓋骨・下顎骨・臼歯の計測箇所

第5節 遺物観察表

第10表 土器観察表(1)

探区 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (質数等)	胎土	焼成	色調	備考
117	Po1	214	1B-7c		2-1a層	青磁 碗	- △3.9	外面：施釉、高台内底粘、底部露胎 内面：体部施釉、底部露胎	密	良好	施釉/オリーブ灰色 露胎/にぶい赤褐色	
117	Po2	118-1	1B-9f		1-1a層	青磁 壺?	- △2.8	外面：施釉、裾部露胎 内面：施釉、裾部露胎	密	良好	施釉/オリーブ灰色 露胎/灰白色	
117	Po3	130	2B-1e		1-1a層	白磁 碗	△17.6 △2.9	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	灰白色	
117	Po4	177	1B-6g		(明薬)	白磁 碗	- △1.7	外面：施釉、高台内底粘、底部回転 糸切り 内面：施釉	密	良好	内外面とも灰白色	
117	Po5	359	2B-1h		3-1a層 ~3-2a 層	緑釉陶器 碗	Φ19.3 6.1	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	内外面ともオリーブ灰色	
117	Po6	302	1B-8f		3-1a層 ~3-3a 層	緑釉陶器 皿	- △1.9	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	内外面ともオリーブ灰色	
117	Po7	299-2	1B-8f		1-1a層 ~3-2a 層	瓦質土器 羽釜	- △3.2	外面：粗いナデ 内面：ハケメ	やや 密	良好	外/明青灰~黄灰色 内/青灰色	
117	Po8	195-2	1B-6e		1-1a層 ~2-2a 層	瓦質土器 椀鉢	- △4.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・節目	密	ふつう	外/灰白~灰黄色 内/灰黄色	
117	Po9	315	1B-9f		3-1a層	瓦質土器 鉢	- △4.5	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：ナデ	密	ふつう	外/黄褐色~黒褐色 内/にぶい黄橙~灰黄褐色	外面僅附着
117	Po10	296	1B-8e		3-3a層	瓦質土器 鉢	△3.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰~暗灰色 内/にぶい黄橙~灰色	外面僅附着
117	Po11	168	1B-5f		3-1a層 上面	瓦質器 子持壺	Φ4.4 △7.4	外面：口縁~体部上半回転ナデ、体 部下半ナデ、指頭圧痕 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも明青灰~暗青 灰色	
117	Po12	606	1B-7f	8溝	土師器 杯	13.0 3.6	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面：回転ナデ	密	良好	外/にぶい黄橙~橙色 内/にぶい黄褐色		
117	Po13	630-8	1B-8g	8溝	土師器 杯	14.5 4.4	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面ともにぶい橙~に ぶい黄褐色		
117	Po14	637-2	1B-8g	8溝	土師器 杯	- △3.4	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 り後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面ともにぶい黄褐色		
117	Po15	627-3	1B-6f	8溝	土師器 高台付杯	- △4.0	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰黄~橙色		
117	Po16	604	1B-8g	8溝	灰釉陶器 皿	- △1.6	外面：体部施釉、高台部露胎、底部 回転糸切り 内面：体部施釉、底部露胎	密	良好	施釉部/オリーブ灰~灰オ リーブ 露胎部/灰白色		
117	Po17	397	1B-5g		4-1a層 ~6-1a 層	灰釉器 杯	- △3.6	外面：体部回転ナデ、底部回転ナ デ後ナデ 内面：回転糸切り 内面：回転ナデ	密 やや 密	良好	内外面とも灰色	内面工具痕
118	Po18	785-3	1B-9f		4-2a層	灰釉器 杯	Φ17.3 8.9	外面：口縁部ナデ、体部ヘラナズリ 後ナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密	やや 良好	外/灰白~灰色 内/灰色	
118	Po19	815	1B-6e		4-2a層	灰釉器 杯	Φ11.4 4.8	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナ デ後ナデ	密	やや 良好	外/灰白~黄灰色 内/灰白色	
118	Po20	735-1	2B-1f		4-2a層	灰釉器 杯	Φ12.0 3.1	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナ デ後ナデ	密	良好	内外面とも灰~灰白色	
118	Po21	992	1B-7f		4-2a層	灰釉器 皿	Φ15.4 2.0	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 り後ナデ 内面：回転ナデ	密	ふつう	外/灰白色 内/灰白~灰色	
118	Po22	640	1B-5g		4-2a層	灰釉器 壺	- △3.3	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白~灰色	外面一部に漆 附着 内面一部黒染 あり
118	Po23	721-2	2B-1g		4-2a層	土師器 杯	- △3.5	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面：回転ナデ	やや 密	やや 良好	外/灰白~橙色 内/灰白~浅黄褐色	
118	Po24	758	1B-10e		4-2a層	土師器 高台付杯	- △3.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	にぶい橙色	
118	Po25	738-1	1B-9g		4-2a層	土師器 壺?	- △5.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/暗灰色 内/暗灰~黒褐色	
118	Po26	753	1B-8f		4-2a層	緑釉陶器 皿	- △2.6	外面：体部施釉、底部露胎 内面：施釉	密	良好	施釉/オリーブ灰色 露胎/浅黄褐色	風化の為胎土 の残存痕か

第11表 土器観察表(2)

押出番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
118	Po27	756	1B-9f		4-2a層	緑輪陶器 皿	- △1.6	外面：風化の高調整不明瞭 内面：輪軸?	密	やや 不良	内外面とも浅黄橙～淡橙 色	
118	Po28	671	1B-10g		4-2a層	平瓦	△7.1 2.4	凸面：タタキ 凹面：布目	密	良好	凸：明赤灰～青灰色 凹：青灰色	
118	Po29	1681-2	1B-7g	38f土坑		土師器 杯	φ11.6 3.9	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	外：黒褐～灰黄褐色 内：黒褐～浅黄色	
118	Po30	1142-2	1B-6g	16耕作溝群		灰土器 蓋	φ17.1 2.0	外面：天井部回転糸切り、体部回転 ナデ 内面：回転ナデ	密	ふつう	外：ふい黄～黒褐色 内：黄褐色～浅黄色	
118	Po31	1142-1	1B-6g	16耕作溝群		灰土器 蓋	15.3 2.0	外面：天井部回転糸切り、体部回転 ナデ 内面：回転ナデ	密	ふつう	内外面とも灰白～灰色	
118	Po32	1119-2	1B-8g	16耕作溝群		土師器 杯	φ14.0 2.8	外面：体部回転ナデ、底部ヘウ切り 内面：回転ナデ	やや 粗	やや 良好	内外面ともふい橙色	
118	Po33	811	1B-10g	17耕作溝群		灰土器 杯	φ13.8 3.5	外面：体部回転ナデ、底部回転ナ デ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナ デ	密	やや 不良	内外面とも灰白色	
119	Po34	1915	1B-7g	孤立柱建物1 22柱穴		土師器 杯	φ12.0 △3.1	外面：体部回転ナデ、底部ヘウ切り 後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外：ふい橙～橙色 内：ふい橙～ふい褐色	
119	Po35	1662-2	1B-7g	孤立柱建物1 21柱穴		灰土器 杯	φ12.7 2.6	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面：回転ナデ	密	良好	外：青灰～明青灰色 内：明青灰色	
119	Po36	1555	1B-6g	孤立柱建物5 53柱穴		灰土器 蓋	φ15.1 1.5	外面：天井部回転糸切り後ナデ、体 部回転ナデ後ナデ 内面：回転ナデ	密	やや 不良	内外面ともふい黄橙～ 灰黄褐色	
119	Po37	1807	1B-7g	孤立柱建物8 74柱穴		土師器 壺	φ22.4 △9.1	外面：口縁～肩部ナデ、胎面圧痕、 体部ハケメ後指摺圧痕 内面：口縁～肩部ハケメ後指摺圧痕、 体部ナデ	やや 粗	良好	外：灰黄褐～ふい黄橙色 内：灰黄褐色	内外面露付着
119	Po38	1289	1B-7g	孤立柱建物8 75柱穴		灰土器 皿	φ12.8 △2.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	ふつう	外：灰白～黄灰色 内：褐灰～灰白色	
119	Po39	2243	1B-10g	孤立柱建物12 109柱穴		灰土器 杯	φ14.2 △4.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	ふつう	外：灰色 内：灰白色	
119	Po40	2201	1B-10g	孤立柱建物15 138柱穴		灰土器 蓋	- △2.3	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
119	Po41	1319	2B-1h	孤立柱建物15 123柱穴		灰土器 杯	△3.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
119	Po42	2218	1B-10h	孤立柱建物5 144柱穴		緑輪陶器 小型壺	△1.4	外面：輪軸 内面：底部一部輪軸、回転ナデ	密	良好	輪軸部：オレンジ黄色 胎面部：灰色	
119	Po43	2031-2	2B-1f	孤立柱建物16 150柱穴		灰土器 高台付杯	φ13.6 4.0	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	やや 不良	外：灰～灰白色 内：灰白色	
119	Po44	1489	1B-10f	孤立柱建物17 158柱穴		灰土器 杯	φ16.4 3.1	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面：回転ナデ	密	やや 不良	外：オリーブ黒～灰白色 内：灰白～灰色	
119	Po45	2143	1B-10h	孤立柱建物21 176柱穴		灰土器 杯	φ12.1 3.2	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面：回転ナデ	密	やや 不良	内外面とも灰白～灰色	
119	Po46	1948	1B-10g	孤立柱建物23 263土坑		灰土器 高台付杯	- △1.6	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り 内面：回転ナデ後ナデ	密	ふつう	外：灰白色 内：灰白色	
119	Po47	1350	1B-10g	孤立柱建物24 203柱穴		灰土器 高台付杯	- △3.0	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	やや 良好	外：暗青灰～明青灰色 内：灰色	
119	Po48	1550	1B-10g	孤立柱建物24 203柱穴		灰土器 高台付杯	- △1.5	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り 内面：回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	外：青灰～明青灰色 内：灰白～青灰色	
119	Po49	2287	1B-9f	487柱穴		灰土器 蓋	φ14.8 3.0	外面：つまみ～天井部ナデ、体部回 転ナデ 内面：回転ナデ	密	ふつう	内外面とも灰～暗灰色	
119	Po50	2281	1B-10h	116柱穴		平瓦	△29.8 2.8	凸面：練目 凹面：布目・横脊痕	密	良好	凸：灰黄褐～灰白色 凹：灰白～ふい黄褐色	
	Po51	2020	1B-7g	孤立柱建物3 43柱穴		灰土器 壺	- △10.5	外面：タタキ 内面：呉て具痕	密	良好	外：灰色 内：灰～灰白色	写真図版のみ
	Po52	1711-03	1B-7g	孤立柱建物4 95柱穴		灰土器 壺	- △13.1	外面：タタキ 内面：呉て具痕	密	良好	内外面とも灰白色	写真図版のみ
120	Po53	0903	1-1E 2B-1e	18崖岸		土師器 杯	12.1 4.2	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面ともふい黄～黒 褐色	
120	Po54	902	2B-1e	18崖岸		土師器 杯	- △2.0	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも明黄灰～橙 色	

第12表 土器観察表(3)

押印番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
120	Po55	1428	2B-1f	18溝岸		平瓦	△11.0 2.9	外面: 縦目 内面: 赤目・橙片重	密	良好	凸/灰白～灰黄色 凹/淡黄～灰白色	
120	Po56	791 1043	1B-5f	15成路	上層	原患部 煎壺	14.4 2.7	外面: つまみ部ナデ、天井部回転糸 切り後ナデ、底部回転ナデ 内面: 天井部回転ナデ後ナデ、底部 回転ナデ	密	やや 良好	外/灰～黒色 内/灰～オリーブ黒色	
120	Po57	770-1	1B-6f	15成路	上層	原患部 高台付杯	φ12.0 2.8	外面: 体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り後ナデ 内面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ 後ナデ	やや 密	やや 良好	外/黄灰～灰色 内/菊灰～灰色	外面保存着
120	Po58	429	1B-9d	15成路	上層	原患部 高台付杯	- △2.4	外面: 体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り後ナデ 内面: 回転ナデ	やや 密	やや 良好	外/黒～暗灰色 内/黒～灰黄色	
120	Po59	1111	1B-7e	15成路	上層	原患部 高台付杯	- △4.1	外面: 体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転ナデ後ナデ 内面: 回転ナデ	密	やや 良好	外/黒褐～暗灰色 内/にぶい黄褐色	
120	Po60	422	1B-6d	15成路	上層	原患部 煎壺	12.1 2.1	外面: 体部回転ナデ、底部周縁ナデ、 底部回転糸切り 内面: 回転ナデ	密	やや 良好	外/暗灰黄～黒褐色 内/灰黄～灰色	
120	Po61	849	1B-10e	15成路	上層	原患部 煎壺	10.3 15.8	外面: 口縁～体部上半回転ヘラケズ リ後ナデ、体部下半ヘラケズ リ、底部回転糸切り 内面: 回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
120	Po62	891	1B-5e	15成路	上層	原患部 煎壺	- △8.1	外面: 体部回転ナデ、回転ヘラケズ リ、底部静止糸切り後ナデ 内面: 回転ナデ	密	やや 良好	外/灰白～灰色 内/灰色	
120	Po63	793	1B-6e	15成路	上層	原患部 煎壺	22.6 △15.0	外面: 口縁～頭部ナデ、体部タキ 内面: 口縁～頭部ナデ、体部当て具 重	密	良好	内外面とも灰色	外面面部に円 形スタンプ文 外面自然剝付 着
120	Po64	795	1B-7e	15成路	上層	黒色土器 煎壺	φ18.8 6.2	外面: 体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り後ナデ 内面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ 後ナデ	密	やや 良好	外/灰黄～灰色 内/灰～にぶい橙色	
120	Po65	911	1B-5e	15成路	上層	黒色土器 煎壺	φ13.3 △4.3	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ、ナデ	密	やや 良好	外/黒褐色 内/黒～黄灰色	
120	Po66	921	1B-6e	15成路	上層	土師器 煎壺	13.0 2.7	外面: 体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面: 回転ナデ	密	やや 良好	外/灰白～暗灰色 内/灰白～灰色	
120	Po67	747	1B-5d	15成路	上層	土師器 高台付杯	- △2.8	外面: 体部回転ナデ、高台～底部ナ デ 内面: 回転ナデ	密	良好	内外面とも浅黄褐色	
120	Po68	515	2B-1e	15成路	上層	土師器 高台付杯	- △5.1	外面: 体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り後ナデ 内面: 回転ナデ	密	良好	内外面とも浅黄褐色	
120	Po69	848-1	1B-9e	15成路	上層	土師器 高台付杯	- △3.0	外面: 体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り後ナデ 内面: 回転ナデ	密	良好	外/明灰褐～にぶい橙 色 内/にぶい黄褐色	
120	Po70	848-2	1B-9e	15成路	上層	土師器 高台付杯	- △3.1	外面: 体部回転ナデ後ナデ、高台～ 底部ナデ 内面: 回転ナデ後ナデ	密	良好	外/浅黄褐～にぶい橙 色 内/にぶい黄褐色	
120	Po71	922	1B-6e	15成路	上層	土師器 杯	12.9 5.2	外面: 体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面: 回転ナデ	密	やや 良好	外/にぶい橙～灰白色 内/灰白～にぶい橙 色	
120	Po72	879	1B-5e	15成路	上層	土師器 杯	φ12.7 4.9	外面: 体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面: 回転ナデ	やや 密	やや 良好	外/にぶい橙～灰色 内/にぶい黄橙～にぶい橙 色	
120	Po73	490	1B-5d	15成路	上層	土師器 杯	11.7 4.3	外面: 体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面: 回転ナデ	密	良好	外/菊灰～にぶい黄褐色 内/にぶい黄褐色	
120	Po74	880	1B-6e	15成路	上層	土師器 杯	- △2.2	外面: 体部回転ナデ、底部回転糸切 り 内面: 回転ナデ	密	良好	外/灰白～にぶい黄褐色 内/灰白～浅黄褐色	
120	Po75	911 967	1B-5e	15成路	上層	土師器 煎壺	17.4 △8.8	外面: ハケメ 内面: 口縁～頭部ナデ、体部ヘラケ ズリ	密 やや 瓶	やや 良好	内外面とも黄褐～にぶ い黄褐色	外面面保存着
121	Po76	2001	1B-7d	15成路	下層	原患部 煎壺	13.1 5.1	外面: 体部回転ナデ、底部回転糸切 り後ナデ 内面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ 後ナデ	密	やや 良好	外/灰色 内/黒褐～灰色	
121	Po77	2009	1B-8e	15成路	下層	原患部 煎壺	14.2 4.2	外面: 体部回転ナデ、底部回転糸切 り後ナデ 内面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ 後ナデ	密	やや 良好	外/灰～灰白色 内/暗灰～灰色	
121	Po78	2109	1B-7e	15成路	下層	原患部 煎壺	13.8 3.8	外面: 体部回転ナデ、底部周縁ナデ、 底部回転糸切り 内面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ 後ナデ	密	やや 良好	内外面とも灰白～灰色	

第13表 土器観察表(4)

押出番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
121	Po79	1621	1B-6e	15水路	下層	原患部 坏	13.7 4.0	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	外/暗灰～灰白色 内/黄灰～灰白色	
121	Po80	1219	1B-7c	15水路	下層	原患部 坏	12.2 3.7	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	内外面とも灰白～暗灰色	
121	Po81	1692	1B-6e	15水路	下層	原患部 坏	13.6 3.6	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	内外面ともオリブ黒～灰白色	
121	Po82	2175	1B-6e	15水路	下層	原患部 坏	13.2 3.4	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/黒褐～黄灰色 内/黄灰色	
121	Po83	2187	1B-6e	15水路	下層	原患部 坏	13.6 3.3	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	外/暗灰～灰色 内/暗灰～暗灰青色	
121	Po84	1246	1B-8e	15水路	下層	原患部 坏	φ12.7 3.9	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	外/灰白～黄灰色 内/灰白～灰色	内外面黒痕あり
121	Po85	1512	1B-7c	15水路	下層	原患部 坏	φ14.1 4.0	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	外/黒～灰色 内/オリブ黒～灰色	内面底部へう 記号あり
121	Po86	1029	1B-7d	15水路	下層	原患部 坏	11.3 2.8	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	良好	内外面ともオリブ黒～黄灰色	
121	Po87	1636	1B-6e	15水路	下層	原患部 坏	12.7 3.7	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	外/黄褐～黒褐色 内/暗灰黄～黒褐色	
121	Po88	1165	1B-7c	15水路	下層	原患部 坏	φ13.6 5.2	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	ふつう	外/黄灰～灰白色、灰色 内/灰白色、黄灰色	
121	Po89	1163	1B-7c	15水路	下層	原患部 坏	13.3 5.9	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	やや 良好	外/灰～オリブ黒色 内/黄灰～黒褐色	
121	Po90	882	1B-5g	15水路	下層	原患部 坏	- △2.6	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	外/暗灰～黒色 内/灰色	
121	Po91	1125-1	1B-7c	15水路	下層	原患部 坏	12.2 5.0	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	やや 良好	外/黒～灰色 内/灰～黒色	
121	Po92	1161	1B-7c	15水路	下層	原患部 黒	16.1 2.1	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	ふつう	外/黒～灰色 内/灰白～黄灰色	
121	Po93	1090	1B-6e	15水路	下層	原患部 黒	13.0 2.1	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	ふつう	外/黒～灰黄褐色 内/ふい黄～黒褐色	
121	Po94	1692	1B-6e	15水路	下層	原患部 黒	17.6 2.8	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	ふつう	外/灰白～黄灰色 内/灰黄～暗灰黄色	外面窪付着
121	Po95	2187	1B-6e	15水路	下層	原患部 差	14.6 2.8	外面：つまみ部ナデ、天开部回転糸切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：天开部～体部回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	外/黄灰～灰黄色 内/黄灰色	
122	Po96	1626	1B-7c	15水路	下層	原患部 高台付坏	14.0 4.0	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	外/暗灰～黒褐色 内/灰色	
122	Po97	2066	1B-7c	15水路	下層	原患部 高台付坏	φ13.0 4.2	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	外/灰～黒褐色 内/暗灰色	
122	Po98	2010	1B-8d	15水路	下層	原患部 高台付坏	12.1 3.9	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
122	Po99	1621	1B-6e	15水路	下層	原患部 高台付坏	φ13.1 3.4	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	やや 良好	外/暗灰～浅黄色 内/灰白～黄灰色	
122	Po100	1189	1B-7c	15水路	下層	原患部 高台付坏	14.1 5.1	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	やや 良好	内外面とも黄灰色	

第14表 土器観察表(5)

押印番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
122	Po101	1630	1B-6e	15底路	下層	瓶恵部 高台付耳	Φ14.8 5.2	外面: 体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り後ナデ 内面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ 後ナデ	密	やや 良好	外/灰-黄灰色 内/灰-暗灰色	
122	Po102	1788	1B-6e	15底路	下層	瓶恵部 高台付耳	Φ12.8 5.0	外面: 体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り後ナデ 内面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ 後ナデ	密	良好	外/紫灰-明青灰色 内/暗青灰色-青灰色	
122	Po103	1622-2	1B-7e	15底路	下層	瓶恵部 高台付耳	- △4.2	外面: 体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り後ナデ 内面: 回転ナデ	密	やや 良好	外/黒褐-灰黄色 内/灰黄-にぶい黄褐色	
122	Po104	1135	1B-7e	15底路	下層	黒色土器 瓶	Φ12.2 4.6	外面: 体部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り後ナデ 内面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ 後ナデ	密	ふつう	外/灰黄褐色、黒色 内/にぶい黄褐色	外面灰表吸着
122	Po105	983	1B-6e	15底路	下層	黒色土器 瓶	Φ15.0 △6.3	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	密	やや 良好	外/黒色 内/黒褐色	外面灰表吸着
122	Po106	1621	1B-6e	15底路	下層	土師器 杯	13.9 3.5	外面: 体部回転ナデ後ミガキ、底部 ヘラケズリ後ナデ 内面: 回転ナデ後ミガキ	密	良好	外/明褐-黒色 内/褐-にぶい赤褐色	内外面赤彩
122	Po107	2062	1B-5e	15底路	下層	土師器 杯	14.8 3.5	外面: 体部回転ナデ後ミガキ、底部 ヘラケズリ後ナデ 内面: 回転ナデ後ミガキ	密	良好	外/にぶい赤褐-黒褐色 内/暗赤褐-にぶい赤褐色	内外面赤彩
122	Po108	1788	1B-6e	15底路	下層	土師器 杯	13.0 3.5	外面: 回転ナデ後ミガキ、底部ヘラ ケズリ後ナデ 内面: 回転ナデ後ミガキ	密	良好	外/黒-にぶい赤褐色 内/暗赤褐-黒褐色	内外面赤彩 外面灰表吸着
122	Po109	2007	1B-6e	15底路	下層	土師器 杯	13.8 3.1	外面: 体部回転ナデ、底部ヘラケズ リ後ナデ 内面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ 後ナデ	密	良好	外/暗赤褐-黒褐色 内/赤褐-にぶい赤褐色	
122	Po110	1691	1B-6e	15底路	下層	土師器 杯	12.7 3.3	外面: 体部回転ナデ、底部ヘラ切り 内面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ 後ナデ	密	良好	外/橙-にぶい黄褐色 内/橙-褐色	ヤマトシジミ を収容か
122	Po111	2172	1B-6e	15底路	下層	土師器 杯	12.5 3.3	外面: 体部回転ナデ、底部ヘラ切り 内面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ 後ナデ	密	良好	内外面とも赤褐-明褐色	内外面赤彩
122	Po112	2173	1B-6e	15底路	下層	土師器 杯	14.3 3.1	外面: 体部回転ナデ、底部ヘラ切り 後ナデ 内面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ -指痕圧痕	密	良好	外/橙-にぶい橙色 内/赤褐-にぶい橙色	内外面赤彩
122	Po113	2059	1B-6e	15底路	下層	土師器 杯	13.6 2.9	外面: 体部回転ナデ、底部ヘラ切り 後ナデ? -指痕圧痕 内面: 回転ナデ	密	良好	外/橙-にぶい橙色 内/明赤褐-橙色	
122	Po114	1173	1B-7e	15底路	下層	土師器 杯	Φ11.6 4.7	外面: 体部回転ナデ、底部回転ナデ、 底部回転糸切り 内面: 回転ナデ	密	良好	内外面ともにぶい黄褐色	
122	Po115	1005	1B-6e	15底路	下層	土師器 皿	12.7 1.9	外面: 体部回転ナデ後ナデ、底部周 縁ナデ、底部回転糸切り 内面: 回転ナデ	密	やや 良好	外/灰-灰黄色 内/灰-黄灰色	
123	Po116	923	1B-6e	15底路	下層	瓶恵部 広口壺	Φ15.6 △15.6	外面: 口縁部ナデ、頸部以下回転ナ デ、肩部平行沈線 内面: 回転ナデ	密	やや 良好	外/暗灰-灰色 内/青灰色	
123	Po117	465	1B-3f	15底路	下層	瓶恵部 壺	- △15.0	外面: 体部上半回転ナデ、体部下 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/黄灰-灰白色	
123	Po118	1627	1B-7e	15底路	下層	瓶恵部 広口壺	- △24.4	外面: 頸部-体部回転ナデ、高台部 ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面: 回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/褐色	
123	Po119	1692	1B-6e	15底路	下層	瓶恵部 壺	- △15.2	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
123	Po120	1096	1B-6e	15底路	下層	瓶恵部 短頸壺	Φ8.4 15.3	外面: 口縁-肩部回転ナデ、体部回 転ヘラケズリ、底部回転糸切 り後ナデ 内面: 口縁-体部回転ナデ、底部ナ デ	密	やや 良好	外/黄灰-灰褐色 内/黄褐色	内面黒褐色の 付着物あり
123	Po121	1648	1B-7e	15底路	下層	瓶恵部 短頸壺	- △6.1	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	密	良好	外/黒褐色-灰赤色 内/灰赤-赤灰色	
123	Po122	1622	1B-7e	15底路	下層	瓶恵部 壺	Φ21.8 △9.4	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
123	Po123	1003	1B-5e	15底路	下層	瓶恵部 壺	- △17.3	外面: 体部タタキ 内面: 当て具痕(車輪文)	密	良好	外/灰-暗灰色 内/灰色	
124	Po124	1251	1B-7e	15底路	下層	土師器 甕	Φ27.6 △20.7	外面: 口-頸部ナデ-指痕圧痕、体 部ハケム 内面: 口縁部ハケム、頸部以下ヘラ ケズリ後ナデ	やや 密	良好	外/にぶい黄褐-褐色 内/灰黄褐-黒褐色	外面全体に煤 付着
124	Po125	2178	1B-6e	15底路	下層	土師器 甕	24.1 △16.1	外面: 口縁部ハケム後ナデ、頸部以 下ハケム 内面: 口縁部ハケム後ナデ、頸部以 下ヘラケズリ	密	良好	内外面とも明黄褐-にぶ い黄褐色	内外面煤付着

第15表 土器観察表(6)

採出 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
124	Po126	1646	1B-6c	15底路	下層	土師器 甕	Φ21.1 △22.0	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁-頸部ナデ、指頭圧痕、 体部ヘラズリ後一部ナデ	密	良好	内外面ともにぶい橙～に ぶい褐色	外面全体・ 内面に備付着
124	Po127	1994	1B-6c	15底路	下層	土師器 甕	25.5 △25.2	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラズ リ後一部指頭圧痕・ナデ	やや 密	良好	外/灰黄褐色～ぶい黄褐色 内/ぶい黄褐色～灰黄褐色	
124	Po128	1998	1B-6c	15底路	下層	土師器 甕	31.9 29.3	外面：口縁部ハケメ後ナデ、頸部以 下ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部上 半ハケメ、体部下半ヘラズ リ後ナデ	やや 密	やや 良好	外/ぶい黄褐色～褐色 内/ぶい黄褐色～灰黄褐色	外面全体・ 内面に備付着
124	Po129	2059	1B-6c	15底路	下層	土師器 甕	Φ27.2 △23.3	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁-体部上半ナデ・指頭圧 痕、体部下ハケメ・指頭圧痕	密	良好	内外面ともにぶい黄褐色～ 灰黄褐色	外面全体に備 付着
124	Po130	2115	1B-7c	15底路	下層	土師器 甕	25.0 28.9	外面：口縁-頸部ナデ、体部以下ハケ ズリ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ、底部ナデ	やや 密	良好	外/浅黄褐色～ぶい黄褐色 内/ぶい橙～黒褐色	内外面備付着
125	Po131	1591	1B-6c	15底路	下層	土師器 甕	18.4 △21.0	外面：ハケメ 内面：口縁部ハケメ、胴-体部上半 ヘラズリ、体部下ナデ	やや 密	やや 良好	内外面とも黒褐色～灰黄褐色 内/黒褐色	外面全体に備 付着
125	Po132	1044	1B-8d	15底路	下層	土師器 甕	Φ29.9 △17.4	外面：口縁-頸部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ	やや 密	良好	外/黒色 内/黒褐色	外面全体に備 付着
125	Po133	1137	1B-8c	15底路	下層	土師器 甕	15.6 15.1	外面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ後ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ後ナデ、一部ハケメ残る	やや 密	良好	外/褐色～黒褐色 内/ぶい黄褐色～黒褐色	外面全体に備 付着
125	Po134	472	1B-5c	15底路	下層	土師器 甕	16.9 △17.3	外面：ナデ、一部ハケメ残る 内面：口縁部ナデ、頸部以下指頭圧 痕後ヘラズリ	密	良好	内外面とも灰黄褐色～黒色 内/黒褐色	内外面備付着
125	Po135	2298	1B-5c	15底路	下層	土師器 甕	Φ16.9 △15.7	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 後ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ・ナデ	やや 密	良好	外/ぶい橙～ぶい黄褐色 内/ぶい橙～灰黄褐色	内外面備付着
125	Po136	2066	1B-7c	15底路	下層	土師器 甕	Φ15.4 △13.3	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ヘ ラズリ後ナデ	やや 密	良好	外/黒褐色～黒色 内/黒褐色	外面全体に備 付着
125	Po137	1648	1B-7c	15底路	下層	土師器 甕	Φ24.4 △15.0	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ	やや 密	良好	外/ぶい橙～ぶい褐色 内/ぶい橙～褐色	内面備付着
125	Po138	1000	1B-5c	15底路	下層	土師器 甕	Φ22.0 △17.5	外面：ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ・ハケメ、頸部以 下ヘラズリ	やや 密	やや 良好	外/灰黄褐色～褐色 内/ぶい黄褐色	内外面備付着
126	Po139	2387	1B-6c	15底路	下層	製土土器 甕	Φ16.8 △7.6	外面：指頭圧痕、風化の為調整不明 瞭 内面：細かい布目	やや 密	ふつう	外/淡赤褐色～ぶい褐色 内/ぶい橙～ぶい褐色	
126	Po140	1206	1B-7c	15底路	下層	製土土器 甕	Φ14.2 △8.4	外面：指頭圧痕・ナデ 内面：布目	やや 密	ふつう	外/ぶい橙～ぶい黄褐色 内/褐色～ぶい褐色	
126	Po141	1174	1B-6c	15底路	下層	製土土器 甕	Φ15.0 △6.0	外面：指頭圧痕・ナデ 内面：風化の為調整不明瞭	やや 密	ふつう	内外面ともにぶい橙～に ぶい黄褐色	
126	Po142	1621	1B-6c	15底路	下層	製土土器 甕	Φ18.3 △3.5	外面：ナデ 内面：ナデ	やや 密	ふつう	外/ぶい黄褐色～褐色 内/褐色～ぶい褐色	
126	Po143	1622	1B-7c	15底路	下層	製土土器 甕	- △5.4	外面：風化の為調整不明瞭 内面：細かい布目	やや 密	ふつう	外/ぶい橙～灰褐色 内/ぶい橙～褐色	
127	Po144	2285	1B-7g	4-3b層 ～6-2a 層	湧き土器 甕	Φ15.0 △16.8	外面：口縁部平洗痕、頸部以下ハケ メ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 後ナデ	密	良好	外/ぶい黄褐色～ぶい褐色 内/ぶい黄褐色～浅黄褐色	外面備付着	
127	Po145	2461-1	1B-6f	4-3b層 ～6-2a 層	土師器 甕	Φ15.6 △14.1	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ、一部ナデ	やや 密	やや 良好	外/ぶい橙～褐色 内/ぶい橙～ぶい褐色	外面頸部2箇所 に凹形スタ ンプ文・羽状 文残存	
127	Po146	373	1B-8h	6-1a層	厚底器 坏身	Φ10.8 4.0	外面：口縁-体部上半回転ナデ、体 部下半-底部回転ヘラズリ 内面：回転ナデ	密	良好	外/明黄褐色～青灰色 内/青灰色		
127	Po147	2426	1B-6f	4-3b層 ～7-1a 層	厚底器 坏身	12.8 4.1	外面：口縁-体部回転ナデ、底部ヘ ラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	ふつう	外/灰赤～青灰色 内/灰赤～ぶい赤褐色		
127	Po148	2460-4	1B-8g	4-3b層 ～6-2a 層 有蓋高坏	厚底器 坏身	Φ13.0 △11.1	外面：坏部上半回転ナデ・波状文、 坏部下半回転ヘラズリ、脚 部カキ目 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	内外面自然焼 付着	
127	Po149	2473-1	1B-8f	4-3b層 ～6-2a 層 有蓋高坏	厚底器 坏身	9.1 8.3	外面：坏部上半回転ナデ・坏部下半 回転ヘラズリ、脚部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	頸部長方形の 透孔3方向	
127	Po150	2458-4	1B-6g	4-3b層 ～6-2a 層 無蓋高坏	厚底器 坏身	Φ15.9 △4.6	外面：坏部上半回転ナデ・波状文、 坏部下半回転ヘラズリ 内面：回転ナデ	密	良好	外/青灰～暗青灰色 内/灰色		

第16表 土器観察表(7)

採出 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
128	Po151	2940	2B-1e	500流路	下層	土師器 壺	21.2 △16.9	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、肩部以下ヘラ ケズリ	密	やや 良好	外/黒灰～淡褐色 内/にぶい黄褐色～にぶい褐色	外面保存着
128	Po152	2516	1B-5f	500流路	上層	土師器 壺	Φ25.0 △15.5	外面：口縁部ナデ・底部圧痕、肩部 以下ハケメ 内面：口縁部ハケメ、肩部以下ヘラ ケズリ後ナデ	やや 密	やや 良好	外/黒～黒褐色 内/灰黄褐～にぶい黄褐色	外面全体に保存 着
128	Po153	3608	1B-6f	500流路	下層	土師器 壺	14.9 △10.4	外面：口縁～肩部ナデ、体部タタキ 後ナデ・底部圧痕 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外/にぶい橙～にぶい黄褐色 内/橙～にぶい黄褐色	
128	Po154	3832	1B-6f	500流路	上層	土師器 小型丸底 壺	8.0 9.7	外面：口縁部ナデ、肩部以下ハケメ 後ナデ 内面：口縁～肩部ナデ、体部ヘラケ ズリ、底部底部圧痕	密	良好	外/にぶい黄褐色 内/にぶい黄褐色～にぶい褐色	外面底部ヘラ 記号カ
128	Po155	3649-1	1B-10e	500流路	下層	土師器 鉢?	Φ9.3 △7.1	外面：口縁～肩部タタキ後ナデ、体 部タタキ後ハケメ ヘラケズリ 内面：ヘラケズリ	密	良好	外/灰白色 内/灰白～黄褐色	
128	Po156	2097-1	1B-5f	500流路	下層	土師器 鉢?	Φ9.5 6.2	外面：口縁～体部ナデ、底部ヘラケ ズリ 内面：口縁～体部ナデ、底部ヘラケ ズリ	密	良好	外/灰黄～黄灰色 内/黄灰色	
128	Po157	2581-2	1B-6e	500流路	上層	土師器 鉢?	8.5 7.9	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 後ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケ ズリ後ナデ	密	良好	内外面とも灰白～浅黄色	外面黒斑あり
128	Po158	2120	1B-5g	500流路		土師器 ミニチュ ア土器	7.3 6.5	外面：口縁部ナデ、肩部以下ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケ ズリ後ナデ・底部圧痕	密	良好	外/灰白～浅黄褐色 内/橙～橙色	内面工具痕
128	Po159	2892-3	1B-6e	500流路	上層	土師器 ミニチュ ア土器	8.0 4.6	外面：口縁部ナデ、底部圧痕、体部 ～底部ヘラケズリ 内面：ヘラケズリ	密	良好	外/橙～にぶい黄褐色 内/橙	
128	Po160	994	1B-5d	500流路	上層	土師器 皿	Φ23.6 △4.1	外面：ミガキ 内面：ミガキ	やや 密	良好	外/橙～にぶい黄褐色 内/橙色	内外面赤色 塗彩
129	Po161	3609	1B-7e	500流路	下層	灰患部 壺	13.4 4.2	外面：天井部ヘラ切り後ナデ、天井 部回縁回転ヘラケズリ、体部 回転ナデ・平行沈線 内面：回転ナデ後ナデ	密	やや 良好	外/灰白～灰色 内/灰白～灰色	
129	Po162	3608	1B-6f	500流路	下層	灰患部 壺	10.3 3.4	外面：天井部ヘラ切り、体部上半回 転ヘラケズリ、体部下半回転 ナデ 内面：回転ナデ	やや 密	良好	外/青灰～暗オリーブ灰色 内/灰～青灰色	
129	Po163	3633	1B-8e	500流路	上層	灰患部 壺	12.1 4.0	外面：天井部ヘラ切り、体部上半回 転ヘラケズリ、体部下半回転 ナデ 内面：天井部回転ナデ後ナデ、体部 回転ナデ	密	やや 良好	外/灰白～灰色 内/灰白色	外面天井部 ヘラ記号
129	Po164	2510	1B-6f	500流路	上層	灰患部 壺	10.4 3.5	外面：天井部ヘラ切り、体部上半回転 ヘラケズリ、体部下半回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/青灰～灰色 内/青灰～明青灰色	
129	Po165	2512	1B-6f	500流路	上層	灰患部 壺	9.9 3.7	外面：天井部ヘラ切り、体部上半回 転ヘラケズリ、体部下半回転 ナデ 内面：天井部回転ナデ後ナデ、体部 回転ナデ	密	ふつう	外/灰～灰白色 内/灰白色	
129	Po166	2097-2	1B-5f	500流路	下層	灰患部 壺	9.6 3.5	外面：天井部ヘラ切り、体部上半回 転ヘラケズリ、体部下半回転 ナデ 内面：天井部回転ナデ後ナデ、体部 回転ナデ	密	良好	外/明褐色～緑灰色 内/灰色	
129	Po167	1138	1B-8e	500流路		灰患部 壺	Φ17.3 3.8	外面：つまみ～天井部ナデ、体部回 転ナデ 内面：天井部回転ナデ後ナデ、体部 回転ナデ	密	やや 不良	内外面とも灰白色	
129	Po168	2097-3	1B-5f	500流路	下層	灰患部 坏身	Φ8.6 2.7	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
129	Po169	537	2B-1e	500流路		灰患部 無蓋高坏	Φ15.2 9.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/青灰～灰色 内/灰～灰白色	脚部切り込み 状の透かし 2箇所あり
129	Po170	2454-1	1B-6d	500流路		灰患部 無蓋高坏	- △8.2	外面：回転ナデ 内面：坏部回転ナデ後ナデ、脚部回 転ナデ	密	やや 良好	外/黒～黒色 内/灰白～暗灰色	
129	Po171	2063	1B-6d	500流路		灰患部 壺	20.8 △10.6	外面：口縁～肩部ナデ、体部タタキ 内面：口縁～肩部ナデ、体部外側具 痕	密	良好	外/黒褐～黄灰色 内/青灰色	外面自然熱 付着
129	Po172	3350	1B-6f	500流路	下層	灰患部 提籠	- △17.8	外面：肩部回転ナデ、体部カキメ・ 回転ナデ 内面：肩部回転ナデ・指頭圧痕、体 部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
129	Po173	2762	1B-9e	500流路	下層	灰患部 提籠	Φ7.7 22.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	内外面自然熱 付着、外面塗 体付着

第17表 土器観察表(8)

検出番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
129	Po174	2392-2	1B-6c	530流路	上層	灰忠器 平瓶	Φ6.7 13.3	外面：口縁～頸部回転ナデ、体～底部 カケム 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰～暗灰色 内/灰色	外面自然釉付着
129	Po175	2511	1B-6f	530流路	上層	灰忠器 平瓶	Φ7.8 Φ6.7	外面：口縁部回転ナデ、体部カケム 内面：回転ナデ	密	良好	外/明青灰～暗灰色 内/青灰～暗灰色	
129	Po176	2454-2	1B-6d	530流路		灰忠器 壺	Φ7.5 11.4	外面：口縁～体部上半回転ナデ、肩部 沈線、体部下半ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	外面自然釉付着
130	Po177	2540	1B-8g	580土器		土師器 壺	15.7 29.2	外面：口縁～頸部ナデ、体部ハケム 内面：口縁～頸部ナデ、指頭圧痕、 体部ヘラケズリ、底部指頭圧痕	密	やや 良好	外/浅黄橙～褐色 内/浅黄橙～灰白色	
130	Po178	2634	1B-8f	605土器群		土師器 壺	16.6 26.2	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケム 内面：口縁～頸部ハケム後ナデ、体 部～底部指頭圧痕・ヘラケズリ	密	良好	外/浅黄橙～濃い黄褐色 内/灰黄～灰白色	外面僅付着
130	Po179	2738-2	1B-8g	606土器群		土師器 壺	11.1 14.1	外面：口縁部ナデ、体部ハケム後ナ デ 内面：口縁部ナデ、頸部ヘラケズリ、 体部～底部ナデ、指頭圧痕	密	良好	外/灰白～黒褐色 内/灰白色	外面黒塗あり
130	Po180	2723	1B-8g	606土器群		土師器 小型丸底 壺	8.1 △8.3	外面：口縁～体部上半ナデ、体部下 半ハケム 内面：口縁部ナデ、体部指頭圧痕	密	良好	外/灰黄～黄灰色 内/濃い黄橙～褐色	外面黒塗あり
130	Po181	2738-1	1B-8g	606土器群		土師器 壺	12.5 6.1	外面：ナデ 内面：体部ナデ・底部指頭圧痕	密	やや 不良	外/橙色 内/浅黄色	外面全体、 内面一部赤塗
130	Po182	2624	1B-6g	596土坑		灰忠器 無蓋高坏	Φ14.3 △5.7	外面：環部回転ナデ・波状文、環部 下部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	外/青灰色 内/青灰～灰色	
130	Po183	2623-3	1B-6g	596土坑		灰忠器 壺	39.9 △12.8	外面：口縁部回転ナデ・波状文、頸 部指頭圧痕 内面：口縁部回転ナデ、頸部指頭圧 痕	密	良好	外/暗灰～灰色・明青灰色 内/明青灰～暗青灰色	
131	Po184	2768	1B-6f		7-1a層	土師器 内筒形土 器	11.6 △47.5	外面：ハケム 内面：ハケム、後一部指頭圧痕	やや 密	やや 良好	外/灰黄～暗黄褐色 内/灰黄褐色	外面黒塗あり
131	Po185	2852	1B-6f		7-1a層	土師器 内筒形土 器	- △29.8	外面：体部ハケム、頸部ナデ 内面：ハケム、後一部指頭圧痕	やや 密	やや 良好	外/灰黄～黄灰色 内/灰黄褐色	内外面黒塗 あり
131	Po186	2856-3	1B-8f		7-1a層	土師器 壺	17.4 △17.5	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケム 後一部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ヘラケ ズリ後ナデ・指頭圧痕	密	良好	外/灰白～橙色 内/灰白～濃い橙色	外面僅付着
131	Po187	517	1B-9f		7-1a層	土師器 壺	14.1 25.5	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケム 内面：口縁部ハケム後ナデ、頸部ナ デ・指頭圧痕、体～底部ヘラケ ズリ	やや 密	良好	外/濃い黄橙～淡褐色 内/浅黄橙～濃い橙色	外面僅付着
131	Po188	518	1B-9f		7-1a層	土師器 小型丸底 壺	8.4 8.9	外面：口縁～肩部ナデ、体部～底部 ハケム 内面：口縁～頸部ナデ、体部指頭圧 痕後ヘラケズリ、底部指頭圧 痕	密	良好	外/濃い橙色～赤褐色 内/濃い橙～褐色	体部下手に穿 孔(内側から) 外面一部黒塗 あり
131	Po189	2865-7	1B-8g		7-2a層	土師器 小型丸底 壺	Φ10.2 11.2	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケム 内面：口縁部ナデ、頸部以下指頭圧 痕後ヘラケズリ	やや 密	良好	外/濃い橙～灰褐色 内/濃い橙～灰白色	
131	Po190	2865-6	1B-8-g		7-2a層	土師器 小型丸底 壺	8.1 8.5	外面：口縁～頸部ナデ、体部～底部 ハケム 内面：口縁～頸部ナデ、体部上半指 頭圧痕、体部下半ヘラケズリ	密	良好	外/灰白～濃い黄褐色 内/濃い黄褐色	
131	Po191	3647	1B-6f		7-2a層	土師器 壺	Φ10.6 9.9	外面：タタキ後ナデ 内面：ナデ	密	ふつう	外/灰白～灰黄色 内/灰黄～濃い黄褐色	外面黒塗あり
131	Po192	2828-12	1B-8g		7-2a層	灰忠器 坏身	Φ11.8 △4.3	外面：口縁～頸部回転ナデ、底部回 転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
131	Po193	2419	1B-10b		7-1a層 ～8-3b 層	洗生土器 壺	Φ16.6 △8.5	外面：口縁部平行沈線、頸部ナデ、 体部ハケム 内面：口縁～頸部ナデ、体部ヘラケ ズリ	密	良好	外/濃い橙～褐色 内/濃い橙～濃い黄橙 色	
131	Po194	2416	1B-7g		7-3b層 ～8-3b 層	洗生土器 壺	Φ11.8 12.4	外面：口縁～頸部ナデ、頸部刺突文、 体部ハケム後一部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ	密	良好	外/灰白～浅黄褐色 内/濃い黄褐色	
131	Po195	2408-2	1B-5g		7-3b層 ～8-1a 層	洗生土器 舞台	Φ17.7 △6.2	外面：口縁部縦門線文、受部ヘラミ ガキ 内面：ヘラミガキ・ヘラケズリ	密	良好	外/濃い黄褐色 内/浅黄～濃い黄褐色	
131	Po196	2417-2	1B-8h		7-3b層 ～8-3b 層	土師器 壺	Φ26.8 △26.2	外面：口縁～頸部ナデ、肩部刺突文、 体部ハケム後一部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ヘラケ ズリ後ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰白色(～黒褐色)	内面黒塗あり
132	Po197	3347	1B-6f	彫次建物1 791整穴	船床	土師器 壺	13.7 △10.4	外面：口縁～頸部ナデ、肩部平行沈 線・刺突文、体部ハケム 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ	密	良好	外/浅黄橙～濃い橙色 内/濃い橙色	外面僅付着

第18表 土器観察表(9)

採回 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
132	Po198	3212	1B-6g	竪穴建物1 790竪穴	上層	土師器 罌	14.4 24.0	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁～肩部ナデ、指頭圧痕、 体部ヘラケズリ、底部指頭圧 痕	密	良好	外/黒灰色 内/灰～褐色～灰黒色	内外面僅付着
132	Po199	3348	1B-6f	竪穴建物1 790竪穴	貼床	土師器 罌	14.9 △11.0	外面：口縁～肩部ナデ、肩部斜交文、 体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケ ズリ	密	良好	外/にぶい黄褐色 内/にぶい橙～にぶい黄褐色	外面僅付着
132	Po200	3276	1B-6g	竪穴建物1 790竪穴	床面直 上	土師器 小型丸底 罌	9.3 10.7	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 後ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケ ズリ、指頭圧痕	密	ふつう	内外面ともにぶい橙色	
132	Po201	3275	1B-6g	竪穴建物1 790竪穴	上層	土師器 高杯	Φ17.6 △5.4	外面：ミガキ 内面：ミガキ	密	良好	外/淡赤褐色 内/橙～淡赤褐色	
132	Po202	3617	1B-5g	竪穴建物1 790竪穴	貼床	土師器 低脚杯	15.6 4.9	外面：杯部ハケメ後ミガキ、脚部ナ デ 内面：ナデ	密	やや 良好	外/浅黄褐色～淡褐色 内/浅黄褐色	
132	Po203	3309-1	1B-6g	竪穴建物1 790竪穴	上層	土師器 罌	18.2 △28.6	外面：口縁～肩部ハケメ後ナデ、体部 ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部ハケメ後ナ デ、体部ヘラケズリ	密	良好	外/にぶい黄褐色～灰黄色 内/灰黄～黒褐色	外面僅付着、 黒斑あり
132	Po204	3262	1B-6g	815土坑		土師器 罌	- △19.8	外面：肩部ナデ、体部ハケメ 内面：肩部ナデ、指頭圧痕、体部ヘ ラケズリ	やや 密	やや 良好	内外面とも灰黄褐色	外面黒斑あり
133	Po205	3379	1B-6f	830土坑		土師器 罌	13.4 △8.3	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁～肩部ナデ、体部ヘラケ ズリ	密	良好	外/灰白～黒褐色 内/灰白～にぶい黄褐色	
133	Po206	3378	1B-6g	830土坑		土師器 高杯	17.9 △5.2	外面：ミガキ、下部ハケメ 内面：ミガキ	密	やや 良好	外/浅黄褐色～にぶい橙色～ 灰黄色 内/橙色～灰色	内外面赤彩
133	Po207	3657-2	1B-6f	830土坑		土師器 高杯	- △8.0	外面：ナデ、上部にハケメ残る 内面：ヘラケズリ、ハケメ、指頭圧 痕	密	良好	外/にぶい橙色～灰白～に ぶい黄褐色 内/にぶい橙色～にぶい黄 褐色～灰黄褐色	内外面赤彩
134	Po208	3277-1	1B-5g	竪穴建物2 830土坑	土師器 罌	18.1 △11.4	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁～肩部ナデ、体部指頭圧 痕、ヘラケズリ	密	良好	外/にぶい橙～黄灰色 内/灰白～にぶい橙色	口縁部・肩部 に焼成後穿孔	
134	Po209	3208-4	1B-5g	竪穴建物2 790竪穴	下層	土師器 罌	Φ14.8 △12.8	外面：口縁部ナデ、肩部以下ハケメ 後一部ナデ、指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、肩部指頭圧痕、 体部ヘラケズリ	密	良好	内外面とも橙色	外面僅付着
134	Po210	3208-3	1B-5g	竪穴建物2 790竪穴	下層	土師器 罌	Φ13.6 △13.5	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁～肩部ナデ、体部ヘラケ ズリ	密	ふつう	外/灰黄～灰白色 内/灰白～にぶい黄褐色	外面僅付着
134	Po211	3201	1B-5g	竪穴建物2 790竪穴	下層	土師器 罌	Φ14.0 △10.7	外面：口縁～肩部タキ後ナデ、体 部タキ後ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、指頭圧 痕、肩部以下ヘラケズリ	密	良好	外/暗褐色～にぶい褐色 内/橙色	外面僅付着
134	Po212	3206	1B-5g	竪穴建物2 790竪穴	下層	土師器 罌	Φ18.0 △14.7	外面：口縁部タキ後ナデ、肩部以 下ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、肩部以 下ヘラケズリ	密	良好	外/にぶい黄褐色～橙色 内/橙色	外面黒斑あり
134	Po213	3491-7	1B-5g	竪穴建物2 790竪穴	上層	土師器 小型器台	11.4 △9.3	外面：ミガキ 内面：交部ミガキ、脚部工具による ナデ	密	良好	内外面ともにぶい橙～橙 色	内径透孔1ヶ 所遺存
134	Po214	3208-2	1B-5g	竪穴建物2 790竪穴	下層	土師器 小型器台	9.0 △3.8	外面：ミガキ、ナデ 内面：ミガキ	密	良好	外/明赤褐色 内/橙～明赤色	
134	Po215	3491-1	1B-5g	竪穴建物2 790竪穴	上層	土師器 低脚杯	Φ13.4 5.6	外面：杯部上半ミガキ、杯部下半以 下ナデ 内面：杯部ハケメ後ミガキ、脚部ナ デ	密	良好	外/浅黄褐色～灰白色 内/浅黄褐色	内面脚部にヘ ラ記号あり
134	Po216	3000	1B-5g	竪穴建物2 790竪穴	下層	土師器 高杯	Φ15.8 △5.4	外面：ハケメ後ナデ 内面：ミガキ	密	やや 良好	内外面ともにぶい橙色	
134	Po217	3208-2	1B-5g	竪穴建物2 790竪穴	上層	土師器 器台	Φ17.4 △6.7	外面：ナデ 内面：交部ミガキ、ナデ、脚部ヘラ ケズリ	密	良好	外/浅黄褐色～橙色 内/橙色	
134	Po218	3491-4	1B-5g	竪穴建物2 790竪穴	土師器 器台	23.4 △8.0	外面：ナデ後ミガキ 内面：交部ミガキ、脚部ケズリ	密	良好	内外面とも灰白～明黄褐 色		
134	Po219	3277	1B-5g	竪穴建物2 820土坑	土師器 瓶形土器	9.7 34.7	外面：口縁部ミガキ、体部ハケメ 後一部ナデ、指頭圧痕 内面：ヘラケズリ、後一部ナデ	やや 密	良好	外/橙～黒灰色 内/橙～にぶい橙	内面僅付着	
135	Po220	3266	1B-5g	794土坑	土師器 罌	14.8 △14.5	外面：口縁～肩部タキ後ナデ、体 部ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、肩部指 頭圧痕、体部ヘラケズリ	密	良好	外/にぶい黄褐色～浅黄褐色 内/にぶい黄褐色	外面黒斑あり	
135	Po221	3272	1B-5g	794土坑	土師器 瓶形土器	- △55.5	外面：尖部付近ナデ、体部ハケメ、 肩部ナデ、把手部指頭圧痕 内面：体部ヘラケズリ後一部ナデ、 指頭圧痕、裾部付近にハケメ 残る	やや 密	良好	外/浅黄褐色～淡黄色 内/灰黄褐色～黒灰色	内面僅付着 内面からの穿 孔箇所	

第19表 土器観察表(10)

採回 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
136	Po222	3264	1B-5g	794土坑		土師器 甕形土器	22.0 73.0	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ、取 部ナデ、把手指頭圧重。 内面：ヘラケズリ後一部指頭圧重、 口縁部ハケメ残る	やや 密	良好	外/浅黄橙～深い黄橙色 内/深い黄橙～深い橙	大型品
137	Po223	3106	1B-9g	610溝	上層	土師器 甕	φ22.2 φ28.0	外面：口縁一部部ナデ、一部ハケメ残 る、体部一部ハケメ 内面：口縁一部部ナデ、体部一部ハ ケズリ後ナデ、一部指頭圧重	密	良好	外/浅黄橙～灰白色 内/灰白色	
137	Po224	3191	1B-8f	610溝	上層	土師器 甕	19.6 △29.8	外面：口縁一部部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ	密	良好	内外面とも灰白～深い 黄橙色	外面黒斑あり
137	Po225	3108	1B-9g	610溝	上層	土師器 甕	14.0 17.9	外面：口縁一部部ナデ、体部一部 ハケメ 内面：口縁一部部ナデ、体部ヘラケ ズリ、底部指頭圧重	やや 密	良好	外/深い黄橙～灰黄褐色 内/深い黄橙～灰褐色	
137	Po226	2903	1B-8f	610溝	上層	土師器 直口甕	φ8.0 14.8	外面：口縁一部部ナデ、頸部ミ ガキ、体部下半一部ハケメ 内面：口縁一部部ナデ、指頭圧 重、体部下半一部ハケメ 指頭圧重	密	良好	外/明赤褐～深い褐色 内/浅黄橙色	外面赤帯 内面保付着
137	Po227	2899	1B-8g	610溝	上層	土師器 甕	23.6 34.9	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ	やや 密	良好	外/深い橙～浅黄褐色 内/灰白～淡褐色	外面保付着 内外面黒斑あり
137	Po228	3083	1B-9b	610溝	上層	土師器 甕	13.9 △17.7	外面：口縁一部部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁一部部ナデ、体部ヘラケ ズリ、体部下半指頭圧重	密	やや 密	内外面とも深い黄橙～ 灰黄褐色	外面保付着
137	Po229	2895	1B-8f	610溝	上層	土師器 甕	23.0 32.9	外面：口縁一部部ナデ、体部ハケメ 底部ナデ 内面：口縁一部部ナデ、指頭圧重、 体部一部ヘラケズリ一部指 頭圧重	やや 密	良好	外/浅黄橙～深い橙 内/浅黄橙～褐色	外面黒斑あり
137	Po230	3043-13	1B-9g	610溝	上層	土師器 甕	φ24.2 △14.8	外面：口縁一部部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁一部部ナデ、体部ヘラケ ズリ	密	良好	外/灰色～浅黄褐色 内/灰白色	外面黒斑あり
138	Po231	3086-10	1B-9g	610溝	上層	土師器 甕	14.7 △26.0	外面：口縁一部部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁一部部ナデ、指頭圧重、 体部ヘラケズリ	密	良好	外/深い黄橙～黒褐色 内/浅黄橙～黒褐色	外面全体に保 付着
138	Po232	3165	1B-8e	610溝	上層	土師器 甕	14.2 △16.0	外面：口縁一部部ナデ、肩部何欠文 体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ後ナデ	密	良好	外/深い黄褐色 内/深い黄橙～褐色	外面全体に保 付着
138	Po233	2890	1B-8g	610溝	上層	土師器 甕	14.4 18.8	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ、 底部ナデ 内面：口縁部一部部ナデ、指頭圧重、 体部一部ヘラケズリ	密	良好	外/灰白～灰褐色、赤色 内/浅黄褐色、赤色	内外面僅かに 赤彩残る
138	Po234	3177	1B-9f	610溝	上層	土師器 甕	φ13.6 △21.3	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ後ナデ、指頭圧重	やや 密	良好	外/深い黄褐色 内/深い黄橙～灰黄褐色	外面全体に保 付着
138	Po235	3170	1B-8f	610溝	上層	土師器 甕	φ15.0 △20.2	外面：口縁一部部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁一部部ナデ、指頭圧重、 体部ヘラケズリ	密	良好	外/深い黄橙～褐色 内/深い黄橙～褐色	外面保付着 外面黒斑あり
138	Po236	2900	1B-8f	610溝	上層	土師器 甕	φ14.3 △23.8	外面：口縁一部部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁一部部ナデ、体部上半指 頭圧重、体部下半ヘラケズリ 後ナデ、指頭圧重	やや 密	良好	外/淡橙～深い黄褐色 内/深い橙～灰白色	
138	Po237	2880	1B-8g	610溝	上層	土師器 甕	11.6 16.5	外面：口縁一部部ナデ、体部一部 ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ	密	良好	灰白～暗灰黄色	外面黒斑あり
138	Po238	3114	1B-9b	610溝	上層	土師器 甕	12.0 20.2	外面：ハケメ後一部ナデ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、頸部以 下ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外/浅黄～黒褐色 内/浅黄橙～黒褐色	外面保付着
138	Po239	2891	1B-8g	610溝	上層	土師器 甕	12.0 19.0	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部一部ハケメ後ナデ、 体部一部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外/灰白～褐色 内/灰黄～黄褐色	外面保付着
138	Po240	2892	1B-8g	610溝	上層	土師器 甕	11.3 12.9	外面：口縁一部部ナデ、体部一部 ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ	やや 密	良好	内外面とも灰白～黒褐色	
138	Po241	2912	1B-8g	610溝	上層	土師器 高坏	φ17.7 11.5	外面：坏部ナデ、坏・脚部の境にハ ケメ、ミガキ、脚部ナデ 内面：坏部ミガキ、脚部ヘラケズ リ、ハケメナデ	密	良好	外/淡赤橙～褐色 内/淡赤橙～褐色、灰白色	外面全体、 内面坏部赤帯
138	Po242	3102	1B-9g	610溝	上層	土師器 高坏	16.1 11.9	外面：坏部ナデ下部にハケメ残る、 脚部ハケメナデ 内面：坏部ハケメ後ミガキ、脚部し ぼり目、ヘラケズリ、ハケメ	密	良好	外/橙～深い橙 内/浅赤橙～深い橙、 深い黄褐色	外面全体、 内面坏部赤帯
138	Po243	2905	1B-8f	610溝	上層	土師器 高坏	φ22.2 φ14.2	外面：坏部上半ナデ、坏部下半ハケ メ、脚部ナデ、ハケメ 内面：坏部ハケメ後ミガキ、脚部し ぼり目、ナデ、指頭圧重、ハケメ	やや 密	良好	外/褐色 内/褐色、深い褐色	外面全体、 内面坏部赤帯

第20表 土器観察表(11)

標記番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
138	Po244	2963-1	1B-9h	610溝	上層	土師器 高杯	18.0 13.3	外面：塚部ハケメ・指頸圧痕、脚部ハケメ後ナデ 内面：塚部ナデ後ミヤキ、脚部しばり目・ハケメ・指頸圧痕	やや 良好	密	外/にぶい橙～橙色 内/にぶい橙～橙色・灰白 色	内外面赤彩
139	Po245	3164-1	1B-8e	610溝	上層	土師器 小型丸底壺	φ9.2 φ10.4	外面：口縁～体部上半ナデ後ミヤキ、 体部下半～底部ハケメ後ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、指頸圧痕、 体部～底部ヘラケズリ	密	良好	外/明赤褐色～淡赤褐色 内/明赤褐色～淡褐色・灰白 色	外面全体、 内面口縁～ 頸部赤彩
139	Po246	3110	1B-9g	610溝	上層	土師器 小型丸底壺	7.8 9.3	外面：口縁～体部上半ナデ、体部下 半～底部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下指頸圧 痕一部ヘラケズリ	密	良好	外/にぶい黄褐色 内/にぶい黄褐色～褐色	外面黒斑あり
139	Po247	3195	1B-9e	610溝	上層	土師器 小型丸底壺	φ7.7 9.6	外面：口縁～頸部ナデ、体部～底部 ハケメ後ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ヘラケ ズリ、底部ナデ	密	良好	外/にぶい黄褐色～明黄褐色 内/にぶい黄褐色～黄褐色	外面僅付着
139	Po248	3103	1B-9g	610溝	上層	土師器 小型丸底壺	7.1 9.3	外面：口縁～頸部ナデ、体部～底部 ハケメ後ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、体部上半ヘ ラケズリ、体部下半～底部指 頸圧痕・ナデ	密	良好	外/にぶい黄褐色～灰黄褐色 内/にぶい黄褐色～褐色	
139	Po249	2961-2	1B-8h	610溝	上層	土師器 小型丸底壺	8.0 9.4	外面：口縁～頸部ナデ、体部～底部 ハケメ後ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、指頸圧痕、 体部～底部ヘラケズリ	密	良好	外/淡褐色～橙色 内/橙色	
139	Po250	2884	1B-8g	610溝	上層	土師器 脚付埴	12.5 9.0	外面：端部ナデ、脚部指頸圧痕・ナ デ 内面：端部ナデ・指頸圧痕、脚部指 頸圧痕	密	良好	外/明赤褐色 内/灰白～淡黄褐色、明赤褐 色	外面全体、 内面一部赤彩
139	Po251	2881	1B-8g	610溝	上層	土師器 埴	13.4 8.4	外面：体部ナデ、底部ハケメ後ナデ 内面：ナデ・指頸圧痕	密	良好	外/灰白色 内/にぶい黄褐色～灰白色	外面黒斑あり
139	Po252	3115	1B-9h	610溝	上層	土師器 埴	10.5 5.8	外面：ナデ・指頸圧痕 内面：ナデ・指頸圧痕	密	良好	外/淡褐色 内/灰白～明黄褐色	
139	Po253	2883	1B-8g	610溝	上層	土師器 埴	12.8 6.3	外面：ナデ・指頸圧痕 内面：ナデ・指頸圧痕	密	良好	外/橙褐色 内/淡黄褐色～にぶい黄褐色	外面全体、 内面一部赤彩
139	Po254	2885-2	1B-8g	610溝	上層	土師器 埴	12.6 6.1	外面：ナデ・指頸圧痕 内面：ナデ・指頸圧痕	密	良好	外/橙～にぶい橙褐色 内/淡黄褐色～にぶい黄褐色	外面全体、 内面一部赤彩
139	Po255	3174	1B-8f	610溝	上層	土師器 鉢?	12.0 6.1	外面：ハケメ後ナデ 内面：ナデ後指頸圧痕	密	良好	外/にぶい黄褐色～橙褐色 内/灰白～白色	
139	Po256	2885-1	1B-8g	610溝	上層	土師器 ミニチュア土器	3.9 4.3	外面：ナデ・指頸圧痕 内面：ナデ・指頸圧痕	やや 密	良好	外/灰白～褐色 内/褐色～にぶい黄褐色	
139	Po257	2888	1B-8g	610溝	上層	土師器 ミニチュア土器	3.7 4.2	外面：ナデ・指頸圧痕 内面：ナデ・指頸圧痕	密	良好	外/外面とも灰白色・にぶ い黄褐色	外面黒斑あり
139	Po258	2882	1B-8g	610溝	上層	土師器 ミニチュア土器	3.2 3.6	外面：ナデ・指頸圧痕 内面：指頸圧痕	やや 密	良好	内外面とも灰黄～黄灰色	
139	Po259	2889	1B-8g	610溝	上層	土師器 ミニチュア土器	3.6 4.9	外面：ナデ・指頸圧痕 内面：ナデ・指頸圧痕	やや 密	良好	内外面とも灰黄～黄灰色	
139	Po260	2887	1B-8g	610溝	上層	土師器 ミニチュア土器	3.4 4.3	外面：ナデ・指頸圧痕 内面：ナデ・指頸圧痕	やや 密	良好	内外面とも灰黄～黄灰色	
139	Po261	2893	1B-8g	610溝	上層	土師器 ミニチュア土器	6.8 5.5	外面：ナデ・指頸圧痕 内面：ナデ・指頸圧痕	やや 密	良好	内外面とも灰黄～黄灰色	
139	Po262	3176	1B-8f	610溝	上層	須恵器 有蓋高杯	10.6 8.5	外面：杯部回転ナデ下指頸圧痕ヘラケ ズリ、脚部回転ナデ・カキ目 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰褐色	内形透孔3方 向
140	Po263	3253	1B-8g	610溝	下層	土師器 壺	18.5 △31.5	外面：口縁～頸部ナデ、肩部何宛文、 体部～底部ハケメ 内面：口縁～頸部ナデ、指頸圧痕、 体部～底部ヘラケズリ後一部 ナデ	密	良好	外/灰白～淡褐色 内/灰白～淡黄褐色	外面僅付着
140	Po264	3521-5	1B-9f	610溝	下層	土師器 壺	22.6 △10.9	外面：ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ヘラケ ズリ・ナデ	密	やや 良好	内外面とも灰白色	内外面黒斑 あり
140	Po265	3078	1B-9e	610溝	下層	土師器 壺	25.4 △9.4	外面：ナデ、頸部沈線文 内面：ナデ	密	良好	外/灰白～褐色 内/にぶい橙褐色～褐色	内外面僅付着
140	Po266	3222	1B-8g	610溝	下層	土師器 壺	14.4 △23.1	外面：口縁～頸部ナデ、肩部何宛文、 体部ハケメ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ヘラケ ズリ	密	良好	内外面とも灰白色	外面黒斑あり
140	Po267	3223	1B-8g	610溝	下層	土師器 壺	φ14.9 △23.2	外面：口縁～頸部ナデ、肩部平行沈 線・何宛文、体部タタキ後ハ ケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ・指頸圧痕	密	良好	外/灰白色 内/淡黄褐色	外面僅付着

第21表 土器観察表(12)

採回番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
140	Pc268	3227-1	1B-8g	600溝	下層	土師器 葉	13.6 22.6	外面：口縁～胴部ナデ、体部～底部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部以下ヘラケズリ後ナデ、底部指頭圧痕	密	やや良好	外/灰白～灰黄褐色 内/灰白～明褐色	外面僅付着 外面黒痕あり
140	Pc269	3521-8	1B-9f	600溝	下層	土師器 葉	14.0 △17.6	外面：口縁端部沈線、口縁ナデ、胴部以下ハケメ、肩部刻文 内面：口縁～胴部ナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	外/浅黄褐色 内/浅黄褐色～深い橙褐色	外面全体・内面一部僅付着
140	Pc270	3520-3	1B-9f	600溝	下層	土師器 葉	Φ14.2 △29.3	外面：口縁～胴部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁～胴部ナデ、体部ヘラケズリ後一部指頭圧痕	密	良好	外/灰白～深い橙褐色 内/橙～浅黄褐色	外面僅付着
140	Pc271	3167	1B-8e	600溝	下層	土師器 葉	15.2 △8.8	外面：口縁～胴部ナデ、体部ハケメ、肩部成状文、 内面：口縁～胴部ナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外/深い黄褐色～浅黄褐色 内/橙～浅黄褐色	外面全体に僅付着
140	Pc272	3247	1B-8g	600溝	下層	土師器 葉	11.9 13.9	外面：口縁～体部上半ナデ、体部下半～底部ハケメ後ナデ 内面：口縁～胴部ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ、底部指頭圧痕	密	良好	外/浅黄褐色～淡橙褐色 内/浅黄褐色～橙褐色	外面僅付着
141	Pc273	3162	1B-9e	600溝	下層	土師器 葉	13.8 24.0	外面：口縁ナデ、胴部以下ハケメ 内面：口縁部ナデ、胴部以下ヘラケズリ後ナデ、体部下半～底部指頭圧痕	やや密	良好	外/灰白～褐色 内/深い黄褐色～灰褐色	外面全体に僅付着
141	Pc274	3086-9	1B-9g	600溝	下層	土師器 葉	15.3 △14.3	外面：口縁～胴部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁～胴部ナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	外/深い黄褐色～灰黄褐色 内/深い褐～灰黄褐色	外面全体に僅付着 外面肩部ヘラ記号
141	Pc275	3520-7	1B-9f	600溝	下層	土師器 器台	17.8 △8.4	外面：ナデ 内面：受部ヘラケズリ後ミガキ・ナデ、脚部ヘラケズリ	密	良好	外/浅黄褐色 内/浅黄褐色～深い黄褐色	
141	Pc276	3521-6	1B-9f	600溝	下層	土師器 器台	Φ16.8 9.6	外面：ナデ 内面：受部ミガキ、脚部ヘラケズリ・ナデ	密	良好	内外面とも淡橙～橙褐色	
141	Pc277	3234	1B-8g	600溝	下層	土師器 器台	16.5 9.2	外面：ナデ 内面：受部ミガキ、脚部ヘラケズリ	密	良好	外/橙～浅黄褐色 内/淡橙～浅黄褐色	
141	Pc278	3228	1B-8g	600溝	下層	土師器 器台	11.4 6.3	外面：ミガキ・ナデ 内面：受部ミガキ、脚部ヘラケズリ	密	良好	外/灰白～橙褐色 内/灰白～深い橙褐色	
141	Pc279	3525-3	1B-8e	600溝	下層	土師器 小型器台	8.0 △3.7	外面：ナデ・ハケメ、一部ミガキ 内面：ナデ・ヘラケズリ	やや密	良好	内外面とも橙～深い橙褐色	
141	Pc280	3245-2	1B-8g	600溝	下層	土師器 小型器台	- △7.6	外面：受部ヘラケズリ、脚部ハケメ後ミガキ 内面：受部ミガキ、脚部ヘラケズリ・ハケメ後ナデ	密	やや良好	外/灰白～明褐色 内/灰白色	外面黒痕あり 内形透孔3方向・2ヶ所通存
141	Pc281	3521-7	1B-9f	600溝	下層	土師器 小型器台	11.5 9.9	外面：受部ナデ、脚部ミガキ一部ハケメ残心 内面：受部ミガキ、受部表面沈線、脚部ヘラケズリ	やや密	良好	内外面とも橙～浅黄褐色	内形透孔1方向
141	Pc282	3521-9	1B-9f	600溝	下層	土師器 小型器台	Φ9.7 △8.0	外面：ミガキ 内面：口縁部ミガキ、受部ミガキ・ナデ、脚部ヘラケズリ・ハケメ	密	良好	外/淡橙褐色 内/淡橙～橙褐色	内形透孔3方向
141	Pc283	3489	1B-9e	600溝	下層	土師器 小型丸底土器	15.3 6.2	外面：ヘラケズリ後ナデ 内面：体部ハケメ後ミガキ、底部ナデ	密	良好	外/深い橙～橙褐色 内/橙褐色・明褐色	
141	Pc284	3242-1	1B-8g	600溝	下層	土師器 小型丸底土器	11.3 7.2	外面：体部ハケメ後ナデ・指頭圧痕、底部ハケメ 内面：口縁～体部ナデ、指頭圧痕、底部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外/明褐色～深い黄褐色 内/浅黄褐色～深い黄褐色	
141	Pc285	3163	1B-9f	600溝	下層	土師器 小型丸底土器	8.6 10.0	外面：口縁部ナデ、胴部以下ハケメ後ナデ 内面：口縁～胴部ナデ、体部～底部ヘラケズリ後指頭圧痕	密	良好	外/橙褐色 内/灰白～深い黄褐色・橙褐色	外面全体、内面一部赤帯
141	Pc286	3161-2	1B-9e	600溝	下層	土師器 小型丸底土器	8.6 10.0	外面：口縁部ナデ、胴部以下ハケメ後ナデ 内面：口縁～胴部ナデ、指頭圧痕、体部～底部ヘラケズリ後ナデ	密	やや良好	外/橙褐色 内/灰白色、明褐色	外面全体、内面一部赤帯 外面僅付着 外面底部ヘラ記号
141	Pc287	3560-2	1B-9f	600溝	下層	土師器 小型丸底土器	7.6 8.8	外面：口縁～体部上半ナデ一部ハケメ残心、体部下半～底部ハケメ 内面：口縁～胴部ナデ、体部～底部ヘラケズリ	やや密	良好	外/淡橙～橙褐色 内/灰白～橙褐色	
141	Pc288	3236	1B-8g	600溝	下層	土師器 小型丸底土器	8.6 8.6	外面：口縁部ナデ、胴部以下ハケメ後一部ナデ、指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、胴部以下ヘラケズリ後指頭圧痕・ナデ	密	良好	外/深い黄褐色～灰黄褐色 内/黒褐～灰黄褐色	内外面僅付着 外面黒痕あり
141	Pc289	3168	1B-9e	600溝	下層	土師器 高坏	Φ15.4 11.9	外面：坏部ナデ、坏部下部～脚部上部ヘラケズリ、脚部ナデ・ミガキ 内面：坏部ミガキ、脚部しぼり目、ヘラケズリ、ハケメ	やや密	良好	内外面とも橙～深い橙褐色	内形透孔3方向

第22表 土器観察表(13)

押印番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
141	Pc290	3536-1	1B-8e	610溝	下層	土師器 高杯	φ15.8 △11.1	外面: 塚部ナデ・ミガキ、脚部ハケ メ・ミガキ 内面: 塚部ミガキ、脚部しほり目ナ デ	やや 密	良好	外/灰白～橙色 内/浅黄橙～橙色、灰白色	外面黒灰あり
141	Pc291	3171-2	1B-9f	610溝	下層	土師器 高杯	17.4 △5.5	外面: 塚部ハケメ後ナデ、下部ミガ キ、指頭圧痕 内面: ハケメ後ミガキ	密	良好	外/橙～赤褐色、にぶい黄 褐色 内/橙～赤褐色	
141	Pc292	3239	1B-8g	610溝	下層	土師器 高杯	15.9 △5.7	外面: ミガキ 内面: ミガキ	やや 密	良好	内外面とも橙色	
141	Pc293	3248-1	1B-8g	610溝	下層	土師器 高杯	14.6 △5.1	外面: ナデ・ミガキ下部にハケメ残 る 内面: ナデ後ミガキ、	密	良好	外/灰白～浅黄褐色 内/灰白～橙色	
141	Pc294	3530	1B-9f	610溝	下層	土師器 高杯	12.4 △6.1	外面: ハケメ後ミガキ 内面: ハケメ後ミガキ	密	良好	内外面とも灰白～にぶい 黄褐色	内外面僅付着 内外面黒灰あり
141	Pc295	3520 3521	1B-9f	610溝	下層	土師器 高杯	- △5.2	外面: ハケメ後ミガキ、ナデ 内面: しほり目・ヘラケズリ・ハケ メ	やや 良好	良好	外/浅黄橙～赤褐色 内/浅黄褐色	内形透孔3方 向
141	Pc296	3232	1B-8g	610溝	下層	土師器 低脚杯	14.4 5.3	外面: 塚部ハケメ後ミガキ、脚部ナ デ 内面: 塚部ハケメ後ミガキ、脚部ナ デ	密	良好	外/にぶい橙色 内/灰白	
141	Pc297	3522-5	1B-9f	610溝	下層	土師器 低脚杯	φ14.1 4.7	外面: 塚部ハケメ後ミガキ、脚部ナ デ 内面: 塚部ミガキ、脚部ナデ	密	良好	外/赤赤橙～橙色 内/橙色	
141	Pc298	3250	1B-8g	610溝	下層	土師器 碗	10.1 4.0	外面: 体部上半ナデ、体部下半～底 部ヘラケズリ後ナデ 内面: ハケメ後ミガキ	密	良好	外/にぶい黄橙～黒灰色 内/黒～黒色	
141	Pc299	3524-2	1B-8f	610溝	下層	土師器 鉢?	12.4 5.5	外面: 体部ハケメ後ナデ、底部ヘラ ケズリ後ナデ 内面: ナデ一部ハケメ残る	密	良好	内外面ともにぶい黄橙～ 褐色	外面黒灰あり
141	Pc300	3245	1B-8g	610溝	下層	土師器 壺	13.0 △15.0	外面: 口縁～頸部ナデ、体部ハケメ 後ナデ 内面: 口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ後一部ナデ	密	良好	外/にぶい黄橙～灰黄褐色 内/にぶい黄橙	胎土赤在地 (金雲母含) 外面僅付着
142	Pc301	3139	2B-1f	801流路		土師器 直口壺	16.1 △20.2	外面: 口縁～頸部ナデ、体部ハケメ 後ナデ 内面: 口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ	やや 密	やや 良好	外/灰白～明黄褐色 内/浅黄橙～明黄褐色	外面僅付着
142	Pc302	3138	2B-1g	801流路		土師器 壺	14.7 24.4	外面: 口縁～頸部ナデ、体部～底部 ハケメ 内面: 口縁部ナデ、頸部以下ヘラケ ズリ後ナデ	やや 密	良好	外/褐色～黒褐色 内/にぶい黄橙～黒褐色	外面全体に僅 付着
142	Pc303	3671	1B-10f	801流路		須恵器 壺	φ13.9 △19.7	外面: 口縁～頸部ナデ、体部タタキ 内面: 口縁～頸部ナデ、体部当て具 痕ナデ面し	密	良好	外/黒～灰白色 内/暗灰～灰白色	外面自然釉付 着
142	Pc304	2929	1B-10g	801流路		土師器 小型丸底 壺	8.0 8.9	外面: 口縁～頸部ナデ、体部ハケメ 後ナデ 内面: 口縁部ナデ、頸部以下ナデ、 指頭圧痕	密	良好	内外面とも灰黄～黄灰色	
143	Pc305	3381	2B-1g	802流路		土師器 壺	- △67.3	外面: 頸部ナデ、体部ハケメ 内面: 頸部ハケメ後ナデ、体部ハケ メ一部指頭圧痕、ナデ	やや 密	良好	外/浅黄色 内/黒色	
143	Pc306	3293	1B-10f	802流路		土師器 小型丸底 壺	7.9 9.6	外面: 口縁～体部上半ナデ、体部下 半～底部ハケメ後ナデ 内面: 口縁～頸部ナデ、体部ヘラケ ズリ、底部ナデ、指頭圧痕	密	良好	外/橙色 内/橙色(灰黄橙～灰白色)	外面全体～ 内面口縁～ 頸部赤彩 外面黒灰あり
143	Pc307	3425	1B-10g	802流路		土師器 直口壺	9.4 15.7	外面: 口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 後ナデ 内面: 口縁～頸部ナデ、指頭圧痕、 体部～底部ヘラケズリ	密	良好	外/明赤褐色 内/明赤褐色、淡黄色	外面全体、 内面口縁～ 頸部赤彩 外面僅付着、 酸熱による剥 落あり
143	Pc308	3440	1B-10e	802流路		土師器 直口壺	12.9 17.0	外面: 口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 後ナデ 内面: 口縁部ハケメ後ナデ、頸部指 頭圧痕、体部ヘラケズリ、指 頭圧痕	密	良好	外/橙～灰褐色 内/橙色、浅黄橙～灰褐色	外面全体、 内面口縁～ 頸部赤彩 外面全体に僅 付着
143	Pc309	3258	1B-10f	802流路		土師器 壺	17.3 △35.4	外面: 口縁～頸部ナデ、体部～底部 ハケメ 内面: 口縁～頸部ナデ、指頭圧痕、 体部ヘラケズリ後一部ナデ、 指頭圧痕	やや 密	良好	外/灰白～にぶい黄褐色 内/にぶい黄橙～にぶい 褐色	体部上部に輪 彫刻 3ヶ所
143	Pc310	3422	2B-1g	802流路		土師器 壺	15.2 25.9	外面: 口縁～頸部ナデ、体部ハケメ 後一部ナデ 内面: 口縁～頸部ナデ、指頭圧痕、 体部～底部ヘラケズリ	密	良好	外/にぶい黄橙～黒褐色 内/にぶい黄橙～黒褐色	外面全体に僅 付着
143	Pc311	3445	1B-10e	802流路		土師器 壺	φ11.2 △17.2	外面: 口縁～頸部ナデ、体部ハケメ 内面: 口縁～頸部ナデ、体部ヘラケ ズリ	やや 密	良好	外/灰白～にぶい黄褐色 内/灰白～灰黄褐色	外面僅付着

第23表 土器観察表(14)

採回 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
144	Pc312	3387-2	IB-10g	802流路		土師器 甕	16.8 △24.7	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケズリ	やや 密	良好	外/赭灰色 内/灰黄褐～黒褐色	外面保存着
144	Pc313	3387-1	IB-10g	802流路		土師器 甕	17.8 △22.3	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁～肩部ナデ、指頭圧痕、 体部ヘラケズリ	密	良好	外/黒色 内/灰黄～にぶい黄褐色	外面全体に保 存着
144	Pc314	3386	IB-10g	802流路		土師器 甕	17.5 △25.4	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁～肩部ナデ、指頭圧痕、 体部ヘラケズリ後一部ナデ	やや 密	良好	外/にぶい橙～にぶい黄褐色 内/にぶい黄褐色～黒褐色	外面全体に保 存着
144	Pc315	3673-2	IB-10f	802流路		土師器 甕	15.6 △16.0	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケ ズリ	やや 密	良好	外/にぶい黄褐色～灰黄褐色 内/灰黄～黄灰色	外面全体に保 存着
144	Pc316	3401-2	2B-1g	802流路		土師器 甕	※14.7 △23.6	外面：口縁～肩部ナデ、体部～底部 ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケ ズリ	やや 密	良好	外/赭灰～黒色 内/赭灰～黒褐色	
144	Pc317	3381-2	2B-1g	802流路		土師器 甕	12.4 23.5	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 後ナデ、底部ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケ ズリ	密	良好	外/黒褐～褐色 内/黒褐～にぶい橙褐色	外面全体に保 存着
144	Pc318	3629-1	2B-1g	802流路		土師器 甕	13.3 20.6	外面：口縁～肩部ナデ、体部～底部 ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケ ズリ	やや 密	良好	内外面とも灰黄褐～黒褐色	外面全体に保 存着
144	Pc319	3643	IB-10g	802流路		土師器 甕	14.8 △18.6	外面：口縁部ナデ、肩部以下ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、肩部指 頭圧痕、体部ヘラケズリ	やや 密	良好	外/橙～にぶい褐色 内/橙～黒褐色	外面保存着 (明確な凸)
145	Pc320	3327-1	IB-10g	802流路		土師器 甕	※17.2 △15.3	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁～肩部指頭圧痕、体部ヘ ラケズリ	やや 密	良好	内外面ともににぶい黄褐色	外面全体に保 存着
145	Pc321	3407	2B-1g	802流路		土師器 甕	17.5 △23.7	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁～肩部ナデ、体部ヘラケ ズリ	やや 密	良好	外/浅黄～暗灰黄色 内/にぶい黄褐色、灰黄褐色	外面保存着 外面黒染あり
145	Pc322	3586	2B-1g	802流路		土師器 甕	※16.6 △25.9	外面：口縁部ナデ、肩部以下ハケメ 内面：口縁～肩部ナデ、指頭圧痕、 体部ヘラケズリ後一部ナデ	やや 密	良好	内外面ともににぶい黄褐色～ 褐色	内外面保存着
145	Pc323	3642	2B-1g	802流路		土師器 甕	※17.6 △16.8	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁ハケメ後ナデ、肩部指頭 圧痕、体部ヘラケズリ	やや 密	良好	外/赭灰～黒色 内/灰黄褐～褐色	外面全体に保 存着
145	Pc324	3401-1	2B-1g	802流路		土師器 甕	※14.7 16.3	外面：口縁～肩部ナデ、体部～底部 ハケメ 内面：口縁～肩部ナデ、体部ヘラケ ズリ後ナデ、底部指頭圧痕	やや 密	良好	外/黒褐色～黒色 内/灰黄褐～黒褐色	内外面全体に 保存着
145	Pc325	3286	IB-10f	802流路		土師器 甕	17.4 26.9	外面：口縁～肩部ナデ、体部～底部 ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、体部～底部ヘラ ケズリ	密	良好	外/にぶい黄褐色～にぶい黄 褐色 内/にぶい黄褐色～黒褐色	外面保存着
145	Pc326	3398	IB-10f	802流路		土師器 甕	16.8 27.9	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、指頭圧痕、肩部 以下ヘラケズリ	密	良好	外/にぶい黄褐色～灰黄褐色 内/にぶい黄褐～黒褐色	外面全体に保 存着
146	Pc327	3382	IB-10g	802流路		土師器 甕	18.6 29.8	外面：口縁～肩部ナデ、体部～底部 ハケメ、一部タテキれ 内面：口縁～肩部ハケメ後ナデ、 体部～底部ヘラケズリ後ナデ、 一部ハケメ・指頭圧痕残る	やや 密	やや 良好	内外面ともににぶい黄褐色～ 灰黄褐色	内面工具痕 外面全体に保 存着
146	Pc328	3391	2B-1g	802流路		土師器 甕	17.0 △27.1	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁～肩部ナデ、体部上半ヘ ラケズリ後ナデ、体部下指頭 圧痕	やや 密	良好	外/にぶい橙～灰白～黒褐色 内/にぶい黄褐色～灰白～灰 黄褐色	外面全体に保 存着
146	Pc329	3689	IB-10f	802流路		土師器 甕	14.4 20.0	外面：口縁～肩部ナデ、体部～底部 ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケ ズリ、底部指頭圧痕	密	良好	外/にぶい黄褐色～灰黄褐色 内/浅黄褐～にぶい黄褐色	
146	Pc330	3401-3	2B-1g	802流路		土師器 甕	12.4 19.5	外面：口縁部ナデ、肩部以下ハケメ 内面：口縁～肩部ナデ、体部上半ヘ ラケズリ、体部下半以下ヘラ ケズリ後ナデ	やや 密	良好	外/赭灰～にぶい黄褐色 内/にぶい黄褐色～黒褐色	外面保存着
146	Pc331	3722-7	IB-10f	832流路		土師器 甕	※13.8 △12.9	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 肩部刺突文 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケ ズリ	密	良好	外/褐色 内/にぶい橙～褐色	外面保存着
146	Pc332	3325-1	2B-1f	802流路		土師器 甕	12.2 △13.8	外面：口縁～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケ ズリ	密	良好	外/にぶい黄褐色～褐色 内/灰黄～黒褐色	外面全体に保 存着
146	Pc333	3399	2B-1g	802流路		土師器 甕	11.3 13.8	外面：口縁部ナデ、肩部以下ハケメ 内面：口縁ナデ、肩部以下ヘラケズ リ後ナデ	やや 密	良好	外/灰黄褐～黒褐色 内/にぶい黄褐色～灰黄褐色	内外面全体に 保存着

第24表 土器観察表(15)

押印番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
146	Ps334	3395	2B-1g	802流路		土師器 壺	11.1 △13.0	外面:口縁-頸部ナデ, 体部ハケメ 内面:口縁-頸部ナデ, 体部ハケメ	密	良好	外/褐色-黒褐色 内/ぶい黄橙-黒褐色	外面保存着
146	Ps335	3392	2B-1g	802流路		土師器 壺	11.4 16.9	外面:口縁-頸部ナデ, 体部-底部 ハケメ後ナデ一部タテ目残る 内面:口縁-頸部ナデ, 体部-底部 ハケメ	密	良好	外/浅黄橙-ぶい橙褐色 内/灰白-ぶい黄橙褐色	外面全体に保存着
146	Ps336	3690	1B-10f	802流路		土師器 壺	21.3 △16.3	外面:ハケメ後ナデ 内面:口縁部ナデ, 指頭圧痕, 頸部 以下ヘラケズリ	密	やや 良好	外/灰白-灰黄色 内/淡黄-黄灰色	内面工具痕
147	Ps337	3282-1	1B-10f	802流路		土師器 高杯	17.5 12.9	外面:環部ハケメ後ナデ, 脚部工具 によるナデ 内面:環部ナデ, 脚部しほり目・ハ ケメ	密	良好	外/明赤褐色-橙褐色 内/橙褐色-褐色	外面全体、 内面環部赤彩 外面黒痕あり
147	Ps338	3282-2	1B-10f	802流路		土師器 高杯	16.3 13.0	外面:環部ハケメ後ナデ, 環・脚部 の境にミガキ, 脚部工具による ナデ 内面:環部ミガキ(短文), 脚部しほ り目・ヘラケズリ・ハケメ	やや 密	良好	外/橙褐色 内/橙-ぶい黄橙褐色	脚部に赤色の 石が埋め込ま れる
147	Ps339	3389	2B-1g	802流路		土師器 高杯	14.5 10.8	外面:環部ナデ, 環・脚部の境に沈 痕, 脚部ミガキ・ナデ 内面:環部ナデ, 脚部しほり目・ナ デ・指頭圧痕・ハケメ	密	良好	外/明赤褐色-ぶい褐色 内/赤褐色-ぶい褐色・浅 黄褐色	外面全体、内 面環部、脚部 赤彩
147	Ps340	3256	1B-10f	802流路		土師器 高杯	14.5 12.0	外面:環部ナデ, 脚部工具によるナ デ・ハケメ後ナデ 内面:口縁-環部ナデ, 脚部しほり 目・ハケメ後ナデ	密	良好	外/ぶい橙-浅黄褐色 内/浅黄橙-ぶい橙-ぶ い褐色	
147	Ps341	3328	1B-10g	802流路		土師器 高杯	14.5 11.5	外面:環部ナデ, 環・脚部の境に沈 痕, 脚部ハケメ・ナデ 内面:環部ハケメ後ナデ・, 脚部し ほり目・ハケメ後ナデ・指頭 圧痕	密	良好	外/赤褐色-ぶい橙褐色 内/明赤褐色-ぶい橙褐色	外面全体、内 面環部、脚部 赤彩、外面 一部黒痕あり
147	Ps342	3643-6	1B-10g	802流路		土師器 高杯	14.5 11.6	外面:ナデ・指頭圧痕, 環・脚部の 境に沈痕 内面:環部ハケメ後ナデ, 脚部しほ り目・ハケメ	密	良好	外/明赤褐色-ぶい褐色 内/淡黄褐色・浅黄褐色	外面全体、内 面口縁端部赤 彩
147	Ps343	3345	1B-10f	802流路		土師器 高杯	14.5 11.7	外面:ハケメ後ナデ, 脚部ハケメ後 工具によるナデ 内面:環部ナデ, 脚部しほり目・ナ デ・ハケメ	やや 密	良好	外/灰褐色-ぶい赤褐色 内/灰褐色-ぶい褐色・灰 黄褐色-ぶい黄橙褐色	外面全体、内 面環部赤彩
147	Ps344	3259	1B-10f	802流路		土師器 高杯	15.7 △10.1	外面:環部ハケメ後ナデ 内面:しほり目	やや 密	やや 良好	外/橙-黒褐色 内/橙-暗赤褐色	内外面赤彩
147	Ps345	3280	2B-1g	802流路		土師器 高杯	14.2 △9.5	外面:口縁部沈痕・, 環部ナデ・指 頭圧痕・ハケメ, 脚部ナデ 内面:環部ナデ, 脚部しほり目	密	良好	外/明赤褐色-橙褐色 内/明赤褐色	内外面赤彩
147	Ps346	3396	2B-1g	802流路		土師器 脚付埴	13.9 11.1	外面:ヘラケズリ後ハケメ・ナデ 内面:端部ミガキ, 脚部ヘラケズリ 後ナデ	密	良好	外/橙-赤灰色 内/橙-ぶい橙褐色	
147	Ps347	3402	2B-1g	802流路		土師器 脚付埴	11.7 9.0	外面:ハケメ後ナデ・指頭圧痕 内面:端部ヘラケズリ後ナデ・ミガ キ, 脚部指頭圧痕・ナデ	密	良好	外/灰白-浅黄褐色 内/灰白-暗灰黄色	外面黒痕あり
147	Ps348	3454	1B-10e	802流路		土師器 脚付埴	12.6 9.7	外面:環部ハケメ後ナデ, 脚部しほ り目後ナデ 内面:端部ナデ, 脚部ナデ・指頭圧 痕	密	良好	外/浅黄-橙褐色 内/ぶい黄橙-ぶい褐色	外面黒痕あり
147	Ps349	3424	1B-10g	802流路		土師器 脚付埴	14.0 9.6	外面:ナデ 内面:端部ミガキ, 脚部指頭圧痕・ ナデ	密	やや 良好	外/橙-赤褐色 内/赤褐色-暗赤褐色	内外面赤彩塗 彩
147	Ps350	3383	1B-10g	802流路		土師器 脚付埴	13.0 8.6	外面:ナデ・指頭圧痕 内面:ナデ・指頭圧痕	密	良好	外/明赤褐色-ぶい赤褐色 内/ぶい黄橙-灰白色・ ぶい赤褐色	外面全体、内 面脚部赤彩
147	Ps351	3400	2B-1g	802流路		土師器 脚付埴	11.3 8.5	外面:ナデ・指頭圧痕 内面:端部ナデ・指頭圧 痕	密	良好	外/ぶい赤褐色-明赤褐色 内/灰白-淡黄褐色・ぶい 赤褐色	外面全体、口 縁端部、内面 脚部赤彩、外 面黒痕あり
147	Ps352	3415	2B-1g	802流路		土師器 脚付埴	11.9 8.2	外面:端部ヘラケズリ後ナデ, 脚部 ナデ・指頭圧痕 内面:端部ナデ・底部ヘラケズリ・ 脚部ナデ	密	良好	外/明赤褐色-ぶい褐色 内/明赤褐色-ぶい褐色	
148	Ps353	3411	2B-1g	802流路		土師器 埴	12.6 5.5	外面:ナデ・指頭圧痕 内面:ナデ, 一部ミガキ	密	良好	外/橙-ぶい褐色 内/暗褐色-黒褐色	外面赤彩
148	Ps354	3403	2B-1g	802流路		土師器 埴	12.4 5.8	外面:体部上半ナデ, 体部下半ヘラ ケズリ後ナデ, 底部ナデ 内面:ナデ	密	良好	外/明赤褐色-橙褐色 内/浅黄橙-灰黄褐色	外面赤彩
148	Ps355	3446	2B-1f	802流路		土師器 埴	12.3 5.1	外面:ヘラケズリ後ナデ 内面:ミガキ	密	良好	外/明赤褐色 内/明赤褐色-赤褐色	内外面赤彩
148	Ps356	3410	2B-1g	802流路		土師器 埴	11.5 4.9	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良好	外/暗褐色 内/暗褐色	
148	Ps357	3405	2B-1g	802流路		土師器 埴	13.0 8.0	外面:ナデ・ハケメ・ヘラケズリ 内面:ナデ・指頭圧痕	やや 密	良好	内外面とも明赤褐色-橙褐色	内外面保存着

第25表 土器観察表(16)

押印番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
148	Pc358	3412	2B-1g	802流路		土師器 埴	9.1 3.8	外面：ヘラケズリ後ナデ、指頭圧痕 内面：ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外/橙色 内/橙～明褐色	
148	Pc359	3534-1	1B-10g	802流路		土師器 小型丸底壺	7.3 8.7	外面：口縁～胴部ナデ、体部～底部ハケメ 内面：口縁～胴部ナデ、体部ヘラケズリ、底部ナデ	密	良好	外/橙～明赤褐色 内/橙～明赤褐色、灰白色	外面全体、内面口縁～胴部赤彩
148	Pc360	3280	1B-10f	802流路		土師器 小型丸底壺	8.4 9.6	外面：口縁～体部上平ナデ、体部下平～底部ハケメ後ナデ 内面：口縁～胴部ナデ、体部～底部ヘラケズリ	密	良好	外/橙色 内/橙～ぶい黄褐色	外面全体、内面口縁～胴部赤彩
148	Pc361	3586-9	2B-1g	802流路		土師器 低脚杯	7.7 3.0	外面：杯部ミガキ後一部ナデ、脚部ナデ 内面：杯部ハケメ後ミガキ、脚部ナデ	密	良好	外/橙～明褐色 内/ぶい褐色	
148	Pc362	3629-4	2B-1g	802流路		土師器 瓶	- △6.9	外面：指頭圧痕 内面：ヘラケズリ	やや密	良好	外/灰黄～浅黄色 内/浅黄～淡黄色	外面残付着
148	Pc363	3706-3	1B-10e	802流路		土師器 瓶	- △5.9	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：指頭圧痕	密	良好	ぶい黄褐色～灰黄褐色	
148	Pc364	3653	2B-1g	802流路		土師器 ミニチュア土器	- △3.4	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：体部ハケメ、底部指頭圧痕	密	良好	外/橙～浅黄褐色 内/ぶい黄橙～褐色	外面一部黒染あり
148	Pc365	3534-3	1B-10g	802流路		土師器 ミニチュア土器	- △4.7	外面：ナデ後ハケメ 内面：しぼり目後ナデ	密	良好	外/ぶい黄橙～ぶい褐色 内/灰黄～ぶい黄褐色	
148	Pc366	3688-3	1B-10e	802流路		灰患部 坏蓋	11.6 △4.3	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/紫灰～暗青灰色 内/紫灰～暗青灰色	
148	Pc367	3325	1B-10f	802流路		灰患部 坏蓋	11.0 4.8	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/青灰～暗青灰色 内/紫灰～暗青灰色	外面自然剝付着、内面貝殻付着
148	Pc368	3463	1B-10e	802流路		灰患部 坏身	9.8 4.7	外面：体部上平回転ナデ、体部下平～底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも青灰色	
148	Pc369	3337	1B-10f	802流路		灰患部 坏身	9.1 4.8	外面：体部上平回転ナデ、体部下平～底部回転ヘラケズリ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも青灰色	外面底部にヘラ記号
148	Pc370	3642	2B-1g	802流路		灰患部 有蓋高坏蓋	12.2 5.7	外面：つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面ともオリーブ黒～褐色	外面自然剝付着、台形の透孔3箇所あり
148	Pc371	3292	1B-10f	802流路		灰患部 有蓋高坏	10.6 9.9	外面：体部上平回転ナデ、体部下平回転ヘラケズリ、脚部カキ目、回転ナデ 内面：体部回転ナデ、脚部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/褐色～灰褐色	外面自然剝付着、台形の透孔3箇所あり
148	Pc372	3586-4	2B-1g	802流路		灰患部 壺	- △7.2	外面：体部回転ナデ、連続刺突文、底部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰～暗褐色	内外面自然剝付着、肩部に1箇所穿孔あり、外面黒染付着
148	Pc373	3586-3	2B-1g	802流路		灰患部 壺	17.1 25.9	外面：口縁部ナデ、胴部以下タキ後一部ナデ 内面：口縁～胴部ナデ、体部～底部赤て具後ナデ	密	良好	内外面とも灰白～灰褐色	内外面自然剝付着
149	Pc374	3464	2B-1g	832流路		土師器 小型丸底壺	9.0 9.6	外面：口縁～胴部ナデ、体部～底部ハケメ後ナデ 内面：口縁～体部上平ナデ、体部下平～底部指頭圧痕	密	良好	外/浅黄～黒色 内/黒～浅黄色	
149	Pc375	3707	1B-8g	831溝		弥生土器 装飾壺	- △4.4	外面：平行沈彫、刺突文、スタンブ文 内面：ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外/浅黄褐色～暗赤褐色 内/浅黄褐色	外面赤彩
149	Pc376	3723-2	1B-6f	833溝		土師器 壺	15.5 △10.5	外面：口縁～胴部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、胴部以下ヘラケズリ	密	良好	外/灰白～オリーブ黒色 内/灰白～灰褐色	
149	Pc377	3474 3723	1B-6f	833溝		弥生土器 壺	△16.4 △21.4	外面：口縁部平行沈彫、胴部ハケメ後ミガキ、体部ミガキ 内面：口縁～胴部ミガキ、体部ハケメ、ヘラケズリ	やや密	良好	外/橙～ぶい褐色 内/橙～ぶい褐色	外面残付着
149	Pc378	3473	1B-5g	837溝		弥生土器 壺	△13.4 △15.5	外面：口縁～胴部ナデ、肩部成状文、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部以下ヘラケズリ後ナデ、指頭圧痕	やや密	良好	外/ぶい黄橙～灰黄褐色 内/灰白～灰黄褐色	外面残付着
149	Pc379	3737-8	1B-8g	900流路		土師器 壺	△17.2 △10.7	外面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ工具による縞紗文、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部しぼり目後ナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	外/ぶい黄橙～灰白色 内/灰白～ぶい黄褐色	
149	Pc380	3710-2	1B-8g	900流路		弥生土器 壺	△18.0 △2.5	外面：口縁部成状文、内形浮文、胴部ミガキ 内面：口縁部成状文、ナデ	密	良好	内外面とも灰白～褐色	

第26表 土器観察表(17)

採出 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
149	Pc381	3740-4	1B-9g	900流路		焼生土器 壺	- △11.0	外面：口縁部平行沈線ナデ、肩部ハケメ後平行沈線 内面：口縁-肩部ナデ、指頭圧痕、 体部ヘラケズリ	密	良好	外/暗灰黄色 内/ぶい黄-灰黄色	
149	Pc382	3737-9	1B-8g	900流路		土師器 壺	12.2 △15.8	外面：口縁-肩部ナデ、肩部斜交文、 体部ハケメ 内面：口縁-肩部ナデ、体部ヘラケ ズリ	密	良好	内外面とも灰黄-灰白色	
149	Pc383	3737-1	1B-8g	900流路		土師器 壺	△16.8 △14.9	外面：口縁-肩部ナデ、肩部斜交文 線による斜交文・平行沈線、 体部ハケメ 内面：口縁-肩部ナデ、肩部ヘラケ ズリ	密	良好	内外面とも灰白-黄灰色	外面僅付着 外面黒炭あり
149	Pc384	3633-2	1B-9f	900流路		土師器 壺	16.3 25.5	外面：口縁-肩部ナデ、肩部平行沈 線・斜交文、体部-底部ハケメ 内面：口縁-肩部ナデ、体部ヘラケ ズリ後ナデ、底部指頭圧痕	密	やや 良好	外/灰白-灰黄褐色 内/灰白-ぶい黄褐色	外面全体に煤 付着
149	Pc385	3737-2	1B-8g	900流路		焼生土器 壺	△15.3 △13.0	外面：口縁-肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁-肩部ナデ、体部ヘラケ ズリ	密	良好	外/浅黄褐色 内/浅黄褐色-褐色	外面僅付着
149	Pc386	3737-7	1B-8g	900流路		土師器 執舞杯	20.9 △6.4	外面：杯部ハケメ後ミガキ、舞部ナ デ 内面：杯部ハケメ後ミガキ・ナデ、 舞部ナデ	密	良好	外/ぶい黄褐色-ぶい橙 色 内/ぶい黄褐色-明褐色	外面黒炭あり
149	Pc387	3737-5	1B-8g	900流路		土師器 小型丸底 壺	△9.4 △9.8	外面：口縁ミガキ、肩部-体部上半 ナデ、体部下半ハケメ後ミガキ 内面：口縁-肩部ナデ、体部ヘラケ ズリ・ナデ	密	良好	外/淡黄-黄灰色 内/灰白色	内面爪痕あり
149	Pc388	3737-4	1B-8g	900流路		土師器 小型壺	10.3 9.7	外面：ミガキ 内面：交部ミガキ、交部ナデ、舞部 ヘラケズリ・ハケメ後ナデ・ ミガキ	密	良好	内外面とも灰白-褐色	内外面黒炭あり 4方向の円形 透孔
149	Pc389	3619	1B-9f	900流路		焼生土器 高杯	- △9.6	外面：ミガキ 内面：舞部しぼり目・ナデ・ハケメ 外面：口縁-肩部ナデ、体部-底部 ハケメ	密	良好	外/灰白-灰黄色 内/灰白-ぶい黄褐色	外面黒炭あり
150	Pc390	3731-1	1B-10e	7-4a層		土師器 壺	△11.5 13.4	外面：口縁-肩部ナデ、体部-底部 ハケメ 内面：口縁-肩部ナデ後ナデ、 体部ヘラケズリ、底部ナデ・指 頭圧痕	やや 密	良好	外/ぶい黄褐色-灰黄褐色 内/ぶい黄褐色-灰黄褐色	外面黒炭あり
150	Pc391	3380	1B-6f	7-50層		土師器 壺	14.5 △17.4	外面：口縁-肩部ナデ、肩部平行沈 線、体部ハケメ 内面：口縁-肩部ナデ、体部ヘラケ ズリ・指頭圧痕	密	やや 良好	内外面ともぶい黄褐色- 黒褐色	外面全体、内 面に煤付着
150	Pc392	3679-2	1B-7g	7-50層		交番文 土師器 深鉢	- △4.7	外面：口縁部ナデ・キギミ、体部ナ デ 内面：口縁部ナデ・指頭圧痕	やや 密	良好	外/ぶい黄褐色 内/ぶい黄褐色-黄灰色	
150	Pc393	3694-1	1B-5g	7-50層 -8-1a 層		焼生土器 壺	9.2 13.1	外面：口縁-肩部ナデ、肩部成状 文・平行沈線、体部下半-底 部ハケメ 内面：口縁-肩部ナデ、体部ヘラケ ズリ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰黄-浅黄色	
150	Pc394	3694-2	1B-5g	7-50層 -8-1a 層		土師器 執舞杯	13.7 6.9	外面：杯部ハケメ、舞部沈線・ナデ 内面：杯部ハケメ、舞部ナデ・指頭 圧痕	やや 密	良好	外/浅黄褐色-ぶい橙 色 内/淡黄-褐色	
150	Pc395	3700-5	1B-6f	8-1a層 上面		土師器 壺	△15.4 △10.1	外面：口縁部ナデ、肩部波状文、体 部ハケメ 内面：口縁-肩部ナデ、体部ヘラケ ズリ	密	良好	外/ぶい橙-浅黄褐色 内/浅黄褐色-灰白色	外面煤付着
150	Pc396	3376	1B-8g	8-1a層 上面		焼生土器 壺	14.2 △9.0	外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ、肩部 斜交文・平行沈線、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部以下ヘラケ ズリ	密	良好	外/浅黄褐色-灰黄褐色 内/浅黄褐色-ぶい黄褐色	外面煤付着
150	Pc397	3698	1B-5g	8-1a層 上面		土師器 舞台	21.8 △7.8	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ・ナデ	密	良好	内外面とも灰白-黄褐色	
150	Pc398	3374-1	1B-8g	8-1a層 上面		焼生土器 壺	△16.7 △15.0	外面：口縁-肩部ナデ、肩部平行沈 線・波状文、体部ハケメ 内面：口縁-肩部ナデ・指頭圧痕、 体部ヘラケズリ	密	良好	外/ぶい橙-ぶい黄褐色 内/灰白-ぶい橙褐色	外面煤付着
150	Pc399	3622	1B-7g	8-1a層		焼生土器 壺	△9.2 △4.1	外面：ナデ 内面：ナデ	やや 密	やや 良好	外/ぶい橙-浅黄褐色 内/浅黄褐色	
150	Po400	3700-6	1B-6f	8-1a層 上面		焼生土器 壺	15.5 △13.8	外面：口縁部ナデ・沈線?、肩部- 体部ハケメ 内面：口縁-肩部ナデ・ハケメ、 肩部ハケメ、体部指頭圧痕・ハ ケメ後一部ナデ	やや 密	良好	外/淡黄-浅黄褐色 内/橙-浅黄褐色	
150	Po401	3715-1	1B-6g	8-1a層		土師器 壺	△13.8 △6.9	外面：ミガキ・ナデ一部ハケメ残る 内面：口縁部ミガキ、舞部ナデ・ミ ガキ	密	良好	外/ぶい橙-ぶい黄褐色 内/ぶい黄褐色-ぶい橙	
150	Po402	3716-2	1B-7g	8-1a層		焼生土器 舞台	- △4.8	外面：舞部ミガキ・ナデ、舞部部平 行沈線・スタンプ文 内面：ヘラケズリ	密	良好	内外面ともぶい黄褐色	三重同心円 スタンプ文

第27表 土器観察表(18)

挿入番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
150	Po403	3713-1	1B-5g		8-1a層	土師部 裏	⊕19.2 △9.6	外面：口縁部ナデ・一部平行沈線。 肩部平行沈線・波状文、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、胴部以下ヘラケズリ	やや密	良好	内外面ともにぶい黄褐色	外面黒面あり
150	Po404	3375-1	1B-8g		8-1a層	洗生土器 灰脚杯	⊕17.6 ⊕10.1	外面：杯部ハケメ・ナデ、脚部ナデ 内面：杯部ナデ、脚部ヘラケズリ・ナデ	やや密	良好	内外面にぶい橙～浅黄褐色	内面保付着
150	Po405	3530	1B-7h		8-2b層	洗生土器 壺	⊕14.4 △5.7	外面：ナデ・沈線 内面：ナデ・ヘラケズリ	密	良好	外/淡橙～浅黄褐色 内/ぶい橙	外面胴部へラ 掻き文様 (矢印状)
150	Po406	3531	1B-7h		9-1a層 ～9-2b層	洗生土器 器台	- △5.6	外面：ミガキ・平行沈線 内面：ヘラケズリ・ナデ	やや密	良好	内外面とも橙	外面黒面あり
150	Po407	3000	1B-7h		8-2b層	洗生土器 器台	- △7.8	外面：脚部平行沈線・ミガキ、脚部内面ヘラケズリ	密	良好	外/ぶい黄褐色 内/ぶい黄橙～ぶい橙	外面黒面あり
150	Po408	2414-2	1B-7g		8-1a層 ～8-2b層	洗生土器 脚付壺	- △5.6	外面：ナデ 内面：底部ナデ、脚部ナデ・ヘラケズリ	密	良好	外/ぶい橙～ぶい黄褐色 内/灰黄色	外面保付着

第28表 土製品観察表

挿入番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
151	CP 1	1183	1B-7c	15a路	下層	支脚	最大長：17.7 最大幅：15.3 最大厚：13.8	ナデ・指頭圧痕・一部ハケメ	やや粗	良好	ぶい黄橙～ぶい橙	外面黒面あり
151	CP 2	2739	1B-9c	500a路		移動式電	器高：△25.9 最大幅：△6.4 最大厚：△12.7	外面：ナデ 内面：ナデ・ヘラケズリ	やや密	良好	外/ぶい黄橙～橙 内/ぶい橙～橙	
151	CP 3	1910	1B-7g	風立柱建物 3 43柱穴		移動式電	器高：△11.2 最大幅：△22.1 最大厚：△3.2	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：ナデ	やや粗	良好	外/濁灰～灰黄褐色 内/濁灰～ぶい橙	内面保付着
151	CP 4	3629-2	2B-1g	802a路		移動式電	器高：△9.3 最大幅：△13.0 最大厚：△2.6	外面：ハケメ・ナデ 内面：ハケメ	密	良好	外/灰白 内/灰黄～黄灰	内面保付着
151	CP 5	698	1B-10g		4-2a層	移動式電	器高：△19.0 最大幅：△44.6 最大厚：△8.7	外面：ナデ・ハケメ・指頭圧痕 内面：ナデ・ハケメ	密	良好	外/灰黄期～黒褐色 内/黄灰～黒褐色	内外面保付着
152	CP 6	2897	1B-8f	610溝	上層	移動式電	口径：⊕19.8 器高：37.6 最大厚：3.1	外面：飲み口～体部ハケメ・ナデ、底部ナデ・指頭圧痕、突体部ナデ・指頭圧痕 内面：ハケメ・ナデ	やや密	良好	外/浅黄橙～ぶい黄褐色 内/浅黄橙～黒褐色	
153	CP 7	878-1	1B-10g	17耕作溝群		土鉢	最大長：4.7 最大幅：2.2 最大厚：2.2	手づくね成形	密	良好	灰黄～黄灰色	重量：18.4g
153	CP 8	846-2	1B-10g	17耕作溝群		土鉢	最大長：4.4 最大幅：1.7 最大厚：1.5	手づくね成形	密	良好	ぶい黄橙～黄灰色	重量：9.0g
153	CP 9	878-2	1B-10g	17耕作溝群		土鉢	最大長：4.2 最大幅：1.7 最大厚：1.7	手づくね成形	密	ふつう	灰白～灰色	重量：10.2g
153	CP10	846-3	1B-10g	17耕作溝群		土鉢	最大長：3.9 最大幅：1.6 最大厚：1.5	手づくね成形	密	良好	灰白色	重量：8.3g
153	CP11	846-1	1B-10g	17耕作溝群		土鉢	最大長：3.6 最大幅：1.4 最大厚：1.5	手づくね成形	密	やや良好	褐灰色	重量：6.0g
153	CP12	964	1B-10f	17耕作溝群		土鉢	最大長：3.2 最大幅：1.6 最大厚：1.5	手づくね成形	密	良好	灰色	重量：6.2g
153	CP13	1597	1B-6c	15a路	下層	土鉢	最大長：4.0 最大幅：2.1 最大厚：1.9	手づくね成形	密	良好	ぶい黄褐色	重量：17.0g

第29表 石器観察表

採掘 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種類	法量 (cm・g)				石材	備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量		
154	S1	2131	2B-1g	独立柱建物16		砥石	11.5	5.8	7.4	837	輝緑凝灰岩	153柱穴出土
154	S2	2068	1B-6e	15流路	下層	石核	4.5	4.2	2.4	53.0	鉄石英	
154	S3	1598	1B-7e	15流路	下層	砥石	11.3	6.3	2.7	313	安山岩	
154	S4	1070	1B-8d	15流路	下層	石製品?	10.2	12.3	4.7	650	花崗岩	素材か?
155	S5	2587	1B-7f	550流路	上層	分割片	3.0	2.8	1.3	13.5	碧玉	管玉製作資料
155	S6	2696	1B-5f	550流路	上層	板状材	2.4	3.2	0.3	4.4	緑色凝灰岩	管玉製作資料
155	S7	2449	1B-9e	550流路	上層	砥石	17.9	9.2	9.2	1534	凝灰岩	
155	S8	2848	1B-9f	600流路	上層	砥石	8.1	4.3	3.7	155.3	凝灰岩	
155	S9	2966	1B-6e	竪穴建物1	上層	砥石	△6.4	4.0	2.5	△112.6	凝灰岩	
156	S10	2894	1B-8g	610溝		両刃石斧	△10.5	6.4	4.7	△487	デイサイト	磨製
156	S11	3495	1B-10f	801流路		軽石加工品	5.9	3.0	3.6	13.1	軽石	
156	S12	3404	2B-1g	802流路		砥石	14.4	6.2	8.4	1176	輝緑凝灰岩	
157	S13	318	1B-9g		3-1a層 ~3-2a層	柱状片刃石斧	8.8	2.8	3.7	154.6	輝緑凝灰岩	
157	S14	734	1B-10f		4-2a層	砥石	3.7	2.7	1.8	27.9	凝灰岩	
157	S15	814	1B-10h		4-2a層	砥石	6.1	5.3	4.1	139.4	砂岩	
157	S16	725	1B-9g		4-2a層	砥石	11.1	8.4	4.5	411	デイサイト	
157	S17	996	1B-10e		4-2a層	砥石	9.6	4.2	5.1	226.1	凝灰岩	焼熟
158	S18	2760	1B-6g		7-1a層	砥石	20.1	9.3	7.6	1355	アブライト	
158	S19	501	1B-9g		7-1a層	砥石	19.7	13.3	8.3	2380	砂岩	
158	S20	2941	2B-1g		7-2a層	砥石	4.8	2.0	2.0	22.5	凝灰岩	
158	S21	636	1B-8g		7-3b層	両刃石斧	12.9	5.8	3.4	264.6	安山岩	磨製
158	S22	3519	1B-7h		8-1a層	砥石	12.4	6.7	4.5	570	アブライト	

第30表 木製祭祀具(人形)観察表

種別 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-70-	遺構	法量 (cm)	大平 分類	頭部 形状	顔 表現	墨書	脚	本取り	樹種	備考
159	W1	615	1B-8g	8溝 最下層	△11 1.7 0.4	人形Ⅰc	②	墨書	顔	—	砥目	カヤ	意図的に首折断か
159	W2	635	1B-8g	8溝	△7 1.6 0.4	人形c	①	墨書	顔	—	砥目	カヤ	保存処理
160	W3	1110	1B-7e	15流路 上層	△8.7 4.4 0.4	人形c	⑤	墨書?	顔	—	砥目		意図的首折断か
160	W4	488	1B-7d	15流路 上下層境	△24.7 4.1 0.8	人形c	⑤	—	—	—	砥目		意図的首折断か
160	W5	522-2	1B-7d	15流路 上層	△25.2 5.7 0.5	人形1c	⑤	墨書	顔	—	砥目	アスノコ	保存処理
160	W6	890	1B-6e	15流路 上下層境	34.4 5.8 0.3	人形1c	③	墨書	顔+服	二本	砥目	スギ	女性表現?、保存処理
160	W7	1226	1B-9e	15流路 上層	△49.5 10.3 0.7	人形c	⑥	墨書	顔	—	砥目	スギ	女性表現?、保存処理
160	W8	892	1B-6e	15流路 上下層境	33.9 5.8 0.4	人形1c	④	墨書	顔+服	二本	砥目	スギ	保存処理
161	W9	2299-1	1B-5e	15流路 下層	37.9 2.9 0.5	人形1c	①	切込み	—	一本	砥目		
161	W10	1207-1	1B-8e	15流路 下層	44.5 2.8 0.7	人形1c	⑥	切込み	—	一本	砥目		
161	W11	483	1B-5f	15流路 下層	63.5 3.7 0.6	人形1c	⑥	切込み	—	一本	砥目		
161	W12	1993-1	1B-5e	15流路 下層	57.8 2.8 0.7	人形1c	②	—	—	一本	砥目		
162	W13	2119	1B-7e	15流路 下層	49.3 4.3 0.8	人形1c	①	切込み	—	二本	砥目		
162	W14	2182-2	1B-8e	15流路 下層	△25.2 3 1	人形1c	①	切込み	—	一本	砥目		意図的倒断
162	W15	2181-1	1B-7e	15流路 下層	△36.8 2.6 0.7	人形1c	①	切込み	—	二本	砥目		意図的倒断断か
162	W16	2190	1B-6e	15流路 下層	△43.5 3.3 0.5	人形1c	①	切込み	—	一本	砥目	スギ	意図的倒断断か
162	W17	1650-8	1B-6e	15流路 下層	△17.5 2.5 0.5	—	①	切込み	—	一本	砥目		
162	W18	1068	1B-8d	15流路 下層	△31.6 4.7 0.6	人形c	①	切込み	—	一本	追経目		裏面対物、意図的折断
162	W19	1067	1B-8d	15流路 下層	△32.2 4.7 0.6	人形1c	①	切込み	—	一本	砥目		意図的折断 背中央物
162	W20	1991-5e	15流路 下層	△38.1 4.1 0.7	人形1c	①	切込み	—	一本	砥目			意図的倒断断か
162	W21	1065	1B-8d	15流路 下層	66 4.3 0.9	人形1c	①	切込み	—	二本	砥目		
162	W22	2299-3	1B-5e	15流路 下層	△19.6 3.9 0.8	人形1c	①	切込み	—	一本	砥目		意図的折断か
163	W23	1252	1B-7e	15流路 下層	△25.3 5 0.9	人形c	①	—	—	一本	砥目		意図的折断か、顔対物キズ
163	W24	2011-1	1B-8d	15流路 下層	△24.8 4 0.5	人形c	①	—	—	一本	砥目		手背に残存、意図的折断、顔対物キズ
164	W25	2101-1	1B-7e	15流路 下層	△21.5 2.9 0.5	人形1c	②	—	—	一本	砥目		意図的折断か
164	W26	2182-1	1B-8e	15流路 下層	△36.2 2.3 0.7	人形c	②	—	—	一本	砥目		体部に擦痕、意図的折断か
164	W27	1157	1B-7e	15流路 下層	18.3 2.5 0.6	人形1c	③	—	—	二本	砥目		腰・ひざ、足首意図的折断か
164	W28	1060-1	1B-7d	15流路 下層	△16 4.4 0.5	人形c	③	—	—	一本	砥目		目の位置に穿孔
164	W29	1156	1B-7e	15流路 下層	17.8 2.8 0.4	人形1c	③	墨書	顔+服	二本	砥目	スギ	女性表現?、保存処理
164	W30	1075	1B-6e	15流路 下層	△26.8 5.5 0.5	人形1c	③	墨書	顔+服	一本	砥目	スギ	保存処理
164	W31	940	1B-5e	15流路 下層	49 6.3 0.4	人形Ⅰc	③	墨書	顔	二本	砥目	スギ	保存処理
165	W32	1158	1B-7e	15流路 下層	17.7 2.8 0.4	人形1c	④	墨書	顔+服	二本	砥目	スギ	保存処理
165	W33	1131-1	1B-7e	15流路 下層	△16.8△1.8 0.4	人形c	④	墨書	顔+服	一本	砥目	スギ	保存処理
165	W34	1102	1B-7e	15流路 下層	16.2 2.5 0.3	人形c	④	墨書	顔+服	一本	砥目	スギ	保存処理
165	W35	1981	1B-6e	15流路 下層	16.9 3.3 0.7	—	④	—	—	一本	砥目		
165	W36	455	1B-5f	15流路 下層	37.1 5.7 0.6	人形1c	④	墨書	顔+服	二本	砥目	スギ	保存処理、足首あり
165	W37	1079	1B-6e	15流路 下層	58.7 7.2 0.8	人形Ⅰc	④	—	—	二本	砥目		
165	W38	1167	1B-7e	15流路 下層	△35.2 8 0.7	人形Ⅰc	④	—	—	一本	砥目		意図的倒断
165	W39	469	1B-5e	15流路 下層	△53.6 6.8 0.6	人形c	④	—	—	一本	砥目		意図的倒断断、推定長14cm
166	W40	1650-1	1B-6e	15流路 下層	△28 3.3 0.6	人形b	⑤	—	—	一本	砥目		意図的倒断断か
166	W41	1601	1B-7e	15流路 下層	△33.5 6.7 0.8	人形c	⑥	—	—	一本	砥目		意図的倒断断か、顔対物キズ
166	W42	1207-2	1B-8e	15流路 下層	△36.7 3.1 0.4	人形1c	⑥	切込み	—	二本	砥目		体部磨痕、意図的倒断断か
166	W43	1104-1	1B-6e	15流路 下層	△54.0 4.2 0.8	人形1c	⑦	—	—	二本	砥目		
166	W44	2299-5	1B-5e	15流路 下層	△62.4 3.1 0.6	人形1c	⑦	切込み	—	一本	砥目		
166	W45	1185	1B-7e	15流路 下層	135 10.5 0.5	人形Ⅰc	⑦	墨書	顔+服	二本	砥目	スギ	保存処理
166	W46	2299-6	1B-5e	15流路 下層	△60.3 3.1 0.7	—	—	—	—	二本	砥目		胴部+脚部
167	W47	2711	1B-7f	550流路 下層	30.5 3 0.5	人形1b	⑧	—	—	一本	砥目	スギ	胴・脚ノッチ状痕跡
167	W48	2715	1B-6f	550流路 下層	33.5 4.4 0.7	人形1a	⑧	切込み	—	一本	砥目	スギ	胴部工具痕、非対称
167	W49	2118-4	1B-5f	550流路 下層	23.1 1.9 0.8	人形1c	⑧	切込み	—	一本	砥目		目のみ切込?、意図的倒断断か
167	W50	2118-5	1B-5f	550流路 下層	△27.2 2.2 0.3	人形1c	⑧	切込み	—	二本	砥目	スギ	目のみ切込?、意図的足首切断か
167	W51	2118-2	1B-5f	550流路 下層	39.2 1.9 0.6	人形1c	⑧	切込み	—	二本	砥目	スギ	
167	W52	2118-6	1B-5f	550流路 下層	△19.5 2.5 0.5	人形c	⑧	切込み	—	二本	砥目	スギ	
167	W53	2118-3	1B-5f	550流路 下層	38 2 0.5	人形1c	⑧	—	—	二本	砥目		
167	W54	2118-1	1B-5f	550流路 下層	35.7 2 0.6	人形1c	⑧	—	—	二本	砥目		
167	W55	480	1B-5f	550流路 下層	△33.5 4.2 0.4	人形c	—	—	—	一本	砥目		意図的倒断断か
168	W56	3324	2B-1g	802流路	△34.4 3.4 1	人形?	—	—	—	一本	砥目		顔面表現か
168	W57	243	1B-9e	中央東西トレンチ	△71.8△7.2 1.2	人形c	⑨	—	—	一本	砥目		

頭部形状

①三角 ②緩やかな三角 ③上端部平坦で両端斜め切り取り ④上端部平坦で両端切り取り ⑤上端部平坦で真下に切り取り ⑥緩やかな楕円 ⑦半円

第31表 木製祭祀具(馬形)観察表

棟号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	器種	遺構	法量 (cm)			襖馬/駒馬	下腹孔	木取り	樹種	備考
169	W58	2299-2	1B-5e	15流路	下層	20.8	2.5	0.6	襖馬	-	板目材		
169	W59	2182-14	1B-8e	15流路	下層	21.7	2.3	0.6	襖馬	あり	板目材		
169	W60	1657-2	1B-6e	15流路	下層	21.1	3.5	0.6	駒馬	?	板目材		顔表現
169	W61	2181-7	1B-7e	15流路	下層	23.5	3.3	0.9	駒馬	あり	板目材		
169	W62	1657-1	1B-6e	15流路	下層	23.7	3.1	0.7	駒馬	あり	板目材		
169	W63	2191	1B-6e	15流路	下層	22.6	3.1	0.8	駒馬	?	板目材		スギ
169	W64	2181-8	1B-7e	15流路	下層	23.2	2.7	0.8	駒馬	?(袈袢目)	板目材		
169	W65	2182-12	1B-8e	15流路	下層	△21	3.1	1.1	駒馬	あり	板目材		
169	W66	2299-4	1B-5e	15流路	下層	21	3.1	1.1	駒馬	あり	板目材		腹孔棒?残存
169	W67	1035	1B-5e	15流路	下層	23.5	4.7	0.8	駒馬	-	板目材		
169	W68	1980	1B-6e	15流路	下層	24.6	3.1	0.7	駒馬	?(袈袢目)	板目材		
169	W69	2182-11	1B-8e	15流路	下層	△16.5	2.7	0.7	駒馬	あり	板目材		腹孔棒残存(H27樹種同定)
169	W70	2182-13	1B-8e	15流路	下層	△21.8	3.7	1.1	駒馬	あり	板目材		
170	W71	2118-5	1B-5f	550流路		19.7	3	0.5	襖馬	あり	板目材		
170	W72	2118-4	1B-5f	550流路		20.5	3	0.6	襖馬	あり	板目材		
170	W73	2118-3	1B-5f	550流路		22.9	3	0.6	襖馬	あり	板目材		
170	W74	2118-2	1B-5f	550流路		21.4	2.8	1.2	襖馬	あり	板目材		厚1cm
170	W75	2118-7	1B-5f	550流路		22	3.1	0.7	襖馬	あり	板目材		スギ
170	W76	2118-1	1B-5f	550流路		18.5	2.6	1	襖馬	あり	板目材		スギ
170	W77	2118-06	1B-5f	550流路		21.3	3	0.7	襖馬	?	板目材		
170	W78	2118-11	1B-5f	550流路		23.3	2.6	0.6	駒馬	あり	板目材		
170	W79	2118-10	1B-5f	550流路		24.2	2.2	0.7	駒馬	あり	板目材		
170	W80	2118-13	1B-5f	550流路		20.6	2.2	0.5	駒馬	?(袈袢目)	板目材		
170	W81	2118-12	1B-5f	550流路		22.6	2.1	0.7	駒馬	あり	板目材		ヒノキ
170	W82	2661-10	1B-5e	550流路	上層	23.5	3.2	0.6	駒馬	あり	板目材		
170	W83	2682	1B-7e	550流路	上層	23.2	2	0.8	駒馬	あり	板目材		
170	W84	2669	1B-6e	550流路	下層	17.9	3.8	0.4	駒馬	?	板目材		状態不良

第32表 木製祭祀具(武器形)観察表

棟号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	器種	遺構	法量 (cm)			木取り	樹種	備考	
171	W85	775	1B-8e	刀形	15流路	上層	△24.3	2.2	0.7	板目材		
171	W86	1657-5	1B-6e	刀形	15流路	下層	30.8	1.8	0.7	板目材		
171	W87	2116-7	1B-7e	刀形	15流路	下層	△25.7	1.6	0.6	板目材		
171	W88	2116-6	1B-7e	劍形	15流路	下層	19	1.4	0.4	板目材		
171	W89	1207-3	1B-8e	武器形	15流路	下層	△17.1	1.5	0.3	板目材		先端欠
171	W90	2118-21	1B-5f	劍形	550流路		△40.3	1.2	0.2	板目材		
171	W91	2118-12	1B-5f	劍形	550流路		△36.2	1.4	0.5	板目材		スギ
171	W92	2661-2	1B-5e	劍形	550流路	上層	38.2	1.5	0.8	板目材		切り込み複数
171	W93	2118-16	1B-5f	武器形	550流路		△35.2	1.4	0.7	板目材		スギ
171	W94	2118-6	1B-5f	武器形	550流路		△9.4	1.4	0.4	板目材		基部のみ
171	W95	2118-3	1B-5f	武器形	550流路		△14.1	1.9	0.6	板目材		基部のみ
172	W96	2615-1	1B-6e	武器形	550流路	上層	△21.7	1.6	0.3	板目材		
172	W97	2181-4	1B-7e	武器形	550流路		△24	1.5	0.3	板目材		
172	W98	3781	2B-1g	刀形	599流路		19.4	1.5	0.4	板目材		
173	W99	3312	2B-1g	劍形	802流路		50.2	2.8	0.7	板目材		
173	W100	3318-2	2B-1g	劍形	802流路		41.8	2.6	0.8	板目材		
173	W101	3318-1	2B-1g	刀形	802流路		38.6	2.2	0.7	板目材		
173	W102	3313	2B-1g	刀形	802流路		47.3	2.8	0.7	板目材		
173	W103	3315	2B-1g	刀形	802流路		49.2	2.9	1.3	板目材		
173	W104	3319	2B-1g	刀形	802流路		△29.3	1.9	0.6	板目材		側面観渦溝
173	W105	3317	2B-1g	刀形	802流路		40.4	2.6	0.6	板目材		
173	W106	3304	1B-10g	刀形	802流路		44.8	3.2	0.6	板目材		
173	W107	3303	1B-10g	刀形	802流路		△32.1	3.2	0.4	板目材		
174	W108	3305-3	1B-10g	武器形	802流路		△15.8	1.9	0.3	板目材		
174	W109	3320	2B-1g	武器形	802流路		△22.5	2.9	0.4	板目材		スギ
174	W110	3323	2B-1g	武器形	802流路		△29.6	3	0.4	板目材		スギ
174	W111	3316	2B-1g	劍形?	802流路		△57.1	1.9	0.6	板目材		スギ
174	W112	3314	2B-1g	武器形	802流路		△31.2	2.7	0.5	板目材		スギ
174	W113	3332	2B-1g	武器形	802流路		△32.3	3.3	1.2	板目材		
174	W114	3137	1B-10f	刀形	801流路		95.8	4.3	1.1	板目材		
175	W115	3305-2	1B-10g	劍形	802流路		23	1.7	0.4	板目材		スギ
175	W116	3305-1	1B-10g	劍形	802流路		△19.6	1.3	0.4	板目材		スギ

第33表 木製祭祀具(斎串)観察表

棟号 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	型式分類	法量 (cm)			木取り	樹種	備考
177	W117	1491-2	1B-5d	15流路	下層	斎串A I	△19	1.2	0.5	板目材		
177	W118	1528-1	1B-6e	15流路	下層	斎串B I	28	1.8	0.4	板目材		先端切欠き?
177	W119	2116-2	1B-7e	15流路	下層	斎串C I	23.5	2	0.4	板目材		
177	W120	987-2	1B-5e	15流路	下層	斎串C I	△14.3	1.4	0.4	板目材		
177	W121	1527-2	1B-5e	15流路	下層	斎串C I	△28	1.1	0.6	板目材		上部のみ
177	W122	1527-1	1B-5e	15流路	下層	斎串C II	△5.1	1.9	0.4	板目材		
177	W123	2375	1B-7e	15流路	下層	斎串C II	△7	2.1	0.4	板目材		
177	W124	1653	1B-6e	15流路	下層	斎串C II	△10	1.6	0.5	板目材		頭のみ
177	W125	1657-4	1B-6e	15流路	下層	斎串C II	△10.6	1.2	0.3	板目材		
177	W126	2116-13	1B-7e	15流路	下層	斎串C II	△11.5	2	0.4	板目材		
177	W127	1997	1B-6e	15流路	下層	斎串C II	△16	1.4	0.4	板目材		
177	W128	1657-3	1B-6e	15流路	下層	斎串C II	△28.5	1.3	0.7	板目材		
177	W129	2116-5	1B-7e	15流路	下層	斎串C II	31.5	2.5	0.3	板目材		
177	W130	2116-15	1B-7e	15流路	下層	斎串C III	△22.2	2.5	0.3	板目材		幅広
177	W131	2128	1B-8d	15流路	下層	斎串C III	△13.3	1.2	0.5	板目材		武器形柄部に類似
177	W132	2179	1B-6e	15流路	下層	斎串C III	△26.9	1.5	0.5	板目材		
177	W133	2116-8	1B-7e	15流路	下層	斎串E II	△6.1	1.8	0.4	板目材		
178	W134	2182-8	1B-8e	15流路	下層	斎串F I	△17.1	1	0.8	板目材		角棒状
178	W135	1022	1B-6e	15流路	下層	斎串F I	△31.8	1	1.1	板目材	スギ	角棒状
178	W136	468-2	1B-5e	15流路	下層	斎串F I	△40.1	1	1.1	板目材		角棒状
178	W137	468-3	1B-5e	15流路	下層	斎串F I	△46.3	0.9	0.7	板目材		角棒状
179	W138	2661-3	1B-5e	550流路	上層	斎串C II	38.5	1.2	0.5	板目材		
179	W139	2661-1	1B-5e	550流路	上層	斎串C II	36.4	1.4	0.4	板目材		
179	W140	2661-5	1B-5e	550流路	上層	斎串F ?	△22.7	1.3	0.8	板目材		先端欠
179	W141	3360	1B-5f	550流路	下層	斎串B III	△47.4	3.2	0.5	板目材		
179	W142	3801	1B-6f	550流路	下層	斎串B III	54.7	1.4	0.6	板目材		
179	W143	3817	1B-5f	550流路	下層	斎串B III	56	1.7	0.3	板目材		
179	W144	3862	1B-5f	550流路	下層	斎串B III	31.8	2.1	0.4	板目材		
179	W145	2939	2B-1e	550流路	下層	斎串E I	54	2.8	0.6	板目材		
179	W146	2678	1B-6e	550流路	下層	?	△29.5	1.1	0.5	板目材		
180	W147	2118-19	1B-5f	550流路		斎串B I	△27.3	0.9	0.6	板目材		
180	W148	2118-22	1B-5f	550流路		斎串B I	18.6	0.8	0.7	板目材		
180	W149	2118-1	1B-5f	550流路		斎串B I	△19	1.1	0.2	板目材		
180	W150	482	1B-5f	550流路		斎串C II	△22	1.4	0.25	板目材		
180	W151	481	1B-5f	550流路		斎串C II	31	1.5	0.4	板目材		
180	W152	2118-4	1B-5f	550流路		斎串C II	△38.4	1.7	0.9	板目材		
180	W153	2118-28	1B-5f	550流路		斎串C II	△34.8	2	0.6	板目材	スギ	
180	W154	2118-2	1B-5f	550流路		斎串E II	△23.5	1.3	0.4	板目材		
180	W155	2118-9	1B-5f	550流路		斎串E II	△35.4	1.4	0.4	板目材		
180	W156	2118-7	1B-5f	550流路		斎串E II	37.9	2.5	0.5	板目材		
180	W157	2118-18	1B-5f	550流路		斎串E II	△35.3	2	0.4	板目材	スギ	
180	W158	2118-25	1B-5f	550流路		斎串E II	△37	1.7	0.3	板目材	スギ	
180	W159	2118-24	1B-5f	550流路		斎串E II	51.2	1.1	0.5	板目材		
180	W160	1750	2B-1f		7-3b層	斎串A I	16.7	1.7	0.4	板目材		

第34表 木製祭祀具(舟形・農具形)観察表

棟号 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	器種	遺構	法量 (cm)			木取り	樹種	備考
181	W161-1	1256	1B-7e	舟形	15流路 下層	33.2	4	0.5	板目材		保存処理
181	W161-2	1256	1B-7e	舟形	15流路 下層	33.5	4	0.6	板目材		保存処理、朱?模様
181	W162	1989-3	1B-6e	舟形	15流路 下層	△12.3	△2	0.9	榎木取り		
181	W163	2014	1B-6e	舟形	15流路 下層	△37.5	3.3	1.7	榎木取り		
182	W164	3297	1B-10g	エブリ形	802流路	△18.3	3.5	0.5	板目材		柄との接合孔あり
182	W165	3299	1B-10g	籬形?	802流路	11	3.6	0.4	板目材	スギ	

第35表 木器・編み物観察表(1)

標記番号	遺物番号	取上番号	地区T23-7a	種類	器種	遺構	包含層	法量 (cm)	本取り	樹種	備考
183	W166	772	1B-5f	曲物	桶底板	15流路	上層	16.3 △6.7 0.7	板目材		
183	W167	927	1B-6e	曲物	桶底板	15流路	上層	18.2 △14.3 0.6	板目材		橡皮紐付き、罫引
183	W168	989	1B-7e	曲物	桶底板	15流路	上層	△35.1 △10.6 1.4	板目材		
183	W169	889-2	1B-6e	曲物	桶側板	15流路	上下層境	△32.1 6.5 0.9	板目材		保存処理
183	W169	889-1	1B-6e	曲物	桶底板	15流路	上下層境	20.7 20.3 0.7	板目材		保存処理
184	W170	1105	1B-6e	曲物	桶蓋板	15流路	下層	12.5 12.5 0.8	板目材		作り粗雑
184	W171	1984	1B-6e	曲物	桶底板	15流路	下層	△17.8 △6.8 0.5	板目材		
184	W172	1985	1B-6e	曲物	桶底板	15流路	下層	18.3 △11.5 0.5	板目材		
184	W173	460	1B-5d	曲物	桶底板	15流路	下層	△16.7 △6.9 0.8	追板目材		橡皮紐付き
184	W174	1986	1B-9e	曲物	桶底板	15流路	下層	△18.3 △9.1 0.6	板目材		橡皮紐付き
184	W175	1131-1	1B-7e	曲物	桶底板	15流路	下層	△18.2 △3.5 0.7	板目材		橡皮紐付き
184	W176	1208	1B-7e	曲物	桶底板	15流路	下層	24 22.1 0.6	板目材		保存処理
184	W177	1129-1	1B-6e	曲物	桶側板	15流路	下層	10.2 1.7 0.3	板目材		橡皮紐付き
184	W178	1171	1B-6e	曲物	桶側板	15流路	下層	9.5 8.3 0.5	板目材		
185	W179	2111	1B-7e	曲物	桶側板	515土坑		△47 △42.5 8.1	(内)板目材 (外)板目材	アスノ口 罫	保存処理
186	W180	1628	1B-7e	指物	側板	15流路	下層	42.6 7.4 0.6	板目材		台形、目釘あり
186	W181	3787	2B-1f	指物	側板	802流路		32 4.9 1.3	板目材		少し反る、目釘・穿孔あり
187	W182	2380	1B-10h	挽物	皿	116柱穴		△19.8 △16.8 1.2	縦本取り		ケヤキ
187	W183	2300	1B-7e	挽物	皿	15流路	下層	△21.5 △21.1 1.2	縦本取り		ケヤキ
187	W184	1080	1B-6e	挽物	碗	15流路	下層	△15.3 △6 3.9	横本取り		保存処理、黒漆塗布
188	W185	3377	1B-10f	羽物	槽・盤類	802流路		△41.8 13.4 13.2	横本取り		脚付
188	W186	3257 ・3283	1B-10f	羽物	槽・盤類	802流路		56.4 18.9 6.1	横本取り		
188	W187	3333	2B-1g	羽物	槽・盤類	802流路		38.8 △10.3 7.6	横本取り		
188	W188	3334	1B-10f	羽物	槽・盤類	802流路		25 21.9 5.7	横本取り		
189	W189	607	1B-7g	農具	田下駄	8溝		41.7 12.3 1.5	板目材		3孔式
189	W190	1992	1B-5e	農具	馬鞆	15流路	下層	△54.9 3.8 2.3	縦本取り		台木のみ
189	W191	2374	1B-7e	農具	鋤	15流路	下層	20 17 1.8	追板目材	アカガシ 垂流	保存処理
190	W192	2839-1	2B-1g	農具	馬鞆	599流路		△56.5 13.8 5.3	横本取り		台木と両側合
190	W193	2778	2B-1g	農具	横鞆	599流路		42.3 21.7 2	板目材	アカガシ 垂流	保存処理、橡皮紐残存
191	W194	2785	1B-9g	農具	柄	599流路		△72.7 5.5 3.3	縦本取り		磨粉Vc類(町田他編1985)か
191	W195	2835	2B-1f	農具	田下駄	599流路		△80.5 5.4 5	横本取り		方形枠型田下駄枠材
191	W196	2833	1B-10f	農具	田下駄	599流路		△91.9 5.9 3.7	横本取り		方形枠型田下駄枠材
192	W197	2786	1B-9g	農具	田下駄	599流路		36.4 8.4 1.8	板目材		板型田下駄
192	W198	2777-1	2B-1g	農具	田下駄	599流路		△24.6 15.5 1.7	板目材		高足型田下駄
192	W199	2670	1B-6e	農具	馬鞆	550流路		29.3 7.5 2.6	板目材	アカガシ 垂流	歯のみ、保存処理
192	W200	3765-1	1B-10e	農具	田下駄	802流路		△36.4 11.7 1.5	板目材		板型田下駄
192	W201	3457	1B-10e	農具	曲柄又類	802流路		△16 △11 1.1	板目材		ナシ型下駄
193	W202	3128	2B-1f	農具	田下駄		7-2a層	47.7 △9.5 1.6	板目材		板型田下駄
193	W203	3119	1B-10f	農具	馬鞆		7-2a層	△54.8 5.2 3.5	縦本取り		台木のみ
194	W204	560	2B-1e	紡織具	木鉢	15流路	上層	15.1 6.3 5.3	芯持材	イヌガヤ	
194	W205	495-1	1B-9e	紡織具	経送り具?	15流路	上層	△31.8 11.8 1.6	板目材		
194	W206	2189	1B-8e	紡織具?	枠?	15流路	下層	△31.6 12 2.7	横本取り		輪木と支木接合か
195	W207	2838	2B-1g	紡織具	枠	599流路		58.7 △4.9 3.2	板目材		腕木
195	W208	1860	2B-1g	紡織具	枠	599流路		△65.3 3.8 1.7	板目材		支木
195	W209	2839-2	2B-1g	紡織具	布送り具?	599流路		48.8 3.7 1.4	板目材		
195	W210	2776	2B-1g	紡織具	タタリ	599流路		27.7 15.9 △12.9	芯持材	1B・5f 2B・1e 2B・1f	土居孔内に支柱残存
195	W211	3149	1B-10f	紡織具	経送り具?	801流路		45.9 2.1 1.3	板目材		紡裏?
196	W212	536	1B-6f	建築部材	欠板	8溝		32.2 11.6 2.2	芯持材		
196	W213	933	2B-1e	建築部材	矢板	18溝岸		△30.4 6.4 6	芯持材		15流路に伴う
196	W214	2330	1B-8g	建築部材	礎板	34柱穴		25.4 6.6 6	横本取り		掘立柱建物2
196	W215	2331	1B-6g	建築部材	柱根	30柱穴		49.8 22.2 16.4	芯持材		掘立柱建物10
196	W216	2388	1B-10g	建築部材	柱根	109柱穴		35.2 14.8 14.4	芯持材		掘立柱建物12
196	W217	2364	1B-8g	建築部材	柱根	394柱穴		15.6 11 4.5	芯持材		
196	W218	2292	1B-6g	建築部材	柱根	321柱穴		12.2 9.6 7.4	芯持材		
196	W219	2673	1B-8e	建築部材	棒子	550流路		△83.3 10.4 3.8	板目材		

第36表 木器・編み物観察表(2)

採回 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	種類	器種	遺構	包含層	法量 (cm)				木取り	樹種	備考
								最大長	最大幅	最大厚	重量			
197	W220	3442	1B-10f	建築部材	柱	801流路		△85.6	17	13.6		志去材		
197	W221	3144	2B-1f	建築部材	杭	801流路		△129.4	5.1	4.6		志去材	転用材	
197	W222	3142	2B-1g	建築部材	根太か垂木	801流路		△120	7.4	4.2		志去材		
197	W223	3143	2B-1g	建築部材	根太か垂木	801流路		△113.5	5	3.6		志去材		
198	W224	3331	2B-1g	建築部材	扉口材	802流路		△95.2	11.8	6.8		志去材	観放か	
198	W225	3458	1B-10e	建築部材	水平構造材	802流路		△121.1	4.8	4.2		志去材		
198	W226	3427	1B-10f	建築部材	梁?	802流路		△214.8	10.1	6.6		志去材		
198	W227	3462	1B-10e	建築部材	柱	802流路		249.9	10.4	10.7		志持材		
198	W228	3811	1B-10e	建築部材	礎板	802流路		27.4	9.1	8		横木取り		
199	W229	3433	2B-1g	建築部材	杭	802流路		△98.1	9.1	3.8		志去材		
199	W230	3326	2B-1g	建築部材	杭	802流路		109.6	10	4.2		志去材	転用材	
199	W231	3431	2B-1g	建築部材	杭	802流路		△93.4	7.1	4.1		志去材	転用材	
199	W232	3261	1B-10f	建築部材	矢板	802流路		△83.9	18.3	3.1		志去材		
199	W233	3780	1B-10e	建築部材	木桶	802流路		△120.1	18.2	5.5		志去材		
200	W234	457	1B-7d	建築部材	杭		4-1a層	51.2	4.4	4.2		志持材		
200	W235	3120	1B-10f 2B-1f	建築部材	床材?		7-2a層	△99.4	14.6	4.4		志去材		
201	W236	614	1B-8g	服飾具	下駄	8溝		△21.0	△9.8	4.9		志去材	クリ	CIVb類(明田徳福1985)か
201	W237	3770	1B-10f	雑具	腰掛脚板	599流路		19.9	13.1	1.9		板目材	スギ	
201	W238	3132	1B-10f 2B-1f	雑具	腰掛脚板		7-2a層	40	17.8	2.8		板目材		
202	W239	1656-1	1B-5e	加工材		15流路 下層		△25.4	1.9	1.7		横木取り		立体人形か
202	W240	3799	1B-5e	加工材	祭服具?	550流路 下層		31.2	1.7	1		横木取り		先端焦げ
202	W241	3418	2B-1g	加工材	建築部材?	802流路		59.9	2.9	1.9		横木取り		有頭状加工
202	W242	3118	1B-10f	加工材	建築部材?		7-2a層	△92.2	6.9	2.2		板目材		先端に方形状孔
203	W243	1095	1B-6e	編み物	かご	15流路 下層		27.4	18.4			マタタビか		底部～底縁帯部
203	W244	1182	1B-7e	編み物	かご	15流路 下層		32.2	29.6			マタタビか		体部
205	W245	2000	1B-7e	文字資料	木簡?	15流路 下層		16.3	1.9	0.6			スギ	「□□」・081型式
205	W246	1038	1B-6e	文字資料	木簡状木製品	15流路 下層		17.8	2.1	0.3				

第37表 金属器観察表

採回 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種類	法量 (cm・g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
204	F 1	3263	1B-6f	550流路		袋状鉄斧	10.0	3.2	2.0	60.1	木質(柄)一部遺存
204	Br 1	1173	1B-7e	擬立柱建物14 13柱穴		銅製腰帯金具 逆方	3.3	3.2	0.2	20	外面黒漆塗、小孔・脚筋式
204	Br 2	1840	1B-10h	15流路	下層	銅製腰帯金具 山形	2.5	1.8	0.5	7.1	外面黒漆塗、小孔・脚筋式
204	Br 3	545	1B-6f	8溝		銅銭 承和昌寶	2	2	0.2	2	小様か
204	Br 4	1103	2B-1e	17耕作溝群		銅銭 和同開珎	2.5	2.5	0.2	2.3	和同開珎A(新和銅)
	Br 5	821	1B-9g	17耕作溝群		不明銅製品	△3.8	△2.8	0.2	9.5	写真図版143-1

第38表 ガラス製品観察表

採回 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7d-	層位	種類	法量 (cm・g)				備考
						最大長	最大幅	最大厚	重量	
G 1	117	1B-9f		1-1a層～2-2a層	不明	2.3	0.6	0.6	3.2	カリウム鉛ガラス製、写真図版143-4

第39表 墨書土器・文字瓦観察表(1)

採回番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d	遺構	層位	種別	量量 (cm)	特徴 (顕著等)	胎土	焼成	色調	備考
206	Po409	2114	1B-7e	15流路	下層	須恵器 高台付環	12.7 4.0	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	良好	内外面とも褐色	外面底部に墨書「田上」
206	Po410	1690 2019	1B-6e	15流路	下層	須恵器 環	13.5 3.3	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	外/灰青～灰白色 内/黒褐色～灰黄色	外面底部に墨書「田伏」
206	Po411	1191	1B-7e	15流路	下層	須恵器 環	- △2.1	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	良好	内外面とも灰白～灰色	外面底部に墨書「□(田*)伏」
206	Po412	2017	1B-6e	15流路	下層	須恵器 環	11.9 3.2	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	ふつう	外/灰白～灰色 内/にぶい黄～浅灰色	外面体部に墨書「田中下」
206	Po413	1596	1B-6e	15流路	下層	須恵器 環	Φ13.0 3.3	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	ふつう	内外面とも灰白色	外面底部に墨書「□(田*)中下」
206	Po414	2581-1	1B-6e	500流路	上層	須恵器 皿	Φ15.6 2.6	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	内外面とも灰白色	外面底部に墨書「田中下」 転用疑わ
206	Po415	1711-1	1B-7g	95柱穴		須恵器 環	- △0.8	外面：回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	良好	外/灰白～灰色 内/褐色～灰色	外面底部に墨書「田中□(フ*)」
206	Po416	3323-1	2B-1e	7-1a層		須恵器 環	- △1.4	外面：体部回転ナデ、底部ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ後一部ナデ	密	ふつう	内外面とも灰白色	外面底部に墨書「田中」
206	Po417	2126 2515	1B-7g	49柱穴		須恵器 環	- △2.1	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ後ナデ、底部磨滅	密	やや良好	外/灰白色 内/灰白～褐色	外面底部に墨書「田中」
206	Po418	710	1B-5g	4-2a層		須恵器 環	- △0.6	外面：底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	やや良好	外/黄灰色 内/褐色	外面底部に墨書「田中」
206	Po419	1192	1B-6e	15流路	下層	須恵器 蓋	14.8 2.0	外面：天井部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	やや良好	内外面とも褐色黄～黒色	外面天井部に墨書
206	Po420	1690	1B-7e	15流路	下層	須恵器 高台付環	13.3 5.6	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	ふつう	外/灰黄褐色 内/浅灰色	外面底部に墨書「田南」
206	Po421	1006	1B-6e	15流路	下層	須恵器 高台付環	13.2 4.2	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	ふつう	外/灰色 内/灰黄褐色	外面底部に墨書「田南」
206	Po422	1214	1B-7e	15流路	下層	須恵器 高台付環	Φ13.0 4.7	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	ふつう	内外面とも灰白色	外面底部に墨書「田南」
206	Po423	1178	2B-1g	4-2a層		須恵器 環	- △0.8	外面：回転糸切りナデ 内面：回転ナデ、ナデ	密	やや良好	外/黄灰～褐色 内/褐色～黄褐色	外面底部に墨書「田南」
206	Po424	1112	1B-7e	15流路	上層	須恵器 環	- △2.6	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	ふつう	内外面とも灰白～褐色 灰黄色	外面底部に墨書「田南」
207	Po425	1170 1174	1B-6e	15流路	下層	須恵器 蓋	14.8 1.9	外面：天井部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	ふつう	内外面とも褐色灰黄色	外面天井部に墨書「田中」
207	Po426	1696	1B-7f	78柱穴		須恵器 皿	Φ13.2 1.9	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	ふつう	内外面とも灰白色	外面底部に墨書「田中」
207	Po427	857-1	1B-5f	15流路	上層	須恵器 環	- △1.7	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	外面底部に墨書「田中」
207	Po428	882-1	1B-5g	15流路	下層	須恵器 高台付環	- △1.8	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り後一部ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	やや良好	外/褐色～黒色 内/灰白～黄灰色	外面底部に墨書「田」
207	Po429	1525-1	2B-1e	15流路	下層	須恵器 高台付環	- △1.8	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	やや良好	内外面とも灰色	外面底部に墨書「田中」
207	Po430	840	2B-1e	15流路	上層	須恵器 環	Φ14.0 3.1	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	やや不真	内外面とも灰白色	外面底部に墨書「田」
207	Po431	2531	1B-7f	55柱穴		須恵器 高台付環	13.6 4.1	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰白～黄灰色 内/灰白色	外面底部に墨書「□」
207	Po432	1622-2	1B-7e	15流路	下層	須恵器 環	Φ15.6 2.3	外面：体部風化のため調整不明、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	ふつう	外/暗灰黄色 内/灰黄色	外面底部に墨書「□(田*)□□」
207	Po433	1302 2968	1B-9f	4-2a層		須恵器 蓋	- △2.2	外面：つまみ部ナデ、天井部回転糸切り、天井部周縁ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	ふつう	内外面とも灰白色	内面天井部に墨書「□□(田*)」

第40表 墨書土器・文字瓦観察表(2)

採回番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d	遺構	層位	種類	量量 (cm)	特徴 (顕微等)	胎土	焼成	色調	備考
207	Po434	1643	1B-6e	15流路	下層	須恵器 蓋	13.2 2.9	外面：つまみ部ナデ、天井部回転糸切り、天井部周縁ナデ、底部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	天井部外面に墨書「由書」
207	Po435	881-1	1B-5f	15流路	下層	須恵器 杯	- △1.2	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	ふつう	内外面とも灰白色	外面底部に墨書「東家」
207	Po436	2174	1B-6e	15流路	下層	須恵器 蓋	15.3 2.8	外面：つまみ部ナデ、天井部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/青灰色	外面天井部に墨書「由」
207	Po437	1595	1B-6e	15流路	下層	須恵器 蓋	14.4 3.3	外面：つまみ部ナデ、天井部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰～暗灰色	外面天井部に墨書「東家」
207	Po438	2008	1B-6e	15流路	下層	須恵器 高杯	- △11.7	外面：回転ナデ 内面：杯部ナデ、脚部しほり目・回転ナデ	密	やや良好	外/灰色 内/灰白色	内面杯部に墨書「小東」
207	Po439	1621-3	1B-6e	15流路	下層	須恵器 杯	- △1.4	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	内外面ともオリーブ 黒～黄褐色	外面底部に墨書「小東」
208	Po440	1087	1B-6e	15流路	下層	須恵器 杯	◆12.6 2.6	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	ふつう	外/灰白色 内/灰白色	外面底部に墨書「高□」
208	Po441	1166 1221	1B-7e	15流路	下層	須恵器 高台付杯	16.8 7.2	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	外/灰白～灰オリーブ色 内/黒灰～灰黄褐色	外面底部に墨書「路中□」
208	Po442	1101	1B-7e	15流路	上層	須恵器 杯	◆14.6 2.1	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ後一部ナデ	密	ふつう	内外面とも灰白～黄灰色	外面底部に墨書「家□」
208	Po443	1599	1B-7e	15流路	下層	須恵器 高台付杯	- △1.2	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ後ナデ	密	良好	外/灰白～灰色 内/灰白色	外面底部に墨書「家」
208	Po444	1621-1	1B-6e	15流路	下層	須恵器 蓋	16.5 2.8	外面：つまみ部ナデ、天井部回転糸切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	ふつう	外/灰白～黒色 内/オリーブ黒～灰黄色	外面天井部に墨書「西」
208	Po445	955	1B-6e	15流路	下層	須恵器 高台付杯	12.8 5.0	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	やや良好	外/黒～暗黄褐色 内/黒褐色	内外面底部に墨書「段藏上」
208	Po446	1173-1	1B-7e	15流路	下層	須恵器 杯	- △2.1	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ・ナデ	密	良好	内外面とも灰白	外面底部に墨書「竹川此□」
208	Po447	1008	1B-5e	15流路	下層	須恵器 高台付杯	- △3.7	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	やや良好	内外面とも灰白色	外面底部に墨書「□」
208	Po448	870	1B-6e	15流路	上層	須恵器 杯	12.7 5.1	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	ふつう	外/黄褐色 内/オリーブ褐色	外面底部に墨書「□」
208	Po449	1740-1 2176	1B-6e	15流路	下層	須恵器 蓋	22.0 43.7	外面：口縁～頸部回転ナデ、体部～底部タタキ 内面：口縁～頸部回転ナデ・ナデ、体部～底部迄貫貫	密	良好	外/青灰～灰色 内/黄灰～青灰色	外面肩部に墨書「□(海*)□□□」
209	Po450	1206-3	1B-7e	15流路	下層	須恵器 蓋	13.6 2.6	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	外/黄灰～オリーブ 黒色 内/黄灰～灰黄色	外面底部に墨書「□□(家*)」
209	Po451	1222	1B-7e	15流路	下層	須恵器 杯	13.0 4.0	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	やや良好	外/灰オリーブ色 内/灰白色	外面底部に墨書「□□□(家*)」
209	Po452	2106	1B-7e	15流路	下層	須恵器 高台付杯	◆13.4 3.7	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	ふつう	外/灰白～灰色 内/灰白色	外面底部に墨書「□」
209	Po453	743	1B-8f	4-2a層	土師器 高台付杯	- △1.6	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ後一部ナデ	密	良好	外/にぶい橙～黒灰色 内/にぶい橙～黒灰色・暗赤褐色	外面底部に墨書「□(家*)」	
209	Po454	867	1B-5e	15流路	上層	須恵器 高台付杯	- △2.1	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	外/黒褐～灰色 内/灰～灰白色	外面底部に墨書「□」
209	Po455	1621-2	1B-6e	15流路	下層	須恵器 杯	◆13.7 3.4	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	やや良好	内外面とも灰色	外面底部に墨書「□」
209	Po456	2187-1	1B-6e	15流路	下層	須恵器 杯	◆12.6 3.5	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	内外面とも灰色	外面底部に墨書「□」

第41表 墨書土器・文字瓦観察表(3)

採回番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d	遺構	層位	種類	量量 (cm)	特徴 (顕著等)	胎土	焼成	色調	備考
209	Po457	852	1B-9e	15流路	下層	須恵器蓋	16.3 2.5	外面：つまみ部ナデ、天井部回転糸切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部回転ナデ後ナデ、体部回転ナデ	密	やや良好	内外面とも灰白色	天井部外面に墨書「□」 外面付着
209	Po458	1695	1B-6e	15流路	下層	須恵器蓋	- △1.7	外面：つまみ～天井部ナデ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	やや良好	外/灰黄～黄灰色 内/灰黄色	内面天井部に墨書「□」
209	Po459	732	1B-7f		4-2a層	須恵器蓋	φ12.9 1.5	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	やや不良	内外面とも灰白色	外面底部に墨書「□」
209	Po460	2178	1B-6e	15流路	下層	須恵器杯	φ14.7 △2.7	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切りナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	良好	外/灰白～灰色 内/灰～黄灰色	内面底部墨痕？文字？
209	Po461	1135-3	1B-7e	15流路	下層	須恵器杯	φ12.7 4.8	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	外/灰～灰黄色 内/オリーブ黒～灰黄色	外面底部に墨書「□」
209	Po462	1093	1B-6e	15流路	下層	須恵器高台付杯	16.5 6.8	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	外/黄灰～灰白色 内/灰黄色	外面底部に墨書「□」 内面底部墨痕
209	Po463	1621-4	1B-6e	15流路	下層	須恵器高台付杯	- △2.8	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	外/暗灰～灰白色 内/灰～灰黄色	外面底部に墨書「□□□」
210	Po464	1230	1B-7e	15流路	下層	須恵器高台付杯	18.2 8.2	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	ふつう	内外面とも灰白～灰黄色	外面底部に墨書「□□」
210	Po465	2183-1	1B-7e	15流路	下層	須恵器高台付杯	12.0 3.7	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	外/灰白～灰色 内/灰白色	外面底部に墨書□ 内面底部墨痕(転用)
210	Po466	1900	1B-7g	3S1土坑		須恵器杯	- △3.1	外面：体部回転ナデ、底部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	外面底部墨痕？文字？
210	Po467	2298	1B-5e	15流路	下層	須恵器杯	11.9 2.7	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り内面：回転ナデ	密	やや良好	外/灰白～オリーブ黒色 内/灰白～黄灰色	底部外面に墨書「□(高?)」
210	Po468	1891 2403	1B-10g	138柱穴		須恵器杯	φ11.7 3.7	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	ふつう	外/灰白～灰黄褐色 内/灰白～黄灰色	外面底部に墨書「×」 内面底部に墨書「-」
210	Po469	1877	1B-7g	51柱穴		須恵器粟	- △7.4	外面：タタキ 内面：当て具	密	良好	外/灰～オリーブ灰色 内/暗灰～暗オリーブ灰色	内面底部墨痕？絵？
210	Po470	1637	1B-6e	15流路	下層	須恵器高台付杯	φ15.6 5.2	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	外/黄灰～黒褐色 内/灰～黒褐色	外面底部に墨書「□」 内面底部にヘラ記号・墨痕(転用)
210	Po471	2009-1	1B-6e	15流路	下層	須恵器蓋	φ13.7 2.1	外面：つまみ部ナデ、天井部～体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	ふつう	外/灰白～暗灰色 内/灰白～灰色	外面天井部：墨書内面転用
210	Po472	1648-1	1B-7e	15流路	下層	須恵器杯	φ12.7 4.3	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	やや良好	外/黄灰色 内/灰～灰白色	内面底部墨痕
211	Po473	287	1B-7f		3-3a層	文字瓦	40.4 2.7	凸面：ナデ・捺印 凹面：布目一部ヘラケズリ後ナデ?	密	やや良好	外/黄灰～淡黄色 内/浅黄～灰白色	文字捺印

第42表 文字資料一覧表(1)

棟号 番号	写真 ID	遺物 番号	整理 番号	取上番号	遺構/層位	法量 (cm)	器種	記載部位	釈文案	備考	
306	145	Po409	2033	2114	150瓦路	下層	13×13	磁器器	高台付坯	底-外	「田伏上」
306	145	Po410	2012	1600-2019	150瓦路	下層	12×7.5	磁器器	坯	底・外・底・内	「田伏」(私用規?)
306	145	Po411	2131	1191-1206	150瓦路	下層		磁器器	坯	底-外	□(田+伏)
306	145	Po412	2035	2017	150瓦路	下層	12.5×12.3	磁器器	坯	底-外	「田中下」
306	145	Po413	2149	1506	150瓦路	下層	9.5×9.5	磁器器	坯	底-外	□(田中+中下)
306	145	Po414	2040	2581	500瓦路	上層	13×13	磁器器	坯	底-外	「田中下」(私用規?)
306	145	Po415	2030	1711-1	願立付建物4 (600瓦)		5.4×4.8	磁器器	坯	底-外	田中□「下」
306	145	Po416	2129	3023		7-1a層	10×6.5	磁器器	坯	底-外	田中
306	145	Po417	2048	2136-2515	願立付建物4 (490瓦)		5.5×2.8	磁器器	坯	底-外	「田中」
306	145	Po418	2008	710		4-2a層	4.8×4	磁器器	蓋	底-外	「田中」
306	145	Po419	2130	1192-1134-1135	150瓦路	下層	1815.2	磁器器	蓋	天井-外	「田中」
306	145	Po420	2131	1600-1622	150瓦路	下層	10×9	磁器器	高台付坯	底-外	「田中」
306	146	Po421	2133	1006-1520	150瓦路	下層		磁器器	高台付坯	底-外	「無田中」
306	146	Po422	2147	1214-1206-1045	150瓦路	下層	11×10	磁器器	高台付坯	底-外	「無田中」
306	146	Po423	2025	1128		4-2a層	5.3×5	土師器	坯	底-外	「田中」
306	146	Po424	2142	1112-1073	150瓦路	上層		磁器器	坯	底-外	「無田中」
307	146	Po425	2052	1170-1174	150瓦路	下層	7.2×6.2	磁器器	蓋	天井-外	「田中」
307	146	Po426	2054	1696	願立付建物9 (780瓦)		12.5×8.7	磁器器	皿	底-外	「田中」
307	146	Po427	2004	857-1	150瓦路	上層	7.5×6	磁器器	坯	底-外	「田中」
307	146	Po428	2002	882-1	150瓦路	下層	8×5	磁器器	高台付坯	底-内	「田中」
307	146	Po429	2013	1525-1	150瓦路	上層	8×5	磁器器	高台付坯	底-外	「有」
307	146	Po430	2140	840	150瓦路	上層	11.5×8	磁器器	坯	底-外	「田中」
307	146	Po431	2059	2531	500瓦路	下層	7.2×5.9	磁器器	高台付坯	底-外	□
307	146	Po432	2116	1622-2	150瓦路	下層	9×7.2	磁器器	坯	底-外	□□(田中)田中
307	147	Po433	2046	1302-1216-2368		4-2a層	9.3×6.3	磁器器	蓋	天井-外(右)	「田中」
307	147	Po434	2010	1643	150瓦路	下層	14.5×13.5	磁器器	蓋	天井-外(右)	「田中」
307	147	Po435	2063	881-1-831-961	150瓦路	下層	9.5×8.5	磁器器	坯	底-外	「田中」
307	147	Po436	2034	2174	150瓦路	下層	15.5×13.5	磁器器	蓋	天井-外	「田中」
307	147	Po437	2148	1566	150瓦路	下層	1815	磁器器	蓋	天井-外	「田中」
307	147	Po438	2029	2008	150瓦路	下層	11.5×9.8	磁器器	高台	坪部	「田中」
307	147	Po439	2018	1621-3	150瓦路	下層	12.5×12	磁器器	坯	底-外	「田中」
308	147	Po440	2001	1087	150瓦路	下層	9.5×8.5	磁器器	坯	底-外	「田中」
308	147	Po441	2042	1166-1221-1206-1222-1240	150瓦路	下層	15.5×9.5	磁器器	高台付坯	底-外	「田中」
308	147	Po442	2022	1101-1085-1111	150瓦路	上層	10×7.5	磁器器	坯	底-外	「田中」(「田中」)
308	147	Po443	2016	1302-1216-2368	150瓦路	下層	6×6	磁器器	高台付坯	底-外	「田中」
308	147	Po444	2016	1621-1	150瓦路	下層	6×7	磁器器	蓋	天井-外(右)	「田中」
308	148	Po445	2142	955-983	150瓦路	下層	13×12	磁器器	高台付坯	底・外・底・内	「田中」/「田中」
308	148	Po446	2135	1173-1-1112-1223-1216-1521	150瓦路	下層	8.5×8	磁器器	坯	底-外-外	「竹田川」□(入+)
308	148	Po447	2143	1008	150瓦路	下層	5×9	磁器器	高台付坯	底-外	「田中」
308	148	Po448	2043	820	150瓦路	上層	φ13	土師器	坯	底-外	「田中」
308	148	Po449	2037	1740-1-1647-1-2176	150瓦路	下層	19.5×14	磁器器	蓋	底-外	□(海+)(田中)
309	148	Po450	2028	1306-3-1511-1116	150瓦路	下層	7×5	磁器器	坯	底-外	□□(田中)
309	148	Po451	2015	1222-1240	150瓦路	下層	13×11	磁器器	底	底-外	□□□□(田中)
309	148	Po452	2036	2106	150瓦路	下層	12.5×9.5	磁器器	高台付坯	底-外	□□
309	148	Po453	2139	743	4-2a層	6×5	土師器	高台付坯	底-外	□(田中)	
309	148	Po454	2141	807	150瓦路	下層	4.5×6.5	磁器器	高台付坯	底-外	□□
309	148	Po455	2017	1621-2	150瓦路	下層	8.4×6	磁器器	坯	底-外	□□
309	149	Po456	2058	2187-1	150瓦路	下層	10.5×9	磁器器	坯	底-外	□□
309	149	Po457	2047	1999-1975	150瓦路	下層	9×8.5	磁器器	蓋	天井-外	□□□□
309	149	Po458	2011	1695-1647	150瓦路	下層	6.9×6.3	磁器器	蓋	天井-内	□□□
309	149	Po459	2053	732	4-2a層	12.2×8	磁器器	皿	底-外	□□	
309	149	Po460	2122	2178	150瓦路	下層	12×8.7	磁器器	坯	底-内	「田中」
309	149	Po461	2117	1135-3-1161	150瓦路	下層	4.2×5.8	土師器	坯	底-外	「田中」
309	149	Po462	2020	1603-1092-1019	150瓦路	下層	10.5×9.5	磁器器	高台付坯	底・外・底・内	□□□□「田中」
309	149	Po463	2019	1621-4-1592-1-1206	150瓦路	下層	11×7.5	磁器器	高台付坯	底-外	□□□□
309	149	Po464	2134	1233-1222	150瓦路	下層		磁器器	高台付坯	底-外	□□□□
309	149	Po465	2057	2183-1	150瓦路	下層	11.2×5.2	磁器器	高台付坯	底・外・底・内	□/「田中」(私用規)
309	149	Po466	2126	1900	願立付建物10 (330瓦)		9×8.3	磁器器	蓋	天井-外	「田中」?文字?
310	150	Po467	2044	2298	150瓦路	下層	12.2×12.2	磁器器	坯	底-外	□(高+)
310	150	Po468	2032	1891-2403	願立付建物15 (1380瓦) 願立付建物24 (2700瓦)		8.3×5.3	磁器器	坯	底-内-内	外:×/内:一
310	150	Po469	2125	1877	願立付建物4 (510瓦)		7.5×4.5	磁器器	蓋	底-内	「田中」?文字?
310	150	Po470	2093	1637-2114	150瓦路	下層	12×7	磁器器	高台付坯	底・外・底・内	□□□□(私用規)
310	150	Po471	2086	2059-1-881	150瓦路	下層	11.5×10.7	磁器器	蓋	天井-外	□□□□(私用規)
310	150	Po472	2045	1302-1-1648-1	150瓦路	下層	12.5×8.5	磁器器	坯	底・外・底・内	□
311	150	Po473	2041	1494-287-1493他		3-3a層	8.5×5.5		文字瓦		1-2a(高上) 文字瓦と組合
311	151	Po498	2075	629-1	8溝		3.5×3	磁器器	坯	底-外	□
311	151	Po499	2088	627	8溝		2.8×2	磁器器	坯	底-外	□
311	151	Po500	2089	0629-2	8溝		3×2.8	磁器器	坯	1層-外	□

第43表 文字資料一覽表(2)

種別 番号	写真 IDNo	遺物 番号	整理 番号	取上番号	遺構/層位	法量 (cm)	器種	記載部位	釈文案	備考	
151	Pv001	2091	630-1		8溝	4.5×3.2	磁器器	底・外	□		
151	Pv002	2106	526		8溝	6.5×5	土師器	高台付坯	底・外	□	
151	Pv003	2124	628		8溝	3.7×2.7	磁器器	底・外	墨痕?文字?		
151	Pv004	2062	1917-1		竪立柱建物1 (22段式)	4×3.5	磁器器	底・外	底・外	□	
151	Pv005	2066	1697		竪立柱建物1 (22段式)	5.7×3	磁器器	底・外	底・外	□	
151	Pv006	2081	1763		竪立柱建物4 (49段式)	4.7×4.5	磁器器	高台付坯	底・外	□	
151	Pv007	2073	2286		竪立柱建物4 (49段式)	6.2×4.5	磁器器	裏	底・外	寸法×寸	
151	Pv008	2058	2400		竪立柱建物5 (56段式)	6.2×4.2	磁器器	底・外	底・外	□	
151	Pv009	2087	2074		竪立柱建物9 (81段式)	3.3×2.5	磁器器	底・外	底・外	□	
151	Pv010	2065	1628		竪立柱建物9 (81段式)	3.5×3	磁器器	高台付坯	底・外	□	
151	Pv011	2082	1810		竪立柱建物10 (91段式)	3.7×3.5	磁器器	底・内	底・内	□	
151	Pv012	2039	2286		竪立柱建物14 (131段式)	2.9×2.5	磁器器	底・内/底・外	□(前々) / □		
151	Pv013	2074	1049		16段付遺構	4.5×4.5	磁器器	高台付坯	底・外	□	
151	Pv014	2065	846-1		17段付遺構	5.5×4.2	磁器器	底・外	底・外	□	
151	Pv015	2059	964		17段付遺構	4×3.8	磁器器	底・外	底・外	□	
151	Pv016	2064	812		17段付遺構	3.3×2.6	土師器	底・外	底・外	□	
151	Pv017	2069	878		17段付遺構	4.2×7.2	磁器器	高台付坯	底・外	□	
152	Pv018	2021	1521-1	15c路	下層	3×3	磁器器	底・外	□(前々) 曲		
152	Pv019	2027	1206-1	15c路	下層	6.4×5	磁器器	底・外	底・外	□	
152	Pv020	2054	2066-1	15c路	下層	7.5×7	磁器器	底・外	底・外	□	
152	Pv021	2055	2182-2	15c路	下層	6.3×6.1	磁器器	底・外	底・外	□	
152	Pv022	2056	2281-1・2187	15c路	下層	5.3×3.2	磁器器	底・外	底・外	□	
152	Pv023	2067	1206-2	15c路	下層	3.8×3	磁器器	高台付坯	底・外	□	
152	Pv024	2070	882-2	15c路	下層	7×2	磁器器	高台付坯	底・外/内	底・外/内	底・外/内
152	Pv025	2071	1126-1	15c路	下層	8×5	磁器器	高台付坯	底・外	底・外	□
152	Pv026	2085	2187-2	15c路	下層	3.2×2.3	磁器器	裏	天弁・外	底・外	□
152	Pv027	2086	1206-3	15c路	下層	11.5×3	磁器器	底・外	底・外	底・外	□
152	Pv028	2092	2122・1521	15c路	下層	13.5×11	磁器器	高台付坯	底・外	底・外	□
152	Pv029	2097	1522	15c路	下層	8.3×4.5	磁器器	裏	天弁・内	底・外	□
152	Pv030	2101	1206-6	15c路	下層	4.5×3.5	磁器器	高台付坯	底・外	底・外	□
152	Pv031	2101	1521-3・1206	15c路	下層	6.3×5	磁器器	高台付坯	底・外/底・内	底・外/底・内	□(口)遺構
152	Pv032	2105	1246-5	15c路	下層	6×4.7	磁器器	底・内	底・内	底・内	□
152	Pv033	2120	2003	15c路	下層	9×8.8	磁器器	底・内	底・内	墨痕or?文字?	
152	Pv034	2121	2016	15c路	下層	15×13.5	磁器器	底・内	底・内	墨痕?文字?	
152	Pv035	2051	770-1	15c路	上層	4.8×4.8	磁器器	底・外	底・外	底・外	□
152	Pv036	2078	1111-1	15c路	上層	4.3×3	磁器器	底・外	底・外	底・外	□
153	Pv037	2084	771	15c路	上層	6×4	磁器器	底・外	底・外	底・外	□
153	Pv038	2099	796	15c路	上層	5×3.7	磁器器	裏	天弁・体内	底・外	□
153	Pv039	2100	790-1	15c路	上層	5×3.5	土師器	裏	底・外	底・外	□
153	Pv040	2102	837	15c路	上層	3.1×3	磁器器	裏	口縁・外	底・外	□
153	Pv041	2107	852-2	15c路	上層	8×5	磁器器	高台付坯	底・内	底・内	□(軸用機)
153	Pv042	2112	830	15c路	上層	14.5×6.5	磁器器	裏	底・外/内	底・外/内	□
153	Pv043	2123	802	15c路	上層	4.6×3.7	磁器器	底・外	底・外	墨痕?文字?	
153	Pv044	2063	983-1	15c路	上層	3.2×3.5	磁器器	裏	底・内	底・内	□(古骨輪末)
153	Pv045	2104	1352-2	15c路	上層	9×5	磁器器	底・外	底・外	底・外	□
153	Pv046	2118	1749-2	15c路	上層	8×5.5	磁器器	底・外	底・外	底・外	□
153	Pv047	2119	2113	15c路	上層	10×7.2	磁器器	底・外	底・外	底・外	□
153	Pv048	2137	996	15c路	上層	14.5×11	磁器器	裏	天弁・内	底・外	□
153	Pv049	2138	1107	15c路	上層	6.5×6	磁器器	底・内	軸用機、筆輪末?	底・内	□
153	Pv050	2094	2513・2458-2	550c路	上層	7.3×6.5	土師器	底・外	底・外	□(文字?)	
153	Pv051	2114	331		3-1a~ 5-2a層	2.6×1.5	磁器器	不明	不明・内	底・内	□
153	Pv052	2090	289		3-2a層	3.5×3	磁器器	底・内	底・内	底・内	□
153	Pv053	2089	417		4-1a~ 6-2a層	9.5×7	磁器器	高台付坯	底・外	底・外	□
153	Pv054	2108	589		4-1a層	5.2×2.8	磁器器	底・外	底・外/底・内	底・外/底・内	□(墨痕)
153	Pv055	2086	785-1		4-2a層	4.7×3.2	磁器器	底・外	底・外	底・外	□(伏?)
154	Pv056	2087	717-1		4-2a層	10×7.6	磁器器	高台付坯	底・外	底・外	□
154	Pv057	2031	1791		4-2a層	3.7×1.7	磁器器	底・外/底・内	底・外/底・内	底・外/底・内	□(墨痕(軸用機))
154	Pv058	2057	1541		4-2a層	5×3.7	磁器器	底・外/底・内	底・外/底・内	底・外/底・内	□(口)遺構
154	Pv059	2080	757-1		4-2a層	6.8×5.3	磁器器	底・外	底・外	底・外	□
154	Pv060	2072	1151		4-2a層	3.7×3.2	磁器器	底・外	底・外	底・外	□(軸用機)
154	Pv061	2083	735		4-2a層	8.5×4.3	磁器器	底・外	底・外	底・外	□
154	Pv062	2088	684		4-2a層	5.9×3	磁器器	高台付坯	底・外	底・外	□
154	Pv063	2113	721		4-2a層	6×4.2	磁器器	裏	天弁・内/外	底・外	□(墨痕、墨痕?)
154	Pv064	2136	690		4-2a層	11.5×10	磁器器	高台付坯	底・外	軸用機、墨痕?	
154	Pv065	2076	365		4-3a層	6.8×5	磁器器	高台付坯	底・外	底・外	□
154	Pv066	2049	2438-1		4-3a~ 6-2a層	6.3×3.8	磁器器	底・外	底・外	底・外	□(口)遺構
154	Pv067	2105	660			8×8.8	磁器器	裏	天弁・内/外	底・外	□(口)

第6節 遺構計測表

第44表 竪穴建物計測表

建物名称	地区 T23-7d-	平面形	柱数	主軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	柱間寸法 (m)	備考
竪穴建物1	1B-5f・5g・6f・6g	方形	4	N-0.7-W	6.3	5.8	0.42	2.0-2.3	
竪穴建物2	1B-5g	方形	△1	N-3.1-E	△4.2	△4.0	0.54	-	

第45表 掘立柱建物計測表(1)

建物名称	地区 T23-7d-	主軸	建物種類	梁行 (m)	桁行 (m)	梁行 柱間 (m)	桁行 柱間 (m)	身舎 面積 (㎡)	重複関係 (旧<新)	備考
掘立柱建物1	1B-7f・7g	N-12.9-E	掘柱建物	4.32	5.64	2.0-2.1	1.9-2.1	24.4	28<1	
掘立柱建物2	1B-8f・8g	N-15.4-E (東西軸N-74.6-W)	掘柱建物	3.97	6.7	1.7-2.1	1.7-2.8	26.6	-	東柱
掘立柱建物3	1B-6f・6g・7f・7g	N-9.8-E (東西軸N-80.2-W)	掘柱建物	4.29	6.11	2.1	2.0	26.2	3<18<5<8	床束建物?
掘立柱建物4	1B-7g	N-9.8-E	掘柱建物	4.66	5.92	2.1-2.4	1.8	27.6	4<10<28<1	
掘立柱建物5	1B-6g・6h・7g・7h	N-6.4-E	掘柱建物	-	7.48	2.0	2.5	-	3<18<5<8	
掘立柱建物6	1B-6g・6h・7g・7h	N-4.2-E	掘柱建物	4.7	7.62	2.5	2.3-2.7	35.8	6<8	
掘立柱建物7	1B-7g・7h・8g・8h	N-2.2-E	掘柱建物	4.17	5.1	2.1	1.7-1.8	21.3	7<20	
掘立柱建物8	1B-6g・6h・7g・7h	N-4.1-E	掘柱建物	-	5.84	2.0-2.6	2.0	-	5<6<8	
掘立柱建物9	1B-7f	N-0-E	総柱建物	4.1	4.37	1.9-2.2	2.1-2.3	17.9	-	
掘立柱建物10	1B-6e・7g	N-4.2-E	掘柱建物	4.37	6.09	2.2	2.0-2.1	26.6	4<10<28<1	
掘立柱建物11	1B-7g・7h・8g・8h	N-4.1-E	掘柱建物	-	5.37	1.8-1.9	1.8	-	-	
掘立柱建物12	1B-9h・10g・10h	N-17.7-E	掘柱建物	4.67	5.57	2.1-2.4	1.6-2.1	26.0		
掘立柱建物13	1B-10g・10h 2B-1g・1h	N-12.8-E (東西軸N-77.2-W)	掘柱建物	3.78	5.7	1.8-1.9	1.8-2.0	21.5		
掘立柱建物14	1B-9g・9h・10g・10h	N-12.8-E (東西軸N-77.2-W)	掘柱建物	4.19	5.45	1.9-2.2	1.7-1.9	22.8		
掘立柱建物15	1B-10g・10h 2B-1g・1h	N-14.3-E	掘柱建物	4.48	6.87	2.0-2.4	2.1-2.4	30.8		
掘立柱建物16	1B-10g・2B-1f・1g	N-7.0-E	掘柱建物	3.54	4.67	1.8	1.8-2.8	16.5		轆の変形
掘立柱建物17	1B-10e・10f 2B-1e・1g	N-0-E (東西軸N-90-W)	掘柱建物	3.46	4.68	1.7-1.9	1.4-1.8	16.2		轆の変形

第46表 掘立柱建物計測表(2)

建物名称	地区 T23-7d	主軸	建物種類	奥行 (m)	桁行 (m)	妻行 柱間 (m)	桁行 柱間 (m)	身舎 面積 (㎡)	重複関係 (旧<新)	備考
掘立柱建物18	1B-6c・7g	N-7.0-E	掘立柱建物	4.29	5.68	2.0-2.1	1.7-2.1	24.4	3<18<5<8	
掘立柱建物19	1B-1g・1h	N-6.4-E	掘立柱建物	-	4.2	-	2.1	-	-	
掘立柱建物20	1B-8b	N-7.0-E	掘立柱建物	-	5.98	-	1.8-2.1	-	7<20	
掘立柱建物21	1B-10g・10h 2B-1g・1h	N-15.7-E (東西軸N-74.3-W)	掘立柱建物	3.25	4.39	1.2-1.7	1.2-1.7	14.3	21<15-13	櫓の変形
掘立柱建物22	1B-10g・10h	N-16.0-E (東西軸N-74.0-W)	掘立柱建物	2.7	3.47	1.2-1.5	1.0-1.3	9.4	22<12-15-24	櫓の変形・南 面? 束柱?
掘立柱建物23	1B-10g	N-17.3-E	掘立柱建物	3.6	4.88	1.5-2.1	2.2-2.7	17.6		
掘立柱建物24	1B-10g・10h	N-16.0-E	掘立柱建物	3.64	3.2	1.2-1.8	1.5-2.1	11.6	22<24<12	
掘立柱建物25	1B-5f・5g・6f・6g	N-15.0-E	掘立柱建物	4.08	6.92	1.7-1.8	2.0-2.5	28.2	-	5面段階 で検出
掘立柱建物26	1B-5g	N-13.4-E	掘立柱建物	3.04	3.75	1.7-2.0	1.5-1.6	11.4	-	5面段階 で検出
掘立柱建物27	1B-5g・6g	N-14.2-E	掘立柱建物	3.02	4	1.5	2.0-2.1	12.1	-	5面段階 で検出
掘立柱建物28	1B-7g	N-12.4-E	掘立柱建物	3.3	3.47	1.8	1.5-2.1	11.5	28<1 28<4<10	5面段階 で検出
掘立柱建物29	1B-7f・7g・8f・8g	N-13.7-E	掘立柱建物	4.51	5.23	1.4-1.5	1.7-1.8	23.6		
掘立柱建物30	1B-7f・7g・8f・8g	N-9.8-E	掘立柱建物	3.77	3.83	1.8-2.0	1.7-2.1	14.4		
掘立柱建物31	1B-7f・7g	N-8.1-E	掘立柱建物	3.7	4.58	1.8-1.9	1.5-1.6	16.9		
掘立柱建物32	1B-6c・6h	N-8.1-E	掘立柱建物	-	5.02	-	1.4-1.9	-		
掘立柱建物33	1B-7g	N-13.8-E	掘立柱建物	3.1	3.89	1.4-1.7	1.9-2.0	12.1		
掘立柱建物34	1B-6g・7g	N-15.0-E	掘立柱建物	3.6	5.94	-	-	21.4		

第47表 柱穴・土坑・ピット計測表(1)

個別遺構名	集合遺構名	地区 T23-7d-	遺構面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
10	土坑	2B-1h	3面(4-1a層下面)	59	49	11	
12	土坑	2B-1g	3面(4-1a層下面)	67	47	9	
19	柱穴	掘立柱建物1	1B-7g	4面(4-2a層下面)	118	114	44
20	柱穴	掘立柱建物1	1B-7g・7f	4面(4-2a層下面)	70	46	43
21	柱穴	掘立柱建物1	1B-7g・7f	4面(4-2a層下面)	74	63	54 柱痕
22	柱穴	掘立柱建物1	1B-7g	4面(4-2a層下面)	97	74	52 柱痕、土器
23	柱穴	掘立柱建物1	1B-7g	4面(4-2a層下面)	74	66	25
25	柱穴	掘立柱建物1	1B-7g	4面(4-2a層下面)	62	38	28
26	柱穴	掘立柱建物1	1B-7g	4面(4-2a層下面)	83	47	39 柱痕
27	柱穴	掘立柱建物2	1B-8g	4面(4-2a層下面)	64	62	45 柱痕
28	柱穴	掘立柱建物2	1B-8g	4面(4-2a層下面)	66	57	49 柱痕、柱根
29	柱穴	掘立柱建物2	1B-8g	4面(4-2a層下面)	59	49	45 柱痕
30	柱穴	掘立柱建物2	1B-8f	4面(4-2a層下面)	59	46	41
31	柱穴	掘立柱建物2	1B-8f	4面(4-2a層下面)	80	63	20
32	柱穴	掘立柱建物2	1B-8f	4面(4-2a層下面)	55	48	26 柱痕
33	柱穴	掘立柱建物2	1B-8g	4面(4-2a層下面)	65	42	41 柱痕
34	柱穴	掘立柱建物2	1B-8g	4面(4-2a層下面)	86	66	52 柱痕、礎板
35	柱穴	掘立柱建物2	1B-8g	4面(4-2a層下面)	65	56	42
36	柱穴	掘立柱建物2	1B-8g	4面(4-2a層下面)	58	46	38 柱痕、礎板
37	柱穴	掘立柱建物2	1B-8g	4面(4-2a層下面)	67	51	39 柱痕、根石?
39	柱穴	掘立柱建物3	1B-6g	4面(4-2a層下面)	88	77	47 柱痕
40	柱穴	掘立柱建物3	1B-6g	4面(4-2a層下面)	91	73	31
41	柱穴	掘立柱建物3	1B-6g・6f	4面(4-2a層下面)	82	75	41
42	柱穴	掘立柱建物3	1B-7g	4面(4-2a層下面)	93	81	34
43	柱穴	掘立柱建物3	1B-7g	4面(4-2a層下面)	72	68	58 柱痕、根石、土器
44	柱穴	掘立柱建物3	1B-6g・7g	4面(4-2a層下面)	76	-	24
45	柱穴	掘立柱建物3	1B-6g・7g	4面(4-2a層下面)	45	44	26
46	柱穴	掘立柱建物4	1B-7g	4面(4-2a層下面)	90	-	38
47	柱穴	掘立柱建物4	1B-7g	4面(4-2a層下面)	90	74	31
48	柱穴	掘立柱建物4	1B-7g	4面(4-2a層下面)	84	66	40
49	柱穴	掘立柱建物4	1B-7g	4面(4-2a層下面)	80	75	53 礎
50	柱穴	掘立柱建物4	1B-7g	4面(4-2a層下面)	65	41	25
51	柱穴	掘立柱建物4	1B-7g	4面(4-2a層下面)	72	45	20 木
52	柱穴	掘立柱建物4	1B-7g	4面(4-2a層下面)	81	72	48
53	柱穴	掘立柱建物5	1B-6g	4面(4-2a層下面)	93	61	67 柱痕
54	柱穴	掘立柱建物5	1B-6g	4面(4-2a層下面)	74	60	67 柱痕
55	柱穴	掘立柱建物5	1B-6g・7g	4面(4-2a層下面)	86	73	50
56	柱穴	掘立柱建物5	1B-7g	4面(4-2a層下面)	76	68	50
57	柱穴	掘立柱建物5	1B-7g	4面(4-2a層下面)	△85	-	48
59	柱穴	掘立柱建物6	1B-6g	4面(4-2a層下面)	80	73	29 柱痕
60	柱穴	掘立柱建物6	1B-6g・7g	4面(4-2a層下面)	102	92	36
61	柱穴	掘立柱建物6	1B-7g	4面(4-2a層下面)	93	86	45 柱痕、礎
62	柱穴	掘立柱建物6	1B-7g	4面(4-2a層下面)	106	103	42 柱痕
63	柱穴	掘立柱建物6	1B-7g	4面(4-2a層下面)	57	40	23
64	柱穴	掘立柱建物7	1B-7h	4面(4-2a層下面)	74	-	45
65	柱穴	掘立柱建物7	1B-7g	4面(4-2a層下面)	43	37	29
66	柱穴	掘立柱建物7	1B-7g	4面(4-2a層下面)	66	48	52 柱痕
67	柱穴	掘立柱建物7	1B-7g	4面(4-2a層下面)	65	64	46 柱痕
68	柱穴	掘立柱建物7	1B-8g	4面(4-2a層下面)	47	37	30 柱痕
69	柱穴	掘立柱建物20	1B-8h	4面(4-2a層下面)	73	65	72 柱痕
70	柱穴	掘立柱建物7	1B-7h	4面(4-2a層下面)	△60	△50	22 柱痕
71	柱穴	掘立柱建物7	1B-7h	4面(4-2a層下面)	55	46	26
72	柱穴	掘立柱建物8	1B-6g	4面(4-2a層下面)	33	32	13
73	柱穴	掘立柱建物8	1B-6g	4面(4-2a層下面)	70	62	48 柱痕
74	柱穴	掘立柱建物8	1B-6g・7g	4面(4-2a層下面)	62	54	51 柱痕
75	柱穴	掘立柱建物8	1B-7g	4面(4-2a層下面)	53	52	54 柱痕、根石
76	柱穴	掘立柱建物8	1B-7g	4面(4-2a層下面)	66	61	53 柱痕、根石
77	柱穴	掘立柱建物8	1B-7g	4面(4-2a層下面)	71	-	34
78	柱穴	掘立柱建物9	1B-7f	4面(4-2a層下面)	74	58	41 土器
79	柱穴	掘立柱建物9	1B-7f	4面(4-2a層下面)	88	55	39 柱痕、柱根
80	柱穴	掘立柱建物9	1B-7f	4面(4-2a層下面)	75	71	24 柱痕
81	柱穴	掘立柱建物9	1B-7f	4面(4-2a層下面)	69	62	40 柱痕
82	柱穴	掘立柱建物9	1B-7f	4面(4-2a層下面)	77	60	32
83	柱穴	掘立柱建物9	1B-7f	4面(4-2a層下面)	55	47	47 柱根

第48表 柱穴・土坑・ピット計測表(2)

個別遺構名	集合遺構名	地区 T23-7a	遺構面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考	
84	柱穴	掘立柱建物9	1B-7f	4面(4-2a層下面)	59	45	32	柱痕
85	柱穴	掘立柱建物9	1B-7f	4面(4-2a層下面)	66	47	34	柱痕
86	柱穴	掘立柱建物9	1B-7f	4面(4-2a層下面)	76	43	45	柱痕
90	柱穴	掘立柱建物10	1B-6g	4面(4-2a層下面)	91	67	52	柱痕
91	柱穴	掘立柱建物10	1B-6g	4面(4-2a層下面)	72	65	44	柱痕、木、土器
92	柱穴	掘立柱建物10	1B-6g	4面(4-2a層下面)	87	67	59	柱痕
93	柱穴	掘立柱建物10	1B-6g	4面(4-2a層下面)	66	63	57	柱根
94	柱穴	掘立柱建物10	1B-7g	4面(4-2a層下面)	88	55	36	柱痕、柱根
95	柱穴	掘立柱建物4	1B-7g	4面(4-2a層下面)	143	93	53	
96	柱穴	掘立柱建物10	1B-7g	4面(4-2a層下面)	71	54	45	柱痕
97	柱穴	掘立柱建物10	1B-6g	4面(4-2a層下面)	68	66	52	柱根
99	柱穴	掘立柱建物11	1B-7g	4面(4-2a層下面)	48	-	34	
100	柱穴	掘立柱建物11	1B-7g	4面(4-2a層下面)	88	70	58	柱痕
101	柱穴	掘立柱建物11	1B-7g	4面(4-2a層下面)	63	59	40	
102	柱穴	掘立柱建物11	1B-7g	4面(4-2a層下面)	66	56	26	柱痕
103	柱穴	掘立柱建物11	1B-7g・8g	4面(4-2a層下面)	88	72	48	
104	柱穴	掘立柱建物11	1B-7h・8h	4面(4-2a層下面)	49	-	36	
108	柱穴	掘立柱建物12	1B-9h・10h	4面(4-2a層下面)	77	57	48	柱痕
109	柱穴	掘立柱建物12	1B-10g	4面(4-2a層下面)	52	40	54	
110	柱穴	掘立柱建物12	1B-10g	4面(4-2a層下面)	84	68	36	柱根
111	柱穴	掘立柱建物12	1B-10g	4面(4-2a層下面)	86	55	31	柱痕
112	柱穴	掘立柱建物12	1B-10g	4面(4-2a層下面)	81	52	33	柱痕
113	柱穴	掘立柱建物12	1B-10g	4面(4-2a層下面)	81	70	39	
114	柱穴	掘立柱建物12	1B-10h	4面(4-2a層下面)	58	48	45	
115	柱穴	掘立柱建物12	1B-10h	4面(4-2a層下面)	52	45	48	柱根
116	柱穴	掘立柱建物12	1B-10h	4面(4-2a層下面)	-	61	47	柱痕、土器
117	柱穴	掘立柱建物12	1B-10h	4面(4-2a層下面)	73	58	47	
118	柱穴	掘立柱建物13	1B-10h	4面(4-2a層下面)	53	45	34	柱痕
119	柱穴	掘立柱建物13	1B-10h	4面(4-2a層下面)	46	44	38	柱痕
120	柱穴	掘立柱建物13	1B-10g	4面(4-2a層下面)	56	40	35	
121	柱穴	掘立柱建物15	2B-1g・1h	4面(4-2a層下面)	-	60	42	柱痕、碑?
122	柱穴	掘立柱建物13	2B-1h	4面(4-2a層下面)	49	-	34	
123	柱穴	掘立柱建物13	2B-1h	4面(4-2a層下面)	58	47	39	柱痕、土器
124	柱穴	掘立柱建物13	2B-1h	4面(4-2a層下面)	67	60	33	柱痕
125	柱穴	掘立柱建物13	2B-1h	4面(4-2a層下面)	43	40	40	
126	柱穴	掘立柱建物14	1B-9h	4面(4-2a層下面)	81	53	45	柱痕
127	柱穴	掘立柱建物14	1B-9g	4面(4-2a層下面)	55	40	33	柱痕
128	柱穴	掘立柱建物14	1B-9g	4面(4-2a層下面)	47	38	47	柱痕
129	柱穴	掘立柱建物14	1B-9g・10g	4面(4-2a層下面)	91	57	42	木、土器
130	柱穴	掘立柱建物14	1B-10g	4面(4-2a層下面)	70	64	29	
131	柱穴	掘立柱建物14	1B-10g	4面(4-2a層下面)	70	67	52	土器
132	柱穴	掘立柱建物14	1B-10g	4面(4-2a層下面)	84	69	24	
133	柱穴	掘立柱建物14	1B-10g・10h	4面(4-2a層下面)	56	44	41	
134	柱穴	掘立柱建物14	1B-10h	4面(4-2a層下面)	77	59	40	遠方
135	柱穴	掘立柱建物14	1B-10h	4面(4-2a層下面)	△71	59	29	柱痕
136	柱穴	掘立柱建物15	1B-10h	4面(4-2a層下面)	92	60	49	柱痕
137	柱穴	掘立柱建物15	1B-10h	4面(4-2a層下面)	52	48	26	
138	柱穴	掘立柱建物15	1B-10g	4面(4-2a層下面)	65	64	30	柱痕
139	柱穴	掘立柱建物15	1B-10g	4面(4-2a層下面)	66	65	32	柱痕、礎板
140	柱穴	掘立柱建物15	1B-10g	4面(4-2a層下面)	57	49	49	柱痕
141	柱穴	掘立柱建物15	2B-1h・1g	4面(4-2a層下面)	68	33	11	
142	柱穴	掘立柱建物15	2B-1h	4面(4-2a層下面)	67	60	32	柱痕
143	柱穴	掘立柱建物15	2B-1h	4面(4-2a層下面)	79	46	57	柱痕
144	柱穴	掘立柱建物15	1B-10h	4面(4-2a層下面)	65	62	62	柱根
145	柱穴	掘立柱建物15	1B-10h	4面(4-2a層下面)	77	56	37	柱痕
147	柱穴	掘立柱建物16	1B-10g・2B-1g	4面(4-2a層下面)	67	55	43	
148	柱穴	掘立柱建物16	1B-10f・2B-1f	4面(4-2a層下面)	87	53	23	
149	柱穴	掘立柱建物16	2B-1f	4面(4-2a層下面)	51	50	29	柱痕
150	柱穴	掘立柱建物16	2B-1f	4面(4-2a層下面)	84	43	47	柱根
151	柱穴	掘立柱建物16	2B-1f	4面(4-2a層下面)	56	53	34	
152	柱穴	掘立柱建物16	2B-1g	4面(4-2a層下面)	63	63	37	柱根
153	柱穴	掘立柱建物16	2B-1g	4面(4-2a層下面)	73	61	47	礎石
154	柱穴	掘立柱建物16	2B-1g	4面(4-2a層下面)	130	69	41	
158	柱穴	掘立柱建物17	1B-10f	4面(4-2a層下面)	62	49	22	柱痕

第49表 柱穴・土坑・ビット計測表(3)

個別遺構名	集合遺構名	地区 T23-7a	遺構面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考	
159	柱穴	掘立柱建物17	1B-10f	4面(4-2a層下面)	57	52	24	柱痕
160	柱穴	掘立柱建物17	1B-10f	4面(4-2a層下面)	64	59	15	
161	柱穴	掘立柱建物17	1B-10f・10e	4面(4-2a層下面)	52	40	14	
162	柱穴	掘立柱建物17	1B-10f・10e	4面(4-2a層下面)	74	62	25	柱痕
163	柱穴	掘立柱建物17	1B・2B-1f・1e	4面(4-2a層下面)	45	42	33	柱痕
164	柱穴	掘立柱建物17	2B-1f	4面(4-2a層下面)	49	42	14	
165	柱穴	掘立柱建物17	2B-1f	4面(4-2a層下面)	54	48	24	柱痕
166	柱穴	掘立柱建物17	2B-1f	4面(4-2a層下面)	49	37	5	
167	柱穴	掘立柱建物17	1B-10f・2B-1f	4面(4-2a層下面)	64	58	23	
168	柱穴	掘立柱建物22	1B-10h	4面(4-2a層下面)	69	57	43	柱痕
169	柱穴	掘立柱建物24	1B-10h	4面(4-2a層下面)	61	47	52	柱根
170	柱穴	掘立柱建物24	1B-10h・10g	4面(4-2a層下面)	61	45	39	柱根
171	柱穴	掘立柱建物24	1B-10g	4面(4-2a層下面)	41	34	13	
172	土坑	1B-10g	4面(4-2a層下面)	38	36	10		
173	柱穴	掘立柱建物21	2B-1g	4面(4-2a層下面)	55	36	21	
176	柱穴	掘立柱建物21	1B-10h	4面(4-2a層下面)	63	55	25	柱痕
177	柱穴	掘立柱建物22	1B-10h	4面(4-2a層下面)	58	47	26	
178	柱穴	掘立柱建物21	1B-10h	4面(4-2a層下面)	△78	60	56	
179	柱穴	掘立柱建物21	1B-10h	4面(4-2a層下面)	66	50	32	柱痕
180	柱穴	掘立柱建物21	1B-10h・10g	4面(4-2a層下面)	51	45	27	
181	柱穴	掘立柱建物21	1B-10g 2B-1g	4面(4-2a層下面)	103	77	35	柱痕
182	土坑	1B-10g	4面(4-2a層下面)	43	31	18		
184	柱穴	掘立柱建物21	2B-1g	4面(4-2a層下面)	85	56	30	
185	柱穴	掘立柱建物21	2B-1h	4面(4-2a層下面)	60	47	36	
186	柱穴	掘立柱建物21	2B-1h	4面(4-2a層下面)	△52	49	23	柱痕
187	柱穴	掘立柱建物21	2B-1h	4面(4-2a層下面)	69	55	50	
188	土坑	2B-1g	4面(4-2a層下面)	38	33	15		
189	柱穴	掘立柱建物23	1B-10g	4面(4-2a層下面)	56	55	27	柱痕、礎
190	柱穴	掘立柱建物23	1B-10g	4面(4-2a層下面)	47	45	29	柱痕
191	柱穴	掘立柱建物23	1B-10g	4面(4-2a層下面)	54	51	22	礎
192	柱穴	掘立柱建物23	1B-10g	4面(4-2a層下面)	46	40	15	
193	柱穴	構列1	1B-10g	4面(4-2a層下面)	30	22	35	
194	柱穴	構列1	1B-10g	4面(4-2a層下面)	35	29	34	
195	柱穴	構列2	1B-10g	4面(4-2a層下面)	49	34	27	
196	柱穴	構列2	1B-10g	4面(4-2a層下面)	30	28	37	
197	柱穴	1B-9g	4面(4-2a層下面)	50	47	41	柱痕	
198	ビット	1B-9g	4面(4-2a層下面)	27	24	12		
200	柱穴	掘立柱建物23	1B-10g	4面(4-2a層下面)	-	38	19	
201	柱穴	掘立柱建物23	1B-10g	4面(4-2a層下面)	40	37	40	柱痕
202	ビット	1B-10g	4面(4-2a層下面)	26	21	24		
203	柱穴	掘立柱建物24	1B-10g	4面(4-2a層下面)	56	44	27	
205	柱穴	2B-1g	4面(4-2a層下面)	53	38	32	柱痕	
206	柱穴	2B-1g	4面(4-2a層下面)	△55	52	40		
207	柱穴	2B-1g	4面(4-2a層下面)	64	57	23	柱痕	
209	土坑	1B-9h	4面(4-2a層下面)	44	33	25		
214	柱穴	1B-9g	4面(4-2a層下面)	-	-	-	柱痕	
218	柱穴	1B-9g	4面(4-2a層下面)	59	47	16		
220	柱穴	1B-9g	4面(4-2a層下面)	39	36	40		
222	柱穴	1B-9g	4面(4-2a層下面)	64	50	38	柱痕	
223	土坑	1B-9g	4面(4-2a層下面)	54	45	16		
224	土坑	1B-9g	4面(4-2a層下面)	49	44	26		
225	柱穴	構列4	1B-9g	4面(4-2a層下面)	26	23	13	
226	柱穴	構列4	1B-9g	4面(4-2a層下面)	28	21	18	
227	柱穴	構列4	1B-9g	4面(4-2a層下面)	24	16	22	
229	ビット	1B-9h	4面(4-2a層下面)	33	25	24		
230	土坑	1B-9h	4面(4-2a層下面)	35	32	15		
231	柱穴	1B-9g	4面(4-2a層下面)	36	34	28	柱痕	
232	土坑	1B-9g	4面(4-2a層下面)	34	32	32		
233	土坑	1B-9h・9g	4面(4-2a層下面)	42	39	17		
234	柱穴	掘立柱建物14	1B-9h	4面(4-2a層下面)	-	△44	50	
236	土坑	1B-9g	4面(4-2a層下面)	37	35	23		
237	土坑	1B-9g	4面(4-2a層下面)	37	30	19		
239	ビット	1B-10g	4面(4-2a層下面)	21	18	19		
240	ビット	1B-10g	4面(4-2a層下面)	48	35	35		

第50表 柱穴・土坑・ピット計測表(4)

個別遺構名	集合遺構名	地区 T23-7a	遺構面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考	
241	柱穴	掘立柱建物23	1B-10g	4面(4-2a層下面)	42	37	35	柱痕
242	柱穴	掘立柱建物23	1B-10g	4面(4-2a層下面)	41	-	52	
244	柱穴	掘立柱建物24	1B-10g	4面(4-2a層下面)	37	31	20	柱痕
246	柱穴	掘立柱建物24	1B-10h	4面(4-2a層下面)	68	40	29	
247	ピット		1B-10h	4面(4-2a層下面)	26	24	12	
248	ピット		1B-9g・10g	4面(4-2a層下面)	22	19	19	
249	ピット		1B-10g	4面(4-2a層下面)	27	25	14	
251	土坑		1B-10g	4面(4-2a層下面)	41	32	20	
252	土坑		1B-10g	4面(4-2a層下面)	37	20	12	
253	ピット		1B-10g	4面(4-2a層下面)	25	22	20	
255	ピット		1B-10g	4面(4-2a層下面)	24	20	17	
256	柱穴	構列3	1B-10g	4面(4-2a層下面)	25	21	32	
258	ピット		1B-10g	4面(4-2a層下面)	33	23	11	
259	柱穴	構列3	1B-10g	4面(4-2a層下面)	33	26	16	
261	柱穴	掘立柱建物23	1B-10g	4面(4-2a層下面)	60	31	49	柱痕
262	ピット		1B-10g	4面(4-2a層下面)	27	20	20	
263	柱穴	掘立柱建物23	1B-10g	4面(4-2a層下面)	54	52	27	柱痕
266	柱穴		1B-10g	4面(4-2a層下面)	45	37	40	柱根
270	土坑		1B-10g	4面(4-2a層下面)	41	-	30	
273	柱穴	掘立柱建物24	1B-10g	4面(4-2a層下面)	△42	-	26	
274	土坑		1B-10h	4面(4-2a層下面)	-	33	23	
275	柱穴	掘立柱建物23	1B-10g	4面(4-2a層下面)	33	29	36	柱痕
277	柱穴	掘立柱建物22	1B-10h・10g	4面(4-2a層下面)	82	58	48	柱痕
281	ピット		1B-10h	4面(4-2a層下面)	-	32	24	
283	柱穴	掘立柱建物22	1B-10h	4面(4-2a層下面)	53	50	35	柱痕
285	柱穴	掘立柱建物22	1B-10h	4面(4-2a層下面)	57	53	35	
286	土坑		1B-10h・10g	4面(4-2a層下面)	49	-	14	
287	土坑		1B-10h	4面(4-2a層下面)	46	38	23	
288	土坑		1B-10h	4面(4-2a層下面)	34	31	21	
289	柱穴	掘立柱建物21	2B-1h	4面(4-2a層下面)	53	21	23	
290	土坑		2B-1h・1g	4面(4-2a層下面)	322	131	31	
291	ピット		1B-10h	4面(4-2a層下面)	22	18	17	
293	土坑		2B-1h	4面(4-2a層下面)	△78	43	32	
294	ピット		2B-1h	4面(4-2a層下面)	22	20	17	
295	柱穴		2B-1h	4面(4-2a層下面)	31	24	32	柱痕
296	ピット		2B-1h	4面(4-2a層下面)	29	26	19	
297	柱穴	掘立柱建物13	2B-1h	4面(4-2a層下面)	47	43	26	
298	土坑		2B-1g	4面(4-2a層下面)	40	37	32	
300	柱穴		2B-1g	4面(4-2a層下面)	42	32	29	柱痕
303	土坑		2B-1g	4面(4-2a層下面)	42	40	27	
304	土坑		2B-1g	4面(4-2a層下面)	48	42	25	
306	ピット		2B-1g	4面(4-2a層下面)	32	26	15	
307	ピット		2B-1g	4面(4-2a層下面)	19	15	21	
308	ピット		2B-1g	4面(4-2a層下面)	30	26	15	
310	柱穴		2B-1g	4面(4-2a層下面)	26	20	27	柱痕
312	柱穴	構列2	1B-10f	4面(4-2a層下面)	46	38	29	
313	柱穴	構列2	1B-10f	4面(4-2a層下面)	42	38	18	
314	柱穴	構列3	1B-10f	4面(4-2a層下面)	23	20	11	
315	柱穴	構列1	1B-10f	4面(4-2a層下面)	32	25	22	
316	柱穴	掘立柱建物27	1B-5g	4面(4-2a層下面)	76	42	50	
321	柱穴		1B-6g	4面(4-2a層下面)	49	39	40	柱根
323	柱穴		1B-6g	4面(4-2a層下面)	31	29	28	柱痕
326	柱穴		1B-6g	4面(4-2a層下面)	30	27	30	柱痕
327	柱穴		1B-6g	4面(4-2a層下面)	31	28	31	柱痕
328	ピット		1B-6g	4面(4-2a層下面)	23	16	20	
329	土坑		1B-6g	4面(4-2a層下面)	52	41	27	
330	柱穴	掘立柱建物18	1B-6g	4面(4-2a層下面)	60	54	41	柱痕
331	柱穴	掘立柱建物18	1B-6g	4面(4-2a層下面)	74	66	64	柱痕
332	柱穴		1B-6g	4面(4-2a層下面)	39	33	42	柱痕
336	柱穴		1B-6g・6f	4面(4-2a層下面)	43	42	20	柱痕
339	土坑		1B-6g	4面(4-2a層下面)	-	46	23	
341	ピット		1B-6g	4面(4-2a層下面)	30	25	13	
343	柱穴	掘立柱建物18	1B-6g	4面(4-2a層下面)	58	50	44	柱痕
345	ピット		1B-6g	4面(4-2a層下面)	26	21	31	

第51表 柱穴・土坑・ビット計測表(5)

個別遺構名	集合遺構名	地区 T2-7d-	遺構面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考	
346	ビット	1B-6g	4面(4-2a層下面)	26	25	24		
347	ビット	1B-7g	4面(4-2a層下面)	22	21	22		
348	ビット	1B-7g	4面(4-2a層下面)	23	20	18		
349	土坑	1B-6g	4面(4-2a層下面)	△35	34	35		
351	柱穴	掘立柱建物10	1B-7g	4面(4-2a層下面)	83	64	26	柱痕、木、土器
352	柱穴	1B-7g	4面(4-2a層下面)	65	49	39		
356	柱穴	掘立柱建物28	1B-7g	4面(4-2a層下面)	108	65	36	
359	柱穴	掘立柱建物4	1B-7g	4面(4-2a層下面)	82	62	30	柱根
363	土坑	1B-7g	4面(4-2a層下面)	43	39	35		
365	土坑	1B-7g	4面(4-2a層下面)	42	37	10		
366	土坑	1B-7g	4面(4-2a層下面)	31	28	22		
369	柱穴	1B-7g	4面(4-2a層下面)	42	41	28	柱痕	
370	柱穴	掘立柱建物28	1B-7g	4面(4-2a層下面)	83	71	38	柱痕、土器
371	ビット	1B-7g	4面(4-2a層下面)	27	23	10		
372	ビット	1B-7g	4面(4-2a層下面)	18	16	22		
373	柱穴	1B-7g	4面(4-2a層下面)	-	47	47		
374	ビット	1B-7g	4面(4-2a層下面)	32	29	14		
377	ビット	1B-8g	4面(4-2a層下面)	34	32	25		
379	柱穴	1B-8g	4面(4-2a層下面)	71	61	18	土器	
380	柱穴	1B-7g	4面(4-2a層下面)	-	54	42	柱痕	
386	ビット	1B-8g	4面(4-2a層下面)	72	57	57		
390	土坑	1B-8f	4面(4-2a層下面)	58	55	15		
391	土坑	1B-8f	4面(4-2a層下面)	41	37	12		
394	柱穴	掘立柱建物2	1B-8g	4面(4-2a層下面)	44	38	31	柱根
396	柱穴	掘立柱建物3	1B-7f	4面(4-2a層下面)	71	57	40	
402	柱穴	1B-7f	4面(4-2a層下面)	29	28	19	柱痕	
403	柱穴	1B-7f	4面(4-2a層下面)	37	34	31	柱痕	
410	土坑	1B-7f	4面(4-2a層下面)	42	37	34		
417	ビット	1B-7f	4面(4-2a層下面)	32	29	14		
419	土坑	1B-7f・8f	4面(4-2a層下面)	71	67	26		
420	土坑	1B-7f・8f	4面(4-2a層下面)	88	80	34	土器	
421	柱穴	1B-8f	4面(4-2a層下面)	49	36	38	柱痕	
422	柱穴	1B-9f	4面(4-2a層下面)	36	33	34	柱痕	
423	柱穴	掘立柱建物10	1B-7g	4面(4-2a層下面)	62	40	27	
424	柱穴	掘立柱建物4	1B-7g	4面(4-2a層下面)	-	△34	46	
425	柱穴	1B-6g	4面(4-2a層下面)	44	41	26		
430	柱穴	掘立柱建物19	1B-7g・7h	4面(4-2a層下面)	73	△55	53	
431	柱穴	掘立柱建物3	1B-6f	4面(4-2a層下面)	69	40	37	
432	土坑	1B-7e	4面(4-2a層下面)	89	87	27		
434	柱穴	1B-10h	4面(4-2a層下面)	75	38	27		
436	ビット	1B-10g	4面(4-2a層下面)	32	27	18		
438	柱穴	1B-10g	4面(4-2a層下面)	78	67	37	柱痕	
441	ビット	2B-1h	4面(4-2a層下面)	19	18	16		
445	柱穴	欄列1	1B-10f	4面(4-2a層下面)	26	25	25	
446	土坑	1B-9h	4面(4-2a層下面)	△44	-	20		
447	柱穴	掘立柱建物22	1B-10h	4面(4-2a層下面)	68	44	59	柱痕
448	柱穴	欄列3	1B-10f	4面(4-2a層下面)	18	16	12	
449	柱穴	欄列2	1B-10f	4面(4-2a層下面)	41	34	21	
450	ビット	1B-10g	4面(4-2a層下面)	28	27	23		
453	土坑	1B-10g	4面(4-2a層下面)	39	36	11		
454	柱穴	掘立柱建物22	1B-10h	4面(4-2a層下面)	58	46	35	柱痕
463	柱穴	1B-10g、2B-1g	4面(4-2a層下面)	26	25	39	柱痕	
464	ビット	2B-1h	4面(4-2a層下面)	29	26	16	土器	
465	ビット	1B-9f	4面(4-2a層下面)	31	26	28		
466	土坑	1B-9f	4面(4-2a層下面)	60	46	19		
467	柱穴	1B-9f	4面(4-2a層下面)	31	27	26	柱痕	
469	柱穴	欄列5	1B-9f	4面(4-2a層下面)	34	24	10	
470	ビット	1B-9f	4面(4-2a層下面)	25	25	9		
471	土坑	1B-8f	4面(4-2a層下面)	45	39	9	土器	
472	土坑	1B-7f	4面(4-2a層下面)	43	37	20		
473	柱穴	掘立柱建物26	1B-5g	4面(4-2a層下面)	62	54	16	
474	柱穴	掘立柱建物27	1B-5g	4面(4-2a層下面)	48	40	29	
477	柱穴	1B-6h	4面(4-2a層下面)	△40	35	45	柱根	
478	柱穴	掘立柱建物18	1B-6g	4面(4-2a層下面)	60	43	48	

第52表 柱穴・土坑・ピット計測表(6)

個別遺構名	集合遺構名	地区 T23-7d	遺構面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
479	柱穴	掘立柱建物18	1B-6g	4面(4-2a層下面)	67	58	71
480	柱穴	掘立柱建物18	1B-7g	4面(4-2a層下面)	53	45	43
481	柱穴	掘立柱建物20	1B-8h	4面(4-2a層下面)	76	-	56
482	土坑		1B-8g	4面(4-2a層下面)	64	29	25
483	ピット		1B-7f	4面(4-2a層下面)	27	22	14
484	柱穴	横列5	1B-9f	4面(4-2a層下面)	33	28	12
485	柱穴	横列2	1B-10e	4面(4-2a層下面)	31	27	21
486	柱穴		1B-9e	4面(4-2a層下面)	34	29	19
487	柱穴		1B-9f	4面(4-2a層下面)	42	38	22
490	ピット		1B-9e	4面(4-2a層下面)	22	18	10
491	ピット		1B-8e・9e	4面(4-2a層下面)	19	16	21
492	柱穴		1B-9e	4面(4-2a層下面)	30	27	34
493	ピット		1B-9e	4面(4-2a層下面)	24	21	25
495	柱穴	横列5	1B-9e	4面(4-2a層下面)	46	38	17
496	土坑		1B-9e	4面(4-2a層下面)	33	27	20
497	ピット		1B-9e	4面(4-2a層下面)	18	17	16
498	柱穴		1B-9g	4面(4-2a層下面)	37	33	26
499	柱穴		1B-9g	4面(4-2a層下面)	59	50	27
500	土坑		1B-9g	4面(4-2a層下面)	65	44	27
504	土坑		1B-8e	4面(4-2a層下面)	38	30	13
506	土坑		1B-8e	4面(4-2a層下面)	44	34	11
507	柱穴	掘立柱建物25	1B-6g・6f	4面(4-2a層下面)	58	54	25
508	土坑		1B-6f	4面(4-2a層下面)	45	39	19
509	柱穴		1B-6g	4面(4-2a層下面)	28	26	29
510	ピット		1B-6g	4面(4-2a層下面)	27	24	30
511	柱穴	掘立柱建物18	1B-6g	4面(4-2a層下面)	69	-	39
512	柱穴	掘立柱建物18	1B-7g	4面(4-2a層下面)	59	45	30
515	土坑		1B-7e	4面(4-2a層下面)	72	49	14
516	ピット		1B-8e	4面(4-2a層下面)	27	25	10
517	ピット		1B-8e	4面(4-2a層下面)	34	33	16
518	ピット		1B-8e	4面(4-2a層下面)	33	30	12
519	柱穴		1B-8e	4面(4-2a層下面)	32	18	49
520	土坑		1B-8e	4面(4-2a層下面)	34	29	10
522	柱穴		1B-7g	4面(4-2a層下面)	46	42	10
523	柱穴	掘立柱建物19	1B-7g・7h	4面(4-2a層下面)	63	△44	35
524	柱穴	掘立柱建物7	1B-8h	4面(4-2a層下面)	-	△70	44
525	柱穴	掘立柱建物18	1B-6g	4面(4-2a層下面)	81	60	42
526	柱穴	掘立柱建物20	1B-8h	4面(4-2a層下面)	83	75	60
527	柱穴	掘立柱建物6	1B-7h	4面(4-2a層下面)	-	-	61
528	ピット		1B-10g	4面(4-2a層下面)	29	17	25
530	ピット		1B-10f	4面(4-2a層下面)	22	21	24
531	ピット		1B-10g	4面(4-2a層下面)	27	24	19
532	土坑		2B-1h	4面(4-2a層下面)	172	105	37
533	柱穴		2B-1g	4面(4-2a層下面)	39	22	8
534	柱穴	掘立柱建物22	1B-10h	4面(4-2a層下面)	83	△52	47
536	土坑		2B-1h	4面(4-2a層下面)	△45	30	12
537	土坑		2B-1h	4面(4-2a層下面)	46	42	32
538	ピット		2B-1h	4面(4-2a層下面)	33	23	23
539	柱穴	横列3	1B-10f	4面(4-2a層下面)	△32	22	20
540	柱穴	掘立柱建物22	1B-10h・10g	4面(4-2a層下面)	103	77	47
541	柱穴	横列1	1B-10f	4面(4-2a層下面)	31	28	23
542	柱穴	横列1	1B-10e	4面(4-2a層下面)	42	36	15
544	柱穴	掘立柱建物22	1B-10h	4面(4-2a層下面)	59	51	33
545	柱穴	掘立柱建物27	1B-6g	4面(4-2a層下面)	△37	32	41
546	ピット		1B-5g	4面(4-2a層下面)	△21	20	21
547	柱穴	掘立柱建物27	1B-5g	4面(4-2a層下面)	53	△47	43
548	ピット		1B-5g	4面(4-2a層下面)	31	29	25
549	柱穴	掘立柱建物20	1B-8h	4面(4-2a層下面)	93	-	41
551	柱穴		1B-10h, 2B-1h	4面(4-2a層下面)	75	58	20
552	柱穴		1B-7f	4面(4-2a層下面)	25	21	10
553	ピット		1B-7e・7f	4面(4-2a層下面)	35	31	29
554	ピット		1B-7e	4面(4-2a層下面)	29	28	18
555	柱穴		1B-7f	5面(7-2a層上面)	75	-	36
556	柱穴		1B-7f	5面(7-2a層上面)	73	63	38

第53表 柱穴・土坑・ピット計測表(7)

個別遺構名	集合遺構名	地区 T23-7a	遺構面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考	
557	土坑	1B-7f	5面(7-2a層上面)	-	-	14		
558	柱穴	掘立柱建物27	1B-5g	4面(4-2a層下面)	53	44	19	柱痕
559	柱穴	掘立柱建物27	1B-5g	4面(4-2a層下面)	58	48	27	
560	柱穴	掘立柱建物26	1B-5g	4面(4-2a層下面)	60	55	32	柱根
561	柱穴	掘立柱建物26	1B-5g	4面(4-2a層下面)	52	49	24	柱痕
562	柱穴	掘立柱建物26	1B-5g・6g	4面(4-2a層下面)	65	60	41	柱痕
563	柱穴	掘立柱建物25	1B-5g	4面(4-2a層下面)	48	41	9	
564	柱穴	掘立柱建物25	1B-6g	4面(4-2a層下面)	41	40	9	
565	ピット	1B-5g	5面(7-2a層上面)	22	20	7		
566	柱穴	掘立柱建物26	1B-5g	4面(4-2a層下面)	100	60	31	柱根
567	柱穴	掘立柱建物25	1B-6f	4面(4-2a層下面)	57	54	31	柱根
568	柱穴	掘立柱建物25	1B-6g	4面(4-2a層下面)	59	51	27	
569	柱穴	掘立柱建物25	1B-6g	4面(4-2a層下面)	55	41	26	柱痕
570	柱穴	掘立柱建物26	1B-5g	4面(4-2a層下面)	59	53	29	柱痕
571	柱穴	掘立柱建物25	1B-6g	4面(4-2a層下面)	58	56	32	柱根
572	柱穴	掘立柱建物25	1B-6g	4面(4-2a層下面)	56	47	21	
573	柱穴	掘立柱建物25	1B-6g	4面(4-2a層下面)	67	67	23	柱痕
574	ピット	1B-6g	5面(7-2a層上面)	19	16	16		
575	柱穴	掘立柱建物27	1B-6g	4面(4-2a層下面)	62	51	32	
576	柱穴	1B-6g	5面(7-2a層上面)	29	26	23		
577	ピット	1B-5g	5面(7-2a層上面)	23	20	15		
578	柱穴	掘立柱建物25	1B-5g	4面(4-2a層下面)	58	49	21	
579	土坑	1B-7g	5面(7-2a層上面)	37	36	17		
581	柱穴	掘立柱建物25	1B-5g	4面(4-2a層下面)	51	49	34	
582	柱穴	掘立柱建物25	1B-5f	4面(4-2a層下面)	57	50	16	
583	柱穴	掘立柱建物26	1B-5g	4面(4-2a層下面)	65	46	18	
584	柱穴	1B-7g	5面(7-2a層上面)	25	22	19		
585	柱穴	掘立柱建物25	1B-5g	4面(4-2a層下面)	60	58	35	柱根
586	柱穴	掘立柱建物25	1B-5f	4面(4-2a層下面)	66	57	39	
587	柱穴	1B-9g	4面(4-2a層下面)	-	△21	38		
588	ピット	1B-10h	5面(7-2a層上面)	25	25	12		
590	ピット	2B-1g・1h	5面(7-2a層上面)	30	29	5		
591	ピット	2B-1g	5面(7-2a層上面)	26	24	13		
594	土坑	1B-6g	5面(7-2a層上面)	244	178	10		
595	土坑	1B-6g	5面(7-2a層上面)	△187	144	15		
596	柱穴	掘立柱建物2	1B-8g	4面(4-2a層下面)	42	34	50	柱痕
597	柱穴	構列4	1B-9g	4面(4-2a層下面)	25	20		
598	ピット	1B-9g	4面(4-2a層下面)	17	16	7		
602	柱穴	掘立柱建物28	1B-7g	4面(4-2a層下面)	56	44	5	
603	柱穴	掘立柱建物28	1B-7g	4面(4-2a層下面)	63	57	19	
604	柱穴	掘立柱建物28	1B-7g	4面(4-2a層下面)	59	56	10	
611	柱穴	掘立柱建物32	1B-6g	6面(7-2a層下面)	112	-	30	
612	柱穴	掘立柱建物32	1B-6g	6面(7-2a層下面)	61	△51	28	柱痕
613	柱穴	掘立柱建物32	1B-6g	6面(7-2a層下面)	89	△50	32	柱痕
614	柱穴	掘立柱建物32	1B-6g	6面(7-2a層下面)	△56	56	34	柱痕
615	柱穴	掘立柱建物30	1B-7g	6面(7-2a層下面)	58	52	27	柱痕
616	柱穴	掘立柱建物30	1B-7g・8g	6面(7-2a層下面)	61	47	47	柱痕
617	柱穴	掘立柱建物30	1B-8g	6面(7-2a層下面)	64	61	37	柱痕
618	柱穴	掘立柱建物30	1B-8g	6面(7-2a層下面)	32	25	25	
619	柱穴	掘立柱建物30	1B-8f	6面(7-2a層下面)	83	56	32	柱痕
620	柱穴	掘立柱建物30	1B-8f	6面(7-2a層下面)	77	71	36	柱痕
621	ピット	1B-7g	6面(7-2a層下面)	34	31	9		
622	ピット	1B-6g	6面(7-2a層下面)	23	21	12		
623	柱穴	掘立柱建物30	1B-7f	6面(7-2a層下面)	50	40	54	柱痕
624	柱穴	掘立柱建物30	1B-7g	6面(7-2a層下面)	48	43	49	柱痕
625	柱穴	掘立柱建物29	1B-7g	6面(7-2a層下面)	66	58	38	柱痕
626	柱穴	掘立柱建物29	1B-7g	6面(7-2a層下面)	61	53	41	
627	柱穴	掘立柱建物29	1B-8g	6面(7-2a層下面)	91	66	34	
628	柱穴	掘立柱建物29	1B-8g	6面(7-2a層下面)	83	65	34	柱痕
629	柱穴	掘立柱建物29	1B-8g	6面(7-2a層下面)	67	65	32	柱痕
630	柱穴	掘立柱建物29	1B-8f	6面(7-2a層下面)	71	61	33	
631	柱穴	掘立柱建物29	1B-8f	6面(7-2a層下面)	61	53	30	柱痕
632	柱穴	掘立柱建物29	1B-8f	6面(7-2a層下面)	55	52	20	
633	柱穴	掘立柱建物29	1B-8f	6面(7-2a層下面)	64	56	21	柱痕

第54表 柱穴・土坑・ピット計測表(8)

個別遺構名	集合遺構名	地区 T23-7d	遺構面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考	
634	柱穴	掘立柱建物29	1B-7f	6面(7-2a層下面)	83	65	16	柱痕
635	柱穴	掘立柱建物29	1B-7f	6面(7-2a層下面)	71	63	39	柱痕
636	柱穴	掘立柱建物29	1B-7f	6面(7-2a層下面)	58	50	46	
637	柱穴	掘立柱建物31	1B-7g・7f	6面(7-2a層下面)	32	31	12	
638	柱穴	掘立柱建物31	1B-7f	6面(7-2a層下面)	45	43	41	
639	柱穴	掘立柱建物31	1B-7f	6面(7-2a層下面)	49	38	16	
640	柱穴	掘立柱建物31	1B-7f・7g	6面(7-2a層下面)	39	35	15	柱痕
642	柱穴	掘立柱建物31	1B-7f	6面(7-2a層下面)	41	37	18	柱痕
645	柱穴	掘立柱建物31	1B-7f	6面(7-2a層下面)	43	41	19	柱痕
647	土坑	1B-5g	6面(7-2a層下面)	44	35	19		
649	ピット	1B-6g	6面(7-2a層下面)	28	24	14		
659	ピット	1B-6g	6面(7-2a層下面)	—	18	13		
660	ピット	1B-6g	6面(7-2a層下面)	43	32	21		
662	柱穴	1B-6g	6面(7-2a層下面)	48	45	50	柱痕	
663	土坑	1B-6g	6面(7-2a層下面)	81	72	23		
664	土坑	1B-6g	6面(7-2a層下面)	38	35	16		
665	柱穴	1B-6g	6面(7-2a層下面)	50	40	21	柱痕	
666	柱穴	掘立柱建物34	1B-6g	6面(7-2a層下面)	△45	38	26	
667	柱穴	掘立柱建物34	1B-6g	6面(7-2a層下面)	37	34	21	
668	柱穴	掘立柱建物34	1B-6g	6面(7-2a層下面)	41	32	29	柱痕
669	柱穴	掘立柱建物34	1B-6g	6面(7-2a層下面)	38	28	18	
670	ピット	1B-6g	6面(7-2a層下面)	28	26	23		
671	ピット	掘立柱建物34	1B-7g	6面(7-2a層下面)	31	27	9	
672	柱穴	掘立柱建物34	1B-7g	6面(7-2a層下面)	39	33	29	
673	ピット	1B-7g	6面(7-2a層下面)	16	15	7		
674	柱穴	掘立柱建物34	1B-7g	6面(7-2a層下面)	41	37	35	柱痕
675	柱穴	掘立柱建物34	1B-7g	6面(7-2a層下面)	59	55	24	
676	柱穴	掘立柱建物34	1B-6g	6面(7-2a層下面)	27	22	47	柱痕
677	柱穴	掘立柱建物34	1B-6g	6面(7-2a層下面)	39	29	30	
678	柱穴	1B-6g	6面(7-2a層下面)	38	32	25	柱痕	
679	土坑	1B-6g	6面(7-2a層下面)	33	24	16		
680	ピット	1B-6g	6面(7-2a層下面)	22	19	19		
682	土坑	1B-6g	6面(7-2a層下面)	64	39	10		
684	柱穴	1B-6g	6面(7-2a層下面)	51	41	51	柱痕	
685	土坑	1B-6g	6面(7-2a層下面)	40	37	32		
686	土坑	1B-6g	6面(7-2a層下面)	37	33	20		
687	ピット	1B-6g	6面(7-2a層下面)	29	28	19		
688	ピット	1B-6g	6面(7-2a層下面)	22	18	9		
692	ピット	1B-6g	6面(7-2a層下面)	24	20	17		
693	柱穴	1B-6g	6面(7-2a層下面)	39	34	20	柱痕	
695	土坑	1B-6f	6面(7-2a層下面)	52	44	25		
697	柱穴	1B-6f	6面(7-2a層下面)	31	30	48	柱痕	
698	ピット	1B-6f	6面(7-2a層下面)	23	20	7		
699	柱穴	1B-6f	6面(7-2a層下面)	40	35	35	柱痕、土器	
701	柱穴	1B-7g	6面(7-2a層下面)	51	△38	33	柱痕	
703	土坑	1B-7g	6面(7-2a層下面)	38	35	10		
705	柱穴	1B-7g	6面(7-2a層下面)	81	67	56	柱痕	
707	柱穴	1B-7g	6面(7-2a層下面)	42	35	46		
708	柱穴	1B-7g	6面(7-2a層下面)	74	55	20	柱痕	
710	土坑	1B-7g	6面(7-2a層下面)	161	△149	17		
711	柱穴	掘立柱建物33	1B-7g	6面(7-2a層下面)	54	44	32	柱根
712	柱穴	1B-7g	6面(7-2a層下面)	59	54	51		
713	柱穴	掘立柱建物33	1B-7g	6面(7-2a層下面)	34	32	29	柱痕
714	ピット	1B-7g	6面(7-2a層下面)	29	28	22		
715	土坑	1B-6g・7g	6面(7-2a層下面)	61	55	16		
716	ピット	1B-7g	6面(7-2a層下面)	29	29	14		
718	柱穴	1B-7g	6面(7-2a層下面)	93	61	47		
720	土坑	1B-7g	6面(7-2a層下面)	442	△263	9		
724	柱穴	1B-7g	6面(7-2a層下面)	23	19	27	柱痕	
725	柱穴	掘立柱建物33	1B-7g	6面(7-2a層下面)	24	22	33	柱痕
726	柱穴	掘立柱建物33	1B-7g	6面(7-2a層下面)	41	31	45	柱痕
727	柱穴	1B-7g	6面(7-2a層下面)	61	59	47	柱痕	
728	柱穴	掘立柱建物33	1B-7g	6面(7-2a層下面)	47	35	31	柱痕
730	柱穴	掘立柱建物33	1B-7g	6面(7-2a層下面)	35	35	35	柱痕

第55表 柱穴・土坑・ピット計測表(9)

個別遺構名	集合遺構名	地区 T23-7g-	遺構面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考	
732	柱穴	掘立柱建物33	1B-7g	6面(7-2a層下面)	29	25	28	柱痕
734	柱穴	掘立柱建物33	1B-7g	6面(7-2a層下面)	38	34	32	柱痕
735	ピット		1B-7g	6面(7-2a層下面)	23	19	24	
736	土坑		1B-7g	6面(7-2a層下面)	34	29	21	
740	土坑		1B-7g	6面(7-2a層下面)	176	132	23	
741	ピット		1B-7g	6面(7-2a層下面)	30	24	19	
742	土坑		1B-7g	6面(7-2a層下面)	42	26	17	
743	土坑		1B-7g	6面(7-2a層下面)	32	31	26	
745	土坑		1B-7f	6面(7-2a層下面)	35	28	19	
748	柱穴	掘立柱建物31	1B-7f	6面(7-2a層下面)	58	47	18	
750	土坑		1B-7f	6面(7-2a層下面)	137	128	25	
751	土坑		1B-7f	6面(7-2a層下面)	△349	133	35	
752	柱穴	掘立柱建物31	1B-7f	6面(7-2a層下面)	41	36	43	柱痕
753	ピット		1B-7f	6面(7-2a層下面)	28	25	11	
757	ピット		1B-7f・8f	6面(7-2a層下面)	28	25	21	
758	土坑		1B-8g・8h	6面(7-2a層下面)	33	30	26	
759	ピット		1B-8g	6面(7-2a層下面)	17	13	19	
769	ピット		1B-8g	6面(7-2a層下面)	20	18	20	
771	ピット		1B-8g	6面(7-2a層下面)	27	23	10	
772	土坑		1B-8g	6面(7-2a層下面)	40	36	13	
781	ピット		1B-8g	6面(7-2a層下面)	25	21	14	
783	ピット		1B-8f・8g	6面(7-2a層下面)	27	20	15	
785	土坑		1B-8f	6面(7-2a層下面)	46	41	25	
786	柱穴		1B-8f	6面(7-2a層下面)	54	50	32	柱痕
788	土坑		1B-8f	6面(7-2a層下面)	44	36	24	
789	土坑		1B-8f	6面(7-2a層下面)	51	42	27	
794	土坑		1B-5f・5g・6f・6g	6面(7-2a層下面)	-	360	56	土器
795	土坑		1B-6f	6面(7-2a層下面)	48	44	22	
796	土坑		1B-6g	6面(7-2a層下面)	93	△37	34	
797	ピット		1B-6g	6面(7-2a層下面)	25	22	20	
798	柱穴	掘立柱建物33	1B-7g	6面(7-2a層下面)	42	41	29	柱痕
799	ピット		1B-8g	6面(7-2a層下面)	27	23	19	
800	土坑		1B-6g	6面(7-2a層下面)	77	45	43	
803	土坑		1B-8g	6面(7-2a層下面)	31	21	17	
804	柱穴		1B-7f	6面(7-2a層下面)	43	33	19	柱痕
805	柱穴		1B-8f	6面(7-2a層下面)	40	29	21	柱痕
807	柱穴		1B-6g	6面(7-2a層下面)	56	52	20	
808	柱穴		1B-6g	6面(7-2a層下面)	49	44	30	柱痕
810	柱穴	竪穴建物1	1B-6f	6面(7-2a層下面)	55	49	43	
811	柱穴	竪穴建物1	1B-6f・6g	6面(7-2a層下面)	60	49	57	
812	柱穴	竪穴建物1	1B-6g	6面(7-2a層下面)	46	42	44	柱痕
813	柱穴	竪穴建物1	1B-6g	6面(7-2a層下面)	51	47	46	柱痕
814	土坑		1B-6f	6面(7-2a層下面)	△65	64	20	
815	土坑		1B-6g	6面(7-2a層下面)	139	113	48	土器
817	土坑		1B-8g・8h	6面(7-2a層下面)	-	47	23	
818	土坑		1B-8f	6面(7-2a層下面)	43	41	21	
819	柱穴	竪穴建物2	1B-5g	6面(7-2a層下面)	54	44	33	柱痕
820	土坑		1B-5g	6面(7-2a層下面)	△52	43	33	
821	柱穴	竪穴建物1	1B-6f	6面(7-2a層下面)	34	30	30	
822	柱穴	竪穴建物1	1B-6g	6面(7-2a層下面)	29	25	14	
823	柱穴	竪穴建物1	1B-6f	6面(7-2a層下面)	34	33	21	
824	柱穴	竪穴建物1	1B-6g	6面(7-2a層下面)	44	42	30	
825	柱穴	竪穴建物1	1B-6g	6面(7-2a層下面)	31	29	16	
826	土坑		1B-6f	6面(7-2a層下面)	57	54	10	
827	柱穴		1B-6f	6面(7-2a層下面)	75	64	28	柱痕
828	土坑		1B-6f	6面(7-2a層下面)	-	67	23	
830	土坑		1B-6f・6g	6面(7-2a層下面)	540	△172	58	
838	柱穴		1B-8g	7面(8-1a層下面)	32	27	18	
839	柱穴		1B-7g・8g	7面(8-1a層下面)	53	40	34	

第5章 2区の調査成果

第1節 調査区の概要

2区の調査前の地表面は標高約7.3～7.4mを測る。現代耕作土を標高7.0m付近まで機械掘削し、それ以下の堆積を人力掘削による調査の対象とした。調査にあたっては、大別7層、細別18層に分層した土層の堆積状況から合計6面の遺構面を設定し、これらの遺構面にあわせて各層の掘削と遺構の検出及び記録を行った。調査は標高約5.5m～6.2mとなる7～2b層まで行い、遺物が出土しないことを確認して終了した。

本調査区の西半部は、中世後期から現代に至る各時期の流路あるいは溝が走り、古代以前の地層は大きく流失していた。

また、圃場整備以前の耕作による土層の削平も著しく、特に古代から中世に相当する土層(後述の3層及び4層)は僅かに調査区南東隅に遺存するのみであった。したがって、4面より上位で検出された遺構には層序関係及び出土遺物から帰属する時期を把握することが出来ないものもあった。

調査の結果、弥生時代後期から近代にかけての遺構を確認した。特に、竪穴や土坑をはじめとする古墳時代前期の遺構、竪穴建物や土坑をはじめとする弥生時代後期から終末期の遺構が高い密度で検出された。遺構総数は92基である。

第2節 基本層序と遺構面の認識

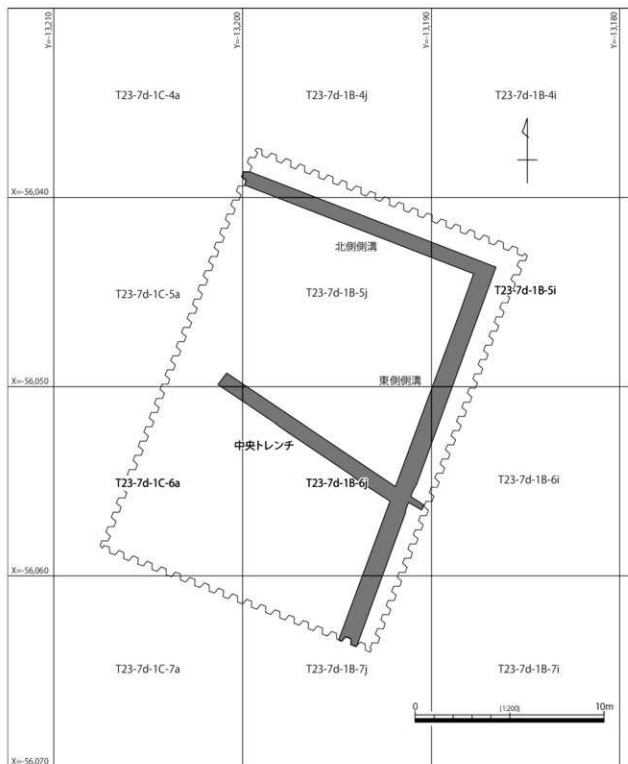
本調査区では、基本となる土層観察のトレンチとアゼを調査区の北壁と東壁沿いに設置した。しかし、北壁は中世後期から近代にかけての流路充填堆積物で占められており、基本層序の観察と記録には不適切であると考えた。よってそれを補うため、調査区の中央付近にも西北西～東南東方向のトレンチを設置し、土層断面の観察と記録を行った(第218図)。以下、本調査区における地層の堆積状況について、大別層ごとに上位の層準から順に記述を進めていく(第219図～第221図)。

1層 近代～現代の耕作土層であり、上部を機械掘削の対象とした。いずれも淘汰の悪いシルト層であり、5層に細別される。このうち、圃場整備以前の耕作土である1～2a層は、南東隅を除き調査区のはほぼ全域に堆積し、北壁付近での層厚は約15cmを測る。

2層 近世～近代の耕作土層である。黒褐色シルトを主体とし、3層に細分される。このうち2-1a層は調査区北半部を中心に概ね10～20cm程度の層厚をもって堆積する。

3層 中世の耕作土層と考えられる。上層のオリブ褐色シルト混じり細砂～中砂層(3-1a層)と、暗灰黄色シルト混じり細砂層(3-2a層)の2層に細分される。いずれも層厚は10cm程度であり、淘汰が悪く、礫が混じる。圃場整備以前の耕作によって大きく削平されており、堆積は調査区南東隅に限られる。

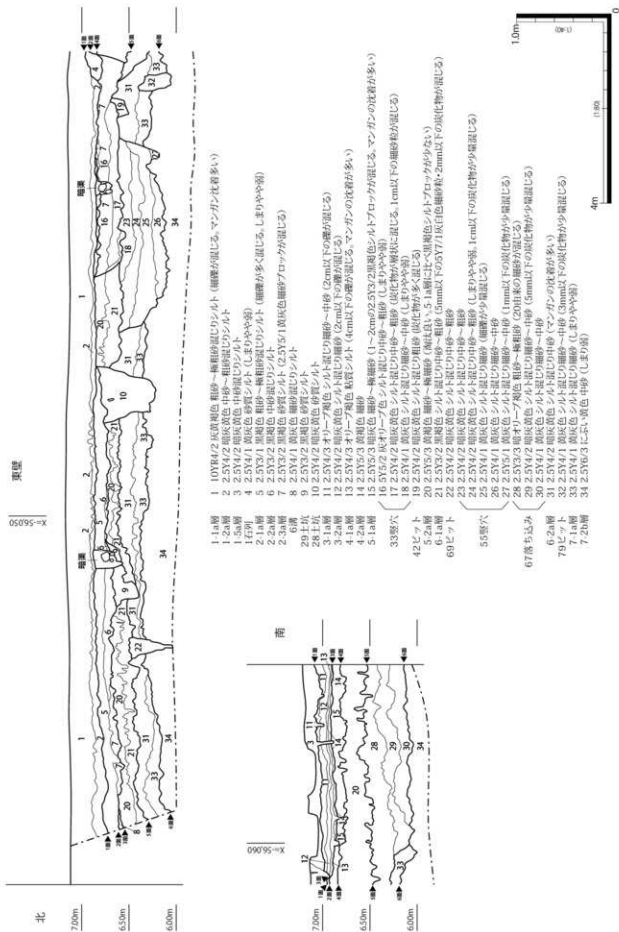
4層 古代の耕作土層と考えられる。上層のオリブ褐色粘質シルト層(4-1a層)と、下層の黄褐色細砂層(4-2a層)の2層からなる。いずれの層厚も5cm程度である。上層の4-1a層は淘汰が悪く、礫が混じる。また、マンガンの沈着がみられるため、上層は水田耕作土と考えられる。3層同様、圃



第218図 地区割及び基本断面取得位置図

場整備以前の削平によって堆積は調査区南東隅に限られる。

5層 古墳時代前期の土壌層である。上層の暗灰色細砂～極細砂層(5-1 a層)と、下層の黄褐色細砂～極細砂層(5-2 a層)の2層に細分される。5-1 a層は、上面からの攪拌を受けていると思われ、黒褐色シルトブロックが混じる。また、マンガンの沈着も認められるため、上層が水田耕作土であった可能性が高い。その堆積は調査区南側を中心としており、層厚は約15cmを測る。その母材である5-2 a層は淘汰が良く流路部分を除くほぼ全域に堆積しているが、調査区南側においてより厚く堆積し、

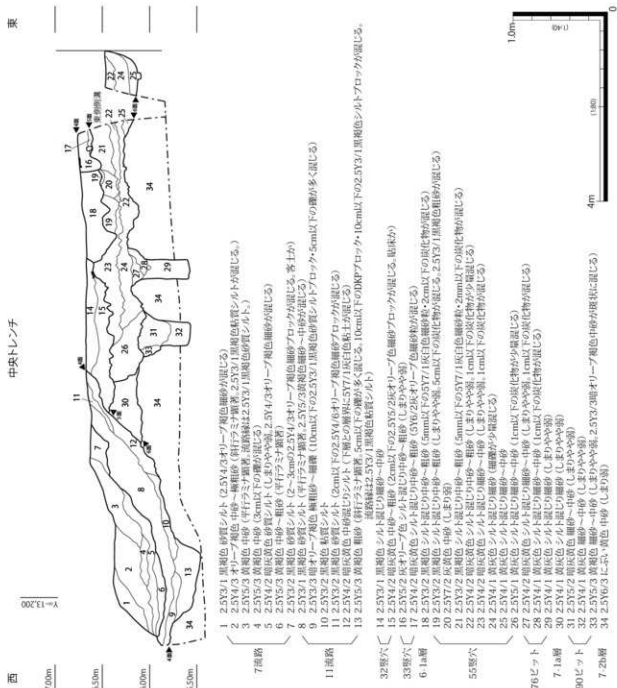


第220図 東壁断面図

層厚約30～40cmを測る。5-1a層、5-2a層とも下層に大きく入り込むように堆積しているが、その要因は不明である。

6層 弥生時代終末期の土壤層である。上層の黒褐色シルト混じり中砂～粗砂層(6-1a層)と、下層の暗灰黄色シルト混じり中砂層(6-2a層)の2層に細分される。6-1a層は6-2a層より淘汰が悪く、炭化物も含まれる。6-1a層、6-2a層ともに10～20cm程度の層厚を測り、比較的安定した堆積が認められる。

7層 弥生時代後期以前の土壤層である7-1a層と、水成層である7-2b層からなる。上層の7-1a層は黄灰色シルト混じり細砂層であり、安定した堆積が認められ層厚は約10～20cmを測る。ラミナ構造の認められる7-2b層は最深部分も含め調査区全域で確認され広範囲に及ぶ流路堆積とみられる。



第221図 中央トレンチ断面図

第3節 検出した遺構

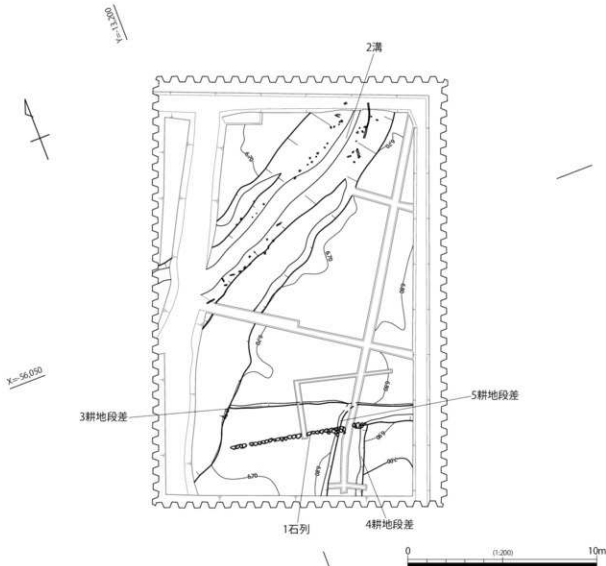
第1項 1面の遺構

近現代の耕作土層である1層を除去した下面で確認した遺構面である(第222図)。溝1条、石列1条、耕地段差3条を検出した。遺構面は標高約6.7~7.0mを測る。

(1) 溝

2溝(第219図・第222図)

調査区西側を南西から北東へ延びる溝であり、検出した範囲で最大幅6.2m、検出面からの深さは最大で1.34mを測る。土層断面から少なくとも新旧2段階の変遷があったことが確認でき、新段階にはより深く掘削されている。この段階の埋土下層には粗砂や礫が多く含まれており、水路として機能していたことが分かる。また、壁面に打ち込まれた杭は打設位置と方向から新段階の護岸と考えられ



第222図 1面(1-2a層下面)

る。出土遺物には新しい陶磁器が多く含まれており、本遺構は近代のものと考えられる。

(2)石列

1 石列(第222図)

調査区南側で検出した遺構であり、耕地境を示すものと考えられる。約7.2mにわたって20cm程度の礫を並べて構築されており、東南東側にも伸びる段差を伴う。高低差は1石列と4・5耕地段差が10cm程度を測り、3耕地段差は3cm程度とほとんどなく、耕作により削平されたと考えられる。

(3)耕地段差(第222図)

3～5 耕地段差

いずれも調査区南側で検出した遺構であり、耕地境を示すものと考えられる。

第2項 2面の遺構

近世～近代の耕作土層である2層を除去した下面で確認した遺構面である(第223図)。遺構面の標高は約6.5～7.0mである。土坑2基と溝1条を検出した。

(1)土坑

28土坑(第224図)

調査区東壁付近で検出した。全体の形状は明らかでないが、円形に近い平面形を呈していたと考えられる。2層に由来する埋土で充填されており、検出面からの深さは54cmを測る。

古墳時代の土師器を中心とする遺物が出土しており、近世～近代の遺物は極めて少ない。その性格は不明である。

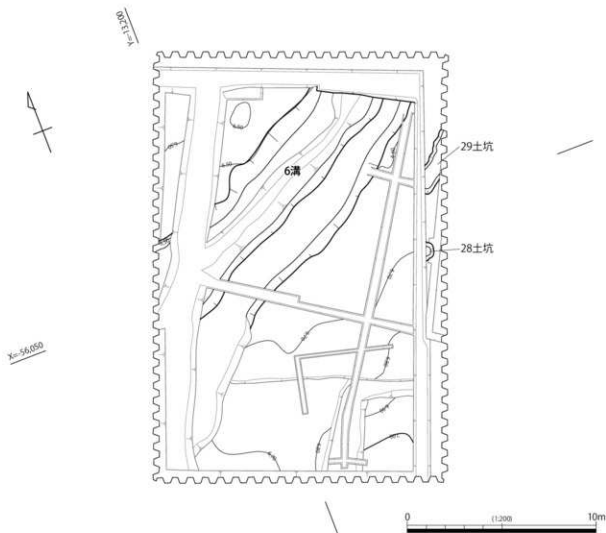
29土坑(第224図)

調査区東壁付近で検出した。全体の形状は明らかでないが、長方形に近い平面形を呈していたと考えられる。2層に由来する埋土で充填されており、検出面からの深さは50cmを測る。古墳時代の土師器を中心とする遺物が出土しており、近世～近代の遺物は極めて少ない。その性格は不明である。

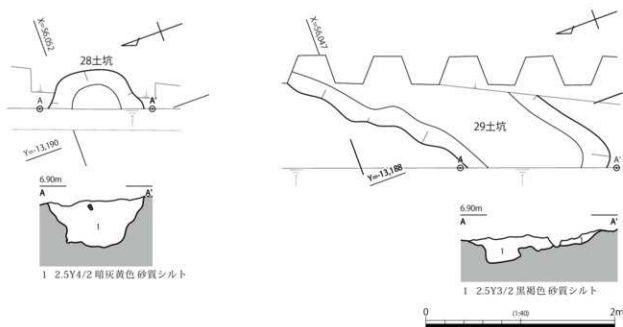
(2)溝

6溝(第219図・第223図)

2溝とほぼ同じ位置と走向の溝であったため、2溝によってその大部分が失われており、肩に近い縁辺部のみが検出された。本来の深さは不明である。検出した範囲での最大幅は6.4mを測る。埋土に明確なラミナ構造は認められなかった。層序及び出土遺物から、近世以降のものとする。



第223図 2面(2-1a層下面)



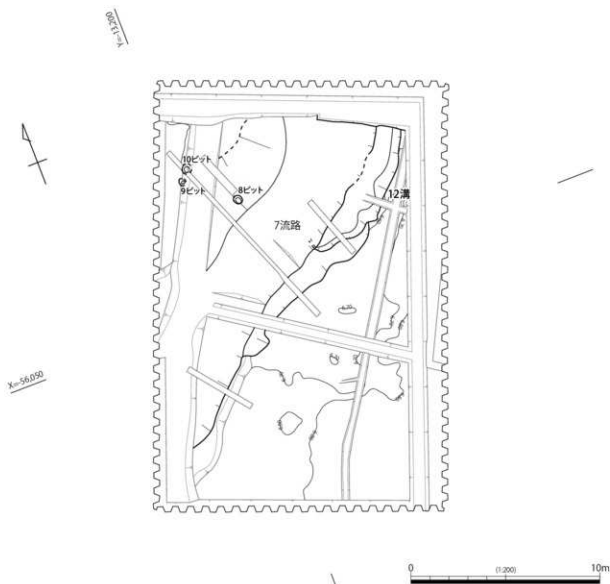
第224図 28土坑・29土坑

第3項 3面の遺構

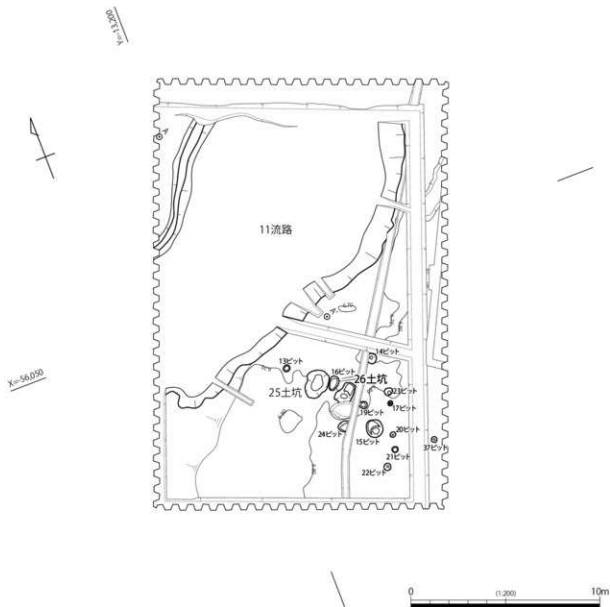
3層下面においては明確な遺構は検出されず、古代の耕作土層と考えられる4-2a層下面を3面とした(第225図・第226図)。しかし4-2a層の堆積は調査区南東隅に限られるため、3面の遺構には4-2a層との層序関係を厳密に把握出来ないものも多く、幅広い時期のものが含まれている可能性がある。

本項で報告する遺構については、出土遺物の時期や切り合い関係等から勘案して、本来であればより上位面帰属となるべきものも含まれている。しかし、調査時においては認識、検出出来なかったものも含め、本遺構面で検出していることから、ここで報告することとする。

本遺構面を検出するにあたり、3-1a層～4-2a層を掘削したことで標高は約6.6～6.8mとなり、結果としてピット15基、土坑2基、溝1条、流路1条を検出した。



第225図 3面(4-2a層下面)(1)



第226図 3面(4-2a層下面)(2)

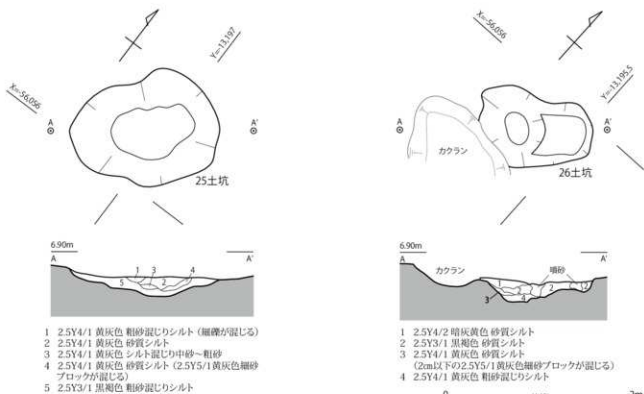
(1) 土坑

25土坑(第227図)

調査区中央やや南寄りに位置する。楕円形の平面を呈し、長軸1.98mを測る。検出面からの深さは24cmを測る。25土坑の出土遺物には、弥生土器や土師器等に混じって、陶磁器が含まれていた。したがって、この土坑は近世以降のものである。

26土坑(第227図)

調査区中央やや南寄りに位置する。楕円形の平面を呈し、長軸1.24mを測る。検出面からの深さは25土坑と同様に24cmを測る。出土遺物には、陶磁器が含まれていた。したがって、この土坑は近世以降のものである。



第227図 25土坑・26土坑

(2)ピット

8～10ピット(第228図 写真図版161)

調査区北西部、7・11流路を切る3基のピットを検出した。8ピットは6溝掘削時、9及び10ピットは7流路掘削時に確認されたものである。いずれも7・11流路の埋土中に掘りこまれた遺構であることから、同流路より新しい。このうち8ピットは底面に礎板石とみられる扁平な礫が据えられており、柱穴の可能性がある。後述するように7・11流路は中世後期に帰属すると考えられることから、これら3基のピットはそれ以降の時期に位置づけられる。

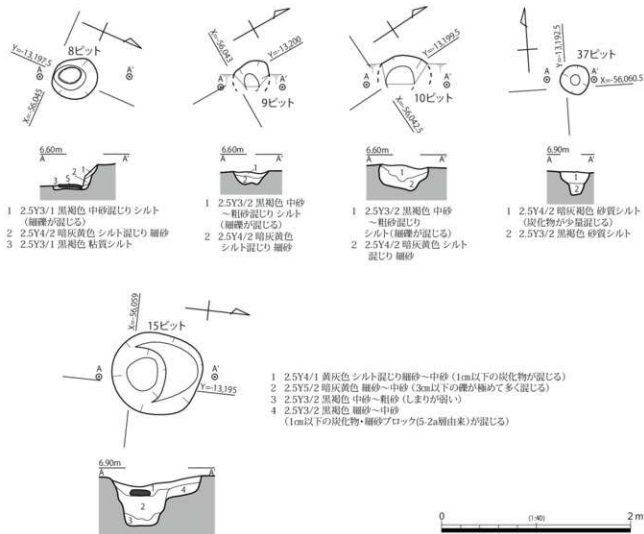
その他のピット(第228図 写真図版161)

その他の12基のピットは調査区南側に位置している。このうち、15・20～22・37ピットの5基は4-2a層下面で検出しており、層序関係から古代以前に帰属するものと思われる。このうち15ピットは規模が大きく、長軸0.95m、検出面からの深さは最大54cmを測る。二段掘りとなっており掘立柱建物の柱穴の可能性がある。埋土上層で出土した扁平な礫は本来的に礎盤石であったとしても、出土状況及び層位からすれば原位置を保っていない。13・14・16・17・19・23・24ピットは、4-2a層との層序関係が明らかではなく、その時期は不明である。これら12基のピットは規模や形状も様々であり、建物や構造物を構成するような配置は認められなかった。

(3)溝

12溝(第229図 写真図版160)

調査区北東部、6溝東側壁面で検出した溝である。西側部分は後続する6溝によって失われており、



第228図 8～10・15・37ピット

7・11流路に重複して東側の壁面と底面の一部のみが残存していた。その方向から、7・11流路及び6溝と同様、南西から北東に延びる溝であることが分かる。全体の規模は明らかではないが、検出面からの深さは最大で48cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトを主体としており、明確なラミナ構造は認められない。

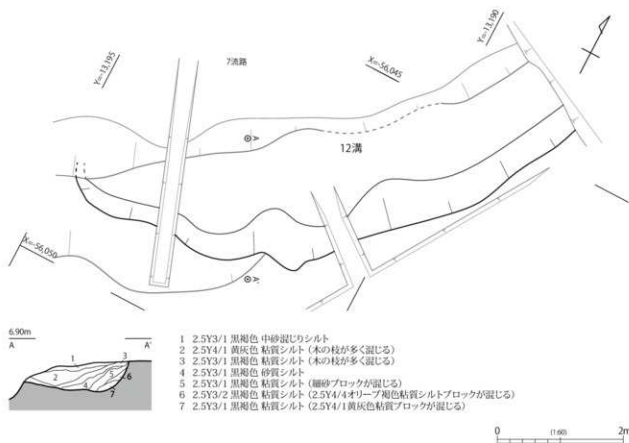
12溝では漆器碗W247の他、弥生時代～近世の土器が出土している。7流路を切ることから、近世以降の溝である。

(4) 流路

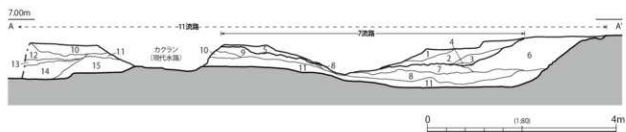
7流路・11流路(第225・226・230図 写真図版159～161)

6溝及び12溝に先行する流路であり、調査区北西側の大部分に及ぶ。土層断面の観察から、この流路が幅を狭めながら西から東へ変遷していることが確認出来た。その変遷のなかで、最下層に10cmほどの大山倉吉軽石層(DKP)ブロックを特徴的に含む段階があり、この段階以前の流路を11流路、それより新しい段階のものを7流路として調査を行った。

いずれの段階の流路とも、その範囲が調査区外に及んでいるため全体の規模は明らかではないが、東側の壁面及び底面の形状から、2溝、6溝、12溝といった後続する溝と共通し、南西から北東へ延



第229図 12溝



第230図 7流路・11流路

びることが分かる。

検出面からの深さは、中央トレンチにおいて7流路が84cm、11流路が1.22mを測る。堆積の大部分にはラミナ構造が認められ、流水下での自然堆積の状況をよく示している。しかし、7流路段階の東壁面にはオリブ褐色細砂のブロックが混じる人為層と思われる堆積が認められた。流路肩部の崩落、

流失に対処するための盛土(客土)の可能性があろう。

7流路、11流路とも、出土遺物は弥生土器と土師器がその大部分を占める。しかし、7流路からは青磁Po478・Po479、漆器W245等が、11流路からは備前焼Po481～Po483等が出土しており、いずれの段階とも中世後期に位置づけられる。

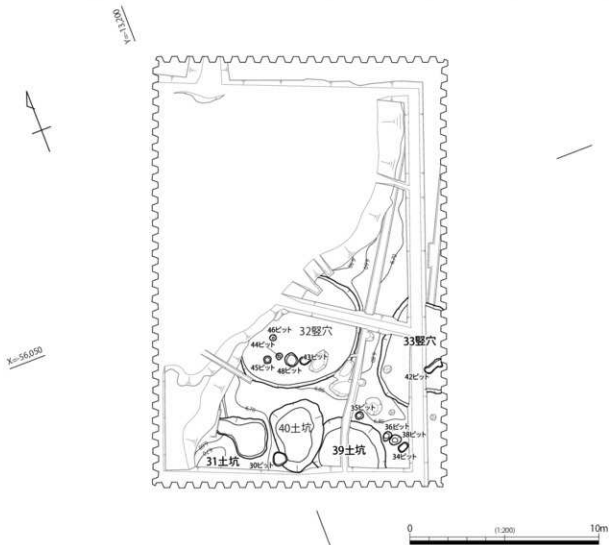
第4項 4面の遺構

古墳時代前期の土壌層である5層のうち、5-1a層を除去した下面で確認した遺構面である(第231図)。調査区南側を中心に堆積していた5-1a層下面の標高は、約6.5～6.8mを測る。本遺構面では、土坑3基、ピット11基、竪穴2基が検出された。

(1)土坑

31土坑(第232図 写真図版164)

調査区南西側で検出した不整形の土坑である。長軸2.88m以上、短軸2.2m、検出面からの深さは20cmを測る。遺構の東側を中心に土器が出土しており、底面では高坏Po497、小型丸底壺Po499等が



第231図 4面(5-1a層下面)

検出された。出土遺物から、31土坑は古墳時代前期中葉頃のものと考えられる。

39土坑(第233図 写真図版165)

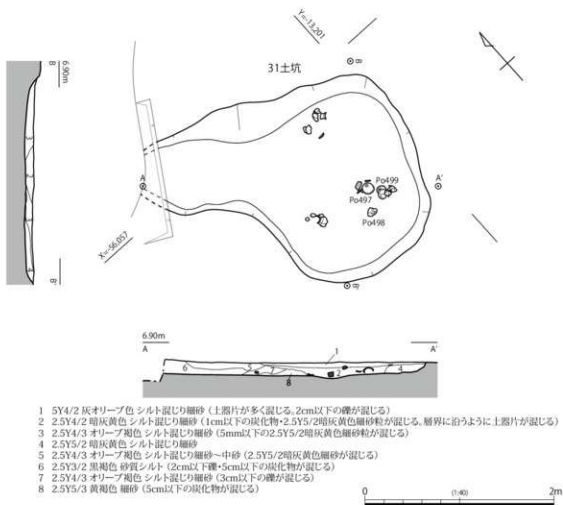
調査区南東部で検出した。西側に位置する40土坑に切られ、これより古い遺構と判断出来る。楕円形の平面形を呈していたと考えられ、検出出来た範囲で長軸3.86mを測る。検出面からの深さは62cmを測る。埋土は細砂～中砂を主体とし、埋土中層付近で土器がまとまって出土している。特に東壁付近で検出された壺Po492と器台Po494は土坑下半が埋没した後に、一括して廃棄された状況を示していると考えられる。

出土遺物から、39土坑は古墳時代前期中葉～後葉のものと考えられる。

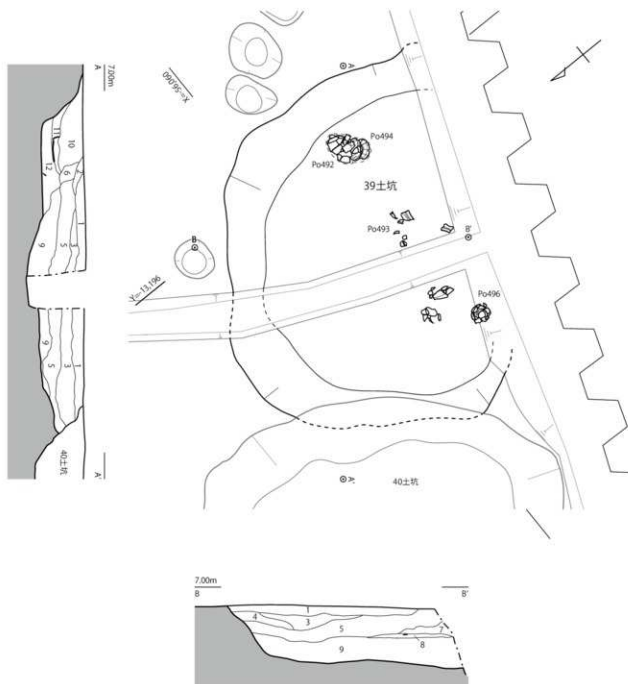
40土坑(第234図 写真図版162)

調査区南側で検出した。切り合い関係から30ピットより古く、39土坑より新しい遺構と判断出来る。楕円形の平面形を呈し、長軸3.72m、短軸2.58mを測る。検出面からの深さは54cmを測り、埋土は細砂～中砂を主体とする。

古墳時代前期を中心とする土器片が出土しており、40土坑はこの時期のものと考えられる。

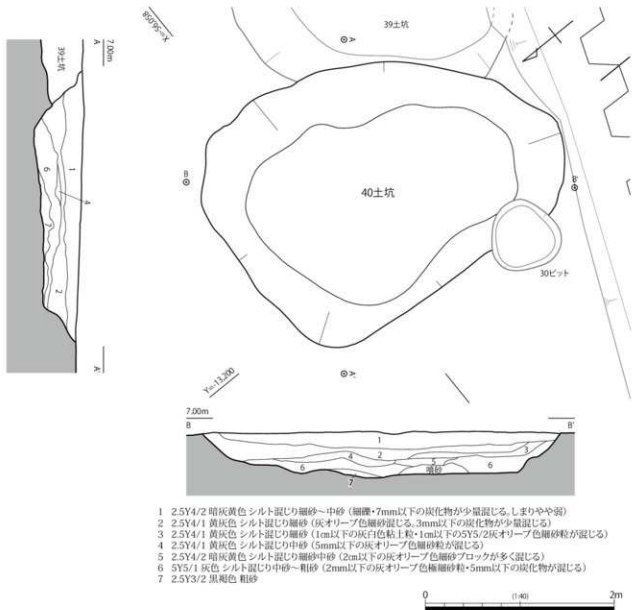


第232図 31土坑



- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混じり細砂～中砂 (5mm以下の炭化物が少量混じる。3cm以下の2.5Y6/3にぶい黄色細砂ブロックが混じる。しまりやや弱)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混じり細砂～中砂 (細礫・5mm以下の炭化物が少量混じる)
- 3 5Y4/1 灰色シルト混じり細砂～中砂 (2.5Y6/3にぶい黄色細砂が混じる)
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混じり細砂
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色シルト混じり細砂 (3cm以下の5Y5/2灰オリーブ細砂ブロックが多く混じる)
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混じり細砂～中砂 (2cm以下の礫が少量混じる)
- 7 5Y3/2 オリーブ黒色中砂 (5mm以下の炭化物が多く混じる)
- 8 2.5Y3/2 黒褐色シルト混じり細砂～中砂 (炭化物・土器片が多量に層状に混じる)
- 9 2.5Y4/1 黄灰色シルト混じり細砂～中砂 (3mm以下の炭化物が少量混じる)
- 10 2.5Y4/1 黄灰色シルト混じり細砂～中砂 (しまり強。1cm以下の炭化物が混じる)
- 11 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂～中砂 (大型土器片が混じる)
- 12 2.5Y3/2 黒褐色細砂 (5Y5/2灰オリーブ色細砂が混じる)

第233図 39土坑



第234図 40土坑

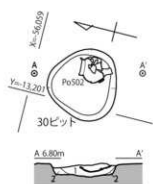
(2)ピット

30ピット他(第235図 写真図版162・165)

竪穴内に位置するピット6基の他、5基のピット(30・34～36・38)を検出した。30ピットは先述の40土坑を切り、新しい。その他の4基は調査区南東部で検出した。これらのピットのうち、30ピットでは壺Po502、34ピットでは高坏Po501が出土しており、いずれも古墳時代中期に帰属するものと思われる。なお、これら5基のピットに、建物や構造物を構成する配列は認められない。

(3)竪穴

竪穴は、検出時竪穴住居の可能性を想定して調査を進めたものの、最終的に竪穴建物と認定する状況証拠が整わず、かつ土坑等と規模の点から区別が可能な掘り込み遺構を指す。



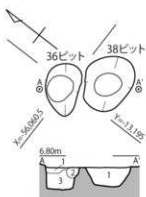
- 1 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 砂質シルト (5cm程の礫・土器片が混じる)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト



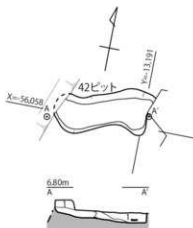
- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質シルト



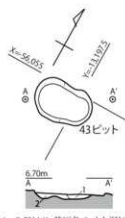
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (1~2cmの5Y5/2 灰オリーブ色 細砂ブロック(5.2a層由来)が混じる。炭化物が少量混じる)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂



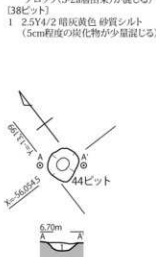
- [36ピット]
- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂混じりシルト (マンガンの沈着多い)
 - 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
 - 3 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト (5cm程度の5Y5/2灰オリーブ色細砂ブロック(5.2a層由来)が混じる)



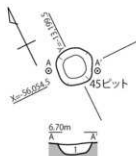
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり粗砂 (炭化物が多く混じる)
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり細砂〜中砂



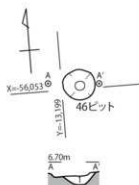
- 1 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり中砂 (5cm以下の2.5Y7/1灰白色粘土ブロックが混じる)
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり細砂〜中砂 (1cm以下の2.5Y7/1灰白色粘土ブロック・5Y5/2灰オリーブ色 細砂ブロックが混じる)



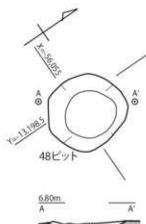
- 1 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり細砂〜中砂 (5cm以下の2.5Y7/1 灰白色粘土ブロックが混じる)



- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂〜中砂 (2mm以下の炭化物が混じる。しまりやや弱)



- 1 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり細砂〜中砂 (1cm以下の2.5Y3/1 黒褐色砂質シルトブロックが混じる)



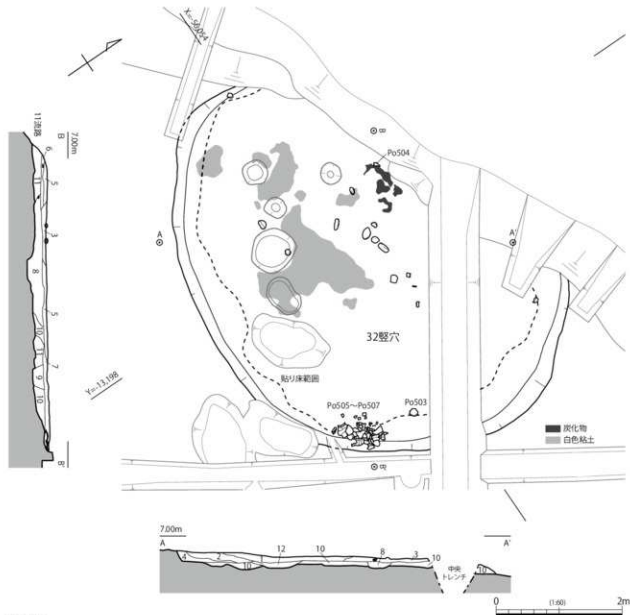
- 1 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり中砂 (2cm以下の2.5Y7/1灰白色粘土ブロックが混じる)



第235図 30・34・35・36・38・42・43・44・45・46・48ピット

32竪穴(第236図 写真図版163)

調査区中央やや南寄りで見出した。11流路によって北西部分が失われているが、平面形は長軸7.17mを測る楕円形を呈していたことが分かる。検出面からの深さは、27cmを測る。細砂～中砂を主体とする埋土上層を除去した段階で、灰白色粘土や炭化物の集中する範囲が面的に検出された。また、南東隅で集中して出土した土器や、中央付近の礫もこの面で検出されていることから、この面が床面であったと考えられる。したがって、粗砂を主体とし、床面の広い範囲に堆積する埋土下層は、貼床層



〔32竪穴〕

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂
(粗砂, 1cm以下の2.5Y7/1灰白色粘土・2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト粒が混じる。しまり強い)
 - 2 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂
(5cm以下の5Y4/2灰オリーブ色細砂ブロック・2.5Y3/1黒褐色粘質シルトブロックが混じる)
 - 3 2.5Y3/1 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂
 - 4 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり細砂
(2cm以下の5Y4/2灰オリーブ色細砂ブロックが混じる。しまりやや強)
 - 5 2.5Y3/2 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂 (5mm以下の炭化物が混じる。しまりやや強)
 - 6 2.5Y3/2 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂
(縦面に平行に炭化物・2.5Y7/1灰白色粘土が層状に混じる)
 - 7 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂～中砂
(しまりやや強。5mm以下の炭化物、土器片が混じる)
 - 8 2.5Y3/1 黒褐色 シルト混じり中砂～粗砂
(10Y2/1 黒色粘質シルトがしみ状に混じる。
5mm以下の炭化物・5Y4/2灰オリーブ色細砂ブロックが混じる)
 - 9 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり中砂 (5Y4/2灰オリーブ色細砂が混じる)
 - 10 2.5Y3/2 黒褐色 シルト混じり粗砂 (しまりやや強。貼床か)
 - 11 2.5Y4/2 暗灰黄色 中砂～粗砂
(2cm以下の5Y5/2灰オリーブ色細砂ブロックが多く混じる。貼床か)
- 〔44ピット〕
- 12 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり中砂
(2cm以下の2.5Y7/1灰白色粘土ブロックが下層との境界に沿って混じる)

第236図 32竪穴

の可能性がある。

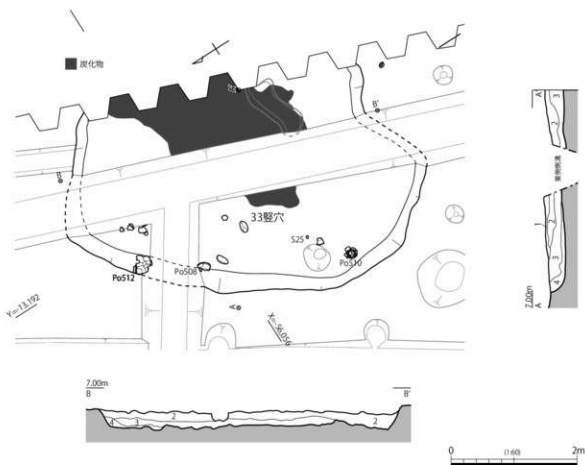
32竪穴内では埋土除去後に5基のピット(43~46ピット及び48ピット)を検出したが(第235図)、その配列や規模に規則性を認めることが出来ず、32竪穴と一連のものであるかは不明である。また、壁溝は検出されなかった。出土遺物には、南東隅床面で出土したPo503・Po505~Po507の他、Po504がある。32竪穴の時期は、古墳時代前期中葉~後葉と考えられる。

33竪穴(第237図 写真図版164)

32竪穴の南東に近接する33竪穴は、検出出来た範囲で、長軸8.25mを測る不整形の平面形を呈す。埋土は中砂~粗砂を主体とし、検出面からの深さは48cmを測る。埋土下層中には、層状に炭化物が集中する箇所が検出された。

33竪穴内では、埋土除去後に不整形の42ピット(第235図)が確認されているが、32竪穴に伴うものとは思われない。また、周壁溝なども検出されなかった。

遺構北西壁面際に甕Po512、南西隅付近に甕Po510を検出した。その他、土器片と礫を検出しているが、底面直上で検出されたものではない。出土遺物から、33竪穴の時期は古墳時代前期前葉~中葉と考えられる。



- 1 2.5Y/3 黄褐色 シルト混じり細砂(しまりやや弱)
- 2 2.5Y/2 灰オリーブ色 シルト混じり中砂~粗砂(しまりやや弱)
- 3 2.5Y/4/2 暗灰黄色 シルト混じり中砂~粗砂(炭化物が層状に混じる, 1cm以下の細砂粒が混じる)
- 4 2.5Y/4/1 黄灰色 シルト混じり細砂~中砂(しまりやや弱)

第237図 33竪穴

第5項 5面の遺構

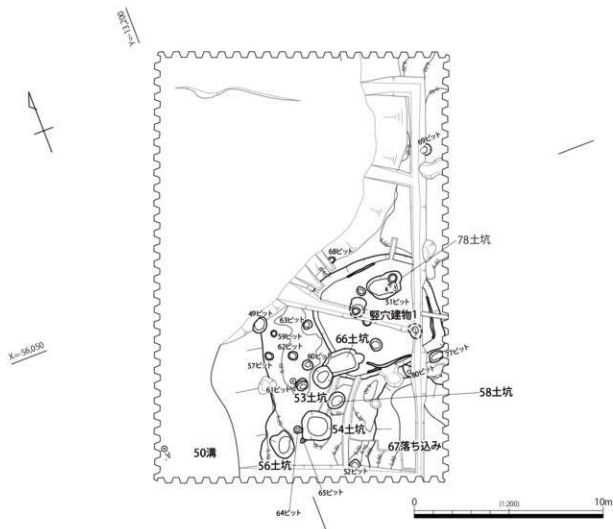
5面は、弥生時代終末期の土壌層である6-1a層を除去した下面で確認した遺構面である(第238図)。5-2a層及び6-1a層の掘削によって、標高は6.2~6.5mとなった。6-2a層上で竪穴建物1棟、土坑6基、竪穴建物に伴わないピットを14基、落ち込み1カ所、溝1条を検出した。

(1) 竪穴建物

竪穴建物1(第239-1・2図 写真図版166~168)

調査区中央やや東寄りで検出した。平面形は長軸6.33m、短軸6.05mを測る隅丸方形を呈し、検出面から貼床相当層を除去した加工面までの深さは42cmを測る。埋土上層は中砂~粗砂を主体とするが、埋土下層は細砂を主体とする。この埋土下層(第5-23図A-A'ライン10層、B-B'ライン11層)は7-2b層が落ち込んでいる箇所により厚く堆積していること、70・73ピットがその上面で検出されたことから、本来は床面を構築するための貼床層であった可能性がある。

埋土最下層あるいは7-2b層上面において、70・71・73~76ピットを検出した底面のレベルに差は認められるが、平面的な位置からは70・71・73・75ピットが支柱穴と推定される。76ピットも他の

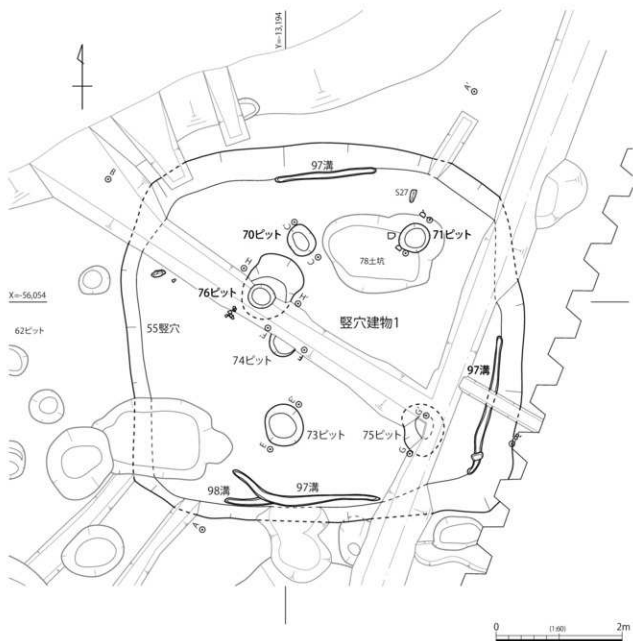


第238図 5面(6-1a層下面)

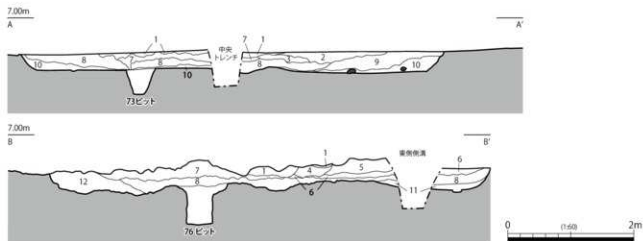
ピットよりやや規模が大きく、柱穴の可能性が高い。

また、竪穴壁面付近において壁溝を検出した。南側壁面際では、97溝とした壁溝の一部が、55竪穴の内側に入り込んでいることが確認出来る。この壁溝のあり方から、竪穴建物1は、建て替えが行われた可能性が高い。主柱穴が竪穴の東側に偏って位置していることも、これを示唆するものであろう。

床面では遺物がみられず、埋土中から僅かに弥生時代終末期の土器が出土した。出土遺物から、本遺構は弥生時代終末期に帰属すると考えられる。



第239-1図 竪穴建物1(1)



【竪穴建物1】

- 1 2.5Y3/2 黒褐色 シルト混じり中砂～粗砂（しまりやや弱、5cm以下の炭化物が混じる。2.5Y3/1黒褐色粗砂が混じる）
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり 中砂～粗砂（しまりやや弱）
- 3 2.5Y5/3 黄褐色 中砂～粗砂（しまりやや弱、1cm以下の礫が混じる）
- 4 2.5Y7/2 灰黄色 中砂（しまり弱）
- 5 2.5Y3/2 黒褐色 シルト混じり中砂～粗砂（5mm以下の5Y7/1灰白色細砂粒、2mm以下の炭化物が混じる）
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり中砂～粗砂（しまりやや弱、1cm以下の炭化物が少量混じる）
- 7 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂～中砂（しまりやや弱、1cm以下の炭化物が混じる）
- 8 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり細砂（細礫が少量混じる）
- 9 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり 細砂（2mm以下の炭化物が少量混じる）
- 10 2.5Y5/1 黄灰色 シルト混じり 細砂（2.5Y5/2暗灰黄色細砂が混じる）
- 11 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり細砂～中砂
- 12 2.5Y5/1 黄灰色 シルト混じり細砂～中砂（1cm以下の炭化物が少量混じる）

70ピット



- 1 2.5Y3/2 黒褐色 シルト混じり粗砂（2cm以下の炭化物が少量混じる）
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり粗砂（しまりやや弱）

71ピット



- 1 5Y4/1 灰色 シルト混じり 細砂
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり 粗砂～中砂
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり 粗砂

73ピット



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂～中砂（しまりやや弱）
- 2 2.5Y3/2 黒褐色 シルト混じり 細砂～中砂（2cm以下の炭化物が少量混じる）
- 3 5Y4/1 灰色 シルト混じり粗砂
- 4 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり粗砂
- 5 5Y4/1 灰色 シルト混じり粗砂～中砂

74ピット



- 1 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり 中砂～粗砂（5mm以下の炭化物が少量混じる）

75ピット



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり 粗砂～中砂
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト混じり 粗砂～中砂（しまりやや弱）
- 3 2.5Y5/1 黄灰色 シルト混じり 中砂～粗砂（しまりやや弱）

76ピット



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり粗砂～中砂（しまりやや弱、1cm以下の炭化物が混じる）
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり粗砂～中砂（1cm以下の炭化物が混じる）
- 3 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混じり粗砂（しまりやや弱）



第239-2図 竪穴建物1(2)

(2)土坑

53土坑(第240図 写真図版166)

調査区南側で検出した。その規模は、長軸1.20m、短軸1.06m、検出面からの深さは40cmを測る。66土坑を切るため、これより新しい遺構である。出土遺物として、弥生時代後期の土器片がある。土坑の機能は不明である。

54土坑(第240図 写真図版166・168)

調査区南側で検出した。長軸1.78m、短軸1.76m、検出面からの深さは74cmを測る。この土坑は比較的規模が大きく、貯蔵穴の可能性が考えられる。土坑からは弥生時代後期の土器片が出土しており、当該期に帰属すると思われる。

56土坑(第240図 写真図版166・168)

54土坑同様、調査区南側で検出した。長軸1.48m、短軸1.20m、検出面からの深さは80cmを測る。56土坑についても、比較的規模が大きいため貯蔵穴の可能性が考えられる。また、この土坑からも弥生時代後期の土器片が出土しており、当該期に帰属すると思われる。

58土坑(第240図 写真図版166)

調査区南側で検出した。長軸1.02m、短軸0.82m、検出面からの深さは41cmを測る。出土遺物として、弥生時代後期の土器片がある。この土坑の機能は不明である。

66土坑(第241図 写真図版166・169)

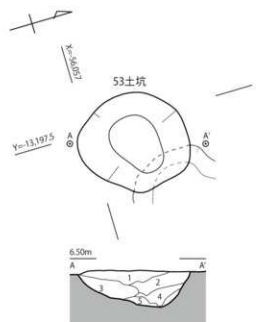
竪穴建物1の南西隅に重複する位置で検出した66土坑は、楕円形に近い平面形を呈し、長軸2.26m、短軸1.27m、検出面からの深さは最大で81cmを測る。上層と中層の層界付近において、弥生時代後期後葉を中心とする多様な器種の土器(Po520～Po534)と礫が集中して出土した。これらの遺物は、埋没過程で一括廃棄されたと考えられる。土器の中には、高坏(Po531・Po532)のような北近畿系のものも含まれている。また、これらの遺物の直下に、炭化物と焼土の集中層を検出した。炭化物と焼土の集中層は被熱による硬化等が認められないため、土坑内で生成されたものではなく、一連の廃棄に伴うものであろう。

さらに底面直上において、北近畿系の器台(Po533・Po534)が完形に近い形で出土した。下層中には遺物が少ないだけでなく、炭化物の集中等も認められず、中層において検出された遺物の集中とは様相を異にする。

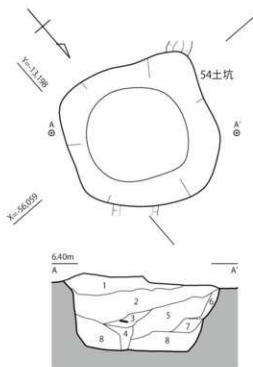
出土遺物から、本遺構は弥生時代後期後葉のもので、竪穴建物1床面で平面プランが把握出来たこと及び出土遺物から、同建物より古い。

78土坑(第242図 写真図版166)

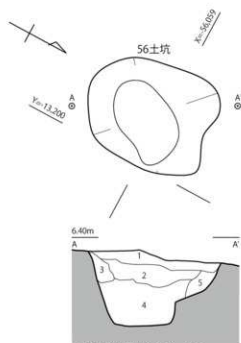
78土坑は竪穴建物1貼床下の加工面で検出し、その主柱穴と考えられる51ピットに掘りこまれていることから、これらより古い。底面は楕円形を呈し、長軸1.66m、短軸1.16m、検出面からの深さは16cmを測る。弥生時代後期の土器が出土しているが、その性格は不明である。



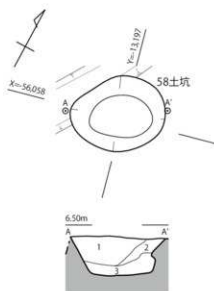
- 2.5Y3/1 黒褐色シルト混じり細砂～中砂
(3mm以下の炭化物・繊維・土器片が混じる)
- 2.5Y3/2 黒褐色シルト混じり細砂～中砂(土器片が混じる)
- 2.5Y4/1 黄灰色シルト混じり細砂
(2mm以下の炭化物が少量混じる)
- 2.5Y4/1 黄灰色シルト混じり中砂(しまりやや弱)
- 2.5Y5/3 黄褐色中砂(しまり弱)



- 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混じり中砂(しまりやや弱)
- 2.5Y3/2 黒褐色シルト混じり細砂～中砂(5mm以下の炭化物が混じる)
- 2.5Y3/1 黒褐色シルト混じり中砂
(しまりやや弱, 1cm以下の炭化物・土器片が混じる)
- 2.5Y4/1 黄灰色シルト混じり中砂
- 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混じり中砂
- 2.5Y5/3 黄褐色中砂(しまり弱)
- 5Y4/1 灰色中砂(しまり弱)
- 5Y5/2 灰オリーブ色粗砂～極粗砂
(しまり弱, 3cm以下の礫・2cm以下の2.5Y4/2暗灰黄色ブロックが混じる)



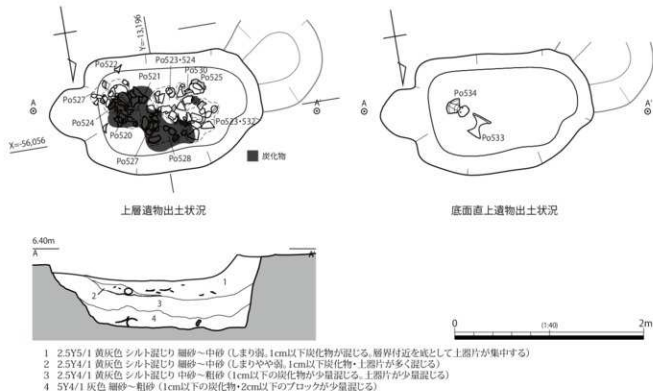
- 2.5Y3/1 黒褐色中砂～粗砂
(1cm以下の礫が少量混じる)
- 2.5Y4/1 黄灰色中砂～粗砂
- 2.5Y5/2 暗灰黄色中砂(しまり弱)
- 2.5Y5/3 黄褐色中砂～極粗砂
(2cm以下の礫が少量混じる)
- 2.5Y5/2 暗灰黄色中砂～極粗砂(しまり弱)



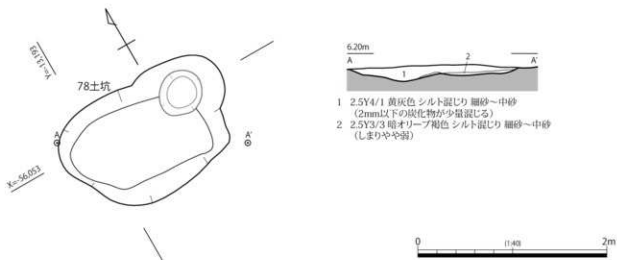
- 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混じり細砂～中砂
(しまりやや弱, 2cm以下の礫・3mm以下の炭化物が少量混じる)
- 2.5Y4/1 黄灰色シルト混じり細砂～中砂
- 2.5Y3/2 黒褐色シルト混じり細砂～中砂
(3mm以下の炭化物が少量混じる)



第240図 53・54・56・58土坑



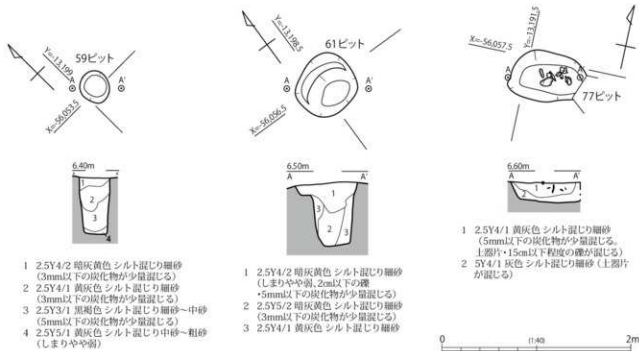
第241図 66土坑



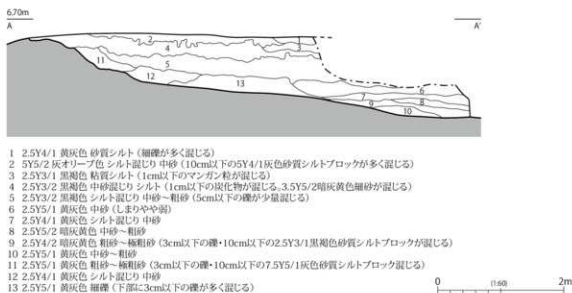
第242図 78土坑

(3)ピット(第243図 写真図版166)

調査区南半部を中心に検出した14基のピットの平面規模及び深さには幅があり、構造物を構成するような配列は認められなかった。また、比較的多くの遺物が出土した77ピットを除き、遺物の出土は散発的なものであり、その性格が窺えるものはなかった。



第243図 59・61・77ピット



第244図 50溝断面図

(4) 溝

50溝 (第238図・第244図 写真版167)

11流路によって北側が失われているが、検出した東側の壁面及び底面の方向から、ほぼ南北方向に走向していたと考えられる。全体の規模は不明であるが、検出面からの深さは最大で1.32mを測る。

埋土上層はシルトを、埋土中層以下は中砂～極粗砂を主体とし、底面付近には礫が多く含まれる。埋土に明確なラミナ構造は認められなかった。出土遺物には、弥生時代後期を中心とする土器や、流紋岩製の石鍬(S29)等がある。出土遺物から、弥生時代後期後葉に帰属するものと考えられる。

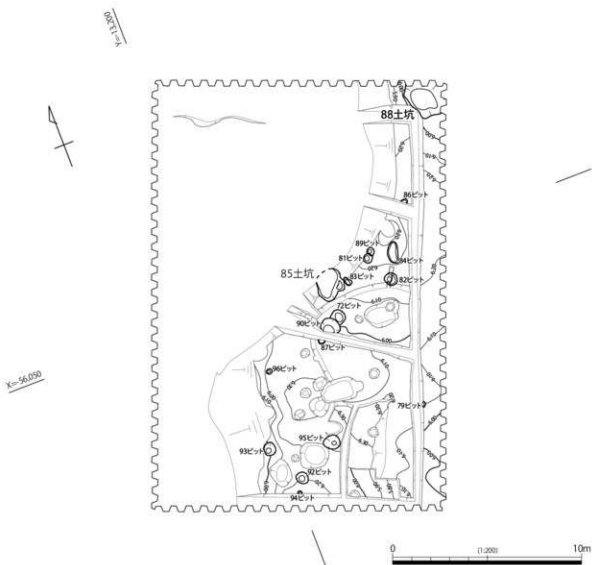
(5) 落ち込み

67落ち込み(第238図 写真図版166)

調査区南東隅において検出した。人為的な遺構であるかは判然とせず、自然地形の可能性もある。全体の規模は不明であるが、調査区東壁における深さは最大で58cmを測り、6-1a層に由来する堆積によって埋積していた。弥生時代終末期の甕(Po535)が出土している。

第6項 6面の遺構

弥生時代後期以前の土壌である7-1a層の下面を6面とした(第245図)。6-2a層及び7-1a層掘削後の標高は、6.1~6.3mを測る。検出した遺構は、本来それより上面で検出されるべきものであり、時期幅が存在することが想定される。ここでは、2基の土坑と15基のピットを検出した。



第245図 6面(7-1a層下面)

(1) 土坑

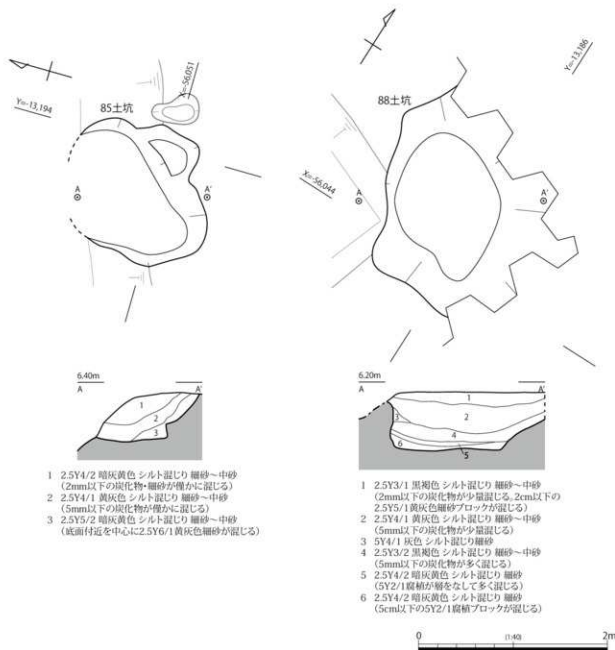
85土坑(第246図 写真図版171)

85土坑は、平坦面西側に位置し、西側が11流路によって失われているが、長軸1.64mを測る。検出面からの深さは54cmを測る。その形状と規模から、貯蔵穴の可能性が考えられる。出土した土器の時期からは、弥生時代後期後葉のものと思われる。

88土坑(第246図 写真図版171)

88土坑は、調査区北東隅に位置するためその規模は不明であるが、長軸が2.4m以上となることが分かる。検出面からの深さは62cmを測る。なお、88土坑の下層には植物遺体の層が認められる。

その形状と規模から、貯蔵穴の可能性が考えられる。出土した土器の時期からは、85土坑同様、弥生時代後期後葉のものと思われる。



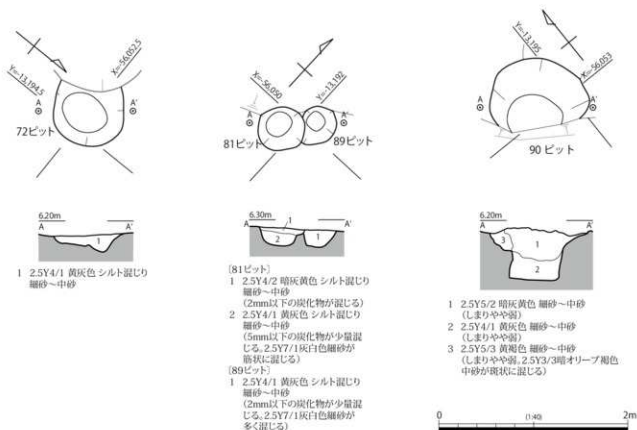
第246図 85土坑・88土坑

(2)ピット

72ピット他(第247図 写真図版168・170)

15基が検出されており、その平面規模や深さには幅がある。81ピットと89ピット、72ピットと90ピットのように切り合っているものはあるが、構造物を構成する配列は認められない。

これらのうち、90ピットは竪穴建物1の底面を掘り下げた段階で確認したものであり、規模も大きいことから、竪穴建物1の建て替え前の柱穴としての機能が考えられる。



第247図 72・81・89・90ピット

第4節 出土遺物

第1項 土器

1 土器

(1) 1面

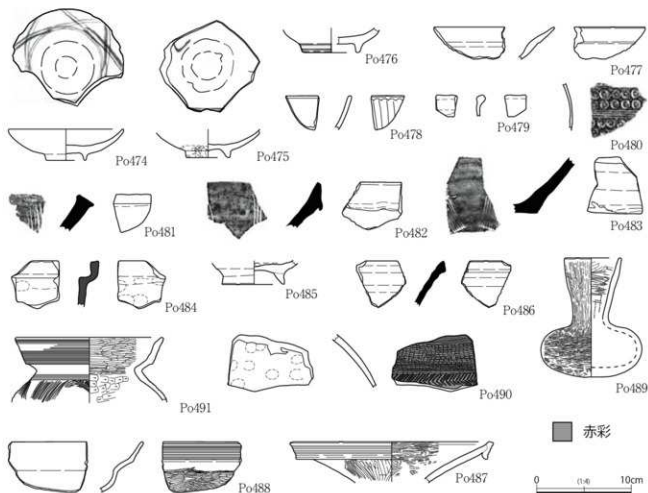
ア 2溝(第248図 写真図版172 Po474~Po477)

Po474~Po477は2溝出土土器である。Po474は格子文、Po475は草花文と思われる文様が施される磁器の皿で、17世紀末~18世紀後半のものである。Po476は高台外面に圈線が施される磁器の碗で、18世紀後半のものである。Po477は坏部有段となる北近畿系の高坏で、弥生時代終末期のものである。

(2) 3面

ア 7流路(第248図 写真図版173 Po478~Po480)

Po478~Po480は7流路出土土器である。Po478は沈線による簡略化した蓮弁文が施される青磁の碗で、15世紀後葉~16世紀前葉のものである。Po479は青磁の香炉である。Po480は弥生土器の壺で、3重圏同心円スタンプ文と平行沈線で加飾されており、弥生土器裝飾甕の胴部片か。



第248図 1~3面遺構出土土器

イ 11流路(第248図 写真図版172・173 Po481~Po491)

Po481~Po491は11流路出土土器である。Po481~Po483は備前焼の擂鉢である。Po481は口縁部の上下端が僅かに突出し、Po482の口縁部は上方へ拡張するとともに下端が下垂する。Po483の内面は、使用による磨減が著しい。Po481は14世紀中葉~15世紀前葉、Po482・Po483は15世紀のものである。

Po484は瓦質土器の鍋で、短く屈曲して立ち上がる受け口状の口縁をもち、14世紀のものであろう。Po485は土師器の高台付坏で、底部の回転糸切り後高台を貼りつけている。10世紀後葉~11世紀中葉のものである。Po486は東播系須恵器の鉢である。

Po487~Po491は弥生土器である。Po487は貼り付けにより成形された複合口縁外面に擬凹線文が施される北近畿系の器台である。弥生時代後期後葉、西谷式併行期のもと考えられる。有段の坏部をもつ高坏Po488も北近畿系のもので、口縁に櫛状工具による平行沈線が施される。直口壺Po489は扁球形の体部をもち、橙色~にぶい褐色を呈す胎土で輝石が目立つ。

Po490は弥生時代終末期の畿内系加飾性複合口縁壺で、肩部外面に櫛状文と板状工具による無軸羽状文が施され、赤彩されている。

(3) 4面

ア 39土坑(第249図 写真図版176・177 Po492~Po495)

Po492~Po495は39土坑出土土師器である。倒卵形の体部と推測される壺Po492と、複合口縁の立ち上がりが短く下端部の突出が鈍い甕Po493は、古墳時代前期中葉~後葉のものである。器台Po494と直口壺Po495は、古墳時代前期前葉~中葉のものである。

イ 40土坑(第249図 写真図版176 Po496)

Po496は40土坑出土土器である。Po496は土師器の器台で古墳時代前期中葉のものである。

ウ 31土坑(第249図 写真図版176・177 Po497~Po500)

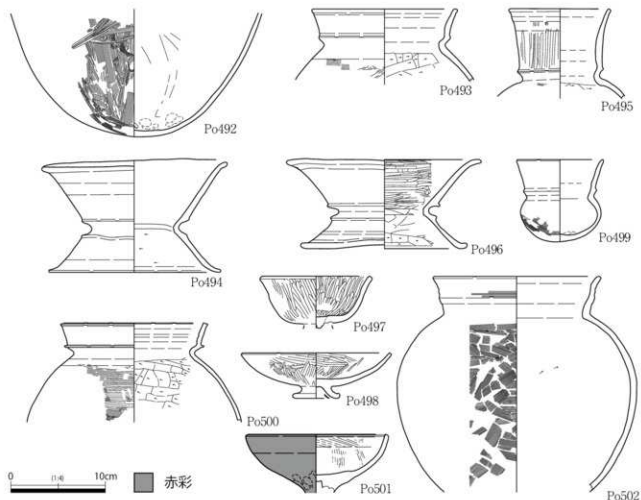
Po497~Po500は31土坑出土土師器である。高坏Po497の坏部は内外が縦方向のミガキで調整される。低脚坏Po498の脚部内面には焼成前のヘラ記号が施される。小型丸底壺Po499は口縁部下端の突出が鈍い。甕Po500の体部上半外面は回転を利用した横方向のハケで調整される。いずれも古墳時代前期前葉~中葉のものである。

エ 30ピット・34ピット(第249図 写真図版176・177 Po501・Po502)

34ピットから出土した土師器高坏Po501は、碗状の坏部で外面全体と口縁端部内面が赤彩される。古墳時代前期中葉のものである。土師器甕Po502は30ピットから出土した。

オ 32竖穴(第250図 写真図版174 Po503~Po507)

Po503~Po507は32竖穴出土土器である。Po503・Po505・Po506・Po507は土師器である。壺Po507は肩部に最大径をもち、体部上半が回転を利用した横方向のハケで調整される。Po505・Po506は複合口縁をもつ甕で、Po505は口縁端部内面、Po506は外面に僅かなアクセントをもつ。Po505には、肩部に回転を利用した横方向のハケが施される。低脚坏Po503の脚部内面には焼成前のヘラ記号が施さ



第249図 4面遺構出土土器

れている。Po503・Po505・Po506・Po507は古墳時代前期中葉～後葉のものである。Po504は弥生土器の直口壺で、口縁～頸部に三重圏の同心円スタンプ文、口縁端部に爪形の連続する刺突文が施される。

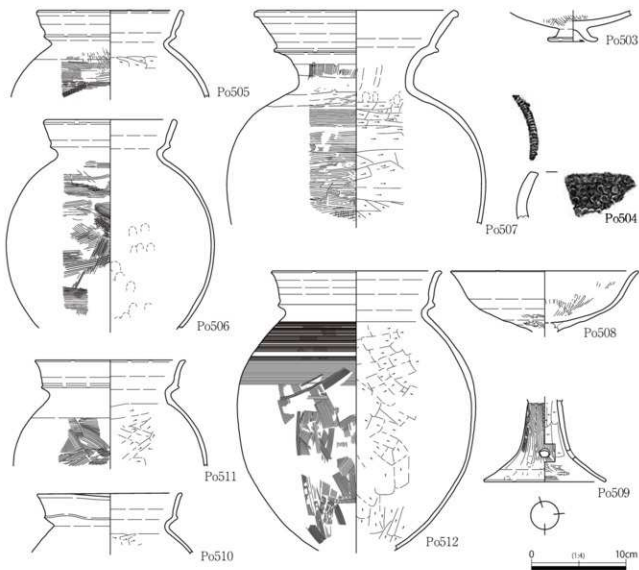
カ 33竪穴(第250図 写真図版174・175 Po508～Po512)

Po508～Po512は33竪穴出土土器である。Po510～Po512は甕である。複合口縁端部を外方へつまみ出すようにナデで成形されている。Po512は倒卵形を呈す体部の上半が回転を利用した横方向のハケ、下半を縦方向のハケで調整される。Po508・Po509は高坏で、Po508は僅かに外反しながら立ち上がる皿状坏部をもち、Po509は脚部に3方向の円形の透かし孔が穿たれている。いずれも古墳時代前期前葉～中葉のものである。

(4) 5～6面

ア 55竪穴(第251図 写真図版180・181 Po513～Po517)

Po513～Po517は55竪穴出土土器である。Po513は櫛状工具による口縁部の平行沈線を一部ナデ消している。Po514は口縁部に施文はされず、ナデ調整のみである。Po515は裝飾甕胴部片で3重圏同心



第250図 32・33窪穴出土土器

円スタンプ文と平行沈線によって加飾される。

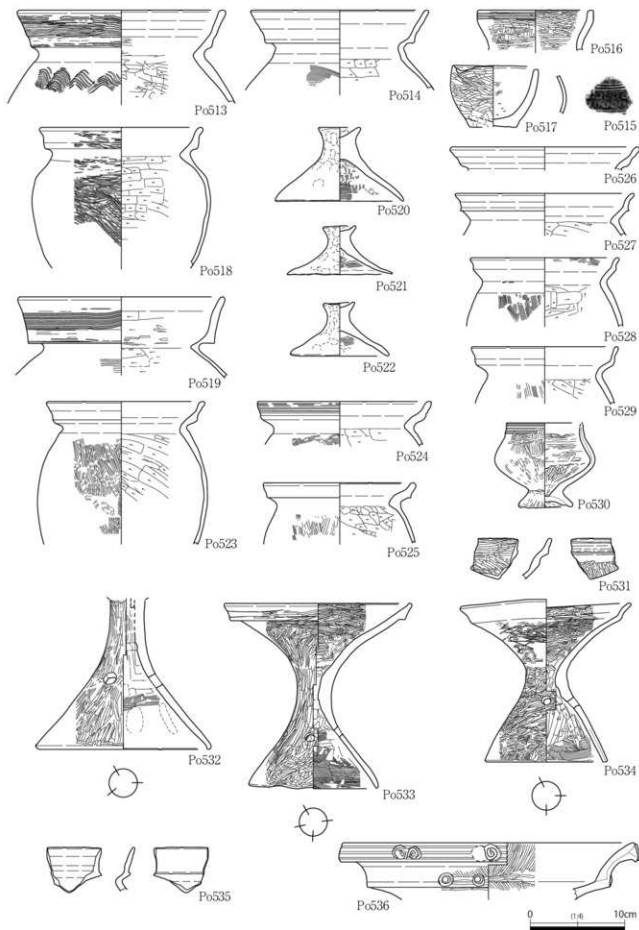
北近畿系の壺Po516は口縁部に2条1単位の擬似凹線文が2単位施される。鉢Po517は小型のもので外面はミガキによって調整される。Po514は弥生時代終末期後半、Po513・Po515・Po516は弥生時代後期後葉のものである。

イ 53土坑(第251図 写真図版180 Po518)

壺Po518は53土坑出土土器である。体部をタタキで整形した後、細かいミガキとナデで外面全体を調整している。弥生時代後期後葉のものである。

ウ 54土坑(第251図 写真図版181 Po519)

壺Po519は54土坑出土土器である。口縁部上部1/3は成形に伴い櫛状工具による平行沈線がナデ消されている。弥生時代後期後葉のものである。



第251図 5~6面遺構出土土器

エ 66土坑(第251図 写真図版180・181 Po520～Po534)

Po520～Po534は66土坑出土土器で、いずれも北近畿系の土器と考えられる。

蓋Po520～Po522の口縁は素口縁で、内面はハケ後ナデ、外面はナデで調整されており、大きさにバラエティーが認められる。Po523～Po529は甕である。外傾して短く立ち上がる口縁部をもち、胴部最大径が口径を僅かに上回る器形と考えられる。口縁部はPo524に擬凹線文が施される他はナデ調整のみで無文である。台付鉢Po530は算盤玉状の胴部をもち、そこから短く立ち上がる口縁には4条の擬凹線(ヘラ描沈線)が施される。円盤充填で底部を成形しており、全体がミガキとナデで調整されている。Po531・Po532は高坏である。Po531は擬凹線文が施された有段口縁をもつ坏部、Po532は3方向に円孔が穿たれた脚部である。Po533・Po534は器台である。短く立ち上がる口縁外面には擬凹線文が施されず、ミガキ、ナデ調整で仕上げられている。引き締まった胴部から緩やかにハの字状に開く脚部をもち、円孔が穿たれている。

オ 67落ち込み(第251図 写真図版181 Po535)

甕Po535は67落ち込みから出土した弥生土器で、弥生時代終末期後半のものである。

カ 88土坑(第251図 写真図版181 Po536)

Po536は88土坑から出土した弥生土器の畿内系加飾性複合口縁壺である。口縁端部を擬凹線文とS字状浮文で、屈曲部を同心円状の浮文で加飾する。角閃石を含むにぶい黄褐色の胎土をもち、河内地域からの搬入品で、弥生時代後期後葉のものである。

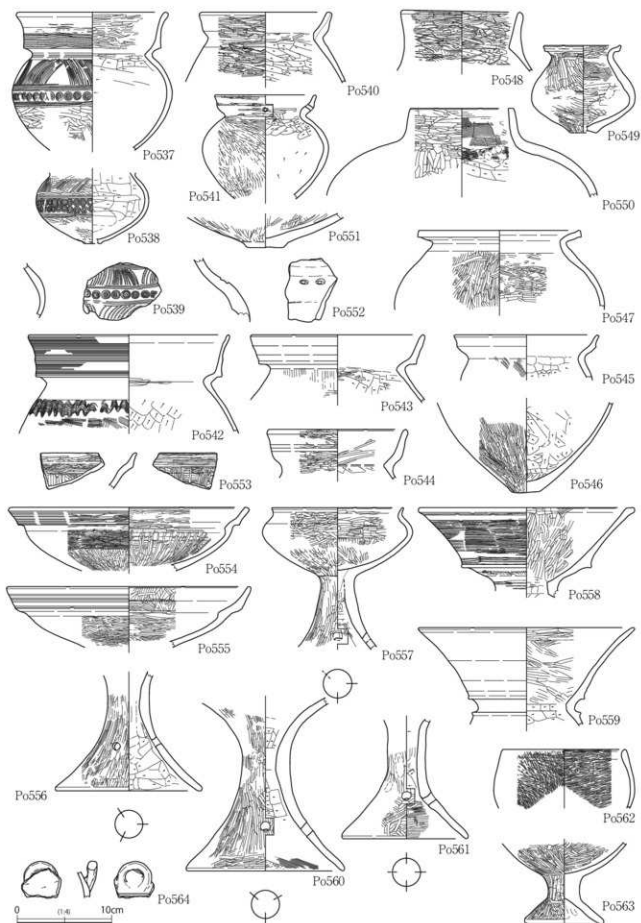
キ 50溝(第252図・第253図 写真図版177～179 Po537～Po565)

Po537～Po565は50溝で出土した弥生土器である。Po537～Po539は胴部外面をスタンプ文や貝殻役縁による刺突文で飾る裝飾甕である。Po537は僅かに外反する複合口縁外面に平行沈線文を施すが、口縁上半部は成形時にナデ消されている。Po538は胴部に煤の付着が顕著で、器面は被熱による微細な剥離が目立つ。

Po540・Po541は甕である。Po540の口縁部～胴部は細かく密なミガキによって仕上げられる。Po541は蓋を留める紐綴じ孔が穿たれている。どちらも橙色の胎土で輝石、雲母を含み、北近畿系のものである。Po542～Po546は甕である。Po542は上方へ拡張した複合口縁外面に櫛状工具による多条平行沈線文を施す。Po543・Po544は複合口縁外面はナデあるいはミガキ調整のみで平行沈線は施されていない。Po545は外傾して短く立ち上がる複合口縁をもつ。Po544は口縁部の立ち上がり鈍く、施文されない。橙色の胎土で金雲母を含む。Po544・Po545は北近畿系のものである。Po546は胴部最大径に対して狭小な底部をもつ。Po542・Po546が弥生時代終末期前半、Po543が終末期後半、その他は後期後葉のものである。

Po547は頸部から短く外反して立ち上がる口縁部をもつもので、弥生時代中期中葉のものである。

Po548～Po552は壺である。Po548は直立する口縁部をもち、内外面とも細かい横方向のミガキで精緻に仕上げられている。胎土は橙色を呈し、調整方法とともにPo540と酷似する。Po549は算盤玉状を呈す胴部をもつ小型の壺で、胴部から屈曲して短く立ち上がる口縁はほとんど拡張せず、端部をつまみ上げる程度である。Po550は肩が大きく張る胴部から短く直立する口縁をもつ壺で、脚部が付く



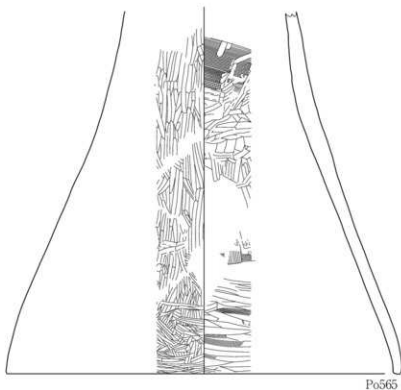
第252図 50溝出土土器(1)

タイプか。Po551は壺の底部で、狭小な平底から大きく開いて立ち上がる胴部をもつ。外面は二次的な被熱による剥離が目立つ。これらは北近畿系のものと考えられ、橙色の胎土で輝石を含む。Po552は壺の肩部で、竹管文が施される。

Po553～Po557は高坏で、全て北近畿系のものである。Po553～Po555は有段口縁の高坏で、口縁部外面には擬凹線が施され、細かなミガキで仕上げられている。Po557は口縁部のみ屈曲して立ち上がる浅い椀状坏部をもつ。Po553～Po555は弥生時代後期後葉、Po557は終末期前半に比定されよう。Po556はハの字状に開く脚部で3方向に円形の透かし孔が穿たれている。高坏脚部もしくは器台脚部と考えられる。

Po558～Po561は器台である。Po558は大きく拡張された受部に対し胴部が短縮化して筒状となる。弥生時代終末期前半の所産である。Po559はいわゆる鼓形器台で、終末期後半のものである。脚部Po560・Po561は橙色系胎土で外面調整はミガキを主体とする。北近畿系の後期後葉段階のものである。

Po562は鉢または椀状高坏の坏部、Po563は台付鉢で、Po564は把手付鉢の把手部分であろう。Po565は甔形土器で、弥生時代終末期後半のものである。



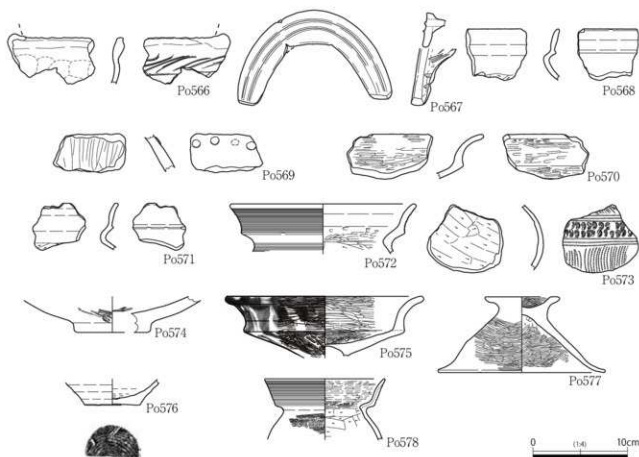
第253図 50溝出土土器(2)

(5) 遺構外出土土器(第254図 写真図版182・183 Po566～Po578)

Po566・Po567は手焙形土器で、接点はないが調整や胎土からみて同一個体と考えられる。Po567には開口部に断面三角形の貼付突帯が2条施される。Po566は4-2a層、Po567は5-1a層から出土した。

Po568・Po569は5-2a層から出土した土器である。Po569は細頸壺の肩部で角閃石を含むにぶい黄褐色の胎土で、河内地域からの搬入品である。Po568・Po569は古墳時代前期中葉のものである。Po570は高坏で、Po575と同タイプのものであろう。

Po572～Po574は6-1a層から出土した弥生土器である。甕Po572は貝殻腹縁による平行沈線が施される。Po573は3重圏の逆位のC字状スタンプ文、貝殻腹縁による連続刺突文、平行沈線に加飾される装飾甕の胴部である。いずれも弥生時代後期後葉のものである。壺Po574は狭小な平底から大きく開いて立ち上がる胴部をもつ。Po575は弥生土器の高坏であり、外面には黒色の液体が流れて付着し



第254図 遺構外出土土器

た痕跡が認められる。胎土的には在地の土器から大きな違和感はないが、形態的な特徴からすれば北陸地方のものか。

Po576～Po578は北側トレンチ出土土器である。Po576は土師器の坏であり、底部に回転糸切りが認められ10世紀後葉～11世紀中葉のものと考えられる。Po577は弥生土器の蓋である。Po578は弥生土器の甕で口縁部に櫛状工具による平行沈線、肩部に3重圏C字状スタンプ文が施され、弥生時代後期後葉のものである。

第2項 石器

(1) 3面

ア 11流路(第255図 写真図版183 S23・S24)

S23・S24は砥石である。

S23は凝灰岩製で、裏面の一部と正面、右側面が摩滅している。特に、正面の摩滅は顕著であり、凹面を呈する。砥面の粒度は細かく、中砥石の範疇に含まれる。

S24は砂岩製で、正面、裏面、左右両側面が摩滅している。特に、正面、左右両側面の摩滅は顕著であり、凹面を呈する。砥面の粒度はやや粗く、荒砥石の範疇に含まれる。

11 流路

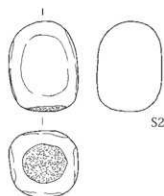


S23

33 竪穴



S25

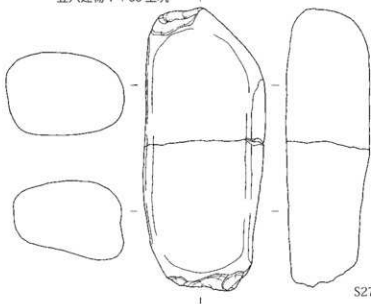


S26



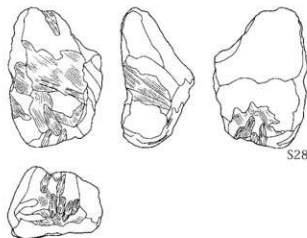
S24

竪穴建物1+66土坑



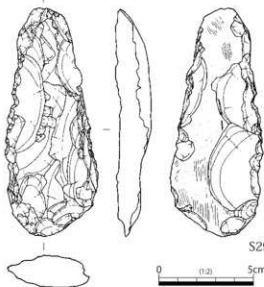
S27

66土坑



S28

50溝



S29



第255図 石器(1)

(2) 4面

ア 33竪穴(第255図 写真図版183 S25・S26)

S25は輝緑凝灰岩製の砥石である。正面が顕著に摩滅している。砥面の粒度は細かく、中砥石の範疇に含まれる。

S26はアイサイト製の砥石である。下面に敲打痕が認められる。

(3) 5面

ア 竪穴建物1・66土坑(第255図 写真図版184 S27・S28)

S27はアブライト製の砥石である。竪穴建物1から出土した資料と66土坑から出土した資料が接合した。上下端部に敲打による剥離面が多数認められる。

S28はアブライト製の有溝砥石である。正面下部、裏面下部、下端部に溝状の砥面が認められる他、正面、左右両側面の一部に摩滅が認められる。砥面の粒度はやや粗く、荒砥石の範疇に含まれる。

イ 50溝(第255図 写真図版184 S29)

S29は流紋岩製の石鋏である。素材の周縁から調整剥離を施して成形している。ヒンジ、ステップを頻発して調整が行き詰まり、裏面には素材の礫面が残存しているが、裏面の刃部周辺には使用に伴うと考えられる縦方向の擦痕が認められ、一応は完成品として使用されたことが窺える。

(4) 遺物包含層等

ア 2-1a層(第256図 写真図版184 S30・S31)

S30は軟玉製の巡方である。全体的に丁寧に研磨され、稜も面取りされている。長方形の透かし孔は、裏面から回転工具によって穿孔されており、裏面の左下には革帯に留めるための孔が認められる。上部及び左側縁を欠損する。

S31は輝緑凝灰岩製の砥石である。正面、裏面、右側面が摩滅している。特に、正面と裏面の摩滅が顕著であり、凹面を呈する。裏面、右側面には、刃縁による条痕が認められる。左側面には、上部と左右両側に施溝痕が認められ、施溝分割技法によって角柱状の素材を獲得したことが分かる。また、分割面には擦痕が認められ、研削によって砥面形成を試みたと考えられる。

イ トレンチ(第256図 写真図版184 S32・S33)

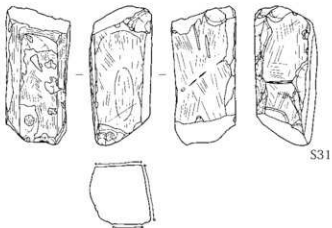
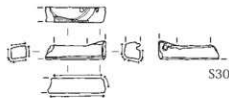
S32は結晶片岩製の石磨丁である。中央東西確認トレンチ内で出土した。背部は外湾し、刃部は直線状を呈する。全体的に研削によって成形され、孔は両面穿孔される。刃部は鋭く形成されているが、使用によって丸みを帯びている部分がある。左半部を欠損する。

S33は凝灰岩製の砥石である。調査区東壁から出土した。正面、裏面、左右両側面が摩滅している。上面、下面には全面に擦痕が認められ、研削によって直方体に成形したものと考えられる。各砥面には成形時の擦痕が残存しており、使用はそれほど進んでいないが、正面の左側には顕著に摩滅した部分がある。

(5) 玉作関連資料(写真図版184)

剥片・砕片が主体のため図化しなかったが、2区からは18点の玉作資料が出土した。出土遺構及び出土層位の内訳は、2溝(2点:近代)、11流路(7点:中世後期)、50溝(4点:弥生時代後期後葉)、

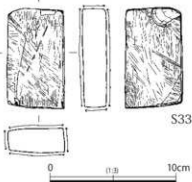
2-1a層



中央東西確認トレンチ



東壁



第256図 石器(2)

5-2a層(5点:古墳時代前期)である。石材は、碧玉、緑色凝灰岩、鉄石英が認められる。碧玉は、濃緑色のもの(碧玉A)と淡緑色のもの(碧玉B)に大別でき、前者は鳥根県松江市花仙山産の碧玉と類似している。5-2a層の1点(S49)を除いて、研削等の加工痕は認められない。弥生時代後期後葉の50溝に見られることから、その時期に持ち込まれたものが、後世の攪乱によって他の遺構・包含層に二次的に埋没したと考えられる。

第3項 木器

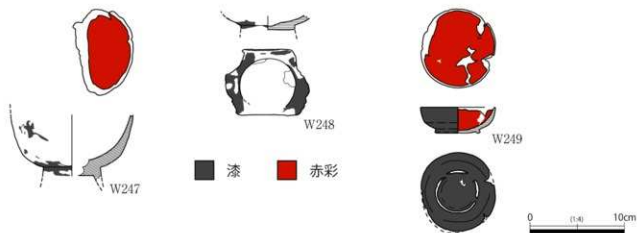
本調査区では木器として取り上げた資料は僅か11点到過ぎず、その中で図化に耐え得るのは以下に掲げる挽物椀3点のみである。いずれも遺存状態は不良であったため、保存処理を実施している。

1 容器(挽物)

(1) 3面

ア 7流路(第257図 巻頭図版6 W247)

W247は挽物椀である。全体の1/3程度しか残っていないうえ、高台も欠損している。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布されている。内面の塗布は残りが良いが、外面はほとんど残っていない状態である。



第257図 木器

イ 11流路(第257図 巻頭図版6 W248)

W248は11流路から出土した挽物椀であるが、口縁部は全く残っていないうえ、高台も欠いている。漆は外面に塗布され、全体の半分弱程度が残存している。底部には塗布されていない。また、内面からは漆は確認出来なかった。

ウ 12溝(第257図 巻頭図版6 W249)

W249は挽物椀である。W247と同様、外面黒漆及び内面朱塗のタイプであるが、W247に比して小ぶりである。本調査区から出土した椀の中では最も遺存状態が良く、全体の形状も復元出来る。

第4項 金属器

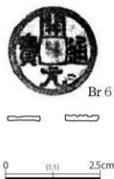
1 古銭

(1) 3面

ア 11流路(第258図 写真図版143 Br6)

Br6は11流路から出土した開元通宝である。全体形状を窺えるものの、微視的に見れば裏面と周縁を中心に摩耗が進んでいることが確認出来、正面側に比して、無紋の裏面側の周郭及び孔郭はほぼ消失している状態に近い。また非常に僅かではあるが、表側に向かって歪みが生じているように、おそらく主に、埋没過程を原因とする資料の劣化や破損が進行していることが窺える。

「開」の門構えの上端が開いているようにも見えるが、表面側も摩滅の影響を受けているためか判然としない。「元」の2画目の書き出しが、左斜め上方へ跳ね上がっていることが視認出来る。



第258図 金属器

第5節 遺物観察表

第56表 土器観察表(1)

種目 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 123-7a	遺構	層位	種別	法量 (g)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
248	Po474	65-3	IB-5	2溝		磁器 皿	●12.2 3.3	外面：施軸 内面：格子文、蛇の目軸はぎ	密	良好	施軸部・灰白色 器体部・灰白色	肥前系
248	Po475	98-1	IB-5	2溝		磁器 皿	- △3.0	外面：高台部露胎 内面：草花文、蛇の目軸はぎ	密	良好	施軸部・明緑灰色 器体部・灰黄色	肥前系
248	Po476	140-1	IB-5	2溝		磁器 碗	- △2.6	外面：施軸、高台部露胎 内面：底部露胎	密	良好	施軸部・灰白色 器体部・灰白色	
248	Po477	65-5	IB-5	2溝		弥生土器 高坏	- △3.4	外面：風化のため調整不明、一部 ナデナ 内面：風化のため調整不明	密	良好	内外面とも灰黄～灰白色	有段 外系系
248	Po478	153-1	IB-5	7流路		青磁 碗	- △3.6	外面：施軸・垂文文 内面：施軸・露胎	密	良好	内外面ともオリブ灰 ～灰オリブ色	陶C群
248	Po479	176-1	IB-5	7流路		青磁 香炉	-	外面：施軸 内面：施軸、一部露胎	密	良好	施軸部・明緑灰色 露胎部・灰白色	
248	Po480	164	1C-6a	7流路		弥生土器 茶碗蓋?	- △5.0	外面：ナデ・スタンプ文 内面：ヘラケズリ	密	良好	外・暗灰黄色 内・黒褐色	3重筒同心円ス タンプ文
248	Po481	249-2	1C-6a	11流路		備前焼 椀鉢	- △5.0	外面：ナデ 内面：ナデ・顔目	密	良好	内外面とも赤灰色	
248	Po482	215-3	IB-5	11流路		備前焼 椀鉢	- △4.9	外面：ナデ 内面：ナデ・顔目	密	良好	外・灰褐～黒褐色 内・赤褐色	
248	Po483	217-1	IB-5	11流路		備前焼 椀鉢	- △6.0	外面：ナデ 内面：ナデ・顔目	密	良好	内外面とも灰色	即日磨減
248	Po484	201-1	IB-5	11流路		瓦質土器 煎	- △4.9	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：ナデ・指頭圧痕	密	良好	外・暗灰色 内・灰～灰白色	
248	Po485	195	IB-5	11流路		土師器 高台付杯	- △2.5	外面：回転ナデ 内面：杯部回転ナデ、高台部ナデ、 底部回転糸切り	密	良好	内外面ともいぶい橙～ いぶい黄褐色	
248	Po486	193-1	1C-5a	11流路		煎煮器 鉢	- △4.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも黄灰～灰白色	東縁系
248	Po487	205-1 388鉢	IB-5	11流路		弥生土器 器台	●20.5 △4.4	外面：口縁部露胎、受部ミガキ 内面：ミガキ	密	良好	内外面ともいぶい黄橙～ 浅黄色	北近畿系
248	Po488	216-1	IB-5	11流路		弥生土器 高坏	- △5.3	外面：口縁部露胎、杯部ナデ・ ミガキ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともいぶい黄褐色	有段 北近畿系
248	Po489	236	1C-6a	11流路		弥生土器 直口碗	5.8 12.6	外面：ミガキ 内面：顔部はしり目・ミガキ	密	良好	外・橙～黒色 内・いぶい橙～黄灰色	胎土に輝石を含 む 外系系
248	Po490	229-1	IB-5	11流路	確認ベント 埋土8層	弥生土器 器	- △5.6	外面：ハケメ・垂状文・板状工具 による浮状文 内面：土す・指頭圧痕	密	良好	外・いぶい赤～いぶい 黄褐色 内・暗灰色	外面赤彩 内赤系
248	Po491	204-4	IB-5	11流路		弥生土器 羹	●14.5 △6.9	外面：口縁部露胎平行沈線、顔部 平行沈線、肩部或状文 内面：口縁部ミガキ、顔部以下ヘ ラケズリ	密	良好	外・浅黄～明黄褐色 内・灰黄～いぶい黄褐色	内外面露胎着
249	Po492	475 481	IB-7	39土坑		土師器 器	- △13.1	外面：ハケメ 内面：体部ヘラケズリ後ナデ、底 部指頭圧痕	密	良好	外・橙～いぶい黄褐色 内・いぶい黄褐色	
249	Po493	431 475 483	IB-7	39土坑		土師器 羹	●15.0 △7.7	外面：口縁～顔部ナデ、体部ハケ メ 内面：口縁～顔部ナデ、体部ヘラ ケズリ	密	良好	内外面とも灰白～いぶ い黄褐色	
249	Po494	482	IB-7	39土坑		土師器 器台	19.3 12.0	外面：ナデ 内面：受部ナデナ、脚部ヘラケ ズリナデ	やや密	良好	内外面とも浅黄褐色	
249	Po495	485	IB-7	39土坑		土師器 直口碗	10.4 △9.2	外面：口縁部ミガキ一部ハケメ残 る、顔部以下ナデ・ハケメ 内面：口縁～顔部ナデ、体部ヘラ ケズリ	密	良好	内外面とも浅黄褐色	
249	Po496	399 438	1C-6a	40土坑		土師器 器台	20.0 9.4	外面：ナデ 内面：受部ミガキ、脚部ヘラケ ズリ後ナデ	やや密	良好	内外面とも橙～浅黄褐 色	内面露胎着 39土坑出土破片 と結合
249	Po497	414	1C-6a	31土坑		土師器 高坏	11.4 △5.5	外面：ミガキ・ナデ 内面：ミガキ	密	良好	外・いぶい橙 内・浅黄褐色	
249	Po498	416	1C-6a	31土坑		土師器 乳鉢	●15.6 4.8	外面：杯部ミガキ、脚部ナデ 内面：杯部ミガキ、脚部ナデ	密	良好	外・いぶい橙～黒褐色 内・いぶい橙～黒褐色	内面底部ヘラ記 号
249	Po499	418	1C-6a	31土坑		土師器 小型丸底 器	9.1 8.7	外面：口縁～体部上手ナデ、体部 下半部ハケメ 内面：口縁～顔部ナデ、体部ヘラ ケズリ後ナデ、底部指頭圧 痕	やや密	ふつう	内外面とも灰白色	内外面露胎着
249	Po500	419	1C-6a	31土坑		土師器 羹	●14.6 △10.5	外面：口縁～顔部ナデ、体部ハケ メ 内面：口縁～顔部ナデ、体部ヘラ ケズリ	密	良好	外・灰白～黒色 内・いぶい黄褐色	
249	Po501	333	IB-7	34ビット		土師器 高坏	14.5 △6.2	外面：ナデ、下部指頭圧痕 内面：ハケメ後ナデ	密	良好	外・いぶい赤褐色 内・浅黄褐色	外面全体・内面 口縁部赤彩

第57表 土器観察表(2)

種目 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 123-7a	遺構	層位	種別	法量 (調査等)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
249	Pa502	334	1C-6a	30ピット		土師器 釜	●17.6 △22.8	外面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ メ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハラ ケズリ後ナデ	やや密	やや 良好	外-灰黄褐色-にふい黄褐色 内-灰白-灰黄色	外面口縁部工具 痕 内外面塚付着
250	Pa503	443	1B-6j	32竪穴		土師器 執御杯	- △3.3	外面：環部ミガキ、頸部ナデ 内面：環部ミガキ、頸部ナデ	やや粗	やや 良好	内外面とも橙褐色	内面脚部隆起或前 ハラ記号(竪2 条)
250	Pa504	444	1B-6j	32竪穴		弥生土器 直口壺	- △5.0	外面：口縁部頸部突文(爪形)、頸 部スタンプ文 内面：ミガキ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	3重同心円ス タンプ文
250	Pa505	460-1 463	1B-6j	32竪穴		土師器 釜	●15.0 △9.3	外面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ メ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハラ ケズリ	やや密	やや 良好	内外面とも浅黄褐色	外面塚付着
250	Pa506	460-2	1B-6j	32竪穴		土師器 釜	●13.4 △22.2	外面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ メ 内面：口縁-頸部ナデ、体部上手 風化により調整不明、体部 下手指頭圧痕	やや密	ふつう	外-橙へ-にふい橙褐色 内-橙褐色	
250	Pa507	463	1B-6j	32竪穴		土師器 壺	●20.6 △22.7	外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ後 ナデ、体部ハケメ 内面：口縁-頸部ナデ、指頭圧痕 体部ハラケズリ	やや密	やや 良好	内外面とも橙褐色	
250	Pa508	390	1B-6j	33竪穴		土師器 高坏	●19.8 △6.4	外面：ナデ、下部ハケメ・ミガキ 残存 内面：ミガキ	やや密	やや 良好	内外面とも浅黄褐色-灰 白色	
250	Pa509	405-1	1B-6j	33竪穴		土師器 高坏	- △8.7	外面：ハケメ後-一部ナデ・指頭圧 痕 内面：ハラケズリ・ミガキ	やや密	やや 良好	内外面とも浅黄褐色-灰 白色	3方向の円形透孔
250	Pa510	405-2 428 466	1B-6j	33竪穴		土師器 釜	15.3 △6.4	外面：口縁-頸部ナデ、体部風化 により調整不明 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハラ ケズリ	やや粗	やや 良好	外-灰白色 内-灰白-灰黄色	
250	Pa511	472	1B-6j	33竪穴		土師器 釜	●15.8 △11.2	外面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ メ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハラ ケズリ	やや密	良好	内外面ともふい黄褐色	
250	Pa512	480	1B-6j	33竪穴		土師器 釜	●17.4 △29.7	外面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ メ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハラ ケズリ	やや密	やや 良好	外-にふい黄褐色 内-にふい黄褐色-浅黄褐色	
251	Pa513	572	1B-6j	竪穴建物 1 55竪穴		弥生土器 釜	●21.6 △9.9	外面：口縁部縁部平行沈線後ナデ、 頸部ナデ、肩部波状文 内面：口縁部ナデ・ミガキ、頸部 以下ハラケズリ	やや密	良好	外-にふい橙褐色 内-浅黄褐色	外面塚付着
251	Pa514	573	1B-6j	竪穴建物 1 55竪穴		弥生土器 釜	●18.6 △8.5	外面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ メ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハラ ケズリ	やや粗	良好	外-浅黄褐色 内-浅黄褐色-にふい黄褐 色	
251	Pa515	562-2	1B-6j	竪穴建物 1 55竪穴		弥生土器 灰燼	- △4.1	外面：平行沈線、スタンプ文 内面：ナデ	密	良好	外-黒色 内-灰黄色	3重同心円ス タンプ文
251	Pa516	606	1B-6j	竪穴建物 1 55竪穴		弥生土器 釜	●12.2 △4.3	外面：ミガキ、口縁部ハラ揃平行 沈線 内面：ミガキ	やや密	良好	外-灰褐色 内-褐灰色	小型 北近畿系
251	Pa517	590	1B-6j	竪穴建物 1 55竪穴		弥生土器 鉢	8.8 6.5	外面：ミガキ、底部付着指頭圧痕 内面：口縁-体部上手ナデ・ミガ キ、体部下半ハラケズリ後 ナデ	やや密	良好	外-浅黄褐色-にふい橙褐色 内-浅黄褐色	外面工具痕 内面からの口縁 部打ち欠き
251	Pa518	561 565	1B-7j	53土坑		弥生土器 釜	17.0 △14.9	外面：ミガキ・ナデ、体部にタタ キ目見ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ハラ ケズリ後ナデ	密	良好	外-黒褐色-にふい黄褐色 内-褐灰-にふい黄褐色	胎土に金雲母を 含む 外面塚付着
251	Pa519	583	1B-7j	54土坑		弥生土器 釜	●21.4 △8.6	外面：口縁部縁部平行沈線後ナデ、 頸部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ・ハラケズリ後 一部ミガキ、頸部以下ハラ ケズリ	密	良好	内外面ともふい黄褐色 -黒褐色	胎土に輝石を含 む 外面塚付着
251	Pa520	634	1B-6j	66土坑		弥生土器 釜	13.4 7.8	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：つまみ部ナデ、指頭圧痕、 基部ハケメ後ナデ	密	良好	外-赤褐色-灰褐色 内-にふい橙褐色	北近畿系
251	Pa521	632	1B-6j	66土坑		弥生土器 釜	14.1 5.2	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：つまみ部ナデ、指頭圧痕、 基部ハケメ後ナデ、指頭圧 痕	密	良好	外-にふい赤褐色-にふい 橙褐色 内-橙へ-にふい橙褐色	北近畿系
251	Pa522	629	1B-6j	66土坑		弥生土器 釜	10.2 5.7	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：つまみ部ナデ、基部ハケメ 後ナデ、指頭圧痕	やや粗	良好	外-にふい橙褐色-褐色 内-橙褐色	外面二次的焼熱 の可能性あり 北近畿系
251	Pa523	588-2 623 624	1B-6j	66土坑		弥生土器 釜	16.5 △15.1	外面：口縁-頸部ナデ、体部タタ キ後ハケメ、ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ハラ ケズリ	密	良好	内外面とも灰褐色-橙褐色	外面塚付着 北近畿系
251	Pa524	624 626 636	1B-6j	66土坑		弥生土器 釜	18.1 △4.8	外面：口縁部腹内線、頸部以下ハ ケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ハラ ケズリ	やや粗	良好	内外面ともふい黄褐色	胎土にタクリ礫 を混雑含む 北近畿系

第58表 土器観察表(3)

種目 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7a	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
251	Pa525	619	1B-6j	66土坑		弥生土器 壺	15.9 △6.4	外面：口縁一部ナデ、体部ミガキ 後ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラ ケズリ	やや密	良好	外：浅黄褐色～灰黄褐色 内：ふい～黄褐色～灰黄褐色	胎土に金雲母を 含む 内外面保付着 北近畿系
251	Pa526	588-1	1B-6j	66土坑		弥生土器 壺	19.7 △2.5	外面：ナデ 内面：ナデ	やや密	良好	内外面ともにふい～黄褐色 ～黒灰色	北近畿系
251	Pa527	608-2 626 637	1B-6j	66土坑		弥生土器 壺	18.9 △4.5	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラ ケズリ	密	良好	内外面とも黄～灰褐色	外面一部保付着 北近畿系
251	Pa528	625	1B-6j	66土坑		弥生土器 壺	15.5 △7.2	外面：口縁一部ナデ、体部ハケ メ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、頸部 以下ヘラケズリ	やや粗	良好	内外面とも灰黄～黒色	内外面保付着 北近畿系
251	Pa529	623	1B-6j	66土坑		弥生土器 壺	△15.4 △6.0	外面：口縁一部ナデ、頸部以下ヘラ ケズリ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラ ケズリ	やや粗	良好	外：褐色 内：橙～黒褐色	北近畿系
251	Pa530	620	1B-6j	66土坑		弥生土器 台母鉢	△8.0 9.0	外面：口縁部縦四線、体部ミガキ 後ナデ、脚部ナデ、部頭 圧痕 内面：体部ナデ、ミガキ、脚部附 頭圧痕	密	良好	内外面ともにふい～黄褐色 ～黒色	外面保付着 北近畿系
251	Pa531	608-1	1B-6j	66土坑		弥生土器 高杯	- △4.3	外面：口縁部縦四線、杯部ナデ、 ミガキ 内面：ナデ後ミガキ	やや密	良好	外：ふい～黄褐色～黒褐色 内：ふい～黄褐色	北近畿系
251	Pa532	582 623他	1B-6j	66土坑		弥生土器 高杯	- △16.0	外面：ミガキ 内面：脚柱部しぼり目一部ヘラケ ズリ、脚部部ハケメ後ナデ	密	良好	内外面とも淡赤褐色～ ふい～褐色	3方向の円形透 孔 胎土に雲母・角 閃石・輝石を含 む 北近畿系
251	Pa533	588-4 659	1B-6j	66土坑		弥生土器 部台	19.7 19.6	外面：ミガキ一部ナデ 内面：受部ミガキ、脚柱部ヘラケ ズリ、脚部部板状工具によ るナデ	やや密	良好	外：橙～にふい～黄褐色 内：ふい～橙～にふい～黄 褐色	4方向の円形透 孔 胎土に角閃石又 は輝石を含む 北近畿系
251	Pa534	654 660	1B-6j	66土坑		弥生土器 部台	17.8 17.2	外面：口縁部ナデ、受部以下ミガ キ一部ハケメ残る 内面：受部ハケメ後ミガキ、脚柱 部ヘラケズリ、脚部部ハケ メ	やや密	良好	外：にふい～橙～褐色 内：ふい～黄褐色	3方向の円形透 孔 胎土にクワリ ・雲母・輝石 を豊富含む 北近畿系
251	Pa535	609	1B-7j	67 落ち込み		弥生土器 壺	- △4.7	外面：ナデ 内面：ナデ	やや密	ふつう	内外面ともにふい～黄褐色	外面保付着
251	Pa536	684-1	1B-5j	88土坑		弥生土器 壺	△31.0 △6.0	外面：縦四線文・S字状浮文・瓶 状工具によるナデ、同心円 浮文 内面：ミガキ	やや粗	良好	外：にふい～黄褐色 内：にふい～橙～黒色	胎土に角閃石を 含む 内面に加納性複 合口縁部
252	Pa537	528-6	1C-6a	50溝		弥生土器 筑物壺	△15.8 △14.6	外面：口縁部平行沈線後ナデ、体 部上半輪縁平行沈線・スタン プ文、体部下半ハケメ後 ミガキ 内面：口縁部ミガキ、頸部以下ヘ ラケズリ後ナデ	密	良好	外：にふい～橙～にふい～黄 褐色 内：浅黄褐色	3重面同心円ス タンプ文 外面保付着
252	Pa538	598-12	1C-6a	50溝		弥生土器 筑物壺	- △7.5	外面：体部上半平行沈線・スタン プ文、体部下半ミガキ後ナ デ 内面：ヘラケズリ後ナデ	やや密	良好	外：にふい～橙～黒褐色 内：黒褐色	3重面同心円ス タンプ文 胎土に輝石を含 む 外面保付着
252	Pa539	559-1	1C-6a	50溝		弥生土器 筑物壺	- △5.8	外面：目数横線による連続斜交文、 平行沈線、スタンプ文 内面：ヘラケズリ	密	良好	外：市赤褐色 内：褐色	4重面同心円ス タンプ文
252	Pa540	598-15 612	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	△13.2 △7.5	外面：ミガキ後一部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラ ケズリ	密	良好	内外面とも褐色	胎土に輝石を含 む 北近畿系
252	Pa541	603-1	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	△10.6 △11.0	外面：ミガキ 内面：口縁部ナデ後ミガキ、頸部 以下ヘラケズリ後ナデ	やや密	良好	内外面とも褐色	頸部円孔1箇所 あり 胎土に輝石・雲 母を含む 小型、北近畿系
252	Pa542	528 538-5	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	△21.2 △10.5	外面：口縁部縦縁平行沈線後ナデ、 頸部ナデ、肩部或伏文、体 部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ミガキ、 体部ヘラケズリ後ナデ	やや密	良好	外：にふい～褐色 内：灰黄褐色	胎土に金雲母を 少量含む 外面保付着
252	Pa543	568-1	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	△18.2 △7.2	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケ メ後ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラ ケズリ、一部ミガキ	やや密	良好	外：浅黄褐色～にふい～黄褐色 内：橙～浅黄褐色	
252	Pa544	612-3	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	△14.5 △5.3	外面：ミガキ・ナデ 内面：口縁部ナデ・ミガキ、頸部 以下ヘラケズリ	密	良好	外：橙～浅黄褐色 内：にふい～橙～にふい～黄 褐色	胎土に金雲母を 含む 外面黒縁あり 北近畿系
252	Pa545	538-2	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	△15.0 △4.8	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケ メ後ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラ ケズリ後ナデ	やや密	良好	外：褐色 内：褐色	北近畿系

第59表 土器観察表(4)

種目番号	遺物番号	取上番号	地区	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調査等)	胎土	焼成	色調	備考
252	Pa046	568-3	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	- △9.6	外面: 体部ミガキ、底部ナデ、指頭圧痕 内面: ヘラケズリ後ナデ	やや密	良好	外・橙～にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色～黒色	内外面塚付着
252	Pa047	598-10	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	●17.0 △8.4	外面: 口縁～頸部ナデ、体部ミガキ 内面: 口縁～頸部ナデ、体部ヘラケズリ、ハケメ後ミガキ、指頭圧痕	密	良好	外・にぶい橙褐色 内・淡褐色	外面塚付着
252	Pa048	603-2 612	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	12.6 △6.5	外面: ミガキ 内面: 口縁部ミガキ、頸部以下ヘラケズリ一部ミガキ	密	良好	内外面とも橙～にぶい橙褐色	胎土に輝石を含む 外面黒縁あり 北近畿系
252	Pa049	558-2 567地	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	●8.0 ●9.2	外面: 口縁部ナデ、頸部以下ミガキ 内面: 口縁～頸部ミガキ、体部上半ハケメ、体部下半ナデ、ミガキ後指頭圧痕	やや密	良好	内外面とも橙～にぶい黄褐色	北近畿系
252	Pa050	538-1	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	●11.0 △9.4	外面: ハケメ後ミガキ 内面: 口縁部ハケメ後一部ミガキ、頸部ハケメ、指頭圧痕、体部ヘラケズリ	やや密	良好	外・橙～灰褐色 内・にぶい橙褐色	胎土にクワリ礫、輝石を含む 北近畿系
252	Pa051	569-2	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	- △2.9	外面: ミガキ 内面: ミガキ後ナデ	やや粗	やや良好	外・にぶい橙褐色 内・褐色	
252	Pa052	598-2	1C-6a	50溝		弥生土器 壺	- △8.8	外面: ナデ、竹管文 内面: ナデ、ヘラケズリ	密	良好	内外面とも灰黄色	
252	Pa053	559-4	1C-6a	50溝		弥生土器 高坏	- △3.8	外面: ミガキ後縦凹線 内面: ナデ、ミガキ	やや密	良好	外・灰黄褐色～黒色 内・にぶい黄褐色	北近畿系
252	Pa054	538-6	1C-6a	50溝		弥生土器 高坏	●24.6 △6.7	外面: 口縁部縦凹線後ミガキ、環部ミガキ 内面: 口縁部ミガキ後ナデ、環部ミガキ	密	良好	内外面ともににぶい橙～にぶい黄褐色	胎土に金剛母を含む 北近畿系
252	Pa055	568 598-11	1C-6a	50溝		弥生土器 高坏	●25.8 △6.4	外面: 口縁部縦凹線、環部ミガキ後ナデ 内面: ミガキ後ナデ	やや密	良好	内外面ともににぶい橙～にぶい黄褐色	胎土に輝石を含む 北近畿系
252	Pa056	538-4	1C-6a	50溝		弥生土器 高坏	- △12.6	外面: ミガキ脚輪部ハケメ残る 内面: しぼり目、ヘラケズリ後ナデ一部ハケメ残る	やや密	良好	外・赤褐色～橙褐色 内・橙褐色	3方向の凹形穿孔3ヶ所遺存 北近畿系
252	Pa057	567-2 569-1 他	1C-6a	50溝		弥生土器 高坏	●13.9 △15.0	外面: ミガキ後一部ナデ 内面: 環部ミガキ後一部ナデ、脚部しぼり目、ヘラケズリ、ハケメ後ナデ	やや密	良好	内外面とも浅黄褐色～にぶい橙褐色	3方向の凹形穿孔3ヶ所遺存 胎土に輝石を微量含む 北近畿系
252	Pa058	598-13	1C-6a	50溝		弥生土器 器台	●22.6 △9.5	外面: 受部縦帯平行沈線、脚部ミガキ後一部ナデ 内面: 受部ミガキ、脚部ヘラケズリ、ナデ	やや密	良好	内外面ともににぶい橙～にぶい黄褐色	
252	Pa059	558-1	1C-6a	50溝		土師器 器台	●22.8 △10.4	外面: ナデ 内面: 受部ミガキ、脚部ヘラケズリ	やや粗	やや不良	外・橙～浅黄褐色 内・浅黄褐色～褐色	
252	Pa060	528-4 567	1C-6a	50溝		弥生土器 器台	- △18.3	外面: ミガキ一部ハケメ残る、指頭圧痕 内面: 受部～脚部ヘラケズリ後ナデ、脚部部ハケメ後一部ナデ	やや密	良好	内外面とも橙褐色	3方向の凹形穿孔3ヶ所遺存 胎土に黒炭母を含む
252	Pa061	598-14	1C-6a	50溝		弥生土器 器台	- △12.6	外面: ミガキ、指頭圧痕 内面: 脚部ヘラケズリ後ナデ、脚部部ハケメ	やや密	良好	外・淡褐色～にぶい橙褐色 内・にぶい橙褐色	4方向の凹形穿孔3ヶ所遺存 外灰系
252	Pa062	598-4	1C-6a	50溝		弥生土器 鉢?	●12.9 △6.3	外面: ミガキ 内面: ミガキ	密	良好	外・灰白色～黒色 内・灰黄褐色～にぶい橙褐色	高坏(ワイングラス形)、外米系?
252	Pa063	567-1	1C-6a	50溝		弥生土器 台付鉢	- △8.6	外面: ハケメ後ミガキ 内面: 脚部ミガキ、脚部ナデ、指頭圧痕	やや密	良好	外・橙～淡褐色 内・灰白色	外米系?
252	Pa064	559-2	1C-6a	50溝		弥生土器 把手付鉢	- △2.8	外面: ナデ、平行沈線 内面: ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外・灰白～浅黄褐色 内・灰白色	
253	Pa065	567-2 568地	1C-6a	50溝		甕形土器	- △38.5	外面: ミガキ 内面: ハケメ後ミガキ、一部ナデ	やや密	良好	外・橙～浅黄褐色 内・浅黄褐色～にぶい黄褐色	
254	Pa066	133 135	1B-7j		4-2a層	手造形 土器	- △4.9	外面: ナデ、ヘラケズリ後ナデ、指頭圧痕 内面: ヘラケズリ後ナデ、指頭圧痕	密	良好	外・灰白色 内・灰黄色	鉢部、Pa067と同一体か
254	Pa067	123 295 331	1B-7j		5-1a層	手造形 土器	- △9.75	外面: 胎付突起、ヘラケズリ後ナデ 内面: ナデ	密	良好	外・灰白色 内・にぶい黄褐色	甕部または内凹石または輝石を多く含む
254	Pa068	508-1	1C-6a		5-2a層	土師器 壺	- △5.4	外面: ナデ 内面: ナデ、ヘラケズリ	密	ふつう	内外面ともににぶい橙～にぶい黄褐色	
254	Pa069	534	1B-6j		5-2a層	弥生土器 網罟壺	- △3.9	外面: ナデ、凹形浮文 内面: 板状工具によるナデ	密	やや良好	外・にぶい黄褐色 内・暗灰黄色	畿内(河内)産、胎土に内凹石を含む
254	Pa070	522	1C-6a		5-2a層	弥生土器 高坏	- △4.7	外面: ミガキ 内面: ミガキ	密	良好	外・橙～黒褐色 内・にぶい黄褐色	外米系? 胎土にクワリ礫を含む

第60表 土器観察表(5)

種目 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7a	遺構	層位	種類	流量 (ml)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
254	Pv671	508-2	1C-6a		5-2a層	土師器 壺	- △4.9	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラ ケズリ	やや密	やや 良好	外：灰黄～黒色 内：浅黄色	外面塚付着
254	Pv672	505	1B-6j		6-1a層	弥生土器 壺	※19.4 △5.05	外面：口縁部目録線による平行 沈線、頸部ヘラ幅平行沈線 内面：口縁部ミガキナデ、頸部 以下ヘラケズリ	やや密	良好	外：内：黄～黒色 内：灰白色	外面塚付着 胎土にクヤリ礫 を微量含む
254	Pv673	611	1B-7j		6-1a層	弥生土器 袋鉢壺	- △7.2	外面：目録線直線刻変文、ヘラ 指沈線、スタンプ文 内面：ヘラケズリ	密	やや 良好	外：灰黄褐色 内：灰白色	C字状スタンプ文 外塚付着 胎土にクヤリ礫 を含む
254	Pv674	545	1B-6j		6-1a層	弥生土器 壺	- △3.4	外面：各部ハケメ後ミガキ、底部 ナデ 内面：ミガキ	密	良好	外：灰黄～黄灰色 内：灰白色	
254	Pv675	477 535	1B-6j		6-1a層	弥生土器 高杯	※0.7 △6.3	外面：ミガキ一部ハケメ残る 内面：杯部ミガキ	密	良好	外：灰黄～灰白色 内：灰黄～黄褐色	外面タテ方向に 垂れる筋状の痕 あり、外糸系
254	Pv676	127-1	1B-5j		北側傾斜 帯	土師器 杯	- △2.75	外面：体部刻線ナデ、底部刻線糸 切り 内面：刻線ナデ	密	良好	外：内：黄～黄褐色 内：灰白色	外面黒線あり
254	Pv677	517	1B-5j		北壁	弥生土器 壺	※17.6 8.0	外面：つまみ部ナデ、基部ミガキ 内面：つまみ部ミガキ、基部ヘラ ケズリ後ミガキナデ	やや粗	良好	外：内：黄～黄褐色 内：灰黄～黄褐色	11北壁相当層より 出土
254	Pv678	541	1B-5j		北壁	弥生土器 袋鉢壺	※12.7 △6.5	外面：口縁部幅平行沈線、頸部 ナデ、肩部スタンプ文、ハ ケメ 内面：口縁部ミガキ、頸部以下ヘ ラケズリ	密	良好	外：内：黄～黄褐色 内：灰黄～黄褐色	3重周C字状スタ ンプ文 外面塚付着 胎土に赤緑を含む

第61表 石器観察表

種目 番号	遺物 番号	取上 番号	地区 T23-7a	遺構	層位	種類	流量 (cc・g)				石材	備考
							最大径	最大幅	最大厚	重量		
255	S23	198-1	1B-5j	11底路		礫石	6.9	3.0	2.2	49.3	燧灰岩	
*	S24	239	1B-5j	11底路	棟土8層	礫石	7.5	9.0	2.7	225.6	砂岩	
*	S25	389	1B-6j	33除穴		礫石	△5.2	4.2	1.0	△35.9	輝緑凝灰岩	
*	S26	342	1B-6j	33除穴		礫石	7.2	5.5	5.3	312	ゼイサイト	
*	S27	629・ 655-2	1B-6j	型穴建物1 66上土		礫石	22.4	9.6	6.6	2282	アブライト	接合
*	S28	655-1	1B-6j	66上土		有溝礫石	11.0	7.4	5.8	447	アブライト	
*	S29	560-1	1C-6a	50溝		石炭	12.1	4.9	1.9	117.2	流紋岩	
256	S30	89	1B-5j		2-1a層	鈣(高方)	△1.0	△3.1	0.8	△4.1	軟玉	
*	S31	96	1C-6a		2-1a層	礫石	7.4	3.3	3.2	135.3	輝緑凝灰岩	流線痕あり
*	S32	144	1B-6j			石竜丁	△7.4	4.0	0.7	△26.3	結晶片岩	中央部西縁部トレン出上
*	S33	601	1B-5a			礫石	7.9	4.5	1.9	126.3	燧灰岩	葉形出土
*	S36	67	1B-5j	2溝		玉作資料 割片	4.29	2.83	0.97	14.5	緑色凝灰岩	
*	S37	70	1C-5a	2溝		玉作資料 割片	1.64	1.60	1.53	4.5	碧玉	縁部トレン西側範囲
S38	245	1C-6a	11底路			玉作資料 割片	2.88	3.35	1.25	12.3	碧玉	
S39	241	1B-5j	11底路		棟土8層	玉作資料 割片	1.29	1.37	0.84	1.6	碧玉	縁部ベルト
S40	194-1	1C-5a	11底路			玉作資料 砕片	1.43	1.52	0.51	1.4	碧玉	
S41	669	1B-6j	11底路		最下層	玉作資料 割片	3.82	3.72	2.79	45.7	緑色凝灰岩	
S42	294-2	1C-5a	11底路			玉作資料 砕片	1.66	1.20	0.72	1.7	鉄石英	
S43	222	1B-6j	11底路			玉作資料 割片	2.05	1.46	1.22	2.9	鉄石英	
S44	215	1B-5j	11底路			玉作資料 割片	2.24	2.86	0.80	4.8	鉄石英	
S45	297-1	1C-6a	50溝			玉作資料 割片	2.80	2.86	2.06	14.7	碧玉	
S46	297-2	1C-6a	50溝			玉作資料 割片	6.20	2.97	1.87	36.7	緑色凝灰岩	
S47	297-3	1C-6a	50溝			玉作資料 割片	8.06	5.49	2.41	126.5	緑色凝灰岩	
S48	613	1C-6a	50溝			玉作資料 割片	7.18	4.15	4.08	71.0	緑色凝灰岩	
S49	515-1	1C-6a	5-2a層			玉作資料 素材片	5.21	6.12	2.82	103.9	緑色凝灰岩	一部研削
S50	515-2	1C-6a	5-2a層			玉作資料 割片	4.71	3.50	1.88	26.4	緑色凝灰岩	
S51	506-1	1B-6j	5-2a層			玉作資料 割片	3.38	3.39	1.19	9.9	緑色凝灰岩	
S52	324	1C-6a	5-2a層			玉作資料 礫	5.46	4.19	2.36	43.8	鉄石英	
S53	506-2	1B-6j	5-2a層			玉作資料 礫	2.21	2.40	1.47	9.5	鉄石英	

第62表 木器観察表

採回番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	種類	器種	遺構	法量 (cm)			木取り	樹種	備考
							最大長	最大幅	最大厚			
257	W247	158	1B-5j	挽物	椀	7流路	△9.2	△6.7	0.7	横木取り	ブナ属	
257	W248	197	1B-5j	挽物	椀	11流路	△9.1	△6.9	0.6	横木取り	クリ	
257	W249	147	1B-5i	挽物	椀	12溝	8.3	△7.7	1.4	横木取り	トチノキ	

第63表 金属器観察表

採回番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種類	法量 (cm・g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
258	Br 6	196	1B-5j	11流路		開元通宝	2.4	2.4	0.1	2.8	

第6節 遺構計測表

第64表 竪穴建物・竪穴計測表

建物名称	地区 T23-7d-	平面形	柱数	主軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	柱間寸法 (m)	備考
32竪穴	1B-6j、1C-6a	楕円形	-	-	7.17	-	0.27	-	
33竪穴	1B-6j	不整形	-	-	△8.25	-	0.48	-	
竪穴建物1	1B-6j	隅丸方形	4	N-2.5-E	6.33	6.05	0.42	2.2-3.1	

第65表 柱穴・土坑・ピット計測表(1)

個別遺構名	集合遺構名	地区 T23-7d-	遺構面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
8	ピット	1B-5j	3面(4-2a層下面)	50	43	27	礎板石
9	ピット	1C-5a、1B-5j	3面(4-2a層下面)	△36	-	15	
10	ピット	1B-5j	3面(4-2a層下面)	△49	-	28	
13	ピット	1B-6j	3面(4-2a層下面)	38	34	10	
14	ピット	1B-6j	3面(4-2a層下面)	57	△41	16	
15	ピット	1B-6j	3面(4-2a層下面)	98	97	53	礎板石
16	ピット	1B-6j	3面(4-2a層下面)	78	50	15	
17	ピット	1B-6j	3面(4-2a層下面)	28	26	13	
19	ピット	1B-6j	3面(4-2a層下面)	△43	39	16	
20	ピット	1B-6j	3面(4-2a層下面)	30	27	22	
21	ピット	1B-7j	3面(4-2a層下面)	34	33	17	
22	ピット	1B-7j	3面(4-2a層下面)	39	37	12	
23	ピット	1B-6j	3面(4-2a層下面)	45	39	24	
24	ピット	1B-6j	3面(4-2a層下面)	-	△58	15	
25	土坑	1B-6j	3面(4-2a層下面)	158	111	24	
26	土坑	1B-6j	3面(4-2a層下面)	124	73	24	

第66表 柱穴・土坑・ピット計測表(2)

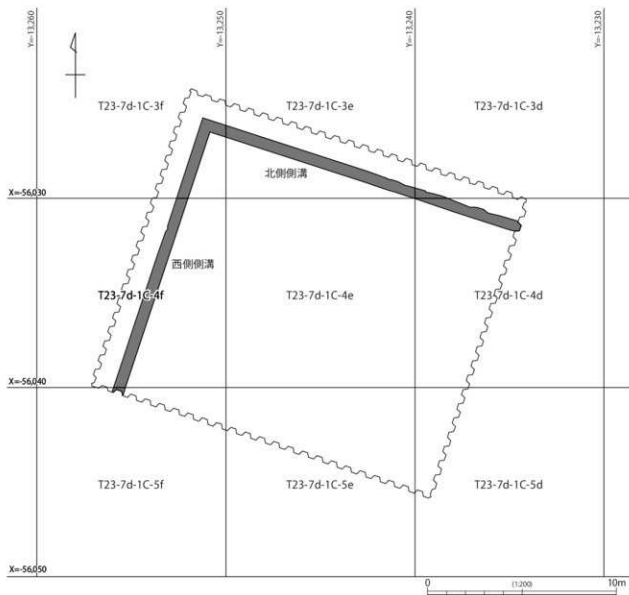
個別遺構名	集合遺構名	地区 T23-7d	遺構面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
28	土坑		1B-6i	2面(2-1a層下面)	-	102	54
29	土坑		1B-5i	2面(2-1a層下面)	-	108	50
30	ピット		1C-6a	4面(5-1a層下面)	73	72	14
31	土坑		1C-6a	4面(5-1a層下面)	△228	220	20
34	ピット		1B-7j	4面(5-1a層下面)	60	36	14
35	ピット		1B-6j	4面(5-1a層下面)	42	38	16
36	ピット		1B-7j	4面(5-1a層下面)	56	37	26
37	ピット		1B-7j	3面(4-2a層下面)	31	30	25
38	ピット		1B-7j	4面(5-1a層下面)	63	51	21
39	土坑		1B-6j・7j	4面(5-1a層下面)	386	△290	62
40	土坑		1B-6j・7j 1C-6a・7a	4面(5-1a層下面)	372	258	54
42	ピット		1B-6j	4面(5-1a層下面)	99	34	25
43	ピット		1B-6j	4面(5-1a層下面)	63	42	9
44	ピット		1B-6j	4面(5-1a層下面)	34	30	9
45	ピット		1B-6j	4面(5-1a層下面)	40	39	13
46	ピット		1B-6j	4面(5-1a層下面)	34	32	13
48	ピット		1B-6j	4面(5-1a層下面)	86	78	11
49	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	89	△64	36
51	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	53	47	24
52	ピット		1B-7j	5面(6-1a層下面)	-	62	25
53	土坑		1B-6j	5面(6-1a層下面)	120	106	40
54	土坑		1B-6j	5面(6-1a層下面)	178	176	74
56	土坑		1C-6a、1B-6j	5面(6-1a層下面)	148	120	80
57	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	46	40	9
58	土坑		1B-6j	5面(6-1a層下面)	102	82	41
59	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	35	31	62
60	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	56	54	20
61	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	66	60	68
62	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	50	46	13
63	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	51	44	26
64	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	44	40	22
65	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	△26	23	11
66	土坑		1B-6j	5面(6-1a層下面)	226	127	81
68	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	-	34	14
69	ピット		1B-5i	5面(6-1a層下面)	-	60	48
70	ピット	竪穴建物1	1B-6j	5面(6-1a層下面)	48	42	19
71	ピット	竪穴建物1	1B-6j	5面(6-1a層下面)	54	45	46
72	ピット		1B-6j	6面(7-1a層下面)	△74	△58	21
73	ピット	竪穴建物1	1B-6j	5面(6-1a層下面)	68	60	42
74	ピット	竪穴建物1	1B-6j	5面(6-1a層下面)	△47	-	15
75	ピット	竪穴建物1	1B-6j	5面(6-1a層下面)	-	-	57
76	ピット	竪穴建物1	1B-6j	5面(6-1a層下面)	△80	-	67
77	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	△74	53	22
78	土坑		1B-6j	5面(6-1a層下面)	166	116	16
79	ピット		1B-6j	6面(7-1a層下面)	-	△31	15
80	ピット		1B-6j	5面(6-1a層下面)	△71	△46	32
81	ピット		1B-5j・6j	6面(7-1a層下面)	51	50	21
82	ピット		1B-6j	6面(7-1a層下面)	71	65	22
83	ピット		1B-6j	6面(7-1a層下面)	49	27	26
84	ピット		1B-5j・6j	6面(7-1a層下面)	111	55	14
85	土坑		1B-6j	6面(7-1a層下面)	164	△144	54
86	ピット		1B-5i	6面(7-1a層下面)	-	△34	18
87	ピット		1B-6j	6面(7-1a層下面)	-	△39	9
88	土坑		1B-5i	6面(7-1a層下面)	△240	-	62
89	ピット		1B-5j・6j	6面(7-1a層下面)	47	28	19
90	ピット		1B-6j	6面(7-1a層下面)	105	-	56
92	ピット		1B-6j・7j	6面(7-1a層下面)	70	59	36
93	ピット		1C-6a	6面(7-1a層下面)	70	62	36
94	ピット		1B-7j、1C-7a	6面(7-1a層下面)	-	22	9
95	ピット		1B-6j	6面(7-1a層下面)	89	73	39
96	ピット		1B-6j	6面(7-1a層下面)	32	27	16

第6章 3区の調査成果

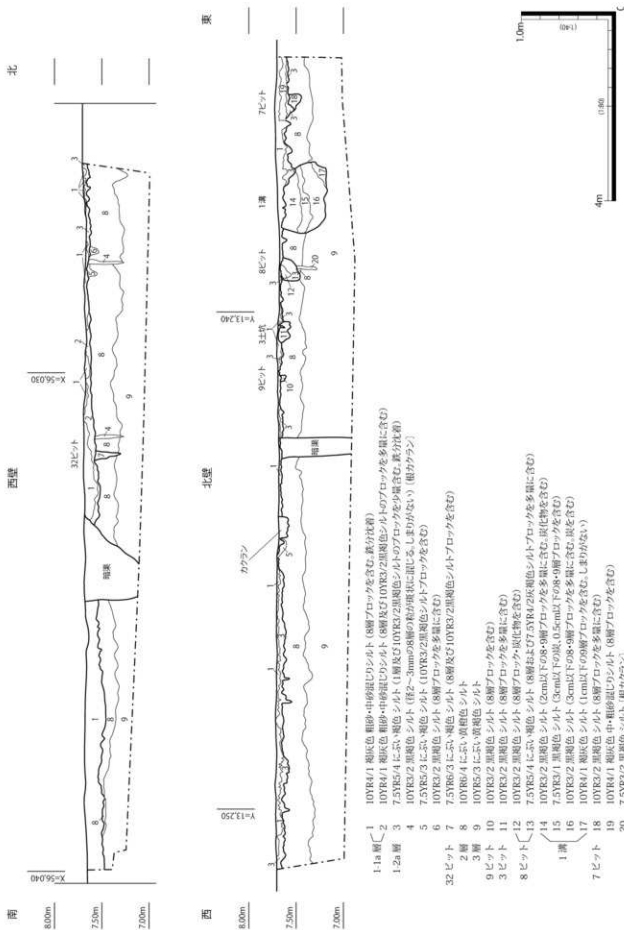
第1節 調査区の概要

3区は、野坂川左岸に形成された中位段丘面の縁辺に位置している。沖積地の堆積環境を示す2区とは直線距離で30mしか離れておらず、その間に段丘崖地形(崖錐)が存在するようである。調査着手前に西側の迂回水路壁面を精査したところ、3区では基盤層となるローム層まで圃場整備により削平されていることが把握出来た。そのため、機械掘削は現代耕作土である1-1a層中で止め、同層下面で全ての遺構を検出している。

本調査区では、基本となる地層観察用のトレンチ及びアゼを調査区の北・西壁沿いに設置し、堆積状況の把握に努めた(第259図・第260図)。層名については、第3章に記したとおり、調査時の呼称を用いて記述を進める。



第259図 3区地区割図・基本断面取得位置図



第260図 調査区壁面断面図

- 1 1-a層 1 褐色 粗砂・中砂混じりシルト (8層及び10YR3/2黒褐色シルトのブロックを多量に含む)
- 2 1-a層 2 褐色シルト (1層及び10YR3/2黒褐色シルトのブロックを少量含む、炭分沈着)
- 3 1-a層 3 褐色シルト (厚2~3mmの8層の板が形状に似る、しまりが無い) (黒カクラン)
- 4 5 7.5YR5/3 に近い、褐色シルト (10YR3/2黒褐色シルトのブロックを含む)
- 5 10YR3/2 黒褐色シルト (8層のブロックを多量に含む)
- 6 10YR3/2 黒褐色シルト (8層及び10YR3/2黒褐色シルトのブロックを含む)
- 7 7.5YR6/3 に近い、褐色シルト (8層及び10YR3/2黒褐色シルトのブロックを含む)
- 8 10YR6/4 に近い、褐色シルト
- 9 10YR5/3 に近い、褐色シルト
- 10 10YR3/2 黒褐色シルト (8層のブロックを含む)
- 11 10YR3/2 黒褐色シルト (8層のブロックを多量に含む)
- 12 10YR3/2 黒褐色シルト (8層のブロックを含む)
- 13 7.5YR5/4 に近い、褐色シルト (8層及び10YR4/2灰褐色シルトのブロックを多量に含む)
- 14 10YR3/2 黒褐色シルト (2cm以下の8~9層のブロックを多量に含む、炭化物を含む)
- 15 7.5YR3/1 黒褐色シルト (3cm以下の8~9層のブロックを多量に含む、炭化物を含む)
- 16 10YR3/2 黒褐色シルト (3cm以下の8~9層のブロックを多量に含む、炭を含む)
- 17 10YR4/1 褐色シルト (1cm以下の8層のブロックを含む、しまりが無い)
- 18 10YR3/2 黒褐色シルト (8層のブロックを多量に含む)
- 19 10YR4/1 褐色・中・粗砂混じりシルト (8層のブロックを含む)
- 20 7.5YR3/2 黒褐色シルト (黒カクラン)

1層 耕作土である。いわゆる表土であり、機械掘削の対象とした。圃場整備後の水田耕作土である1-1a層が主体となるが、後述する2層に弥生時代の土壌層に由来する黒褐色シルトのブロックを含む層が部分的に確認でき、これを1-2a層とした。1-2a層は圃場整備時の造成によって生じた攪乱土と考えられる。

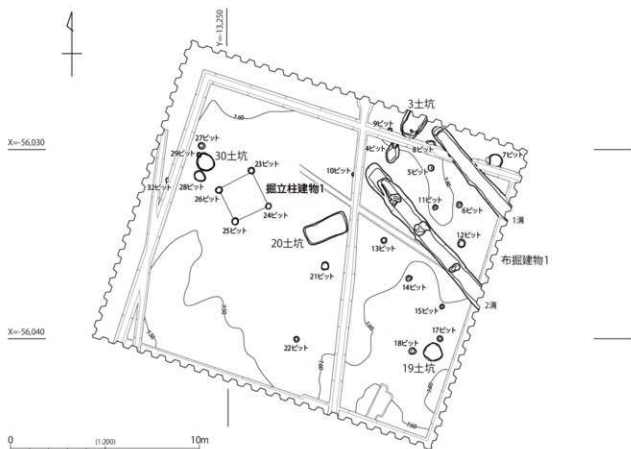
2層 火山灰層である。粘性の強いにぶい黄褐色シルトで、層相及び3層との層序関係から大山上部火山灰層と推測される。

3層 火山灰層である。にぶい黄褐色シルトで、層相からすれば大山中部火山灰層である大山倉吉軽石層(DKP)と考えられる。2層との間にホーキ層、AT層等は介在せず、流失したと推測される。

先述のとおり3区で確認した遺構面は1面のみで、遺構は全て2層上面で検出している。検出された遺構は弥生時代後期～終末期のものであった。

第2節 検出した遺構

調査成果としては、弥生時代後期後葉から終末期前半に至るまでの遺構と遺物を確認している。検出した遺構は布掘建物、掘立柱建物、土坑、ピットである(第261図)。検出された遺構の掘方は総じて浅く、遺存深度からすれば後世に30～50cm程度削平されていると推測される。その傾向は本来的に地形が高くなる調査区西側で顕著であり、掘立柱建物の柱穴が底面付近しか遺存していなかったこと



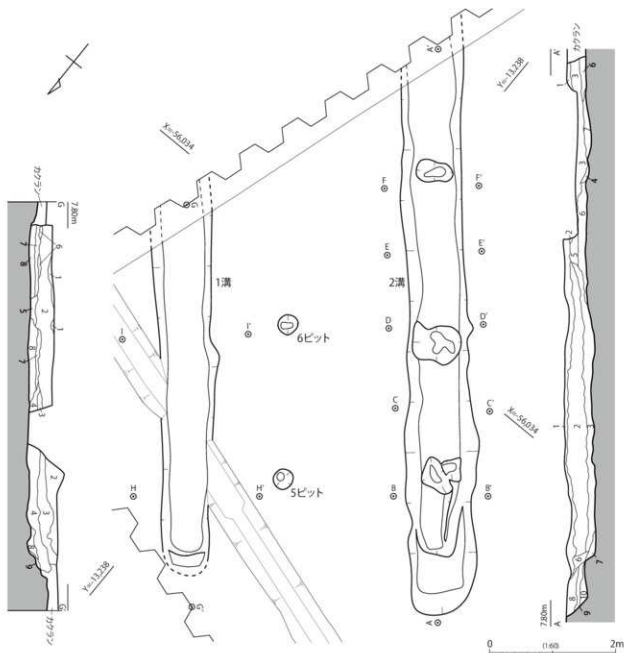
第261図 検出した遺構

からも窺える。特筆すべき遺構としては布掘建物が挙げられ、布掘り溝が検出規模で8mを超える大型の建物跡である。遺構の総数は30基を数えた。

(1) 布掘建物

布掘建物1 (第262図 写真図版186・187)

調査区北東隅で検出した布掘建物である。布掘り溝を2条(1溝・2溝)検出したが調査区外へ続いているため、建物の正確な規模、構造は明らかでない。主軸方位はN-50°-Wである。1溝・2溝とも西端部が一段高くなっており、2溝断面A-A'ラインの所見も勘案すれば布掘建物1は建て替えが行われたと考えられる。建て替え後の桁行は8.2m以上を測る。布掘建物1は廃絶時に柱が抜き取られており、溝底面まで達する抜き取り穴によって柱位置の把握が困難であった。2溝底面に柱当た

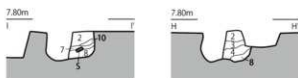


第262-1図 布掘建物1(1)

りとみられる浅い窪みが3カ所(断面B・D・Fライン)確認出来るため、布掘り溝が調査区外へ続くことを勘案すれば桁行方向の柱間は3間と推測する。柱当たりからすれば、柱間寸法は西からB-D間2.2m、D-F間2.6mを測る。梁行は1間だが布掘り溝の心々間距離が4.1mと広く、東柱を伴っていた可能性もある。5ピット・6ピットは概ね1溝-2溝間の中心ラインにのり、2溝底面の柱当たりと相対する位置にあるため、東柱であっても矛盾はない。5ピット・6ピットはどちらも径が33cm、検出面からの深さは5ピットが47cm、6ピットが51cmと同規模である。これらが東柱であった場合、布掘建物1は梁行2間、桁行3間の総柱建物となる。

布掘り溝の埋土は大きく2層に分けることが出来る。柱抜き取り穴埋土は黒褐色～褐色の中砂・粗砂混じりシルトで、地山(2b層・3b層)ブロックを多量に含む。柱掘方埋土は1溝と2溝で色調が異なる。2溝西半部では柱掘方埋土がよく残っており、地山ブロックを多量に含むにぶい褐色～灰褐色の粗砂混じりシルトで柱抜き取り穴埋土とは容易に識別できた。

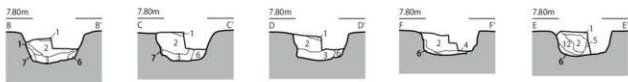
遺物は1溝の柱抜き取り穴埋土から弥生土器甕(Po579・Po580)、器台(Po581)が、2溝の柱抜き取



布掘建物1

[1溝]

- 10YR2/2 黒褐色 中砂・粗砂混じりシルト (2cm以下の地山ブロックを含む) (柱抜き取り穴埋土)
- 10YR3/2 黒褐色 中砂・粗砂混じりシルト (2cm以下の地山ブロックを多量に含む, 0.5cm以下の炭を含む) (柱抜き取り穴埋土)
- 7.5YR3/1 黒褐色 中砂・粗砂混じりシルト (3cm以下の炭・0.5cm以下の地山ブロックを含む) (柱抜き取り穴埋土)
- 10YR3/2 黒褐色 中砂・粗砂混じりシルト (3cm以下の地山ブロックを多量に含む, 0.5cm以下の炭化物を含む) (柱抜き取り穴埋土)
- 7.5YR3/1 黒褐色 中砂・粗砂混じりシルト (1cm以下の地山ブロックを多量に含む) (柱抜き取り穴埋土)
- 7.5YR4/1 褐色 中砂・粗砂混じりシルト (0.5cm以下の地山ブロックを含む) (布掘方埋土)
- 7.5YR3/1 黒褐色 中砂・粗砂混じりシルト (0.5cm以下の地山ブロックを含む) (布掘方埋土)
- 7.5YR3/1 黒褐色 中砂・粗砂混じりシルト (2cm以下の地山ブロックを多量に含む) (布掘方埋土)
- 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト (2cm以下の地山ブロックの混入) (布掘方埋土)
- 7.5YR3/1 黒褐色 細砂～粗砂混じりシルト (0.5cm以下の地山ブロック・炭化物を含む) (柱抜き取り穴埋土)



[2溝]

- 7.5YR3/1 黒褐色 中砂・粗砂混じりシルト (3cm以下の地山ブロックを多量に含む, 炭化物を含む) (柱抜き取り穴埋土)
- 7.5YR4/1 褐色 中砂・粗砂混じりシルト (3cm以下の地山ブロック・7.5YR3/1 黒褐色シルトブロックを多量に含む, 炭化物を含む) (柱抜き取り穴埋土)
- 7.5YR3/1 黒褐色 中砂・粗砂混じりシルト (3cm以下の地山ブロックを含む) (柱抜き取り穴埋土)
- 7.5YR4/1 褐色 粗砂混じりシルト (3cm以下の地山ブロックを含む) (柱抜き取り穴埋土)
- 7.5YR4/2 褐色 粗砂混じりシルト (3cm以下の地山ブロック・7.5YR3/1 黒褐色シルトブロックの混入) (布掘方埋土)
- 7.5YR5/3 にぶい褐色 粗砂混じりシルト (3cm以下の地山ブロックの混入・7.5YR3/1 黒褐色シルトブロックを少量含む) (布掘方埋土)
- 7.5YR4/1 褐色シルト (2cm以下の地山ブロックを含む) (布掘方埋土)
- 7.5YR3/2 黒褐色 細砂～粗砂混じりシルト (3cm以下の地山ブロックを多量に含む) (建替前布掘方埋土)
- 7.5YR3/1 黒褐色シルト (5cm以下の地山ブロックを含む) (建替前布掘方埋土)
- 7.5YR4/2 褐色シルト (5cm以下の地山ブロックの混入) (建替前布掘方埋土)
- 7.5YR4/1 褐色 中砂・粗砂混じりシルト (0.5cm以下の地山ブロックを含む) (柱抜き取り穴埋土)
- 7.5YR4/1 褐色 中砂・粗砂混じりシルト (10cm以下の地山及び7.5YR3/1 黒褐色シルトブロックを含む) (柱抜き取り穴埋土)

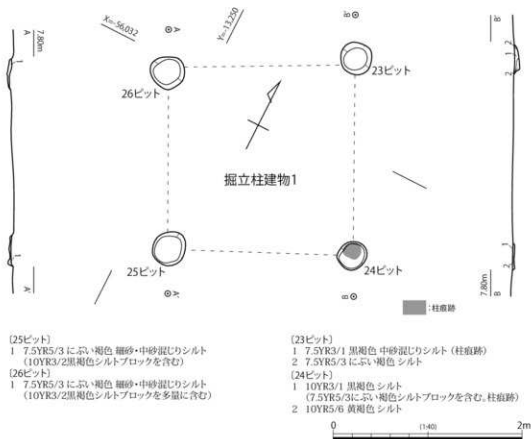
第262-2図 布掘建物1(2)

り穴埋土から甕(Po582)が出土した。出土遺物より、布掘建物1は弥生時代後期後葉の建物と考える。

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第263図 写真図版189)

3区西側で検出した掘立柱建物で、梁行1間(2.0m)、桁行1間(2.1m)の側柱建物である。主軸方位はN-63°-W、身舎の面積は4.2m²である。柱穴は径30~40cmで、検出面からの深さはいずれも5~8cmと浅く底面付近しか遺存していなかった。掘立柱建物1は後世に上部を削平されたことが明らかで、柱穴埋土も底面付近の状況しか観察出来なかった。後世の削平規模は不明であるが、柱穴規模や柱間寸法からすれば、23~26ピットは竪穴建物の主柱穴である可能性も否定出来ない。なお23ピット、24ピットでは検出面及び断面でそれぞれ径24、18cmの柱当たりが確認出来た。ピットから遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第263図 掘立柱建物1

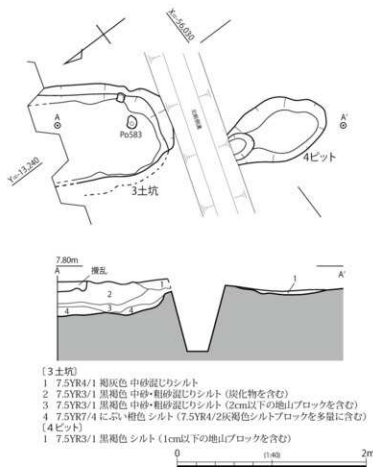
(3)土坑

3土坑(第264図 写真図版189)

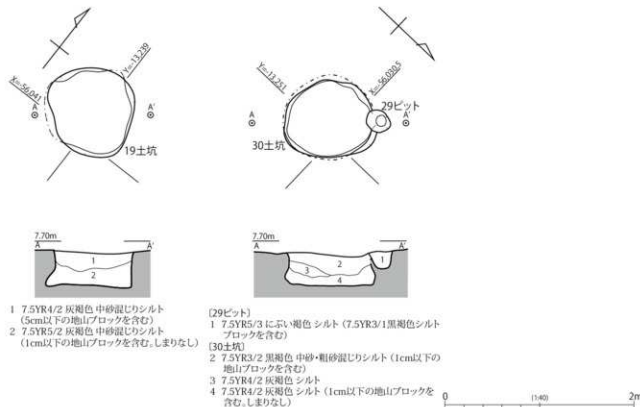
3区北端で検出した土坑で、3土坑は布掘建物1の1溝と隣接位置にある。検出時点では位置的に布掘建物1の妻側柱穴と推測したが、掘り下げた結果布掘建物1を構成する柱穴ではなかった。

3土坑は北側が調査区外へ続いておりますが、平面形は長軸1.4m以上、短軸1.0mの不整形円形を呈し、検出面からの深さは38cmを測る。東西方向の横断面形は、底部東側がやや広がる歪なフラスコ状を呈す。埋土は4層に分かれ、最下層の4層は壁体の崩落土、1～3層は廃絶後の自然堆積と考える。

埋土中から壺(Po583)、凹石(S35)の他、弥生時代後期中葉の甕の小片が



第264図 3土坑・4ピット



第265図 19土坑・30土坑・29ピット

出土した。出土遺物から、3土坑は弥生時代後期中葉のものである。

19土坑(第265図 写真図版190)

調査区南東部で検出した土坑である。平面形は長軸1.0m、短軸0.9mの不整隅丸方形を呈し、検出面からの深さは40cmを測る。東西方向の横断面形は西壁の裾が広がる歪な台形を呈す。

埋土は灰褐色の中砂混じりシルトで、下層は壁体の崩落土を主体とするが、上層は大径の地山ブロックを含み埋め戻し土であろう。埋土中から弥生時代後期後葉の土器細片が出土したが、図化出来るものはない。

30土坑(第265図 写真図版190)

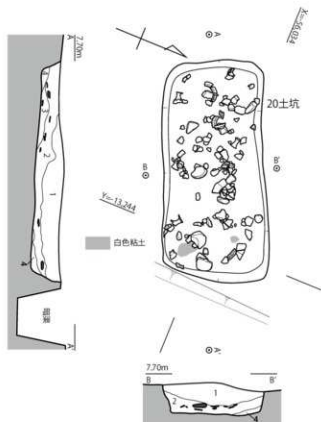
30土坑は、調査区西側で検出された。隣接する29ピットに切られている。平面形が長軸97cm、短軸84cmの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは38cmを測る。横断面形は中央部分がやや括れる台形を呈す。

埋土は3層に分かれる。最下層(4層)はしまりがなく、壁体の崩落土等と推測される。上層(2層)は色調、含有物が下層と異なり、埋め戻し土の可能性がある。30土坑は他遺構の状況から弥生時代後期の土坑と推測されるが、黒曜石の剥片以外に遺物は出土しておらず、時期は不明である。

20土坑(第266図 写真図版188)

調査区中央で検出した土坑で、平面形は長軸2.4m、短軸1.2mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは34cmを測る。

埋土は4層に分かれる。最下層の4層は地山が細粒化したしまりのない土で、壁体の崩落を伴う自然堆積層である。それに対し、1～3層は地山ブロックを含む人為層である。特に2層は多量の土器と炭化物、炭化材、拳大～人頭大の礫、粘土ブロックを含み、廃棄物の集積層と考えられる。2層に伴う土器は完形に復元出来る個体が極めて少なく、二次的に被熱して器面が荒れているものが目立ち、数量的には高坏が多いという組成上の特徴が認められる。その上層となる1層は2層に対して遺物をほとんど含まず、粒径の小さい地山ブロックを多量に含む。土坑は1層によって埋没しており、同層が最終



- 7.5YR4/1 褐灰色 中砂混じりシルト
(4cm以下の地山ブロックを多量に含む)
- 7.5YR3/1 黒褐色 中砂混じりシルト
(4cm以下の地山ブロック・2cm以下の炭化物を多量に含む)
- 7.5YR4/1 褐灰色 シルト
(2cm以下の地山ブロック・炭化物を含む)
- 7.5YR4/2 灰褐色 シルト
(2cm以下の地山ブロックを含む。しまりなし)

第266図 20土坑

的な埋め戻し土と推測する。出土した土器は弥生時代後期後葉～終末期前半に比定される壺(Po584・Po585)、甕(Po586～Po589)、台付鉢(Po592)、高杯(Po593～Po597)等がある。20土坑の廃絶時期は弥生時代終末期前半と考えられる。

(4)ピット

4ピット(第264図)

3区北端で検出したピットで、2溝と隣接位置にある。検出時点では位置的に布掘建物1の妻側柱穴と推測したが、掘り下げた結果布掘建物1を構成する柱穴ではなかった。4ピットは長軸1.07m、短軸0.68m、検出面からの深さ9cmを測る浅い皿状のピットである。遺物は出土していない。

29ピット(第265図)

調査区西側で30土坑と切り合った状態で検出され、切り合い関係から、29ピットの方が新しい。長軸27cmの不整楕円形を呈すピットで、検出面からの深さは20cmを測る。遺物は出土していない。

その他のピット(第261図、第70表)

既述のものを除き、建物を構成しないピットを16基確認した。11～14ピットは掘立柱建物の可能性もあるが、桁行が1間(11～13ピット、12～14ピット)だとすれば柱間寸法が3.4mと広い。桁行2間の場合、間柱が中間位置に存在すると仮定すれば2溝で完全に削平されているとは考え難い。底面レベルもばらついており、11～14ピットは掘立柱建物柱穴の可能性は低いと判断した。

第3節 出土遺物

第1項 土器(第267図 写真図版191・192 Po579～Po597)

第267図Po579～Po582は、布掘建物1出土土器である。

Po579及びPo581にはクシ状工具、Po580には貝殻腹縁、Po582にはヘラによる平行沈線文を施される。いずれも弥生時代後期後葉のものである。

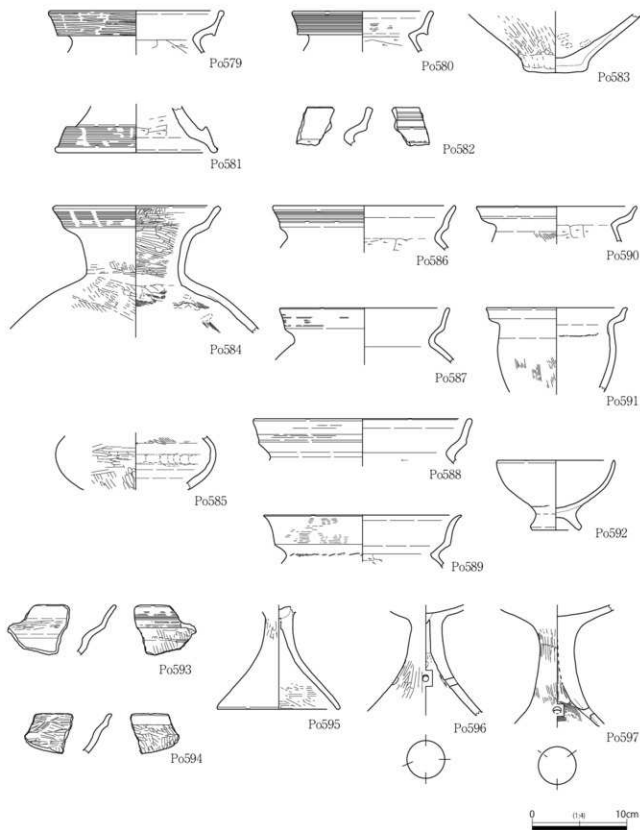
Po583は3土坑から出土した。角閃石を含む明褐色の胎土をもち、河内地域からの搬入品である。形態的特徴からすれば弥生時代中期末～後期初頭のものである。

第267図Po584～Po597は20土坑出土土器である。

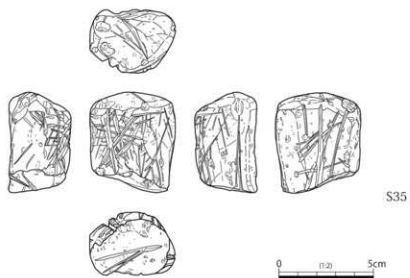
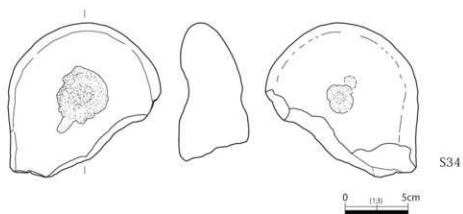
壺Po584は頸部から肩が大きく開く特徴をもつ。Po585は小型の壺で体部は扁球形を呈す。甕には平行沈線を施すPo586～Po588、平行沈線後口縁端部の整形によりナデ消すPo589、文様を施さずナデのみのPo590・Po591が認められる。Po590・Po591は口縁部に最大径をもち、口縁の立ち上がりも短い。Po592は台付鉢、Po593～Po597は高坏である。Po593は拡張した有段口縁の外面に擬凹線をめぐらせ、上半部をナデ消している。Po594の口縁部は立ち上がりが短く、ナデのみである。脚部Po595～Po597は細い脚柱部から緩やかに広がる特徴をもち、Po596・Po597は4方向あるいは3方向に円形の透かし孔が穿たれている。高坏は、その形態的特徴からいずれも北近畿系土器とみられる。

第2項 石器(第268図 写真図版192 S34・S35)

第268図S34は、3土坑で出土した凹石である。S35は砥石に用いられた軽石で、全面に刃物痕が残る。



第267圖 出土土器



第268図 出土石器

第4節 遺物観察表

第67表 土器観察表

採回番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-76	遺構	層位	種別	法量 (cm)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
267	Pc579	133	1C-4d	布張り建物1 1溝		甕	≒18.1 △4.5	外面：口縁部輪指平行沈線。頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ。頸部以下ヘラケズリ	密	良好	内外面とも灰白色	
267	Pc580	132	1C-4d	布張り建物1 1溝		甕	≒14.6 △4.4	外面：口縁部只股線による平行沈線。頸部ナデか 内面：口縁部ナデ・ミガキ。頸部以下ヘラケズリ	密	良好	内外面とも浅黄褐色	
267	Pc581	121	1C-3d	布張り建物1 1溝		器台	- △4.9	外面：ナデ。脚部部輪指平行沈線 内面：ヘラケズリ・ナデ	やや密	良好	内外面とも浅赤橙～ にぶい褐色	
267	Pc582	62	1C-4e	布張り建物1 2溝		甕	- △4.1	外面：口縁部ヘラケ平行沈線。頸部以下ナデ・ハケメ 内面：ナデ。頸部以下ヘラケズリ	やや密	良好	外/褐色 内/浅黄褐色～にぶい 黄褐色	
267	Pc583	131	1C-5e	3土坑		甕	- △6.2	外面：ミガキ。ナデ 内面：風化により調整不明(指頭 圧痕あり)	やや密	良好	外/明褐色 内/黒色	角閃石含む、生駒 西麓
267	Pc584	78	1C-4e	20土坑	埋土2層	甕	≒17.2 △13.4	外面：口縁部平行沈線後ナデ。頸部ナデ。体部ミガキ 内面：口縁部ミガキ。頸部ハケ後ミガキ。頸部以下ハケメ・指頭圧痕	密	良好	外/浅黄褐色～灰白色 内/黒褐色～褐色	
267	Pc585	45 111	1C-4e	20土坑	埋土2層	甕	- △5.7	外面：ミガキ 内面：ハケメ・ナデ・指頭圧痕	密	良好	外/にぶい橙～にぶい 黄褐色 内/褐色	南東部
267	Pc586	50	1C-4e	20土坑	埋土1層	甕	≒19.2 △4.8	外面：口縁部平行沈線5条。ナデ 内面：口縁部ナデ?。頸部以下ヘラケズリ	密	ふつう	外/浅褐色 内/黄褐色～にぶい 黄褐色	
267	Pc587	90 100	1C-4e	20土坑	埋土2層	甕	17.6 △5.8	外面：口縁部輪指平行沈線。頸部以下風化により調整不明 内面：口縁部風化により調整不明。頸部以下ヘラケズリ	やや密	ふつう	内外面とも浅黄褐色～ 灰白色	
267	Pc588	104	1C-4e	20土坑	埋土2層	甕	≒22.8 △4.8	外面：口縁部平行沈線後ナデ(風化調整) 内面：口縁部ナデ。頸部以下ヘラケズリ	やや密	ふつう	外/にぶい橙～灰白色 内/灰白色	外面僅附着
267	Pc589	103	1C-4e	20土坑	埋土2層	甕	≒20.8 △5.6	外面：口縁部ハケケ工具平行沈線後ナデ(下半は風化)。頸部ナデ 内面：口縁部ナデか。頸部以下ヘラケズリ	やや密	ふつう	外/灰白色 内/灰白～にぶい黄 褐色	頸部工具痕
267	Pc590	38	1C-4e	20土坑		甕	≒16.8 △3.8	外面：口縁部ナデ。体部ハケ 内面：口縁部ナデ。頸部以下ヘラケズリ	やや密	ふつう	内外面とも浅黄褐色～ にぶい浅赤色	北近畿系
267	Pc591	94	1C-4e	20土坑	埋土2層	甕	≒14.7 △8.9	外面：口縁部～体部上半ナデ。体部下半ハケメ 内面：口縁部ナデ。体部風化により調整不明	密	ふつう	内外面とも浅黄褐色～ 灰白色	外面僅附着
267	Pc592	82 107	1C-4e	20土坑	埋土2層	台付鉢	≒12.3 7.4	内外面：風化により調整不明	密	良好	内外面とも浅赤橙～ 浅黄褐色	北近畿系・西谷1式 新段
267	Pc593	36	1C-4e	20土坑		高杯	- △5.3	外面：口縁部平行沈線後ナデ。体部ミガキ 内面：ナデ・ミガキ	やや密	ふつう	外/浅黄褐色～明褐色 内/浅黄褐色～灰黄褐色	北近畿系
267	Pc594	34	1C-4e	20土坑		高杯	- △4.2	外面：ナデ・ミガキ 内面：ミガキ	密	良好	内外面ともにぶい橙～ 褐色	北近畿系。胎土非 在地
267	Pc595	109	1C-4e	20土坑	埋土2層	高杯	- △10.9	外面：脚部～脚部上半風化により調整不明。脚部下半ミガキ 内面：脚部風化により調整不明。脚部ヘラケズリ後ナデ。ハケメ後ナデ	やや密	良好	内外面とも橙～浅褐色	北近畿系
267	Pc596	89	1C-4e	20土坑	埋土2層	高杯	- △11.7	外面：体部～脚部上半風化により調整不明。脚部下半ミガキ 内面：体部風化により調整不明。脚部ヘラケズリ後ナデ。ハケメ後ナデ	密	良好	外/橙～浅黄褐色 内/褐色	円形透孔4方向。 北近畿系
267	Pc597	110	1C-4e	20土坑	埋土2層	高杯	- △12.8	外面：体部風化により調整不明。脚部ミガキ・ハケメ 内面：体部風化により調整不明。脚部ハケメ・指頭圧痕	密	良好	内外面とも褐色	円形透孔3方向。 2ヶ所遺存。北近 畿系

第68表 石器観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区 T23-7d-	遺構	層位	種類	法量 (cm・g)				石材	備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量		
268	S34	129	1C-3e	3土坑		凹石	12.4	12.2	5.6	805	アイサイト	
268	S35	92	1C-4e	20土坑		砥石	5.3	4.5	3.3	28	軽石	

第5節 遺構計測表

第69表 布掘建物・掘立柱建物計測表

建物名称	地区 T23-7d-	主軸	建物種類	梁行 (m)	桁行 (m)	梁行 柱間 (m)	桁行 柱間 (m)	身舎 面積 (㎡)	備考
布掘建物1	1C-4e・4f	N-50-W	竪柱建物?	8.2以上	4.1	2.2-2.6	2.4-2.5	-	
掘立柱建物1	1C-3d・4d・4e	N-63-W	傾柱建物	2.0	2.1	2.0	2.1	4.2	

第70表 柱穴・土坑・ピット計測表

個別遺構名	集合遺構名	地区 T23-7d-	遺構面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
3	土坑	1C-3d・3e	1面(1-1a層下面)	△146	102	38	
4	ピット	1C-3e・4e	1面(1-1a層下面)	△107	68	9	
5	ピット	1C-4d	1面(1-1a層下面)	33	30	47	
6	ピット	1C-4d	1面(1-1a層下面)	33	32	51	
7	ピット	1C-3d	1面(1-1a層下面)	-	68	15	
8	ピット	1C-3d	1面(1-1a層下面)	-	△50	21	
9	ピット	1C-3e	1面(1-1a層下面)	-	△20	6	
10	ピット	1C-4e	1面(1-1a層下面)	-	△20	32	
11	ピット	1C-4d	1面(1-1a層下面)	28	26	41	
12	ピット	1C-4d	1面(1-1a層下面)	42	40	33	
13	ピット	1C-4e	1面(1-1a層下面)	33	30	17	
14	ピット	1C-4e	1面(1-1a層下面)	35	29	38	
15	ピット	1C-4d	1面(1-1a層下面)	28	23	11	
17	ピット	1C-4d 5d	1面(1-1a層下面)	31	29	10	
18	ピット	1C-5e	1面(1-1a層下面)	40	34	17	
19	土坑	1C-5d	1面(1-1a層下面)	102	92	40	
20	土坑	1C-4e	1面(1-1a層下面)	234	109	34	土器、礎
21	ピット	1C-4e	1面(1-1a層下面)	45	40	6	
22	ピット	1C-4e・5e	1面(1-1a層下面)	29	28	12	
23	柱穴	掘立柱建物1	1C-4e	1面(1-1a層下面)	36	34	6
24	柱穴	掘立柱建物1	1C-4e	1面(1-1a層下面)	32	30	4
25	柱穴	掘立柱建物1	1C-4e	1面(1-1a層下面)	38	34	6
26	柱穴	掘立柱建物1	1C-4f	1面(1-1a層下面)	38	34	8
27	ピット		1C-3f	1面(1-1a層下面)	37	34	8
28	ピット		1C-4f	1面(1-1a層下面)	66	52	11
29	ピット		1C-4f	1面(1-1a層下面)	27	23	20
30	土坑		1C-4f	1面(1-1a層下面)	97	84	35
32	ピット		1C-4f	1面(1-1a層下面)	-	△26	17

第7章 自然科学分析の成果

第1節 自然科学分析の目的と概要

本章では、今回の調査において実施した自然科学分析の内容を報告していくが、その内容は多岐にわたるため、分析の目的と概要をまとめておきたい。

第2節では、2区北壁で採取した不攪乱土壌をもとに行った分析結果を報告する。2区では中世段階に段丘縁辺に形成された古代以前の地層を削平、洗掘する7流路及び11流路が南西-北東方向に走り、それ以降の耕地区画、水利に大きな影響を与える。分析では肉眼・軟X線による地層の堆積構造の解析を行い、同流路の形成過程や変遷等を検討する材料を得ることが出来た。

第3節第1項では、1-1区中央東西トレンチで採取した不攪乱土壌をもとに行った分析結果を報告する。分析の目的は、微細な土壌の構造を解析することで、地層・遺構面の認識について補足・検証を行い、層準毎の古環境や形成年代を検討する材料を得ることにある。分析では、肉眼・軟X線による地層の堆積構造の解析、土壌に含まれる微化石及び大型植物遺体等の抽出・解析の他、形成時期の曖昧な地層中の有機物の抽出と放射性炭素年代測定法による年代測定をそれぞれ実施した。

本分析によって、広域に分布する地震動の存在と形成時期が明らかになったとともに、堆積構造からみた地層の性格付けについて、重要な成果を蓄積することが出来た。

第3節第2項では、1-1区515土坑で採取した土壌をもとに行った寄生虫卵分析の結果を報告する。本文中でも述べたが、515土坑には掘方に曲物(W179、第63図及び第185図参照)が据えられており、現地調査の段階ではトイレ遺構の可能性を考えていた。しかし、分析の結果寄生虫卵は検出されず、トイレ遺構の可能性は否定されることとなった。

第3節第3項では、古代の掘立柱建物跡出土柱材の放射性炭素年代測定結果を報告する。1-1区では古代に帰属する掘立柱建物を28棟検出しているが、全ての建物柱穴から時期決定可能な遺物が出土しているわけではない。よって、建物群の帰属時期については自然科学的な手法も補足的に用いて明らかにする必要がある。さらにその精度を高めるために、遺存状況が良好な柱材についてはウイグルマッチング法による年代測定を試みている。分析の結果、掘立柱建物10柱材が8世紀中頃～9世紀中頃でやや新しいが、それ以外は7世紀中頃から8世紀代の値を示し、建物群が奈良～平安時代前期に構築されたものであると明らかになった。

第3節第4項では、古代の掘立柱建物跡出土柱材及び古墳時代から古代の木製品について樹種同定を行った結果を報告する。分析の目的は出土木製品の基礎的なデータの蓄積と、本遺跡周辺における用材の選択が時期ごとに周辺植生との関係でどのように変化するかを明らかにすることにある。

同定の結果、古墳時代～古代を通して木製祭祀具にはスギが選択、多用されていたことが明らかとなった。

なお、第4節には、応急的な保存処理作業の一環で行った木製品の樹種同定結果を掲載する。

第2節 2区北壁にみられる堆積構造の検討

(独法)国立文化財機構 奈良文化財研究所 村田泰輔

第1項 はじめに

大柵遺跡は、北西側に湖山池、東側に千代川を臨み、千代川水系に属する野坂川流域に位置する。元來、低地であるこの周辺は、縄文時代から現在に至るまで、多くの河川争奪に伴い広い範囲に氾濫原が広がる。湖山池及びその周辺域の地史的変遷については、赤木(1993)に詳しい。

本調査区内には、ほぼ南西-北東方向に流路跡が走る。今回調査の対象となった流路は、現在の野坂川の旧流路の一つと考えられる。すでに発掘調査現地説明会等で報告されているが、水場祭祀の痕跡が見つかるなど、遺跡と水域の間に密接な関係がみられており、流路変遷の詳細を捉えておくことは意義あることであろう。

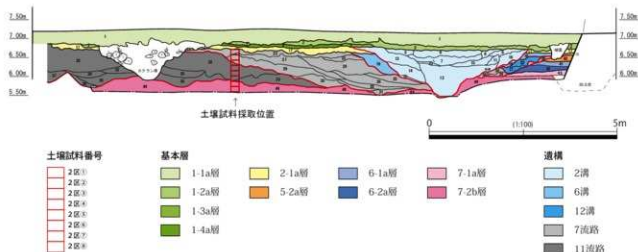
今回、調査区北壁で検出された河川堆積物について、流路変遷に伴う多くの谷の切り合い関係が見つかった。その主なものを捉えるために、堆積構造の検討を加えた。

第2項 試料と方法

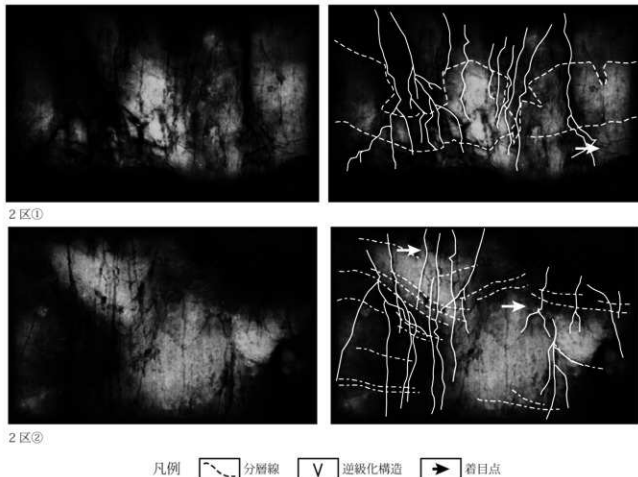
堆積構造検討用の試料は、北壁から8試料について、アクリル製の箱(14×22×4 cm)を用いて切り出した(第269図・写真3)。切り出しは、露頭壁面をクリーニングした後、水平軸を検出した上でアクリル製の箱を試料採取する露頭面に押しつけ、箱の周囲を削るようにして埋め込んでいく。埋め込み終わった試料は、土層断面図に採取位置を記録し、採取地点の壁面写真を採取した後、箱の側面から壁面の奥に向かっ



写真3 土壌試料採取状況



第269図 2区北壁土壌試料採取位置



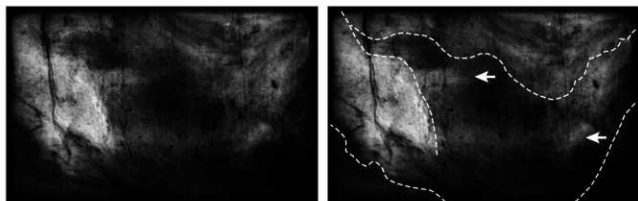
第270図 北壁面から採取された切り取り試料の軟X線画像(1)

てスコップを入れ、壁面奥の堆積物ごとまとめて箱を切り取る。切り取った試料は、余分な堆積物をナイフで削って成形し、堆積物の構造が壊れないように蓋をした。試料の番号については堆積層の上位から付けている。

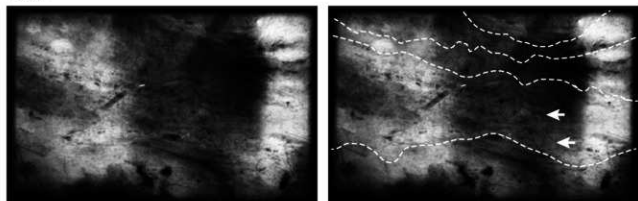
切り出した試料は奈良文化財研究所に送り、埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室にて層相観察を行なった。その後、同センター保存修復科学研究所の有する卓上型X線撮像装置NX-1000(フジフィルム社製)を用い、イメージング・プレートによって撮像を行った。イメージング・プレートのスキャンには、同研究室の有するFuji BAS Scanner 5000を利用した。撮像の観察にあたっては、IMGデータをフリーソフトImage-J 1.48vにISAC Managerプラグインを搭載しJPG形式に変換した後、Adobe Photoshop CS5にて露出及び明るさ・コントラストを調整している。なお、試料の採取は(公財)鳥取県教育文化財団調査室職員が行い、層相観察、軟X線撮像及び堆積構造観察は村田が行った。

第3項 結果

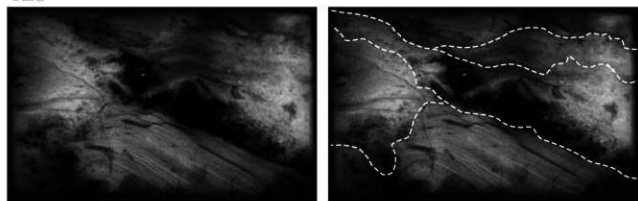
軟X線撮像の結果を第270図～第272図に示す。北壁22層・27層・29層を切り出した試料①、②は、全体として細礫混じり砂質泥からなる。高師小僧も多く確認され、上位からの植物根の貫進跡が顕著



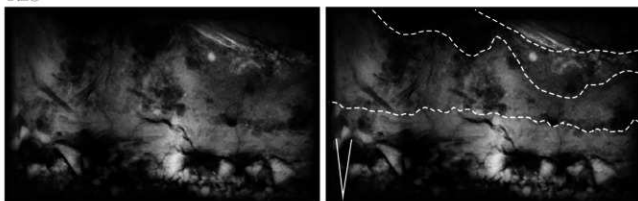
2区③



2区④



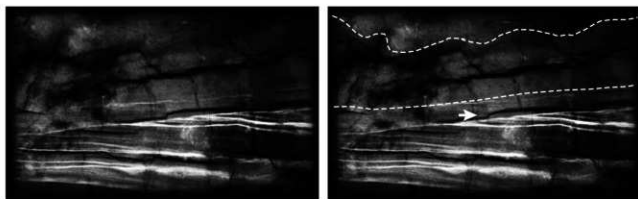
2区⑤



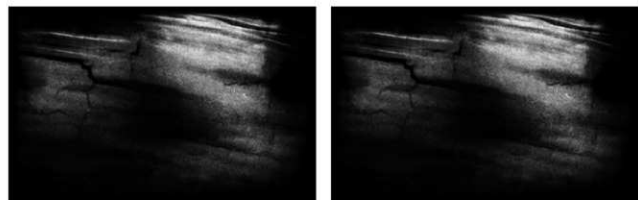
2区⑥

凡例  分層線  逆転化構造  着目点


第271図 北壁面から採取された切り取り試料の軟X線画像(2)



2区⑦



2区⑧

凡例  分層線  逆級化構造  着目点

第272図 北壁面から採取された切り取り試料の軟X線画像(3)

である。初期的な層相観察では、試料に多くの亀裂が入っており部分的には大きな剥落や壊れが堆積物に認められた。これは堆積構造の本質とは異なり、試料採取もしくは試料運搬の際に崩壊したものと考えられる。それらの壊れを考慮した上で軟X線撮像による画像を観察すると、前述した植物根の貫進に伴う土壌団粒の形成など堆積構造の崩壊が顕著に認められる(第270図)。試料①では、植物根の貫進により層境界が著しく不明瞭となっている。矢印で示した周辺には本来、ラミナ構造があったであろう団粒の配列がみられる。試料②も植物根の貫進が堆積構造を大きく変形させているが、不明瞭ながら平板型ラミナの累重が観察される。このため当時この場所では、河岸付近の比較的流速の小さな環境下で堆積が進んだことが推定される。また部分的に干乾構造が見られるため(図中の矢印)、一時的に水が及ばなくなり、脱水・乾燥が進んだことが分かる。干乾構造の上位には砂礫層が薄く堆積し、干乾構造上面を僅かながら浸食していることから、この脱水・乾燥期間は比較的短く、水の出入りの多い場所であったと推定される。

北壁29層、32層、35層、44層を切り出した試料③～⑧の堆積構造を第271図及び第272図に示す。タイプは様々なものの、基本的に流れ堆積物を示すクロスラミナが累重する。堆積の順に試料⑧から迴って堆積構造を見ていくと、初期的には砂層と泥層からなる明瞭なクロスラミナが累重する。試料⑦に入ると、ラミナの泥層を構成する粒子の主体が細粒化し、堆積層密度が上がってX線の透過率が下がることにより明瞭なラミナ構造が観察されるようになる。この上部にはクライミングリップルが観察された(⑦矢印)。クライミングリップルは流れによって出来るカレントリップルの一種で、堆積物

の供給が多く、かつ堆積速度が速い場合に形成する。通常、リップルの逆走斜面は粒子が通過もしくは侵食され、順走斜面に砂が堆積してフォアセットをつくる。しかしクライミングリップルの場合、運ばれてくる堆積物の量が多く、逆走斜面側にも粒子が堆積し、リップル全体が積み上がるものの、順走斜面の堆積量が相対的に多いため、リップルの頂部は前置する。この結果、リップルの頂部を繋いだ線は、下から上へと前置しながら這い上がるように見える。

クライミングリップルの上位には、やや不明瞭ではあるが平板型リミナが累重しており、しばらく弱い流れ堆積が続いたことが分かる。その後はマッドクラストや干乾構造がみえ、流れ堆積から一転して泥湿地型の堆積に変わったと考えられる。試料⑦最上部では浸食構造を伴った細～粗礫混じり砂の堆積がみられ、この構造は試料⑥の下部構造と併せて逆級化構造を形成している。この構造は、大水や洪水といった急激な増水に伴って形成される典型的な構造である。河川増水時、川の流れによって運ばれる粒子は川底に近い部分で比較的大きい粒子(砂や礫)が運ばれ、細かい粒子(砂や泥)は濁り水として水面までの水の中を浮いて運ばれる。この時点で水柱の粒子分布をみると、全体として河床底から水面に向かって細粒化している。河川が増水することによって、これまで陸域であった場所が水没して水中から水面にかけて運ばれていた細粒子から堆積が始まる。さらに水位が上がると粗粒子がその上に堆積することになり、全体としては逆級化することになる。当然のことながら、水が引き始めるとこの逆となり、正級化ないしはカレントリップルが堆積する。地点としては11流路河床付近となるが、前述のとおり河床堆積物とは様相が異なることから、流水路本体からは僅かに外れた、降雨時などの増水時には容易に水没する場所であったと考えられる。

試料⑥の場合も砂礫層の上位にカレントリップルを持つ泥層が堆積している。また、試料⑥の大半を占める上位の泥層は、流れ込みとは異なる多くの植物遺体を挟在する。このことは、試料⑥下部の洪水堆積物が堆積した後、再び冠水しつつ砂泥が堆積し、僅かな微高地が形成された場所に植物群落が形成されて湿地化し、氾濫原湿地が形成されたことを示す。その後、試料④まで流れ堆積と湿地形成が繰り返している。試料④中位にはトラクション・カーベットとおぼしき構造も見られる(④矢印)。その後は氾濫原湿地が継続するが、試料③では、大きく歪んだ構造が見られる。この凹状構造には、多くの植物遺体も混ざり込んでおり、土坑や杭跡等の遺構である可能性が高い。

全体として、流路内の河川争奪と一時的かつ部分的な湿地化の繰り返しが見られた。今後、大橋遺跡の他の調査区も含めて比較し、記載を進めたい。

第3節 1-1区の自然科学分析結果

パリオ・サーヴェイ株式会社

第1項 調査区の古環境解析

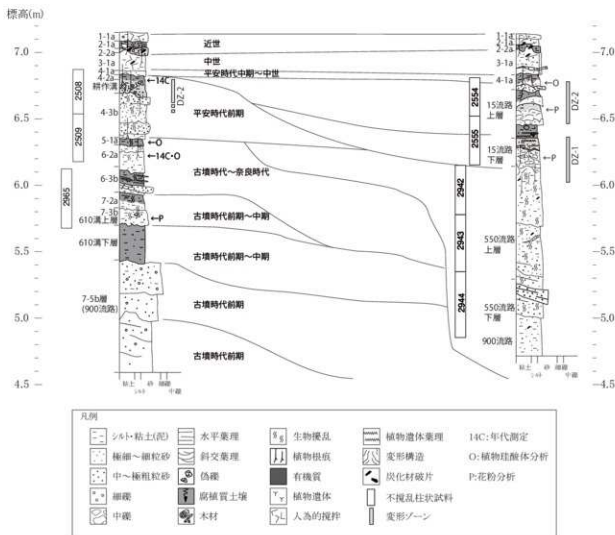
1 試料

分析調査は調査区中央東西トレンチ断面東部より採取された不攪乱柱状試料8点(第12図参照)について実施する。調査地点の層序及び分析試料採取位置を第273図に示す。なお、不攪乱柱状試料のうち、2944試料については調査担当者による採取時に破損していたため、分析は其中で状態の良い部分について実施し、発掘調査時の写真を参考にしながら検討を行う。

2 分析方法

(1)放射性炭素年代測定

分析は4-2a層と6-2a層中の植物遺体を測定対象とする。土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後



第273図 調査地点の層序及び試料採取位置

HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(AAA処理・酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)、850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 堆積層の層相解析

調査地点から採取された不攪乱柱状試料について、肉眼及びX線写真撮影観察を実施する。

X線写真撮影は、調査地点の不攪乱柱状試料について、厚さ1cmまで板状に成形し、湿潤状態のまま、管電圧50kVp、電流3mA、照射時間270秒のX線強度条件においてX線写真撮影を実施した。撮影は公益財団法人元興寺文化財研究所の協力を得た。なお、X線写真撮影は、不攪乱柱状試料2~10について実施した。X線写真では礫や酸化鉄など密度の高い物質が白色(白色)を呈し、有機質に富む堆積物や植物遺体など密度の低い物質が暗色を呈する。

(3) 花粉分析

約10gを秤量し、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本をはじめ、Erdman(1952,1957)、Faegri and Iversen(1989)等の花粉形態に関する文献や、島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)、三好他(2011)等の邦産植物の花粉写真集等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(4) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表と層位分布図として示す。その際、100個体以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める(100単位にする)。

3 分析結果

(1) 放射性炭素年代測定結果

測定結果を第71表及び第274図に示す。

同位体補正を行った年代値は、4-2a層の植物遺体が $1,250 \pm 20$ yBP、6-2a層の植物遺体が $1,190 \pm 30$ yBPである。一方、測定誤差 2σ の確率1位の暦年較正年代は、4-2a層の植物遺体がcal AD 682-778、6-2a層の植物遺体がcal AD 769-893である。

第71表 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

層位 試料状態	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果			Code No	
					誤差	cal BC/AD	cal BP		相対比
4-2a層 植物遺体	AAA	1,280 ± 20	-26.95 ± 0.52	1250 ± 20 (1246 ± 24)	σ	cal AD 690 - cal AD 740	cal BP 1,260 - 1,210	0.820	IAAA- 150521
						cal AD 761 - cal AD 774	cal BP 1,189 - 1,176	0.180	
						cal AD 682 - cal AD 778	cal BP 1,268 - 1,172	0.814	
					2σ	cal AD 790 - cal AD 832	cal BP 1,160 - 1,118	0.106	
						cal AD 836 - cal AD 867	cal BP 1,114 - 1,083	0.079	
						cal AD 776 - cal AD 782	cal BP 1,174 - 1,168	0.061	
6-2a層 植物遺体	AaA	1,320 ± 20	-32.78 ± 0.40	1190 ± 30 (1192 ± 25)	σ	cal AD 786 - cal AD 794	cal BP 1,164 - 1,156	0.086	IAAA- 150522
						cal AD 800 - cal AD 847	cal BP 1,150 - 1,103	0.565	
						cal AD 851 - cal AD 876	cal BP 1,099 - 1,074	0.289	
					2σ	cal AD 729 - cal AD 736	cal BP 1,221 - 1,214	0.009	
						cal AD 769 - cal AD 893	cal BP 1,181 - 1,057	0.985	
						cal AD 933 - cal AD 936	cal BP 1,017 - 1,014	0.006	

1) 処理方法のAAAは、酸処理-アルカリ処理-酸処理を示す。アルカリ濃度1M未満の場合はAaAと示す。

2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5668年を使用した。

3) BP年代値は、1950年を基準として何年前であるかを示す。

4) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

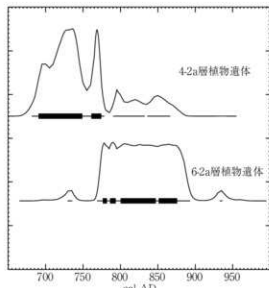
5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。

6) 暦年の計算には、補正年代(1)で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。

7) 年代値は、1桁目を丸めるのが原則だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムの改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68.3%、 2σ は95.4%である。

9) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



各試料の曲線の下部にある直線は、太い部分が1σ、細い部分が2σの範囲を示す。

第274図 暦年較正結果の比較

以上の結果をみると、得られた年代値は層位的に逆転していることが確認される。これは、後述するように調査地点の堆積物が氾濫堆積物からなることから、再堆積した植物遺体の影響、あるいは上位層から落ち込みによる影響の双方の可能性が考えられる。前者の可能性の場合、各層の形成年代については、得られた年代値より、新しい年代を想定しておく必要があり、2層準とも最堆積した植物遺体に由来するとすれば4-2a層の形成年代は、下位層である6-2a層で得られている年代値より新しい年代、すなわち、8世紀後半～9世紀末以降となる。一方、後者の場合は、6-2a層の年代が上位からの落ち込みとすれば、4-2a層の年代値が形成年代を示している可能性もある。なお、発掘調査時の所見では、4-2a層は平安時代前期～中期頃、6-2a層は古墳時代～奈良時代と推定されている。

(2) 堆積層の層相解析結果

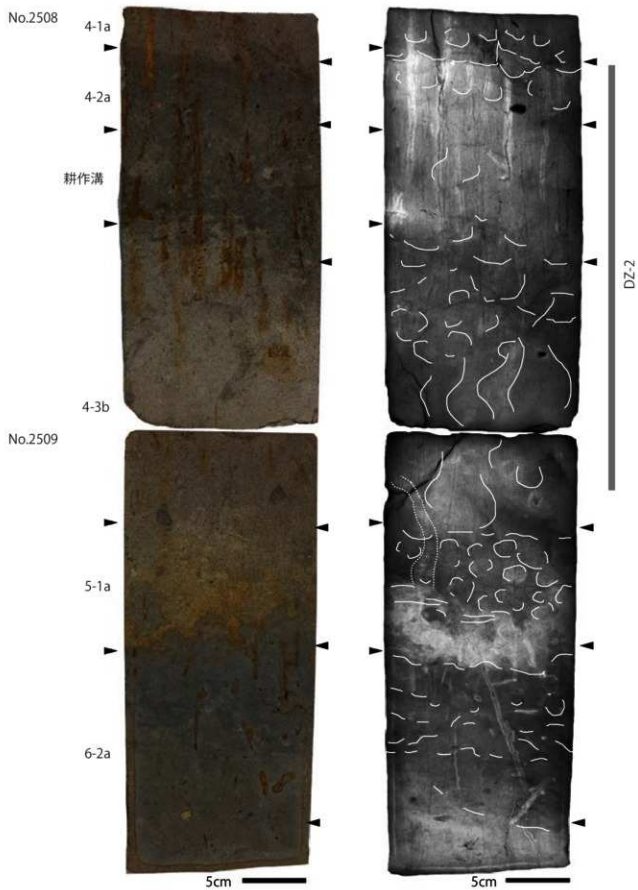
ア 堆積層の層相

今回調査を実施した堆積層のうち、上位層準の堆積物は著しく変形している。この変形構造は、後述するように複数の地層にわたる一連の変形構造で地震動に起因するものと推定される。ここでは、変形の影響が少ない部分の層相、及び変形構造から推定される変形前の層相に基づいて各層の層相について記載し、地震動による変形構造は別途記載する。不攪乱柱状試料の昼光写真・X線写真及び主な構造のトレースを第275図～第278図に示す。

4-1a層：黄灰色を呈する極細粒砂質泥～泥質砂からなる。下位層との層界は明瞭で、2cm程度の偽礫状の構造が発達し、下位の4-2a層に積層しているようにみえる。また、著しく攪拌されており、上部ほど偽礫の大きさが小さくなる。下記する4-2a層上部の状況より、調査地点では4-2a層が削平された後、人為的に客土された堆積物と判断される。発掘調査の結果、平安中期から中世の耕作土と推定されている。

4-2a層：暗灰色を呈する有機質細粒砂質泥からなり、塊状ないし壁状構造をなす。微細な炭片を多く含み、耕作土のようなこねた状態を呈している。有機質堆積物の場合、X線写真では暗色を呈するが、本層準については明色を呈している。これは、本層上位の4-1a層形成期の圧密により、締まり、明色を呈したと推定される。X線写真では幅1mm以下の根成孔隙が密に分布する状況が確認される。この根成孔隙には上位層準から連続するものもあるが、本層上限から認められるものが多く、かつ上限で切断されている。このことは先述した4-1a層形成期に4-2a層上部が平坦地造成などに伴い削平されていることを示唆する。本層の形成年代は、出土遺物より平安時代前期から中期頃と推定され、堆積後には耕作土として利用されていたと推定される。

耕作満埋土：下位の4-3b層に由来する大小の偽礫が混じる、やや有機質な砂質泥からなる。偽礫の形状は直角を呈するものが多い。上位の4-2a層との層界は漸移的であり、4-2a層の耕作土のた



第275図 試料及び軟X線写真(1)

めの土砂取りの遺構であることを示唆している。

4-3b層：灰白色～黄灰色の粗砂・泥混じり細粒砂～細砂からなる。上部は溝掘削時の加工痕が顕著で著しく乱れている。また、中・下部では不明瞭ながら、葉理構造が確認され、擾乱が及ぶ前は級化成層していたことが窺える。このような層相から、本層は氾濫堆積物と推定される。なお、本層中に幅1cm程度の4-2a層由来の堆積物で充填されている棲管も確認される。本層は、平安時代前期以前に形成された堆積物と推定されている。

5-1a層：灰色を呈する砂質泥～泥質砂からなり、上部で粗粒化する。X線写真及び試料の昼行写真では、中部で不連続な葉理状の構造が部分的に確認される。上部は、X線写真では偽礫状の構造が確認され、著しく攪拌ないし擾乱されている。擾乱作用が及ぶ以前は、逆級化成層を成す氾濫堆積物の様相を呈していたと思われる。発掘調査成果では、奈良時代から平安時代前期頃の耕作土と推定されている。

6-2a層：灰黄～暗灰黄色を呈する泥質極細粒砂～砂質泥からなる。上部は著しく攪拌ないし擾乱されており、やや腐植を含む。また微細な炭片や、下位堆積物由来の垂角を呈する偽礫・微小ブロックが混じる。X線写真でも偽礫状の構造が確認される。下部は葉理構造が確認される泥質砂～砂質泥からなる。層相から、氾濫堆積物が流入する湿地から沼沢地のような堆積環境で形成された堆積物で堆積後に耕作土として利用されていたことが示唆される。発掘調査成果より、本層の形成年代は、古墳時代から奈良時代と推定されている。

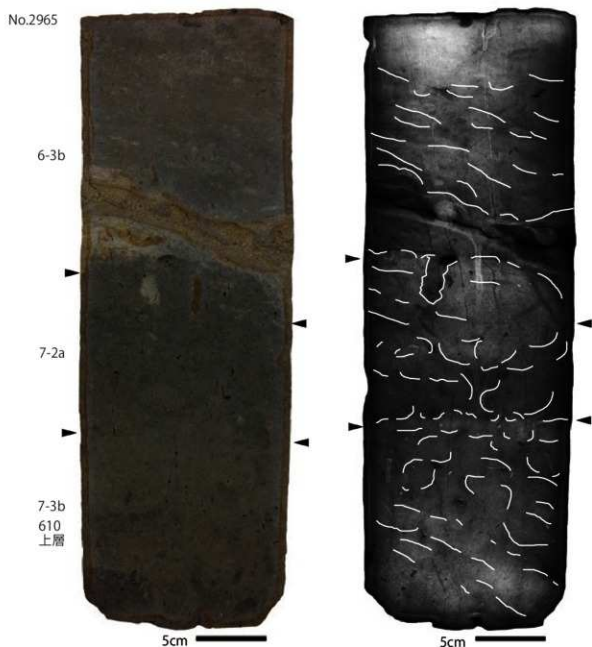
6-3b層：最下部は氾濫堆積物の示相構造である逆級化成層を成す泥質砂～粗粒砂からなる。その上位に不連続な細粒砂～極細粒砂葉理を挟む有機質砂質泥～泥質砂が積層し、上方粗粒化傾向を示す。このような層相から本層形成期には、調査区の地下水位が上昇傾向にあった可能性が高く、氾濫堆積物がしばしば流入する湿地のような堆積環境に変化したと推定される。本層の形成年代は、発掘調査結果から、古墳時代から奈良時代頃と推定されている。

7-2a層：灰～暗灰色を呈する泥質砂。著しく攪拌されており、肉眼観察ではブロック状の構造、X線写真では明暗の変化が認められる。微細な炭片が多く混じり、垂角を呈する黄灰色砂質泥の偽礫が僅かに混じる。孔隙は細粒碎屑物で充填されており、壁状ないし塊状を成す。上位層から連続する幅1cm程度の棲管も確認される。以上の層相から、水田耕作土のような人為的に攪拌された堆積物とみられる。発掘調査では、古墳時代中期の耕作土とされている。

7-3b層：灰色を呈する泥質細粒砂。微細な炭片が多く混じる。7-2a層と同様に著しく擾乱されており、5～7mm程度の泥と砂のペレット状の破片が確認される。この破片の大きさは上部にむかって細粒化する。発掘調査の結果、古墳時代前から中期の土器片を多数出土することが確認されており、層相とも同調的である。

15流路充填堆積物：15流路充填堆積物は上層において著しく変形している。上層堆積物は4つの層に細分され、下位より、植物遺体葉理を挟む泥(15上層-4)、植物遺体や木材片を多く含む細粒砂～極細粒砂葉理を挟む有機質泥(15上層-3)、氾濫堆積物の示相構造である逆級化成層を成す砂質泥～泥混じり砂(15上層-2)、細粒砂～極細粒砂葉理を挟む有機質泥(15上層-1)の順に積層していたと見られる。このような層相から、15流路上層は、水底下で形成された堆積物と推定される。

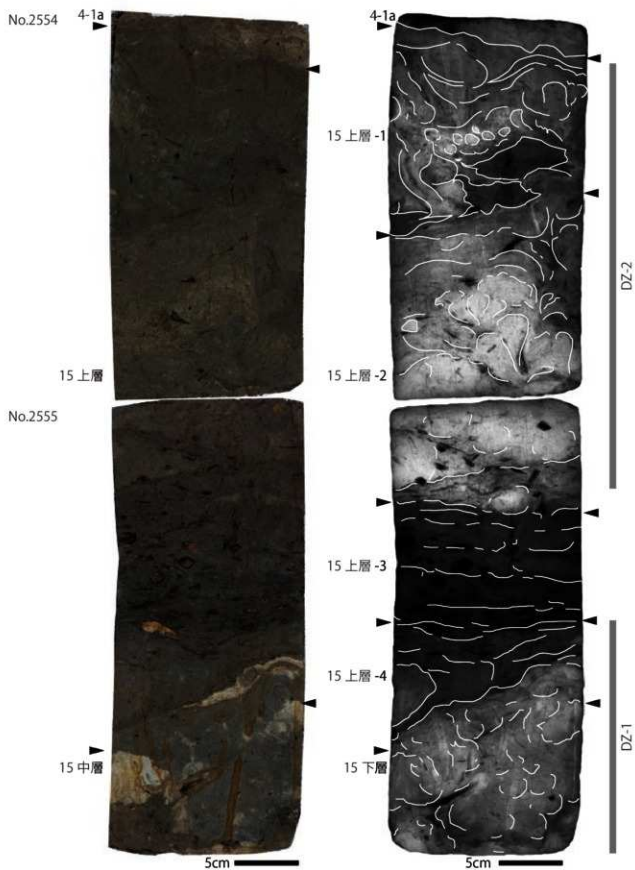
15流路下層は後述する地震動により著しく変形しているため、初生の構造を把握しにくい。本来は葉理の発達する砂混じり泥～砂質泥であったとみられ、水底下で形成された堆積物と推定される。



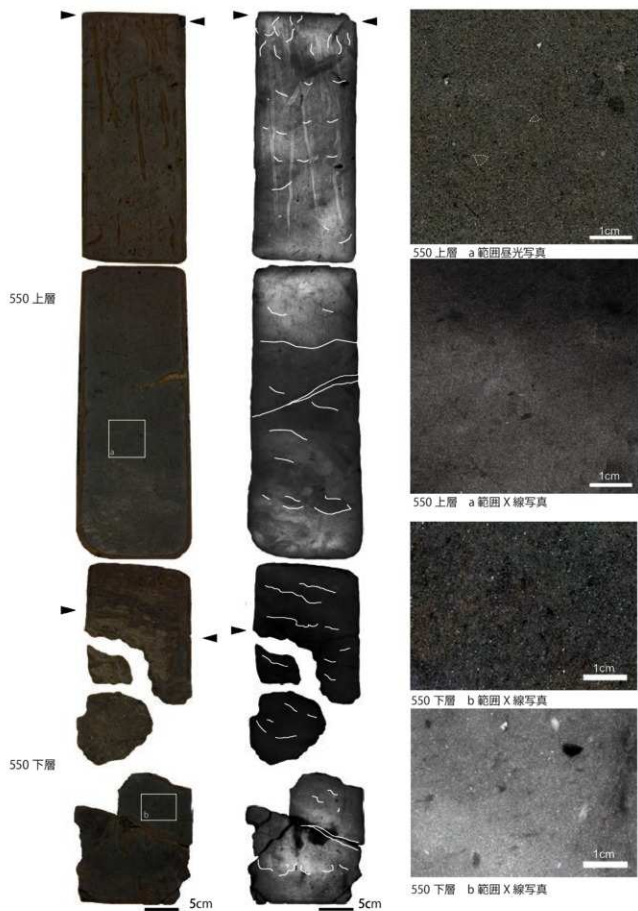
第276図 試料及び軟X線写真(2)

550流路充填堆積物：上層は上方細粒化する中粒砂～泥質細粒砂の積層からなり、生物擾乱が顕著である。生物活動により生じたとみられる5～7mm程度のペレット状の微小ブロックが密に確認される(第278図拡大写真)。本層も水底下で形成された堆積物と推定される。一方、下層は上部が薬理を成す中粒砂、下部が砂質泥～泥質砂からなる。分析試料が破損していたため部分的な観察になるが、上層と同様に水底下で形成された堆積物と推定される。

以上の550流路及び15流路は、発掘調査時の断面写真によれば、河岸堆積物と指交するような状況は確認されないことを合わせ考えると、堆積速度の速い、排水流路のような堆積環境で形成された堆積物と推定される。



第277図 試料及び軟X線写真(3)



第278図 試料及び軟X線写真(4)

節-ウナギツカミ節、セリ科、ヨモギ属等も多く認められる。水湿地生植物ではミズアオイ属が多く認められる他、オモダカ属、イボクサ属等を伴う。また、栽培種であるソバ属も、僅かながら認められる。

一方、下層では個体数・種類数が減少するものの、産出傾向は概ね類似しており、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、サナエタテ節-ウナギツカミ節、ナデシコ科、セリ科、ヨモギ属等を伴う。また、オモダカ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属等の水湿地等に生育する種群も認められる。

610溝の上層は、花粉化石の産出状況が悪く、僅かに認められる花粉化石の保存状態も悪い。木本花粉のクルミ属、コナラ亜属、及びシダ類胞子が僅かに認められる程度である。

(4) 植物珪酸体分析結果

結果を第73表及び第280図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、概して植物珪酸体含量は少ない。また保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

以下に、土層での産状を下位から述べる。

7-2a層

植物珪酸体含量は調査した土層の中では6-2a層に次いで多く、約12,400個/gである。栽培植物であるイネ属が産出し、葉部の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が見られる。その含量は、短細胞珪酸体が300個/g程度、機動細胞珪酸体が700個/g程度である。また短細胞列や糊(穎)に形成される穎珪酸体も検出される。この他の分類群には、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などが認められ、ヨシ属の産出が目立つ。

6-2a層

植物珪酸体含量は調査した土層の中では最も多く、約13,400個/gである。イネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が産出し、その含量は短細胞珪酸体が100個/g未満、機動細胞珪酸体が200個/g程度である。この他には7-2a層と同様な分類群が見られ、ヨシ属の産出が目立つ。

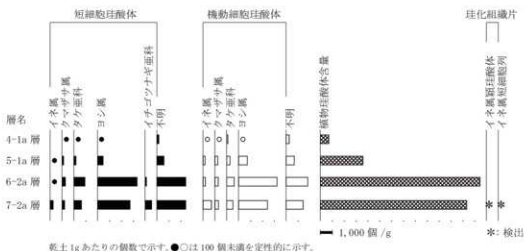
第72表 中央東西トレンチの花粉分析結果

種 類	中央東西トレンチ		610溝 上層
	15或路 上層	下層	
木本花粉			
マキ属	1	1	-
モミ属	1	3	-
ツグ属	4	-	-
トウヒ属	-	1	-
マツ属(榎管束亜属)	24	17	-
マツ属(不明)	13	31	-
コウヤマキ属	-	2	-
スギ属	71	105	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	12	8	-
ヤナギ属	1	-	-
サワグルミ属	2	2	-
クルミ属	3	-	1
クマシダ属-アサダ属	11	11	-
カバノキ属	10	5	-
ハンノキ属	2	1	-
ブナ属	6	4	-
コナラ属コナラ亜属	22	9	1
コナラ属アカガシ亜属	54	26	-
クリ属	6	6	-
シイ属	4	2	-
ニレ属-ケヤキ属	16	5	-
エノキ属-ムクノキ属	6	1	-
ヤドリギ属	-	1	-
ミカン科	1	-	-
アカメガシワ属	2	-	-
カエデ属	-	1	-
トチノ木属	-	4	-
ブドウ属	1	-	-
ノブドウ属	1	1	-
グミ属	-	1	-
ウコギ科	-	1	-
ガマズミ属	1	-	-
草本花粉			
オモダカ属	4	1	-
イネ科	324	93	-
カヤツリグサ科	37	19	-
イボクサ属	1	-	-
ミズアオイ属	15	2	-
クワ科	6	1	-
サナエタテ節-ウナギツカミ節	9	3	-
ソバ属	1	-	-
アカザ科	1	-	-
ナデシコ科	2	4	-
アブラナ科	1	-	-
バラ科	-	1	-
マメ科	1	1	-
キカシグサ属	2	-	-
セリ科	7	5	-
ゴキヅル属	-	1	-
ヨモギ属	14	7	-
オナモミ属	1	-	-
キク亜科	2	1	-
タンポポ科	-	-	-
不明花粉			
不明花粉	9	11	-
シダ類胞子			
ヒカゲノカズラ属	-	4	-
ゼンマイ属	-	4	-
イノモトツウ属	1	1	-
他のシダ類胞子	78	192	14
合 計			
木本花粉	275	249	2
草本花粉	428	139	0
不明花粉	9	11	0
シダ類胞子	79	201	14
合計(不明を除く)	782	589	16

第73表 中央東西トレンチの植物珪酸体分析結果

分類群	中央東西トレンチ			
	4-1a層	5-1a層	6-2a層	7-2a層
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ属	-	<100	<100	300
クマザサ属	<100	100	300	200
タケ亜科	<100	200	900	600
ヨシ属	<100	500	3,300	2,700
イチゴツナギ亜科	-	-	100	600
不明	200	600	2,400	2,400
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ属	<100	200	200	700
クマザサ属	<100	300	300	300
タケ亜科	100	300	600	500
ヨシ属	<100	700	3,200	2,400
不明	300	700	1,800	1,400
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	200	1,400	7,200	6,900
イネ科葉身機動細胞珪酸体	500	2,200	6,200	5,500
植物珪酸体含量	700	3,600	13,400	12,400
珪化組織片				
イネ属珪酸体	-	-	-	*
イネ属機動細胞	-	-	-	*

数値は含量密度(個/g)を示し、10の位で丸めて表記する。なお、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。<100は100個/g未満、-は未検出、*は検出を示す。



第280図 植物珪酸体含量密度の層位分布

5-1a層

植物珪酸体含量は、直下の6-2a層よりも少なく、約3,600個/gである。イネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が産出し、その含量は6-2a層と同等である。この他にはクマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属等がみられ、ヨシ属の産出が目立つ。

4-1a層

植物珪酸体含量は少なく、700個/g程度である。タケ亜科やヨシ属等が僅かに認められるに過ぎない。

4 調査地点の堆積環境と植生

(1) 古植生

古墳時代前期から中期とされる610溝の下層からは、花粉化石がほとんど検出されず、定量解析が行えるだけの個体数を取得することが出来なかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性が挙げられる。僅かに検出された花粉化石の保存状態が悪かったこと等を考慮すると、堆積後の経年変化により、分解消失した可能性がある。

一方、平安時代中期から中世とされる15流路についてみると、下層・上層のいずれも花粉化石が豊富に産出する。周辺の植生を反映する木本類についてみると、スギ属が最も高い割合で産出し、マツ属、コナラ属アカガシ亜属等も高率で認められる。その他ではイチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科、クマシデ属-アサダ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属なども認められる。このうち、スギ属は、沢沿いや谷斜面、湧水部などに生育し、約6,000年前以降から本地域周辺でスギ林の拡大が認められ、約2,000年前以降になると中国山地中部を除いた日本海側地域で急激に増加することが知られている(高原1998)。このことから、当時の遺跡周辺にスギ属が優勢な森林が存在した可能性が高い。また、アカガシ亜属は、暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素であることから、シイ属等とともに周辺の森林を構成していたと推測される。マツ属は、二次林や海岸林等を構成することから、アカガシ亜属等とともに遺跡周辺に生育していたと思われる。コナラ属、クマシデ属-アサダ属、ニレ属-ケヤキ属等は、河畔や渓谷沿い等の適湿地に生育することから、流路の集水域などに生育していたものに由来する可能性がある。

草本植生について見ると、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属等が認められる。これらは、いずれも開けた明るい場所に生育する、いわゆる「人里植物」であることから、15流路周辺の草地や周囲の林縁林床等に由来すると推測される。また、ミズアオイ属をはじめモダカ属、イボクサ属、ゴキヅル属等の水湿地生植物や、イネ科、カヤツリグサ科、セリ科等の水湿地に生育する種を含む分類群の一部は、流路内や流路沿い等に生育していたと考えられる。なお、栽培種のソバ属も確認されたことから、当該期における周辺での栽培・利用も窺える。

(2) イネ科植生と稲作の検討

1-1区の中央東西トレンチ壁で見られた土層のうち、古墳時代中期とされる耕作土層の7-2a層、古墳時代~奈良時代とされる耕作土層の6-2a層と5-1a層、平安時代中期から中世とされる耕作土層の4-1a層ではイネ属が産出した。

安定した稲作が行われた水田跡の土壌では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され、植物珪酸体含量(植物珪酸体密度)が高くなる。水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当り5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山2000)。また大樽遺跡の西方に位置し、湖山池の南東方向の丘陵を開析する小谷の谷底平野に立地する東桂見遺跡でのプラント・オパール分析では、プラント・オパール密度(含量)が古墳時代で4,600~7,200個/g、奈良・平安時代で4,800個/g、鎌倉時代で9,900~11,000個/gであり、古墳時代頃に稲作が開始された後に鎌倉時代頃まで概ね継続して行われた可能性が指摘されている(古環境研究所1992)。

今回の植物珪酸体分析で得られた機動細胞珪酸体含量は、最も多い7-2a層で700個/g程度であった。上記の調査例と比較すれば、今回の含量は概して少ないと言える。ただし、水田跡と推定される層位でも機動細胞珪酸体含量が数百個/g程度である場合もある。調査区の東方に位置し、湖山池の南東岸の低湿地上に立地する東桂見遺跡や桂見鍋山遺跡で当社により実施された分析調査では耕作層と考えられる層位で機動細胞珪酸体含量が900個/g程度あるいは200~300個/g程度と少なかった。これは、堆積速度や耕作期間、収穫後の稲藁を外部へ持ち出すことなどの要因により、土壤中に植物珪酸体が蓄積しにくい状態にあったことが影響を及ぼしていると思われる。これらの事例と考慮すれば、5-1a層、6-2a層、7-2a層で稲作が行われていた可能性があるものの、イネ属の植物珪酸体が土層中に蓄積されにくい状態にあったと思われる。また4-1a層ではイネ属が痕跡程度に産出するだけであった。今回の結果を見る限り、稲作が行われた可能性を積極的に支持することは難しいものの、今後さらに堆積環境を含めて検討する余地が残される。

ところで、イネ属以外の分類群にはクマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科等が認められ、土層が形成された頃にこれらのイネ科植物の生育が窺える。また湿潤な場所に生育するヨシ属の産出が目立ったことから、調査地点は水路や溝の付近にあって、水の影響を受けていたことが考えられる。

第2項 515土坑埋土の寄生虫卵分析

1 試料

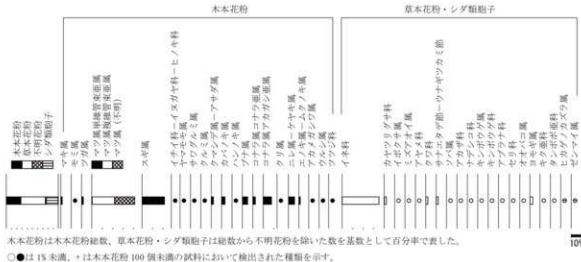
分析試料は4-2面で検出された515土坑埋土1点で、淘汰の良い粘質シルトからなる。

2 分析方法

試料を定量後、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、寄生虫卵を濃集

第74表 515土坑の寄生虫卵分析結果

種類	4-2面 515土坑 埋土
木本花粉	
マキ属	4
モミ属	1
ツブ属	5
マツ属単維管束亜属	1
マツ属複維管束亜属	59
マツ属(不明)	53
スギ属	59
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1
ヤマモモ属	1
サワグルミ属	2
クルミ属	1
クマシデ属-アサダ属	6
カバノキ属	9
ハンノキ属	1
ブナ属	14
コナラ属コナラ亜属	7
コナラ属アカガシ亜属	22
クリ属	2
シイ属	-
ニレ属-ケヤキ属	16
エノキ属-ムクノキ属	4
アカメガシワ属	2
ウルシ属	1
ツツジ科	1
草本花粉	
イネ科	344
カヤツリタサ科	21
イボクサ属	2
ミズアオイ属	3
アヤメ科	1
クワ科	20
サナエタデ属-ウナギツカミ節	20
ソバ属	7
アカザ科	4
ナデシコ科	4
キンボウケ属	1
キンボウケ科	1
アブラナ科	1
セリ科	5
オオバコ属	1
ヨモギ属	28
キク亜科	3
タンポポ亜科	1
不明花粉	
不明花粉	14
シダ類胞子	
ヒカゲノカズラ属	1
ゼンマイ属	5
他のシダ類胞子	220
合計	
木本花粉	272
草本花粉	467
不明花粉	14
シダ類胞子	226
合計(不明を除く)	965
寄生虫卵(個/cc)	0
花粉・胞子(個/cc)	800
寄生虫卵、花粉・胞子含量密度は、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。	



第281図 515土坑の寄生虫卵分析結果

する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数し、結果は含量密度として示す。また、寄生虫卵以外の花粉・胞子化石についても計数する。

3 結果

結果を第74表及び第281図に示す。4-2面より検出された515土坑の埋土中に、寄生虫卵は1個体も検出されなかった。花粉化石・シダ類胞子は多量に検出されが、堆積物1cc当たりの個数としては約800個程度である。花粉化石の保存状態は、比較的良好である。

なお、検出された花粉化石群集の組成をみると、草本花粉の割合が高く、イネ科が顕著に多産する。その他ではカヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属なども多く認められ、水湿地生植物のイボクサ属、ミスアオイ属、栽培種のソバ属等も伴う。木本花粉では、マツ属が最も多く産出し、次いでスギ属が多く認められる。その他ではマキ属、ツガ属、クマシテ属-アサダ属、カバノキ属、ブナ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属等を伴う。

4 考察

515土坑埋土はオリブ黒色の粘質シルトからなり、土器片を微量含む。本遺構はトイレ遺構等の可能性が想定されたため、寄生虫卵分析を実施した。寄生虫卵は普通の土壌にも含まれるが、糞便等の堆積物で多産する調査事例も報告されている(例えば金原・金原1992、1993等)。分析の結果、515土坑埋土からは寄生虫卵は1個体も確認されなかった。同覆土からは、花粉化石・シダ類胞子が、堆積物1cc当たり約800個程度検出され、その保存状態も比較的良好である。寄生虫卵の分解に対する抵抗性が花粉化石と同程度とされていることを考慮すると(黒崎他1993)、515土坑はもともと寄生虫卵が取り込まれにくい状況であったと推測され、トイレ遺構を支持する結果とは言えない。内容物については微細物分析等を実施し、検証することが望まれる。

なお花粉化石群集組成からは、木本類ではマツ属、スギ属等の針葉樹、クマシテ属-アサダ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属等の落葉広葉樹、アカガシ亜属等の常緑広葉樹が、草本類ではイネ科、

カヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属等の人里植物、イボクサ属、ミズアオイ属、アヤメ科等の水湿地生植物及びそれを含む分類群が確認された。これらは、前述の15流路で特徴的に認められた種群であることから、同様の周辺植生を反映していると考えられる。

第3項 古代掘立柱建物跡出土柱材の放射性炭素年代測定

1 試料

試料は、6棟の掘立柱建物跡の柱穴内から出土した柱材7点(取上番号2290、2331、2388、2130、2383、2622、2620)である。このうち、2331と2388の2点は、ウイグルマッチング法を実施する。

ウイグルマッチング法を除く5点については、柱材の木取り、樹皮の有無等を確認した上で、残存する中で最外年輪を含む3~5年分を採取して測定試料とする。ウイグルマッチング法の2点は、端部を切断して持ち帰り試料とした。

2 分析方法

(1) 加速器質量分析法(AMS法)

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(AAA処理・酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)、850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

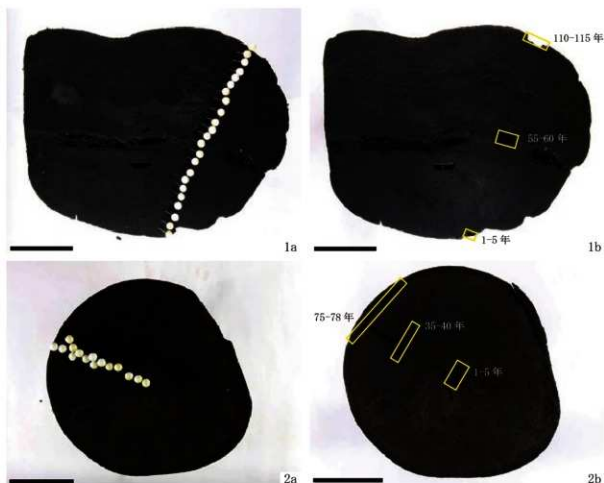
暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) ウィグルマッチング法

柱材の切断面を研磨し、実体顕微鏡で年輪を計測しながら5年ごとにピンを刺す(第282図)。2331は、115本の年輪が認められ、樹芯部を含む1-5年、ほぼ中間の55-60年、外側の110-115年の3カ所から測定試料を採取する。2388は、78本の年輪が認められ、樹芯部を含む1-5年、中央部の35-40年、外側の75-78年から測定試料を採取する。

ウィグルマッチングとは、年輪を持った樹木試料の放射性炭素年代測定に対し、較正曲線のウィグルを応用して年代値の絞り込みを行うものである(Bronk Ramsey *et al.* 2001など)。暦年較正ソフトであるOxcal(最新版は4.2)では、ベイズ推定によるモデリングを行うことによって、 ^{14}C ウィグルマッチングのためのモデルを作成することが可能である。Oxcalのリファレンスマニュアルによれば、典型的な ^{14}C ウィグルマッチングの場合、年輪試料を10年毎に測定し、かつ測定試料に樹皮が確認されたとき、10年輪毎に分割した最終ブロックの年代から約5年後が樹木試料の伐採年代と考えることが



1. 掘立柱建物 10 93 柱穴 No.2331
2. 掘立柱建物 12 109 柱穴 No.2388

各試料の白いピンは、5年間隔。また、黄色の範囲がウィグルマッチング試料採取位置を示す。

第282図 ウィグルマッチング試料

できる。なお、現在使われている較正曲線のIntcal13(Reimer *et al.*2013)は、基本的に10年単位で(新しい時代では5年単位)作られている点や、測定年代、較正曲線の精度から考えても、与えられた年代は10年単位で考えることが必要である。このことは、国際的な取り決めによっても、推奨されている(Stuiver and Polach 1977)。しかし、今回は、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算が出来るようにするため、表中には丸めない値(1年単位)を記す。ただし、文章中では10年単位で表記する。

3 結果

(1) 加速器質量分析法(AMS法)

年代測定結果及び暦年較正結果について、第75表及び第283図に示す。ウイグルマッチング法による測定を実施した2点も含む7点の同位体効果の補正を行った値(補正年代)は、2290が 1.290 ± 30 BP、2130が 1.300 ± 20 BP、2283が 1.300 ± 20 BP、2622が 1.260 ± 20 BP、2620が 1.330 ± 20 BPである。また、測定誤差を 2σ で計算させた暦年較正結果は、2290がcal AD666-769、2130がcal AD664-768、2283がcal AD650-763、2622がcal AD674-859、2620がcal AD652-764である。

(2) ウイグルマッチング法

結果を第76表及び第284図に示す。分析の結果、残存する最外輪年代は、Oxcal4.2の 2σ 結果において、o.2388ではcalAD 670-850、o.2331はcalAD 770-890である。 ^{14}C ウイグルマッチングの場合、各要素間の正確な時間的間隔が明らかな場合の連続モデル(D_Sequence)を用いるのであるが、これは、相対的な時代幅が確実なので、Oxcalによるベイズ検定によるモデリングの中でも、かなり較正年代を絞り込むことが可能である。その結果、 2σ 結果において、o.2388ではcalAD740-800、o.2331はcalAD 770-820となり、統計学的に較正年代を絞り込むことが出来た。2388は樹皮が残り、2331も樹皮は無いが、状況から最外年輪の可能性が高いと考えられることから、これらの約5年後が樹木試料の伐採年代と考えることが出来る。なお、最外輪の年輪を測定していることから、ウイグルマッチングにより推定される伐採年代と、最外輪のモデリングの結果(18642-10、18642-13)は同じである。

4 考察

各資料の最外年輪を対象とした年代測定結果をみると、2331を除く6点で比較的近い値を示す。これらは、暦年較正結果から、7世紀中頃-8世紀代の年代が想定される。なお、掘立柱建物25は、2点の測定結果で若干の年代差が認められるが、いずれも樹皮が残っておらず、2620では面取りによって失われた年輪があると考えられることから、2点の測定値の違いはこうした加工状況を反映している可能性がある。また、2388は、年輪の計測では78年あるが、樹芯と最外年輪の年代測定値の差は約30年であり、実査の年輪数より狭い範囲を示す。この要因については、汚染などの問題も考えられるが、詳細は不明である。

一方、2331は他より若干新しい時期を示しており、暦年較正結果をみても、8世紀中頃-9世紀中頃の間を示している。2331は、樹皮は残っていないが、最外部の形状等から、実際の最外部に近いと考えられる。こうした状況を考慮すると、2331が所属する掘立柱建物10は、他の建物跡より若干新しい可能性もある。

第75表 掘立柱建物出土柱材の放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

地区 遺構	種類	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code No
						誤差	cal BC/AD		cal BP	
掘立柱建物9 79柱穴 遺物%2290	生木	AAA	1,320±20	-26.53 ± 0.62	1,290±30 (1,290±25)	σ	cal AD 676 - cal AD 713	cal BP 1,274 - 1,237	0.627	IAAA- 150517
							cal AD 744 - cal AD 765	cal BP 1,206 - 1,185	0.373	
						2σ	cal AD 666 - cal AD 729	cal BP 1,284 - 1,221	0.640	
							cal AD 736 - cal AD 769	cal BP 1,214 - 1,181	0.360	
掘立柱建物10 93柱穴 遺物%2331-1 (1-5年)	生木	AAA	1,420±20	-30.65 ± 0.50	1,330±20 (1,329±23)	σ	cal AD 658 - cal AD 686	cal BP 1,292 - 1,264	1.000	IAAA- 150526
							cal AD 652 - cal AD 711	cal BP 1,298 - 1,239	0.881	
						2σ	cal AD 745 - cal AD 764	cal BP 1,205 - 1,186	0.334	
							cal AD 686 - cal AD 718	cal BP 1,264 - 1,232	0.557	
掘立柱建物10 93柱穴 遺物%2331-2 (55-60年)	生木	AAA	1,360±20	-27.79 ± 0.41	1,280±20 (1,277±22)	σ	cal AD 742 - cal AD 766	cal BP 1,208 - 1,184	0.443	IAAA- 150527
							cal AD 675 - cal AD 769	cal BP 1,275 - 1,181	1.000	
掘立柱建物10 93柱穴 遺物%2331-3 (110-115年)	生木	AAA	1,290±20	-30.54 ± 0.55	1,300±20 (1,195±23)	σ	cal AD 776 - cal AD 779	cal BP 1,174 - 1,171	0.050	IAAA- 150528
							cal AD 788 - cal AD 833	cal BP 1,162 - 1,117	0.533	
						2σ	cal AD 836 - cal AD 869	cal BP 1,114 - 1,081	0.417	
							cal AD 769 - cal AD 891	cal BP 1,181 - 1,059	1.000	
掘立柱建物12 109柱穴 遺物%2388-1 (1-5年)	生木	AAA	1,390±20	-31.70 ± 0.41	1,280±20 (1,281±24)	σ	cal AD 683 - cal AD 717	cal BP 1,267 - 1,233	0.589	IAAA- 150523
							cal AD 742 - cal AD 766	cal BP 1,208 - 1,184	0.443	
						2σ	cal AD 672 - cal AD 769	cal BP 1,278 - 1,181	1.000	
							cal AD 678 - cal AD 712	cal BP 1,272 - 1,238	0.605	
掘立柱建物12 109柱穴 遺物%2388-2 (35-40年)	生木	AAA	1,390±20	-31.31 ± 0.49	1,290±20 (1,289±22)	σ	cal AD 744 - cal AD 765	cal BP 1,206 - 1,185	0.395	IAAA- 150524
							cal AD 667 - cal AD 728	cal BP 1,283 - 1,222	0.631	
						2σ	cal AD 737 - cal AD 768	cal BP 1,213 - 1,182	0.369	
							cal AD 692 - cal AD 748	cal BP 1,258 - 1,202	0.869	
掘立柱建物12 109柱穴 遺物%2388-3 (75-78年)	生木	AAA	1,360±20	-31.18 ± 0.43	1,260±20 (1,261±24)	σ	cal AD 762 - cal AD 769	cal BP 1,188 - 1,181	0.131	IAAA- 150525
							cal AD 670 - cal AD 777	cal BP 1,280 - 1,173	0.980	
						2σ	cal AD 793 - cal AD 802	cal BP 1,157 - 1,148	0.010	
							cal AD 844 - cal AD 855	cal BP 1,106 - 1,095	0.010	
掘立柱建物16 150柱穴 遺物%2130	生木	AAA	1,360±20	-28.69 ± 0.37	1,300±20 (1,297±23)	σ	cal AD 671 - cal AD 695	cal BP 1,279 - 1,255	0.490	IAAA- 150519
							cal AD 700 - cal AD 710	cal BP 1,250 - 1,240	0.144	
						2σ	cal AD 745 - cal AD 764	cal BP 1,205 - 1,186	0.366	
							cal AD 664 - cal AD 725	cal BP 1,286 - 1,225	0.666	
							cal AD 738 - cal AD 768	cal BP 1,212 - 1,182	0.334	
							cal AD 671 - cal AD 695	cal BP 1,279 - 1,255	0.490	
掘立柱建物16 150柱穴 遺物%2130	生木	AAA	1,360±20	-28.69 ± 0.37	1,300±20 (1,297±23)	σ	cal AD 700 - cal AD 710	cal BP 1,250 - 1,240	0.144	IAAA- 150519
							cal AD 745 - cal AD 764	cal BP 1,205 - 1,186	0.366	
						2σ	cal AD 664 - cal AD 725	cal BP 1,286 - 1,225	0.666	
							cal AD 738 - cal AD 768	cal BP 1,212 - 1,182	0.334	
掘立柱建物24 169柱穴 遺物%2383	生木	AAA	1,390±20	-28.60 ± 0.45	1,330±20 (1,333±24)	σ	cal AD 657 - cal AD 684	cal BP 1,293 - 1,266	1.000	IAAA- 150516
							cal AD 650 - cal AD 710	cal BP 1,300 - 1,240	0.897	
						2σ	cal AD 746 - cal AD 763	cal BP 1,204 - 1,187	0.103	
							cal AD 694 - cal AD 746	cal BP 1,256 - 1,204	0.863	
掘立柱建物25 567柱穴 遺物%2622	生木	AAA	1,270±20	-25.80 ± 0.33	1,260±20 (1,255±22)	σ	cal AD 763 - cal AD 770	cal BP 1,187 - 1,180	0.137	IAAA- 150520
							cal AD 674 - cal AD 777	cal BP 1,276 - 1,173	0.960	
						2σ	cal AD 792 - cal AD 803	cal BP 1,158 - 1,147	0.015	
							cal AD 817 - cal AD 822	cal BP 1,133 - 1,128	0.004	
							cal AD 842 - cal AD 859	cal BP 1,108 - 1,091	0.021	
							cal AD 657 - cal AD 687	cal BP 1,293 - 1,263	1.000	
掘立柱建物25 585柱穴 遺物%2620	生木	AAA	1,370±20	-27.61 ± 0.52	1,330±20 (1,329±24)	σ	cal AD 652 - cal AD 712	cal BP 1,298 - 1,238	0.868	IAAA- 150518
							cal AD 745 - cal AD 764	cal BP 1,205 - 1,186	0.132	

(1) 処理方法のAAAは、酸処理-アルカリ処理-酸処理を示す。

(2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5688年を使用した。

(3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

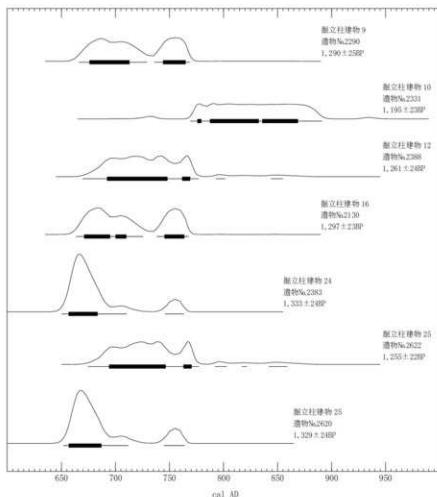
(4) 年代した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

(5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。

(6) 暦年の計算には、補正年代に(1)で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。

(7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。

(8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68.3%、 2σ は95.4%である。(9) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



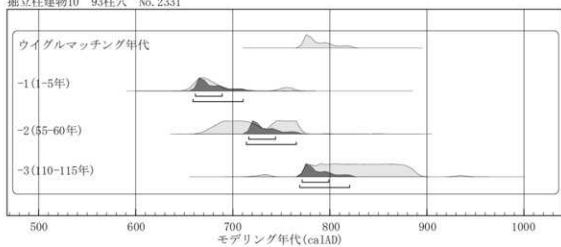
各試料の曲線の下部にある直線は、太い部分が1 σ 、細い部分が2 σ の範囲を示す。

第283図 掘立柱建物出土柱材の暦年較正結果の比較

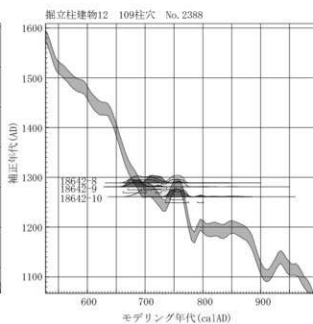
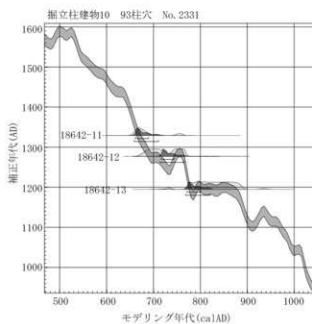
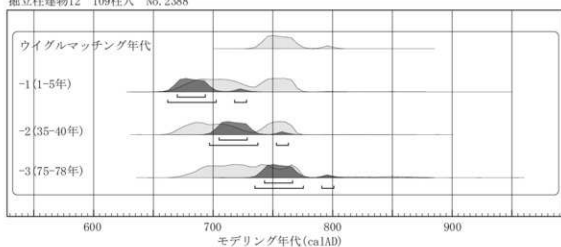
第76表 掘立柱建物出土柱材のウイグルマッチング結果

試料名	暦年較正結果(calAD)		モデリング結果(calAD)	
	σ (68.2%)	2 σ (95.4%)	σ (68.2%)	2 σ (95.4%)
ウイグルマッチング結果	771 - 799	769 - 820		
No.2331-1	656 - 688	651 - 765	661 - 689	659 - 710
掘立柱建物10	No.2331-2 685 - 767	674 - 770	716 - 744	714 - 765
No.2331-3	788 - 871	769 - 891	771 - 799	769 - 820
ウイグルマッチング結果	743 - 766	735 - 801		
No.2388-1	684 - 766	670 - 770	670 - 693	662 - 728
掘立柱建物12	No.2388-2 678 - 765	666 - 770	705 - 728	697 - 763
No.2388-3	690 - 770	670 - 854	743 - 766	735 - 801

掘立柱建物10 93柱穴 No.2331



掘立柱建物12 109柱穴 No. 2388



第284図 掘立柱建物出土柱材のウイグルマッチング年代

第4項 柱材・木製品の樹種同定

1 試料

試料は、掘立柱建物跡の柱材7点と祭祀具を中心とした木製品32点の合計39点である。このうち、曲物(取上番号893)には側板と底板、タタリ(W210)は土居と支柱の2部材が認められた。

2 分析方法

資料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他編(1989)、Richter他編(2004)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995、1996、1997、1998、1999)を参考にする。

3 結果

柱材の樹種同定結果を第77表、木器の樹種同定結果を第78表に示す。木器は、針葉樹3分類群(スギ・ヒノキ・イヌガヤ)と広葉樹4分類(クリ・スダジイ・ムクノキ・サカキ)に同定された。なお、掘立柱建物16のNo2130は針葉樹であるが、保存状態が悪く、分野壁孔や柔細胞壁の破損が激しい。観察出来た特徴から、マツ属かコウヤマキの可能性はあるが、判別が出来なかったため、針葉樹とした。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属(写真図版195)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的大い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属(写真図版195)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・イヌガヤ(*Cephalotaxa harringtonia* (Knight) K. Koch f.) イヌガヤ科イヌガヤ属(写真図版195)

資料は芯持丸木でほぼ完形であり、柾目面の切片が採取出来なかった。軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。樹脂細胞は早材部及び晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、単列、1～10細胞高。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属(写真図版196)

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に径を減じた後、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

第77表 掘立柱建物出土柱材の樹種同定結果

No.	集合遺構名	個別遺構名	取上番号	木取り	樹種	備考
1	掘立柱建物9	79柱穴	2290	芯持丸木	ムクノキ	直径11cm、年輪不明
2	掘立柱建物10	93柱穴	2331	削出	クリ	径16.5×22cm、年輪115本
3	掘立柱建物12	109柱穴	2388	芯持丸木	サカキ	直径16cm、年輪78本、樹皮残
4	掘立柱建物16	150柱穴	2130	芯持材	針葉樹	直径12.5cm、年輪103本以上
5	掘立柱建物24	169柱穴	2383	芯持丸木	サカキ	直径14cm、年輪不明
6	掘立柱建物25	567柱穴	2622	芯持丸木	スギ	直径15cm、年輪34本以上
7	掘立柱建物25	585柱穴	2620	芯持丸木	スギ	直径16cm、年輪71本以上

第78表 1-1区出土木器の樹種同定結果

No.	取上番号	遺構	層位	種別・部位	木取り	樹種	遺物番号
1	560	15流路	上層	木錘	芯持丸木	イヌガヤ	W204
2	614	8溝	埋土	連歯下駄	板目	クリ	W236
3	893	15流路	下層	曲物	底板	楳目	ヒノキ
側板					板目	ヒノキ	
5	2466	550流路	埋土	田下駄	板目	スギ	
6	2776	599流路	埋土	タタリ	土居	分割材	スタジイ
7					支柱	分割角棒	サカキ
8	2786	599流路	埋土	田下駄	板目	スギ	W197
9	3132	-	7-2 a層	雑具 腰掛座板	板目	スギ	W238
10	413		4-1 a層 ~6-1 a層	齋串	分割角棒	スギ	
11	582	8溝		齋串	板目	スギ	
12	1022	15流路	下層	齋串	分割角棒	スギ	W135
13	1252	15流路	下層	人形	板目	スギ	W23
14	2118-12	550流路		武器形	板目	スギ	W91
15	2118-16	550流路		武器形	板目	スギ	W93
16	2118-18	550流路		齋串	板目	スギ	W157
17	2118-25	550流路		齋串	板目	スギ	W158
18	2118-28	550流路		齋串	板目	スギ	W153
19	2118-2	550流路		人形	板目	スギ	W51
20	2118-5	550流路		人形	板目	スギ	W50
21	2118-6	550流路		人形	板目	スギ	W52
22	2118-1	550流路		馬形	板目	スギ	W76
23	2118-7	550流路		馬形	板目	スギ	W75
24	2118-12	550流路		馬形	板目	ヒノキ	W81
25	2190	15流路	下層	人形	板目	スギ	W16
26	2191	15流路	下層	馬形	板目	スギ	W63
27	2711	550流路	下層	人形	板目	スギ	W47
28	2715	550流路	下層	人形	板目	スギ	W48
29	3305-2	802流路		鍬形	板目	スギ	W115
30	3316	802流路		武器形	板目	スギ	W111
31	3299	802流路		農具形?	板目	スギ	
32	3320	802流路		刀形	板目	スギ	W109
33	3323	802流路		刀形	板目	スギ	W110
34	3314	802流路		刀形	板目	スギ	W112

・ **スダジイ** (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイ属(写真図版196)

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1~2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に径を減じた後、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

・ **ムクノキ** (*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon) ニレ科ムクノキ属(写真図版196)

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2~3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~4細胞幅、1~30細胞高。柔組織は周囲状及びターミナル状。

・ **サカキ** (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属(写真図版197)

散孔材で、小径の道管が単独または2~3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1~20細胞高。

4 考察

(1) 柱材

掘立柱建物跡の柱穴内から出土した柱材は、掘立柱建物10の93柱穴から出土した1点(W215)が分割材から削り出した丸木状、掘立柱建物16の150柱穴から出土した1点(2130)が芯持丸木の一部を削った芯持材で、残る5点はいずれも芯持丸木である。これらの柱材には、合計4種類が認められた。各種類の材質についてみると、針葉樹のスギは、木理が通直で割裂性と耐水性が比較的高い。広葉樹のクリは、強度と耐朽性が高い。ムクノキは、比較的重硬で強度が高い部類に入る。サカキは、重硬・緻密で強度が高い。

建物別にみると、掘立柱建物9・10・12・24の4棟は、広葉樹の柱材が利用される。このうち、掘立柱建物10は削出材、その他は芯持丸木である。芯持丸木の樹種は、掘立柱建物9がムクノキ、掘立柱建物10がクリ、掘立柱建物12,24がサカキであり、比較的高い強度の木材を柱材として利用したことが推定される。このうち、クリの削出材が使われる掘立柱建物10は、芯持丸木の柱材よりも径が大きく、また削出材が利用されるなど、他の建物とは柱材の状況が異なっており、建物跡の規模や機能との関連性が注目される。

一方、掘立柱建物16と25は、芯持丸木あるいは芯持丸木に近い芯持材が利用される点は同様であるが、樹種は針葉樹材が利用されている。このうち、掘立柱建物25は、2点ともスギであり、スギの丸木材を柱に使った建物と考えられる。スギ2点の直径をみると、クリを除く広葉樹の柱より若干大きい。樹種や径の違いも建物跡の大きさ・機能に関連する可能性がある。

(2) 木製品

木製品は、木鍾(W204)、連歯下駄(W236)、曲物、田下駄(W197)、タタリ(W210)、腰掛(W238)と京串(W135・W153・W157・W158)・人形(W16・W23・W47・W48・W50・W51・W52)・馬形(W63・W75・W76・W81)・武器形(W91・W93・W109・W110・W111・W112・W115)・農具形(W164)がある。これらの木製品には、合計6種類が認められた。

スギ、クリ、サカキを除く各種類の材質を見ると、針葉樹のヒノキは木理が通直で割裂性・耐水性が高い。イヌガヤは重硬・緻密で強度・靱性・耐水性が高い。広葉樹のスダジイは、比較的重硬で強

度が高い部類に入る。

器種別にみると、木鍾は、芯持丸木を挟んで鉄アレイ状にしており、イヌガヤに同定された。この結果と器種から、比較的比重のある木材を選択したことが推定される。

下駄は、台と歯を一本で作り出す連歯下駄であり、台表が板目になる木取りである。広葉樹のク리가利用されており、強度・耐朽性の高い木材を選択したと推定される。

曲物は、底板と側板がある。底板は3枚に割れた円形の板状(板目板)を呈し、一カ所に綴紐が認められる。側板は2片あり、接合位置は不明であるが、いずれも板目板状を呈し、1片には綴紐が残る。底板と側板とで木取りは異なるが、いずれもヒノキが利用され、耐水性の高い木材を選択・利用したことが推定される。鳥取県内の資料をみると、善田傍示ヶ崎遺跡や大御堂廃寺から出土した曲物(底板)もヒノキに同定されている(伊東・山田2012)。これらの結果をみると、スギの利用が多い本地域の中で、曲物にはヒノキの利用が目立つことから、曲物については他の器種とは異なる木材利用が見られた可能性がある。

田下駄は、共にスギの板目板が利用され、分割加工が容易な木材の利用が推定される。スギは、本地域の板状を呈する木製品によく利用されており、入手が容易であったと考えられることも利用の背景に考えられる。同様の事例は、青谷上寺地遺跡や善田傍示ヶ崎遺跡でも確認されている(伊東・山田前掲)。

タタリは、分割材を使った本体の頂部中央に四角の孔が開けられており、そこに分割角棒の軸が差し込まれる。本体はスダジイ、軸はサカキに同定された。いずれも比較的重硬で強度の高い木材が利用される。タタリは、作業をする上で、ある程度の重さがある方が安定することから、重硬な木材の利用は、タタリの重量を増すためとも考えられる。

祭祀具は、斎串と形代があり、大きく角棒状の資料と板状の資料に分けられ、板状の資料は全て板目板となる。これらの資料は、馬形の一つにヒノキが認められた他は全てスギであり、分割加工が容易なスギ材を主に利用したことが推定される。「木の考古学」(伊東・山田前掲)のデータベースをみると、本地域の古代の斎串や形代は分析事例が少ないが、善田傍示ヶ崎遺跡等で分析した斎串や形代は種類不明の針葉樹を除けば全てスギであり、今回の結果によく似ている。

第4節 保存処理木製品の樹種同定結果

(株)吉田生物研究所

1 試料

試料は鳥取県鳥取市大柵遺跡(1-1区及び2区)から出土した農具3点、木筒?1点、祭祀具15点、容器6点の合計25点である。

2 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柁目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3 結果

樹種同定結果(針葉樹3種、広葉樹5種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す(第79表、写真図版197~199)。

(1)イチイ科カヤ属カヤ(*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) (No.4)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部は狭く年輪界は比較的不明瞭である。軸方向柔細胞を欠く。柁目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~4個ある。仮道管の壁には対になった螺旋肥厚が存在する。板目では放射組織は全て単列であった。カヤは本州(中・南部)、四国、九州に分布する。

(2)スギ科スギ属スギ(*Cryptomeria japonica* D. Don) (No.1, 2, 5~14, 24, 25)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柁目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織は全て単列であった。樹脂細胞の末端壁は概ね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

(3)ヒノキ科アスナロ属(*Thuopsis* sp.) (No.3, 18)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柁目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織は全て単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

(4)ブナ科ブナ属(*Fagus* sp.) (No.22)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(~110 μ m)がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさ及び数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2~3列のもの、非常に列数の広いものがある。柁目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物(チロース)が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2~3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1~3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

第79表 保存処理木製品の樹種同定結果

No.	調査区	取上番号	品名	樹種	遺物番号
1	1-1区	2000	木簡?	スギ科スギ属スギ	W245
2	1-1区	455	人形	スギ科スギ属スギ	W36
3	1-1区	522	人形	ヒノキ科アスナロ属	W 5
4	1-1区	635	人形	イチイ科カヤ属カヤ	W 2
5	1-1区	890	人形	スギ科スギ属スギ	W 6
6	1-1区	892	人形	スギ科スギ属スギ	W 8
7	1-1区	940	人形	スギ科スギ属スギ	W31
8	1-1区	1075	人形	スギ科スギ属スギ	W30
9	1-1区	1102	人形	スギ科スギ属スギ	W34
10	1-1区	1131	人形	スギ科スギ属スギ	W33
11	1-1区	1156	人形	スギ科スギ属スギ	W29
12	1-1区	1158	人形	スギ科スギ属スギ	W32
13	1-1区	1185	人形	スギ科スギ属スギ	W45
14	1-1区	1226	人形	スギ科スギ属スギ	W 7
15	1-1区	2300	漆器・皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	W183
16	1-1区	2380	漆器・皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	W182
17	1-1区	2374	鋤	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W191
18	1-1区	2111	曲物	ヒノキ科アスナロ属	W179
19	1-1区	2778	横鋸	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W193
20	1-1区	2670	馬鋸	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W199
21	2区	147	漆器・椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	W247
22	2区	158	漆器・椀	ブナ科ブナ属	W245
23	2区	197	漆器・椀	ブナ科クリ属クリ	W246
24	1-1区	1255	舟形	スギ科スギ属スギ	W161
25	1-1区	1256	舟形	スギ科スギ属スギ	W161

(5) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) (No.17, 19, 20)

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管(～200 μ m)が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織は概ね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で橋状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州(宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。

(6) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) (No.23)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大直径(～500 μ m)が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小直径が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり(ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

(7) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino) (No.15, 16)

環孔材である。木口では概ね円形で単独の大道管($\sim 270\mu\text{m}$)が1列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している(イニシアル柔組織)。放射組織は1~数列で多数の筋として見られる。柎目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1~3列のもの大部分を占める6~7細胞列のほぼ大きさの様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

(8) トチノキ科トチノキ属トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) (No.21)

散孔材である。木口ではやや小さい道管($\sim 80\mu\text{m}$)が単独かあるいは2~4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数ともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1~3細胞の幅で年輪の一番外側(ターミナル状)に配列する。柎目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている(上下縁辺の1~2列の柔細胞に限られる)。板目では放射組織は単列で大半が高さ $\sim 300\mu\text{m}$ となっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な縞模様(リップルマーク)として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

使用顕微鏡

Nikon DS-Fi1

第8章 総括

第1節 遺跡の変遷

第1項 はじめに

本書では、平成26年度に実施した大柵遺跡の発掘調査成果について説明を加えてきた。第2章でも述べたように、当遺跡は昭和52年の最初の発掘調査以後、その豊富な内容から鳥取県東部域を代表する重要遺跡として位置づけられてきた。しかしながら、西側丘陵裾部の一部を除けば比較的小規模なトレンチ調査が多く、遺跡の中央部付近は沖積平野上に立地する遺跡の常として深度が深いこともあり限定的なデータを得るに留まっていたため、その実態は今一つ明瞭なものではなかったといえるだろう。

そうしたなか今回の調査は、大柵遺跡の範囲のうち西側段丘上(3区)から沖積平野上(2区・1-1区)の地点において、深くかつ比較的広範囲に面的な調査を行った初の調査事例となった。本調査では、弥生時代後期から中世に至るまでの各時期の豊富な遺構・遺物を検出し、極めて多くの成果を挙げる事ができた。なかでも①平安時代前期の屋敷地と祭祀の行われた川の検出(1-1区：4面)、②古墳時代中期の居住域・生産域・祭祀の行われた川の検出(1-1区：5・6面)、③弥生時代後期後葉から終末期の居住域の検出(2区：6面／3区：1面)といった3つの調査成果は、本調査を特徴づける主要なものといえるだろう。本節では、これらの成果を遺跡全体の時期ごとの変遷を示すことで総括することとしたい。

第2項 地層・遺構面の対比

大柵遺跡の大部分は沖積低地上に立地しており、これに相当する地点では複数の地層が複雑に累重することで形成されている。今回の調査は、従来様相が明らかでなかった野坂川流域の平野部に対し、西側の段丘上から沖積平野にかけて横断するトレンチを入れるような調査区配置となっていたため、当該地域における地形環境の変化とそれに伴う人間活動の変遷を考える上できわめて重要な知見を蓄積することが出来た。ただし、各調査区における地層の堆積状況は一様ではなく、現地での地層の対比が困難であったことは本文中でも述べたとおりである。そのため、遺跡の各時期における変遷過程を考える前提として、まず各調査区間における地層の対比を検討、明示することが必要である。

1-1区は平成26年度調査区のうち、最も基本となる層準が多く、沖積作用によって微地形が目まぐるしく変化することから、西側丘陵裾部における地形の変遷をたどる上で鍵となる調査区といえる。そこで、まずは1-1区の中央東西トレンチ付近を中心とした基本的な地層の堆積と地形の形成について再度その概要を述べ、それを基に2区及び3区にかけて東西方向の地層の連続性を検討する。地層の対比にあたっては、調査時の所見に加え、出土遺物の内容や1-1区及び2区で採取した柱状土壌サンプルの層相解析(第7章第2節及び第3節参照)の結果を総合して検討した。

1 1-1区の地層の堆積と地形変遷

確認できた範囲では、その後の地形形成の基盤となる氾濫堆積物が弥生時代中期から後期にかけて

調査区北西側に堆積する(9-4b-8-2b層、第10図①①~①⑧)。その後最上部が離水、土壌化が進行して8-1a層(第10図②②・②③)となり、ここを西岸として7-5b層⇨900流路が堆積することで北が高く南が低いという古墳時代までの基本的な微地形が形成される。この7-5b層は北西部を中心とした一帯に微高地を形成し、その最上部が土壌化することで7-1a層(第10図③③)となる。なお、低地部にあたる調査区南半部では、7-3b層を介して分離できる7-4a層(土壌層、第10図④④)と7-2a層(耕作土層、第10図⑤⑤)が7-1a層に収斂する様子を確認していることから、7-1a層の形成にあたっては一定の時期幅を想定しておく必要がある。その後、南半部を中心として6-3b層(第10図⑥⑥)とした氾濫堆積物が堆積し、これによって南が高く北が低いという地形の逆転が生じることとなり、以後の基本となる微地形がこの段階で形成される。

次に6-3b層を母材として耕作土とみられる6-2a層(第10図⑦⑦)が形成される。6-2a層の上部には、さらに6-1a層(第10図⑧⑧)とした耕作土が形成され、おそらくこの段階において550流路の充填が開始されたものと目される。この550流路の堆積物が肩部付近に堆積したのち、調査区西半の微高地部に5-1a層(耕作土層、第10図⑨⑨)が形成される。その後、4-3b層とした砂が堆積するが、これ以後西側の微高地部を覆うような自然堆積物は極端に減少することから、本段階を最後に西側の丘陵裾部は安定的な環境が形成されたことが窺われる。西側微高地のほぼ全面にあたる4-3b層上面(4-2a層下面)において屋敷地を検出したことも、その証左といえるだろう。

屋敷地の東側を南北方向に流れる15流路は、屋敷地の機能時にも徐々に埋積が進行したものと考えることができ、15流路下層(第12図⑩⑩・⑩⑪)は建物群とはほぼ同時期の9世紀代の遺物を特に多く含む。一方の微高地部は、屋敷地の廃絶後に耕作土層である4-2a層(第10図及び第12図⑩⑩・⑩⑪)が形成される。15流路上層(第12図⑪⑪)は明らかに4-2a層の上部に堆積するものであるが、植物遺体を多く含む沼沢性の堆積物が主体を占めることから、周辺地域一帯で何らかの環境変化が生じた結果、排水不良を起こし徐々に埋没が進行したことが窺われる。この15流路の完全な埋没後、調査区を南西-北東方向に縦断する8溝が掘削されるが、ほどなくこの溝及び地表面を埋没させる粗粒の堆積物が堆積することとなる。その後、この水成堆積物を攪拌した耕作土または客土とみられる4-1a層(第11図及び第12図⑫⑫)が形成されるが、遺存状況は全体的に悪い。

中世段階には、淘汰の良い耕作土層3-1a-3-3a層(第10図~第12図⑬⑬~⑬⑭)が形成され、続いて淘汰の悪い耕作土層2-1a・2-2a層(第10図~第12図⑮⑮・⑮⑯)が形成される。なお、後者の2-1a・2-2a層は3-1a層と比較すると層相が劇的に変化することや、層中より古墳から出土することの多い装飾須恵器子持壺が出土したこと等から、平野の東西に拡がる丘陵部の土などを起源とする造成が行われた可能性も想定できるだろう。この2-1a層は、その後圃場整備によって平坦化され、現在の表層地形がつくられるに至っている。

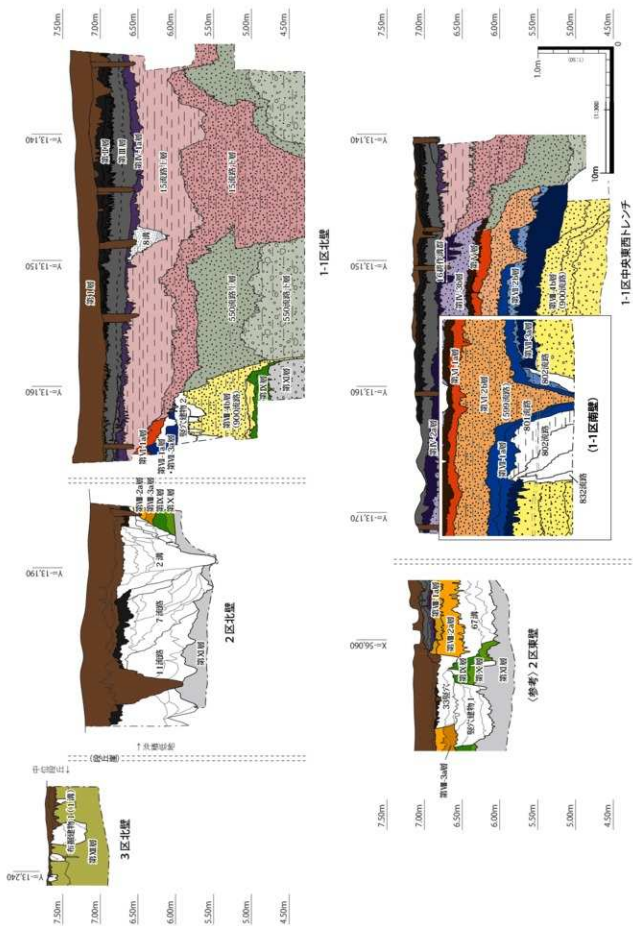
以上のように、1-1区の調査で確認できた基本的な地層の堆積は、900流路→550流路→15流路といたように、基幹となる谷状の流路が徐々に埋積していくことで、平坦化していったことが分かる。こうした流路の埋積は、本調査区一帯では11世紀にほぼ完了していることから、現在の平野部の景観は、ほぼこの段階以後に固定化された可能性がある。

2 各調査区の地層及び遺構面の対比

1-1区の地層の堆積の変遷を前提として、調査区ごとに東西方向の地層の連続性を検討したのも

第80表 大柁遺跡 1-1区～3区地層・遺構面対応表

帰属時期	本報告 基本層序 / 遺構面	3区	2区	1-1区 北半	1-1区 南半
近現代耕作土層	第Ⅰ層	1-1a層	1-1a層	1-1a層	
		1-2a層	1-2a層	1-2a層	
		-	1-3a層	-	
		-	1-4a層 1-5a層	-	
近現代の耕作地	第1面	-	1面	-	
近世耕作土層	第Ⅱ層	-	2-1a層	2-1a層	
		-	2-2a層	2-2a層	
		-	2-3a層	-	
近世の耕作地	第2面	-	2面	1面	
中世耕作土層	第Ⅲ層	-	3-1a層	3-1a層	
		-	3-2a層	3-2a層	
		-	-	3-3a層	
中世の耕作地	第3面	-	-	2面	
11世紀耕作土層	第Ⅳ-1a層	-	4-1a層	4-1a層	
11世紀の耕作地?	第4面	-	-	3面	
10世紀耕作土層	第Ⅳ-2a層	-	4-2a層	4-2a層	
9世紀屋敷地・流路 / 10世紀の耕作地・流路	第5面	-	3面	4面	
平安時代前期水成層	第Ⅳ-3b層	-	-	4-3b層	
奈良時代～平安時代前期耕作土層	第Ⅴ層	-	-	5-1a層	
古墳時代後期～奈良時代耕作土層	第Ⅵ-1a層	-	-	6-1a層	
古墳時代中期末以降水成層	第Ⅵ-2b層	-	-	6-2a層	
古墳時代中期の生産域と居住域?	第6面	-	-	6-3b層	
古墳時代中期土層・耕作土層	第Ⅶ-1a層	-	-	7-1a層	7-2a層
古墳時代中期土層・水成層	第Ⅶ-2a層	-	-	-	(7-3b層)
古墳時代中期後葉～末の居住域と流路	第7面	-	-	6面	
古墳時代中期土層	第Ⅶ-3a層	-	-	7-1a層	7-4a層
古墳時代中期後葉～末の居住域と流路	第8面	-	-	-	7面
古墳時代前期後半の居住域		-	-	6面	-
古墳時代前期前半以降土層	第Ⅷ-1a層	-	5-1a層	-	
古墳時代前期後半の居住域	第9面	-	4面	-	
古墳時代前期前半土層	第Ⅷ-2a層	-	5-2a層	-	
古墳時代前期前半土層	第Ⅷ-3a層	-	6-1a層	-	-
古墳時代前期前半水成層	第Ⅷ-4b層	-	-	7-5b層	
弥生時代終末期土層	第Ⅸ層	-	6-2a層	8-1a層	-
弥生時代終末期の居住域	第10面	-	5面	8面	-
弥生時代後期以前土層	第Ⅹ-1a層	-	7-1a層	-	
弥生時代後期～終末期前半の居住域	第11面	1面	6面	-	
弥生時代後期以前水成層・土層	第Ⅹ-2b層	-	7-2b層	8-2b層	-
	第Ⅹ-3b層	-		8-3b層	
	第Ⅹ-4a層	-		9-1a層	
	第Ⅹ-5b層	-		9-2b層	
	第Ⅹ-6a層	-		9-3a層	
	第Ⅹ-7b層	-	-	9-4b層	-
※中位段丘面(AT以前)	第Ⅺ層	2b層 3b層	-	-	-



第285図 大柵遺跡 1-1区～3区地層対比図

が第80表である。地層の対比にあたっては、調査時の所見に加え、出土遺物の内容や1-1区・2区で採取した柱状土壌サンプルの層相解析(第7章第3節参照)の結果を総合して検討した。

地層の表記については、各調査区で上の層準から順に番号を付与しているため、同じ層番号が複数存在している。そこで、ここでは全体を通じた表現として各層準にローマ数字を用いて層名を付与しなおし、層準の冒頭に「第」を冠して「第Ⅰ層、第Ⅱ層…」のように呼称することで調査段階のものと区別することとした。また、遺構面についても、全ての調査区で同じ遺構面を調査できているわけではないことを考慮し、同様に「第」を冒頭に冠することでこれを区別している。第80表は今次調査の全ての調査区の標準断面と遺構面を総括した対応表であり、第285図が主要断面を用いて調査範囲における地層の対比や連続性を視覚的に捉えるために整理した図である。この表及び図にしたがって各地層と調査を行った遺構面の認識についての概要を述べる。

第Ⅰ層 近現代の耕作土層である。いずれの調査区にも分布している。部分的に2～5層に細分が可能であったが、ほぼ一連のものと捉えられるため、一括して呼称する。昭和50年の圃場整備時に形成されたものとみることができ、水路を中心として遺存状態がきわめて良好であったため、2区においては本層下面を第1面として調査した。

第Ⅱ層 近世の耕作土層である。1-1区・2区に分布する。2～3層に細分できるが、一連のものと捉えられることから、一括して呼称する。本層の下面を第2面として調査した。

第Ⅲ層 中世の耕作土層である。1-1区・2区に広く分布し、層厚も厚い。部分的には3層に細分可能であるが、一連のものと捉えられるため一括して呼称する。本層の下面を第3面として調査した。

第Ⅳ層 平安時代後期以後の耕作土層(第Ⅳ-1a層)、平安時代前期から中期の耕作土層(第Ⅳ-2a層)とその母材となる水成堆積物(第Ⅳ-3b層)の3層に細分できる。第Ⅳ-1a層を明確に確認できたのは1-1区のみで、粗粒の水成堆積物が下位層を含めて攪拌された様相を呈し、全体的に遺存は悪い。本層の下面を第4面として調査した。第Ⅳ-2a層及び第Ⅳ-3b層は3区を除く1-1区・2区に分布する。第Ⅳ-2a層の下面を第5面として調査した。

第Ⅴ層 奈良時代から平安時代前期の耕作土層とみられる。1-1区のみ分布する。下位の第Ⅵ-1a層と層相が近似するが、層界に流路の立ち上がりが取巻くことを断面観察によって確認していることから、明確な時期差をもつ耕作土層と捉えた。

第Ⅵ層 古墳時代中期から奈良時代の耕作土層(第Ⅵ-1a層)と水成層(第Ⅵ-2b層)からなる。やはり1-1区のみ分布しており、以後の微地形の形成に大きく関係する堆積物である。

第Ⅶ層 古墳時代中期の耕作土層及び土壌層(第Ⅶ-1a層)と水成層(第Ⅶ-2b層)からなる。1-1区のみ分布している。第Ⅶ-1a層の上面を第6面として調査した。

第Ⅷ層 古墳時代前期以降の土壌層(第Ⅷ-1a層)、古墳時代前期前半の土壌層(第Ⅷ-2a層・第Ⅷ-3a層)と水成層(第Ⅷ-4b層)からなる。第Ⅷ-1a層～第Ⅷ-3a層を確認できたのは2区のみで、後世の攪乱等により分布範囲も限定される。特に第Ⅷ-1a層は遺物も希薄で帰属時期を推定できる根拠に乏しく、同層下面で古墳時代前期後葉の堅穴を検出していることから第Ⅶ層に相当する可能性もある。第Ⅷ-4b層は1-1区に分布し、北に高く南に低いという微地形を形成することで古墳時代の土地利用を決定づける氾濫堆積物である。2区以西では確認されていないが、層相及び共伴遺物からみて第Ⅷ-2a層(及び第Ⅷ-3a層)の母材となって消失した可能性が想定できる。

第Ⅸ層 弥生時代終末期の土壌層とみられ、1-1区・2区に分布する。1-1区では第Ⅸ層中及び同

層上面で終末期後半の遺構、遺物が目立つ。

第X層 弥生時代後期以前の土壌層(第X-1a・X-4a・X-6a層)とその母材となった水成層(第X-2b・X-3b・X-5b・X-7b層)からなる。2区では第X-1a層下面で弥生時代後期後葉の遺構を複数検出しているが、同層準は1-1区で確認された第X-2b層以下との対比が明確でない。よって、表中の上下関係は先後関係を示すものではない。

第XI層 中位段丘面を構成する大山中部火山灰層である。段丘上に位置する3区でのみ確認された。2区では地表下1.2mを超えても認められないことから、2区と3区の境界付近に段丘崖地形が存在すると想定される。3区では第I層の直下で本層が露出したため、これを第11面として調査した。

以上が各調査区における地層と遺構面の対比を行った結果である。次項ではこの標準断面にしたがって、大柵遺跡における地形環境と人間活動の変遷について、時代の古い順に各遺構面の調査成果を概観していく。

第3項 遺跡の変遷

1 縄文時代～弥生時代中期

今回の調査で縄文時代に遡る遺構は検出されていないが、僅かに古海式併行の突帯土器が出土している。過去の調査においては昭和52年度の発掘調査で縄文時代後晩期の土器が表採されている他、平成27年度の発掘調査でも後期の土器が出土しているため、野坂川流域において人間活動の痕跡は縄文時代後期から認められるが、それが顕著となるのは晩期末である。

鳥取平野における土地環境の変化と集落遺跡の形成活動について検討した高田健一によれば、縄文時代中期末まで内湾環境にあった谷底平野が後期に砂礫の供給が進んで堆積が活発化したことで埋没、低湿地化し、そうした環境変化が人間活動の痕跡が顕著になる背景にあると考えられる(高田2015)。それが栽培植物の受容の契機ともなり、平成23年度の発掘調査で弥生時代前期の水田跡が検出されている(鳥取市教育委員会編2012)ように、自然堤防の後背湿地など適地を選んで鳥取平野でもいち早く水稲耕作が開始されたと想定される。

弥生時代中期の遺構は調査地内で確認されておらず、僅かに中期中葉から後葉の土器が出土しただけである。この時期の生活痕跡は主に西側丘陵裾に広がる段丘上にあるとみられ、昭和52年度・昭和57年度調査で土坑、ピット中から当該期の土器が出土している。なお、今回の調査で出土した注意すべき遺物として、中期末(～後期初頭)に比定される搬入土器(Po569・583など)が挙げられる。いずれも壺で、角閃石を含む胎土から見て河内地域(生駒西麓地域)からの搬入品である(註1)。

2 弥生時代後期～終末期

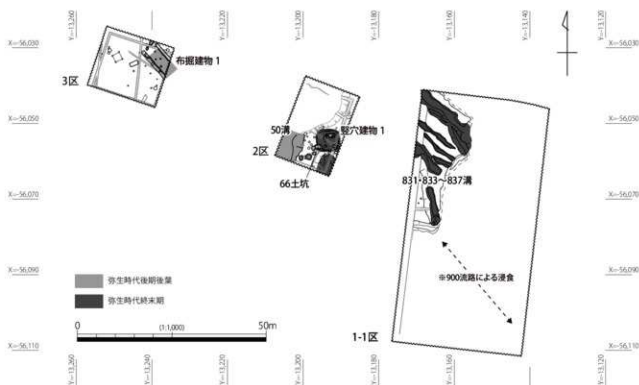
弥生時代後期以降、大柵遺跡全体で人間活動の痕跡が顕著となり、漸次土器の出土量も増えていく。集落の主たる居住域は西側丘陵裾に広がる段丘上にあると想定するが、生活痕跡は沖積平野にも残されている。昭和52年度調査では複数の土坑(IXP-T-1・SK007及びSK008)が確認されている他、後続時期の遺構からも同期の土器が多数出土しており、その基盤となっているのは中小河川によって形成された微高地とみられる。既往調査地のうち、昭和52年度調査の上前田地区では今年度調査3区と同じく中位段丘面(黄褐色ローム層)が確認されているが、高縄手地区は「中州状微高台地」となっており、東側及び南側に基盤となるシルト質細砂層が落ち込む状況が確認されている(鳥取市教育委

員会1978)。今回の調査で後期前葉に帰属する遺構は検出されていないが、1-1区の氾濫堆積物である第X層には後期前葉から後葉の土器が少量ながら含まれている。これらは近傍から河川の氾濫、浸食に伴い運搬されてきたものと考えられ、徐々に沖積平野部へ生活の場を広げている様子が窺える。後期中葉は集落の拡大期と捉えられ、過去の調査でも検出遺構数が増加しており、今回の調査でも段丘上で土坑(3区3土坑)が1基確認されている。

弥生時代後期後葉は大柵遺跡に形成された弥生集落の変遷において画期となる時期である。沖積低地まで居住域が拡大し、昭和52年度調査で竪穴住居が1棟(XP-T-4・SI002)検出されている。今回の調査では段丘上(第11面、3区)で布掘建物1が確認された(第286図)。調査区外に延びているため正確な建物規模は明らかでないが、桁行3間、推定7m以上の長大な建物となろう。同位置で一度建て替えた痕跡が認められ、地形的に見れば沖積低地に向かって張り出した段丘先端部に建物主軸を向けて構築されている。この布掘建物は周辺遺跡の類例と比較しても大型で、管見の限りでは時期的にやや下がるが鳥取市松原田中遺跡例(弥生時代終末期から古墳時代前期、桁行4.7m)、八頭町奈免羅・西の前遺跡例(NN3区SB5126、弥生時代終末期から古墳時代初頭、桁行5.6m)(中村編2012)よりも大きく、大山町茶畑第1遺跡例(掘立柱建物10b、弥生時代終末期以前、桁行8.2m)(西川・湯川・岡野編2004)よりも小さい。集落全体の様相が不明ながら、規模・立地的に見ても特別な建物であった可能性がある。

さらに、この時期から北近畿(～北陸)系土器が土器組成において顕著となる。後期後葉段階に比定される一群としては、中世の11流路内から出土したものが擬凹線文盛行期の有段口縁高坏(Po488)、器台(Po487)、そして竪穴建物1出土壺(Po516)、5溝出土有段口縁高坏(Po553～555)、器台(Po560・561)等が該当しよう。

続く終末期前半の遺構として3区20土坑、2区66土坑などが存在するが、どちらも土坑内に廃棄さ



第286図 大柵遺跡変遷図(弥生時代後期後葉～終末期後半)

れた土器は北近畿系の甕(Po523~529など)や高坏(Po531・532・593~597)、器台(Po533・534)、壺(Po584)が主体を占めている。北近畿(～北陸)系土器の出土は過去の調査でも確認されており、昭和52年調査においては土坑(IXP-T-1・SK001)から弥生時代終末期後半に比定される北近畿(～北陸)系の高坏や器台が出土している。

松井潔が指摘しているように、因幡地域においては、北近畿(～北陸)系の土器が後期中葉から終末期にかけて顕著に見られ、特に後期後葉段階は量的にまとまって出土しているという傾向が看取される(松井1997)。著名な事例としては鳥取市西大路土居遺跡竪穴住居跡・土坑出土資料(谷口・藤本編1993、谷口・前田編1997)が挙げられる他、近年では山間部の集落跡でも確認されている(野田他編2010、中村編前掲)など、当該時期・地域における特徴的な事象として捉えられつつある。搬入地域別に見ると、北陸地域とは西桂見墳丘墓や門上谷1号墓で供献土器が出土するだけでなく、当該期の土器組成に山陰系土器が一定の影響を与えるなど、顕著ではないが双方向の交流が窺われる一方で、日常的な土器(器種)がまとまって出土しながらも在地土器の型式変遷にほとんど影響を与えていない近畿北部地域とは、同地域が地域性を顕在化させる時期である点を考慮すれば一方向的な人の動きを表すものと評価できる(松井前掲)。ただ、近年集落を眼下におさめる丘陵上で確認された里仁1～3号墓には貼石を伴う方形墳丘墓が採用されており、周辺から北近畿系土器が出土したうえ、2号墓では墓壇内に破碎土器供献行為を伴う(鳥取市教育委員会2015)ことは新たな知見として重要である。大柁遺跡の弥生集落はもちろん、因幡地域の弥生集落及び墳墓の形成と展開を探るうえで、北近畿系土器が多量に動くその背景を多角的に検討していく必要がある。

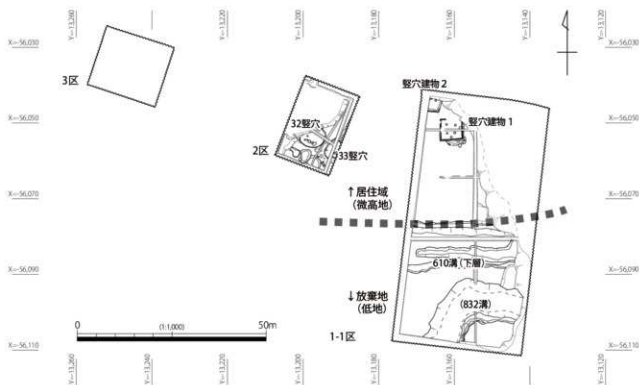
終末期後半には氾濫堆積物によって舌状に張り出した微高地状地形の縁辺まで竪穴建物が構築されるようになる(第10面・2区竪穴建物1)。1-1区では住居等は認められなかったものの、地形の変化点に相当する地点に数条の溝群(第7面831・833~837溝)を検出している。昭和52・57年度の調査でも当該期の竪穴建物(焼失住居)や土坑、溝といった多数の遺構が確認されており、周辺環境の安定と集落の発展・拡大が想定される。

なお、この時期に北近畿(～北陸)系土器はほとんど見られなくなることは先行研究で既に指摘されており(松井前掲)、当集落では僅かだが加飾性複合口縁壺(Po380・490)など畿内系土器が出土している。

3 古墳時代

古墳時代前期前葉には、900流路によって微高地先端部の浸食と大量の氾濫堆積物の供給が繰り返され、氾濫堆積物で同流路が充填されて微高地範囲が東へ拡大する。それによって1-1区以东における以後の地形環境の基礎が出来上がることになり、大柁遺跡の変遷、ひいては沖積低地の地形環境が大きく変化したという意味では大きな画期である。前期前葉から中葉にかけて沖積低地の環境変化は大柁遺跡周辺でも看取される。同じく中規模谷底平野に立地する本高弓ノ木遺跡では有富川の氾濫を制御、利用するための大規模な水利施設が構築されており、下流域の三角州平野中央部に立地する岩吉遺跡では前期前葉以降砂礫の供給・堆積が活発化するため野坂川でも同様の氾濫が起こりやすい環境にあったことが窺える(高田前掲)。

こうした状況が落ち着き、比較的安定した環境下で生活痕跡が明確となるのが古墳時代前期中葉から後葉である(第287図)。第7・8面の1-1区竪穴建物1・2、第9面の2区竪穴32・33竪穴及び土

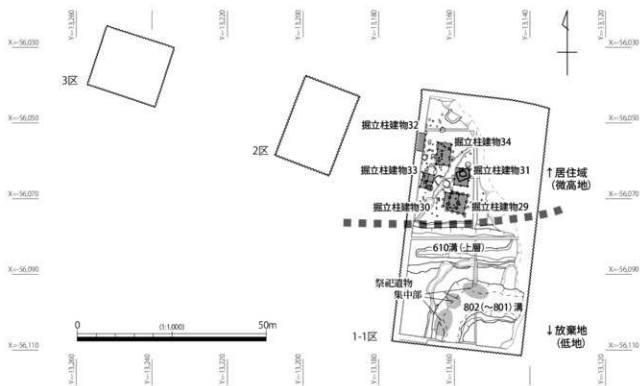


第287図 大柵遺跡変遷図(古墳時代前期後葉～中期前葉)

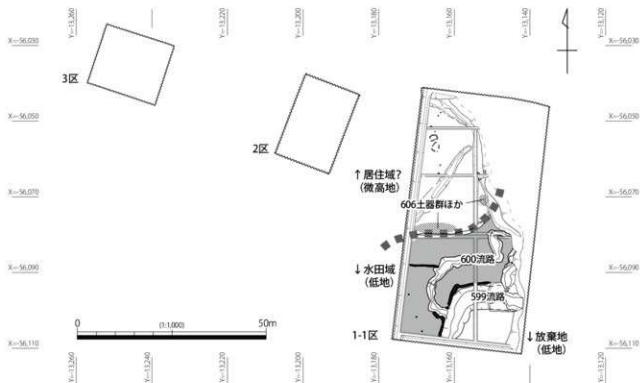
坑群などが構築されており、1-1区周辺に形成された微高地上が居住域として利用されている。北側の居住域と南側の低地部を画する地形の落ち込みと考えられる610溝はこの段階から存在する。610溝については直線的かつ幅が一定しているため、本来的には自然地形であったとしても人為的な関わりによって改変、維持された可能性を想定しておきたい。下層中には前期後葉から中期前葉にかけての土器を多量に含んでおり、出土土器の組成を見ると壺は僅かだが、高坏、小型丸底壺、小型器台が多いという傾向がある。特に北西部肩付付近において完形に近いものが目立ち、空間的に一定のまとまりを有して廃棄されるなど、北側に展開する居住域との関連性が窺える。

古墳時代中期後葉から末にかけては、610溝から南側の景観が大きく変化し、放棄地(後背湿地、第Ⅶ-3a層)を耕作地(水田、第Ⅶ-1a層)として利用するようになる(第288図・第289図)。その間には氾濫堆積物第Ⅶ-2b層の堆積と土壌化の段階を介するが、当該エリアの利用において重要な意味をもつのが低地部を流れる流路である。その始原は832流路で、中期後葉にはそれを踏襲する802流路が存在する。同流路は下層を中心として西側肩部に同段階の土器の他木製祭祀具やウマ頭蓋骨・下顎骨が投棄されており、流路南東側に推定される沼沢地との境界である以上に祭祀の場にもなっている。木製形代やウマを用いた祭祀の様相として背景については、本章後節で詳しく検討を加えておりそちらを参照されたいが、当該時期・地域における集落の展開を考える上で貴重な成果を得ることが出来た。

西側丘陵上には中期の築造と推定されている因幡地域最大の前方後円墳・柵間1号墳が存在し、同一尾根に里仁古墳群・柵間古墳群が展開する。前期後半以降は墳形が方形から円形へと変化していく鳥取平野周辺の古墳群において、里仁古墳群は中期まで連続して方墳が築かれるだけでなく、墳丘の大部分を地山整形によって築造しており、弥生時代の方形墳丘墓の伝統を維持する特異な古墳群と評価されている(中原1985、岩垣・北2010、後川2010)。同古墳群を形成した集団が大柵遺跡の集落を



第288図 大柁遺跡変遷図(古墳時代中期後葉～末)①



第289図 大柁遺跡変遷図(古墳時代中期後葉～末)②

母体にする想定した場合、先に述べたとおり弥生時代後期から終末期の北近畿系土器の多量出土、墓壇内破砕土器供献を伴う墳丘墓の築造などは示唆的である。里仁33号墳では朝鮮半島産と目される梯形鋳造鉄斧が出土しているが、そうした舶載鉄器の流通や獲得には中央政権の介入あるいは地域の中小勢力がもつ独自の交流網を背景とする可能性もある(花田・阪口2012)。山陰地域でも最古例に属

す導入期の移動式竈(第152図CP6)の出土や、最終的に祭祀に供されてはいるが馬匹の導入とともに外来文物の獲得を可能とした首長の存在が想起される。

古墳時代後期以降の状況は不明確であるが、550流路が微高地縁辺部を侵食しながら北流するようになり、再び沖積低地で河川活動が活発となるようである。そうした状態は出土遺物から見て8世紀頃までは継続した可能性が高い。

4 古代

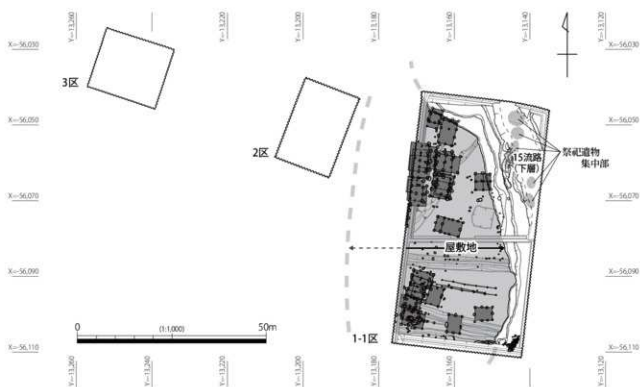
(1) 奈良時代～平安時代前期

古代の大橋遺跡の様相については、平成27年度に行った隣接調査区(1-2区～1-4区)で特に重要な成果が得られており、その検討結果を踏まえた上で改めて評価、総括する必要がある。よって、ここでは今回の調査成果に依拠した現時点での評価を述べておく。

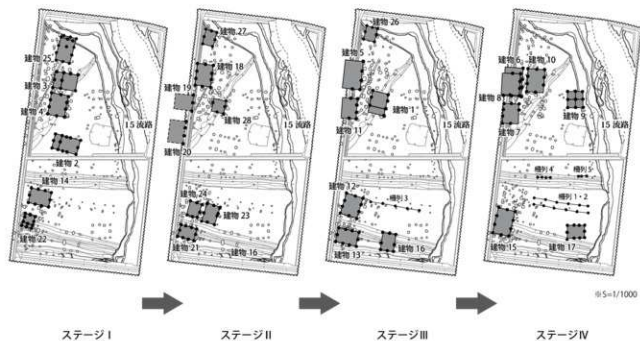
奈良時代において、大橋遺跡周辺の最大の変化は野坂川流域一帯に高庭荘が点定されたことである。高庭荘成立は天平勝宝8(756)年とされ、東大寺野古使僧慶俊らが国司と在地の豪族国造難磐の協力を得て占定した勅施入地に発する(第81表)。その地積は当初67町9反余で、成立後ほどなく負物として売却された国造難磐妻子及び壘田長国造勝磐の壘田が加わり荘園面積は73町8反余に増加した。その開発は順調に進まず、東大寺三綱は801年(延暦20)に55町1反余を代価4000束で参議藤原縄主に、803年には12町8反余を代価1000束で因幡国司藤原藤嗣に売却している(岩永1978)。その後、東大寺は承和年間、延喜年間に寺田の返還運動を起こしているが、いずれも成功しなかった。ただ、東大寺に負物として売却された勝磐壘田は大部分が失われることなく10世紀中頃まで高庭荘荘地として存続し、寺家に益したようである(岩永前掲、丸山1993)。

第81表 高庭荘関連年表

年代	史料(東大寺文書)に見られる主な出来事	大橋遺跡の変遷	
8世紀	天平勝宝7(755)年	赤鳥取平野西部地域に条里制施行の記載(東大寺館因幡国高庭庄坪付注進状案)	■ 水田? (第VI-1a層・第V層)
	天平勝宝8(756)年	僧慶俊ほか野古使一行が因幡下向、国司林建佐比物等とともに田地を点定【高庭荘成立】	
	天平神護元(766)年	国造難磐妻子、壘田長国造勝磐は東大寺に負物として壘田計8反216歩を売却	
	宝亀4(773)年	東大寺田としての記載田地2町4反余(因幡国司領)、開発進まず	
9世紀	延暦20(801)年	東大寺、式家参議春宮坊大夫藤原縄主へ庄内の田地55町1反39歩を反当福8束で売却	▲ 屋敷地 (第5面: 独立柱建物群)
	延暦22(803)年	東大寺、因幡国司因幡四位上藤原朝臣藤嗣へ庄内の田地12町8反180歩を反当福8束で売却	
	承和5(838)年	東大寺第21代別当に大法師印明が就任、荒田復田・寺地恢復の運動を起こし、藤原縄主・同藤嗣への売却寺田を官符により返還せしめんとすることが成功せず	
	昌泰3(900)年	東大寺、因幡へ寺使を遣わし寺田を撤去留置せしめんとするが、藤原縄主買得田55町1反39歩は藤原有実に割せられており、寺家へ返納させることに失敗	
10世紀	延喜2(902)年	東大寺別当智愔、高庭庄留置人藤原有実家並びに紀高子に課を送り、寺田の返還を求める	▲ 高 (第5面: 第IV-2a層)
	延喜13(913)年	藤原有実、寺田返納の要求に対し、婁子内親王家より買得の公驗ありと返納を拒む	
	長徳4(998)年	諸国庄家田地目録所載44廻中高庭庄を含む15庄は悉く荒廢とせられる(東大寺文書)	
11世紀	長保6(1004)年	東大寺、僧信願を高庭庄別当に任ずるとともに、同庄は公直により荒廢すとして因勢を加え荒廢田を開かんことを請う	



第290図 大柵遺跡変遷図(平安時代前期)



第291図 平安時代前期建物群変遷表

今回の調査で確認された奈良時代の遺構としては古墳時代後期から継続する550流路があり、同流路の西側には耕作地(第VI-1 a層)が広がっていた可能性が高い。550流路がほぼ埋没した後は耕作地(第V層)が同流路埋土上層を取り込むかたちで東へ拡大したようである。今回の調査地から約300m 南西で行われた昭和52年度調査ではトレンチⅤP-T5・T7及びトレンチⅩR-T1でそれぞれ南側、東側に下降する「ガマクソ」(泥炭層)(註2)が確認されており、その堆積が奈良時代以降に著しく発

達する現象を高庭荘成立に伴う当地の土木・灌漑工事による影響と想定した(鳥取市教育委員会1978)。沖積低地部における一連の開発行為が周辺の地形環境に与えた影響は当然想定され得るが、今回の調査ではその想定を追認する成果は得られていない。氾濫堆積物である第Ⅳ-3b層の堆積時期は同層を母材とする耕作土(第Ⅳ-2a層)の形成年代及び同層下面で検出した掘立柱建物群の構築年代から推定すれば概ね9世紀以前であろう。第Ⅵ-1a層及び第Ⅴ層自体が氾濫堆積物を母材としており、第Ⅴ層はその後も氾濫堆積物である第Ⅳ-3b層によって被覆されるなど、調査区周辺に限れば高庭荘成立前後の時点で耕作地は不安定な環境下にあったことが推察される。

耕作地であった今回調査地周辺も9世紀前半頃には屋敷地として利用されるようになる(第290図)。古代に帰属する掘立柱建物は1-1区微高地部分だけでも28棟を数える。掘立柱建物群は遺構の重複関係及び建物主軸から検討した結果、建て替えも含めれば少なくとも4段階の変遷を経ていると考えられ、10世紀段階には再び耕作地となるため屋敷地としての利用期間は9世紀の範疇で捉えられる(第291図)。建物規模・構造は身舎面積約20~30mを測る2間×3間の側柱建物が主体で、官衙的な規模・構造のものはない。さらに近接する2区では後世の削平を考慮しても建物の柱穴は確認されていないので、建物群が展開するエリアは東西広範囲に及ぶ可能性は低い。ただ、銅製・石製の腰帯金具、施釉陶器、そして墨書土器や木簡といった文字資料が出土しているため、当該時期・地域における有力者の屋敷地であった可能性はある。

屋敷地としての機能時には15流路に生活残滓も多数廃棄されている他、同流路を載所として継続的に律令祭祀も執り行なわれており、多量の木製祭祀具が出土している。注意をすべきは文字資料で、高庭荘成立期の8世紀後半段階から田+○の組み合わせの墨書土器が見られる。「田」を基軸とする墨書が9世紀を通して継続的に認められることは重要で、高庭荘あるいは高草郡を表す「高」の文字とともに高庭荘比定地である当地域の歴史的背景を表すものとして評価したい。特に「田伏」は見張りなどをすするために田の中に作った仮小屋(番小屋)の意もあり、示唆的である。9世紀頃に比定される屋敷地は10世紀以降に他所へ移動したと想定されるが、高庭荘との関連を積極的に評価した場合、荘経営に関わる施設(荘所)としての性格も考えられよう。

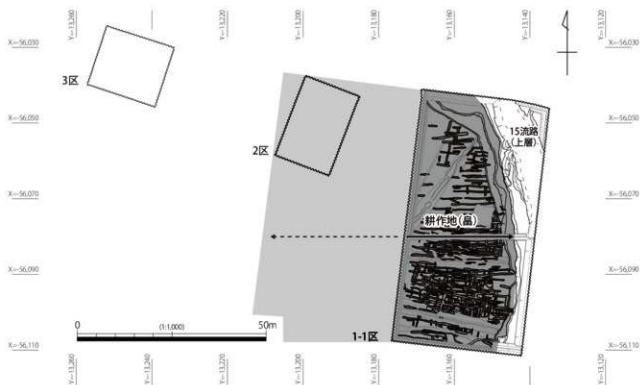
(2)平安時代中期

1-1区東側を流れる15流路は引き続き祭祀の場としても利用されている。木製祭祀具は人形と刀形のみで出土数は調査範囲においては前段階(15流路下層)に比して少ない印象を受けるが、隣接する1-2区で多数出土しており、その出土傾向も踏まえて評価することが必要である。

調査地内で建物跡は確認できておらず(第292図)、当該期の屋敷地は西側の段丘上に移動した可能性を想定しておきたい(註3)。15流路以西は畠として利用されるがそれは第Ⅳ-2a層及び15流路上層・18護岸出土土器から見て10世紀~11世紀中葉までと推測でき、その後11世紀後葉には平坦地造成(第7章第3節第4項参照)を行うとともに新たに水路(8溝)を開削して水田が営まれる。

5 中世

中世段階も引き続き耕作地(第Ⅲ層)として利用されている。この時期までに調査地東側を流れていた流路(1-1区15流路)は埋没しており、代わりに西側の段丘崖~沖積低地の境界付近を走行する別の流路(2区11流路→7流路)が形成される。特に11流路は堆積構造の検討においても洪水堆積が確認されており(第7章第2節参照)、流路充填堆積物の下位層準にはDKPの礫層を多分に含んでいる。



第292図 大橋遺跡変遷図(平安時代中期)

この流路は遅くとも15世紀頃には形成されており、弥生時代後期から古墳時代前期の居住域となった微高地部を浸食しているため当該期の土器を多量に含む。1-1区第3面で検出された11・543溝及び第2面で検出された6溝は坪境溝とその脇に延びる道路状遺構の可能性がある。

6 近世以降

2区で中世段階の7流路を踏襲する位置に水路(6溝→2溝)が構築され、その東側は1-1区にかけて確認された水田が営まれていた。第2面で確認された近世水田の南北方向畦畔は11世紀の水路(1-1区8溝)と主軸方向が近似する。現在の市道に沿って敷設された水路は先に坪境溝及び道路の可能性を推測した遺構群と並行し、同様の道路及び水路は圃場整備以前の米軍写真にも記録されている。現在に繋がる耕地区画の基幹は古代末に形成され、それを踏襲している可能性が高く、大橋地域の土地利用の変遷を明らかにする重要な所見を得たといえよう。(高尾・正岡)

註

- (1)公益財団法人大阪府文化財センター三好孝一氏から御教示いただいた。
- (2)トレンチ位置からすれば、「ガマクソ」と判断された堆積は、植物遺体や木片を多く含む有機質泥を充填堆積物とする15流路の上流部に当たる可能性もあるだろう。
- (3)鳥取市教育委員会が行った試掘調査において、3区西側に設定した第4トレンチ内で10~11世紀代の土器器供具を多数含む溝(SD-01)が確認されている(鳥取市教育委員会編2016)。

第2節 1-1区における祭祀の様相とその位置づけ

第1項 はじめに

第4章において詳報したように、1-1区内を流下する複数の流路からは、祭祀関連の遺物が顕著に確認された。出土地点の性格や遺物自体の想定され得る機能、そして組成内容等から勘案すれば、これらは所謂「水辺の祭祀(註1)」を執行する清浄な空間として、その役割を一定程度果たしていたと推測される。そしてその証左は、古墳時代から中世に至るまで、断続的に視認することが出来る。

特に、古墳時代中期や平安時代前期においては、流路とそれに近接する遺構群との同時代性、及び遺物の一括性も明確に認められるため、遺物と遺構の両面から、当時の祭祀場の様子を検討し得る状態にある。そうした入念な作業を通じ、一遺跡像としての「祭祀」を追究することで、地域史における本遺跡の位置付け、ひいては当時の社会体制や構造といった高次元の理解にも繋がる。

本節では、「祭祀」の視点から遺跡の特質を見極めるための基礎的作業として、形分類を中心に、1-1区における祭祀関連の成果を改めて簡便に整理する。次に、掘立柱建物・溝・流路・空地等で構成される一定空間の存在が明らかとなった古墳時代中期後半(5世紀後半)の状況に着目し、同時期の祭祀遺跡の空間利用事例を導きながら、祭祀遺跡の範疇における本遺跡の位置付けを検討する。

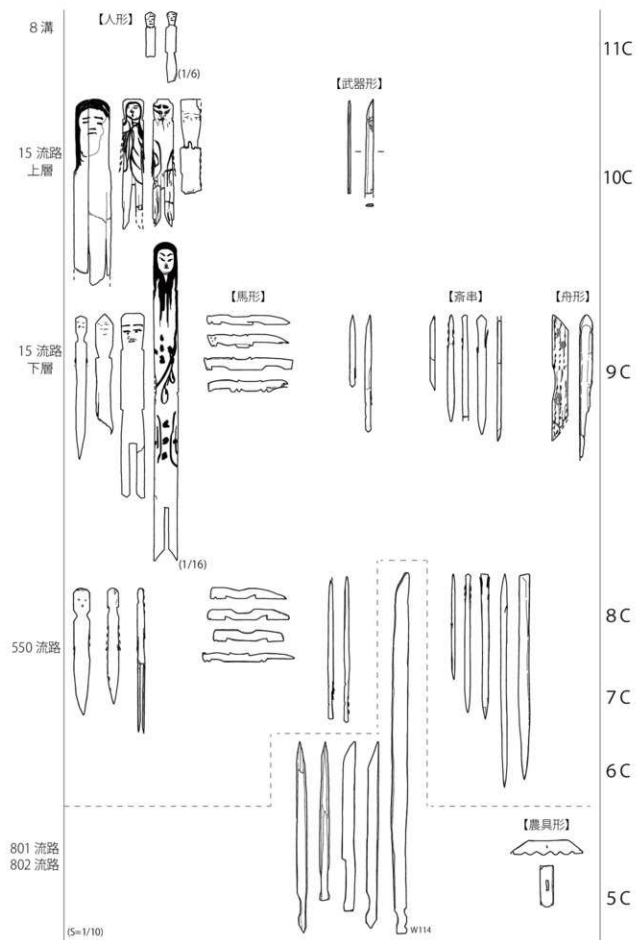
結論から先に述べれば、本遺跡における5世紀後半の祭祀の実態は、複数の要素が互いに連関する中で成立した一遺跡像となる。具体的には、例えば周辺遺跡との関連性からすると、本遺跡背後の橋間1号墳に代表される当地域最有力首長層主導の公的祭祀の一部と評価出来る。ただし、その開放的空間性からすれば、他地域の王権勢力クラスの祭祀遺跡における「秘儀の様相(辰巳2015)」とは明らかに区分される。さらには、国家権力に直結し、画一的性格を帯びた公的祭祀の一端と評価出来る一方で、遺構や遺物の実体からすれば、より在地に根ざした祭祀の一様相と捉えることも可能である。

「祭祀」という一事象に対し、このような二律背反の評価がなされる要因としては、その検討過程における様々な視点の導入が反映されたためと考える。つまり、古墳時代研究の評価に一般的な、上位(権力)からの見方のみならず、下位(地域性)からの見方といった異なる視点を用いることによる差異である。しかしその根底では、各々が本遺跡の祭祀の在り方を的確に表現している。今後は、各局面に対する評価への妥当性を検討しつつ、より具体的な遺跡像へと結びつける作業が求められる。

第2項 1-1区における形分類の変遷

1-1区における祭祀の初現は、古墳時代中期後半に比定される802流路とともにある。流路内出土の形は武器形(刀形・剣形・鏝形)と農具形に偏向し(第293図)、それに槽4点が伴う。後続する流路の祭祀系遺物(註2)の組成とは、一線を画す内容である。同じ5世紀代の三重県大A遺跡においても、刀形と鏝形が古墳時代中期の祭祀具組成要素として挙げられており(穂積編2002)、武器形が主体の祭祀具組成は、この時期に普遍的なものとして評価して良からう。802流路埋没直後の段階と評価する801流路からは、長さ95cm超の刀形(W114)が出土した。802流路出土刀形は軒並み40~50cm台に収斂すること、また柄部の加工が両流路出土刀形の間で異なることから、両資料群の関連性は低いと考える。現時点の理解では、古墳時代中期における刀形の形態変異幅の中で捉えておく。

出土遺物や遺構の理解からは、その後古墳時代後期から律令期前半頃にかけて、遺跡内での目立っ



第293図 大柵遺跡1-1区出土形代の変遷

た祭祀行為は認められない。木製形代を伴う祭祀の痕跡が再見出来るのは、8世紀後半である。550流路の形代には、前代より続く武器形に加え、新たに人形・馬形・齋串がある。武器形は前代のそれとは形状や把部の様相が異なり、継続性は看取されない。人形は全て大平分類のI類型で、特にIc類が主体を成す。Ic類と共伴したIa類、Ib類が「一本足」であるのは特筆すべきで、この人形は山陰、北近畿、北陸と日本海側に集中する。その中でも当該期の一本足人形は最古の部類に属するため、山陰東部がその故地と考えられる(大平2016)。器種内では客体的存在の一本足人形だが、後段の15流路でも出土しており、当地域では通有の人形型式と見做せる。馬形は裸馬がやや優占するが、飾馬も一定量存在する。齋串は複数の類型が混在した状態である。形代に関するこれらの傾向は、鳥取市常松菅田遺跡Ⅱ-1期(駒井・水村2016)と概ね調和的であるが、常松菅田遺跡では一本足人形は皆無であり、差異も見受けられる。郡毎による製作体系の違い等が、その背景にはあろうか。

15流路(9世紀代)からは、人形・馬形・齋串といった主体要素に加え、舟形も現れる。人形は大平分類Ⅲc類が登場し、また資料群全体の大型化も進む。さらには墨書による写実的人物像も見受けられるようになり、切り込みによる顔表現のみであった8世紀代の形代との違いを見出せる。また、甲から爪先まで詳細に足を表現するものもあり、従来説よりもその出現が遡る可能性も出てきた。

1-1区出土の人形は、祭祀具として機能した後の取り扱いについても、示唆的な資料である。具体的に述べれば、各個体の胴や脚、また首から肩にかけて、鋭利な刃物で長軸方向に対し斜めに切り込みを入れ、そこから折り取って分割している。その可能性があると判断し得る資料も含めると、15流路下層出土人形の半数近くが該当する。資料の木取りからすれば、埋没中の土圧等の外的要因によって上述の方向に折損するとは考えにくく、かつ破断面の状況も考慮すると、この現象を誘発する要因は自然ではなく、(使用後の)意図的な折り取りにあると解釈するのが合理的である。

従来形代に対しては、完形品の各種属性及びその組み合わせを基にした分類と、変遷の研究が主流を成し、製作から使用、廃棄に至る謂わば形代の「ライフストーリー」を念頭においた研究は低調であった。しかし近年、年輪年代学的手法を応用し、製作途中の副産物等の重要性が指摘され(浦・星野2016)、製作工程を意識した包括的検討がようやく実践されるようになった。本遺跡で認知し得た使用後の状況も、この種の研究に関連するものと位置づけられ、同様な視点の導入によって、山形県依田遺跡(野尻編1984)例以上に、破所の具体的解明に寄与し得る可能性を秘めていると考える。

10世紀に至り15流路が埋積を続ける中で、形代は人形がほぼ唯一の存在となる。前代に比してその数は僅少で、多くは墨書による顔表現を伴う。大型の人形は、肩部の特徴等が鳥取市岩吉遺跡SD-X出土人形(山田他編1997)に類似する。馬形と齋串は姿を消す。形代の減少傾向は11世紀(8溝)も続き、この段階の人形には、それまで素材として未採用のカヤが使われる。さらに、時代が下るにつれ大型化していた人形が急激にミニチュア化する等、前代の形代との関連性は一段と希薄となる。

このように1-1区出土形代類の変遷を振り返ると、3つの画期に大別することが出来る。第一には古墳時代中期後半の「武器形祭祀」の段階、第二には550流路から15流路にかけての「律令祭祀」の影響を受けていた段階、そして木製形代による「祭祀の終焉」を迎える11世紀の第三段階である。近年、因幡地域では大規模発掘調査が相次ぎ、既知の岩吉遺跡や鳥取市菅田傍ボケ崎遺跡に加え、同青谷横木遺跡等の古代山陰道との関連性が窺われる(山根他2014)遺跡の発見が相次いでいる。定量的検討を可能とする資料群の確保が望める今、これらの特色ある祭祀遺跡との共時的な比較検討の深化を通じ、地域一帯の祭祀とその中における大柁遺跡の意義が問われよう。

第3項 古墳時代中期における祭祀

前項で明らかとした祭祀の時期系統のうち、その初期段階に位置づけた古墳時代中期の祭祀について取り上げ、当該期における大柁遺跡の祭祀の実態化を試みる。その手段として、古墳時代中期に水辺の祭祀を執り行ったと評価されている7遺跡との比較検討を行う。ここでは遺跡の個別説明を特段行わないが、各遺跡とも流路や溝、井泉等を通じて水辺に隣接し、また大規模な導水施設をも援用した様々な祭祀行為の痕跡を有する。いずれも、各地を代表する古墳時代の祭祀遺跡と言える。

1 遺物

祭祀遺跡と一般的に認知される遺跡においても、当然ながら遺跡内には集落や居館、また墓域等、祭祀とは隔離されるべき遺構を伴う場合が多く、大規模遺跡ほどその傾向は強い。古墳時代中期の場合においても、祭祀系遺物のみが単独で出土している遺跡はむしろ稀な例である。本項では、各遺跡において祭祀行為に関連する可能性が高いと報告された遺構を対象を絞り、そこより出土した遺物の中から祭祀系遺物を列挙して、遺跡毎にその有無を表した(第82表)。評価の主体となる大柁遺跡の遺物出土傾向から、今回は木器に比重を置いた比較構成とした。土器は供献土器を中心に、韓式系土器や製塩土器を挙げた。祭祀に伴う石器は多くないが、滑石製模造品は5世紀の祭祀遺跡から多出する(亀井1966)ため取り上げた。獣骨は犠牲獣として、またモモ核とヒョウタンも各古文獻から祭祀に供す対象と推察され(大山1994)、かつ実際の出土事例も多いため、項目として掲げた。

木器 出土が顕著なのは、武具・武器形である。奈良県南郷大東遺跡、三重県城之越遺跡、群馬県三ツ寺I遺跡といった各地の主要拠点遺跡では、卓越した量のみならず、精緻な作りかつ装飾性の高い漆塗り刀装具や盾が出土しており、質的にも充実した関連遺物が目立つ。有機織具や槽・盤類、また掘立柱建物に関する建築部材は、多くの祭祀遺跡間で共通した器種である。また、人物埴輪に見られる姿から、高位人物の所持品と推察出来る琴は、出土する遺跡とそうでない遺跡とに分かれた。

土器 高坏や小型丸底壺、また手握ね土器は、全ての対象遺跡から出土した。興味深いのは、韓式系土器の出土遺跡と製塩土器のそれとがほとんど合致していない点で、前者の事例は拠点クラスの遺跡に限られる。当該期の塩の生産は、馬の飼育における必要性から行われた可能性があるが(菱田2007等)、大柁遺跡では飼育が盛んではない状況が想定されるとすれば(次節参照)、802流路段階に製塩土器が伴わないことは、この指摘と矛盾しない結果と言える。

石器 滑石製の武器形や玉類については、大柁遺跡と奈良県南郷寺遺跡以外からはいずれも確認された。勾玉と刀形が伴件し、さらに井泉と河が所在する遺跡においては、この事実関係を「記」・「紀」のアマテラスとササノオの「天の安の河の誓約(ウケヒ)」の場面とリンクさせる考えが提唱さ

第82表 古墳時代中期の祭祀遺跡から出土した主な祭祀系遺物

	木器					土器		石器	動植物遺存体		
	武具・武器形	機織具	槽・盤類	建築部材	漆器	高坏・小型丸底壺・手握ね土器等	韓式系土器・初期須器	製塩土器	滑石製模造品	獣骨(ウマ等)	モモ・ヒョウタン
大柁遺跡(1-1区)(鳥取県鳥取市)											
南郷大東遺跡(奈良県御所市)											
南紀寺遺跡(奈良県奈良市)											
阪原阪戸遺跡(奈良県奈良市)											
六大人遺跡(三重県津市)											?
城之越遺跡(三重県伊賀市)									(朝木製)		?
新田遺跡(Ⅱ)(鳥取県松江市)											
三ツ寺I遺跡(群馬県高崎市)											

れ、後段のヒョウタンにも演繹的に適用されている(坂本1991、穂積1998・1999・2002等)。着実に積み上げた考古学的事実から、帰納論的に『記』・『紀』神話へアプローチした学際研究の好例である。

動物遺存体 ウマ等の動物遺存体については、南郷遺跡群や三ツ寺Ⅰ遺跡といった首長クラスの居館・祭殿が確認されている遺跡に出土例がある。そのような中で、頭部のみが切断され祭祀に用いられている大柵遺跡出土例は、やや希有なケースである。ウマの出土状況とその解釈については、本章第3節において詳細に論じており、参照されたい。

2 遺構

祭祀遺跡を構成する遺構も種々あるが、ここでは複数の水辺の祭祀遺跡において検出された典型的遺構を取り上げ、その有無を一覧にまとめた(第83表)。当然ながら、水辺の祭祀を執り行う大前提として、流路や溝といった水をたたえる場については、いずれの遺跡でも確認出来る。紙面の都合上、古墳時代の水辺祭祀形態において重要な「湧水施設(湧水点祭祀)」と「導水施設(流水祭祀)」(坂本1996、穂積1994等)の詳細についてここでは論じないが、大規模な木柱や石組等を伴う導水施設は、南郷大東遺跡や六六A遺跡等、概して大首長層クラスと推定されている遺跡に顕著である(第294図)。この点を積極的に捉えれば、古墳時代有力首長層の水辺の祭祀場は、7世紀以降の宮都における園地遺構(「庭」)の原形に相当すると評価される向きもある(例えば本中1998)。

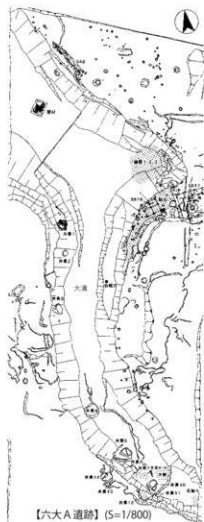
上述の遺跡例ほど規模は大きくないとされる鳥根県前田遺跡では、流路の岸に施された貼石遺構付近から勾玉や琴、刀形等が出土しており、祭祀場自体を検出したと評価出来る。比較的同規模の本遺跡802流路においても、その東端付近に10~20cm大の亜角礫が20個程度並び、直下に架構材が走る「施設」的な痕跡がある(写真図版69-3参照)。しかし検出範囲が狭いうえ、祭祀系遺物の集中地点から10m程度の距離を置くことから、その性格は明瞭ではなく、評価も定まっていない。

大型掘立柱建物(南郷遺跡群(南郷安田遺跡)や城之越遺跡等で確認され、この特殊な建物と井泉をもって、各地域を掌握した大首長層との関連(例えば南郷遺跡群と葛城氏)が示唆されている(青柳2003b)。附属施設や周辺部の様相から、その居住性は低く見積もられ、いずれも祭祀用の建物「高殿(祭殿)」として位置づけられている(穂積1998)。ただし、三ツ寺Ⅰ遺跡の四面庇付建物については、首長居館と祭祀施設兼用のと評価もある(若狭2007)。城之越遺跡では、大溝祭祀空間である広場と建物の主軸が揃う等、祭祀場を取り巻く広大な景観の復元が成されている(中浦編1998等;第294図)。

大柵遺跡にはこれら大型建物や井泉は見当たらず、802流路機能段階には、3間×3間の側柱建物等が伴うのみである。建物群付近からは祭祀系遺物も確認されていないことから、これらの建物は、調査区北側微高地上に想定される「居住域」に関する施設(倉庫群か)と考えるべきであろう。大型建物と井泉という特殊遺構の欠如からすれば、大柵遺跡の祭祀の様相を「一般集落の祭祀(穂積2004)」と捉えることに、さほど抵抗感はない状況にある。

第83表 古墳時代中期の祭祀遺跡で検出した主な遺構

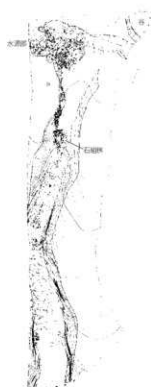
	流路・溝	井泉・湧水施設	導水施設	貼石・石組遺構	大型掘立柱建物	方形区画 (柵列含む)	掘立柱建物
大柵遺跡(1-1区)							
南郷大東遺跡					(南郷遺跡群)		
南紀寺遺跡							
飯原飯戸遺跡							
六六A遺跡							
城之越遺跡							
前田遺跡(第Ⅱ調査区)							
三ツ寺Ⅰ遺跡							



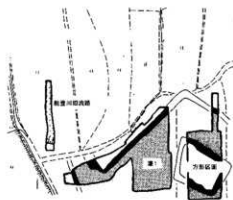
【大A遺跡】(S=1/800)



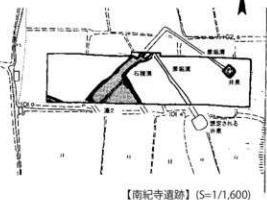
【城之越遺跡】(S=1/1,600)



【版原版戸遺跡】(S=1/800)



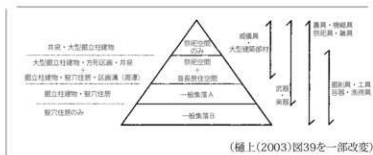
【南郷大東遺跡】(S=1/800)



【南紀寺遺跡】(S=1/1,600)



(各国は各遺跡報告書からの抜粋及び一部変更)



第294図 各地の祭祀遺跡の様相及び出土木製品の組成と集落の階層性モデル

第4項 まとめと問題提起

本節では、1-1区から出土した形代類を用いて、まず遺跡内における祭祀の様相を概観した。その在り方は、従来知られていた各画期の姿に基本的に沿うものであった。その中で、一本足の人形の存在や意図的破砕の可能性等、今後の祭祀研究の深化に貢献し得る項目も新たに指摘出来た。

次に、古墳時代の祭祀について評価するため、主に5世紀後半の祭祀遺跡を比較対象とし、本遺跡との差異や類似性について検討した。大局の見地からは、水辺祭祀の盛行期(菱田2007)に存在した本遺跡の祭祀空間の様相は、当該期に普遍的な祭祀の基本構造から逸脱するものではなかった。詳述すれば、各地の大首長層クラスの祭祀遺跡に比して、祭祀関連遺構や対外的物証の内容が総じて貧弱な状況にあることから、本遺跡における当該期の祭祀は、在来の伝統色の濃い「集落内祭祀」の範疇で捉えられる。しかしその一方で、湖山池周辺最大級の柵間1号墳を背後に擁し、その勢力下にある集落で施された「公的祭祀」の一端と評価することも可能である。つまり、本遺跡における古墳時代の祭祀は、この「世俗性」と「管理性」の二面性の保持自体に、その本質を見出すことが出来る。

敢えて集落の階層性を示したモデルに当てはめるならば(第294図右下)、本遺跡は「一般集落A」とその上位の「祭祀空間+首長居住空間」の両面性を見出している状況と評価する。これは、「…祭祀空間+首長居住空間のなかの下部レベルと一般集落Aでの祭祀が中小首長の祭祀…に対応する(樋上2003:158頁)」という祭祀の重層性の捉え方と符号する。ただし、「因幡地域最有力首長」と「中小首長」とを同列に扱えるのかについては、今後の検討材料となる。また実際には、祭祀遺跡はこのモデルに設定された4階層で捉えきれないほど単純化し難く、本遺跡のように複数階層を縦断する例もある。遺跡の個別具体的要素(=個性)を軽視し、祭祀遺跡としての斉一性に過度に陥らないためにも、各遺跡の適切な評価と、祭祀遺跡間の綿密な比較検討を基にした階層性モデルが求められる。

古墳時代中期とは、当時の王権と地方的祭祀権を掌握する有力首長との主従関係を基本とした、統一的祭祀体系(岡田1980)の萌芽期と捉えることが可能である。この概念は、あくまで上位(権力)からの一元的立場に基づいている。しかし本節で示してきたとおり、祭祀の包括的理解のためには、その対極を成す下位(地域性)からのボトムアップ的視点を導入することも有効である。このように、一つの事象を多角的に捉える取り組みによって、祭祀に係る地域性や遺跡の評価(遺跡像)を、より明確に読み解くことへと近づこう。本遺跡に置換すれば、湖山池南岸域や高草郡、また鳥取平野や因幡国といった考究単位が想定される。遺跡の価値を地域史の中に適切に意義づけるという目標に向かっては、当時の政治・社会構造等、従来より古墳時代研究の得意としてきた上位理論からの帰納法的手法と共に、個々の存在を一義的に捉えようとする問題意識に根ざした下位構造からの試みも戦略的に併用することで、この多元的評価の妥当性を、真摯に検証することが出来るかと考える。(水村)

註

- (1)ここでいう「水辺の祭祀」とは、「湧水もしくは流水の影響を受ける場やその周辺空間で執行された祭祀」としておく。祭祀遺跡の定義は、大平(2003)及び穂積(2008・2013)による。
- (2)「祭祀系遺物」とは、「祭祀に用いられた遺物」のみを指すのではなく、祭祀場を構成した建物に用いられた可能性のある建築部材等、間接的関与の遺物も含む。穂積(2009)のいう「祭祀に供せられる物品群」もしくは「祭祀関連物品群」と同義に扱う。なお、古墳時代には金属器も祭祀具として多々用いられているが、今回の検討対象遺跡では祭祀関連の金属器が出土していない遺跡が多いため、考慮していない。

第3節 鳥取県域におけるウマの導入について

－大柵遺跡・長瀬高浜古墳群のウマ出土例から－

第1項 はじめに

1-1区6面の802流路から出土したウマの頭蓋骨と下顎骨(以下、大柵資料と呼称する)は、これまで鳥取県内では長瀬高浜古墳群に伴う資料によってのみ直接的に窺うことの出来た、古墳時代のウマの在り方について、新たな知見を加えるものである(第84表)。大柵資料は、当地域におけるウマの導入時期を考える上での重要性に加え、集落遺跡からの出土事例である点が特筆されよう。

本稿は大柵遺跡と長瀬高浜古墳群のウマ出土例について、その出土状況や特徴を整理することに加え、古墳時代のウマに関する先行研究と他地域の出土事例を踏まえた評価を行い、当地域へのウマの導入について若干の考察を加えようとするものである。

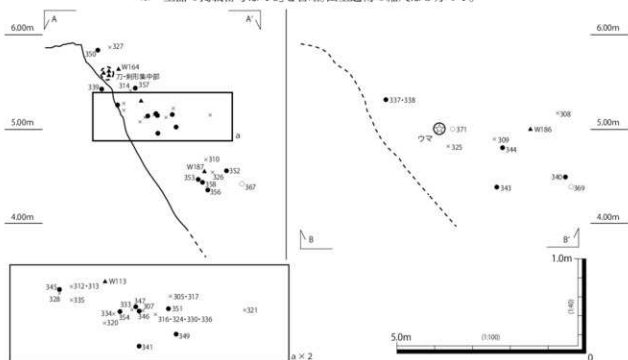
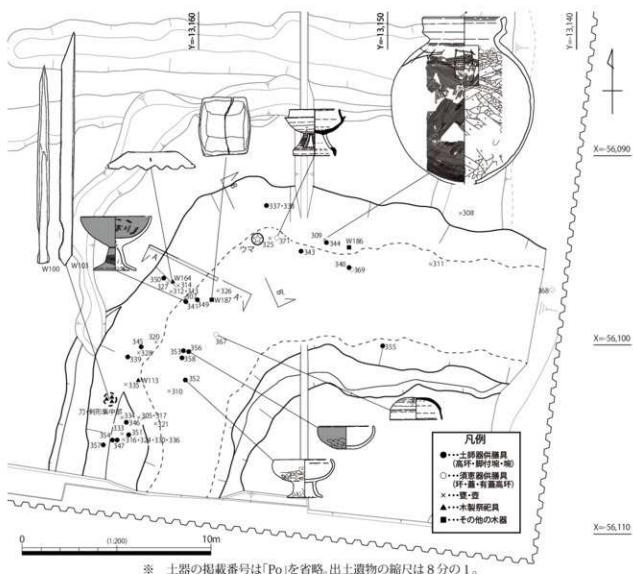
第2項 大柵資料の出土状況と特徴について

1-1区南東部に位置する802流路は、610溝を境として北側の居住域と区画される低湿地(放棄地)中を流れる自然流路であり、調査区内で南から東に屈曲している状況が確認された(第4章第3節参

第84表 鳥取県における古墳時代のウマ出土事例

遺跡名	出土遺構等	時期	部位	所見	備考
大柵遺跡 (鳥取市)	802流路	TK23~47	頭蓋骨、下顎骨	5才前後 推定体高115~120cm	集落域の自然流路跡から出土 多量の土器、木製祭祀具等が 共存する
長瀬高浜 古墳群 (湯梨浜町)	10E NWG (8号墳周溝の北)	TK43?	歯5点(うち4点は 右上顎前・後臼歯)	歯の咬耗進まず 幼駒馬	同一個体の歯
	14H (4号墳に伴う?)	不明	下顎歯根片(左M ₂ 含 む)	歯根完成 牡駒馬	
	2号墳周溝内	MT15	右上顎臼歯2点、 骨片(上顎骨?)	歯の咬耗かなり進む 牡駒~老駒馬	
	SE02上面 (28号墳周溝の6m東)	不明	歯14点	歯の咬耗進まず 幼駒馬か	乳歯を伴っていた可能性あり 須恵器とともに検出
	3号墳周溝上面	TK47	左右P ₂ ・P ₃ ・M ₁ ・ M ₂ 、骨片	歯の咬耗かなり進む 牡駒馬	歯は骨に釘植
	12E黒砂層	不明	歯11点(左P ³ ~M ² 、 右P ₂ ~M ₂)	歯の咬耗進む 歯根未形成 5才程度	
	7号墳周溝 馬墓1	不明	全身	P ³ ・P ¹ に乳歯を伴う 左大腿骨骨頭の骨端 線未閉鎖 2.5才の小型馬 雄か	馬墓は周溝埋没後に掘削
7号墳周溝 馬墓2		上顎、下顎	I ₂ ・P ₃ ・P ¹ に乳歯を 認める 3~4才		
7号墳周溝 馬墓3		歯7点(下顎歯か)			

※長瀬高浜古墳群のウマ資料については井上(1983)、時期については牧本(1990)を基に作成



第295図 802流路遺物出土状況

照)。

大柵資料は、802流路の屈曲部西岸付近の埋土中より、流路西側から投棄されたものと考えられる状況で出土している(第295図)。同一個体の頭蓋骨と下顎骨は極めて近接した状態で検出されているが、四肢骨をはじめとする他の部位は認められず、頭部のみが流路に投棄されたものと考えられる。上下顎とも歯列を保っていた歯の萌出段階の観察と各種の計測値から、このウマは5才前後の雌であり、推定体高115～120cmの小型馬であることが明らかとなった(第4章9項)。ウマは3.5才までに全ての肢骨骨端の化骨化が完了する(Cornwall 1956)ことから、この個体はそれ以上の著しい成長は望めず、乗馬に適したものととは考えにくい(註1)。

この大柵資料の周辺では、ほぼ完形の土師器や須恵器、長軸を揃え東ねたような状態で検出された刀形・剣形(W99～113)や楡形(W115・116)、エブリ形(W164)などの木製祭祀具が同じく西岸に集中して出土している。これらの遺物群は、流路西岸の傾斜に沿う形で検出されており、大柵資料とともに流路の西側から投棄されたものと解釈できることから、同一の祭祀行為に伴う可能性が高いと考えられるものである。

供献されたとみられる土器の年代から、古墳時代中期後葉から末葉(TK23～47段階)に行われたと考えられる、この祭祀の特徴を明らかにするため、次に類似事例が多く認められる大阪府・河内地方に目を向けてみたい。

第3項 集落遺跡における祭祀とウマについて

古墳時代の河内平野には、大阪湾と繋がる「河内湖」が広がっており(梶山・市原1986)、この周辺は集落遺跡からのウマ出土事例が多く確認される地域である(第296図)。特に四條畷市域では、古墳時代中期から後期に属するほとんどの遺跡からウマだけでなく、ウマの飼育に必要な塩を生産する製塩土器(註2)、韓式系土器などが出土しており、『日本書紀』などの文献で「河内馬飼」と呼ばれた渡来系の馬飼集団によって、ウマの飼育が行われていたと想定されている(野島1984)。

同市域では、大規模な集落遺跡である葦屋北遺跡(大阪府教育委員会2010・2012)、祭祀遺構が検出された奈良井遺跡(野島同上)、更良岡山古墳群(四條畷市教育委員会1981)などが調査されており、古墳時代中期から後期における馬飼集団とウマとの関わりを多面的に捉えることができる。以下、文中で触れる関連事例については、第85表に列挙した。

「河内湖」の東岸に位置する葦屋北遺跡は、古墳時代中期から後期の集落を構成する遺構が極めて多数検出されており、特に遺跡が最盛期を迎える中期後半から末葉(TK208～47段階)



第296図 「河内湖」と周辺の主要ウマ出土遺跡

にはウマの出土点数も多い。このうち、土坑A1483(第85表-5)から出土したウマは乳歯を含む臼歯列の状態から2~3才馬であることが明らかとなり(安倍2010)、幼~若齢馬の飼育を示し「牧の存在を裏付ける」(野島2014a)ものと評価されている。牧とは、仔馬を育て、調教し、乗馬できる馬の飼育を行う複合施設であり、多量の製塩土器(第85表-1)や実用的な木製の馬具の出土もこれを裏付けるものと言えよう。また、韓式系土器(陶質・軟質)・U字形板状土製品などの特徴は、集落に居住した集団と朝鮮半島西部との深い繋がりを示すものと評価されている(岡田2014)。このように、葦屋北遺跡の調査成果は、渡来系の馬飼集団による牧の経営を



第297図 葦屋北遺跡A940・A655

明らかにするものである。さらに、ウマの出土状況としては、土坑SA940(第297図、第85表-3)・SA1345(第85表-4)のような1体分の埋葬例がある一方、土坑A655(第297図、第85表-2)のような頭部だけの埋納事例も併存しており、馬飼集団によるウマの扱いが一樣でなかったことも窺える。

葦屋北遺跡の南東に位置する、中野・南野米崎・奈良井・鎌田遺跡では、祭祀遺物とともに出土するウマが多数確認されており、ウマが祭祀に深く関わっていたことが分かる(第85表-6~12)。古墳時代のウマ資料は歯のみが出土するなど概して遺存状態が悪く、本来どのような状態で埋没していたか不明なものが多いが、ウマの頭部のみが祭祀によって残されたことが明らか事例も認められる。中野遺跡における井戸庵絶時の祭祀例(第85表-8)や、奈良井遺跡における祭祀遺構の周溝内土坑からの出土例(第85表-10)がこれにあたり、いずれも渡来系の馬飼集団がウマを犠牲にしたものとされている(野島2014b)。特に奈良井遺跡の事例は、比較的遺存状態の良い頭部の資料によって、頸椎での頭部の切り落としが確認された稀有な例であり、頭部だけの状態で出土するウマを評価する上で示唆に富むものである。

先述のように、大柵資料は頭部だけの状態で流路内に投棄されたことは明白であり、また、このウマが5才前後の若い個体であることから、祭祀にあたり犠牲にされた可能性が高いと思われる。それまで当地域に存在しなかった動物であるウマを用いたこのような祭祀が行われた背景には、四條驛市域にみるような、ほぼ同時期の馬飼集団による祭祀の影響が窺える。しかし、大柵遺跡からは、この他のウマ遺存体やウマの飼育を示す遺物も出土しておらず、明確な渡来系の遺物も確認されていない。したがって、大柵遺跡の集落に居住していたのは在地の集団であり、渡来系の祭祀の影響を受けつつ、ウマを犠牲とする祭祀を行ったと解釈され、そのウマは同集落で繁殖したものではなく、他の集落あるいは集団から供給されたものと考えられる。次は、当地域におけるウマの供給について検討すべく、古墳に伴い出土したウマについて述べる。

第4項 古墳に伴い出土したウマについて

ウマが古墳やその周辺から出土する事例は広く知られており、四條畷市域においても、更良岡山古墳群1号墳(第85表-13)では周溝外の土坑に1個体分のウマが埋葬されていたと考えられ、清滝古墳群第2号墳(第85表-14)の周溝内土坑からはウマの頭部の埋納が確認されている。このような出土状況のウマについて、森浩一は「大化の薄葬令」のなかで「強に亡人の馬を殉はしめ」と記載されたウマの殉殺との関連を指摘し、出土例を挙げて検証した(森1978)。その後、長瀬高浜古墳群の資料を含め、各地で増加する出土事例を集成し詳細に検討した桃崎祐輔は、古墳に伴い出土したウマには幼齢馬の比率が高く、ウマの供犠(註3)が特定地域の中小古墳に集中する傾向があることから、「馬の供犠を伴う古墳の被葬者は馬飼育に関わる集団の一員であった可能性が高い」とした(桃崎1993)。

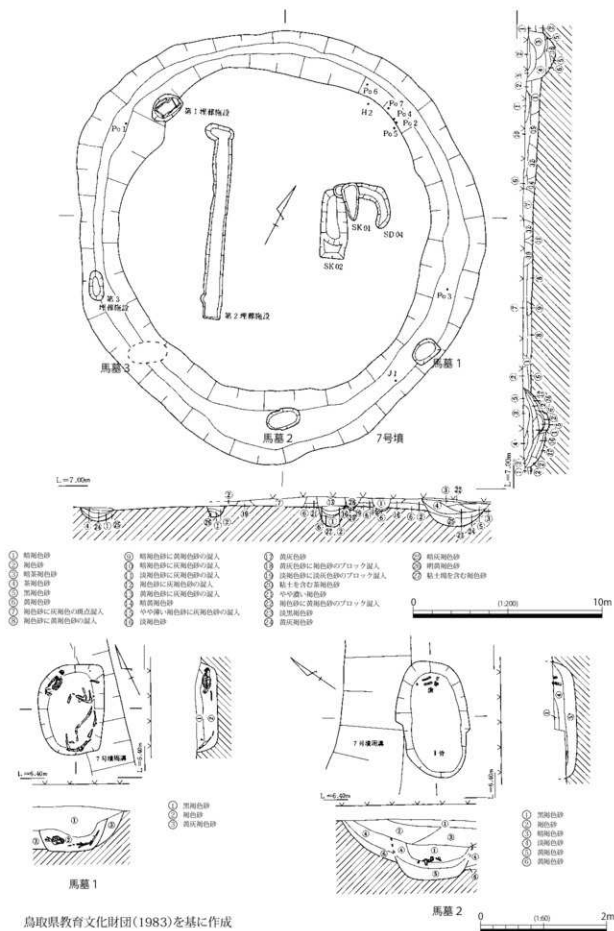
長瀬高浜古墳群のなかでも、ウマが元位置を保って残されていた7号墳では、周溝埋没後に3基の馬墓が設けられており(第298図)、そのうち馬墓1・馬墓2から出土した資料は、白菌列に乳菌の残る幼〜若齢馬であることが確認された(井上1983)。他の資料も、周溝から出土しているものや、幼齢馬のものを含んでいるなど本来は7号墳馬墓と同様の性格のものであると考えられる。このような長瀬高浜古墳群におけるウマの出土状況と特徴は、各地の出土事例の多くと共通するものであり、先に述べた桃崎の論考の根拠のひとつとなったのである。また桃崎は、供犠が行われた古墳の集中地域が、主に『延喜式』に記載された古代牧の設置地域と隣接する機会が多いことから、古代牧の形成が古墳時代に遡る可能性も指摘しており、長瀬高浜古墳群の近隣に「古布牧」の比定地が存在することにも触れている(桃崎前掲)。

ウマを殉殺する風習の系譜については、森(森前掲)が鮮卑族の墓と新羅の墳墓にみられる事例との関連を指摘し、桃崎は朝鮮半島南部に連なるものであるとした(桃崎前掲)。さらに松井章・神谷正弘は、より具体的に「5世紀初め頃に、東北アジア諸民族から高句麗を経て新羅・伽耶諸国に伝わり、さらに5世紀末から6世紀にかけて日本列島に拡がった」と述べるなど(松井・神谷1994)、いずれも朝鮮半島からの影響が想定されている。長瀬高浜古墳群の出土遺物のみだけでは、当地域に渡来系の馬飼育集団が進出したと判断することはできないが、ウマを飼育する技術が、ウマを犠牲にする風習とともに拡がった可能性が考えられる。

長瀬高浜古墳群のウマ資料の年代は、古墳時代中期初頭に集落が廃絶したのち古墳群が営まれたことを勘案すれば、概ね古墳時代中期中葉から後期と考えられる。部屋北遺跡が最盛期を迎え飼育するウマの頭数を増加させていたころ、長瀬高浜古墳群周辺には牧が開かれ、周辺の集団へのウマの供給がなされていたとみることが出来る。このようなウマ飼育の拡大のなかで、大柵遺跡の近隣にもウマの供給元が存在していた可能性も考えられる。

第5項 まとめ

国内出土馬具を詳細に検討した小林行雄は、ウマの飼育と乗馬の風習の普及に時期差を見出し、その間を過渡的な漸進期であると考えた(小林1951)。鳥取県内での古墳からの馬具出土例のほとんどは古墳時代後期から終末期のものであり(西中川編1991)、中期後葉から末葉の大柵資料は、この過渡的な漸進期に位置づけられるものと言える。したがって大柵資料は、小林の想定した時期差を当地域に



おいて追認するものといえるだろう。

大柵遺跡と長瀬高浜古墳群のウマ出土例の検討からは、この時期に当地域において、ウマを飼育し供給する集団と、その供給を受ける集団が存在したことが想定される。大柵遺跡の集団はウマの供給を受けながらそれを犠牲とする祭祀を行っていたと考えられるが、このような本来はウマの飼育という職能に深く関わると思われる祭祀形態は、ウマの導入とともに、在地の集団に受け入れられたものであろう。また、大柵資料からは、供給されるウマが必ずしも乗馬に適した馬格のものではなかったことも窺える。馬飼集団がウマの繁殖を行うなかで、大きい馬格の形質を固定しようとしていたならば、大柵資料のような小型のウマは繁殖牝馬として有用でなかったことだろう(註4)。想像力をたくましくすれば、このウマは繁殖には用いられず、駄馬として大柵遺跡の集団に供給され、犠牲に充てられたとも考えられる(註5)。

美しい馬具や、馬具を装着したウマを模した形象埴輪などのイメージからか、古墳時代のウマについては、権威の象徴として、あるいは軍事力のバロメーターとしての側面が強調されるきらいがある。大柵資料は、このような側面が古墳時代のウマのごく一面であることを明らかにするとともに、当地域において乗馬の風習が本格的に普及するより早く、ウマが新たな祭祀の形態とともに在地の集団に取り入れられていった可能性を示すものであると言えよう。渡来系の馬飼集団による王権へのウマの供給が想定されている(野島2014aなど)河内地方と比べ、当地域における情報は極めて断片的であり、より具体的にウマの生産と供給については論じるためには、今後の資料の増加が望まれる。(門脇)

註

- (1)久見道1号土壙(宮崎県えびの市)より馬具とともに出土したウマは体高130.92cmと推定される(西中川前掲)。日本在来馬のなかでも、主に乗馬に用いられた北海道和種・木曾馬・御崎馬の体高は平均132cm前後である(林田1974)。これらのことから、乗馬には日本のウマの中では大きな馬格の中型馬が適していたものと思われる。
- (2)天平宝字元年(757年)に施行された「養老令」には、官牛馬の取り扱いを定めた「既牧令」がある。そのなかの既細馬条には、細馬(上馬)と中馬には稲をはじめとする飼料に加え、毎日定められた量の塩を与えることが規定されている。
- (3)桃崎は、古墳出土牛馬骨が、文献上の「殉葬」、「殉殺」、「随葬」などの概念用語と直結して解釈がなされることを避けるため、広義の概念である「供犠」に一括して論を進めている。
- (4)仔馬の馬格は母馬の馬格に制限される(近藤2001)。また、「既牧令」の牧牝馬条には、牝馬は5才で繁殖義務年齢に入れることが規定されており、大柵資料は本来繁殖には適した年齢のウマであったと思われる。
- (5)桃崎は「中型馬と小型馬で各々乗馬・駄馬を使い分けていた可能性が高い」としただけでなく、「供犠の背景に「間引き」機能があった」ことを想定している(桃崎前掲)。

参考・引用文献

- 青柳佳奈(2003)「古墳時代の導水施設：圓形遺構の性格と変遷」『古事』天理大学考古学研究室紀要 7 pp.1-20.
- 青柳泰介(2003a)「導水施設考」『古代学研究』160 古代学協会 pp.15-35.
- 青柳泰介(2003b)「大型四面庇付掘立柱建物について」松藤和人編『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズⅧ 同志社大学考古学研究室 pp.355-366.
- 青柳泰介編(2003)「南郷遺跡群Ⅲ」奈良県立橿原考古学研究所報告74 奈良県立橿原考古学研究所
- 青柳泰介(2005)「導水施設の意義について 南郷大東遺跡の調査を中心に」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『水と祭祀の考古学』学生社 pp.16-47.
- 青柳泰介(2008)「古墳時代首長層の勢力地盤の実態に関する予察 古墳時代中期の奈良県を中心に」『古代学研究』180 森浩一先生奉壽記念論文集 古代学研究会 pp.173-180.
- 赤木三郎・豊島吉則・星見清明・谷村美弥子(1993)「湖山池の地質環境と史的変遷-湖沼の成因と環境地質」『地質学論集』39 日本地質学会 pp.103-116.
- 後川忠太郎(2010)「第Ⅴ章第1節 松原古墳群の形成過程」中森祥・後川編『松原古墳群Ⅱ-松原小奥遺跡』一般国道9号(鳥取道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 鳥取県教育委員会 pp.204-220.
- 安倍みき子(2010)「郡原北遺跡出土の動物遺体」『郡原北遺跡Ⅰ-なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査-』大阪府文化財調査報告2009-3 pp.249-323.
- 出原忠三(1990)「祭祀発展の諸段階 古墳時代における水辺の祭祀」『考古学研究』36-4 考古学研究会 pp.93-110.
- 伊東隆夫(1995)「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 pp.81-181.
- 伊東隆夫(1996)「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 pp.66-176.
- 伊東隆夫(1997)「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 pp.83-201.
- 伊東隆夫(1998)「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 pp.30-166.
- 伊東隆夫(1999)「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 pp.47-216.
- 井上貴央(1983)「第8節 長瀬高浜遺跡より出土した人骨と動物遺体について」『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ(本文編)』鳥取県教育文化財団報告書14 pp.285-312.
- 井上唯雄(1988)「祭祀遺物からみた三ツ寺Ⅰ遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬県の考古学』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.271-290.
- 岩垣 命・北 清明(2010)「鳥取平野周辺古墳群における松原古墳群の位置づけ」小口英一郎他編『松原古墳群Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書30 鳥取県埋蔵文化財センター pp.128-136.
- 岩永 実(1978)『鳥取県地誌考』岩永実先生記念論文集刊行会 pp.222-241.
- 上原真久編(1993)「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原稿編」奈良国立文化財研究所
- 梅本 綾(1999)「水辺の祭祀の語相とその意義」『古事』天理大学考古学研究室紀要 3 pp.10-28.
- 浦 寿子・星野安治(2016)「年輪年代学的手法を用いた木器の接合検討-出土木器研究の新展開-」『日本文化財学会第33回大会研究発表要旨集』日本文化財学会 pp.330-331.
- 大阪府教育委員会(2010)「郡原北遺跡Ⅰ-なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査-」大阪府文化財調査報告2009-3
- 大阪府教育委員会(2012)「郡原北遺跡Ⅱ-なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査-」大阪府文化財調査報告2011-1
- 大場啓雄(1970)「祭祀遺蹟-神道考古学の基礎的研究-」角川書店
- 大平 茂(1993)「木製人形年代考(上)」『古文化論叢』30 九州古文化研究会 pp.567-591.
- 大平 茂(1995)「木製人形年代考(下)」『古文化論叢』35 九州古文化研究会 pp.59-78.
- 大平 茂(2003)「祭祀考古学の大系」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』3 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 pp.117-136.

- 大平 茂(2008)『祭祀考古学の研究』 雄山閣
- 大平 茂(2012)『祭祀遺跡』土生田純之・亀田修一編『古墳時代研究の現状と課題(下) 社会・政治構造及び生産流通研究』同成社 pp.269-286.
- 大平 茂(2016)『兵庫県内の祭祀遺跡・祭祀遺物の研究成果』『ひょうご歴史研究家紀要』創刊号 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究家紀要
- 大山真克(1994)『桃』森浩一編『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI 同志社大学考古学シリーズ刊行会 pp.257-263.
- 岡田 賢(2014)『大阪府四條郡市部原北遺跡出土の馬骨とその性格について』『考古学ジャーナル』658 ニューサイエンス社 pp.5-9.
- 岡田精司(1980)『大王と井水の祭祀』伊藤幹治編『講座日本の古代信仰 祝いと祭り』3 学生社 pp.194-214.
- 岡田精司(1992)『神と神まつり』石野博信他編『古墳時代の研究12 古墳の造られた時代』雄山閣 pp.125-142.
- 小山正忠・竹原秀雄編著(2011)『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 横田雅昭(1991)『川の神のまつり』石野博信他編『古墳時代の研究3 生活と祭祀』雄山閣 pp.103-113.
- 梶山彦太郎・市原実(1986)『大阪平野のおたち』青木書店
- 加藤嘉太郎・山内昭二(1995)『家畜比較解剖図説』養賢堂
- 金子裕之編(1988)『律令期祭祀遺物集成』律令祭祀研究会
- 金子裕之(2005)『令制下の水とまつり』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『水と祭祀の考古学』学生社 pp.135-1162.
- 金原正明・金原正子(1992)『花粉分析および寄生虫』『橿原京跡の便所遺構-右京七条一坊西北坪-』奈良国立文化財研究所 pp.12-15.
- 金原正明・金原正子(1993)『史跡松江城二ノ丸書所跡SK-04内堆積土の分析』『史跡松江城発掘調査報告書』松江市教育委員会 pp.51-56.
- 金原正明・金原正子・中村亮仁(1995)『大宮坊跡(傾跡)における自然科学的分析』『史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ』石川県鹿島町教育委員会 pp.51-70.
- 亀井正道(1966)『祭祀遺跡の時代』『建跡山:福島県東郷村古代祭祀遺跡の研究』吉川弘文館 pp.214-264.
- 北村四郎・村田 源(1979)『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ』保育社
- 城門義典(2015)『7 導水施設について』城門編『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅱ』一般国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告書第5集 九州歴史博物館 pp.266-273.
- 木下 亘編(1993)『阪原阪戸遺跡(阪原遺跡群第2次)発掘調査概報』奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報1992年度(第1分冊)』奈良県立橿原考古学研究所
- 君嶋俊行編(2015)『人・もの・心を運ぶ船 青谷上寺地遺跡の交流をさぐる』第6回青谷上寺地遺跡フォーラム予稿集 鳥取県埋蔵文化財センター
- 工藤哲司編(1996)『中在家南遺跡他(第一分冊 本文編)』仙古市文化財調査報告書第213集 仙古市教育委員会
- 久保和士・松井 章(1999)『家畜(その2-ウマ・ウシ)』『「考古学と自然科学」②考古学と動物学』同成社 pp.169-208.
- 黒崎 直(1986)『斎申考』齊藤忠編『祝法と祭祀・信仰』日本考古学論集3 吉川弘文館 pp.192-212.
- 黒崎 直・松井 章・金原正明・金原正子(1993)『糞便堆積物の分析 -特に寄生虫節片について-』『日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 115p.
- 駒井正明・水村直人(2016)『木製祭祀具の年代と変遷』水村編『常松菅田遺跡Ⅱ』鳥取県教育委員会 pp.138-146.
- 小林行雄(1961)『上代日本における乗馬の風習』『古墳時代の研究』青木書店 pp.262-286.(再録)
- 近藤誠司(2001)『アニマルサイエンス1 馬の動物学』東京大学出版会
- 近藤謙三(2010)『プラント・オパール図譜』北海道大学出版会 387p.
- 古環境研究所(1992)『鳥取県、東柱見遺跡におけるプラント・オパール分析』『東柱見遺跡・布勢館指染墳墓群 布勢総合運動公園公園整備工事のうち埋蔵文化財調査委託事業』鳥取県教育文化財調査報告書29 財団法人鳥取県教育文化財団 pp.80-90.
- 財団法人鳥取県教育文化財団(1983)『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ(本文編)』鳥取県教育文化財団報告書14

- 齊藤崇人・田中義文(2007)「寄生虫卵殻の形態分類」『徳永重元博士献呈論集』パブリック・サーヴェイ株式会社 pp.407-416.
- 佐伯秀治・舟 秀夫・早川典之(1998)『臨床検査シリーズ -寄生虫鑑別アトラス-オールカラー版-』株式会社メディカルサイエンス社 162p.
- 坂本和俊(1991)「三ツ寺I遺跡の祭祀儀礼の復原 神話との関連から」『群馬考古学手帳』2 群馬土器研究会 pp.1-20.
- 笹生 衛(2013)「古代祭祀の形成と系譜 古墳時代から律令時代の祭具と祭祀」『古代文化』65-3 公益財団法人古代学協会 pp.46-64.
- 笹生 衛(2015)「祭祀の意味と管掌者 五世紀の祭祀遺跡と「古語拾遺」「秦氏・大藏」伝承」広瀬和雄編『中期古墳とその時代 5世紀の倭王権を考える』季刊考古学別冊22 雄山閣 pp.111-121.
- 笹生 衛(2016)「神と死者の考古学 古代のまつりと信仰 歴史文化ライブラリー47 吉川弘文館
- 滋賀県立安土城考古博物館(2005)「王権と木製威信具 華麗なる古代木匠の世界」
- 四條郷市教育委員会(1981)「更良岡山古墳群発掘調査概要」四條郷市埋蔵文化財包蔵地調査概報9
- 鳥倉巳三郎(1973)「本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 60p.
- 鳥地 謙・伊東隆夫(1982)『図説木材組織』地球社 176p.
- 鳥地 謙・伊東隆夫(1988)『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣
- 鈴木一有(2013)「伊場遺跡群における古代祭祀の変遷」『古代文化』65-3 公益財団法人古代学協会 pp.75-84.
- 横山 洋・別所秀高・宮崎泰史編(2005)「大阪府域の牛馬骨出土遺跡一覽(CD-ROM)」『大阪の部落史 第1巻 史料編』部落解放・人権研究所
- 高田健一(2015)「鳥取平野における土地環境の変化と弥生集落の形成活動」『古代文化』67-1 公益財団法人古代学協会 pp.35-43.
- 高野陽子(2006)「丹後地域 掘門線文系土器の様式と変遷」森岡秀人・西村歩編『古式土器の年代学』財団法人大阪府文化財センター pp.225-242.
- 高原 光(1998)「スギ林の変遷」安田喜憲・三好教夫編『図説日本列島植生史』朝倉書店 pp.207-223.
- 辰巳和弘(2005)「常世・女・井 神話の土壌」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『水と祭祀の考古学』学生社 pp.106-134.
- 辰巳和弘(2015)「古代をみる眼 考古学が語る日本文化の深層」新泉社
- 田中清美・伊藤幸司(2016)「古代の輝煌形土製品と鍛冶師-金属加工における自然送風の有効性-」『日本考古学協会第82回総会研究発表要旨』一般社団法人日本考古学協会 pp.54-55.
- 田中広明(2003)「地方の豪族と古代の官人 考古学が解く古代社会の権力構造」KASHIWA学術ライブラリー-01 柏書房
- 鳥取市教育委員会(2015)『里仁古墳群発掘調査現地説明会資料』
- 鳥取市教育委員会編(2016)「平成27(2015)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書」鳥取市教育委員会
- 中浦基之編『城之越遺跡(2次)発掘調査報告』上野市文化財調査報告51 上野市教育委員会・上野市遺跡調査会
- 中川東他編(2006)『鳥根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』鳥根県古代文化センター調査研究報告書33 鳥根県教育庁古代文化センター・鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 中原 齊(1985)「まとも」中原編『里仁古墳群』鳥取県教育文化財団報告書18 財団法人鳥取県教育文化財団 69p.
- 中村 純(1980)『日本産花粉の標鑑Ⅱ (図版)』大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12・13集 91p.
- 中村 毅編(2012)『奈良羅・西の前遺跡IV』八頭町文化財調査報告書10 八頭町教育委員会
- 西川 徹・湯川善一・岡野雅行編(2004)『茶畑遺跡群 茶畑第1遺跡・押平尾無遺跡・古御堂笠尾山遺跡・古御堂新林遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 西中川敏編(1991)「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書
- 野島 稔(1984)「河内の馬飼い」『万葉の考古学』築摩書房 pp.402-408.
- 野島 稔(2014a)「総論 王権を支えた馬飼集団」『考古学ジャーナル』658 ニューサイエンス社 pp.3-4.
- 野島 稔(2014b)「讃良の馬飼い集落と馬の埋葬」『考古学ジャーナル』658 ニューサイエンス社 pp.15-19.

- 野尻 侃編(1984)『伊田遺跡 第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書77 山形県・山形県教育委員会
- 野田真弓(2005)『青谷上寺地遺跡出土のかご』野田他編『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告Ⅰ 木製容器・かご』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告8 鳥取県埋蔵文化財センター pp.93-138.
- 野田大和他編(2010)『奈免塚・西の前遺跡Ⅱ』八頭町文化財調査報告書5 八頭町教育委員会
- 花田勝広・阪口英敏(2012)『第5章4 鉄と鉄製品』広瀬和雄・和田晴吾編『講座 日本の考古学8 古墳時代(下)』青木書店 pp.99-147.
- 浜松市生活文化部生涯学習課・奈良文化財研究所史料研究室編(2008)『伊場遺跡総括編』伊場遺跡発掘調査報告書第12冊(文字資料・時代別総括) 浜松市教育委員会
- 浜松市博物館編(2002)『伊場遺跡遺物編8』伊場遺跡発掘調査報告書第10冊(木製品Ⅱ・金属器・骨角器) 浜松市教育委員会
- 林 昭三(1991)『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 林田重幸(1974)『日本在来馬の源流』『日本古代文化の探求・馬』社会思想社 pp.215-262.
- 林田重幸・山内忠平(1957)『馬における骨長より体高の推定法』『鹿児島大学農学部学術報告』第6号 pp.122-126.
- 坂 靖(1988)『南郷大塚遺跡』金子裕之編『日本の信仰遺跡』奈良国立文化財研究所学報57 奈良国立文化財研究所 pp.100-106.
- 坂 靖・青柳泰介(2011)『葛城の王都 南郷遺跡群』シリーズ「遺跡を学ぶ」079 新泉社
- 東村純子(2012)『考古学からみた古代日本の紡績』改訂新装版 六一書房
- 橋上 昇(2003)『出土木製品群からみた本川遺跡 古墳前・中期集落の階層性について』橋上編『本川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第100集 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター pp.132-160.
- 橋上 昇(2007)『木製威儀具と出土遺跡の性格』『考古学ジャーナル』565 ニューサイエンス社 pp.7-10.
- 菱田哲郎(2007)『古代日本 国家形成の考古学』学術選書025 京都大学学術出版会
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編(2000)『市辺遺跡』『ひょうごの遺跡』33 兵庫県教育委員会 pp.1-5.
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編(2006)『市辺遺跡』兵庫県文化財調査報告304 兵庫県教育委員会
- 兵庫県立考古博物館(2008)『曾我井・沢田遺跡』『ひょうごの遺跡』68 兵庫県教育委員会 pp.4-5.
- 藤木利之・小澤智生(2007)『琉球列島産植物花粉図鑑』アークコラル企画 155p.
- 徳積裕昌(1994)『古墳時代の湧水点祭祀について』森浩一編『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅥ 同志社大学考古学シリーズ刊行会 pp.185-200.
- 徳積裕昌(2004)『いわゆる湧水施設の性格について 類所としての可能性の提起』『古代学研究』166 古代学協会 pp.1-20.
- 徳積裕昌(2005)『もうひとつの水のまつり 湧水点祭祀の世界』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『水と祭祀の考古学』学生社 pp.163-187.
- 徳積裕昌(2008)『祭祀遺跡像の転換』『古代学研究』180 森浩一先生追記記念論文集 古代学研究会 pp.165-172.
- 徳積裕昌(2012)『古墳時代の喪葬と祭祀』雄山閣
- 徳積裕昌(2013)『神まつり』一瀬和夫他編『古墳時代の考古学6 人々の暮らしと社会』同成社
- 徳積裕昌編(1992)『城之越遺跡 三重県上野市比土』三重県埋蔵文化財調査報告99-3 三重県埋蔵文化財センター
- 徳積裕昌編(2002)『一般国道23号中勢道路(8工区)建設事業に伴う 六八A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告115-16 三重県埋蔵文化財センター
- 牧本哲雄(1999)『長瀬高浜古墳群の検討』『一般国道9号(北条道路)関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 鳥取県東伯郡羽合町 長瀬高浜遺跡Ⅱ 一般国道9号(青谷羽合道路)関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 鳥取県東伯郡 泊村園第6遺跡』鳥取県教育文化財調査報告書61 pp.167-169.
- 町田 章・上原真人編(1985)『奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所
- 松井 章編(2006)『動物考古学の手引き』奈良文化財研究所埋蔵文化財センター
- 松井 章・榎谷正弘(1994)『古代の朝鮮半島及び日本列島における馬の殉殺について』『考古学雑誌』80-1 日本考古学会 pp.57-105.

- 丸山幸彦(1993)「古代における水上交通と庄園のかかわりについて 因幡国高庭庄を中心に」『徳島大学総合科学部紀要』第6巻(人文・芸術研究篇) 徳島大学総合科学部 pp.1-27.
- 松尾充晶(2008)「山陰地方における古代祭祀と木製祭祀具」『石川県埋蔵文化財情報』19 財団法人石川県埋蔵文化財センター pp.23-26.
- 松村冬樹編(2000)『川と遺跡』名古屋博物館
- 水村直人編(2016)『考古資料にみる水辺のまつり』一級国道路9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XⅡ 鳥取県教育委員会
- 宮原文隆(2009)「Ⅳ 付章 安坂・城の堀遺跡Ⅴの発掘調査概要」安平勝利・宮原編『田野口・宮ノ下遺跡』多可町文化財報告7 多可町教育委員会 pp.28-58.
- 宮本長二郎(2007)「出土建築部材が解く古代建築 日本の美術490 至文堂
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子(2011)『日本産花粉図鑑』北海道大学出版会 824p.
- 向坂潤二(1986)「考古資料にみる水辺のまつり」齊藤忠編『祝法と祭祀・信仰』日本考古学論集3 吉川弘文館 pp.272-290.
- 本中 眞(1998)「飛鳥・奈良時代以前の庭園関連遺構」『ランドスケープ研究』61-3 公益社団法人日本造園学会 pp.185-191.
- 桃崎祐輔(1993)「古墳に伴う牛馬供犠の検討-日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して-」『古文化誌』31 pp.1-141.
- 森 浩一(1978)「大化葬令の馬の殉葬について」『古代史論叢』上巻 吉川弘文館 pp.275-320.
- 森下浩行(1998)「奈良市の南紀寺遺跡」金子裕之編『日本の信仰遺跡』奈良国立文化財研究所報57 奈良国立文化財研究所 pp.27-32.
- 八雲村教育委員会編(2001)『前田遺跡(第Ⅱ調査区)』八雲村文化財調査報告19
- 山田真宏・杉谷美恵子編(1997)『岩吉遺跡Ⅳ』財団法人鳥取市教育福祉振興会
- 山橋雅美・濱 隆造・岩垣 命(2014)「青谷平野における律令的祭祀-因幡国-」『古代文化』66-3 公益財団法人古代学協会 pp.381-388.
- 若狭 徹(2002)「古墳時代の地域経営 上毛野クマ地域(3-5世紀)」『考古学研究』49-2 考古学研究会 pp.108-127.
- 若狭 徹(2006)「水利開発と水の祭祀」『季刊考古学』96 雄山閣 pp.77-81.
- 若狭 徹(2007)「首長居館と水の祭祀 三ツ寺Ⅰ遺跡を中心に」『古墳時代の水利社会研究』学生社
- 和田 孝(2003)「古代史から見た水辺の祭祀」青柳泰介編『南郷遺跡群Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所報告74 奈良県立橿原考古学研究所 pp.325-336.
- Bronk Ramsey,C.van der Plicht, J., & Weninger, B.(2001)'Wiggle matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon* 43 pp.381-389.
- Cornwall, L.W.(1956) *Bones for Archaeologist*. J.M.Dent & Sons Ltd. London.
- Dreisch, A. von den.(1976) *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites*. Peabody Museum Bulletin 1. Harvard Peabody Museum.
- Reimer J Paula · Bard Edouard · Bayliss Alex · Beck J Warren · Blackwell G Paul · Ramsey Bronk Christopher · Buck E Caitlin · Cheng Hai · Edwards R Lawrence · Friedrich Michael · Grootes M Pieter · Guilderson P Thomas · Hafidason Hafidi · Hajdas Irka · Hatté Christine · Heaton J Timothy · Hoffmann Dirk L · Hogg G Alan · Hughen A Konrad · Kaiser K Felix · Kromer Bernd · Manning W Sturt · Niu Mu · Reimer W Ron · Richards A David · Scott E Marian · Southon R John · Staff A Richard · Turney S M Christian · Plicht van der Johannes(2013) Intcal13 and Marine13 Radiocarbon age Calibration curves 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55, pp.1869-1887.
- Richter H.G.Grosser D.Heinz L and Gasson P.E.(eds.) (2004) *IWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*. 伊東隆夫他(日本語版監修) (2006)『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』海青社 70p.
- Stuiver Minze and Polach A Henry (1977) Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. *Radiocarbon* 19, pp.355-363.
- Wentworth,C.K.(1922) A Scale of Grade and Class Terms for Clastic Sediments. *The Journal of Geology* 30(5) pp.377-392.
- Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E.(eds.) (1989) *IWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*. 伊東隆夫他(日本語版監修) (1998)『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』海青社 122p.

報告書抄録

ふりがな	だいかくいせき いち							
書名	大柵遺跡 I							
副書名	一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XXV							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	水村直人・高尾浩司・正岡大実・河合章行・門脇隆志・小林新平・村田泰輔							
編集機関	公益財団法人鳥取県教育文化財調査室							
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地 電話(0857)51-7553							
発行年月日	2017(平成29)年3月10日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
大柵遺跡	鳥取県鳥取市大柵字西白木、字下前田	31201	1-261	35°29'36"	134°11'17"	20140418 ～ 20150130	2,931㎡	国道9号(鳥取西道路)道路改築工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
大柵遺跡 (1-1区・2区・3区)	集落産	弥生時代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土溝 ピット	弥生土器、石器				
		古墳時代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土溝 柱穴・ピット 水田遺構 自然流路	土師器、須恵器、土製品(山陰型甎形土器・移動式甎・埴輪等)、石器、木器(形代・容器・鍬・建築部材等)、動物遺存体(ウマ)				
		古代	掘立柱建物跡 土溝 柱穴・ピット 耕作流路	土師器、須恵器、陶器(緑釉陶器・灰釉陶器)、土製品(移動式甎・支脚等)、石器(砥石・石製巡方)、木器(形代・容器・建築部材・編み物等)、金属器(銅銭・銅製巡方・鉄斧・鉄滓等)、動物遺存体(ウシ等)、文字資料(墨書土器・文字瓦等)				
		中世～近世	溝 水田遺構 自然流路	陶磁器、金属器(銅銭等)				
要約	<p>大柵遺跡は、野坂川によって開析された谷底平野に位置する。今回の調査(1-1区・2区・3区)では、特に弥生時代後期から古代末にかけての様相が明らかとなった。</p> <p>弥生時代後期後葉から終末期には、段丘上に大型の布疋建物が構築され、沖積低地部にかけての微高地上に居住域が拡大し、北近畿系土器の出土が顕著になる特徴が認められた。</p> <p>古墳時代前期前半には、流路による浸食と氾濫堆積物の供給が原因となって沖積低地の地形環境が大きく変化するが、前期後葉には同流路が埋積されて微高地範囲が拡大し、再び居住域として利用される。中期後葉には、微高地南側を流れる流路で祭祀が行われており、武器形を中心とする木製祭具とともにウマを犠牲獣として用いる新たな祭祀形態が在地集団に取り入れられ、執行された事例として特筆される。</p> <p>奈良時代に大柵遺跡周辺は高麗荘に占定され、今回調査地も耕作地として利用されていた可能性が高いが、平安時代前期には掘立柱建物群が構築されて屋敷地となる。その東縁を北流する流路は律令期以降、人形・馬形・斎車を主体とする祭祀の場(塚所)となり、平安時代中期に地目が屋敷地から耕作地(畠)へ変わった後も、祭祀は大型化した人形を主体としつつ継続されている。</p> <p>平安時代後期には水路が開削されて水田が営まれるが、現在に繋がる耕地区画の基幹は同段階に形成されたものであり、それを踏襲していると考えられる。</p>							

一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書XXV

鳥取県鳥取市

大柁遺跡 I
第1分冊【本文編】

発行 2017年3月10日
編集 公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室
発行者 鳥取県教育委員会
〒680-8570
鳥取県鳥取市東町1丁目271番地
電話(0857)26-7525
印刷 株式会社鳥取平版社

